

菅茶山

西原千代

まえがき

昔茶山は名を晉帥とまのりと言ひ、幼名は喜太郎きたろう、のち百助ひゃくすけ、字は禮卿れいけい、通称は太中たちゅう、茶山ちやんざんと号した。父晋波久助、母半の長男として延享五年（一七四八）二月二日、山陽道の宿場町神辺川北村に生まれた。兄弟は六人である。父は二十一歳のとき十六歳の半と結婚して本荘屋晋波氏を嗣いだが、宿駅本陣の主人が性に合わなかつたのか、五年後、家督を親戚の内海久郎好殷に譲り、別家して農業兼酒造業を営む傍ら俳句を作るなど悠々自適の生活を愉しんだ。茶山はそういう家庭で生育した。十九歳のとき学に志して京都に上洛し、医学を和田泰純（東郭）に、古文辞学を市川某に学んだ。二十五歳のとき（第四回目の遊学）から朱子学に転向して那波魯堂に師事し、三十三歳で遊学を終えるまでの十数年間に六度の上洛を繰り返している。郷土に落ち着いた茶山は、三十四歳で私塾「黄葉夕陽村舎」を経営して子弟の教育に関わつた。四十九歳のとき、私塾を「廉塾」と改称して福山藩に移管したが、その教育・管理は全て茶山に委ねられ、茶山を慕ってくる塾生・塾童の指導のために生涯を尽くした。この研究の目的は、江戸時代後期を代表する漢詩人と言われる茶山の「人と為り」について検討することと、茶山がその文学（漢詩）に於て追求し続けたものは何であつたのか、又それはどんな詩であるのかを考察することである。

茶山の交友関係は非常に広範囲で、漢詩人は言うに及ばず、僧侶・藩儒・画家・医者他あらゆる階層の人々であつた。その人柄故か郷土備後国神辺に開いた私塾「黄葉夕陽村舎」には津々浦々から多くの人々が訪れた。そういう人々の中で茶山が終生変わらぬ情誼で交わつたのは、安芸国広島藩儒の頼春水・同門の西山拙齋である。

春水の生真面目で清廉潔白人柄を茶山は崇拜していた。春水の息子である頼山陽の常軌を逸した行動によって春水が苦境に立たされたとき、茶山は親身も及ばぬ援助をし、山陽を「廉塾」の都講として迎えた。茶山が生涯信奉してやまなかつた西山拙齋は、郷里の備中鴨方に私塾「欽塾」を営み、生涯を近隣の子弟の教育に捧げた人である。茶山には二人の弟があつたが若くして先立つた。子どものなかつた茶山は、後室の甥である門田朴齋を塾の後継者にと考えて養子縁組みをしたが、死を目前にした時期に養子縁組みを解消している。その理由は何だったのであるうか。茶山の「人と為り」を考える上で、友人関係から頼春水・西山拙齋、子弟関係から頼山陽・門田朴齋の四人を選び、茶山がこの人たちとどのように関わつたかを見てゆこうと考えた。

茶山の文学（漢詩）については『詩集 日本漢詩』第九巻から最も若い時期に作られた「花月吟」を、『黄葉夕陽村舎詩』（板本）から青壮年期に多く見られる「政治批判詩」、茶山の真骨頂であると高い評価を得ている「農村詩」、「子どもを詠う詩」を選んだ。「子どもを詠う詩」は「農村詩」に入れるべきだが、当時の漢詩人の詩には「子どもを詠う詩」が殆ど見られないのに茶山は八十八首も詠んでいる、これは一考を要すると考え敢えて別項目とした。尚、『黄葉夕陽村舎詩 草稿』（広島県立歴史博物館所蔵）との出会いにより、板本の詩からだけでは物足りないと感じていた茶山の政治に対する考え方を、より深く汲み取ることができた。これは大きな成果であつた。以上の詩を丹念に読み、更に茶山が六如上人や友人・知人に与えた書簡などを解読することによつて、茶山の漢詩に対する考え方を考察することができるとあらうと考えた。

二千四百首余りの詩の中からこれらの詩を選び出すだけでも相当の年数を要した。更に人物関係の資料を求めるときも困難をきわめた。幸い広島県立歴史博物館、福山城博物館の学芸員の方々のご厚意により、貴重な資料を入手することができたこと、又、古文書研究会の方々のお力をお借りできたことなどと相俟つて、七十歳半ばにして九年がかりでやつとこの書を仕上げることもできた。

目次

まえがき

序 章

- 一、菅茶山について…………… 1
- 二、これまでの茶山研究…………… 7
- 三、この研究の目的と方法…………… 12

第一章 菅茶山の行跡…………… 17

第一節 京都遊学の時期…………… 17

- 一、京都遊学…………… 17
 - 1、京都遊学一回目…………… 19
 - 2、京都遊学二回目…………… 20
 - 3、京都遊学三回目…………… 25
 - 4、京都遊学四回目…………… 28
 - 5、京都遊学五回目…………… 34
 - 6、京都遊学六回目…………… 37
- 二、神辺帰郷…………… 61

第二節 郷里神辺の時期…………… 65

- 一、塾「黄葉夕陽村舎」の時期…………… 66
- 1、塾「黄葉夕陽村舎」設立…………… 66

2、「黄葉夕陽村舎」時期の交遊	69
3、福山藩との関わり	95
4、旅	98
二、「廉塾」の時期	119
1、塾「黄葉夕陽村舎」移管の理由	120
2、塾生の生活	127
3、茶山の遺言書	165
結び	177
第二章 茶山周辺の人たち―友人・弟子―	179
はじめに	179
第一節 茶山と春水	183
一、出会い	183
二、春水仕官以前の交友	186
1、春水初めて神辺を訪う	186
2、春水安永八年帰坂の時	188
3、茶山京遊中（六回目）の交友	189
三、春水仕官以後の交友	191

	1、春水 安芸浅野藩の儒官となる	191	
	2、茶山の不快と解消	193	
	3、茶山『遊藝日記』の旅	198	
	4、親族に類する交友	204	
	四、山陽に関わる交友		216
	1、山陽脱藩	216	
	2、春水の依頼	221	
	3、茶山 春水の窮境を救う	222	
	4、山陽 廉塾を去る	226	
	5、春水の心遣い	228	
	6、春水・山陽父子の和解	232	
	五、春水の死		235
	まとめ		238
	第二節 茶山と西山拙齋		239
	一、茶山・拙齋の交遊		240
	1、京都・大坂での交遊	240	
	2、郷里に於ける交遊	258	
	二、茶山・拙齋の政治についての意見		266
	1、拙齋の政治詩「述感篇」について	266	
	2、茶山の藩政批判詩	271	
	3、茶山の農村詩に込められた政治批判	273	
	4、農民に寄せる優しさ	278	
	三、茶山・拙齋の仕官についての態度		281
	1、拙齋と阿波藩招請	281	
	2、茶山の福山藩仕官について	292	
	まとめ		296

第三節 茶山と頼山陽

一、初対面から上京まで

1、初対面と再会 298

3、山陽を廉塾に招くまで 303

5、茶山、山陽の上京を認める 324

二、上洛以後

1、山陽の上洛 332

3、茶山と山陽の再会 349

5、茶山の死 358

2、春水と山陽の和解 346

4、茶山の不機嫌はれる 355

4、山陽の廉塾生活 311

6、山陽、廉塾を去る 328

2、山陽脱藩に際しての搜索 301

まとめ

第四節 茶山と門田朴齋

一、朴齋の生い立ち

二、廉塾の時期

1、入塾 369 2、朴齋の廉塾生活 371

三、養子の時期

1、朴齋、茶山の養子となる 380

3、山陽・霞亭に詩の批正を請う 382

2、作州湯原に湯治 381

4、朴齋の結婚 385

	5、朴齋周辺の弔事	386
	四、朴齋離縁	
	1、茶山八十歳を寿ぐ賀詩	390
	2、朴齋離縁の経緯	391
	五、朴齋、山陽を慕い上京	
	1、故郷を発つ	399
	2、朴齋、山陽の塾に入門する	407
	まとめ	
	409	
	第三章 茶山の文学（漢詩）	415
	はじめに	
	415	
	第一節 『花月吟』	
	一、『花月吟』のテキストについて	419
	二、花月吟 寄平安故人倣唐伯虎體	420
	三、唐伯虎の『花月吟』	430
	四、茶山『花月吟』と唐伯虎『花月吟』の比較	441
	1、全篇の構成	447
	2、発想・表現	451
	まとめ	
	458	
	第二節 政治批判詩	
	461	

一、京都遊学期後半に於ける政治批判詩	462
1、西山拙齋との出会いとその影響	462
2、京都遊学期後半の政治批判詩	463
二、神辺定任後に於ける政治批判詩	477
三、政治批判詩から農村詩へ	495
まとめ	500
第三節 農村詩	508
一、茶山「農村詩」の内容	509
1、農村の風景を詠う詩	509
2、農村の生活を詠う詩	511
二、茶山「農村詩」の表現	522
1、構図・色彩	522
2、音声・動き	526
3、会話	529
三、附論	534
第四節 子どもを詠う詩	541
一、子どものいる風景詩	542
二、他の詩人の「子どもを詠う詩」	564
1、六如	565
2、道光上人	567
3、北條霞亭	568
まとめ	571

三、子どものいる風景詩【表】	574
----------------	-----

第五節 茶山の詩論	579
-----------	-----

まとめ	596
-----	-----

第六節 江戸時代後期の漢詩界に於ける茶山	600
----------------------	-----

一、江戸期に於ける漢詩の流れ	600
----------------	-----

二、江戸時代後期の漢詩界に於ける茶山	603
--------------------	-----

終章	607
----	-----

附録	623
----	-----

一、「茶山先生行状」頼山陽撰	623
----------------	-----

二、茶山・春水・山陽関係の書簡	632
-----------------	-----

三、西山拙齋『休否録』所収茶山詩訳注	660
--------------------	-----

四、菅茶山と福山藩関係年表	683
---------------	-----

五、菅茶山年譜	686
---------	-----

あとがき

管茶山

序章

一、菅茶山について

菅茶山は江戸時代後期の漢詩人で、名は晉帥しんすい、幼名を喜太郎きたろう、のち百助ひやくすけ、字は禮卿らいけい、通称は太中たちゅう、茶山ちやざんと号した。延享五年（一七四八）二月二日、備後国安那郡川北村に生まれた。

父菅波樗平（一七二七〜一七九二）、幼名は龜松、諱は扶好、通称は久助、初めは蘆丈、後に樗平と号した。神辺の農、高橋金右衛門金豊の息子で、異母兄に医を業とする高橋慎庵（一七一〇〜一七八〇）があり、茶山に就いては伯父に当たる。慎庵は、漢籍にも通じ和歌や狂歌の嗜みもあった。茶山はこの伯父から大いに影響を受けている。

当時、本荘屋菅波氏の当主は第三代久兵衛好永であった。好永には子がなかったので延享二年に備中国井原村の佐藤安左衛門正弘の女半むすめ（茶山の母）を養女に迎えたが、好永は翌年の延享三年三十二歳で歿した。そこで神辺の高橋金右衛門金豊の息子樗平を迎え半に配した。延享四年、樗平二十一歳、半十六歳のときである。こうして茶山の父樗平は第四代当主として本荘屋菅波氏を嗣ぐこととなった。樗平は、本荘屋の当主が性分に合わなかったのか五年後の宝暦二年、二十六歳のとき家督を内海政右衛門（樗平の養父の従兄弟）の子、久四郎好殷に譲り、別家して農業兼酒造業を営む傍ら俳句を嗜み、同好の士と韻事を愉しむ生涯を送り、寛政三年（一七九二）

二月十八日、六十五歳の生涯を閉じた。茶山四十四歳のときである。

母、半（一七三二〜一七九六）は国史に詳しくかつたようで、「茶山先生行狀」に「喜誦國史、能訓導其子」（喜誦みて國史を誦し、能く其の子を訓導す）とあり、茶山は母の十七回忌を祭祀して、「先妣十七回忌祭、從鄉例行香、涙餘賦此」（先妣十七回忌祭、鄉例に從ひ行香し、涙餘に此れを賦す）と題し、次の七言絶句を詠んでいる。

論史閑宵侍帳前 每驚記性北堂堅

史を論じて 閑宵帳前に侍す、毎に驚く 記性 北堂の堅きを。

近修邑乘多疎漏

泣對沈燈念昔年

近く邑乘を修めて

疎漏多し、泣きて 沈燈に對して 昔年を念ふ。

〔北堂〕母上。〔邑乘〕『福山志料』のこと。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷四)

茶山の人並み優れた詩才は、韻事を嗜む父と国史に詳しい母の影響に因るものであろう。

茶山は明和三年（一七六六・十九歳）初めての京都遊学をし、市川某に從つて古文辞学を学ぶが、学費のこと、また病弱だったこともあって、何年も京都に居続けることはできなかった。往つたり来つたりを繰り返して、三十三歳までの間に六度の遊学をしている。四度目の遊学のとき、古文辞学から「濂洛の学」に代わつて那波魯堂に師事した。終生の友となる西山拙齋に出会うのもこの頃であり、濂洛の学に代わつたのも拙齋の影響大なるものがあつたと思われる。又、時期ははっきりしないが、早い時期に和田泰純（東郭）に医学を学んでいる。郷里に帰つてゐるときは医業にも携わつていたようだ。生涯親交を結んだ春水と初めて出会つたのは二十六歳の時で、拙齋との出会いから二年の後である。それから三十数年の年月を経て春水の息子 山陽とも繋がりを持ち、頼一家とは親密なる交わりを持つこととなる。

最後の京都遊学となつた安永九年（一七八〇）京都では佐々木良齋・中山子幹・荒木商山等と交わり、寛政の三博士といわれる中のひとり、尾藤二洲と初めての出会いがあり、生涯の心の友を得た。帰郷する前の半月に亘る初夏の、浪華に於る混沌社の人たちとの交遊は、茶山生涯の忘れがたい思い出となつた。茶山は京都遊学四回

目の安永二年（一七七三）に頼春水と初対面をしている。以来、春水を通して混沌社の人たちと交わったようであるが、確実な記録は現在のところ把握できていない。『黄葉夕陽村舎詩』の前編巻一に、那波魯堂同門で茶山と同年齢くらいの西山子綱に寄せた「寄紀州西山子綱」と題する詩や、同じく同門の中山子幹に寄せた「寄佐渡中山子幹」詩、西山拙齋に贈った「感事贈拙齋先生」詩があるところから、那波魯堂同門の人たちとの交友が主であつたと考えられる。

混沌詩社の第一人者と言われた葛子琴とは親しく交わつていたようであり、天明四年（一七八四）茶山が三十歳の時、子琴は四十六歳で歿した。茶山は「寄弔葛子琴」（寄せて葛子琴を弔ふ）と題して七言古詩を作り、「憶昨尋余迷綺陌、惜春同汝拗花枝」（憶ふ昨余を尋ねて綺陌に迷ひ、春を惜しみ汝と同一花枝を拗るを）と詠んだ後に、

「子琴曾訪余于洛東聖護村。遂同遊白河、醉中折躑躅花。蓋予與子琴知聞日久、而杯酒款言則始於此。實庚子春。」（子琴曾て余を洛東の聖護村に訪ぬ。遂に同に白河に遊び、醉中躑躅花を折る。蓋し予子琴と知聞すること日久しく、而して杯酒款言するは則ち此に始まる。實に庚子の春なり。）と記している。

最後の遊学を終えて神辺に帰つたのは安永九年（一七八〇・三十三歳）であつた。その年の暮れに結婚して、翌天明元年（一七八一・三十四歳）に塾「黄葉夕陽村舎」を設立する。郷里に落ち着いた茶山は、西山拙齋・姫井桃源（備中鴨方の人。池田藩に仕える）等とは、距離的に近いこともあつて屢々往來した。頼春水・杏坪兄弟は江戸への往復には必ず茶山を訪ねた、そういう時は時間が許せば連れだつて拙齋を訪ねるのが常であつた。志村東嶼（仙台の人。昌平黌で経を講じる）・道光上人（大阪に生まれたが、出雲国報恩寺の住職となる）他、遠方からも茶山を訪ねて来る人は多く、そういう人たちが訪れると連れだつて拙齋を訪ね、近郷を旅し、近くの山に

登つて吟詠を楽しむなど交遊を密にした。このように塾「黄葉夕陽村舎」の時期は、知友を訪ねたり訪ねられたりして近郷を数日から長くて二週間程度の旅をするくらいであったが、二度ほど長期の旅をしている。一度目は、天明八年（一七八八・四十一歳）六月五日から七月六日迄の一か月、その半数を春水一家の世話になりながら安芸の国を旅した。二度目は寛政六年（一七九四・四十七歳）三月十五日から十月六日迄の約七か月間、妻の宣を伴い吉野・奈良・京都方面（『北上曆』の旅）へ出かけた。この旅は遊学中に親しく交わつた人や、懐かしい場所を訪ねる長期のものであった。

藩との関係を見ると、天明六年（一七八六・三十九歳）、福山藩校弘道館が設立され、二月二十三日茶山は呼び出されて、講師にと要請を受けたが病弱を理由に断つた。寛政四年（一七九二・四十五歳）、江戸において福山藩主第四代阿部正倫まさとしは昌平まさひら饗の林祭酒（述齋）から「当今の詩家で菅茶山の右に出る者はない」と聞いて、茶山が自分の領内の者であることを初めて知つた。この頃から藩主の茶山に対する覚えは目に見えて善くなつてゆき、寛政四年（一七九二・四十五歳）八月二十六日、茶山は福山藩から五人扶持を給せられ藩儒医を命ぜられた。寛政七年（一七九五・四十八歳）の冬には、藩から御家人にという思し召しを戴いたがこれも断つている。（「扶持米」江戸時代、俸禄として与えた玄米。「一人扶持」は一日五合で、一年間分を纏めて支給されるのが普通であった。）

しかし、子どものなかつた茶山は塾の存続のことを考えて、寛政八年（一七九六・四十九歳）、塾「黄葉夕陽村舎」を藩に移管し、塾名も「廉塾」と改称した。頼山陽撰の『茶山先生行状』には、

「…生徒晩益進。其所築塾、至不能納焉。先生請藩、登爲郷校、名曰廉塾。…」（…生徒 晩に益ます進む。其の築く所の塾に、納るる能はざるに至る。先生は藩に請ひて、登して郷校と爲し、名づけて廉塾と曰ふ。…）と記されている。

私塾「黄葉夕陽村舎」が郷校「廉塾」に変わってからは、それまでは無かった規約を作った。それは「廉塾規約」と称するもので「覚え」二十五箇条、「雜司之事」十三箇条の三十八箇条から成る規則である。塾生は寮生、自宅から通う者を合わせて三十余名であり、寮生については金銭出納簿に当たる「預り銀差引算用帳」を作り親から預かった金額と、支出した金額の明細を記した。

廉塾の講義は『論語』『孟子』『大學』『中庸』『易經』『詩經』『禮記』『左傳』『莊子』『小學』『周禮』『蒙求』『唐詩選』『杜律』『日記故事大全』『近思錄』『書經集傳』『古文眞寶』『詩經朱傳』『儀禮』『文章軌範』等が挙げられている。

講師は北條霞亭、藤井暮庵、仲立大藏（門生から拔擢された人）、頼山陽（一年余り）等である。萬波醒廬（岡山藩の儒官、藩校の教授）が廉塾を訪れ、『中庸』の「費隱章」を説いたり、永富充國（長門の人。肥前五島の儒臣であったが、この時は致仕して上国に遊ぶ）が約一年間、廉塾に滞在したことがあるが、その間に『儀禮』『周禮』を講釈したという記録も残っている。このように廉塾を訪れた儒者や漢学者などが漢籍の講義をしたこともあった。

文化元年（一八〇四・五十七歳）一月二十一日から十一月五日迄の約九か月半、茶山は藩主正精侯（享和三年・一八〇三、正倫に代わって第五代藩主となる）に召されて第一回目の江戸出府をした。江戸では、五月から六月にかけて常陸に遊び「常遊雜詩」十九首を作っている。蠣崎波響・伊澤蘭軒や柴野栗山・古賀精里・尾藤二洲・大原春響・谷文晁等と交遊を持った。それから十年後の文化十一年（一八一四・六十七歳）同じく正精侯に召されて第二回目の江戸出府をした。五月六日から翌文化十二年三月二十九日迄の十一か月に亘る長期間で、この度は『福山志料』の増補訂正が主たる目的であった。茶山の出府を聞き伝えて、連日多くの人々が訪ねて来た。茶山の交友範囲はもともと広かったが、この二回の江戸出府では、幕府関係の藩儒・藩士等は勿論のこと錚々たる文人墨客らと、交遊をもち、詩の応酬をし、名所旧跡を訪ね、舟遊びを愉しみ、月を賞し、招宴に預かる等、

一日も身の空く日はない状態であった。

更に、文化十五年（一八一八・七十一歳。四月二十二日に改元されて文政元年となる。）三月六日から五月二十九日迄、牧東渚（讃岐の人）・林新九郎（塾生）・渡邊鐵藏（塾生）・臼杵直卿（嘗ての塾生）を伴って、生涯に於て最後となった大和地方（『大和行日記』）への旅をした。茶山の生涯の旅を見ると、江戸への出府二回と、「黄葉夕陽村舎」時期の寛政六年四十七歳の時の、七か月に亘る『北上曆』の旅、その生涯で最後となったこの『大和行日記』の旅とを合わせて四度の大きな旅をしている。遊学以外には生涯、殆ど郷里から出ることもなかった茶山にとって、この四度の旅は清新な息吹に触れる有意義なものとなった。『黄葉夕陽村舎詩』には新鮮な感覚の紀行詩が数多く収められている。

茶山には忘れ難い心の友というべき人は多々あるが、生涯をかけて心底から親友と呼べる人を挙げるならば、頼春水と西山拙齋であろう。ほろ苦い思い出となり、しかし、終生離れることなく我が子も同然の思いで交わったのは、春水の息子頼山陽である。また、十二歳のときから門弟として教育し、一旦は養子縁組をした門田朴齋を、茶山は死を目前にして縁組解消をした。茶山の心にはよくよくのことがあったのであろう。しかし、茶山亡き後の「廉塾」を嗣いだのは、朴齋の四男晉賢であった。

茶山は病弱であったとはいえ、八秩に及ぶ生涯を全うしている。三十歳半ば迄に三人の肉親との辛い死別があった。安永九年（一七八〇）茶山三十三歳、最後の京都遊学を終えて帰郷したばかりの十一月、頼りにもし尊敬もしていた伯父高橋慎庵が歿した。それから一年も経たない天明元年（一七八二）、茶山より十歳年下の次弟汝榎が亡くなり、その半年後の天明二年（一七八二）、茶山三十五歳のとき、妻爲（二十三歳）が死んだ。爲とは一年半にも充たない結婚生活であった。四十歳代で父母との死別があり、五十一歳のとき終生の親友であった西山拙齋に先立たれ、同じく代わらぬ友情で結ばれた二歳年長の頼春水とは、茶山晩年の六十九歳での死別であった。

十歳代半ばにも充たない若い塾生との辛い死別もあったし、都講として迎えた頼山陽には一年余りで逃げられてしまい、裏切られたような苦しい思いも味わった。しかし、茶山の八秩に及ぶ人生は総じて安泰であったと言えるであろう。文政十年（一八二七）八月十三日、茶山は八十歳の生涯を閉じた。

二、これまでの茶山研究

「茶山研究」についての全てを集めたとはいえないが、以下に掲げた「研究論文」を求めることができた。茶山の文学の一面をとらえて詳細に究明したものが多く、「茶山文学」の全体に触れたものに出会わなかった。

【研究論文】

- 1 『茶山片影』 西田直二郎 『史林』第五卷第二號 大正九年四月
- 2 『茶山最後の大和遊歴と詩』 石岡久夫 『國學院雜誌』第三十七號 昭和六年十一月
- 3 『茶山最後の大和遊歴と詩』（承前） 石岡久夫 『國學院雜誌』第三十八號 昭和六年十二月
- 4 『菅茶山』上 今關天彭 『雅友』第三十號 雅友社 昭和三十六年九月
- 5 『菅茶山』下 今關天彭 『雅友』第三十一號 雅友社 昭和三十七年十二月
- 6 『菅茶山の「開元の琴」について』 黒川洋一 『懷徳』58 平成元年十二月
- 7 『菅茶山『白沙翠竹村舎集』校勘記稿上 谷本圭司 『中国学論集』九卷 平成五年十一月
- 8 『菅茶山『白沙翠竹村舎集』校勘記稿下 谷本圭司 『中国学論集』十卷 平成六年三月
- 9 『菅茶山詩論——螢詠を中心として——』 朱秋而 平成七年十一月

- 10 『菅茶山の漢詩と俳諧』 「綿弓」 「栗毬」 「菜花」 を手がかりとして 朱秋而
『国語国文』 (京都大学国文学会) 66 (11) 平成九年十一月
- 11 『菅茶山の漢詩と和歌』 梅雨詩に描かれる水鶏を中心に 朱秋而
『国語国文』 (京都大学国文学会) 68 (3) 平成十一年三月
- 12 『菅茶山の「行状」について』 頼祺一 『内海文化研究紀要』 二九号 平成十三年三月
- 13 『菅茶山の漢詩における「異界」』 池澤一郎 『日本文学』 日本文学会 平成十三年十月
- 14 『菅茶山「逸詩」による福山藩天明一揆の記録』 頼祺一 『中国地域と対外関係』
- 15 『菅茶山の田園風景』 — 賢者の栖 — 加藤国安 『東洋古典學研究』
(廣島大學東洋古典學研究会) 十二号 平成十三年
- 16 『菅茶山の質朴の人生および写生詩について』 — 「真率」「実事」なるものの探求 —
加藤国安 『東洋古典學研究』 (廣島大學東洋古典學研究会) 十四号 平成十四年
- 17 『茶山における和習の意味』 — 范成大との比較を通して — 朱秋而 『国語国文』
(京都大学国文学会) 第七十四卷第五号 平成十七年五月
- 18 『菅茶山を読む』 細矢和夫 『秋田中国学会50周年記念論集』 秋田中国学会
秋田中国学会50周年記念論集編集委員会 平成十七年五月
- 19 『茶山詠石詩試解』 小財陽平 近世文藝 『研究と評論』 六十八号 研究と評論の会
平成十七年六月
- 20 『茶山詩風の転換』 小財陽平 近世文藝 『研究と評論』 六十九号 研究と評論の会
平成十七年十一月

21 『松を抱く大月について』 新稲法子 『混沌』混沌会 29号

平成十七年

22 『黄葉夕陽村舎詩』前編卷一の編纂事情——「忌諱に触れる」作品をめぐる——

小財陽平 近世文藝 87

平成二十年一月

【1~22の内容】

1 茶山及びその交友の書簡類より、茶山の交友の広さを窺い得ることができるという内容。一頁三十四行が六頁半程度の短いもの。

2・3 茶山が七十一歳の老躯を携えて、保養旁々大和地方に遊んだ時の事情をその場所々々で作った詩を交えて描いている。第三十七・三十八號合わせて二十頁。

4・5 茶山の出自から京都遊学、塾設立、塾の藩への移管、福山志料編纂、吉野への旅、福山大火、頼山陽との関わり、六如との関わり、北條霞亭との関わり、江戸出府、江戸詩壇の人々・藩儒・藩士との広範囲の交友、京都・奈良・吉野への旅（大和行日記の旅）、『黄葉夕陽村舎詩』出版、詩論について、王漁洋について、茶山の書簡について等、茶山の生涯を網羅している。4は二十頁、5は十九頁。

6 昭和六十三年十一月、懷徳堂・友の会、頼山陽遺蹟顕彰会、中国新聞社主催による合同講演会「頼山陽を語る——江戸後期の文人たち」に於て行った講演を元にして成稿したもの。八世紀の前半、唐の玄宗皇帝の時代に琴作りの名人によって作られた七絃琴、それが遥々海を渡って日本にやって来た。それに似せて作られた琴が今、目の前にある。音色も枯淡で、姿も艶やかな琴、その琴を前にして、心の中に様々な思いが湧きだして来る。その思いを琴に託して詠おう。「武門が政治の大権を握り、大名が発生して封建社会になっていった日本の姿は、反国体的な体制であり、我が国本来の姿ではない。我が国本来の姿は天子様を上に乗く体制であるべきだ。朝廷に有為の人材が集まれば、再び古の聖代のように芳しい風が国土に吹き渡るであろう」と詠った茶山の七

言古詩を解説している。

7・8 『白沙翠竹村舎集』は天明六年（一七八六）茶山三十九歳までの五言詩六十首と七言古詩六十四首を詩体別に集めた写本である。『黄葉夕陽村舎詩』と対照した場合異同が多く見受けられる。『茶山詩文』は頼杏坪及びその近親者が、折りに触れて筆写してあつた茶山の詩文をまとめたものである。ここでは、『白沙翠竹村舎集』と『茶山詩文』、『黄葉夕陽村舎詩』との対校の結果を記している。7では五言詩の部分のみ、8では七言古詩のみとする。

9 和漢の詩歌に於て、馴染みの深い「蛩」を例に取つて、その季節性に重点を置き、茶山の作風がいかに漢詩の規範を脱し、その一方、日本の伝統文芸に接近していったかを追求する。

10 茶山の詩には俳諧に由来する作が二三見られると指摘する人がいる。しかし、茶山と俳諧との関連については、翻訳という観点のみでは説き尽くせないものがあると思われるので、「綿弓」「栗の毬」「菜の花」の表現を中心に、和漢の詩歌を取り上げて検討する。

11 茶山の梅雨時の詩六首に、水鶏くわいけいが詠われている。その鳴き声を門辺の柳の蔭に、溝渠の中に、枕の下に聞くなど、風物の一部として詠われている。中国では「水鶏」は「姑悪」と表記してその泣き声は「姑が悪い」と泣く嫁の恨み辛みの声だと言ひ伝えられており、そういった題材に限って詠われる。その違いはどこから来るのかを検討する。

12 頼杏坪宛の茶山書簡に茶山の「行状」「墓誌」成立の経緯が分かる部分がある。この論文はその成立の経緯の一端を明らかにする史料である。

13 菅茶山の「詩の世界の特徴について」の論。

14 「福山藩天明一揆・菅茶山・『大島筆記』』という三題断的な史料紹介。

- 15 茶山が神辺に塾「黄葉夕陽村舎」を開設して、それが軌道に乗り始めた天明三〜五年（一七八三〜一七八五）頃までの詩を収録した『黄葉夕陽村舎詩』前編卷二の「田園風景詩」から、茶山にとっての田園は「賢者の栖」と呼ぶにふさわしいものであったと結論づけている。
- 16 天明六〜寛政三年（一七八七〜一七九二）頃までの詩を収録した『黄葉夕陽村舎詩』前編卷三に収める写生詩について、茶山の生き方も含めて考察する。
- 17 茶山の「秋・冬」を詠んだ連作と范成大の田園雜興詩を比較して、両者の違いと特色について考察する。
- 18 茶山の田園の風物を写した詩には清新なものが多いが、慨世の詩や政治批判の詩などにも鋭いものが多くあり、茶山は単なる田園詩人ではなかったという。
- 19 『黄葉夕陽村舎詩』より詠石詩を取りあげ評釈を加える。茶山の詠石詩の変遷を辿ることで、詠石を通じて茶山の作詩態度や作風の推移を探り得るのではないか。それを問うよすがとする。
- 20 『黄葉夕陽村舎詩』前編卷一には他の巻には見られない、疎外感、無能感に満ちた詩が多数存在する。それは「若き頃の文人」が抱いた類のものであり、茶山は安永九年の京坂遊学の混沌社友との出会いによって、鬱屈した感情から解放されたものと推測している。
- 21 『黄葉夕陽村舎詩』卷三に収められている「即景」(二)の「愛看大月抱松升」は「異端邪法」と酷評されているが、『黄葉夕陽村舎詩』の他の詩や李白の「烏棲曲」の一句、李羣玉の「九日」の一句などから考証して、茶山の新しい表現は無責任に奔放なものではないと結論づける。
- 22 従来の研究史では取りあげられていない頼山陽の書き入れを手がかりに、茶山の政治批判の詩作について考察し、『黄葉夕陽村舎詩』板本の編纂事情の一斑を明らかにする。

三、この研究の目的と方法

この研究の目的は、茶山の「人と為り」を知ることと、茶山の「文学」即ち茶山の漢詩の持ち味と茶山が漢詩に於て追求し続けたものは何であったかを考察することである。

その方法として「人と為り」については、頼春水、西山拙齋、頼山陽、門田朴齋の四人と茶山がどのように関わったかを、手に入る限りの資料を集めて見てゆく。(その資料は後に「参考資料」として掲げる。)茶山の数多い友人・知人の中からこの四人を選んだ理由は次の通り。

頼春水は広島藩の儒官であり、茶山より二歳年長で誠実な人柄である。その息子の頼山陽が脱藩騒動を引き起こしたことに關して、春水の苦境を救うために自分の経営する「廉塾」の都講として山陽を引き取る。春水を通して知ったその弟の杏坪とも交流が密で、春水一族とは親族同様の交わりを持ち、終生変わらぬ情誼で結ばれた親友である。

西山拙齋は那波魯堂の門下で茶山と共に濂洛の学を修めた。人柄は清廉潔白で茶山より十三歳年長である。茶山にとって拙齋は全幅の信頼を寄せる友人であり、また時には師とも仰ぐ存在であった。茶山が古文辞学から朱子学に転向したのも、拙齋の影響に因ると考えられる。拙齋の郷里備中鴨方は備後神辺とは近かったので、茶山とは始終往き来をした。

頼山陽は子弟の關係で選んだ。山陽は二十一歳の時、脱藩騒動を起こして三年間座敷牢に謹慎させられる。謹慎が解けた山陽の身の振り方に心を痛めている春水を見かねた茶山は、「廉塾」の都講として招くが山陽は僅か一年余りで京都に高飛びしてしまう。茶山は良い後継者が出来たと喜んでいたし、山陽の才能と行動力を高く評価

していたので、その落胆は筆舌に尽くし難いものであり暫く交流が途絶えた。しかし、山陽が三十七歳で父春太に死別したのを契機に二人の間は旧に復し、茶山は師として、時には詩友として、又父親代わりとして二人の交友は終生続いた。

門田朴齋は茶山の後室の甥（茶山の後室、宣の妹の子）である。十二歳で茶山の弟子となり、早くから詩才を発揮して周囲から一目置かれる存在であった。成人してからは茶山と養子縁組をしたが、茶山は死の一か月ばかり前に朴齋を離縁している。その理由は詳らかでないが、賢すぎて傲慢な所があり、塾の子弟を教育するには相応しくないと考えたのではあるまいか。

頼春水、西山拙齋は友人として、頼山陽、門田朴齋は弟子として、茶山がどのように関わったかを追求することにより、茶山の「人と為り」を知ることができるものと考ええる。

茶山の「文学」（漢詩）については、茶山自身が「少年時代の作」（「余少年時、倣唐伯虎所作」と述べている）という『花月吟』、青・壮年期の「政治批判詩」、壮年期から晩年にかけての「農村詩」、「子どもを詠う詩」について考察する。

『花月吟』二十首は『使用文献』の『黄葉夕陽村舎詩』全（復刻）（葦陽文化研究会、児島書店 昭和五十六年十二月発行）には載せていないので、『詩集日本漢詩』第九卷（富士川英郎 昭和六十年 汲古書院）に拠った。茶山自身が「題花月吟後」で「花月吟二十首、余少年時、倣唐伯虎所作」（花月吟二十首は、余が少年の時、唐伯虎の作る所に倣ふ）と述べているところから、唐伯虎の『花月吟』十一首（唐伯虎は十一首しか作っていない）と比較して、茶山の若い頃の漢詩の特徴を探る。

「政治批判詩」は京都遊学後期から神辺帰郷後数年の作に多く、『黄葉夕陽村舎詩』（板本）前編卷一・二・三に収められている。晩年の作の中にも、政治に対する批判を詠った詩はあるが数は少ない。なお、『黄葉夕陽村舎

詩』の「草稿」（広島県立歴史博物館蔵）には、「板本」に載せられていない「政治批判詩」があり、それらの詩のほとんどが西山拙齋の編集した『休否録』に取り挙げられている。そこで、「板本」・「草稿」・『休否録』それぞれの「政治批判詩」について比較検討を加える。

「農村詩」には、農村に於ける自然のたたずまいを写したものの、働く農民の姿を詠じたもの、風景の一部として子どもの詠み込まれたものがある。農業を営む家に生まれ、農村に育った茶山には農民は仲間であった。だから農民の苦労は人事ではない。自分自身の事のように身に染みて分かる。愚痴もこぼさず、身を粉にして働く農民の姿に、政治の温かい手を差し伸べて欲しいと願わずにはおれない。そのような詩には政治に対する不満や、時勢に対する慨嘆の気持ちや詩句の奥に秘めて詠われている。茶山の「農村詩」は農民の側に立つて其の暮らしを詠ったものであるが、一般に「田園詩人」と評される陶淵明の「田園詩」は、隠棲している田園での自分の生活や、折に触れて浮かんで来る思いを詠うものであって「農村詩」とは言えない。それぞれの作品を取りあげてその違いについて考察する。

「子どもを詠う詩」は、京都遊学を終えて郷里神辺に帰ってからの作に多く、特に晩年に多く詠まれているのは何故か、その理由を考察する。農村に暮らす子どもたちが、農村風景を背景にして詠われているので、「農村詩」の中に入れるべきであるかも知れないが、風景の中にあつて特に子どもの言動に的が絞られている。子どもたちの動きや声が、今目の前に見え、聞こえてくるかのような現実感をもって詠われている。しかも、当時の漢詩壇に於て茶山ほど多く子どもを素材にした詩人はいない等の理由で別に扱った。

以上を通して茶山が求めた真の詩とは何であつたかを考える。

【使用文献】

①『黄葉夕陽村舎詩』全（復刻）（葦陽文化研究会 児島書店 昭和五十六年十二月刊行）を使用した。

「前編」八卷は安永以後文化六年（一八〇九）までの古今體詩九二三首と、末尾に弟恥庵の詩文集二卷を附録として収め、文化九年（一八一二）に皇都書林 汲古堂より刊行された。「後編」八卷の卷一・卷二は前編の遺漏を收拾し、卷三から卷八までは文化七年（一八一〇）から文政三年（一八二〇）までの古今體詩、一〇〇八首を収め、文政六年（一八二三）に京攝三書舗合刻として、京師 河南屋儀平、浪華 河内屋儀助・河内屋（家鑿）茂平から刊行された。「前編」八卷、「後編」八卷の編纂・校定には、当時「廉塾」の都講であった頼山陽が当たり、茶山生前に刊行された。「遺稿」七卷は文政四年から同十年までの古今體詩四八二首と、後に附録として姪の菅萬年（字は公壽）の詩集一卷（四二首）を付し、頼山陽が編集して天保三年（一八三二）に刊行された。書肆は江戸 須原屋茂兵衛、浪華 河内屋儀助・秋田屋太右衛門、京師 河南儀兵衛である。

「前編」の巻首に備前藩の世臣 小原正修業夫の「刻黄葉夕陽村舎詩序」と六如上人の書二通が付され、「前編」卷八の後に備中笠岡の祠官 小寺廉之子和の「黄葉夕陽村舎詩跋」が付されている。「後編」の巻首に北條讓の「黄葉夕陽村舎詩後編序」があり、「遺稿」の巻首に頼襄（山陽）の「序」が付され、最後に備前和気郡北方村の登々庵武之の「讀恥庵集書感」が載せられている。

「前編」巻四までは六如の評語が頭書されている。諸家の評は「前編」「後編」に見られるが、頼山陽のものが最も多く、「遺稿」は山陽の評語のみである。

使用文献の『黄葉夕陽村舎詩』全（復刻）本は影印である。文化九年刊の和紙 縹色表紙、見返は左右双辺で「菅茶山先生著／黄葉夕陽村舎詩／皇都書林 汲古堂梓」とあり、上部に「文化壬申歲鑄」と横書きされている。奥附は左右双辺で「文化九年歲次壬申晚晝刻成／江戸 須原屋茂兵衛／浪華 河内屋儀助・秋田屋太右衛門／京都

河南儀兵衛、「附録（耻庵詩草）上下」後に「讀恥庵集書感」（登々庵武之）が載せられている。内容は木版本と全く同じである。

② 『黄葉夕陽村舎詩』「草稿」（広島県立歴史博物館蔵。A O 1 g 0 0 4 8）

『黄葉夕陽村舎詩』前篇を出版するにあたり、茶山は「草稿」に収めた作品の内容について山陽に点検を依頼した。（このことは『黄葉夕陽村舎詩文』遺稿の序で山陽が述べている。）師である茶山の作品を評することは、山陽もいささか気後れしたようだった。「草稿」巻一の冒頭で次のように述べている。

「黄吻 乳臭、敢えて一辭を贊するは、愛に狂れ吾を忘るればなり。其の罪 云何せん。亦た唯だ疑ひを實し益を求むるのみ。幸はくは未滅に従はんことを。頼襄 謹んで識す。」（「未滅」とは罪を軽くするという意で、ここは弟子でありながら師の詩を批評し添削することの罪。）

山陽が、「諱に触れん」・「恐らくは忌を干さん」・「忌諱に触れんことを恐るるも、抑も事は已に逝けり、妨げざるか」等と指摘した政治批判詩の全てを茶山は省いて、文化九（一八一二）年に『黄葉夕陽村舎詩』「前篇」を出版した。それには山陽の「選」は認められ、「評」は全てそのまま載せられている。また「草稿」の『黄葉夕陽村舎詩』には、「板本」では省かれた詩が多く残っている。

③ 『詩集 日本漢詩』第九卷（富士川英郎 昭和六十年 汲古書院）

『黄葉夕陽村舎詩』全（復刻）には『花月吟』を収録していないが、この『詩集 日本漢詩』第九卷には収録されている。

第一章 菅茶山の行跡

菅茶山は明和三年（一七六六）十九歳で初めての京都遊学をする。十数年間にわたる六度の遊学を終えた茶山は郷里に塾「黄葉夕陽村舎」を開設する。それから又、十数年後にその塾を郷塾として藩に移管する。茶山の行跡は大きく「京都遊学の時期」と「郷里神辺の時期」の二つの時期に分けることができる。

第一節 京都遊学の時期

一、京都遊学

17 明和三年（一七六六）、茶山は十九歳で学に志し、初めて京都に遊学する。しかし、茶山は、何年もそこに腰を落ち着けて居た訳ではない。何か月かすると一旦郷里に帰り、又、上洛するということを数度、繰り返している。

当時の遊学は今の学校制度のような桎梏しごくはなく、去就は自分の都合に合わせる事ができた。従つて茶山も十数年間のうちに、六度の上洛をしている。「歳杪放歌」や「今井子原宅集、同葛子琴、篠安道、頼千秋、小西伯熙及桑田子重、藤枝得中、萱野雄飛賦分得寒韻」(今井子原宅に集ひて、葛子琴、篠安道、頼千秋、小西伯熙、及び桑田子重、藤枝得中、萱野雄飛と同一賦しふし分ちて寒韻を得たり)によつてそれを伺うことができる。

「歳杪放歌」は安永八年(一七七九)三十二歳の暮れの作。最後の京都遊学(安永九年)の直前に作った詩で『黄葉夕陽村舎詩』巻之一に収められている。

歳杪放歌

三十二年胡念念 單身千里六向東 三十二年 胡ぞ念念たる、單身千里六たび東に向かふ。

滿腔慷慨成底事 負郭田園半爲空 滿腔の慷慨 底事をか成す、負郭の田園半ば空と爲る。

唯有風月供多病 今年又盡伏枕中 唯だ風月の多病に供する有り、今年又盡く伏枕の中。

屠龍無用已知之 一寒如此於我宜 屠龍の無用なるは 已に之を知る、一寒 此の如きも 我に於ては宜なり。

堪喜阿連麤識字 尊前唱和餞歲詩 喜ぶに堪へたり 阿連の麤くも字を識るを、尊前に唱和す 歳を餞るの詩。

三十二年があつという間に過ぎてしまった、(明春は)ひとりで遠く六度めの上洛をする。

精一杯世を慨嘆してきたがどれだけのことを成し得たか、郭外の田園も半分は人手に渡ってしまった。

ただ自然の美しさだけが病気がちの私の慰みとなつた、今年も又枕に伏したまま年が暮れようとしている。

屠龍の字が役に立たないことは已にわかつていて、貧しさが身に染みるのは情けない私には当然のことだ。

ただ嬉しい事は 弟が何とか文字を覚えたこと、酒樽を前に唱和するのは 歳を餞るの詩。

「單身千里六向東」は年表によれば、安永九年(一七八〇)一月に上洛しているので、この時のことを言つたものと考えられる。又、安永九年三月十日、茶山、三十三歳の作「今井子原宅集、同葛子琴、篠安道、頼千秋、小

西伯熙及桑田子重、藤枝得中、萱野雄飛賦分得寒韻」（今井子原宅に集ひて、葛子琴、篠安道、頼千秋、小西伯熙及び桑田子重、藤枝得中、萱野雄飛と共に賦し分かちて寒韻を得たり）では次のように詠っている。

吾本性癖懷微志 負笈六度到平安 吾れ本性癖 微志を懷き、笈を負ひて 六度 平安に到る。

千場結客交頗汎 朝市盟好猶未寒 千場 客と結びて 交り頗る汎く、朝市 盟好 猶未だ寒からず。

私はもともと心の中に学問への志を抱いていた、（それで）笈を負うて 六度京都に遊学した。

多くの場で 人と交りを結び 交際範囲も広がった、役人や 町の人たちとも親しみ 交遊も多くなった。

安永九年三月十日、茶山は京都から大坂に行き、題に挙げた人々（片山北海を首班とする大坂混沌社の詩人たち）と詩酒徵逐の日を重ねた。この詩は神辺に帰る予定を間近に控えていた茶山の送別の宴が、今井子原宅で行われた時の作である。以上の二篇から茶山の上落は六度であることが分かる。

1、京都遊学一回目

第一回の遊学は明和三年（一七六六）、十九歳の時である。頼山陽撰の「茶山先生行狀」に「（先生）年十九、遊京師、従市川某、學所謂古文辭者。」（先生）年十九にして、京師に遊び、市川某に従ひて、謂ふ所の古文辭なる者を學ぶ。」と述べられているところから明らかである。市川某とは大内熊耳（荻生徂徠の門下）の門下の市川鶴明ではないかと考えられる。『末賀能比禮』の著者で、元文五年（一七四〇）江戸に生まれた。信濃・尾張・薩摩等を転々としたが、京都に居住していたこともある。天明八年（一七八九）の大火で焼け出され浪華に移る前の一時期、京都に住んで子弟の教育にも携わっていた。寛政七年（一七九五）五十五歳で歿している。茶山は医学を習う傍ら（二回目の遊学のところで触れる）、比較的早い時期に荻生徂徠風の古文辭学を、この市川鶴明につ

いて学び始めたものと思われる。古文辞学とは、「文は秦漢、詩は盛唐の古に復り、古人の使用した文辭によつて、現代の詩文を表現すべきことを唱導するもので、我が国では、荻生徂徠一派がこれに和した」（『日本思想大系』徂徠學派）というものである。

2、京都遊学二回目

第二回目の京都遊学は、明和五年（一七六八）二十一歳の時である。それは天明八年（一七八八）茶山四十一歳の六月五日から、約一か月に亘る廣島・宮島方面への旅を記した『遊藝日記』の六月二十七日の所に、次のような記述があることによつて知ることができる。

余在戊子歳、舟行北上、守風陬磨。時中秋月明。獨倚柁樓吟賞。思納言淪落、悲諸平戰沒、不覺淚下。松風波響、似添客恨。

余 戊子の歳に在りて、舟行北上し、陬磨（須磨）に守風す。時に中秋月明らかなり。獨り柁樓たうろうに倚りて吟賞す。納言の淪落を思ひ、諸平の戰沒を悲しみて、覺えず涙下る。松風波響、客たむの恨みを添ふるに似たり。戊子の歳は明和五年（一七六八）であり、茶山は二十一歳である。時節は中秋、船旅で北上し、風が強かったのであろう。風が治まるまで須磨に船泊したというのである。これにより、茶山はこのとき二度目の遊学をするために上京の途中であつたことがわかる。茶山が京都遊学を志した最初の目的は「古文辞学」と「医学」を学ぶためであつた。「古文辞学」を学ぶためであつたことは「京都遊学一回目」のところでも既に述べたが、茶山にはもう一つ「医学」を学ぶ目的もあつた。それは『富士川游著作集』第八卷「芸備医人伝」の「菅茶山」の項に、次のように紹介されている。

茶山、名は晋帥、字は礼卿、通称太中、茶山は号なり。芸備神辺の人、幼にして穎異。群児と牛を山林に牧うに方り、群児嬉戯至らざる所なきに、茶山独り唐詩選を手にして朗誦已まず、人皆之を異とす。若冠にして笈を負て京師に至り、和田東郭の門に入りて古医方を修む。学成りて郷に還り、医を業として大に行はる。菅茶山先生が洛陽の学を那波魯堂に学び、殊に詩名最も高くして、一時その右に出づるものが無かつたといふことは人の普く知るところで、今更改めて言うまでもないが、しかも先生は医方をも修めた人である。儒家として又詩人としてその名声が赫々たるに蔽われて、医家としての茶山先生は多くの人からは殆ど知られずにいる。茶山先生の著書として世に伝わっているものにも医方に関したものは無い。従つて茶山先生の医説を窺うことが出来ぬのを遺憾とするが、しかしながら茶山先生はともかくも始め医家として世に立つて居られた人である。ある年輩までは現に刀圭を執て居られたのである。

以上のことから茶山は医者としても立派にその業を行つていたことが分かる。それでは、茶山が医学を志した動機は何であつたのか。父の兄に当たる伯父に、高橋慎庵（一七一〇〜一七八〇）という儒医があつた。地方では重視された人で、漢籍の素養もあり、和歌や狂歌もよくしたので、その感化もあつたであろうと考えられる。高橋慎庵について『福山市史』中巻で次のように紹介されている。

高橋慎庵は医を学び、漢籍に通じ、和歌・狂歌をよくした。城下よりも学びに来る者が多かつた。某年筑前黒田侯が参勤の帰途神辺駅本陣に宿泊し、慎庵を招いて『古事記』の講義を聞いたのが縁となつて、福岡に招かれたこともあつた。

茶山が医学を学ぼうとしたのは、この伯父の影響感化によるところが大きい。また、茶山が幼少時から病弱であつたことも、その理由の一つであると考えられる。茶山は古稀を迎えたとき、自分の自画像に題した文の中で次のように述べている。

自題畫像 (二)

我質之羸弱、但恐朝露之先父母、百方尋生路、祇戲嬉是狃。隨彦道於樗蒲、逐樊川於花柳。既而悔悟自新。

(「黄葉夕陽村舍文」卷四)

我が質の羸弱なる、但だ朝露の父母に先んぜんことを恐れ、百方生路を尋ね、祇だ戲嬉に是れ狃る。彦道に樗蒲に隨ひ、樊川を花柳に逐ふ。既にして悔悟して自ら新たにす。

彦道は袁彦道(晉)の袁耽、彦道は字。博打が巧みであつた)を指し、樗蒲は博奕(博打、賭博)のことである。

樊川は晩唐の詩人杜牧の号で、淮南節度使となつて揚州にいたるとき、連夜妓楼に流連した。「隨彦道於樗蒲、逐樊川於花柳」(彦道に樗蒲に隨ひ、樊川を花柳に逐ふ)とは茶山が、若いとき博打をしたり、花柳界で遊んだりしたことを言う。「私が羸弱の質でいつ死ぬか分からぬ状態であつたからだ」と告白しているのである。医学を學んだ期間はどれくらいだつたのだろうか。『師談録』(江戸末期の眼科医、土生玄碩の口述を門弟の水野慶善が筆記した書物)の中で土生玄碩が「遂從和田先生爲醫。余入先生門時、已茶山歸郷」(遂に和田先生に從ひて醫と爲る。余が先生の門に入りし時、已に茶山は郷に歸れり)と言つてゐることから考えられる。土生玄碩が和田泰純(東郭)に學んだのは、安永七年(一七七八)であつて、そのとき茶山は既に郷里に歸つていたといふのであるから、この頃茶山はまだ医学を學んでいたことが分かる。

なお、「備後史談」第十五卷第一号で濱本鶴實は、天明二年のことを記した最後のところで「此の年、茶山は三十五歳、まだ塾を開かず、醫を業としていた」と述べてゐる。茶山が私塾「黄葉夕陽村舍」(『備後史談』第十五卷第八号によると、開塾当時は「神邊間塾」と呼んでいたようだ)を開いたのは、年表によると天明元年となつてゐる。いづれにしても、天明の初めの頃までは郷里において、医業に関わつていたと考えられるので、茶山最後の京都遊学(安永九年)までは、儒学・医学共に學んでいたと考えられる。『備後史談』第十五卷第八号に次の

ようにある。

茶山は初め農であり、商であり、且つ醫であつた。それが晩年は儒一式となつた。農といつても茶山自ら鋤犁を把つたものではなく、日雇人夫によつて田を作り畑を耕した。商は兼業で、酒の醸造を爲し、固より店舗を開いて小売りもした。醫と言へば初耳として訝る讀者もあらうが藩へ差出した履歴書には、「醫を以て家を繼ぐ」と書いてある。遊学から歸郷した十年ばかりの間は、醫を營んだものらしい。當時の儒者は大抵醫儒兼業であつた。…世渡りの伶俐のものは二業を兼ねたのである。茶山もその選に落ちなかつた。…明和八年初春には、西山拙齋が訪ねて来て、初回の三原の觀梅をした。爾來家業を手傳ひ、醫業も營み、子弟を集めて素讀教授もした。…天明二年、此頃茶山の詩名 頗に揚る。その素讀所を神邊間塾と喚んだらしい。時に卅五歳。

濱本鶴實氏が以上のように述べているところから察すると、遊学してから帰郷する毎に、郷里では医業に携わり、同時に農・商も兼ねていたことが分かる。

文化十一年（一八一四）二月二十二日付けで、北條霞亭が神辺から、郷里志摩の弟、碧山に与えた書簡に次のようにある。

菅氏は田地も有之、酒造の株も有之候家也、元來菅氏は酒造家にて餘程の巨家に有之候處、先生三十年前迄は醫を兼て被致候由、然る處右本宅兩度迄焼失いたし、其内先生は醫をやめられ候て、専ら學問一道に相成候。文化十一年、茶山六十七歳から「三十年前」と言へば、天明四年（一七八四）、茶山三十七歳になる。また、「本宅兩度迄焼失いたし」とあるのは、明和元年（一七六四）十一月二十四日、（茶山二十歳）家数七十七軒を焼失した神辺駅出火と、天明三年（一七八三）十二月（茶山三十六歳）上旬、神辺（安那郡）と隣り合つた品治郡新市村から出火して、往還筋百軒以上を焼失した火事を指すのではないかと思われる。「三十年前」というのが、きつち三十年と言うのではなく、「三十年ばかり」と言うほどの意であらう。いずれにしても、三十歳半ば頃までは

医業を続けていたであらうと考えられる。

茶山には、医学に関する著述はない。富士川游氏も『富士川游著作集』第八卷、「昔茶山先生の医説」の中で、茶山先生の著書として世に伝わっているものにも医方に関するものは無い。従つて茶山先生の医説を窺うことが出来ぬのを遺憾とするが、しかしながら茶山先生はともかくも始め医家として世に立つて居られた人である。ある年輩までは現に刀圭を執て居られたのである。それ故に先生の医説がどういふものであつたかということを探求することは興味あることである。幸に先生の随筆として世に伝わっているところの「筆のすさび」の中に、医学につきての叙述が数箇処に見えて居る。

と述べている。随筆集「筆のすさび」卷之三「病源薬性の説」の全文を掲げておく。

「病源薬性の説」

近日医師に、病は一気の留滞より生ずといふは、さもあらん。魚は水に生じて水に養れ、人は氣に生じて氣にやしなはるればなり。此説につゞいて、万病一毒といふ者あり。これは通じがたきにや。たとへば胎毒、結毒は人にあり、魚毒、菌毒は物にあり、風毒、陰陽毒は氣にかゝる、これ皆毒とも云うべし。打撲、顛蹶にてわづらひ、火傷、水溺にて死に至り、刀劍の傷よりして命を殞し、過食にていたむは、抑何の毒なるや、米麦もと毒なけれども、多食より病をひき、挺刃もと毒なけれども、傷より患ふるなれば毒といはんか、さらば河豚、鳥喙の類、其のものにたくはへし毒とは一にあらず、病を生ずるものをさして皆毒といはゞ、万病一病といひても可なり。また薬に寒温なしといふ説ありて、試に水をあげて汝が性いかにとはゞ、水こたへて冷といはん、沸湯にしてとはゞ熱といはんなどいへり。今試みに酒を拏てとはゞ温といはんや冷といはんや。大抵はやく人を驚し、門戸をたてんとおもふ人は、必かゝることある者なり、独儒者のみにあらず、さりとして其人愚昧なるにもあらず、亦信すべきこともまゝあるべし、かゝる不稽の説ありとて、悉くもすつべからず。予香川氏

の行余医言薬選などをよみて、その卓識に服せしことも多けれども、また疎漏の説もあり、後藤吉益等の書は
 いまだ読ざれども佳説もあるべし。「割註」大抵近時の人の書は、是非相半するものなれば、一概に信じがたし。
 「病は丙の字なり」といふ説韜耕録に見えて妙なり、今ことごとく記せず。人は一気の陽もて生存す、この陽
 ならざれば病なり、強人さむくして振ふも、弱人の寒になやむも、皆陽氣の変にて証に寒熱といふは枝葉の論
 なり、療治にいたりて或は温或は涼或は発散し、或は収瀉するは療治の手段にてこゝにいふをまたず。

3、京都遊学三回目

三回目の京都遊学は、明和七年（一七七〇）茶山、二十三歳の時である。それは『黄葉夕陽村舎文』巻之四に
 収められている「題大雅畫軸匣」（文政元年十二月執筆）という次の文章によつて知られる。

余在京時、與飯田玄泉者善。玄泉學畫於池大雅。每與余出遊、輒過其廬。余亦因與大雅相識。一日、玄泉、詩
 示大雅畫天門山圖。上題李白詩。余愛其畫、而病其詩及落款草書太狂。乃乞大雅、別作一圖、且楷書其名、不
 題其詩、持三紙附之。數日過其廬。畫已成、出授。其一畫竹石、一蘭石、一則此圖也。熟視其石腹、隱隱見山
 皴。意方其下筆、墨或不受意、塗抹爲石、加以蘭竹者耳。一掃不苟、其用意之密可想。其不可其意亦并出、與
 人。其眞率之態、亦可思焉。余時年二十三、大雅五十左右、距今四十八年矣。蘭竹爲二友人所奪。不知今尚存
 否。大雅宰木已拱、玄泉及二友亦不在。追惟往事、茫茫如夢。頃新造匣、因書所感棄之。裱裝粗惡、今不改者、
 不欲捐舊物云。時文政紀元嘉平月也。

余京に在りし時、飯田玄泉なる者と善し。玄泉畫を池大雅に學ぶ。余と出遊する毎に、輒ち其の廬に過
 ぎる。余も亦因りて大雅と相識る。一日、玄泉、大雅の畫ける天門山の圖を誇示す。上に李白の詩を題す。

余 其の畫を愛するも、而も其の詩及び落款の草書の太だ狂なるを病む。乃ち大雅に別に一圖を作り、且つ其の名を楷書して、其の詩を題せざらんことを乞ひ、三紙を持して、之に附す。數日にして其の廬に過ぎる。畫已に成り、出して授く。其一是竹石を畫き、一は蘭石、一は則ち此の圖なり。其の石腹を熟視するに、隠隱として山皴を見る。意ふに其の筆を下すに方り、墨或いは意を受けず、塗抹して石と爲し、加ふるに蘭竹なる者を以てするのみ。一掃も苟めにせず、其の意を用ふることの密なること想ふべし。其の意に可ならざるも亦并せ出して、人に與ふ。其の眞率の態、亦思ふべし。余時に年二十三、大雅は五十左右、今を距たること四十八年なり。蘭竹は二友人の奪ふ所と爲る。今尚存するや否やを知らず。大雅の宰木は已に拱となり、玄泉及び二友も亦在らず。惟だ往事を追へば、茫茫として夢の如し。頃新に匣を造り、因りて所感を書して、之を弄む。裱裝粗惡なるも、今改めざるは、舊物を捐つことを欲せざればなりと云ふ。時に文政紀元嘉平の月なり。〔嘉平の月〕十二月。

文中「余時年二十三、大雅五十左右、距今四十八年矣」の「余時年二十三」と言へば、明和七年（一七七〇）に当たるし「距今四十八年矣」の今は文政元年（一八一八）であるから、今から四十八年遡れば、明和七年に当たる。故に第三回目の遊学は明和七年、二十三歳の時であったことが分かる。明和七年頃までの茶山は、医学方面の友人や、それに関わる人々との交遊が主であったが、池大雅とは特に頻繁に行き来するようになっていた。池大雅を茶山に紹介したのは京都で名医として知られた飯田棟隆の長子、飯田玄泉であった。飯田玄泉も和田泰純に医学を学んでいたし、一方、池大雅に画を学んでいた。茶山と玄泉とは共に和田泰純に医学を学ぶことを通して知り合ったものと考えられる。土生玄碩の『師談録』に次のように述べられている。

嘗賦月梅詩各二十律、示之和田先生。先生示之村瀬栲亭。栲亭嗟歎曰、雖宿孺不可及也。時年二十五六耳。無幾爲儒。

菅て月梅詩 各二十律を賦して、之を和田先生に示す。先生之を村瀬栲亭に示す。栲亭嗟歎して曰く、宿孺と雖も及ぶべからざるなりと。時に年二十五六なるのみ。幾ばくも無くして儒と爲る。

「時年二十五六耳」といえば、四回目の上洛の時で安永元年の頃である。『師談録』のこの文によると、茶山は医学を学ぶ傍ら詩も作っていたようで、その詩が人々の間で評判になっていたらしい。栲亭が「宿孺と雖も及ぶべからざるなり」と嗟歎して云ったとあるところから窺うことができる。「月梅詩」は茶山の詩集には見当たらないし、誰も語っていないところからみると、その当時作ったと思われる「花月吟」（七律二十首）のことではなからうか。「花月吟」は『詩集 日本漢詩』（汲古書院 卷九）には掲載されているが、『黄葉夕陽村舎詩』には載せていない。「黄葉夕陽村舎文」巻之四に「題花月吟後」と題する文を載せていて、それによると茶山は、自分が少年の時に作った「花月吟二十首」は「倣唐伯虎所作、以纖靡似時様、棄而不録」（唐伯虎に倣ひて作る所、纖靡時様に似たるを以て、棄てて録せず）と、取るに足りない詩であるから、棄てて記録には止めないと述べている。「花月吟」は四回目の上洛の二十五歳か二十六歳頃の作ではないかと考えられる。即ちこの頃は時の詩壇を支配していた、藪園派流の纖靡な詩を作っていたものと考えられ、濂洛之学に転向してからの茶山にとっては、「取るに足らない詩」になってしまったのであろう。

「花月吟」とはどのような詩か、一首（第四首）を挙げる。〔訳〕は第三章 茶山の文学 第一節「花月吟」参照

溪月溪花好嘯吟	悠然見月立花陰	溪月溪花嘯吟するに好し、悠然として月を見て花陰に立つ。
月中幾日花無恙	花上何年月始臨	月中幾日か花恙無からん、花上何れの年か月始めて臨まん。
月夕花朝人競賞	花神月姊汝何心	月の夕花の朝人競ひ賞す、花神月姊汝何の心ぞ。
月終不答月還默	月嶼花灘夜自深	月終に答へず花還た黙す、月嶼花灘夜自ら深し。

4、京都遊学四回目

四回目の京都遊学は、安永元年（一七七二）茶山、二十五歳のときである。それは『黄葉夕陽村舎文』巻之四に収められている「題義仲墓詩後」という文章によって知られる。

嘗過義仲寺、見石州僧履善者、題詩於石燈柱。聲調頗佳。余因次韻書其側。大津有平紀宗者。寄詩余於京、疊其韻也。余帶歸而貼屏風。後十餘年、石州人芳淑上人、聞其事、而索更寫余詩。上人即履善也。余詩一時興到之作、固無草稿。平詩亦爲客剥去。後又數年、上人寄示原詩。因追思、始得之。而遷延不果寫焉。讚岐意戒上人偶來談、及其事、遂録。憑以呈芳淑上人云。回首當初、荏苒四十餘年矣。時文政二年己卯三月望也。

嘗て義仲寺に過ぎりて、石州の僧履善なる者、詩を石燈柱に題するを見る。聲調頗る佳なり。余因りて次韻して其の側に書せり。大津に平紀宗なる者有り。詩を余に京に寄せ、其の韻を疊ねたり。余帶歸して屏風に貼れり。後十餘年、石州の人芳淑上人、其の事を聞きて、更めて余が詩を寫さんことを索む。上人は即ち履善なり。余が詩は一時の興到るの作、固より草稿無し。平が詩も亦客の爲に剥ぎ去らる。後又數年、上人原詩を寄せ示す。因りて追思し、始めて之を得たり。而れども遷延して寫すことを果たさず。讚岐の意戒上人、偶ま來り談じ、其の事に及び、遂に録す。憑りて以て芳淑上人に呈すと云ふ。首を當初に回らせば、荏苒四十餘年なり。時に文政二年、己卯三月望なり。

義仲寺は近江国栗津にある。上記の文は文政二年（一八一九）茶山が、七十二歳から遡ること四十余年以前に、義仲寺を訪れたことを懐古したものである。安永元年（一七七二）茶山二十五歳の時、佐々木良齋が江戸へ行くのを、西山拙齋と近江国栗津の義仲寺辺りまで送った。その時、拙齋が「送佐長史奉使東都」（佐長史の東都に使用し奉るを送る）と題する七絶二首を作っている。その上欄に茶山が「是義仲寺前分手時作。光景宛在目」（是れ義

仲寺前にて手を分かちし時の作。光景宛ら目に在り」と書き付けている。また、拙齋が安永元年に京都の某寺で詠んだ詩に、「和菅教詩韻」という七律がある。この詩にも茶山は次のように記している。

是時 魯堂、與主僧對局、魯堂連贏。余與先生請難僧爲導、尋長嘯子墓、又觀寺弄風鳥。

是の時 魯堂は、主僧と對局し、魯堂連りに贏つ。余は先生（拙齋）と難僧に請ひて導を爲さしめ、長嘯子の墓を尋ね、又寺弄の風鳥を観る。

木下長嘯子の墓は京都の高台寺にあるので、某寺はこの高台寺であろう。茶山と拙齋は魯堂に連れられてこの寺に來た。魯堂が主僧と碁を打っている間に、茶山と拙齋は小坊主に案内させて、木下長嘯子の墓を尋ねたり、寺に飼われている風鳥（極樂鳥）を観たりしたと云うのである。

以上二つの事柄から、茶山は安永元年には上洛して、魯堂の元に居たことが分かる。更に、引き続いて安永二年（一七七三）にも茶山は京都に居たらしい。安永二年八月に、拙齋と共に魯堂に従つて洛西の西岡に遊んでいることが、年表に拠つても知られるし、何月かは分からないが、初対面の頼春水を大坂江戸掘りの新居、「春水南軒」に訪ねている。それは「春水遺稿」に寄せた茶山の序文で察することができる。「余之初見時、先生年二十八、余則少二年」（余の初めて見えし時、先生（春水）は年二十八、余は則ち二年少し）。春水は安永二年三月中旬にこの新居を構え、「青山社」と名づけて家塾を開いていた。

茶山はこの度の遊学から那波魯堂に師事している。茶山は前年（明和八年、一七七二）の初春に西山拙齋と初対面して、三原に梅の花見に行つている。おそらくそのとき、古文辞学や濂洛の学の話がでたのであろう。これは推測の域を出ないが、この四回目の京都遊学から茶山が那波魯堂に師事し、拙齋とも行動を共にしている（安永二年の八月には魯堂・拙齋・茶山は洛西の西岡に遊んでいる）ことなどから考えて、拙齋は初対面の茶山に古文辞学の否を説き、朱子学の是を述べて改轍を勧めたのではなからうか。「茶山先生行状」に、

(先生) 年十九、遊京師、從市川某、學所謂古文辭者。後自悟其非也、從那波魯堂先生、受濂洛之學。

(先生) 年十九にして、京師に遊び、市川某に従ひて、謂ふ所の古文辭なる者を學ぶ。後自ら其の非を悟るや、那波魯堂先生に従ひ、濂洛の學を受く。

「明和三年に茶山は十九歳で學に志し、初めて京都に遊學する。市川某に従つて古文辭なるものを學ぶが、後にその非を悟り那波魯堂先生に従つて濂洛の學を受ける」と述べられている。濂洛之學とは、「濂洛關閩之學」の略で宋學の四派。周敦頤(この學統の祖)は湖南濂溪の人、程顥・程頤は河南洛陽の人、張載は陝西關中の人、朱熹は福建即ち閩の地に學び、いずれも宋學の大家であつたところから、その出身地の頭文字「濂・洛・關・閩」の一字をとつていう。朱子學は南宋の朱子によつて確立された。日本で本格的に受容され、社会の全般に大きな影響を及ぼすようになったのは、近世に入つてからである。

茶山は初め市川某に「古文辭學」を學んだが、その非を悟るや那波魯堂に従つて「濂洛之學」を受けたといふのである。那波魯堂については、茶山が執筆した「拙齋先生行狀」に次のように説明されている。

魯堂學、初信護園、後頗覺其語多矛盾、文字亦多敗闕、幡然猛省、更取程朱諸公書、從容潛玩、有會於心。朝鮮聘使之來貢也、聞其參佐綱紀、選有學識者、請從接伴使、與俱東行。迺與其學士南玉、書記元重舉等疑難討論、益知宋學之是而時學之非也、遙寄先生書、使捐舊學、且勸見南玉諸客。

魯堂の學、初め護園を信ぜしも、後頗る其の語に矛盾多く、文字も亦敗闕多きを覺り、幡然として猛省し、更めて程朱諸公の書を取り、從容潛玩して、心に會するところ有り。朝鮮聘使之來貢するや、其の參佐綱紀、學識有る者を選ぶと聞き、請ひて接伴使に従ひ、與に俱に東行す。迺ち其の學士南玉、書記元重舉等と疑難討論し、益す宋學の是にして時學の非なるを知るや、遙かに先生(拙齋)に書を寄せて、舊學を捐てしめ、且つ南玉諸客に見はんことを勸む。

つまり、「魯堂は初め徠來学を学んでいたが、その説に頗る矛盾が多く、文字も敗闕が多いので、幡然として猛省し、更めて程朱諸公の書を取り、落ち着いてゆっくり吟味すると心に会得するところがあつた。朝鮮の使節が来日したとき（明和元年）那波魯堂は一行と江戸まで行き、南玉（南秋月、朝鮮の学者、通信使の一人）や元重擧等と疑難討論して益々宋学の正しいことを知つた。そこで西山拙齋に書を送つて、徠來学を廃して朱子学に転ずることを勧めた」というのである。「その語（徠來學）に頗る矛盾が多く、文字も敗闕が多い」とはどういうことなのか。徠來学についてみる。

徠來はごく早い時期から、語と意を区別する考えを抱いており、「此の方は自ら此の方の言語有り、中華は自ら中華の言語有り。体質も殊なり、何に由つてか脗合せん。是を以て和訓廻環の読みは、通すべきが若しと雖も、実は牽強たり」（『徠來集』十九「訳文筆蹄題言十則の第二則」）と述べている。即ち、「日本の国には日本の国の言語があり、中華には中華の言語がある。体質も異なるのに、どうしてびつたりと合うことがあるうか。中華の読みを日本の読み置き換えただけでは、通じたとは言つても実際には無理にこじつけただけである。」と云うのである。

漢文に訓点を施して和説すると意を得ることはできるが、言語は意がすべてではないといふのであり、文学で言えば『徠來集』二十五「崎陽の田辺生に答ふ」で述べている「詩は情語なり。文は意語なり」といふことになり、詩の意を一般的な概念で作り上げると情の微妙な差異が失われる。詩とは語そのものであるから、徠來は「古語に熟達し人情に通曉することが必要で、そのためには自ら古語を用いて詩文の実作に努めねばならない」と表現重視の詩論を主張した。即ち、盛唐詩模倣の擬古主義が絶対的な表現規範であるとしたのである。しかし、行き過ぎた語の重視は情の暢舒を阻害するという矛盾を含んでいた。一言一句、盛唐詩に典拠のないものは用いないという表現尊重の擬古主義は、形式主義に陥り兼ねない。又、盛唐の詩風を尊重するあまり、今の人の日常に

即した詩情に乏しく、粗放で精緻な観察や内省がないという欠陥も出てきた。そうして「千篇一律の模擬剽竊」と批判されるようになった。那波魯堂が古文辞学に矛盾を感じ非としたのはこういったところであろう。

「膺合」ぴったり合う。「和訓廻環」日本語読みに換える。「牽強」無理にこじつける。「暢舒」十分に述べる。のびのびと述べる。「剽竊」他人の詩や文章を盗んで使う。(『日本思想大系』37 岩波書店・『吉川幸次郎全集』

第17卷 筑摩書房)

古文辞学を否定する山本北山(一七五二—一八一二)は次のように述べている。

蓋シ復古ノ名ハ是ナルニ似テ、其ノ實ハ大ニ非ナリ。奈ントナレバ、其ノスル所、専ラ唐人ヲ剽竊シテ、句ゴトニ比シ、字毎ニ擬シ、目前ノ景ヲ舎テテ、腐爛ノ辭ヲ摭ヒ、公然トシテ復古トヨビ、中晚(唐)以下ヲ視ルコト、讎敵ノ如ク、標然トシテ、別ニ高華ノ工夫ヲナス。天下ノ詩、之ガ爲ニ一變シ、詩道ノ弊モ亦極マレリ。

『作詩志毅』

また、尾藤二洲は『藤村・合田二老人に與ふるの書』で、

偶々『護國隨筆』を讀み、是に於て始めて物氏(徂徠)の説に疑ふことあり。乃ち文一篇を著はして、以てこれを片北海に質す。北海、乃ち教ふるに『孟子』を熟読するを以てす。因つてその教の如くすること數月、稍稍、物氏の古の、古ならざるを覺る。然る後、『中庸』を讀み、また遡つて『易』を讀み、是に於て疑ふもの日に解け、喟然として北海の先覺たるを歎ず。而も猶未だ適從する所を知らざるなり。支離して日を曠うし、汎濫して月を過ぐ。而して其の程朱の言に於て、半ば信じ、半ば疑ふ。既にして『四書集注』『易傳』および『太極圖說』『二程全書』等の書を讀み、信ずるもの益々定まり、疑ふもの益々解け、乃ち始めて程朱の言の、深く聖人の意を得、万古易ふ可からざることを識る。是に於て曠昔の爲す所を顧みれば、則ち愧悔交々生じ、啻に泚頰のみにあらず。

「嗚然」ため息をつく。「遺從」頼りにして従いつく。「支離」分散。「嚙昔」前の日。「愧悔」「愧」は大きい。「汎類」「汎」ぬらす。「類」類。

と程朱への転向過程を記述している。「四書集注」「易傳」および『太極圖說』『二程全書』等の書を読み、信ずるもの益々定まり、疑ふもの益々解け、乃ち始めて程朱の言の、深く聖人の意を得、万古易ふ可からざることを識る」とは、『四書集注』『易傳』『太極圖說』『二程全書』等の書を読むことによつて、從來徂徠學に對して疑問に感じていたものが、はつきりと分かつてきた。程朱の言は深く孔子の意を會得したものであり、昔から永久に変わるものではないということを認識したというのである。

また、尾藤二洲は『素養錄』の三二六条、三二七条で次のようにも述べている。

余の少きとき、未だ臧否を知らず。独り物氏（徂徠）の学を嗜み、その書を奉じて以て金科玉条となす。一旦恍然としてその非を悟るに及んで、何ぞ啻に愧悔するのみならんや。深く自ら吾れの不慧を知る。世間早慧の人は、想ふにかくの若く錯たざるならん。(三二六条)

余の既に悟るあるや、悔懼、置くなし。ここに於て一向内省し、略々外を非とし内を是とするの意あり。乃ち復た陸王の誤る所となること累年。墨を逃るれば必ず楊に帰す。時時、念つてこれに及び、未だ嘗て渙然として汗下らずんばあらず。(三二七条)

更に二洲には頼春風に宛てた次のような書簡がある。

今朝旧に依り、尊上に忽ち見借の『二程全書』を受け、手に信かせてこれを翻す。明道（程明道）先生の「定性説」に至り、沈潜反復、手の舞ひ足の踏むを知らざるなり。足下試みに来り叩け、我れ復た昨夜の尾藤生に非ず。近日、識と見と、自ら日に一步を進むるを覺ゆるも、今朝の進む所に至つては則ち啻に数歩のみならず。吁、恚愚にして早く宇宙有益の書の此の如き者あるを曉らず。拘々として数歳を末技に曠うす。今にしてこれを

惜むも、將たこれを如何せん。足下好才子、素より閩洛の正道たるを知れり。伏して願はくは、夙に力を実地に用ひ、它日、我と悔を同じうせざらんことを。謹んで忠告す。

春風は明和六年（一七六九）に上坂し、医学を修業して安永二年（一七七三）には竹原に帰って開業していた。この書簡は明和七、八年（一七七〇〜一七七二）の間のものと推定されている。茶山と西山拙齋が初めて出逢ったのも明和八年のことであり、このころ程朱の正学を鼓吹し、徂徠学を打破しようという主張が、大坂に於ける尾藤二洲や頼春水・春風兄弟を初めとして、同志の人々の間で活発に拡まつていた。

明和の初年京都に於ては、転向の魁をなして魯堂や拙齋が古文辞学から朱子学に転じている。やがて大坂に於て尾藤二州・頼春水・古賀精里・柴野栗山等が同調して朱子学を信奉するようになり、朱子学は江戸よりも京坂に於て盛んになり拡まつていった。

5、京都遊学五回目

五回目の京都遊学は、安永六年（一七七七・三十歳）ではないかと考える。そう考える資料として『師談録』と草稿『黄葉夕陽村舎詩』一（広島県立歴史博物館所蔵）の62番目に載せられている「河邊驛途中」と題する七言律詩を挙げる。

先ず『師談録』には次のように述べられている。

昔茶山生備後中庄農家。幼與羣兒牧牛山林。羣兒嬉戲無所不至。獨茶山手唐詩選、朗誦不已。遂從和田先生爲醫。余入先生門時、已茶山歸郷。

昔茶山は備後中庄の農家に生まる。幼にして羣兒と山林に牧牛す。羣兒嬉戲して至らざる所無し。獨り茶山

は唐詩選を手にして、朗誦^{ロウソウ}已^ままず。遂に和田先生に従ひて醫と爲る。余が先生の門に入りし時、已に茶山は郷に歸れり。

余とは土生玄碩^{げんすま}のことで、土生玄碩が和田泰純に医学を学んだのは、安永七年であった。その時茶山は既に郷里に帰っていたといふのである。即ち、安永七年に近い以前に茶山は遊学して和田泰純に学び、一段落して郷里に帰っていたといふのであろう。その年月を明らかにする資料は今のところ見当たらないが、同年に玄碩と入れ違ひになったのか、或いはその前年のことであつたのか、いずれにしても安永七年より数年も遡ることはないと考ええる。玄碩は茶山より十四歳年下であるから、学んだ時期はずれているが同門の士であり、郷里が近い事もあつて相識の間柄であつた。茶山の京都遊学最後となつた六度目は、安永九年（一七八〇）三十三歳の時であることは確實であるし、四度目までの上落も今までに述べてきた理由により証明できる。茶山が京都遊学をした回数^{回数}が六度であることは、『黄葉夕陽村舎詩』卷之一の「歳杪放歌」と題する詩の初め二句に「三十二年胡念念、單身千里六向東」（三十二年 胡ぞ念念^{なな}たる、單身千里六たび東に向かふ）によつて証明できる。五度目の京都遊学がいつであつたのか、今のところそれを断定する資料はないが、この『師談録』と次の七言律詩「河邊驛途中」によつて推量すると安永六年（一七七七）ではないかと考えられる。

〔師談録〕（『杏林叢書』第三輯所収）江戸末期の眼科医土生玄碩^{はげんすま}が口述したものを、門弟である水野慶善が筆記した書物。「土生玄碩」寶曆十二年（一七六二）安芸国高田郡吉田村の出生。家は代々眼科医。

河邊驛途中

前程千里幾関河 隱者征装即薛蘿
 驛路梅花春未半 池塘雁鴨晚偏多

前程は千里幾関河、隱者の征装 即ち薛蘿。
 驛路の梅花 春は未だ半ならず、池塘の雁鴨 晩に偏に多し。

離郷半日既羈思 沽酒三杯聊放歌 郷を離れて半日既に羈思あり、沽酒三杯 聊か放歌す。

愧殺青衿業未就 備公祠下五径過 愧殺す 青衿業は未だ就らず、備公の祠下 五たび径過す。

前途は千里 幾閼河、隠者の旅支度は 即ち薜蘿。

駅路の梅花 春は未だ半にもならず、池の堤の雁や鴨はやたらに多い。

故郷を離れて半日 既に旅心、酒を沽つて三杯 聊か放歌する。

愧ずかしいのは 学問を志して 業のいまだ就らず、備公の祠下を 五たび通り過ぎることだ。

〔河邊驛〕備中高梁川下流右岸。現在の岡山県真備町川辺。〔薜蘿〕葛で織つた粗末な衣服。隠者の服装。

〔青衿〕学生のこと。〔備公祠〕福山藩主の廟。

「驛路梅花春未半」（驛路の梅花 春は未だ半ならず）とあるから、春とは名のみはまだ寒い二月頃であろうか。尾聯に「五径過」（五たび径過す）とあるので、この作は五度目の遊学時の作であることは確実である。現在の所のこの詩が作られた年月は未詳である。

四度目の上落は安永元年（一七七二）であつて、翌二年の夏には西山拙齋・那波魯堂と共に茶山は洛西に遊んでいるので、安永元年・二年は続いて京都にいたものと考えられる。年表（『茶山詩五百首』昭和五十年八月、児島書店発行）によると安永三年（一七七四）の欄に「京都より神辺に帰る」（月日は分からない）とある。以上のことを総合して考えると、四度目の遊学は安永元年から安永三年までであつたと言える。

安永四年（一七七五）には九歳の藤井暮庵（備後国神辺川南村の庄屋の息子）を入門させているので、安永三年に帰郷した茶山が翌四年に上落したとは考え難い。安永五年（一七七六）二月二十九日には、竹原に帰郷する頼春水が神辺に立ち寄り、初めて茶山を訪ねている。安永七年（一七七八）二月には、西山拙齋が内田子明（備前国児島郡粒浦の医者）と神辺に茶山を訪ねている。このように見てくると、茶山は安永五年も安永七年も二月

には神辺にいたことになる。

安永六年の年表には何も記述がないことから、五度目の遊学は安永六年（一七七七）三十歳の時であったと考えられる。

6、京都遊学六回目

六回目の上洛は茶山にとって最後の京都遊学となった。安永九年（一七八〇）三十三歳の一月初めに郷里の神辺を発つて上洛し、五月二十日（もしくは二十一日）に帰着するまでの五か月になんなんとする遊学であった。この度の遊学は第五回までとは随分趣を異にするもので、交遊範囲は非常に広範囲なものとなり、浪華混沌社の盟友たちとの交遊は皆て類を見ない華麗なものであった。茶山はこの年を懐古して文政二年（二八一九）、七十二歳の時に執筆した「篠安道遺稿序」（『黄葉夕陽村舎文』巻三）に次のような文を載せている。

余屢東遊、勝會頗多。其最不能忘者、爲浪華混沌社。同盟三嶋子琴諸子、凡二十名。別有竹山兄弟及合麗王輩。其人則疊壁連珠、其文酒過從之盛、于花干月率無虛日。庚子之遊、頗與其筵。自謂、生與諸子同時、何幸如焉。

余屢ば東遊し、勝會頗る多し。其の最も忘る能はざるは、浪華の混沌社爲り。同盟は三嶋（篠崎安道）、子琴の諸子、凡そ二十名。別に竹山兄弟（中井竹山・履軒）及び合麗王（細合斗南）輩有り。其の人は則ち疊壁連珠、其の文酒過從の盛なる、花に月に率ね虚日無し。庚子（安永九年）の遊、頗りに其の筵に與る。自ら謂へらく、生まれて諸子と時を同じくす、何の幸かこれに如かん。

このように、茶山にとってこの最後の遊学は、終生忘れ得ぬ最も思い出多きものとなった。その内容は、『第二・北上日記』に具さに記されている。茶山自筆の『第二・北上日記』（稿本 縦二・三厘、

横一七・三種）一冊が神辺の菅家に残されているということである。また、『広島県史』近世資料編VIには活字化され、『北上日記』―『第二・北上日記』―と題して収められている。茶山自筆の日記には、第二『北上日記』とわざわざ肩書きに「第二」が付けられている。ということとは、第一『北上日記』なるものが存在したものと考えられる。それは上洛後から二月二十四日までの約一か月半余りの日記だったのではなからうか。勿論これは推測の域を出ないが。この間の記事は焼失したものが散佚してしまったものか、残念ながら現在は見ることができない。ともあれ『第二・北上日記』は上洛後一か月半以上も経った安永九年（一七八〇）二月二十五日に京都を発つて浪華に行くところから始まっている。それから五月二十日までの事柄が、一日も欠けることなく漢文で記されている。

ここで、『第二・北上日記』を見てゆく。

『第二・北上日記』の内容

『第二・北上日記』の内容は次のように分けることができる。

- ① 二月二十五日から三月三日 京都から浪華へ。
- ② 三月四日から四月二十七日 京都にて。
- ③ 四月二十八日から五月十二日 浪華にて。
- ④ 五月十二日から五月十六日 出港を待つ。
- ⑤ 五月十七日から五月二十日 帰途の舟中。

中でも③の四月下旬から半月になんなんとする五月中旬までの十数日間、茶山はその多くを頼春水の浪華江戸堀一丁目の青山社に宿泊し、浪華の地に別宅を築いた丹後の回船問屋小西伯熙の尽力と、混沌社友の厚意で連日連

夜詩酒徹逐の会に招かれ、筆舌に尽くし難い款待を受けている。その日々の様子が生き生きと描かれていて、壮気充実した茶山の面目躍如たるものを窺うことができる。安永二年に茶山が初対面の頼春水を介して初めて識った混沌詩社はその最盛期であり、この頃から茶山は混沌詩社の詞宗たちと交遊を結んでいたのであるが、ここに到ってそれは大変豪華なものとなっていた。第六回遊学について、上洛後から二月二十四日までの約一か月半余りについては窺い知ることができないが、『第二・北上日記』によってその大半の様子を知ることができるので表に纏め、幾日分かを書き下し文にして紹介する。

① 二月二十五日から三月三日 京都から浪華へ

この旅の目的は、茶山の弟子である同郷の藤枝得中を、頼春水の門下に入門させることと、自分を荒木商山に紹介してもらうことの二点がその主なものであったと思われるが、それ以外にも尾藤二洲やその他二、三訪ねた人があったようだ。

2・25	得中と浪華へ赴こうとしたが、雨晴定まらず旅路に上ることができない。七絶一首「竹田途上」を賦して得中に似す。
26	拙齋・一道師に送られ五条天神で雑劇を見、東本願寺の門前の酒店で飲んで別れ、得中と舟で淀川を下る。午後四時頃乗船。得中は熟睡するが、茶山は輾転として眠られない。七絶三首有り。
27	早朝、舟は西国橋の下に着く。竹屋久兵衛が「春水は茶山到着を待っていた。何度も使いを立てて見に来させていた」と言う。飯後、先づ春水宅に至り、得中を紹介し束脩を委ねる。
28	春水の紹介で元厚を案内役に荒木商山を訪う。春水は扇に詩を書き紹介状としてくれた。途中子琴に

	遭う。元厚の仲介で初対面し立ち話で別れる。商山宅に至り茶を振る舞われて外出し、所を案内される。飯・酒を馳走になり、三更まで詩の応酬をする。七絶二首有り。
29	風雨激しく留まれと商山は懇留するが、帰京の期日が迫っており固辞して退出。春水宅に還り、池田のこと、商山のこと、詩について語り合い乍ら午前四時頃まで談話。七絶一首有り。
30	中尾郡次を訪ねる。一士人が来ていて主人と対局していた。傍観して時を過ごしここに宿す。
3・1	初めて尾藤二洲を訪うが留守。弟の阿宗に会い茶菓を出され款談す。春水宅に還れば弟杏坪の「遊石稿」を示す。安永六年、父に従い石見国に遊んだ時の作。絶妙の作。七絶二首有り。
2	午後得中と古林立庵（医者）宅に恭庵（立庵の弟）を訪ね、談話少時、日已に午後四時頃、辞し高麗橋・浪華橋を経て還る。夜大融寺の後ろに火事有り。雨且つ風。火勢頗る烈し。
3	春水宅は賓客で雑踏している。顔見知りには赤松春庵くらい。盆栽の海棠が半ば開いて妖艶、春水は詩に詠めというが断る。子琴に会い論談時間を移す。夕方元厚を伴い舟で京都へ。

二月二十八日 余 商山を池田に訪ふ。千秋 桑田元厚に命じて導を爲す。且つ詩を摺扇に題して余に貽り以て介と爲す。其の詩に云ふ。

二月梅花落古津 吟筇將問李溪春
二月の梅花 古津に落つ、吟筇 將に問はんとす 李溪の春。

相逢合若舊相識 本是烟霞同病人
相逢ひて 合に舊相識の若し、本と是れ 烟霞 同病の人。

李溪 乃ち商山の別号と云ふ。午前路に上る。街上子琴と遇ふ。元厚 即ち余が名を通じ、傾蓋 少時にして出づ。

…商山の宅を叩き、千秋の貽る所の扇を出して以て介と爲す。乃ち坐を定めて茶を下す。語言少くして主人余を導き門を出でて地方を指点して云ふ。…談畢りて居に還る。既已に燭を点す。商山人と爲り沈重寡言にして、

談話 此くの如きは平生の罕に見る所なりと。余嘗て之を千秋に聞く有り。飯及び酒を命ず。余主人に請ひて勸韻し、遂に約せる千秋の扇面の韻に次ぐ。余二首を得たり。

高山席上同次千秋韻

久見詩名滿撰津 吾行豈止討芳春 久しく見る 詩名の撰津に滿つるを、吾が行 豈芳春を討めるに止まらんや。
 草前休説新知樂 十載魂交是故人 草前説くを休めよ 新知の樂しみを、十載の魂交 是れ故人。

② 三月四日から四月二十七日 京都にて

三月四日に浪華から京都に帰った茶山は、京都で常宿としていた俵屋善兵衛宅に一先ず落ち着き、中山子幹の勧めで西山拙齋と共に聖護院村の某氏宅に下宿する。そこを拠点として連日連夜、詩酒徹遂の限りを尽くす様子が書かれている。

<p>3・4 伏水の宿屋で朝食をとる。桃山の桃を見ようと御香宮<small>ニカウのみや</small>より高台に登る。酒を呼び喫烟し眺望に時を過ごす。藤森祠・稻荷・東福寺に過ぎり、午後俵善に還る。晩に子幹に至ると左仲が来飲していた。拙齋・子幹・左仲・元厚と共に知恩院・長楽寺に桜花を訪ねる。多稼亭で晩飯。午後十時頃 子幹宅に還る。良齋は遅れて皆の後を追ひ子幹宅で会えた。七絶二首有り。</p>	<p>5 雨で終日、子幹の宿で過ごす。</p>	<p>6 いったん俵屋に還る。晩に子幹の宿に行く。子幹は聖護院村の誰かの家に間借りをしていたらしく、自分と同じ宿に拙齋と茶山の部屋を借り、寢床まで準備して待っていてくれた。</p>	<p>7 拙齋・子幹・良齋と『周易』本義を会講しようとした所に珉川が来る。会講は取りやめ酒談数刻。風に</p>
---	-------------------------	--	---

								<p>桜の花びらが窓の隙間から舞い込む。珉川が詩を作り、茶山が次韻す。七絶一首。</p>
								<p>魯堂先生播州に帰省する。拙齋・子幹・茶山 大仏門前まで送る。還りに子幹が郷僧を智積院に訪う。</p>
								<p>拙齋と茶山もこれに従う。茶山七絶一首有り。帰途は三人で連句を作る。</p>
								<p>拙齋・子幹・珉川・元厚・見常・才助・春倫・茶山の八人、良齋の案内で白川王宮の山池を観る。良齋・拙齋・子幹・珉川・茶山の五人は更に白川村の地藏堂に行く。吟賞歎呼す。</p>
								<p>良齋は聖護院の使者として中御門院陵に赴き、更に拙齋と共に歌人の伴蒿蹊を訪う。茶山も元厚と共に附して行く。日暮れ五条に至り、清水に立ち寄ると桜花は今や真つ盛り。</p>
								<p>晴れ。茶山は珍しく終日家にて『周易』を読む。</p>
								<p>拙齋は西山に遊ぶ。茶山は和田泰純（茶山の医学の師）、横尾文助（肥前国の儒者）を訪問し、詩を論ず。晩、聖護院に還る。夜、良齋に呼ばれ子幹と共に行く。滕肅蔵が来て議論し夜に至る。</p>
								<p>曇っていて風もあつたが、午後は晴れた。子幹は智積院に行き、間もなく還つて来て自分の賦した詩を出し示して、茶山に次韻を求める。七絶一首有り。</p>
								<p>良齋・拙齋・子幹と上善寺の結会を観、閑臥菴に立ち寄り、什器書画を観ようとしたが、風雨烈しく展布できないと僧から断られ、茶店で食事をして還る。帰途連句三首、帰宅後二首。</p>
								<p>良齋が拙齋・子幹・茶山を招飲する。月の美しさに乗じ夜は花を吉田に尋ね真如堂前に至る。桜の花は数か所に真つ盛り。香氣が人を襲う。聯句二首あり。</p>
16								<p>拙齋・子幹・熊蔵（阿波の人）と錦里 順照寺で楽を聴く。途中「蕭疎雨後天」を分けて韻と爲し茶山は兩字を得て七絶一首を作る。順照寺を出るや袂を分かつ。子幹は智積院に行き、熊蔵は直ちに還る。拙齋と茶山は茂平氏に寄り、俵善に寄り、二条街で盆海棠を買つて還る。</p>

<p>17 午後雨が晴れたので良齋・拙齋・茶山の三人で知恩院・高台寺に花を訪ねる。竹酔館に立ち寄る。主は大酔して還つて来た。竹酔館で飲み帰途、珉川を訪ねるも不在。七絶一首を作る。</p>	<p>18 三人は朝寝坊する。良齋は嘲詩を寄せる。柳の馬場に行き俄の雷雨と雹に遭う。晩に僑居に還る。珉川。茶山は古詩一首を作る、韻は拈字。</p>	<p>19 「晴」とのみ記載。後は空白。(前日雷雨・雹に遭っているので風邪でも引いたのだろうか。)</p>	<p>20 子幹が茶山を連れて医師の田中新蔵(適所)を訪れ、病を診せしむ。昨日はやはり体調が芳しくなかつた様子。田中適所の門前には、診察を乞うて人が市をなしたと言われる程の名医。</p>	<p>21 雨が烈しいため外出はせず、良齋・拙齋・子幹・熊蔵・茶山の五人で『周易』を会講する。午後地震有り。俵善から使いの小僧に「紅魚(鯛)を届ける」という書をもたせて寄越すが、書だけ届いて「紅魚」は届かない。皆は狂歌を作りこれを詰<small>か</small>つて俵善へ返事とする。間もなく使いが「紅魚」を持って来たので、半分を膾にして皆で酒を飲む。</p>	<p>22 吉松淳甫が来訪。夜、良齋諸子と『易』を会講。拙齋と良齋は恐らく『易』の本文の解釈を巡って議論が合わなかつたらしく四更に至るも議論が定まらなかつた。酒を呼び良齋は宿す。</p>	<p>23 拙齋・子幹・熊蔵・茶山四人 真如堂に登り、善正寺に寄り秀頼の墓を拜み、鴨川畔の茶店で牡丹を観る。真如堂も善正寺も聖護院村から遠くない場所である。夜良齋が来訪する。</p>	<p>24 梁山と珉川が春篋亭に招飲するも拙齋は行かず。機嫌を損ねているらしい。日記は「子雅不往」の所に――線が施されている。茶山は子幹と行き、帰りに洗塵亭に寄る。後から良齋来る。</p>	<p>25 茶山は師の和田泰純を訪ねる。帰路、村瀬掃門(栲亭)を訪ね、珉川の僑居に寄り、一緒に多稼亭に上り酒飯す。残花を獅子谷(鹿ヶ谷)に訪ね、昏黒 聖護院に還る。</p>
---	---	---	---	---	---	---	--	--

26	大川老人（赤松滄洲）が来訪。杯酒論談。午後四時頃還る。山口子瑛（左近衛監右史生）が訪ねて来る。
28	富野仲達（医者）・田中深蔵（適所）・飯田玄泉を訪ね俵善で晚餐する。夜 和田泰純を訪ね午前二時頃まで論談し宿泊する。雷雨激し。
29	大川老人を訪ね、午後中山氏に還る。子瑛は美酒・好下物数品を携えて来る。且つ、拙齋・子幹・茶山に唐扇・唐筆・唐画扇を贈る。西徳元が偶々来訪する。酒杯を挙げる。
4・1	風見平吾の案内で拙齋・子幹・熊蔵・元厚・忠貞等と知恩院に行く。そこでオランダ人甲比丹イサーク・チチングに会う。
2	良齋宅に寄り『易』を講じて還る。夜 又行き、論談して午前四時頃に至る。とうとう拙齋と共に宿泊する。
3	午前、子幹氏に還る。午後四時頃、拙齋と共に吉田学室に杉村治部介を訪問する。晩 良齋を訪ね共に子幹氏に還り、午前四時頃まで談論する。
4	拙齋 長史と善光寺如来を廬山寺に観ようとしたが期限切れで叶わず。晩に長史宅にて紅魚を肴に飲む。偶々觀齋が来訪したので、重ねて酒樽を開き各々沈酔。拙齋と長史は眠る。茶山と觀齋は暫く話して退出した。午前二時頃、目が覚め眠られず。残酒を温める。朝餐して退く。
5	夜 良齋が来訪する。席上一緒に事を記し、少し飲んで午前二時頃に至る。
6	拙齋と共に赤松滄州を訪問するが不在。西松義一（吉松儀一郎のこと）を訪問する。晩になって雨。和田泰純を訪ね、俵屋に還って宿泊する。
7	吸海が来訪する。午後 郷里の人を案内し東寺で稻荷神会の神輿を観る。晩に吸海の僑居を訪問する。夜、子幹宅に還る。良齋が来訪する。夜になって雨になる。

<p>8 拙齋と一緒に滄州を訪ねるが不在。茶山は夜、郷人(牛海道士)を三条の宿屋に訪問し午後十時頃帰る。良齋を迎え記月魚(鮎)を膾にして飲む。拙齋は茂平宅に宿泊する。</p>	<p>9 梁山が来訪。酔って談論すること数刻。昼頃、良齋が来訪。午後一時から二時頃、珉川が来訪。午後三時から四時頃、拙齋が城中から還る(昨夜宿泊したので)。午後十時頃、梁山と珉川が帰ろうとしたので、留めんと詩を作り和して欲しいと頼む。互に和し茶山は七首を作る。</p> <p>10 晩に拙齋・子幹・忠貞と一緒に歩き偶々加茂廟に着く。祭の行事は未だ終わっていない。舞楽を観たり聴いたりして日暮れに還る。茶山下賀茂神社で七絶一首有り。『黄葉夕陽村舎』巻一所収。</p>	<p>11 良齋・子幹・拙齋・忠貞と貴船の鞍馬に行こうとした所へ、頼千秋が浪華より来訪。立ち話をし昼近く出発。小町寺で食事をして、楫取に酒を頼む。貴船に拝謁し魔王僧正祠を経て晩に多門堂に着く。(魔王)僧正像及び源予州(源義経)の遺物三種(甲冑・佩劍)を観る。門前の客舎で食事、夜中に聖護院(子幹宅)に還る。既に良齋宅で食事・入浴・飲んで還る。詩三首有り。</p>	<p>12 浪華歌人の有賀長収が拙齋を訪ねて来る。茶山に紹介される。晩に和田泰純を訪ね宿泊する。</p>	<p>13 午後、和田泰純宅より大雨の中を聖護院村に還る。良齋が来ていたので談論し夜半に至る。</p> <p>14 子幹が来訪する。送って南禅寺前の酒楼に行き、酔談して時を移す。珉川に遊び、晩に三条で別れる。暫く雷雨を陶舗に避けた後、奥田珉川の宿に至る。晴れるのを待って、晩に聖護院村に還る。良齋が亦た来訪。夜に子幹は大和屋某に往く。茶山は良齋と諸を丸太橋の塊りの茶店で待つ。間もなく子幹が帰って来たので、炙魚を聖護林酒亭で買って還る。酒を注文する。七絶一首有り。</p>	<p>15 拙齋が城中より至る。拙齋・良齋・子幹・梁山と燕子花を安井に観、画を七観音院に観る。晩に祇園社の近くの二軒茶屋に晩食をし、帰途奥田珉川を訪ねて還る。七絶一首有り。</p>
---	--	---	--	--	--

<p>16 魯堂先生が播州より戻る（三月八日に播州へ帰省していた）。晩に牛海道士（吸海）が来訪する。</p> <p>17 珉川・拙齋・子幹・良齋と共に肅藏を訪問する。飲酒の後、平安古宮殿、街市渚園・古瓦数十顆・古印譜・古錢譜、著書等を出して見せる。暮れ方還る。夜、子幹が論語第一章を説く。</p>	<p>18 観齋が款冬（蔞）と醃齋（塩漬け野菜）を送って来る。昼、魯堂先生に会って還る。桜町帝の佩する所の口及び聖護王が幼時に用いていた檜扇を拝見する。午後、魯堂先生に避つて飲む。晩に依善が訪ねて来る。夜、依屋に行き宿泊する。</p>	<p>19 依屋で、山根将監が清の女流画人、馬笏（早くに寡婦になり苦節を守る）の描いた「羣動含英図」を出して見せる。花卉数十品、虫魚数十種、それぞれ生氣躍動しているのに感動する。</p>	<p>20 魯堂先生及び諸君子に観せようと含英図を借り聖護院村の子幹宅に還る。晩に拙齋・子幹と共に畠中観齋を訪問する。夜、子幹宅に行く。良齋が来訪する。</p>	<p>21 雨の中を雑務法印が子雅を訪ねて来る。夜、良齋が来訪する。</p>	<p>22 観齋が送別の意味で烟袋を贈る（茶山が数日後に京都を去る予定）。吉松潤甫・富埜仲達を訪問。午後、良齋に招かれ拙齋・子幹・梁山と共に行く。近江の萬木生と出遭う。月湖の売画十二幅有り。良齋が客に各々二幅ずつ買わせる。暗所に置き一摸索で取ることにする。七絶一首。</p>	<p>23 午後、拙齋・子幹と共に山口子瑛を訪問。一緒に鴨林に遊び旗亭で飲む。夜十時頃、聖護院村の子幹宅に還る。良齋がいて夜明け方まで話す。今枝某が皮弁、緇布冠、明道巾、東坡巾を送ってくれる。江州の平紀宗が詩を寄せる。義仲寺に題した茶山の詩に和したものである。</p>	<p>24 肅藏、告別に観齋を訪ねるも不在。魯堂先生が拙齋と茶山を招飲する。夜、吉松が送別に来る。良齋も亦たやつて来て論談し、夜明け方になる。</p>
--	---	---	--	--	---	--	---

<p>25 珉川が送別に来る。席上七律二首有り。魯堂先生より阿州の索麴・轆子を賜わる。良斎は烟袋・海錯數種を贖る。子幹は朱子學的を贖り、春倫は烟袋を贖る。午後魯堂に謁す。良斎・世古・杉浦を僑舎に訪問し告別する。晩に聖護院を発す。魯堂先生・良斎・子幹・逸甫・才助・熊蔵・春倫・求馬等が送別してくれる。二条東野で熊蔵・才助と別れる。小西・珉川に過り告別しようとしたが不在。魯堂先生は拙齋と茶山を守夜神廟まで送り別れる。三条橋の西塊で春倫・求馬と別れる。蕭寺街で逸甫と別れ、柳馬街で茶山は俵善に還り、拙齋は万屋に還る。良斎・子幹従う。夜和田泰純を訪ねる。主人・子幹を將て出て万屋に至り離杯酬献す。「留別二首」と題して良斎と子幹に送った七律二首有り。後者は『黄葉夕陽村舎』卷一所収。</p>	<p>26 冨埜仲達・飯田玄泉・橋屋伊兵衛と告別する。伊兵衛の案内で楽岩兵衛に行き告別する。餞別に紀国のカダメ及び挿剔牙篋袋を贖られる。昼、俵屋に還る。主人は茶山と拙齋の爲に盤饌を設けてくれる。晩に等叔の草廬を訪ねて告別する。夜、和田泰純を訪ね、夜中十二時頃に俵善氏に還る。春倫が来たが(子幹の使い)茶山は不在で遇えず。</p>	<p>27 慌ただしく晩に出発。書店の長兵衛が送って四条錦天神に来る。拙齋と忠貞が始めて来る。冲安正来る。大仏門前にて俵善と別れる。夜、伏見の宿に至り午後十時頃、舟に上る。冲安正は小山侯の臣なので、そのついで舟を船着き場の役人に頼む。お陰で通常の日のように舟の雑客は混み合っていない。同舟の者は象戯を善くする者 兵嘉、阿波の藍商某の凡そ八人。</p>
---	--	---

三月四日 伏水の逆旅に飯し、行きて桃山の消息を問はんとなす。御香宮自り入り菟台に登観す。烟靄縹渺、風日妍煦、酒を呼び喫烟し、吟眺して時を移す。二絶句を賦し、所見を記す。藤森祠自り、出でて稲荷に謁し、東福寺に過りて、午後、俵善氏に至る。晩中山子幹の僑居に至る。会ま小西左仲来飲し、遂に子雅・子幹・佐中

及び元厚と同一に桜花を知恩院及び長樂寺に訪ぬ。既にして小西と別れ、多稼亭に晩飯す。二更子幹氏に還る。此の日良斎・子雅諸子と同一に花を訪ねんことを約せしが、故を以て後れ余輩を教処に跡へども得ず。此に始めて至り、談話少時。

桃林

桃花万頃曝朝暎 夾路紅雲屨袖暎 桃花 万頃 朝暎に曝す、夾路 紅雲 屨袖 暎し。

時見松岡連竹町 翠煙區別幾仙源 時に見る 松岡 連竹の町、翠煙 區別 幾仙源。

四月二十二日 寛斎来別し、烟袋を贖る。言ひ及びて吉松潤甫 富整仲達を訪ぬ。午後 良斎の招きに応じ、子雅・子幹・小西と同一に往く。近江の万木生と邂逅す。坐に月湖の売畫十二幅有り。良斎 客をして各の二幅を買はしむ。中に牡丹あり。最も妙なり。客皆之を欲す。或は云ふ。詩速かなる者 之を取らんと。或は云ふ。酒戸大なる者と。喧争して時を移す。万木生曰く、請ふ 諸を暗処に置きて、一模索に随はん。衆曰く、善しと。余乃ち詩を賦す。

良斎席上即事

宴酣觴政幾回新 畫幅爭探花鳥春 宴 酣にして 觴政 幾回か新たなる、畫幅 争ひ探る 花鳥の春。

何用暗中模索去 牡丹本屬好詩人 何ぞ用ひん 暗中模索の去を、牡丹 本より屬す 好詩人。

客 各の次韻す。饗飲して三更に至る。万木・小西 將に辞さんとし、遂に画を暗処に移す。二子、帰路 稍遠きを以て先ず探り取り、展べ看ずして去る。余次に之を摸し、出して潜かに紙背を燈下に曝せば、則ち牡丹なり。衆皆余が暗裏に之を開きて看しことを疑ふ。笑ひ紛然、酒已に闌にして、主人 子雅と周易文言の天徳の義を論ず。晚（暁？）に至りて還る。

右良斎

<p>5・1 古林立菴を訪問する。昼食後、尾藤二洲を訪う。著す所の『素餐録』『正学指掌』『中庸図解』を示さ</p>	<p>30 僧 居敬が諸子を長柄の光明寺に招く。子琴・安道・伯熙に往くことを勧められる。吸海と春水が出舟の用意をして迎え、居敬も出迎え、片北海・曾之唯・細合達・僧文桂等 混沌社の詩人たちがいて盛宴であつた。韻に覃を得る。七律二首、七絶二首有り。</p>	<p>29 玉江橋に子琴を訪ねるが不在。元厚に子琴を探させる。小西伯熙(丹後の人)の僑居に探し当て訪ねて行く。主人と子琴が喜び迎える。筱安道もいた。酒宴を催して夜中十二時頃になる。主人の韻に次ぐ。七律一首有り。夜中十二時頃 竹屋に還り宿泊する。</p>	<p>4・28 午前八時頃 八軒楼(大坂)の下に到着。竹屋で朝食をすませて、午前中に春水を江戸堀北一丁目の青山社を訪ねる。森源三郎に遇う。春水宅に宿泊。晩は雨になつた。</p>
---	--	--	--

萍水清歡綠鴨涯 鷗盟重問舊襟期
夢回深夜還行樂 客散殘尊始舉眉
身世原供天下笑 狂愚幸遇一人知
青山白水隨黎杖 此去酣歌好共誰
三更二子諸れと柳の馬街に別れ、此の夜 俵屋に宿す。

③ 四月二十八日から五月十二日 浪華にて
帰郷の途中浪華に寄り、混沌詩社の人々と詩酒徵逐の限りを尽くす様子が書かれている。
西山拙齋は、まだ暫く京都に残つたらしく、四月二十八日以後、五月十一日迄は名前が出て来ない。五月十二日に帰郷の船に乗る時は一緒だったようだ。

萍水清歡 綠鴨の涯、鷗盟 重ねて問ふ 舊襟の期。
夢 回りにて 深夜 還行樂し、客 散じて 殘尊 始めて眉を擧ぐ。
身世 原と供す 天下の笑ひ、狂愚 幸ひに遇ふ 一人の知。
青山 白水 黎杖に隨ふ、此を去りて 酣歌 好し 誰と共にかせん。

れる。中尾郡治を訪ねたが不在だった。春水宅に還る。夜、子琴が訪ねて来る。	<p>2 午後 子琴を訪う。篠安道を迎え小酌する。僧文桂と銀竹山人も来訪する。分韻して侵を得る。午後十時頃、春水宅に還り宿泊する。七律一首有り。古林益菴を訪ね酒を酌み交わし時を移す。伯熙を訪ねるが不在。夜 春水宅に還り宿泊する。夜 伯熙と一緒に散歩して鶺鴒子を聞く。伯熙と共に安道を訪ねるが不在だったので、更に子琴を訪ね、明日の舟遊を約束する。七絶一首有り。</p>	<p>5 伯熙は舟を命じて諸子と茶山を招く。子琴・安道・春水・重憲（今井子原）・曾之唯（曾谷學川）・萱猶太郎（熊本藩儒、萱野錢塘）等 混沌社の詩人たちと舟で木津の麦婆亭に到る。合達（細谷張庵）が後れて到着。韻を分ちて雲字を得る。七律一首、七絶一首有り。〔黄葉夕陽村舎』卷一〕</p>	<p>6 春水・子琴・伯熙・子原と田子明（田中鳴門）を訪問。韻を分ちて称字を得る。七律一首有り。</p>	<p>7 伯熙を訪ね七絶各二首を作り子琴に寄せる。子琴・安道・伯熙と夕麗亭（北郊の眞言寺の中にある）に遊ぶ。佳境である。伯熙 酒肴を携えて来たが杯を忘れていた。そこで池中の新荷を把り碧筩杯<small>へんとうばい</small>として酒を飲む。「新荷爲得碧筩杯」を分韻して爲字を得る。七律一首有り</p>	<p>8 今井子原（浪華の人）・伯熙と共に 安道宅に立ち寄る。更に子琴を迎える。分韻して春字を得る。七律一首有り。</p>	<p>9 伯熙が 諸子（田子明・岡公翼・子原・安道・子琴）を水明楼に招飲し、茶山の餞別をしてくれる。分韻して夜字を得る。夜十時頃、烈しい雨を衝いて 春水宅に還る。古詩一首有り。</p>	<p>10 今井子原が招いて送別の酒宴を設けてくれる。子琴・安道・伯熙・春水・尚太郎等と往く。韻に寒字を得る。古詩一首有り〔黄葉夕陽村舎』卷一所収〕。</p>	<p>11 伯熙を訪問し少し飲んで、晩に中尾郡次を訪ねて宿泊する。</p>
--------------------------------------	---	---	--	---	---	--	---	---------------------------------------

12 古林立菴を訪問、二洲を訪ね留談す。話は天徳解に及ぶ。竹屋に帰ると「広右衛門の北堂が（茶山の遠

縁の人）京に遊び、今は浪華の某家に在り」という報書有り。桑田元厚と一緒に行く。日暮れて帰る。

伯熙が茶山の爲に棧船を構して待つ。春水・子琴・拙齋（帰郷を茶山と共にする爲に前日あたり京都から帰つて来たらしい）・得中・元厚と船に乗り詩酒飲を尽くす。夜半に別れる。伯熙歌舞す。拙齋・茶山は西帰の船に乗り子琴と諸人は帰る。七絶一首有り。

五月五日 陰、伯熙舟を命じて諸子及び余を招く。子琴・安道・千秋・重憲・萱猶太郎同に舟にて木津の麦婆亭に至る。曾之唯・合達 後れて至る。韻を分ちて雲字を得たり。

五日麦婆亭集分得雲字

蘭舟出郭遠塵紛 兩岸芦芽緑払雲 蘭舟郭を出でて塵紛に遠ざかり、兩岸芦芽緑雲を払ふ。

此地端陽無疑渡 閑遊好逐白鷗羣 此地地端陽渡ること疑ひ無し、閑遊好みて逐ふ白鷗の羣。

五月七日 晴、伯熙を訪ね同に七絶各二首を作り子琴に寄す。

寄子琴

雨晴佳景滿前汀 叵耐沈吟坐小庭 雨晴れて佳景前汀に滿ち、耐へ回くして沈吟小庭に坐す。

將欲吹簫遊赤壁 不然載酒過玄亭 將に簫を吹き赤壁に遊ばんと欲す、然らずんば酒を載せて玄亭に過らん。

遂に子琴安道伯熙と共に夕麗亭に遊ぶ。亭は北郊の真言寺中に在り。佳境なり。「得新荷爲杯」字を分韻して余爲字を得たり。伯熙酒肴を携へしが、具中杯無し。乃ち池中の新荷を把りて碧筩杯と爲す。

五月十二日 古林立菴を訪ね、又尾藤志尹を訪ねて、留談して時を移す。天徳解に及ぶ。晡に竹屋に帰り、俵善の報書を得たり。云ふ。広右衛門の北堂京に遊び、数日にして去る。今は浪華の某家に在りと。遂て元厚と往き

て見る。帰れば則ち暮る。会たまま小西伯熙 棧船を横し余を是に餞おくらんとして待つこと久し。千秋・子琴・子雅・得中・元厚と同一之に乗り、詩酒 飲を尽くす。

雲捲烟消月浸江 江波十里白銀鎔 雲捲き 烟消えて 月は江に浸る、江波 十里 白銀を鎔とかす。

醉悲船檻看江月 人在蟾宮第幾重 醉悲 船檻 江月を見る、人は蟾宮せんまゆうに在りて、第幾重。

夜半にして別る。伯熙 歌ひ且つ起ちて舞ふ。子雅及び余 船に就き、子琴・諸人帰る。

④ 五月十三日から十六日 出港を待つ

五月十二日夜、帰郷の途に着くべく乗船するが天候悪しく十六日まで足止め。舟を拠点として、浪華の地をあちこち巡り歩いたり、知人を訪ねたりする様子が描かれている。

<p>5・13 晴れたが船は風に阻まれ、出港できない。拙齋・小十（小野忠貞）と蜆子川より五百羅漢に至り、王博士（王仁）の遺蹤を大仁村に尋ねる。亭に入り麦飯と酒を注文。酔って仮眠。夕麗亭に寄り野田春日祠で休憩。蛭子祠から野田新家に至り大堤に上る。十曾川の下流。堤の上から南渡口に至る。川は三叉。舟で南岸に着き堤の上から安治川に還る。晩船に就いて眠る。</p>	<p>14 今日も晴れているが風はやはり西から吹いてくるので舟は出港しない。晩に拙齋と一緒に九島院蘭洲師を訪ねる。</p>	<p>15 舟 出発せず。春水を訪ねると子琴も居た。午後 桑田元厚・藤枝得中と篠安道を訪ね子琴宅に行く。留飲し晩に至る。子琴 二印を鐫<small>ほ</small>り餞別とする。子琴は前日 舟を命じて罍師<small>あみし</small>を雇い、安道と元厚・得中を伴い、茶山を安治川に探したが遇うことができなかつたと言う。沈酔し飲を尽くす。元厚・得中 安治</p>
--	---	--

川まで送る。此の夜雨風甚く船は出港しない。七律二首有り。	<p>16 晴、風悪く岸に上る。拙齋・楚^二右衛門・項伯・忠貞・僧の某と北神明祠にて演劇を観る。晩に拙齋・茶山は春水を介して中井子慶（中井竹山）を訪ねる。夜中十二時頃還つて、船で宿泊する。得中・元厚・恭庵は舟津橋で別れる。恭庵に和歌有り。</p>
------------------------------	---

⑤ 五月十七日から二十日 帰途の舟中

帰途 船中から眺めた風景や船中の様子が書かれている。

<p>5・17 晴、夜明け 風は順風になったので舟は出港した。詩作して子琴を憶う。「舟中寄子琴」と題して七絶四首、古詩一首有り。『黄葉夕陽村舎』巻一に所収。</p>	<p>18 暁 絵島の北畔に至る。小雨で錨を下し風を避ける。午前中 雨有るを恐れ舟は坂越湾に収む。拙齋・忠貞及び同舟者五名と岸に上る。ぶらぶら歩き大避祠、妙□寺に至る。或る医人の家に寄り大川老人の安否を訪ねる。ともに蕎麦麵と酒を命じる。晩舟に乗り、書及び詩を作り大川老人に寄せる。風で船は坂越に宿泊する。</p>	<p>19 朝 船は帆を上げる。昼時小豆島北畔に至る。猫を下し守風す。夕映えが極めて優美（月光に煌めく播磨灘の景色は忘れ難く、四十年後、追懐して五古に賦す）。酒を長年に乞い温めて飲んで臥す。</p>	<p>20 早起きすると舟は已に日比浦に在った。更に帆を開く。忠重（忠貞）が画扇を出して題してほしいと需める。五絶一首を記す。 舟中^{（マツ）}</p>
--	--	---	---

五月十九日 晨あした開帆す。午時 小豆島北畔に至る。猫を下して風を守る。是の日 晚霞極めて奇なり。紅瀾こうらん金鏃きんせき 数万頃の間間に絢爛けんらんたり。小豆は即ち虫明湾の南、虫明は曙色海日あけぼのうみひを以て著はる。子雅 曾て再び之を觀たりと云ふ。今日の晚霞 曙色の一斑を窺ふべし。夜 二更に至り 月 小豆島の山上に上り、銀波灑激えんぱ、亦舟中の奇觀なり。初更月 未だ上らず。大白星 海底に映じ、波光を揺るがして、統陸つうこく連珠の如し。散乱して流螢に似たり。酒を長年に乞ひ 温めて飲みて臥す。

第二『北上日記』はここで終わっている。「舟中」と書きかけたままの中途半端な終わり方であるが、この後は散佚してしまったものか、ここで止めてしまったものか今のところ分らない。二十日に舟は「日比浦に在った」と書かれている。日比浦は現在の岡山県玉野市の海側だから、舟はその日の夕方か二十一日の午前中には、備後国鞆の浦に到着したものと考えられる。

ともあれ、最後となった第六回の遊学は、安永九年一月初めから五月下旬までの五か月になんなんとする長期間であった。その前半である二月二十四日までの動静について、現在のところ詳しく検証する縁もないことは残念であるが、後半については幸い『第二・北上日記』によって詳しく知ることができた。

交友と交遊

『第二・北上日記』に登場する人物は八十人の多きにのぼる。西山拙齋とはこの度の遊学の間中、茶山と殆ど行動を共にしている。中山子幹（佐渡の豪農の出生で、医業を学び、のち京都に出て那波魯堂の指導を受け、魯堂の聖護院村の塾の執事となった）・佐々木良齋（聖護院王府の長史）・奥田岷川（那波魯堂の弟 大坂の儒者奥田尚齋らしい）らは拙齋に次いで多く交遊の機会を持っている。次に交遊の多いのは混沌社の葛子琴（茶山より九才年長、頼春水とは近い所に住居を構え、医者であった）・頼春水・小西伯照（茶山と同年、丹後国の儒官、家

業は廻船問屋、混沌社の盟友・篠安道（茶山より十一才年長、四十才で大坂の儒者となる。性豪爽、書をよくし騎馬をよくして武人にも遜らなかつた）らが挙げられる。

二月二十六日 同郷の藤枝得中を頼春水に入門させるべく伏見から舟で淀川を下り、翌早朝 西国橋の下に着いた茶山は、早速得中を春水に入門させ、次の日は桑田元厚（茶山より九歳年下、備後国蘆田郡福田村の出身）の導きで春水から紹介を受けた荒木商山を池田に訪う。中尾郡次（未詳）・尾藤二洲（伊豫國の人、幕府の聖堂付儒者、古賀精里・柴野栗山と共に寛政の三博士といわれた人）・古林恭庵・益庵・立庵（恭庵・益庵・立庵は古林一族で大坂の名医）を訪ね、赤松春庵（大坂の儒医）に会い、葛子琴に初めて対面して意義有る一週間を過ごし、三月三日薄暮、舟で淀川を遡り四日朝 伏見に帰着した。

四月四日から二十七日までは京都で過ごす。この間 日記に登場した人は四十数名。拙齋・子幹・良齋・珉川・伯熙・元厚・俵善（京都での常宿の主人、俵屋善兵衛）等とは連日といつてよいほど会っている。師の那波魯堂・和田泰純（東郭）ともしばしば会う機会を持っている。その他 主だった人を列挙してみると忠貞・寛齋・左仲・得仲・子瑛・淳甫・吸海萬茂・春倫・肅藏・仲達等である。その人たちとどのような交遊を持ったのであろうか。四日早朝 伏見に着くや旅館で朝食をとり、早速桃山の桃を見に出掛けた。御香宮神社から高台に登り、藤森祠・稲荷神社・東福寺に参詣し俵善に帰った。その晩は拙齋・子幹・左仲・元厚らと知恩院・長楽寺に夜桜見物に出掛け良齋だけが故あって遅れて来た。疲れを知らない驚くべき行動力である。六日には聖護院村の某家を借りている子幹が、茶山と拙齋の為に同じ家の一間を借りてくれた。それで三人は何かにつけて行動が一緒になる。良齋、岷川らも負けず劣らずしばしば行動に加わっている。知恩院や高台寺に夜桜見物、牡丹が咲けば鴨川畔の茶店に、藤や燕子花が咲けば安井へ、躑躅が盛りになると清水寺へと足を向け、白河王宮（山池を観る）・勝軍地

藏堂（花見）・高台寺（桜花を訪ねる）・智積院（郷僧を訪ね、詩を作る）・知恩院（諸殿仮山を観る・桜花を観る）
 ・清水寺（桜を観る・躑躅の花見）・順照寺（樂を聴く）・上善寺（結会を観る）・真如堂・善正寺（秀頼の墓を拝す）
 ・雙林寺（立ち寄る）・廬山寺（善光寺如来を観んとするも期限切れ）
 ・東寺（吸海を伴い稻荷神会神輿を観る）
 ・加茂廟（樂を聴き札を観る）
 ・貴船の魔王僧正祠・多門堂（僧正像及源予州遺物を観る）
 ・七観音院（樂を観る）
 など神社仏閣あるいはそれに類する所をたびたび訪れ、そういう時は拙齋・子幹・良齋・珉川・熊藏・元厚・忠貞・左仲・見常・才助・春倫等の中の誰かが数名ずつ入れ替わり立ち替わり共に行動をするのであった。
 又その時は酒飯を伴うのが常である。『周易』会講の後では酒を呼び、紅魚（鯛の異称）や鮎が届いた、蒨や塩漬け野菜が届いたと言つては酒にし、人を訪ねたり訪ねられたりすれば飲んで旧を語り、論談し、詩を作ると言つた調子で三日と空かず酒が登場する日々であつた。

四月二十八日から五月十二日まで浪華で過ごす。ここに登場する人物は二十八名。帰郷の途中に立ち寄つた浪華であつたが、ここで茶山は混沌詩社の人々から終生忘れることのできない歓待を受け、深い繋がりを持つことになる。殊に伯照は混沌社友と連携を取つて日ごと茶山の接待に努めた。主として詩酒の会である。ある時は自宅であつたり、又ある時は酒楼であつたりした。居敬こまぎ主催なま長柄ながへの光明寺での詩酒の会（舟で蘆荻の間を廻り寺に至る。居敬は真宗浄立寺の住持で外学に富み、詩文をよくした）。伯照主催、木津の麦婆亭での詩酒の会。田中鳴門主催、私宅での詩酒の会。（田中鳴門は混沌社友の中では最も長老でこの年は五十九歳）。伯照は自宅でも詩酒の会を持つている。伯照が主催して夕麗亭（北野太融寺境内）で詩酒の宴が持たれた。子原（大坂の人、住居は春水と近かつた）は私宅に招いて酒宴を設ける。伯照主催の茶山送別の詩会は水明楼で持たれた。伯照は楼船を艤装し自ら接待して送別の宴を設けた。最後には伯照自ら立つて舞い、送る者送られる者それぞれに名残り

は尽きず、その宴は夜半まで続いた。

浪華での十数日間はこうして晴雨に関わらず、ある時は私宅で、又ある時は酒樓で一日も欠かさず詩酒の会が開かれた。集まった人の主な者は混沌詩社の盟主片山北海（茶山より二十五才年長、越後国新潟の人）は言わずもがな、春水・子琴・安道・子原・立庵・益庵・二洲・居敬・牛海（茶山と同年、真言宗三寶院派の修験者、備後国福山の人）・文桂・鳴門・曾之唯・張庵・錢塘（熊本藩儒）・岡公翼（浪華の医者、詩をよくする）等である。

五月十三日から十六日まで、風が逆風であるため出港できず陸に上がり、五百羅漢・大仁村を訪ね夕麗亭・野田祠・蛭子祠を巡る。九島院蘭洲（九島院十三代住職）や春水を訪う。北神明祠（演劇を観る）に行く。中井竹山を訪ねる。行動を共にしたのは拙齋・得中・元厚・楚右衛門・項伯・忠貞・僧の某であった。十七日晴れ風も順風になり船は出港した。茶山は子琴を思つて詩を作る。十八日暁 絵島の北畔に至ると小雨になり坂越湾に守風したので、陸に上がり大避祠・妙口寺を訪ねる。一医人を訪ね大川老人の安否を尋ねる。この日行動を共にしたのは拙齋・忠貞・同舟の者五名。廿日、忠貞が画扇を出し題してほしいと需める。日記は「舟中」と書きかけたまま終わっている。ここで筆を置いてしまったものか、後は散佚してしまつたものか、今のところ尋ねる縁もない。

安永九年（一七八〇）正月早々に上洛した茶山は、京都では西山拙齋・中山子幹・佐々木良齋・奥田岷川等、主として同門の人たちと常に行動を共にし、師である那波魯堂や和田泰純をしばしば訪ね、畠中寛齋・田中適所・藤蕭藏・伴高蹊等をも相識り、浪華では主として頼春水宅に宿泊し、葛子琴・小西伯照・篠安道ら混沌社の盟友たちと交遊、詩酒徵逐の限りを尽くし、片山北海・荒木商山・田中鳴門・尾藤二洲・曾谷學川・中井竹山・岡公翼などを識り、八十名の多数に上る儒者・文人・僧侶・雅人ら広範圍の階層の人たちと親交を結んで交友を広めた。『春水遺稿』巻十一に「余 浪華に在りて文墨の交り乏しからず。其の人の詩社 混沌と號す（略）。言ひて

曰く、遊びには必ず文あるべし。遊びて文有らざるは遊び無きに如かず。故に其れ相會し集へば輒ち必ず詩を賦す。其の詩 晴雨寒暄、人事曲折、寫實を主と爲す」と述べられているし、一方茶山は佐賀の古賀穀堂（古賀精里の長子、藩校弘道館の教授）に宛てた書簡の中で、「（詩は）実事を述べ、實際を写し、前人の聲こゑに倣はず、時世の粧を学ばずして、乃ち始めて偽詩に非ずと爲すなり」と述べている。このことから混沌社友の文学（詩）に対する精神と、茶山のそれとがびったり一致していたことが窺える。それ故に青・壮年期の意気盛んな精神は相共鳴して、壮気充実した五か月になんなんとする日々を送ったのである。この頃から茶山の声名は京坂のみならず全国的に広まっていたし、この交わりは茶山にとって終生忘れ難いものとなった。

文政二年（一八一九）七十二歳のときに、誰かが描いた「野泊圖」を見た茶山は、四十年以前の安永九年五月十九日（最後となった六回目の京都遊学を終えて帰郷する途中）の夜、浪華からの帰途、小豆島の北岸に停泊した船から眺めた播磨灘の風景を思い出し、「題野泊圖」と題して五十八句の五言古詩を詠んでいる。

安永庚子夏 歸船自三津 安永庚子の夏、歸船三津自りす。

夜碇播洋西 南对小豆山 夜播洋の西に碇し、南は小豆山に對す。

山頭正吐月 金波接遙天 山頭正に月を吐き、金波遙天に接す。

同濟客滿倉 舢睡頗覺喧 同濟客倉に滿ち、舢睡頗る喧なるを覺ゆ。

と詠い出し、一人の客と暫く月の妍なるを賞しているところへ船頭がやって来て、「昨日、鰯川の宿を出るとき、宿の主が酒を一樽くれたが、我々は皆下戸で飲めないから、お客さんに飲んで貰い旅の憂さを晴らして貰いたい」と言つて酒をくれた。二人は酒の味の良し悪しなど問題にもせず盃を酌み交わしていると、もう一人の客が出て来て自分も仲間に入れて欲しいという。行李を開いて肴になるような物を見つけ出し、盃を重ねているうちに興

最も盛んになり、三人とも酔っぱらって、互いに枕藉し（縦横に重なり合つて寝る）月は既に残月になつてしまつたことさえ省みもしなかつた。

今日看此園 舊境宛目前 今日此の園を看れば、舊境 宛ら目前にあり。

題詩記其狀 嗟老願我身 詩を題して其の狀を記し、老を嗟きて我が身を願ひみる。

會宴歡漸減 行遊意亦闌 會宴の歡漸く減じ、行遊の意亦闌ふ。

奇遇不可追 茫茫四十年 奇遇追ふべからず、茫茫たり 四十年。

「今、この面を見ていると、恰も四十年前の帰郷の途中で、小豆島の北岸に停泊した船から眺めた、播磨灘の月の美しかった風景を思い出すと同時に、船頭から貰つた酒で酔っぱらつたあのときの狀が、ありありと目前に蘇つて来る」「茫茫 四十年」遙か遠く四十年も昔のことであるなあと詠じながら、さながら昨日のことのように思い懐かしんでいるのである。

また、茶山最晩年の文政十年（一八二七）八十歳の五月以降の作（茶山はこの年八月十三日歿）と思われる、二十二句から成る五言古詩「讀舊詩卷」（舊詩卷を讀む）がある。この詩は『黄葉夕陽村舍詩』遺稿卷七の最後から四番目に収められている。茶山は恐らくこれが最後の病床になるかも知れないという思いがあつたのだろう。自分の一生を振り返つて忘れ難い雅友交歡の思い出を詠んだ詩である。

老來歡娛少 長日消得難 老來 歡娛少なく、長日 消すを得難し。

偶憶強壯日 時把舊詩看 偶ま 強壯の日を憶ひ、時に舊詩を把りて看る。

大盡心恍惚 亦可想當年 大盡は 心恍惚なれども、亦當年を想ふべし。

欣戚如再經 病懷稍且寬 欣戚 再び經るが如く、病懷 稍且く寛かなり。

「老いて来ると楽しみは少なくなり、長い一日をもて余す。思いついて若く元氣だつた頃を追懐し、昔作つた詩

などを読み返してみる。大年寄り（大蓋）の頭は薄ぼんやりしてはいるが、まだその頃のことを思い出すことができる。歎びも悲しみ（欣戚）も再び蘇って来て、病気の苦しみも幾分寛やかになるように思える」と詠い出して、「醉花墨川隄」（花に酔ふ墨川の隄）と続け、下に「冢木王、伊蘭軒看花墨水」（冢木王、伊蘭軒と花を墨水に看る）と注記している。文化元年（一八〇四）茶山は五十七歳のとき、藩主阿部正精に命じられて、一月二十一日に神辺を発ち江戸に出府した。帰郷したのはその年の十一月五日であったが、三月には江戸の詩友たちと墨田川の土手で花見をした。これはそのときのことを懐かしく思い出して詠んだものである。

次に十年遡つて（年代順に並べたのではなく、思い出すままに詠んだのか、それとも春の花見、秋の月見と並べたのか）茶山四十七歳の寛政六年（一七九四）巨椋が池に舟を浮かべて、蠣崎波響や六如上人と中秋の月見を愉しみながら詩を作ったこと（このときの茶山の詩、七言絶句三首が前編巻四に有り、後編巻八に回想の詩もある）を、「吟月掠湖船」（月に吟ず掠湖の船）と詠い、次に「又手温生捷」（手を又く温生の捷）と詠み、「葛子琴敏捷、每詩驚人」（葛子琴は敏捷にして、詩毎に人を驚かす）と注記している。この葛子琴（混沌社の一員）とは最後の遊学となつた安永九年、京都・浪華にて頻繁に交遊を持つている。子琴は腕を拱くや忽ち一詩を為すほど、詩を作ることに敏捷であつた。「温生」とは中唐の大詩人、温庭筠のことである。「凡そ八たび手を又きて、八韻成る」といわれ、人々から「温八又」と称されたほどの人で、子琴をその人に準えたのである。次には茶山の友人で書の大家である倉成龍渚を、唐代の呉の人で書の達人である張旭に準えて詠っている。そうして、「此等常在胸、其状更宛然」（此等は常に胸に在り、其の状、更に宛然たり）と墨堤の桜、掠湖の月、詩友の葛子琴、書家の倉成龍渚を懐かしく思い出している。この詩を詠んだのが五月か又は六月頃であるらしい。そうすると茶山はこの詩を詠んだ二か月か、三か月後には亡くなるのである。

以上のことから、遊学最後となつた安永九年初頭から五か月に亘る交遊は、茶山の生涯のうち、いかに実り多

く思い出多いものであったかを察することができると。同門の拙齋・子幹・良齋・岷川は勿論、混沌社の春水は言うまでもなく、子琴・伯熙・安道・北海・商山・鳴門・二洲・學川・竹山・公翼らは文字通り終生の友として、それぞれに深い関わりを持つこととなった。

二、神辺帰郷

茶山が京都遊学を終えて郷里神辺に帰ったのは、安永九年（一七八〇）五月下旬、三十三歳のときであった。帰郷後、暫くの間は動静は分かっているが、六度目の京都遊学を終えたばかりの若い茶山には、このまま神辺で生活の設計をたてるべきかどうか、まだ何かやり残していることがあるのではなからうか、という迷いが幾分あったのではあるまいか。『黄葉夕陽村舎詩』巻一には、他の巻には見られない、そういった心の揺れの窺える詩が見られる。

山居

聖朝恩澤及山居	垂釣溪流食有魚	聖朝の恩澤	山居に及び、釣を溪流に垂れて	食ふに魚有り。
白眼誰憐狂阮籍	清貧依舊病相如	白眼誰か憐れまん	狂阮籍、清貧、舊に依る	病相如。 <small>しやうじよ</small>
林風颯颯年華老	世事營營我願疎	林風颯颯として	年華老い、世事營營として	我が願ひ疎なり。
猶見兩都諸學士	偏將佔畢養名譽	猶 <small>なほ</small> 見る	兩都の諸學士、偏 <small>ひとへ</small> に佔畢 <small>せんひつ</small> を將 <small>も</small> ちて名譽を養ふを。	

「今上天皇のお恵みはこの山村にまで及び、釣り糸を溪流に垂れて魚を食する事もできる。世を白眼視する狂阮籍のような私を誰が理解してくれようか、清貧で病気がちな所は昔の司馬相如に似ている。林風は颯々と吹き年月ばかりが過ぎて行き、日常の多忙に私の志すところは成就しそうにもない。やはり気になるのは京都や江戸

の儒学者達のこと、ただ上つ面の学問で世評を得ることはかり気にしている。」

「我願疎」とは具体的にはどういふことを指すのであろうか。それは定かではないが尾聯の「兩都の諸学士の上つ面ばかりで、内容を伴わない学問をして名譽ばかりを気にしている」ような輩のことが茶山には気に入らないようだ。学問の方面のことで自分にはまだ何か為すべきことがあるのではなからうかというのであろう。自分がすべき道とは上つ面の学問を正して、正当な学問の道に戻すことである。この時代、三都に出て学ぶ者は昌平鬢の教授になることが夢であつた。若い茶山も一時期そんな夢を抱いたのではあるまいか。

狂痴

狂痴背世少交遊

心跡伶俚十五秋

狂痴世に背きて交遊少なく、心跡伶俚十五秋。

坐上桑龜曾屢驗

夢中蕉鹿欲何求

坐上の桑龜曾屢ば驗し、夢中の蕉鹿何くにか求めんと欲す。

空林月黒鷓鴣嘯

古戍烟荒枳棘稠

空林月黒くして鷓鴣嘯き、古戍烟荒れて枳棘稠し。

推枕殘更温濁酒

沈燈一穗照人愁

枕を推して殘更濁酒を温むれば、沈燈一穗人の愁を照らす。

〔蕉鹿〕人生の得失の儚い喩え。

「常識外れの変人で世間に背を向けて付き合ひも少なく、ふらふらと彷徨うこと十五年。常日頃の放言が禍を引き起こすこと過去に数え切れない、夢には屢々見る理想を現実の何処に求めたらよいのか。もの寂しい林では月も雲に隠れ鼻が不気味な鳴き声を立て、古い若は炊飯の煙も上らず枳や茨が鬱蒼と茂っている。枕を押し除けまだ夜明け前なのに濁酒を温めて飲む、ほの暗いひとつの燈火が、愁いに閉ざされた私を照らし出す。」

明和三年（一七六六）十九歳で一回目の京都遊学してから十五年（十五秋）が経つたというのだから、この詩は郷里に帰ることに気持ちを決めた安永九年三十三歳のときに詠んだものであろう。帰郷することに気持ちを決めたが、理想とする目標にはまだ到達していない。

茶山の「理想とする目標」とは何だったのであろうか。今の世の中は「月は黒く鷓鴣が嘯く」といった情勢だ。「鷓鴣」はふくろうで、奸佞な人の譬えとして用いられている。つまり、世の中を皎々と照らすはずの月も雲に隠されたような情勢で、世の中は暗く奸佞な人たちに牛耳られている。また、「枳棘」は「からたち」と「茨」でどちらも刺があり、人を誹る者に喩えて、人々の生活は荒んで人を誹る者が横行しているというのである。そういった世の中だから、藩儒にでもなつて実際に政治の道に携わり、世の中を正して行く道を選ぶべきではないかと、心が揺れているのではなからうか。当時、三都で学ぶ人の多くは藩儒として仕官することを夢見ていた。

時情

時情終與此心違 磋爾緇塵澆素衣

時情終に此の心と違ひ、磋爾緇塵の素衣を澆すを。

六世三公君莫羨 一生幾屐我將歸

六世三公君羨む莫れ、一生幾屐なる我將に歸らんとす。

威權百歲猶軍府 川岳千重自帝畿

威權百歲猶軍府、川岳千重自ら帝畿。

獨坐孤亭聽夜雨 春風應長故山薇

獨り坐して孤亭に夜雨を聽けば、春風應に長ずべし故山の薇。

「現今の世の情勢は、私の理想とする世情とは違い、俗事のために心が汚されるのは嘆かわしいことだ。六世三公の繁榮ぶりを君羨みなさるな、一生のうちどれほどの下駄を履くというのか。私は故郷に帰ろう。武家の権威は百年経った今もなお続いている。川や山が幾重にも取り巻く京都は天子の支配する都であるはずなのに。独り離れて家に坐りじつと雨の音を傾けていると、今頃は春風に延びているだろう故郷の蕨が頻りに思われる。」というのであるが、故郷に帰ってしまうことにまだきっぱりと踏ん切りはつかない。しかし、やはりそうしようかと自分で自分を納得させようとしているのである。

秋半 六首 (三)

憑欄閑閱史 陽虎正專權

欄に憑りて閑かに史を閱すれば、陽虎正に專權。

孤悶向誰告 壯心空自憐

孤悶 誰に向かひてか告げん、壯心 空しく自ら憐む。

浮雲生大野 平楚接長天

浮雲 大野に生じ、平楚 長天に接す。

関子何爲者 將歸汶上田

関子 何爲る者ぞ、將に汶上の田に歸せん。

「史書をひもとくと魯国の陽虎は何と専横暴を極めた奴であることよ。我が国にも似たような輩が居るが、誰に告げたらよからうか。私の盛んな志気をもつてしてもどうしようもないと自分を空しく憐れむばかり。浮雲は平原に湧き出て、平坦な落葉灌木の林は地平線にまで接している。中国二十四孝の一人に挙げられている関子など何だというのか（私などはそれ以上だ）。田舎に帰って親孝行でもしよう。」というのである。

いろいろと悩んだ揚句、茶山は郷里神辺に帰ることに気持ちを決めたようだが、まだ何分かは京に未練が残っている。これらの詩を通してそういった心の揺れが感じられる。

この年、安永九年（一七八〇）五月下旬に帰郷した茶山は、その年の暮れには結婚をしている。これは親孝行の一環であったのだろう。翌年の天明元年（一七八一）三十四歳で茶山は塾「黄葉夕陽村舎」を開設した。京都遊学を志したきっかけが「風俗の乱れの夥しい故郷を何とか正常な姿にしたい。その為には教化の力で若者を導くのが最善の方法だ」と悟ったことにある。それを貫こうと再度気持ちを新たにしたこと、自分が京でやり残したこと、理想を抱きながら実現し得なかったこと、盛んな志気を發揮できなかったことなどの諸々を、一つ一つ実現させてゆこうとして、そういう夢を塾を開くことに託したのではあるまいか。

茶山は四十九歳の時、塾「黄葉夕陽村舎」の存続を考えて、藩の「郷塾」として取り立てて貰いたい旨を書簡（「郷塾取立に関する書簡」『広島県史』近世資料編VI）をもって願ひ出た。その中に自分が塾を設立したのは神辺の地に僅かでも「学種」（学問の種）を残したいと考えたからである。その種は「たとひ一郷一国をてらすことあたわずとも、これまたすこしのたねにて、いくつの挑燈にもなるへきに候へハ」それはやがて「国々にミチ」

てゆくことになるだろう。(当今) 武ハ講する人国々にミち、文ハ日々枯々になり行候へハ一髪一糸^三にても引きと、め度存候志ハ、わか大日本国へ露計の忠にてハ無之候や」と思うからであると述べている。茶山は京都遊学を終えるに当たって、自分がこれまで身につけて来た学問をこれからの若者に伝えよう。それはやがて日本の国の役に立つに違いないと考えたのであろう。

第二節 郷里神辺の時期

最後の京都遊学を終えて、安永九年(一七八〇)三十三歳の五月下旬に、郷里神辺に帰ってきた茶山は、その年の暮れに結婚して、翌年には塾「黄葉夕陽村舎」を開設している。この塾は十数年間続いたが、寛政八年(一七九六)四十九歳の時、「福山藩の郷塾として頂きたい」と願い出て認可され、「黄葉夕陽村舎」を「廉塾」と改称した。

ここでは十数年間の「黄葉夕陽村舎」の時期を、茶山はどのように過ごしたかについて、塾を設立した動機、その名前の由来、この時期の交遊関係、福山藩との関わり、この期間の長期の旅等について検討する。

一、塾「黄葉夕陽村舎」の時期

1、塾「黄葉夕陽村舎」設立

(1) 塾設立の動機

安永九年（一七八〇）三十三歳、五月下旬、最後の京都遊学から神辺に帰ってきた時期の茶山の動静については詳らかにしないが、『富士川游著作集』第八卷、「菅茶山先生の医説」の中に「学成りて郷に還り、医を業として大に行はる。：茶山先生はともかくも始め医家として世に立つて居られた人である。ある年盡までは現に刀圭を執て居られたのである」と述べている。又、広瀬蒙齋（奥州白河の人）が寛政八年（一七九六）十一月二十九日、「黄葉夕陽村舎」を訪ねたとき『有方祿』に「神邊驛訪菅茶山。翁、不欲仕宦、以醫隱伏村巷」（神邊驛に菅茶山を訪ふ。翁、仕宦を欲せず、醫を以て村巷に隱伏す）と書いている。茶山自身も「郷塾取立に関する書簡」の中で「先医と申すおもてむきにいたし、故書をよみ候か、遠慮にもなひやふに候」と述べている。当時の神辺は風俗が乱れ、学問に明け暮れる人を「馬鹿よ阿呆よ」と嘲笑する風潮であったが、茶山は表向き医を業としていたので、故書を読むことに専念していても遠慮しなくて済んだというのである。以上のことから茶山は郷里に帰って暫くの間は医業に携わっていたものと考えられる。

また併せて神辺の大庄屋の息子、藤井暮庵や近隣の子弟に経書などの学問を教えていたらしい。暮庵を弟子として迎えたのは安永四年（一七七五）、茶山が二十八歳のときで暮庵は九歳であった。茶山にとっては最初の弟子である。『藤井暮庵自記年譜』に「安永四年乙未六月三日（九歳）此歳菅先生の門に入りて教えを受く、手習は西

尾屋秀藏の門に入る」とある。「郷塾取立に関する書簡」の中で茶山は「弊弟・土晦（暮庵）などもよみ、其外すこしつゝ雅趣ニむかひ候人も出来、只今の二十、三十位の人ニハはくちうち候少年も無之候」と述べている部分があるが「自分の弟（恥庵）や藤井士晦なども少しずつ雅趣に向かうようになり、今の二十から三十代の若者は博打を打つ者はなくなつた」と言うのである。当時の社会情勢を「さてまた昇平二百年、在々処々に鋤鋏取らぬ人、城市に算をせぬ人、肆頭に坐せずしてすむ人も少なからず、其間何をしてくらし候事や、この学種さへ有之候ハ、数人の後に聞く人世をさとし候人出生すまじきや、上は茶香、中は猿樂、下は賭博にてこの昇平を過し候も口おしき次第ならずや」と述べている。世の中が穏やかに治まつて二百年、農村や都市に於る人々の生活には閑暇が生じたが、上等なところで茶香、中程で猿樂、下は賭博に遊ぶ日暮らしでは何とも残念なことだと言ひ、風俗教化は学問によつて左右されるものだという自らの体験から、人々の暮らしに暇がある今こそ志あるものを読書に導く好機会だと考え、塾を開くことに思い至つたものであらう。

また茶山は安永九年の冬、内海爲と結婚して新しい家庭生活に入つた。この頃に結婚したことは、天明元年（一七八一）一月二十五日、西山拙齋に宛てた書簡によつて知ることができる。茶山が塾「黄葉夕陽村舎」を開いた時期は年表によると、その翌年の天明元年（一七八一）三十四歳の時であつた。それを確定する資料がないことは残念だが、この結婚を機に私塾を開いて生涯の生活基盤を築こうとしたのも一つの動機であつたのではあるまいか。

（2）塾名の由来

塾は邸宅の東北を流れる高屋川の堤に沿つた竹林の下に建てられ、そこから眺められる黄葉山に沈む夕陽が美しいところからその塾の名を「黄葉夕陽村舎」と名づけ、舎背から茶白山が眺められるところから茶山と号した。

頼山陽は「茶山先生行状」の中で

既歸、委家事於其弟、而益讀書、教授村童。後就其家東北、河堤竹林下、築村塾、帶流種樹。對面之山名黃葉。因曰黃葉夕陽村舍。舍背隔野望連阜。有茶白山。因自號茶山。

既にして歸るや、家事を其の弟に委ねて、益す書を讀み、村童を教授す。後、其の家の東北、河堤竹林の下に就きて、村塾を築き、流れを帶び樹を種う。對面の山、黃葉と名づく。因りて黃葉夕陽村舍と曰ふ。舍背野を隔てて連阜を望む。茶白山有り。因りて自ら茶山と號す。

と述べている。

又、広瀬蒙齋（奥州白河の人、柴野栗山に学び、終生松平定信に仕えた）が寛政八年十一月二十九日、黃葉夕陽村舍を訪ねたとき『有方祿』に次のように記している。

神邊驛訪菅茶山。翁、不欲仕宦、以醫隱伏村巷。風流温雅、關西盛稱詩名。其宅在坊南、別莊在坊北。號曰黃葉夕陽村舍。邑南有黃葉山。且緣古詩語名焉。：

神邊驛に菅茶山を訪ふ。翁、仕宦を欲せず、醫を以て村巷に隱伏す。風流温雅、關西にて盛んに詩名を稱す。其の宅は坊南に在り、別莊は坊北に在り。號して黃葉夕陽村舍と曰ふ。邑南に黃葉山有り。且つ古詩の語に緣りて焉に名づく。：

黃葉山の辺りを詠んだ七言絶句が『黃葉夕陽村舍詩』前編卷五に「神邊驛」と題して収められている。それは次のような詩である。

神邊驛

黃葉山前古郡城 空濠荒驛半榛荆
 一區蔬圃羽柴館 數戸村烟毛利營

黃葉山前 古の郡城、空濠 荒驛 半ば榛荆。
 一區の蔬圃は羽柴の館、數戸の村烟は毛利の營。

黄葉山の前方は昔の城趾であり、壕は今は空っぽで、昔の宿駅は荒れ果て半分は草ぼうぼう。

一区画の野菜畑は羽柴の館のあったところで、数軒の家の煙が立っている辺りは毛利の陣営があった。

「羽柴館」や「毛利營」は茶臼山の下の方にあつて、両雄はここで対峙したということだ。

2、「黄葉夕陽村舎」時期の交遊

茶山の京都遊学中、特に最後の遊学となった第六回目は、大坂混沌社の盟友たち多数との交遊で、それは非常に広範囲なものとなり、以後の茶山の生涯に大きく影響するところとなった。帰郷後「黄葉夕陽村舎」の時期（天明元年一七八一〜寛政八年一七九六）の交遊について見ると、三備（備前・備中・備後）を中心としての交遊が多くなるが、やがてその名は世に広く知れるところとなり、文人・墨客が全国各地から「黄葉夕陽村舎」を訪れるようになった。また、この頃茶山は長期の旅もしているので、旅先で知り合った人も多く、交友範囲は益々広がっていった。大まかに数えたところでも百数十名にのぼる。特に目につくのは、僧侶・儒者・医者が多いことである。中でも終生変わらぬ深い情宜で結ばれた人に、西山拙齋・頼春水・頼杏坪・道光上人・姫井桃源・大原呑響等を挙げることができる。この時期の交遊については表に纏めて後に載せる。

西山拙齋

天明四年（一七八四）閏一月二十三日、茶山（三十七歳）は鴨方に拙齋を訪ねる。その後を追うて道光上人が二十四日に出雲から鴨方に来る。また、岡山から姫井桃源が鴨方を訪れる。四人は鴨方で詩酒徵逐の日を過ごした。二十八日、茶山は道光上人を伴って神辺に帰る。それを拙齋と桃源が天草の池辺りまで送った。

三月十七日には拙齋が神辺を訪れ、まだ逗留していた道光上人と三人で数日に亘って詩酒徵逐の日々を送る（備後史談「第十五卷、一・二・三號に記事有り」）。この度は、道光上人が上方に旅立つという送別の意味もあって、拙齋は鴨方から出て来たのである。

十八日 夕方三人で「黄葉夕陽村舎」付近を散策しながら聯句を作った。

歩出柴門去 歩して柴門を出でて去けば 道光

林垆已落暉 林垆已に落暉 拙齋

雲容含別意 雲容 別意を含み 茶山

山態發吟機 山態 吟機を發す 道光

驅犢牧雞走 犢を驅つて 牧雞走り 拙齋

驚人雉子飛 人に驚きて 雉子飛ぶ 茶山

餘光分一水 餘光 一水を分かち 道光

淡靄鎖孤磯 淡靄 孤磯を鎖す 拙齋

結社心無雜 社を結びて 心に雜無し 茶山

賞音世所希 賞音 世に希とする所 道光

莫忘方外契 忘るる莫れ 方外の契り 拙齋

三處月依依 三處 月は 依依たり 茶山

「林垆」郊野。「牧雞」牧童。「結社」同嗜同好の士の親しい会合。「賞音」風流韻事を解する、又はそういう人。「方外」浮き世の外。世俗を超越した世界。

十九日 道光上人は神辺を辞して上方へ向かった。茶山と拙齋は鶴橋まで見送り、三人はこの日も道すがら聯句

を作った。

雉雖朝風破 雉な雖なきて朝風破れ 茶山

鳩呼旭日生 鳩呼ひびて旭日生ず 拙齋

東書辭竹屋 書を束たねて竹屋を辭し 道光

挂席向京城 席を挂かけて京城に向かふ 茶山

柳送春風色 柳は送る春風の色 拙齋

山傳晨磬聲 山は傳つたふ晨磬しんけいの聲 晉寶

鴈程應計日 鴈程ま應まに日を計るべし 拙齋

鷗渚自欣晴 鷗渚おうしよ自おのづから晴を欣よろこぶ 道光

此會何時是 此の會何れの時は是なる 茶山

臨岐奈別情 岐いに臨まみて別情いを奈いせん 道光

「竹屋」庭に竹の植えてある書院。「晨磬」寺院から聞こえてくる磬を打つ音。「晉寶」茶山の末弟恥庵。恥庵は天明二年（一七八二）十五歳の十月十四日に西山拙齋の門弟となった。この時は師である拙齋に連れて来られていたのである。「鷗渚」鷗のいる水際。

茶山と拙齋は道光上人を送る詩を一首ずつ作っている。

茶山の詩は「横尾送道光上人」と題して『黄葉夕陽村舍詩』前編卷二に収められている。

猫兒山畔鳥聲愁 鶴子橋邊柳色稠 猫兒べうじ山畔鳥聲愁くわくし、鶴子橋邊柳色稠おほ。

送者不如橋下水 隨君直到綠篁洲 送者は如ごとかず橋下かの水、君きみに隨まひて直ただちに到いたる綠篁洲。

「猫兒山の麓は鳥の鳴き声も愁いを含んでいる。鶴子橋の辺りは柳がよく茂っている。送る私たちは橋の下をさ

らさら流れる水のように足が進まない。それでもあなたについて歩いてみると、もう箕島についてしまった」といのである。

〔猫見山〕神辺の「碓山」のことで「猫」は「錨」に通じる。〔緑箕洲〕蘆田川の河口の箕島。

また、拙齋は「十九日送道光師于鶴橋」（十九日 道光師を鶴橋に送る）と題して、次の五言絶句を作った。

晨步送雲衲 暫憩鶴子橋 晨歩 雲衲を送り、暫く憩ふ 鶴子橋。

橋頭楊柳色 轉使別思撩 橋頭 楊柳の色、轉た 別思をして撩れしむ。

朝早く道光上人を送って暫く鶴子橋で休んだ。橋畔の楊柳の色は別れの情を搔き乱す。

〔雲衲〕雲水のこと、ここは道光上人を指す。

拙齋はなお数日留まる。

二十日 拙齋・恥庵・茶山は下御領村の国分寺を訪ねる。住職如實上人と茶山はかねてより親交があり懇意の間

柄であった。（「備後史談」第一巻、六號・第九巻、十一號・「福山志料」巻之十四に記事有り）

二十二日 拙齋・晉寶（恥庵）・茶山の三人は神辺の光蓮寺に鳳靈上人（茶山の古くからの詩友）を訪ね文字の遊戯に興ずる。その一部を紹介すれば次のような遊びである。

「十一寸爲寺、得日成時、得牛成特。何關寺事」（十一寸寺と爲り、日を得て時と成り、牛を得て特と成る。何ぞ寺の事に關せん）と拙齋が作れば、茶山は、

「八十八爲米、得茲成 糍、得羔成糕。自適米用」（八十八米と爲り、茲を得て 糍と成り、 羔を得て 糕と成る。自ら米の用に適ふ）と茶山が作る。更に晉寶は次のように作った。

「十八公爲松、得艸成菘。得山成崧 皆非松類」（十八公 松と爲り、艸を得て 菘と成り、山を得て 崧と成る。

皆松の類に非ず）〔菘〕白菜。〔崧〕たかな。

二十四日 拙齋は「黄葉夕陽村舎」に一週間居て鴨方に帰る。拙齋は別れに臨み次の七言絶句一首を詠んで茶山に贈った。

寓懷

川南川北探餘花 日日逢迎醉紫霞 川南川北餘花を探る、日日逢迎して紫霞に酔ふ。

羨爾平生無俗累 交遊強半是僧家 爾を羨む平生俗累の無きを、交遊強半是れ僧家。

「神辺の川南村や川北村に残花を尋ね、毎日々々人を出迎えてはもてなし紫霞に酔う生活、茶山の平素の交遊の過半数が、俗人を離れた僧侶等であることが羨ましい」と拙齋は言うのである。この度の交遊も道光上人を始めとして、如實上人・鳳靈上人などの僧侶であった。

以後も拙齋とはほとんど毎月のように出会い、多い時は一か月にも及ぶ交遊で、その様子は枚挙に暇ないほどである。ここでは、天明四年の三月十七日から一週間の主だったものを紹介するに留めた。後は表にして掲げる。

頼春水

頼春水（二七四六〜一八一六）は天明元年（一七八一）十二月十七日、三十六歳にして安芸浅野藩三十人扶持儒官となり広島に移住した。この頃から春水は藩命により、広島と江戸の間を往復することが頻繁になったので、山陽道を通る時は必ず神辺や鴨方に寄り道をした。『在津紀事』下一七三に、

歸省往反、歴訪知舊。一宵之話、瀝瀉肝膈。亦自可樂。又持陳諸膝下、資其承歡焉。若岡元齡兄弟西山士雅吉田孔夷、或一過之。若昔禮卿、往反必過之。以其家在官道也。但士雅留余尤甚。以余匆忙、目爲流民。余則往反有期。不得緩一日。士雅乃從容率其門生、送余數里、別後就其近地、遊覽山水、留連數日、或經旬餘云。

歸省の往反、知舊を歴訪す。一宵の話に、肝膈を瀝瀉す。亦た自ら樂しむべし。又持して語を膝下に陳べ、

其の承歡に資す。岡元齡兄弟・西山士雅・吉田孔夷の若きは、或いは一たび之に過ぎる。昔禮卿の若きは、往反必ず之に過る。其の家官道に在るを以てなり。但だ士雅余を留むること尤も甚だし。余の匆忙なるを以て、目して流民と爲す。余は則ち往反期有り。一日を緩うするを得ず。士雅乃ち從容として其の門生を率ゐて、余を送ること数里、別後其の近地に就きて、山水を遊覽し、留連數日、或いは旬餘を経ると云ふと述べている。

春水は、芸藩の儒官となつて前年の暮れに單身広島に帰つていたので、大坂に残した妻子を迎えに行く途中、天明二年（一七八一）四月九日に神辺に寄つた。以下『春水日記』に拠る。

九日晴。發尾道：投神邊禮卿。

晴れ。尾道を發す。：神邊の禮卿（茶山）に投ず。

十日雨。禮卿送余、與俱上途。雨又甚。笠岡にて、胡屋平藏立寄。晡後、到鴨方西山氏。

雨。禮卿余を送り、與に俱に途に上る。雨又甚し。笠岡にて、胡屋平藏に立ち寄る。晡後、鴨方の西山

氏（拙齋）に到る。〔胡屋平藏〕茶山の義弟、河田平藏。

十一日晴。士雅・禮卿皆送。玉島、藤枝元旋立寄。宿上成繁屋和助。

晴れ。士雅（拙齋）・禮卿皆送る。玉島、藤枝元旋に立ち寄る。上成の繁屋和助に宿す。

十二日與士雅別。禮卿携元厚相送。到倉敷。過岡惣右衛門、酒食之饗應有之。郊外一里ニシテ別。宿藤井驛。

士雅と別る。禮卿元厚を携へて相送る。倉敷に到る。岡惣右衛門（鶴江）に過ぎり、酒食の饗應之れ有

り。郊外一里ニシテ別る。藤井驛に宿す。

十六日早朝、大坂に入る。：

『春水日記』にあるように春水は、四月十六日に大坂に帰つた。それから帰広の仕度を調べ、五月二十日

に妻子を連れて海路で広島へ帰ろうとしたが、風雨が続いて出港できず、五月二十八日に、又、單身陸路により広島に帰った。その帰途、神辺に立ち寄った。『春水日記』に次のようにある。

六月四日 神邊二宿。禮卿・廣右相饗。夜分、海道士來ル。

神邊二宿す。禮卿・廣右相饗す。夜分、海道士來ル。

〔廣右〕本荘屋菅波家の縁者で江原廣右衛門。〔海道士〕尾道の牛海道士。

五日 禮卿兄弟同道ニテ、尾道へ行き、勝島嘉藤太舟遊、到賀島而宿。

禮卿兄弟同道ニテ、尾道へ行き、勝島嘉藤太と舟遊びし、賀島に到りて宿す。

〔禮卿兄弟〕茶山と弟の恥庵。〔勝島嘉藤太〕勝島敬仲、尾道の人。伊藤東所に師事して古義学を学ぶ。

詩文もよくする。『藝備風土記』十卷を著す。

六日 賀島遊覽。回舟送禮卿兄弟於松永、而抵尾道、命輿過三原・本郷到竹原。

賀島遊覽。舟を回らし禮卿兄弟を松永に送りて、尾道に抵り、輿を命じて三原・本郷を過ぎ竹原に到る。

『在津紀事』にも記しているように、こうして春水は西帰の往復には必ず「黄葉夕陽村舎」を訪ね、茶山と共に鴨方に拙齋を訪ね、時日の許す限り交遊を持った。

茶山は天明八年（一七八八）六月五日から七月六日までの一か月間、宮島の管弦祭見物の目的を兼ねて安芸地方を旅した。この旅の途中、六月十日から十日余り春水一家と親密な交遊を持っている。茶山と頼山陽との初対面もこの時であった。（この時のことについては「四旅 1 『遊藝日記』」のところで紹介する。）

茶山と春水との関わりについては、第二章第一節「茶山と春水」のところで詳しく触れるのでここでは以上にとどめる。

道光上人

道光上人（一七四六〜一八二九）、名は謙、字は道光、諱は日謙。日蓮宗の詩僧。延享三年大坂に生まれる。俗姓は日野。幼くして京都の本圀（国）寺の日領上人について修行し、早くから宗乘に通じていたと言われる。深草の元政上人に深く私淑するところがあつた。やがて出雲の国平田の日蓮宗報恩寺の住職となつたが行つてみると小さなみすばらしい寺であつた。道光はそれを意に介することなく、数年間住職を務め、その職を他に譲つてからも、その寺の側に庵を結んで、「聽松庵」と名付けそこで生活した。詩文についても嗜みが深く、詩は大坂で細合斗南（合麗王）に学び、晩年に至るまで京坂・山陽・出雲の国をしばしば往復し、京都では六如上人・村瀬栲亭等と交友し、芸備にも度々足を運んで、茶山・拙齋・勝島敬伸等と交遊している。道光上人の『聽松庵詩鈔』の序文は茶山が書いているが、その書き出しで

初道光卜人、介吸海道人、尋余草堂。爾後、北遊南詢、蹤跡飄然、會離雖無常、音耗則不絶、五十年一日也。
初め道光卜人、吸海道人を介して、余を草堂に尋ぬ。爾後、北遊南詢、蹤跡飄然として、會離無常とし雖も、音耗則ち絶えず、五十年一日也。

と述べている。

道光上人が初めて「黄葉夕陽村舎」に茶山を訪ねたのはいつだったのだろうか。道光上人は後日この日のことを追想して次の詩を作っている。

七月十五夜懷普先生 七月十五夜 普先生を懷かしむ

芙蓉池面印清規 獨對秋光多所思 芙蓉池面清規を印す、獨り秋光に對して思ふ所多し。

西福曾遊君記否 中元既月與填詩 西福の曾遊君記するや否や、中元月を既びて與に填詩せしを。

蓮の花が池の面に寺の生活の規律を表している、私は獨り秋の光の中でいろいろな思いに耽っている。

百福寺での管での遊びをあなたは覚えていますか、七月十五日月に対して一緒に填詩などしたことを。

〔清規〕禪宗の寺院生活の規律。〔西福〕神辺川北村の西福寺。

更に『黄葉夕陽村舎詩』巻之二に「七月十六日同道光上人登遍照寺途中」（七月十六日 道光上人と同に遍照寺に登る途中）と題する次の詩が収められている。

黄昏尋寺入松柏 雲濕衣杉水鳴履 黄昏 寺を尋ね 松柏に入る、雲は衣杉を濕して 水は履に鳴る。

不有月光能引人 何知臥虎是奇石 月光の能く人を引くに有らずんば、何ぞ知らん 臥虎は是れ奇石なるを。

黄昏の頃に寺を尋ねて松や柏の生えた山道に入る、雲は着物を湿らせ足下では谷川の流れが音を立てている。能く人を引きつける月光がなかったならば、なんて見分けられよう 臥虎のようなものが奇石であると。

〔遍照寺〕黄龍山遍照寺で、備後国深安郡中條村にある真言宗の寺。住職は茶山と同時代の大空上人である。詩に巧みで茶山との交わりも深く、茶山はしばしばこの寺を訪ねて、二人で詩作に耽ったりしている。

この詩は、天明三年の作詩が載せられている所に収められている。又、道光上人の名前が見えるのは此の詩が初めてであるので、道光上人と茶山が初めて出会ったのは天明三年、上人が三十八歳、茶山が三十六歳の時であったと推定できる。以後、道光上人は拙齋を伴って屢々「黄葉夕陽村舎」を訪ねた。時には詩会に参加したり、茶山や拙齋と共に寺や詩友を訪ねたりした。また花を愛で月を賞するなど交遊を重ねている。

頼杏坪

頼杏坪（一七五六～一八三四）、名は惟柔ただなご、字は千祺、号は初め春草、後に杏坪きょうへいと改めた。通称は萬四郎、芸国竹原の出身。長兄に春水（千秋）、仲兄に春風があり三兄弟であった。安永九年、二十五歳のとき大坂に出て、私塾を開いていた春水の元で片山北海、葛子琴など混沌社の詩友と交わった。天明元年、春水が芸藩儒者となつ

て広島に赴任した翌年、自分も広島に移り住んだ。天明三年秋、春水が藩侯浅野重晟の世子齊賢なりかたの侍読として江戸に赴いたとき、杏坪もそれに随行して江戸に至り、山崎闇齋派の儒者服部栗齋の門に学ぶ。天明四年九月、京都・大坂を経て帰郷の途に着き、十月三日に鴨方の拙齋を訪ね、五日には神辺の茶山を訪ねている。茶山と杏坪の親密な交わりが始まったのはこの時からである。杏坪はこの旅を『甲辰紀行』と題して紀行文を書いているが、その十月五日の所に次のように記されている。

亥の時ばかりに神邊につきて、菅氏をたゞく、あるじは家兄のわきて親しき友垣なれば、われもへだてなく思はれて、かくときとて、いそぎ出迎へ、いろいろいたはり聞へ侍る、よひのつらさもわずれ、うちものがたらひて、夜ふかくてふしぬ、六日、懇留また西山にひとし、しみて立ぬべく見えたりしにや、佩刀かくされたり、これも古人の車轄しやかつを井に投ぜられしにや、その情のふかきをかんと、あるじは聞へわたりしはかせなれば、さいはいに益をもとめんと、敬直にも前霄の勞をやすめ玉へととどめ侍りて、なにくれと語りぬ、所のすき人もとはれて、韻字ひんじを拈ひる、また射字といふ事したれどもおほくあたらざりし、七日、夕かた尾道に出る。

(重田定一著『頼杏坪先生傳』附録)

三日に拙齋を訪ねた杏坪は、四日は拙齋の隠居所である至樂居で一日を過ごし、五日の午後「今日は雨になるから留まれ」と強く引き留められるのを、強いて押し退けようとしたときも、拙齋を訪ねた時と同じように引き留められ、佩刀を隠されたりしたというのである。こうして茶山は頼杏坪とも親交が深まっていった。天明五年(一七八五、杏坪三十歳、茶山三十八歳)二月二十一日に「黄葉夕陽村舎」を訪ねてきた杏坪は茶山・恥庵・拙齋・姫井桃源等と約一か月、神辺あたりや笠岡・玉島・鴨方・蘆田郡父石村等々を巡って詩を作り合ったりして三月二十三日袂を分かった。杏坪はこの年八月五日、広島藩の五人扶持藩儒となる。

姫井桃源

姫井桃源（二七五〇〜一八一八）、名は元詰げんくわ、字は仲明、号は桃源または靜修。備中鴨方の生まれ。池田藩の藩儒和田一江に学び、伊藤仁齋の著書に親しんでいたが、後に朱子学に転じた。天明五年に池田藩の儒官となり、文化元年に池田家祖廟の執事、和意谷墓地及び閑谷巖のことを司った。茶山より二歳年少。備中鴨方の出身であり、早くから拙齋の親しい友人である。

天明五年（一七八五）三月一日、桃源・茶山・恥庵・拙齋・杏坪ら五人は上成村に中原子幹（一七五三〜一八三八、備中上成村の富豪。拙齋の高弟）を訪ね、詩を作る等して交遊を重ねた。十日に茶山が一行を連れて神辺に帰った。神辺の龍泉寺に遊び、西中条村の河相君推（備後西中条村の素封家。茶山の遠縁に当たる。邸宅を松風館と称す）を訪ね、同じく一族である河相子蘭（中条村の豪農の出。同村の里正）を訪ねて黄龍山遍照寺に遊び、安井村の近藤伯協（医師。茶山の遠縁に当たる）を訪ねて、子蘭の案内で蘆田郡の父石村おいしむらに遊ぶ。更に神辺の西福寺の詩会に臨み、光蓮寺の靈昌上人に招かれ、題を分かちて詩を詠じたりする等、充実した二句に余る日々を過ごし三月二十三日、拙齋は鴨方に、杏坪は広島に、桃源は岡山にと皆それぞれに別れて行った。神辺を去る時、拙齋・杏坪・桃源の三人は合作の歌を作り、茶山に贈っている。その歌は、

奉謝

菅茶山のぬしへ

籃輿もて送るなさは

正（拙齋）

風物をみながら

柔（杏坪）

見つゝ残夢をぞ繼ぐ

哲（桃源）

というのであった。『備後史談』第十二巻第十二號に花田一重氏が「茶山へ贈った拙齋杏坪桃源合作和歌」と題し

て「去る昭和六年の秋、徳富蘇峰氏が玉島圓通寺に登られし時、展観の中に、玉島町藤田晚晴氏所蔵の、拙齋と頼杏坪、姫井桃源の三人合作の歌があつた」と述べて、この歌を載せ、「これは天明五年三月朔に、中原蕉齋の上成浦金樓に會して、拙齋は茶山、杏坪等と詩を賦し、後杏坪、桃源と共に神邊に赴き、歸りに駕籠で送られた時の作と見える」と書き加えている。翌天明六年（一七八六）の正月中にも茶山や拙齋・赤松滄洲・若林子陽（岡山藩用達）等と岡山に浦上玉堂を訪ねている。このとき四人は「浦玉堂招飲酒間聯句」と題して次のような聯句を作つて遊んでゐる。

今夕何夕 今夕何の夕ぞ

滄洲（赤松）

秉燭盞簪

燭を乗り 盞簪す

仲明（桃源）

涪涪靈響

涪涪たる 靈響

子雅（拙齋）

主人調琴

主人 琴を調ふ

晉帥（茶山）

〔盞簪〕友人の會合。〔涪涪〕調琴の音。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷二

大原呑響

大原呑響は寶曆十一年（一七六一）か十二年（一七六二）頃の生まれと推定されている。名は翼、字は雲卿、通称は觀次・左金吾、呑響・墨齋と号す。奥州の東山（岩手県東磐井郡）大原に生まれ、少年の頃から故郷を出て諸国を遊歴し、後に京都に於て皆川淇園、六如上人、伴高蹊等、先輩の間に伍して書画を良くすることを以て聞こえていた。寛政元年（一七八九）秋、二十六、七歳の頃、西遊して四国に渡り、讃岐の金比羅詣りをし、舟で備中玉島に至り、鴨方村に拙齋を訪ねた。更に「黄葉夕陽村舍」を訪ね、数日滞在して茶山のために絵を描いている。後にこの時のことを感懐して『黄葉夕陽村舍詩』前編卷八に、「千詩畫引應原雲卿需」（千詩畫引原雲卿

の需めに應ず」と題する七言古詩を作って、その冒頭で次のように詠っている。

寛政初年君訪我 寛政初年君我を訪ふ

留宿爲我畫江山 留宿して我が爲に江山を畫く

茶山の季弟、恥庵は「原雲卿寄惠鶴橋柳園。賦謝。鶴橋在備後、曾與雲卿別處」(原雲卿 寄せて鶴橋柳園を惠む。賦して謝す。鶴橋は備後に在り、曾て雲卿と別れし處)と題する次の七言絶句を作っている。

官橋秋柳夕陽寒 曾餞西行暫繫鞍 官橋 秋柳 夕陽寒く、曾て 西行に餞り暫く鞍を繫ぐ。

傍人對畫都無意 只作漢南春色看 傍人 畫に對し都て意無く、只だ漢南 春色の看を作す。

呑響はここの神辺から広島に行き、暫く広島に滞在して長崎に向かった。

寛政六年(一七九四)三月十五日から十月六日までの約七か月、茶山は妻の宣を伴い、吉野・奈良・京都方面への「北上歴」の旅に出た。四月五日に京都に入った茶山にとって京都は、十五年ぶりであった。茶山はこの度も四條の俵屋を宿とした。八日に呑響が訪ねてきて、五年ぶりの再会を果たす。それから九月半ば迄、茶山が京都に滞在している間、呑響とは殆ど毎日詩酒徵逐している。

「黄葉夕陽村舎」時期の交友は百数十名にも上るので、この度は以上取り挙げた数名にとどめ後は表に纏める。

安永九年(一七八〇)五月二十日、茶山は最後の京都遊学を終えて郷里神辺に帰郷した。その年の十一月二十七日、茶山に多大な感化を与えた伯父の高橋慎庵(医者・漢籍に通じていた)が歿し、翌年、次弟の汝樞が亡くなり、又次の年天明二年(一七八二)妻の爲が二十三歳で歿している。結婚生活僅か一年余りであった。この二年・三年茶山の身辺には不幸が続き、弟の汝樞が亡くなった天明元年(一七八一)には塾「黄葉夕陽村舎」を設立したりして忙しかったからか際だった交遊はない。

天明二年（二七八二）三十五歳

6・4 く6日まで茶山と頼春水は勝島敬仲の案内で、尾道・賀島・松永あたりを訪ねる。茶山の弟の恥庵（十五歳）も連れていた。（『黄葉夕陽村舎詩』巻一に七言律詩二首有り）

10・14 恥庵は拙齋に入門する。（『黄葉夕陽村舎詩』巻一に二十句から成る七言古詩一首有り）

天明三年（二七八三）三十六歳

7・? 道光上人が牛海道人に連れられて茶山を来訪。

15 神辺の川北村の西福寺で満月を眺め填詩を作った。（道光上人詩、七言絶句一首有り）

16 道光上人と仲條村の遍照寺に登る。（『黄葉夕陽村舎詩』巻二に七言絶句一首有り）

秋 道光上人と藤井暮庵を伴って鴨方の西山拙齋を訪ねる。（『暮庵先生行状略記附録』に記事有り）

天明四年（二七八四）三十七歳

1・16 笠岡の小寺清先（笠岡稻荷神社の祠官）の母の八十歳賀筵に出席する。拙齋と梨木祐爲（京都加茂の閩祠官）に会う。（『黄葉夕陽村舎詩』巻二に七言絶句一首有り）

1・23 茶山は鴨方に拙齋を訪ねる。

24 出雲から道光上人が茶山を追って鴨方に来る。岡山から姫井桃源が鴨方を訪れる。

28 茶山と道光上人は辞去して神辺に帰る。

3・17 拙齋が神辺を訪れ、まだ逗留していた道光上人と三人で数日に亘って詩酒徵逐する。（『備後史談』第十五卷、一・二・三號に記事有り）

18 夕方三人で「黄葉夕陽村舎」付近を散策しながら聯句を作る。

19 道光上人が帰るのを茶山と拙齋は鶴橋まで送る。（茶山に七言絶句一首、拙齋に五言絶句それぞれ一

20	拙齋・恥庵・茶山は下御領村の国分寺を訪ねる。住職の如實上人と茶山はかねてより親交があり、懇意の間柄であった。『備後史談』第一巻、六號・『福山志料』卷之十四・『備後史談』第九巻、十一號に記事有り)
22	拙齋・恥庵・茶山は神辺の光蓮寺に鳳靈上人(茶山の古くからの詩友)を訪ね文字の遊戲に興ずる。
24	拙齋は鴨方に帰る。拙齋は別れに臨み七言絶句一首を詠み、茶山に贈る。
5・7	葛子琴歿す。茶山は「寄弔葛子琴」と題して、十二句から成る七言古詩を詠む。
10・5	頼杏坪が帰省の途中神辺に寄り茶山を訪ねる。
?	門田氏宣(二十八歳)を継室に迎える。
天明五年(二七八五)三十八歳	
2・21	頼杏坪と渡邊圓淨(伊豫の人。俗称は友左衛門、剃髪して圓淨と称す)が来訪。
23	(〜24) 2月4日京都を発ち鴨方の拙齋を訪ね、笠岡に来て滞在していた梨木祐爲(一七三九〜一八〇一、京都下鴨社の祠官。正四位下に敍せられ上総介に任ぜられた。当時家人として広く名が知られていた。父の祐之は著名な国学者)を茶山と圓淨が訪ね和歌を詠む。
25	頼杏坪と鴨方に西山拙齋を訪ねる。
26	頼杏坪・西山拙齋と占見村に行き花見をする。
28	頼杏坪・西山拙齋・菅恥庵と玉島や笠岡に遊ぶ。
3・1	頼杏坪・西山拙齋・恥庵・姫井桃源と上成村に中原子幹(拙齋の弟子)の湧金楼を訪ね詩を作る。
10	頼杏坪・西山拙齋・姫井桃源を伴って神辺に帰る。

11	頼杏坪・西山拙齋・姫井桃源と神辺龍泉寺に遊ぶ。拙齋七言絶句一首有り。
12	頼杏坪・西山拙齋・姫井桃源と西中條村に河相君推(松風館)を訪ねる。茶山十四句の七言古詩有り。
13	頼杏坪・西山拙齋・姫井桃源と西中條村に河相子蘭(中條村の豪農で里正。茶山の遠縁)を訪ねる。
22	頼杏坪・西山拙齋・姫井桃源と神辺光蓮寺の靈昌上人に招かれる。拙齋五絶・七絶各一首有り。(七絶は、「即時呈靈昌上人」と題し、『福山志料』巻之十五に収められている)
23	頼杏坪は広島に、西山拙齋は鴨方に、姫井桃源は岡山にそれぞれ帰って行った。
天明六年(二七八六)三十九歳	
1・?	西山拙齋・姫井桃源・赤松滄洲(播磨国の人。赤穂藩の藩儒、後に家老となる)・若林子陽(岡山藩用達)と岡山に浦上玉堂を訪ねる。茶山に七言絶句一首(後編巻二)、拙齋に五言律詩、七言律詩各一首有り。
3・23	西山拙齋が次男孝恂・志村東嶼(一七五二〜一八〇二、仙台藩の儒官。後、幕府に召されて昌平齋で経を講ず)と来訪。東嶼は四月十四日まで金粟園(茶山の邸宅の離れ座敷)において十二日まで暮庵に『易』を構ず。(『暮庵先生行状略記』)
24	西山拙齋・孝恂・志村東嶼と神辺の龍泉寺・万念寺・西福寺に遊ぶ。龍泉寺境内の「車返し」の桜は有名。ちょうど満開だった。(『福山志料』巻之十五に記事有り)
25	西山拙齋・孝恂・志村東嶼と菅波久治を訪ねる。茶山に五言律詩有り。(前編巻三)
26	西山拙齋・孝恂・志村東嶼と藤井士信に招かれる。
28	西山拙齋・孝恂・志村東嶼と国分寺に遊ぶ。
25日から30日までのことは『備後史談』第十五巻第二號に記事有り。前編巻三に五言律詩「同	

30	西山拙齋・孝恂・志村東嶼と河相君推宅に遊ぶ。——諸友及枕雲上人遊國分寺即事」有り。
秋	恥庵が京都に遊学したが特定の儒者にはつかず。道光上人・枕雲上人と詩社を結ぶ。
秋	道光上人神辺に立ち寄る。道光上人に七言古詩一首、茶山七言古詩二首有り。(前編卷三)
閏10 5	鴨方に西山拙齋を訪ね、作詩よりは盛んに論談した。茶山は九日に笠岡まで帰る。
12・7	鴨方に西山拙齋を訪ねる。茶山七十句から成る七言古詩「開元琴歌……」(前編卷三)を作る。
9	茶山は神辺に帰る。
天明七年(一七八七)四十歳	
3・7	福山藩主阿部正倫 老中になる(一七八八年二月十九日)。農民の怨訴で遠藤辨藏指籠 <small>さしこ</small> に監禁される。
春	牛海道士(備後国福山の人、真言宗の修験者)・茂原祥三(備後国安那郡湯野村医師で里正)・菅波惟文(備中国久代村の大月清庵の次男で、菅波家の養子となる。和歌の嗜み有り)と国分寺に遊ぶ。
6・19	松平定信が老中になる。(一七九三年七月二十三日)
8・10	志村東嶼が九州からの帰途、茶山を訪ねる。
14	志村東嶼と鴨方に西山拙齋を訪ねる。茶山七言絶句二首「赴鴨方途中」有り。(前編卷三)
15	志村東嶼と西山拙齋宅で中秋の月を賞する。
17	拙齋・東嶼・茶山の三人は長尾村の環碧樓に小野忠貞(世篤、備中国玉島上成村生まれ。拙齋の弟子。詩を良くす)を訪ねる。東嶼は『大学章句』を講ず。西山拙齋は更に茶山と志村東嶼を上成村の拙齋の別荘雪堂に導く。茶山に「十七夜宿雪堂分得獨字」と題する七言古詩有り。(前編卷三)

天明八年（二七八）四十一歳

2・7	茶山は西山拙齋・道光上人・勝島敬仲等の誘いを受け尾道へ行く。茶山に七言律詩一首。（前編卷三）
2・13	茶山は尾道で三人と落ち合い、一行は敬仲に案内されて対岸の賀島に遊ぶ。茶山に七言律詩一首有り（前編卷三）。道光上人に七言絶句一首有り。
?	一行は賀島から尾道に戻り、三原西野の梅林に遊び佛通寺に泊す。茶山に三十六句から成る五言古詩一首有り。（前編卷三） 道光上人に五言律詩一首有り。
?	拙齋・道光・敬仲・茶山等は仏通寺から三原に戻る。拙齋・道光・敬仲は海路で（道光と拙齋は船の中でしきりに聯句を作り合った）、海が嫌な茶山は他の二三人と陸路で尾道へ向かう（茶山の七言絶句一首が「後編卷二」に有り、脚注に「絲崎（三原）」と有るのでこのときの詩だと思われる）尾道の島居子瑤（町老として市政に参与した人で、好学の士）宅へ行き、二十二日まで逗留する。
22	今津駅まで敬仲に送られ、茶山・拙齋・道光は夕方神辺に着く。
23	西山拙齋・道光上人と「黄葉夕陽村舎」で詩会を開く。
24	茶山の遠縁に当たる菅波惟廉の招きに応じ、西山拙齋・道光上人と行く。
25	西山拙齋・道光上人と枕雲上人や浦上溪南（詩歌に巧み）を府中に訪ね宿泊する。
28	三人は神辺に帰る。
29	西山拙齋は鴨方に帰る。道光上人はまだ二三日「黄葉夕陽村舎」に残る。
3・?	道光上人が出雲に帰る。茶山は「贈道光上人」と題し七言絶句一首を贈る。（前編卷三）
4・5	西山拙齋と岡山に行き萬波醒廬（岡山藩儒官）と会う。

6・5	『遊藝日記』の旅に出る。(7月6日)
6	伊勢茶店で藤井暮庵と落ち合い、昼食を共にして尾道の勝島敬仲宅に宿泊。夜宮地世恭父子(尾道の人)、龜山元助来訪。茶山「赤坂」と題する五言律詩一首(遊藝詩二十首の冒頭の詩)有り。
7	島居子瑤来訪。宮地世恭・藤井暮庵と福善寺の圓識上人を訪ね晩に祐照上人を訪ねる。
8	吉和七曲の浜で勝島敬仲・宮地世恭・灰傳と別れ、三原西野梅林を見て新庄村に至り百姓家に泊す。茶山に「吉和」と題する五言律詩一首有り。(前編卷三)
9	西条を経て海田に至り宿す。茶山に「路上所見」と題する五言絶句四首有り。(前編卷三)
10	広島に入り頼春水を研屋町に訪ねるが不在。頼杏坪、頼久太郎(九歳の山陽)に会う。春水宅に泊す。茶山・春水各七言律詩一首有り。茶山詩は(前編卷三)所収。
11	雨で一日頼家に居て、春水が大坂から持ち帰った画を観たりしていた。それは天明二年五月に大坂の中井竹山が、懷徳堂で春水送別の酒宴を開いたとき、その光景を藪 <small>はら</small> 關月に描かせ、混沌社の同人たちがそれに詩を題したもので、中井竹山・中井履軒・葛子琴・大畠赤水・田中鳴門・岡白洲・篠崎三島・荒木商山が執筆していた。このとき、子琴・鳴門・白洲は既に幽冥境を異にしていたので茶山は「展玩の間、覚えず惻然」としたのであった。
12	雨で一日頼家に居て、山陽の挙止を觀察し、見所のある子だと思った。
13	春水下僕の案内で国泰寺・白神神社・広島城・東照宮を見る。「かしのや」に宿泊する。夜、春水が訪ねて来る。
14	十一日来の雨は朝八時頃に止む。春水を訪ね、山陽に藤紙を贈る。
15	雨、無聊をかこち春水を訪ねる。

16	從兄弟の菅波維常・忠二が來訪する。春水を訪ね晩に春水と一緒に旅宿に帰る。
17	市街を抜け己斐・草津・廿日市・地御前を経て、宮島に渡り管弦祭を見て宮島に宿す。茶山に「路上」二首と題する五言絶句有り。(前編卷三)
18	厳島神社に詣でる。七歳のとき祖父に連れて来て貰った時のことを思い出す。茶山に「宮島」と題する七言律詩三首有り(前編卷三)
19	雨のため岩国行きを中止する。舟で草津に渡り日暮れに春水を訪う。「自宮島還草津舟中」と題する七言絶句二首有り。
20	頼杏坪に導かれ広島北郊を巡る。夜は頼兄弟が広瀬町の多賀庵(多賀庵六合茶商。俳諧を好む。孝養をもつて聞こえた人)の水楼にて送別の宴を設けてくれる。七律「頼千秋餞余本安橋水樓分得飛字」一首。
21	春水宅に告別に寄り、郷人から頼まれていた書の揮毫を乞うたところ、二十余幅も書いてくれた。この夜も結局又、春水宅に宿す。
22	春水と猿猴橋で別れ、海田で杏坪下僕と別れ、西条の旅宿に泊す。この旅宿で胡散臭い僧を見かける。
23	三永の藤原春閣(賀茂郡上三永の儒医)を訪ね、三津の呼石を見て春閣に宿泊す。茶山に「仁賀山中」(五言律詩一首)「呼石」(七言絶句一首)有り。(前編卷三)
24	三津を過ぎ、竹原の頼春風を訪ねて泊す。伊弉嶺に至る。道は険しい。地形は京北の貴船に似ている。三津に至り蓮光寺に立ち寄る。庭の程に二人抱えもある大きな銀杏の樹がある。更に正延寺に寄り憩う。暮庵は仮眠す。「伊弉山中以清泉石上流爲韻同士晦賦二首」と題する五言絶句有り。(前編卷三)

25	<p>頼春風に連れられて頼家の菩提寺である照蓮寺に登る。片雲上人は不在だったが獅絃上人が迎えてくれた。犬が池の鯉の餌を取って食べても鯉は驚きもせず悠々と泳いでいたのは面白い光景であった。</p>
26	<p>竹原の頼春風宅を辞して本郷に至り宿泊す。茶山は途中、本郷川を渡ろうとして倒れかかり、暮庵に助けられて事無きを得た。「官道に臨んだ川に藩の有司が渡し船を設置していないのはどうしたことか」と茶山は憤慨している。</p>
27	<p>米山寺を訪ね、三原妙正寺に登り、尾道の龜山元助に宿泊す（7月5日）。茶山に「米山寺拜謁小</p>
28	<p>早川中納言肖像」と題する七言律詩一首有り。（前編卷三）</p>
7・1	<p>勝島敬仲・山田某来訪する。敬仲は水糕（糕は粉餅）を恵む。</p>
2	<p>藤井暮庵は先に帰る。島居子瑤来訪する。</p>
2	<p>圓識上人に従って恵舟師（長門の人）が来訪する。</p>
3	<p>牛海道士・松本某が来訪する。</p>
4	<p>茶山は龜山元助宅に泊している間、二・三の子に『大学』の章句を講ず。この日は終篇。同に千光寺に登る。</p>
5	<p>圓識上人来訪する。皆龜山宅に宿泊する。</p>
6	<p>勝島敬仲・宮地世恭父子・龜山元助・豊田子傳に見送られ帰郷。</p>
寛政元年	<p>（二七八九）四十二歳</p>
4・13	<p>恥庵同行者一名と春水を訪ねて、宮島へ渡る。（数日逗留する）</p>
5下旬	<p>赤崎海門（薩摩藩校造士館の助教となり後にこれを主宰する）来訪する。茶山に「薩摩文學赤崎彦禮</p>
	<p>従侯駕還國路枉草堂賦此奉謝」と題する長詩有り。（前編卷三）</p>

7・?	八月にかけて茶山と拙齋が瘡 <small>おこ</small> に罹る。茶山「患疢戲似應師」と題する七言古詩一首有り。(前編卷三)
9・5	病は茶山が先に癒えて拙齋を見舞う。(數日逗留する)拙齋に「重陽前四日嘗禮卿見訪賦此志喜」と題する七言律詩一首有り。
9	古川古松軒(備中の人、地理学者)来訪する。
11	那波魯堂歿す。享年六十三歳。
秋	大原吞響来訪。(奥州の人、画人)茶山に「千詩畫引應原雲卿齋」と題する長詩有り。(前編卷八)
寛政二年(二七九〇)四十三歳	
2・21	西山拙齋と菅波惟廉の歌会に行く。
22	西山拙齋と藤井暮庵の招きに応じて行く。
24	西山拙齋と法光寺の招きに應じて行く。
25	西山拙齋と河相君推の招きに應じて行く。
26	西山拙齋と国分寺の招きに應じて行く。21日〳〵此処までは歌会や詩会である。
3・3	西山拙齋・如實上人と神辺の龍泉寺に行く。
5・7	頼春水が西帰の途中来訪する。枕雲上人も居て久闊を叙す。枕雲上人に「端午後二日茶山菅先生席上謁春水頼先生賦此以呈」と題する七言の長詩が有る。(枕雲上人『竹間齋遺稿』)
9	暮庵と備中に遊ぶ。(岡山・総社・宮内・倉敷・連島・鴨方・笠岡等)茶山に「水夜」「柳陰亭即事」 「題画」・「高松」・「藤戸」・「粒江」・「環碧樓」等七言絶句有り。(前編卷三)
24	幕府は林祭酒・柴野栗山・岡田寒水らに命じて朱子学の振興を計り異学を禁じる。(寛政異学の禁)

	冬	西山拙齋は阿波藩の招聘を断る。茶山前編卷三に古詩有り。
	12・20	中山子幹歿す。
	寛政三年（二七九二）四十四歳	
	2・18	父菅波博坪歿す。満二年詩作を絶つ。寛政三・四年は詩作無し。
	5・?	赤崎海門が江戸から薩摩に帰郷の途中来訪し、六月まで滞在。恥庵に「薩州赤文學見過賦呈」と題する七言絶句有り。暮庵略記に記事あり。
	11・6	頼春水が西帰の途中来訪し、二泊して八日に竹原へ帰郷。
	寛政四年（二七九二）四十五歳	
	4・1	頼春水が美作の湯原湯治の途中来訪する。
	3	頼春水と西中條村の河相君推の松風館に招かれる。春水に「河相保之松風館同菅禮脚賦」と題する七言絶句一首有り。
	5	春水が神辺を発ち湯原に三週間滞在し湯治に専念する。帰途は勝山・岡山に至り姫井桃源を訪ね、倉敷で岡元齡を、鴨方に拙齋を訪ねた。
	4・末	頼春水が再び神辺に茶山を訪う。『暮庵先生行状略記』に記事有り
	5・1	頼春水は藤井暮庵の南北春水村舎に招かれ泊す。
	寛政五年（二七九三）四十六歳	
夏		作詩再開。七言律詩「夏日即事六首」有り。（前編卷四）徳永君壽来訪。茶山に「徳永君壽来訪」と題する五言絶句有り。（前編卷四）府中の羽中・荒谷に遊ぶ。茶山に「羽中」二首、「荒谷即事」と題する詩有り。（前編卷四）尾道の千光寺に遊ぶ。「始登…石呈同遊諸友」と題する長詩あり。（前編卷四）

<p>8・15 西中條村の河相君推を松風館に訪ね仲秋の月を賞す。「癸丑仲秋十五夕既午訪松風館酒間書感」二首と題する七言律詩有り。(前編卷四)</p>	<p>秋 中山言倫(中山子幹の子) 来訪する。「中山子徳来訪」「題中山子幹遺照三十二韻」と題する長詩有り。 (前編卷四)</p>
<p>10・8 頼春水が西帰の途中来訪。二泊して十日に竹原へ帰郷する。茶山は月に二回、福山米屋町で漢籍の講釈をすることとなる。</p>	

寛政六年(一七九四) 四十七歳

妻宣よすを伴い三月十五日神辺を発つて、吉野・奈良・京都方面への長途の旅に出た。「北上歴(曆)」の旅である。

十月六日に帰郷するまで約七か月に及ぶ長期間の旅であった。三月二十三日に大坂に入った。大坂は安永九年、茶山京都遊学最後の年、混沌社の人々に厚いもてなしを受けた懐かしい地であったが、足かけ十五年の歲月は當時の詩友の多くを黄泉に送っていた。三年半前の寛政二年(一七九〇)十二月二十日には、中山子幹が四十五歳でこの世を去っていた。最も親しく交わった葛子琴は天明四年(一七八四)五月七日、既に四十五歳の生涯を閉じていた。茶山は葛子琴を偲んで「浪華二首」と題した七言絶句二首を詠んだ。その一首では「浪華市街を流れる川は網の目のように入り混じっているが、『可憐兩派終分去、南下西流無會期』(憐れむべし 兩派 終に分れ去りて、南下 西流 會とま期無し)その川は最後には分かれて再び合流することはない。私と葛子琴のように」と感慨一入であった。吉野から奈良を経て京都へ。そこから宇治山田、尾張、美濃まで足を延ばし四月五日、再び京都に帰った。長旅の疲れが出たのか茶山は十一日まで宿とした四条の俵屋(京都遊学のとき宿とした)から一歩も出なかつた。しかし、見舞い旁々訪れる人は引きも切らぬ有様であった。元気を回復してからの茶山は、京都

に墨を落ち着けて、伊勢の方へ妻宣を連れて行ったりはしたが、医学の師の和田泰純や伴高蹊・三浦子承・大原香響等と往来して詩酒徹逐の日々を送った。中山言倫・渡邊圓淨・三位上人・井上源右衛門・紫岳上人・松本愚山・河相藤二郎等々の来訪を受けたりして、その数は多く全てを書き尽くすことはできない。

七月三日、佐々木良齋が急死した。中山子幹の下僕から知らせを聞いて駆けつけたときには既に事切れていた。良齋は那波魯堂門下の先輩で、安永九年（一七八〇）茶山最後の京都遊学のとき、西山拙齋・中山子幹・佐々木良齋・茶山の四人は書を講義し合った仲だったし、この旅でも四月十三日と六月二十一日には、茶山から訪ねて行って会っているのので、茶山の驚きと落胆は一通りではなかった。良齋の死は現在で言う脳卒中だったようだ。茶山は「挽良齋先生」と題して長い五言古詩を作っている。このような辛い出来事に遭遇はしたが、皆川淇園・蠣崎波響・橘南谿・高桑蘭更や画家の岡本豊彦・岸駒・村上東洲・松村月溪等と初対面をし、六如上人ともこの時初めて出会い、以後、蠣崎波響と共に親交を結ぶこととなった。このように茶山の交友範囲が又、広がった旅であった。「北上歴（曆）」の旅の間に作った詩は五十九首である。

寛政七年（一七九五）四十八歳

1・8	病氣のため塾の開講は暮庵が代講する。〔暮庵先生行状略記〕に記事有り。松虞臣（越後の人、片山北海の門人）・了榮上人（枕雲上人の季弟、茶山と親交有り）が来訪する。茶山に「病後松虞臣來訪分得韻肅」・「了榮上人來問余病時松虞臣先在分得韻先」と題する七言律詩二首有り。（前編卷四）
3・30	詩会を催す。茶山に「三月盡日同諸子賦分得斜字」と題する七言律詩一首有り。（前編卷四）

<p>5・? 樺島石梁（久留米藩の藩校明善堂の教授）が来訪する（『暮庵先生行状略記』に記事有り）。近藤伯協（医師、茶山の遠縁に当たる）が来訪する。茶山に「藤伯協来訪分得韻東」と題する詩有り。（前編卷四）</p>	<p>夏 三浦子承（茶山遊学最後の年、京都で詩酒徴逐した一人）が長崎からの帰途来訪する。茶山に「浦子承將探九州諸勝留宿草堂有詩見贈次韻以酬」と題する七言律詩一首有り。恥庵に「浦子承翁將遊長崎路過草廬留宿喜賦以贈時翁自阿州至」と題する七言律詩一首有り。『黄葉夕陽村舍詩』附録『恥庵詩草』黄山の招飲に出席。茶山に「黄山先生招飲諸文士席上有詩余醉不能和歸後賦此奉謝」と題する七言絶句一首有り。</p>	<p>秋 柄の浦に遊ぶ。茶山に「對潮樓」と題する七言律詩一首・「自柄津還途中作」七言絶句一首有り。</p>	<p>冬 道光上人来訪。茶山に「次光師韻」と題する七言律詩一首有り。（前編卷四） 福山藩が茶山を御家人に召し抱えようとしたが「御領分に生長仕候へへ、墮地以來すてに君臣の分ハさたまりぬ候」と言つて断る。</p>	<p>寛政八年（一七九六）四十九歳 2・1 母半が歿す。（六十五歳）満二年詩作を絶つ。寛政八・九年の詩無し。</p>	<p>9・13 倉成龍渚（豊前国中津藩の儒臣）が江戸に赴く途中来訪する。（『暮庵先生行状略記』記事有り）</p>	<p>11・29 広瀬蒙齋（奥州白河の人。柴野栗山に学び、終生松平定信に仕えて信任が厚かった）が来訪する。</p>	<p>12・1 蒙齋は茶山の弟の背恥庵や藤井暮庵と会う。（『暮庵先生行状略記』記事有り）</p>	<p>2 蒙齋・立綱（近江国彦根に生まれた僧侶）らは黄葉山に登り神辺城趾を見る。</p>	<p>3 蒙齋は茶山・恥庵に見送られて神辺を辞し、拙齋に入門する。二か月近く拙齋のもとに腰を落ち着け</p>
---	---	---	--	--	--	---	--	--	--

?	て、拙齋と共に沙美浦に遊んだり、塾生に『論語』を講じたりした。茶山は塾の永続性を考えて「郷塾取立に関する書簡」を福山藩に提出し認可される。
---	---

3、福山藩との関わり

天明六年（一七八六）三十九歳

二月二十三日に茶山は藩から召されて福山に行った（『菅茶山略年表』）。『黄葉夕陽村舎詩』前編卷三の「辟赴福山、夜還艸堂途中口占二首」（辟ひされて福山に赴き、夜艸堂に還る途中の口占二首）はその帰り道で作った詩だと考えられる。またこの詩のすぐ後の「雨中同賞庭下海棠、分得韻侵、時有辟令」（雨あめ中同に庭下の海棠を賞し、分とかちて韻に侵を得たり、時に辟令有り）という七言律詩も同じ時の詩であろう。

辟赴福山夜還艸堂途中口占二首（一）

朝來入城府 一日別青山 朝來 城府に入りて、一日 青山と別る。

薄晚辭城府 青山遲我還 薄晚 城府を辭すれば、青山 我の還るを遅おそつ。

（二）

山瓢堪樂聖 社櫟敢妨賢 山瓢 聖を楽しむに堪へ、社櫟 敢て賢を妨げん。

歸路烟村夜 輿窓潤月圓 歸路 烟村の夜、輿窓 潤月圓まかなり。

「朝から福山城に行つて、一日中 故山と離れていた。暮れ方 城を辭去したが、故山は私の帰りを今や遅しと待っている」というのであり、とてもこの故郷を留守にすることはできないという心境であろうか。

雨中同賞庭下海棠、分得韻侵 時有辟命

幽粧笑倚短牆陰 時有狂蜂戲蝶尋 幽粧笑みて倚る 短牆の陰、時に狂蜂 戲蝶の尋ぬる有り。

書靜自堪伏懶睡 春寒誰共訴芳心 書靜かにして自ら堪ふ懶睡に供するに、春寒 誰と共にか芳心を訴へん。

風飄翠袖香仍淺 雨洗紅肌艶未深 風は翠袖を飄へして香 仍ほ淺く、雨は紅肌を洗ひて 艶未だ深からず。

久托孤根安陋巷 不須移植百花林 久しく孤根に托して 陋巷に安んじ、須ひず 百花の林に移し植うるを。

「久托孤根安陋巷、不須移植百花林」と詠んで、「ただ一本の根を頼みとして貧しくむさ苦しい裏町に安住しているが、たくさんの花の咲き乱れる林に移し植えられたいとは思わない」とその心境を述べている。即ち、晴れやかな舞台に出て華々しい活躍をするよりは、細々とした一本の根でもいい、今はこのささやかな塾をきちんと經營して行くことだと考えたのであろう。結局、藩の誘いを断つたのである。

福山藩はこの年七月に藩校（弘道館）を開設している。その教授の一人に茶山を採用しようとの思いから召されたものである。それは「郷塾取立に関する書簡」（寛政八年四十九歳）に「私ことはいかなることニ藩朝へきこへ候哉、十年前（天明六年三十九歳）国学（弘道館）出来之時も罷出よと被仰付候、この時も病人しゐて断申上候、其後また月ニ一度位出られぬか、さもなく八國中村々氣むきにまいり候而説書ハなるましやと内々被申聞候これも病人いたしかた無之申上候」とあるところから考えられる。

即ちこのお召しを茶山は断つたわけである。理由としては、「病人しゐて断申上候」とあるように病氣を理由に断つたものであるが、果たしてそれだけの理由だったのであろうか。茶山はこれより五年前の天明元年、三十四歳で塾を始めている。「郷塾取立に関する書簡」の中で「されハ少々の学種たへ不申候へハ、後來あるひハ人材を出し候やうにもなり可申と存候もひとつの望ニ候」と述べた部分があるが、始めたばかりの塾を軌道に乗せて「学種」を絶やさぬようにすることが、差し当たつての急務であると考え、取り敢えずは塾の経営に専念しようと考え

えたのではあるまいか。

七月 第四代藩主阿部正倫まさともにより藩校（弘道館）が福山城の西堀端に開設される。その後、「月二一度位出られぬか、さもなく八国中村々気むきにまゐり候而説書ハなるましや」との内命があつたが、これも「病人いたしかた無之申上候」とこれも病弱を理由に断る。（郷塾取立に関する書簡）

寛政四年（一七九二） 四十五歳

八月二十六日、江戸において福山藩主阿部正倫は、大学頭林祭酒（述齋）から「当今の詩家で、その巧さに於て、茶山の右に出る者はいないだろう」と言われ、茶山が自分の領内の者であることを初めて認識した正倫は、茶山に五人扶持を給し藩儒医を命じた。このことは「茶山先生行状」に次のように述べられている。

福山侯與林祭酒論詩。祭酒曰、當今詩家、當以菅太中爲魁。侯命吏廉問、更悉得其學行兼茂狀、始賜俸五口。時寛政四年壬子八月也。

福山侯 林祭酒と詩を論ず。祭酒曰く、當今の詩家、當まさに菅太中を以て魁と爲すべしと。侯吏に命じ廉問せしめ、更に悉く其の學行兼茂の狀を得、始めて俸五口を賜ふ。時に寛政四年壬子じんし八月なり。

寛政五年（一七九三） 四十六歳

藩命により福山米屋町で月二回漢籍の講釈をする。いつまで続いたかは詳らかでない。

寛政七年（一七九五） 四十八歳

冬、福山藩から御家人にとのお召しがあつたが「御領分に生長仕り候へへ、墮地以來すてに君臣の分ハさたまりる申候」という陳情表を出して断る。（郷塾取立に関する書簡）

寛政八年（一七九六） 四十九歳

「郷塾取立に関する書簡」を藩に提出する。

「廉塾」は「閩塾」とも呼ばれていたが、福山藩の郷校として認められてからは、「神辺学問所」とか、「郷塾」とも称され、江戸時代後期の代表的な私塾として、豊後國日田の咸宜園（広瀬淡窓）と並んで著名である。天明期から文政期を通じて、学問に関心を持つ者であれば誰もが知っていた名である。茶山もその経営には終生心を砕き、全国から彼の名を伝え聞いて来る者の指導に当たった。

4、旅

茶山は「黄葉夕陽村舎」の時期に二度の長い旅をしている。一度目は、天明八年（一七八八）四十一歳の六月五日から、七月六日までの一か月に亘る安芸地方への『遊藝日記』の旅であり、弟子の藤井暮庵を伴ったの旅であった。二度目は、寛政六年（一七九四）四十七歳の三月十五日から、十月六日頃までの約七か月近くに及ぶ吉野・奈良・京都方面への旅であった。この『北上歴（暦）』の長期の旅には妻の宣を伴っていた。

（1）『遊藝日記』の旅

茶山は天明八年（一七八八）四十一歳の六月五日から七月六日までの一か月、弟子の藤井暮庵を伴って安芸地方の旅をした。六月十七日の宮島管弦祭を見物に行くのが主たる目的だったが、頼春水を訪ねるのも大きな目的の一つであった。五日に先ず、福山に入り大念寺での和歌の会に出席する。翌日は尾道に着き二泊し、八日に西条・海田を経て十日に広島に入り、頼春水邸を訪ねる。そこで頼杏坪と再会し、久太郎（後の山陽）とは初対面をする。一週間ばかり逗留して十七日に宮島の管弦祭見物に出掛け宮島に二泊する。十九日は岩国に行くつもりであったが雨で取り止めにした。草津に帰り日暮れに春水邸を訪ね泊す。春水邸に三泊して二十二日にいよいよ

暇乞いし、海田・瀬野・西条を経て二十三日に賀茂郡三永村の藤春閣を訪ねる。噂に聞いていた三津村の呼石を見に行き、藤春閣宅に帰り一泊する。二十四日に藤春閣宅を辞し、三津村を経て竹原に至り頼春風を訪ねる。其の夜は春風の饗応に預かり歓談する。翌日は春風に案内されて、頼家の菩提寺である照蓮寺に登りその夜も春風に泊まる。二十六日、竹原を発ち本郷に向かう。春風は尾梨坂まで送つて来て、送別の宴を設けてくれた。別れに当たつては、弟子二人を付けて嶺を渡る迄送らせた。二十七日、小早川隆景縁の氏寺米山寺（米山）を訪ね、三原を過ぎ糸崎に出て晩には尾道に着いた。ここでは、龜山元助（もと茶山の弟子であつた）宅に七月五日まで滞在し、『大学』を講義したり、訪ねて来る人と応対したりして過ごす。七月一日に藤井暮庵を先に帰した。四日、千光寺に登る。尾道に留まること八日間、六日に尾道を発つて神辺に帰つた。この旅では「遊藝詩」二十首を詠んでいる。紀行は漢文で認められ『遊藝日記』と題して次のように書き始められている。

五日 始晴。余、先發、與從弟君直往福山。午入城、同諸友會大念寺。作和歌、三更始散。宿海道士觀。

始めて晴る。余、先づ發して、從弟君直と福山に往く。午、城に入り、諸友とと同に大念寺に會す。和歌を作りて、三更にして始めて散ず。海道士の觀に宿す。

茶山は六月早々に旅立つ積もりでいたが、生憎の雨続きで止むのを待つて、やっと五日に晴れたので旅支度を整え、先ず福山に向かつて出發した。大念寺に諸友が集まり和歌の会が持たれ、夜中になつてやっと散會したというのである。その晩は牛海法師の寺に宿泊した。

「君直」茶山の従兄弟で菅波武十郎。朴齋結婚の媒酌をつとめた。「海道士」（一七四八〜一八二五）牛海道士。備後国福山の人。真言宗の修験者。「觀」牛海法師の居住する建物。道教の寺。

六日 晴れ。玄道上人（中條村の遍照寺の住職、大空上人のこと）と海道士、君直が、茶山を蘆田川の所まで送

つてくれた。茶山が伊勢茶店に行くと、藤井暮庵が茶山の来るのを随分長い時間待っていた。二人はそこで落ち合い、昼食をとって輿を雇って出立した。長雨の後ということもあって、途中の溪川や田圃の溝は水が溢れ、音を立てて流れていた。

備後国沼隈郡赤阪村で次の詩を詠んでいる。『遊藝日記』最初の詩である。

赤阪

出郭吟瞻潤 林雲映旅装 郭を出づれば 吟瞻潤く、林雲 旅装に映ず。

培種晴圃淨 曝藷午村香 種に培ひて 晴圃淨く、藷を曝して 午村 香し。

積潦浸官道 羣兒戲牧場 積潦 官道を浸し、羣兒 牧場に戯る。

停筓蔭行栗 澗響意先涼 筓を停めて 行栗に蔭すれば、澗響に 意先づ涼し。

〔『黄葉夕陽村舎詩』前編卷三〕

福山を出ると眺望は広々と開けて、林にかかる雲が旅装に映える。

綿を植えた畠は晴れて清々しく、藷草を干している屋下がりの村は芳しい香が匂い立つ。

雨で出来た溜まり水が官道を浸して、子ども達の群は牧場でふざけ合っている。

杖を止めて行栗に木陰を求めると、谷川の響きに心が先ず涼しくなる。

〔郭〕外囲い。都市の周囲を囲む城壁。ここは福山のこと。〔吟瞻〕見渡す限り。〔培種〕種（綿）の木を植える。江戸時代福山藩では綿の栽培をした為に、神辺付近の田舎にも綿の木を植えた白い田圃がかなり見られた。〔曝藷〕藷草を日向に曝して干している。〔藷〕は、藷草。綿を植えた畑や藷草の植えられている田圃が一面に広がっている田園風景は当時の三備（備前、備中、備後）特有のものであった。〔積潦〕たまり水。〔行栗〕道を表示する樹木。

この日は、尾道の勝島敬仲宅に宿泊する。

七日 敬仲宅を拠点に人を迎えたり、訪ねたりして過ごす。

八日 午前十時頃、尾道を発す。敬仲、土愷（宮地世悌）、灰傳が七曲の浜まで茶山を送りそこで別れた。茶山と暮庵はやがて三原に到り、梅の名所で知られる西村に赴いた。ここは嘗て西山拙齋と観梅に来たところである。日記には次のように認められている。

出城半里、適西村。村中、梅最盛、花時香雪十余里、余曾再遊焉。今望之、緑葉陰々。家々正曝醃梅、風亦帶酸。

城を出でて半里、西村に適く。村中、梅最も盛んにして、花時には香雪十余里、余曾て再遊す。今之れを望めば、緑葉陰々たり。家々正に醃梅を曝し、風亦た酸を帶ぶ。〔城〕三原。〔醃梅〕塩漬け梅。

ここは嘗て拙齋と観梅に来て、満開の花を賞した所で、茶山は往時を追懐している。「城」は三原を指す。今は、村中が梅（醃梅）を乾していて、吹いて来る風まで酸っぱいように感じられるというのである。

茶山らは晩に本郷に到着した、そこでは輿を借りて夜道を行く。蛍が沢山乱舞し、時々秧雞の鳴き声が聞こえて来る。この夜は、新庄村の百姓家に宿す。

九日 西条を経て海田に到る。三原から西条に到る間の山間の風景を詠った詩が「路上書所見」（路上見る所を書す）と題して『黄葉夕陽村舎詩』前編卷三に四首収められている。

(一)

川流數曲轉 垠路一條長 川流數曲轉じ、垠路一條長し。

偃瀦猶積潦 秋前始插秧 偃瀦猶ほ積潦、秋前始めて秧を挿す。

川の流れば数曲がりに転じ、堤の路は一筋長く続いている。

用水池は長雨のため水嵩を増し、秋の前になつてやつと稲の苗を植えている。

〔垣路〕堤の道。〔堰瀨〕用水池。〔積潦〕長雨の後の大水。〔始挿秧〕陰曆六月初旬の田植えて、かなり遅れている。

(二)

處處堤防決 湍流道上鳴 處處堤防決し、湍流道上に鳴る。

稽夫輦沙土 幾隊噪而行 稽夫沙土を輦き、幾隊か噪ぎて行く。

処々の堤防が決壊して、急流が道の上を音たてて流れている。

土方が砂や泥土を積んだ車を輦いて、何組か騒がしく行く。

〔湍流〕急流。〔稽夫〕土方。

(三)

官道沿幽澗 水聲終日譁 官道 幽澗に沿ひ、水聲終日譁し。

厓頭半橙木 時值合歡花 厓頭 半ばは橙木、時に値ふ合歡の花。

官道は奥まつた谷川に沿うていて、一日中水の音がやかましい。

崖の上は半分は橙木で、時々合歡の花に会う。

〔橙木〕木の名前。成長の早い樹木。

(四)

紅旭生鴉背 行人踏紫烟 紅旭 鴉背に生じ、行人紫烟を踏む。

松間清響 竹笕注梯田 松間 清響有り、竹笕梯田に注ぐ。

朝焼けの紅が鴉の背に映え、旅人は美しい朝靄の中を行く。

松林の間から清らかな響きが聞こえ、竹の槌からは清らかな水が棚田に注いでいる。

「紅旭」朝焼けの光。「紫烟」美しい朝霧。「竹篋」竹の節を抜いて作った篋。「梯田」棚田。

この日の晩は海田泊。

十日 午前中に広島市街に入り、直ちに頼春水を礎工街もとみやぎ（研屋町）に訪ねる。春水は藩の学問所に行っていて留守。春水の弟の杏坪と久太郎（後の山陽）に迎えられ、待つこと暫くして、春水が帰って来た。山陽とはこのときが初対面である。春水と茶山は七言律詩各一首を作る。

十一日 雨で外出はせず、春水が大坂から持ち帰っていた書画などを観たりして過ごす。

十二日 午は晴れていたが晩はまた雨になった。春水宅に宿す。この日の日記に茶山は山陽に対する印象を次のように記している。

…久太郎甫九歳、秀發不好戲弄。喜客侍坐、終日不倦。學詩及書畫。皆可觀。

…久太郎甫はじめて九歳、秀發にして戲弄を好まず。客を喜びて侍坐し、終日倦まず。詩及び書畫を學ぶ。皆觀るべし。

十三日 この日から茶山らは宿に就いた。午後、杏坪が導いてくれて、国泰寺、白神祠、東照宮、櫻馬場・猿猴橋・京橋を経て逆旅に還った。夜、又、杏坪が訪ねて来る。

十四日 晩に復た雨になり、十六日までずっと雨が続いたので、茶山と春水、杏坪は訪ねたり、訪ねられたりで日を過ごした。

十七日 晴且雨の天候であったが、厳島神社の祭礼見物に出掛けた。途中で母豚が子豚に乳を飲ませている風景に出くわした。日記に次のように描写されている。

…街上見母家乳羣兒。狀不異猫狗。有童誦謝而行。一豚、搖尾而隨。舐舐可愛。

…街上に母家の羣兒に乳するを見る。状は猫狗に異ならず。童の誦誦として行くあり。一豚、尾を揺りて隨ふ。牝豚として愛すべし。

〔誦誦〕猪を呼ぶ声。ここは豚を呼ぶ声。〔牝豚〕毛の短いさま。

『黄葉夕陽村舎詩』前編卷三に次の詩がある。

路上二首（一）

晴川綵舫影 午市畫橋聲 晴川 綵舫の影、午市 畫橋の聲。

垂髮誰家子 累騎老家行 垂髮 誰が家の子ぞ、老家に累騎して行く。

晴れた川にもあい船が浮かんで、昼の市は美しく飾り立てた橋の上の賑わい。

お下げ髪は何処の家の子であろうか、飼ひ豚に二人乗りして行く。

〔綵舫〕美しく飾ったもあい船。〔午市〕昼の市、ここは広島 of 繁華街のこと。〔畫橋〕美しく飾り立てた橋。

〔累騎〕二人乗り。〔老家〕家で飼っている豚。

当時 廣島の街頭には多くの豚が見られたということである。

十八日 宮島に到り、茶山は七歳のとき、祖父と母に連れられてこの地に來た当時のことを思い出した。日記には次のようにある。

余七歳時、曾侍家祖及北堂來此。常時觸事思之、胸中不存寸碧。而今日之宛如夢寐所歷、徘徊移時。則殿樓崑巒隨在、有所識認焉。嗚乎、家祖、捐館三十年、北堂垂白、余亦二毛。追年往時、悲惋淚墮。夜、土晦、觀演劇。余疲甚、獨臥逆旅。作三律。

余七歳の時、曾て家祖及び北堂に侍して此に來る。常時、事に觸れて之を思へば、胸中に寸碧を存せず。而して今日は之れ宛ら夢寐に歷る所の如く、徘徊して時を移す。則ち殿廊崑巒隨在るに隨ひて、識認する所有

り。嗚乎、家祖、館を捐^すて三十年、北堂は垂白^{すんぱく}、余も亦^{また}一毛なり。往時を追年して、悲惋^{ひわん}し涙墮つ。夜、士
 晦、演劇を観る。余は疲れ甚だしく、獨り逆旅に臥す。三律を作る。

「寸碧」少しのみどり。「捐館」死亡する。「垂白」白髪頭。「二毛」白髪交じりの老人。「悲惋」悲しみ嘆
 く。

この日、茶山が作った七言律詩三首の内の一首は次の詩である。

宮島

女兒喧笑亂雲間 云是遥窮絶頂還 女兒 喧笑す 亂雲の間、云ふ是れ 遥かに絶頂を窮めて還ると。

諸殿宛如曾梦境 千崑始認舊看山 諸殿 宛も曾ての梦境の如し、千崑 始めて認む 舊看の山。

階樹幾回添老盖 江波依舊浸孱顔 階樹 幾回か 老盖を添へ、江波 舊に依りて 孱顔を浸す。

憶昔垂髻侍家祖 偷花越蝶向仙寰 憶ふ昔 垂髻 家祖に侍り、花を偷み 蝶を越ひて仙寰に向かふを。

『黄葉夕陽村舍詩』前編卷三三

女の子達の賑やかな笑い声が乱雲の間から響いて来る、遥か向こうの絶頂を窮めて還ったと言う。

諸殿は恰も昔の夢の中に居る境地にさせる、沢山の岩の中に始めて認識した 昔来た時に見た山だと。

階前の松は幾回か 蓋の形の枝葉を広げている、入り江の波は 昔と同じように険しい山を浸している。

昔また幼時だった時 祖父に随つて来て、花を摘み 蝶を趁い 仙人の世界に遊んだことを思い出した。

「千崑」沢山の岩。「孱顔」険しい山。「垂髻」お下げ髪。ここは幼時の意。「仙寰」仙人の世界。

十九日 岩國に往こうとしていたが雨で取り止め。日暮れに広島に還り、頼氏を訪ねる。

廿日 杏坪の案内で広島市の北郊を巡る。夜は広瀬町の多賀庵の水楼で頼兄弟が送別の宴を設けてくれる。

廿一日 春水の揮毫を見たりして、終日費やしその晩も頼家に泊す。

廿二日 いよいよ広島に別れを告げ、海田・瀬野を経て西条に到り、この晩は西条に宿す。

廿三日 嘗てより噂に聞く三津村にある呼石を見ようということになり、賀茂郡三永村の藤春閣を訪ね、三津村の呼石を見に行くことになる。春閣は案内の下僕をつけてくれた。呼石嶺の頂上から瀬戸内海の彼方に伊豫の山々を望む。藤春閣に宿す。

「日記」には次のように記されている。

…日正亭午、下坂而南、沿小澗。左右峻嶺、中間皆梯田、時見佃戸。此爲仁賀村。三里許、一澗自右來合、水聲喧然。水中多昌歌、岸多山茶及合歡花。又四里許、右轉入兔雉谷。崖益夾、逕益巖。雜樹綠濃、欲染人面。鳥則多画眉報春、嚶々如春日。…

…日は正に亭午、坂を下りて南し、小澗に沿ふ。左右は峻嶺、中間は皆梯田、時に佃戸を見る。此れ仁賀村爲り。三里許、一澗右自り來り合して、水聲喧然たり。水中昌歌多く、岸は山茶及び合歡の花多し。又四里許、右轉して兔雉谷に入る。崖益々夾く、逕益々巖し。雜樹綠濃く、人面を染めんと欲す。鳥は則ち画眉報春多く、嚶々として春日の如し。…

…日はちやうど真昼時、坂を下り、小さな谷川に沿って南に向かう。左右は険しい嶺、中間は皆棚田、時に小作人が働いているのを見る。此処は仁賀村である。三里許行くと、一つの谷川が右から流れて来て合流し、水音がかましい。水中には菖蒲が多く、岸は山茶及び合歡の花が多い。又四里許行くと、右に回って兔雉谷に入る。崖は益々夾く、逕は益々巖しい。雜樹は緑が濃く、人の顔を染めんばかりだ。鳥は則ち頬白や報春鳥が多く、互いに鳴き交わしてまるで春の日のようだ。…

「亭午」真昼。「佃戸」人の田を借りて耕作する人。小作人。「昌歌」菖蒲。「山茶」椿の漢名。「画眉」三。」「報春」立春を意味する鳥で、形はホトトギスに似ていると言ひ、一説に「百舌に似てい

るともいわれる。「嚶々」鳥が仲良く調子を合わせて鳴くさま。

呼石嶺に登り着いた茶山はその頂上からの眺めの素晴らしさに感動して『遊藝日記』に次のように認めている。
憩于嶺上、南眺大江、巨島聯亘、小嶼碁布。豫州群峰、懸雜夏雲而出。余興勃然、不能已已。抽筆貌之、士晦
捧紙。余素不能画、且紙爲風所掀舉、幅々然。何翅筆不受意。圍成共笑。

嶺上に憩ひ、南に大江を眺むれば、巨島聯亘し、小嶼碁布す。豫州の群峰、懸かに夏雲に雜りて出づ。余興勃然として、已む能はざるのみ。筆を抽きて之を貌し、士晦紙を捧ぐ。余素と画く能はず、且つ紙は風の掀舉する所と爲りて、幅々然たり。何ぞ翅に筆の意を受けざるのみらんや。圍成りて共に笑ふ。

「聯亘」長く続く。「小嶼」小島。「勃然」突然に起こる。「掀舉」取り上げて弄ぶ。

呼石嶺の頂上に立つて眺めると、大きな島は長く横たわり、小さな島は碁石を撒いたようだ。伊予の島に夏雲が懸かっている。その風景を見たとき興味が急に湧き上がって、捨て去ることができず、筆を執つてその景色を描こうとした。暮庵が紙を捧げてくれた。茶山はもともと画はあまり得意ではない。その上、紙は風によつてひらひらする。「画が上手く描けないのは紙が風によつて翻るからであり、私が下手なのではない」と冗談を言つたりして、二人で大笑いをした、というのである。

『黄葉夕陽村舍詩』前編卷三に次の五言律詩が収められている。三津に至る途中の山の風景である。

仁賀山中

靜聞春鳥轉 遙入夏雲深 靜かに聞く春鳥の轉り、遙かに夏雲の深きに入る。

一徑盤丹嶂 孤村倚碧林 一徑丹嶂に盤り、孤村碧林に倚る。

石香堯蕪氣 谷暗蜀椒陰 石は香る堯蕪の氣、谷は暗し蜀椒の陰。

行問山中俗 堪遺世上心 行きて問ふ山中の俗、世上の心を遺るに堪へたり。

静かに春鳥の轉りを聞く、遙かに夏雲の深い辺りに入って行くようだ。

一筋の小径は屏風のような峯を巡り、ひっそりとした村は碧の林に寄り添う。石は菖蒲の氣に香り、谷は蜀椒の陰になつて暗い。

山を行きながら 山中の俗人の心に問えば、世の中の俗念を忘れるのに十分だ。

〔丹嶂〕屏風のように連なつた峯。〔堯韭〕菖蒲の異名。〔蜀椒〕洛陽灌木の一。「なるはじかみ」その実は光黒、香料にする。〔堪〕十分にできる。

廿四日 三津を経て竹原に至り、頼春風を訪ね一夜を歓談に過ぐす。

廿五日 竹原の春風に連れられて頼家の菩提寺、照蓮寺に登る。

廿六日 午後竹原を発ち本郷へ。春風は尾梨坂まで送つて来て、毛氈を敷き、酒飯を調べて送別の宴を設けてくれた。時を過ごし別れに当たつては、二人の弟子をつけて嶺を渡る所まで送らせた。この夜、茶山にちよつとした椿事があつた。

『遊藝日記』に次のように記されている。

…黄昏、小休道店、星行十里、至本郷川（即奴田川）。見有人持燭涉來、以爲水不甚深、卒爾而厲。中流、水沒腰、殆倒者屢、爲士晦所掖、而纔着東岸。所佩藥囊詩草、及衣袂積鼻皆潛。宿本郷逆旅。食罷、命大園、烘乾諸物。嗚呼、衝暗涉水、常人不敢。況、余輩羸疾之於人乎。記以警他日云。川在官道。往來甚衆。有司、不置一航者何也。

…黄昏、道店に小休止、星行すること十里、本郷川（即奴田川）に至る。人の燭を持ちて涉り來る有るを見て、以て水の甚だ深からずと爲し、卒爾にして厲す。中流、水腰を没し、殆ど倒れんとすること屢々、士晦の掖くる所と爲りて、纔かに東岸に着けり。佩する所の藥囊、詩草、及び衣袂、積鼻皆な潜れる。本郷の逆

旅に宿す。食罷り、大団に命じて、諸物を烘乾せしむ。嗚呼、暗を衝きて水を渉るは、常人は敢てせず。況んや、余輩羸疾の人に於てをや。記して以て他日を警しむと云ふ。川は官道に在り。往來甚だ衆し。有司、一航を置かざるは何ぞや。

つまり夜になって向こう岸に行くのに、川を渡るのが近道だったのであろう。それに「人が灯りを持って渡っていたので、茶山も大丈夫と思ひ歩いて渡り始めた。ところが屢々倒れそうになり、暮庵に助けられて何とか岸に辿り着くことができたが、着ているものから持ち物までびしょ濡れになってしまい、宿についてから火にあぶって乾かして貰った。本郷川は官道に沿うた川で往來する人も多いのに、藩の有司が渡し船の設置をしないとは何ということか」と、自分の無謀は棚に揚げて憤懣やるかたない様であった。

廿七日 小早川隆景の氏寺米山寺を訪ね、三原を過ぎて妙正寺に至る。絲崎に出て酒を酌み交わす。晚尾道に着く。尾道では龜山元助（もと茶山の弟子であった）宅に七月五日まで滞在し、『大学』を講義したり、訪ねて来る人と応対したりして過ごす。勝島敬仲・山田来訪し、氷鯨を恵む。

七月一日 藤井暮庵を先に帰した。島井子瑤来訪。

二日 恵舟師（長門の人）が来訪する。

三日 牛海道士・松本が来訪する。

四日 千光寺に登る。

『遊藝日記』には次のように記されている。

五日 圓識上人見訪。留歡至夜。在尾路八日、皆晴。皆宿龜山氏。諸君無日無夜、無不來。無話無談無不雅。

圓識上人訪はる。留歡して夜に至る。尾路に在ること八日、皆な晴る。皆な龜山氏に宿す。諸君

日と無く夜と無く、來らざるは無し。話と無く談と無く雅ならざるは無し。

茶山はこのような有様で尾道に八日間留まつた。

六日 尾道を発つて神辺に帰つた。

茶山にとって一か月間に亘る『遊藝日記』の旅は、宮島の管弦祭に詣でること、頼春水邸を訪ねることという主たる目的を達したのは勿論、行く先々で文人墨客と出会つて楽しい詩酒徵逐の日々を過ごしたこと、その人々の中には初めての出会いである人（まだ九歳だった頼山陽・春水の弟の頼春風・俳人の多賀庵六合・藤原春閣・僧超倫等）も多々あつたことなど実り多いものであつた。又、嘗てより音に聞いていた安芸国三津の「呼石」を訪ね、実際に大声を出してその反響を試してみたりした。その呼石嶺の頂から遙か遠くに伊予の山並みを望み見て、その素晴らしい景色に感動し、詞ではとても言い表せない、絵筆を執つて描こうと試みたが益々むずかしく、うまく描けなかつたことを「風が紙を翻す」所為にしたりしたこと、夜、本郷川を歩いて渡ろうとして倒れかかり、弟子の暮庵に助けられてかるうじて渡り終わつたが、びしょ濡れになり所持していた藁袋や、詩草、懐鼻（すててこ）等も皆な濡れ、本郷の宿に着いて乾かして貰つたりしたこと等滑稽な体験もした。安芸地方の山間部を歩いたり、瀬戸内海沿岸を歩いたりしていろいろな奇勝にも接することができ、茶山にとっては本懐を遂げた満足以上の旅であつたと言える。

(2) 『北上歴』の旅

寛政六年（一七四九）四十七歳の三月十五日に、妻宣・正二・大介（二人は塾生）・門田氏（妻の実家の人）を伴い、吉野・奈良・京都への七か月近くに及ぶ長期の旅にのぼる。

三月十五日に神辺を発し笠河を経て鴨方に行き、拙齋宅で一泊し、翌日岡山から播磨國・斑鳩村・三石驛へと

向かい、二十二日には舞子濱・須磨・生田と折々に詩を作りながら旅を続けた。生田では楠公碑を訪ね次の詩を作っている。

宿生田

千歳恩讐兩不存 風雲長爲弔忠魂 千歳恩讐兩つながら存せず、風雲 長へに爲に忠魂を弔ふ。

客窓一夜聽松籟 月黒楠公墓畔村 客窓 夜松籟を聽く、月は黒し楠公墓畔の村。

〔黄葉夕陽村舎詩〕前編卷四)

昔南朝と北朝が戦った此処 両方とも今はいない、風雲は相変わらず訪れて忠義を尽くした魂を弔っている。旅の宿で松吹く強い風の音を聞きながら感慨一入、月は曇り楠公の墓のある湊川村辺りは灯り一つない。

二十三日には大坂に入る。京都遊学最後となった安永九年、茶山が大坂に於て、混沌詩社の盟友と詩酒徵逐を重ね、楽しく有意義な日々を過ごした時から既に十五年を経っていた。茶山にとっては忘れることのできない懐かしい地である。しかし、恩師である那波魯堂は寛政元年（一七八九）九月十一日に亡くなっているし、中でもとりわけ親しく交わった葛子琴は、十年前の天明四年（一七八四）五月七日、既に他界してしまっているし、そのとき中心となつて何くれと無く世話をしてくれた中山子幹は、四年前の寛政二年十二月二十日に歿していた。茶山にとつては感慨一入の大坂入りとなつた。茶山は葛子琴を偲んで次の詩を詠んでいる。

浪華二首（一）

不見題詩葛子琴 楚萍謝絮正春深 詩を題する葛子琴を見ず、楚萍、謝絮 正に春深し。

同遊十五年前夢 白髮重來淀水陰 同遊 十五年前の夢、白髮 重ねて來る 淀水の陰。

〔黄葉夕陽村舎詩〕前編卷四)

詩を詠んでいる葛子琴の姿は今は見えず、もの皆盛りを過ぎて春は深まってゆく。

共に遊んだ十五年は昔の夢、私は白髪になつて重ねて淀川を訪ねた。

廿六日、吉野川を渡つて奈良に入り、廿七日には吉野山の桜を見た。日記には次のように書かれている。

廿七日、陰、三十三丁吉野、五十町奥の院、花は九分落ち盡せり。而して他境と比すれば尚多しと爲す。竹林院未だ残せず。晚晴、逆旅に宿す。曾て聞く、山口已に落ちて、山上は方に開くと。今は然らず、大抵落ち盡して、先後上下の別有る無し。存する者、百中の二三、獨り竹林院、重葉を以て、衆花に殿す。杜牧の詩の上半を柱に題して還る。山中、霧島躑躅、石南花、棟棠、鳶尾、山葉盛んに開く。山茶花の大枝、葉の扶疎たる、吾が郷と同じからず。

「棟棠」山吹。「鳶尾」いちはつ。「石南花」石楠花。

芳野では亡き妻や弟汝梗、父や母の想い出に浸り七言絶句三首を詠んでいる。そのうちの二首は次の詩である。

芳野感事三首（一）

哭妻哭弟鬢毛斑 苴杖三年亦病間 妻を哭き 弟を哭きて 鬢毛斑たり、苴杖 三年 亦病間。

誰識浩歌揮暗淚 一簑紅雨入芳山 誰か識らん 浩歌 暗涙を揮ひて、一簑の紅雨 芳山に入らんとは。

妻の死を悲しみ 弟の死を嘆き 鬢の毛はまだらになった、父の喪に服して三年 亦その病中のこと。

誰か知ろうか 大声を挙げて歌い 人知れず流す涙を振り払って、小雨に落花した芳野山に入ったことを。

「哭妻哭弟」天明二年（一七八二）二月十七日妻爲が歿す。その前年の天明元年八月二十五日弟の汝梗が歿している。「苴杖三年」寛政三年（一七九一）二月十八日父樽平が没し三年間喪に服したことを云う。「一簑紅雨」は喪中につく黒色の竹の杖のこと。「暗涙」人知れず流す涙。「一簑紅雨」簑を濡らすほどの小雨のこと。「紅雨」ハハハは落花のこと。

阿嬢往歳故來看 時勸兒曹作此觀

阿嬢あぢやう 往歳こゝろ 故らこゝろに來り看る、時に兒曹に勸む此の觀を作さんことを。

阿嬢到日花方盛 今我來時較已關

阿嬢あぢやうの到りし日花方まさに盛りなるも、今我の來たる時較や已おとに關し。

〔黄葉夕陽村舍詩〕前編卷四)

母は昔こゝろ芳野に來て桜を看たことがある、それで時々子どもらに芳野の桜を看ることを勧めていた。

母が芳野を訪れた時は花が真まつ盛りであつたけれども、今私が訪ねて看ると花は少し盛りを過ぎていた。

〔阿嬢〕母を親しんで言う語。「往歳」昔。「故」特に。わざわざ。「兒曹」子どもら。「曹」は輩。「關」少し盛りを過ぎた形容。半ば過ぎ。

四月に入り、法隆寺・三井の法輪寺・薬師寺・唐招提寺や東大寺・大仏・春日祠・元興寺・般若寺等の寺々を巡り、宇治に向かい、平等院・興聖寺・恵心院を経て、十五年ぶりに懐かしい京都に入った。そして十五年前と同じ四條の俵屋に宿をとつた。中山子幹が亡くなったことは既に述べた通りであるが、この度はその子、子徳(京都の医者)が頻りに往來して、何くれと無く世話をしてくれた。寛政元年(一七八九)「黄葉夕陽村舍」を訪ねてゐる大原吞響と五年ぶりに再會し、旧交を温めているところへ、伴蒿溪が訪ねて來て、留談夜に至つた。京都に入つて十一日まで、茶山は俵屋を出ていない。長旅の疲れが出て、少々体調を崩していたものと考えられる。十二日頃から鴨神社に葵祭を見物したり、医学の師である和田醫國(泰純)を訪ねたり、那波魯堂門の先輩であり、聖護院王府の長史である佐々木良齋を訪ねたり、中山子徳に招飲されたり、子徳に導かれて子幹の墓に詣でたりして、積極的、活動的に行動している。十九日は伊勢に赴く。二十一日は石山寺から近江國の水口までの道中、鳥啼き花咲いて「猶ほ春日の如し」といつた風景を堪能した。二十五日朝、伊勢皇大神宮に參詣し、足を延ばして志摩國に入る。「黄葉夕陽村舍詩」卷四に「伊勢路上」「志州路上」と題する七言絶句がある。鳥羽港に至り、二見浦を経て初めて松魚かつおの刺身を食べる。七言絶句「二見浦」有り。

五月になり、桑名を経て尾張國に入り、熱田・名古屋・清州・小越に至り、木曾御岳・加州白山を望む。大垣で京遊時代親しく交わった医者の飯田玄泉を二十数年ぶりに訪ねた。玄泉は「痿疾いじち」で足腰が立たなくなっていたが、たいそうな喜びようで、一家を挙げて歓待してくれた。関ヶ原に至る途中で長い古詩を詠み、番場で蓮花寺に通り、六波羅を追われた北条仲時とその郎黨、二百八十余人が自刃したことに思いを致し七絶を賦した。「江州路上」と題した七絶も賦す。この辺り歴史を踏まえた詠史詩を多く詠んでいる。約二十日間の伊勢方面の旅を終えて、五月八日に京都に帰って来た。五月十二日、六如上人が訪ねてきたが茶山は不在で会えなかった。茶山が六如上人に初めて会えるのはこれから二か月後である。京都に帰った茶山を訪う者は連日引きも切らず、茶山も知人を訪ね、詩酒徵逐の限りを尽くした。

六月に入り、大原呑響とは特に往来が激しくなった。殆ど毎日のように往来している。安永九年、京都遊学最後となった年、時折訪れた多稼亭が、当時の繁栄ぶりとはうって変わって衰微している様に、茶山は感慨一入のものを感じたりした。何度か六如上人を訪ねるが、その度に不在で会えなかった。

前年の寛政五年（一七九三）に、亡父樽平の喪も明けたので、茶山はその追善供養の為、遺稿の句集を出すに当たって、『三月庵集やよい』を編集し、この旅の間にその跋文を書くことに精を出していたのが、七月に入って漸く終了した。七月三日、中山子徳の下僕、順平が佐々木良齋が病に倒れたことを知らせて来たので慌てて行って見たが、既に頓死していた。安永九年、茶山の京都遊学最後の年、良齋は同門の先輩ということもあり、屢々会って講じたり、飲んで論を交わしたり、名所旧跡を案内してもらったりと、筆舌に尽くしがたい交遊を持ったし、この度も四月十三日と六月二十一日に会っている。最後に会った時から十日余りにしかならないのにと、茶山は非常に落胆して「挽良齋先生（良齋先生を挽む）」と題する長い五言古詩を作っている。その詩の内容から推察すると、返卒中であつたものと思われる。五日に佐々木良齋の葬儀が行われたが、この時も「葬佐長史次日感事而作」（佐

長史を葬り次日事に感じて作る」と題して二十二行から成る五言古詩を作つて「死者自枯朽、生者方忻歡」（死者自ら枯朽し、生者方に忻歡す）、「新人固堪喜、故人益叵捐」（新人固より喜ぶに堪えたり、故人益す捐て叵し）と詠み、人生の無常についての感慨に浸り、九日には良齋の墓に詣で、十八日、弔意を表すために良齋の遺族を訪問している。

七月十五日、大原呑響の招きで月見の宴に出て、蠣崎波響（松前藩に参与し、六如に詩を学び、画を圓山應舉に学び、独特の画法で一家をなしている）・橘春暉（朝廷の医官、石見介に補せられた）と初めての対面をし、春暉が出した白扇に呑響が山を、波響が月を描き、茶山・春暉・呑響・波響がそれぞれ詩を賦した。

八月に入つても茶山は京都に居て、文人墨客と盛んに交遊したが、五日の雙林寺に於る宴飲は、当時の京都に於る文人・画人の知名人を総ざらいした、大変盛大な会であつた。茶山は後に「憶昔三章、呈蠣崎公子」（憶昔三章、蠣崎公子に呈す）と題する七言古詩を作つてこの日を懐かしんでいる。この日初めて会つた人々は、皆川淇園・村上東洲・岸雅樂之介・竹亭・關山・南溪・吳月溪・山本伯庸・奥田兔毛等であつた。又、寺に行く途中で、『雨月物語』の著者、上田秋成に会つたという。秋成には既に四月十五日、和田泰純を訪ねた時、隣霞園の席上で会つているので、二度目の出会いであつた。十日には細合斗南と初めての出会いをもつた。

日記『北上歴』は八月十二日以後が散逸してしまつたものか現在残っていない。茶山はこの後、まだ一か月以上京坂に逗留していた。残念なことであるが、『黄葉夕陽村舍詩』前編卷四に挙げられている詩や、『六如庵詩鈔』二編卷之五の非常に長い七言古詩などによつて、その後のことは推測するしかない。

十三日、蠣崎波響は松前への帰期が迫つているので、圓山の旗亭に茶山初め諸子を招飲した。その席で茶山は次の七言律詩を詠んでいる。

蠣崎公子 將還松前、携具圓山 宴別諸子。席上有詩次韻、以謝。時余亦西歸。

蠣崎公子 將に松前に還らんとし、圓山に携具して 諸子と宴別す。席上詩有りて韻を次ぎ、以て謝す。時に余亦た西歸す。

誰家亭樹好豪遊 置酒飛欄俯帝州 誰が家の亭樹 豪遊するに好き、飛欄に置酒して 帝州を俯す。

一座才名傾上國 滿天風月近中秋 一座の才名 上國を傾け、滿天の風月 中秋近し。

樹連萬井晴雲迴 山擁三宮佳氣浮 樹は萬井に連りて 晴雲迴かに、山は三宮を擁して 佳氣浮ぶ。

明日東西溝水別 停杯深夜悵含愁 明日 東西 溝水の別れ、杯を停めて 深夜 悵として 愁いを含む。

誰の家の亭樹だるか 豪遊するには持つて来いだ、突出した高い欄干に酒宴を開いて 都を俯瞰する。

上方の錚々たる名士が数多く集まる、空いっぱいの清風と明月は 中秋の近いことを思わせる。

樹木は京都の街に連なり 晴れた空は高大無辺だ、山は三宮を抱きかかえて 吉祥の気が浮かぶ。

明日は東西に溝水の別れだと思ふと、杯を停めて酒も進まず 深夜に到り 失望して 愁いを抱く。

「亭樹」東屋と見晴らし台と。「飛欄」突出した高い欄干。「置酒」酒宴を開くこと。「風月」清風と明月。

夜の美しい景色。「萬井」万里四方のことで、ここは京都の街をいう。「三宮」紫宸殿・清涼殿・常寧殿。

この詩の上の欄外に次のように認められている。

是日淇園詩先成、欲示先生。先生拒之曰、時同、処同而、韻同。即有相犯。不得不避也。已而皆成。果並有近中秋三字。六如在傍曰、礼卿田舎漢而、黠不讓都人士。

是の日 淇園の詩 先ず成り、茶山に示さんと欲す。先生之を拒んで曰く、「時 同じく、処も同じくして、韻も同じ。即ち相犯すこと有らん。避けざることを得ざるなり」と。已にして皆成る。果たして並びて「近中秋」の三字有り。六如 傍に在りて曰く、「礼卿 田舎漢にして、黠きこと都人士に譲らず。」と。

「淇園」皆川淇園（一七三四〜一八〇七）。当時の著名な宿儒。名を願、字は伯恭、淇園と号した。六如と

同庚。門弟は三千人余とも言われている。経書に通曉し、詩文を善くし、特に易学に詳しい。絵は圓山應舉に学び、俗曲や三味線にも長じ、多芸多能の士であった。

この話は茶山の面目躍如たる一面を窺わせるものである。

茶山がいよいよ帰郷の途に着いたのは九月の晦日であったことが、次の「九月盡夜宿須摩」(九月盡夜 須摩に宿す)と題した七言律詩によつて解る。

九月盡夜宿須摩 九月盡夜 須摩に宿す

村墟蕭寂故關隈 一路清霜野草摧 村墟 蕭寂たり 故關の隈、一路 清霜 野草摧けり。

今歳三秋今日盡 此宵孤客此郷來 今歳 三秋 今日に盡き、此の宵 孤客 此の郷に來る。

林昏沙步潮偏響 浦冷漁舟火未回 林 昏くして沙步 潮 偏に響き、浦 冷かにして漁舟 火未だ回らず。

德曜不知何處泊 島雲汀樹斷鴻哀 德曜 知らず 何れの處にか泊まるを、島雲 汀樹 斷鴻哀しむ。

内在浪華患痞即浮先發

『黄葉夕陽村舍詩』前編卷四)

村里はひっそりとして 古關の隈辺りはもの寂しい、路には清らかな霜が降り 野草が頽れている。

今年の秋三か月は今日で終わり、今宵は独りぼっちの旅人として この村里にやって来た。

林は昏く沙浜を歩けば 潮はひたすら響き、浦は冷かで 漁舟の火はまだ帰って来ない。

妻は今夜 何処に泊まっているのだろうか。島に掛かる雲 汀の樹を見るにつけても 残された私は心が痛む。

「三秋」秋三か月。三季、即ち九か月。茶山「北上歴」の旅は、寛政六年(一七九四・四十七歳)三月十

五日から十月六日迄の約十か月であった。「德曜」後漢の人。梁鴻の妻孟光の字。孟光は肥えていて色が黒く醜く、石白を持ち上げるほどの力持ちであった。年三十にして梁鴻に嫁し、裝飾甚だしくしたが七日に至るも鴻は見向きもしない。光は引つ詰め髪にし粗末な布衣を着て、炊飯の具を執つて甲斐甲斐しく働い

た。鴻は「これ真に梁鴻の妻なり」と喜んだ。梁鴻と霸陵山中に耕耘織作して衣食に供す。後、会稽に至つて賃春（人に雇われて米を撞く）を事とした。〔後漢書〕一一三。『蒙求』標題「孟光荆釵」。〔斷鴻〕

独り残された我が身（茶山）を梁鴻に準えた。

この詩の終わりに、「内在浪華患疝即浮先發」（内、浪華に在りて疝を患ひ、浮に即きて先發す）という注があることから、同伴の妻宣が浪華で疝を患い茶山より先に舟で帰郷の途に着いたことが分かる。『黄葉夕陽村舍詩』前編卷四の終わりに近く「備前道中」と題する次の七言絶句がある。

備前道中

路傍人語較多訛 喜見郷園在伐柯 路傍の人語較訛多く、喜び見る郷園伐柯に在るを。

回首尾濃經涉地 暮山低處一鴻過 首を回らせば尾濃經涉の地、暮山低き處一鴻過ぐ。

道端で話す言葉に 大分郷土の訛が多くなつた、郷里が近づいたことを知り嬉しくなつた。

返り見れば遠く尾濃にまで足を延ばしたものだ、感慨に耽つていと日暮れの山に鴻が一羽飛んで行つた。

『伐柯』斧の柄にする木を伐る意。その伐る長さは、手にする斧の柄が基準になる。すぐ近くにある。『詩經』豳風「伐柯」に「伐柯如何、匪斧不克」（柯を伐るには如何せん、斧に匪ざれば克はず）とある。〔尾濃〕尾張と美濃。〔經涉〕わたり歩く。通り過ぎる。

茶山は故郷を間近にして、半年以上も離れていると、道ゆく人の訛もさすがに懐かしく、思えば尾張や美濃の辺りまで、遠く足を延ばしたものだとしばし感慨に耽つた。最後の日付までの日記が残っていないので、神辺に帰り着いた日時がいつであったかを確定することはできないが、当時の旅程から考えて、おそらく十月の五、六日頃であつたと思われる。

茶山にとつては妻を連れての初めての長旅で吉野・奈良・京都を歩いた。京都ではそこを拠点として宇治・尾

張・美濃に出掛け、再び京都に帰ってからは旧友を訪ねて旧交を温め、更に終生の友となる六如上人・蠣崎波響と初めて出会った。皆川淇園・村上東州・岸雅樂之介・呉月溪等の画人等とも初めての出会いであった。その他、橋南谿・高桑蘭更・山本伯庸・奥田兔毛ほか、枚挙に暇ないほど多数の文人墨客とも初対面をして、益々交友関係は豊富になり、何不足ない充実した実り多い半年余りの旅であった。〔北上歴(曆)〕詩五十九首有り〕

初めにも述べたように、茶山は最後の京都遊学を終えて、郷里神辺に帰り、初めのうちは医業にも携わりながら、塾「黄葉夕陽村舎」を開設して、近郊の子弟の教育に関わった。「黄葉夕陽村舎」と称する時期は十数年である。神辺は当時、山陽道の宿場町として江戸や京坂に赴く人々の中継点であったことも相俟って、さまざまな文人墨客たちが、道すがら「黄葉夕陽村舎」に立ち寄り、客好きの茶山と閑話を交わしたり、数日間を費やして寺社巡りをしたり、花を訪ね月見の宴をもって詩会を催すなど、その交友は非常に幅の広いものとなり、茶山の詩人としての声名は漸次世に広まっていった。

二、「廉塾」の時期

茶山が最後の京都遊学を終えて郷里神辺に帰ってきたのは、安永九年(一七八〇)三十三歳の五月下旬であった。その翌年、塾「黄葉夕陽村舎」を開設している。この塾は十数年間続いたが、寛政八年(一七九六)四十九歳のとき、福山藩の郷塾として取り立てて貰いたい旨を願い出て認可され、「黄葉夕陽村舎」という呼称を「廉塾」と改めた。ここでは、茶山が自分で開設した塾を、「福山藩の郷塾に取り立てて貰いたい」と考えた経緯や理由、「廉塾」に於る学習や日常生活、塾の経営、茶山と塾生との関わり、「廉塾」の時期の茶山の行跡、茶山亡き後の

「廉塾」等について見てゆく」ととする。

1、塾「黄葉夕陽村舎」移管の理由

「郷塾取立に關する書簡」(正式に藩に差し出す前に藩の主だった家老に見せた「草稿」の類)には、
「……そもそも此事、心くミ候こと久しき望に候、あらかた可申上候、御聞可被下候。」

即ち、「そもそも塾「黄葉夕陽村舎」を藩の郷塾に移管したいということを中心の内に思い始めたのは、随分以前からである。だいたいのところを申上げるので聞いて欲しい。」と前置きして、次のように述べている。

神辺と申処ことの外悪風俗之処にて、村にて歴々など申てはかまきありき候人までみな博徒ニ候、われもあやします、人もゆるし、親戚も見のかし候故、わたくしなともはたち計迄ハはくちもうち富第一をもかひ候ほとニ候へハ、酒色などの悪行ハいふことをまたす候、其中ニふとはいかい発句てふ物をいたしおほへ候、それよりうた詩などゝすこしツ、読書ニむかひ候、人ハ馬鹿ヨあほうよと指笑いたし、まことに齒セラレヌと申位ニ候へ共、病身になり候か幸にてやめもいたさず、先医と申おもてむきにいたし故書をよミ候か遠慮にもなひやふに候、これすこ計のたねに候哉。弊弟・士晦などもよみ、其外すこしつゝ雅趣ニむかひ候人も出来、只今の二十三十位の人ニハはくちうち候少年も無之候、これハ料介父秀介他所より養子ニ来候人にて、はくち不存、すこし書物すきてこれら大ニたすけ候やうにて、されハ少々の学種たへ不申候へハ、後來あるひハ人材を出し候やうにもなり可申と存候もひとつの望ニ候。

「神辺はことの外、悪風俗の処で、村でも身分や家柄の高い人々まで博徒である。自分なども二十歳くらいまでは博打も打ち、一攫千金を夢見て富籤なども買い、酒色などの悪行にも耽っていた。其のうちにふと俳諧発句を

覚え、歌・詩・読書などに向かつていった。人は馬鹿よ阿呆よと指さし笑つたが、病身であつたのが幸いして読書をやめもせず、先ず医者になるという表向きで遠慮なく故書を読むことができた。これが少しばかりの種となつたのであろうか。自分の弟（恥庵）や士晦（藤井暮庵）なども読書するようになり、其の外少しづつ雅趣に向かう人も出て来て、只今の二十、三十位の人では博打を打つような少年は無くなつた。士晦の父秀介が他所から養子に來た人で博打も知らず、少し書物が好きであつたことも大いに助けとなつた。このようにして少しばかりの学種が絶えなかつたので、将来或いは人材を出すようになるかと思ふのが一つの望みである。」

と云うのであり、続いて、

さて弊弟・士晦などよミ候而も自願候ニ、才ハ長したるにもせよ、書ハおゝくよむにもせよ、わたくしほとこのミ候やうにハ見え不申、さすれハ一変いたし候而此事たえ候やうにもなり行候覽、何なりとよまねハならぬことをこしらへをき候ニしくわなく候、第一ハわたくし病身にてすこしつゝよミ候書も世において治済の補もなく候。一ツ一粒の種のこしをき候こと、カノ孔子如來報恩謝徳のひとつにも候覽、箕浦か一句一章ニ而もおたやかに説候半ハ、天地へ之忠と被申候も先得我心と申すやうに感心候ことニ候。

「私の弟や士晦などは読書をする方だと思ふ。才も長けているし、書も多く読むが私ほど好むようには見えない。そうであれば、いつ気が変わつて此の事が絶えてしまうようなことになるか分らない。何なりと読まねばならぬことを拵えておくに越したことはない（例えば塾など）。一つには、私が病身で少しづつ読む書も、世の中を治め救う助けになることもなくなるかもしれない。一つ一粒の種を残して置くことは、孔子や如來への報恩謝徳の氣持ちの一つでもある。箕浦の一句一章でも、穏やかに説くことが出来れば、天地への忠ということでもあると我が心に満足できることだ。」

さてまた昇平二百年、在々処々に鋤鋤取らぬ人、城市に算をせぬ人、肆頭に坐せずしてすむ人も少からず、其間何をしてくらし候事や、この学種さへ有之候ハ、数人の後に聞く人世をさとし候人出生すまじきや、上ハ茶香、中ハ猿楽、下ハ賭博にてこの昇平を過し候も口おしき次第之ならずや、左道の民をまとハし候ことみな民の愚より入り候、…されハ暗夜二一点の火のこりたることく、たとひ一郷一國をてらすことあたわすとも、これまたすこしのたねにて、いくつの挑燈にもなるへきに候へハ、この後の天意人意をまち候、これも一端に候。

「昇平の世となつて二百年、あちこちには働かなくても済む人が少なくない。その間何をして暮らしていることやら。この学種さえ有れば学問を聞いた人の中、五、六人の中で一人くらいは、世をさとす人が出て来ないとも限らない。茶香や猿楽や賭博でこの昇平の世を過すのは残念なことではないか。邪道を歩む民を惑わすことは、皆な民の愚から入ってくるのだ。だから暗夜に一点の火が残つたように、たとひ一郷一國を照らすことができなくても、少しの種で幾つかの燈を挑げることにもなるはずだ。この後の天の意志人の意志を待ちたい。これも学種を絶やさないと私の気持ちの一端である。」

と更に自分の気持ちの一端を述べ、また続けて、

さて又、武ハ講する人國々にミち、文ハ日々枯々になり行候へハ一髪一糸（き）にても引きとゞめ度存候志ハ、わか大日本國へ露計の忠にてハ無之候や、まして文なくハ武も根本なく統紀なく、武ありても真の武にあらすなり行くへきに候へハ、武のためにもまたたすけの種に候やとも奉存候、小事ニてもまた無統の一事天よ後人よ預メすへからす候へとも、おもひ入候へハいたしかけ候ニ而候。

「さて又、武の方は講義をする人が國々に満ちているが、文の方は日々枯れ枯れになつてゆくので、一本の髪の毛一本の糸くらいでも引きとどめたく思う志は、わが大日本國への僅かばかりの忠である。まして文がなければ

武も根本はなく、締まりがなく、武が有つても眞の武ではないものになつてゆくに違いないと思う。だから武の爲にも又、助けの種になることと思う。私の思っていることは小さく、又きまりのないつまらぬ一事であるかも知れないし、先走つてすべきではないかも知れないが、思ひついたので致しかけたことである。」

私学問未練行跡猖狂人にしへ人をさとすほどの才徳あるにあらざれとも、所謂無仏処称尊にて人に物もらひ候事あり、その辞すへからさる八人にあつておきたるものつもりてすこし計になりたるを、わか私事二用ひすして、これにてか様なること管候ハ、上ハ天、下ハ地、外ハ人、内ハ心への申わけの心にて候、さてこれもまた、私無病息災二候か家産富有二候かなれハ、さして急候事もなく候へとも、わたくし病氣年々にあしく、かくてハ久しく此世にあるへきにあらす候故、此意をも上むきへ申候而急候、さて家産もややもすれハ右之品をさへ取かき候半かと氣遣仕候ほと二候へハ、只今断然として願出申てハ行さきいかゝなり行候事もしれ不申候。…

「私は、学問がまだ未熟な者や、行跡が激しく、狂つた人に教え諭すほどの才智と徳行が有るわけではないが、まやかし坊主のようなことをして人に物をもらつたことも有る。断ることの出来ないものは人に預けおき、その物が積もつて少しばかりになつたのを私事に用いないで、このような塾を営むのは、上は天、下は地、外は人、内は自分の心への申し訳である。これも私が無病息災であるか、家産が富有であれば、それほど急ぐこともないが、病氣は年々に悪く、こんな様子では長く此の世に有ることもなからうかと思われるので、此の気持ちをお上へ申し上げようと急いだ次第である。さて、家産もどうかすると、右の品をさえ不如意になることもあるかと氣づかわれるので、只今、どんなことがあつても願ひ出なければ、行き先どんなことになりゆくか分からないからである。…」

と述べ、そうして最後に、

郷隣博徒之類・妖僧之類、わたくしをにくミ候事あたの如に候へハ、これらの類強て山の慾のと申たて候半もしらす、其外ハ大抵物ほしからぬをも存候ハん、また病身蒲柳いつ迄いきて何にするといふ事のなきも大抵人のしる所と存候。廿年間社倉かたちのことおもひ付候而麦少々出し、人にもいたさせたくわへて三四十石にもなり候、折あしく凶年にて直二分与いたし候、かくの如キ事三度一度は米なり、ことしもまたいたしかけ候、さてその分与いたする時ハ、一度ハ粥にいたしたることもあり、いつれとも朝へ願出候例也、いつもわたくし首倡なれともミナ庄屋おもひつきにいたさせ候而、わたくしともことハ隣人もしり不申位ニて候、これらもまた名聞すきとも人ニおもわれす候一端也、其外朝よりはしめ申上候通の思召など承候而も、弊弟・広右衛門などにもはなし不申候、かかることにても何そ規規する所ありてかくこしらへ候たくミともおもひ候人もあるまじきかと奉存候、左候へハかくへつに人言をおそれ候こともなく、すこしのことハ今にも畸人の所為、俗の毀やぶ咲さかをいたし候こと甘分いたし候心も一半有之候。

「毀咲」嘲り笑う。

「隣り近所の博徒の類・妖僧の類は、私を憎むことは仇の如くだから、私の行為を山の欲のと申し立てるかも知れないが、其の外大抵の人は私が物をほしがらない人間だということをよく知っている。又病身で体質が弱くいつ迄生きて何するという事のない人間だということも、大抵の人の知る所である。廿年間社倉の形態のことを思いついて、麦少々を出し、人にも出させ蓄えて三四十石にもなった。折悪しく凶年で直に分与した。このようにことが三度、一度は米である。今年もまた出した。さて、その分与致す時は、一度は粥に致したことも有り、いづれも朝へ願ひ出るならわしである。いつも私が唱え始めるのだが、皆庄屋の思いつきにさせて、私どもの事は隣人も知らないことである。これらも又、世の聞こえが好いとも人に思われぬ一端である。其の外朝から初め申し上げた通りの思召しなど承つても、弟・広右衛門などにも話してはいない。このようなことでも、何か期待する所が有つてこのように拵えた巧みと思う人も無いであらうと思う。だから格別に人が云うのを恐れること

もなく、少しのことは今でも匡交わりな人のせい、俗の嗤笑も甘んじて受ける心も半分はある。」
つまり、「私は世に媚びることの出来ない性質だから、こうした行為は決して欲から出たことではない」と付け足し、更に、

さてかの郷塾下より願出しこしらへ候こと周防宮市に有之、肥前佐賀に有之、さて大坂の懷徳書院也、結局藤樹先生之ことハわたくしもことしはしめて見申候、この事内願いたし候よりはるか後也、然ともこれハ藤樹先生カ先生ゆへ自然と出来たるにて、营造願出候様のことハきこへ不申、わたくし了簡ハ宮市位のことにて、後々にいたりてハ、家のミのこり候やうの事もあるへし、家もなくなり候こともあるへし、この家ハむかしかやうのことありし家なるよしさいひて更始する人出来んもしれず、またむかしハかることありし郷のよしなどいひて、千百年の後再造する人出来もしれずなとかすかなるたのミにて候、学癡学迂など申ものか、御一笑可被下候、書かゝり候而おもひつき次第前後もなく重複もあり闕略も有之候、大抵鄙意御推度御よミ可被下候。

「さてかの郷塾下より願ひ出て拵えることは、周防宮市（現在の山口県防府市宮市町）にあり、肥前の佐賀にあり、さて大坂の懷徳書院にもある。結句藤樹先生のことハ私も今年初めて見た。この事を内々に願ひ出るよりは遙か後である。そうではあるがこれは藤樹先生か、先生故自然と出来たのであつて、营造を願ひ出たようには聞していないので、私の了簡では宮市位のことよい。後々に到つては、家だけが残つてしまつたような事もある。家もなくなつてしまふようなこともあるだろう。この家は昔このような事があつた家であるなどと、沙汰をして再興をする人が出て来るかも知れない。又昔はこんなことがあつた郷だなどと言つて、千百年の後に再造する人が出て来ないとも限らないというのがかすかな頼みである。学癡学迂などと申すものか、御一笑下さい。書きかかり思いつき次第、前後もなく重複もあり闕略もある。大抵小生の考え御推量いただき御読み下さるようお願い申し上げる。」と結んでゐる。

以上、縷々述べているが、要点は神辺の地に「学種」を残したいということである。「学種」を残すには「塾」の永続が必須の条件となる。神辺という処は、風俗の乱れの甚だしい処であった。それが「教化」によつて少しずつ良くなっていった。学問がなく愚かであるところから、邪道に陥ることもある。これらはものを考える力、判断力が備わっていないからで、そのような愚かな道に迷い込まない為にも、学問を身につけることが大切だと説き、だからこの地に是非とも「学種」を根付かせたいと言っているのである。自分が病身でいつまで生きられるかわからないこと、自分の弟や、弟子の士晦（藤井暮庵）などは今のところ何とか「もの」になりそうだが、何処まで当てになるかその確証はないこと等を挙げて、塾を永続させる為には塾を藩に移管することが、最も賢明な策だと考えるというのである。

尚「黄葉夕陽村舎」という塾名は「茶山先生行狀」（頼山陽撰）に、「就其家東北、河堤竹林下、築村塾、帶流種樹。對面之山名黄葉。因曰黄葉夕陽村舎。」（其の家の東北、河堤竹林の下に就きて、村塾を築き、流れを帯び樹を種う。對面の山は黄葉と名づく。因りて黄葉夕陽村舎と曰ふ。）とあるように、塾は邸宅の東北を流れる高屋川の堤に沿った竹林の下に建てられ、そこから眺められる黄葉山に沈む夕陽が美しいところからその塾の名を「黄葉夕陽村舎」と名づけたのである。その塾「黄葉夕陽村舎」を福山藩に移管した時、名称は「廉塾」と改称された。但し、建物が福山に移転したわけではないし、実際に経営する人が変わったわけでもない。建物は元のまま、経営も管理も従来通り全て茶山の一手に委ねられていたので、実質何等変わったようには見えない。だからここを訪れる人は相変わらず「黄葉夕陽村舎」と呼ぶ人が多かったようだ。元々この塾は「閭塾」と呼ばれたり、「神辺学問所」と呼ばれたりもしていた。「廉塾」と名称が変わっても相変わらず「閭塾」とか「神辺学問所」と言う人もいた。（『福山市史』中巻）「廉塾」という塾名の由来についても、その記された資料は現在のところ分かっていない。「清溪堂白」の「廉」ではなからうかと推測するだけである。

2、塾生の生活

『暮庵先生行狀畧記』に「(寛政)九年丁巳正月廿六日、先生來り、閭塾(「廉塾」とも呼ばれていた)ノ支配を付屬セラル」とあるところから、茶山は藤井暮庵(茶山が二十八歳の時、暮庵は九歳で茶山の初めての弟子となった)を訪ねて廉塾の運営を委嘱したことが分かる。廉塾は原則として全寮制であったが、近隣であったり、事情があつたりして自宅から通つてくることも認められていた。集団生活であるから日常生活についても教育的指導がなされていた。学習面について、或いは生活面について自ら秩序が不可欠となつてくる。そこで茶山は「廉塾規約」を作つた。「廉塾規約」は「覺」として「学習面」、「礼儀作法面」について二十五項目、「雜司之事」として当番の役割十項目を設け、最後の三項目に茶山の学問観とも云うべきものが述べられている。ここでは廉塾に於る学習や日常生活を「廉塾規約」と重ね合わせながら見ることとする。

(1) 学習

廉塾の教育は講釈が中心であり、講義はだいたい四書五経を中心に漢学の素養をつける代表的な漢籍を用いていた。こういつた資料がきちんと纏められて残っている訳ではなく、北條霞亭が弟に与えた書簡(『鷗外歴史文學集』第十卷)、『福山市史』中巻、備後史談、年表などあちこちに見られるものによつて、だいたいのところを知るだけである。講義について以下に掲げる。(主として『福山市史』中巻による)

(1) 塾の講義

寛政十年（二七九八）

藤井暮庵

一月八日 茶山の代講で『易』を講義。〔菅茶山』上〕

永富充國

寛政十年四月二十七日から寛政十一年四月二十日までの一年間、廉塾に滞在。その間（七月十八

日から八月十日まで）『儀禮』を講義し（十二月半ば頃から寛政十一年四月二十日までの百二十日

間）『周禮』を講義す。〔暮庵先生行狀畧記〕

寛政十二年（二八〇〇）

藤井暮庵

一月八日『論語』を講義（茶山の代講）。隔日『禮記』〔暮庵先生行狀畧記〕

茶山

四・八の日『中庸』『杜律』 隨時『蒙求』

仲立大蔵（都講）『孟子』〔菅茶山』上〕

詩文を作る会が毎月六度開かれていた。「廉塾規約」に「詩文会者月に六度有之候得者其外妄に作るへからず、読書を第一に可被致候。詩文も読書にあらざれハ出来不申候物ニ候、六度者かけぬ様に作るへく候」とある。

享和四年（二八〇四）（享和四年二月十一日に文化と改元）

茶山は阿部侯の命で、一月二十一日江戸へ出府する。留守を都講の松下敬二（播磨曾根の人。「廉塾」都講を六年勤めた）に託す。〔備後史談』九卷十二號・十卷二号〕

藤井暮庵

正月二十八日より茶山の代講で『論語』を講ずる。『暮庵先生行狀畧記』に「先生（茶山）留守中、

毎月四八ノ會怠ラス出勤イタス由命セラル」とある。

文化三年（一八〇七）九月八日

萬波醒廬

『中庸』『費隱章』を講義。

文化七年（一八一〇）八月（一八一二）

頼山陽（都講）

『論語』『日記故事大全』

文化十年（一八一三）八月

北條霞亭（都講）

『大學』『中庸』『詩經』（『鷗外歴史文学集』十卷）

文化十二年（一八一五）

北條霞亭

隔日 『左傳』『書經集傳』

文化十三年（一八一六）

北條霞亭

隔日 『左傳』『書經集傳』『杜律』『大學』『中庸』

『周易』『近思錄』

文化十四年（一八一七）

北條霞亭

隔日 『小學』『詩經』『文章軌範』『孟子』『杜律』

文政二年（一八一九）四月

茶山

隔日 『中庸』『唐詩選』

北條霞亭

隔日 『易經』『古文眞寶』

十月

茶山

隔日 『孟子』『近思錄』

北條霞亭

隔日 『莊子』『詩經朱傳』

文政二年といえは茶山は七十二歳であつた。その頃に茶山の名前が見えるということは、藩主阿部侯に従つて江戸へ長期の出府をしたり、長期の旅行をしたりした以外は七十歳を越えても尚、講義をしていたものと考えられる。また、『暮庵先生行狀畧記』や年表などによると廉塾の都講以外に、偶々訪ねてきた儒者などが講説をすることもあつた。寛政十年（一七九八）四月二十七日、永富充國が廉塾に来て、寛政十一年五月まで約一年間滞在中である。その間、七月十八日から八月十日まで『儀禮』を講じ、十年十二月半ば頃から、十一年四月二十日まで百二十日間『周禮』を講釈している。『暮庵先生行狀畧記』には「此冬、先生（先生ハ長門ノ人、肥前五島儒臣トナル、今致仕シテ上國ニ遊フト云）閻塾ニ於テ『周禮』ヲ講ズ。毎日出席、講ヲ聽ク。十一年己未四月廿日畢ル。講釈凡百二十日、筆記三冊アリ。五月、先生、閻塾ヲ辭シ市村箕浦氏ニ赴ク」と記されている。文化三年（一

八〇六）九月七日には萬波醒廬（岡山藩の儒官、藩校の教授）が廉塾を訪れ、翌八日の晩に『中庸』の「費隱章」を説いている。醒廬は日記に「八日晚（略）余、中庸の費隱章を講ず。主人の請に應ずるなり。（略）」と記している。『暮庵先生行狀畧記』にも「文化三年九月八日、間塾ニ於テ備前萬波先生ニ謁見、中庸ノ講を聴ク」と記されている。茶山が長期の旅をして留守の間は北條霞亭が代講をしていた。文化十五年戊寅（一八一八）三月十七日に弟の碧山に寄せた書簡に次のように認めている。

茶山翁六日發裝留守中寂寥罷在候。殊に留守故先生講業等迄相務、日間夜分大方在塾いたし、殊更当春は俗了、花は已に爛落いたし候へども、未だ一度も出門不仕候。夫れに塾生に大病人有之、何歎と詩も一向無之候。一昨日（三月十五日）みのの山伏體圓と申が尋申候。茶山を態々問參り候もの、十一年前（文化丁卯）に居申候人のよし。

（茶山は文化十五年三月六日から五月二十九日まで、『大和行日記』の旅に出ている）

(2) 学習の様子

「廉塾」には次のような「規約」（『広島県史・近世資料編VI』）があった。「規約」を作った理由を茶山は次のように述べている。

読書の人銘々行儀相正し候事者勿論に候へ。日々よみ聞かれ候本ミな其の事ニ候ゆへ、当塾出来候より作法の事別に定めも不致候。然処まま心得違の人有之、色々の事出来候得者、今月一つ今年一つと制禁を立て候事に候。然処書生衆段々入替り、其事未承知無之方も有之候様に相見候へ。仍而今度壱所にかき集め御目にかけて申候。面々々と熟覽有之相守り候様被致度候。

即ち、「元来、読書の人が行儀を正すのは当然の事である故、これまで別に作法のことなど定めもせずでしたが、

心得違ひをする人がまま出て来た。今月一つ、今年一つと色々「禁制」を立てて来たが、書生たちも段々に入れ替わつたので、承知してない人もあるだろうから、この度それを一書に書き集めた」と言うのである。学習面のことにについては次のように述べられている。

一 素読いたし候人日々かけぬ様に受け習ひ可被致候。講席不参の節ハ其訳可被申出候。

一 受ならひ或者さらへ等をも随分静にし、文字覚へ候様可被致候。妄りに大声被致候てハ、余人の妨げにも相成申候。平生書物或ハ机の上を跨越へ候事、有之間敷候。

一 講釈・輪講有之候前に、其の書を熟読いたし、席後に又再見いたし聞漏し候処ハ可被尋候。講席にて互に顔を見合せ、或者笑ひ、或者睨ミなといたし候事有之間敷候。中坐被致間敷候。懶眠被致間敷候。

一 詩文会者月に六度有之候得者其外妄に作るへからず、読書を第一に可被致候。詩文も読書にあらざれハ出来不申候物ニ候、六度者かけぬ様に作らるへく候。

一 一塾の書物内分ニてとり出し候事無用ニ候。借覽いたし度候得者主人へ可被申出候。

以上を纏めてみると、

「素読は毎日欠かさないこと。不参加のときはその理由を申出ること」「学習をしたことは静かに復習をする」と。文字もしつかり覚えること。大声を出したりして人に迷惑をかけぬこと」「講釈・輪講がある前は予習をし、終わつた後は復習をして聞き漏らしたところは尋ねておくこと。講義中は私語をしたり、ふざけたり、居眠りなどしないこと」

とあるが、次に挙げる詩を見ると結構守られていたようだ。

即事贈三谷子功諸子 即事 三谷子功諸子に贈る

寒夜衰翁夢易驚 愁心空伴一燈明 寒夜 衰翁 夢驚き易く、愁心 空しく伴ふ一燈の明。

書寮頼有君曹萬

喜聽伊吾徹曉聲

書寮

頼さいはひに君曹の寓する有り、喜びて聽く伊吾曉に徹するの聲。

〔黄葉夕陽村舍詩〕前編卷八

老人（茶山は六十歳）のことで早晩に目を覚ました。その茶山の耳に夜を徹して素読をしていたであろう塾生子功の朗読の聲が聞こえてきた。ああ、こんなにも頑張っているのかと、その聲は茶山を感動させたのである。三谷子功は寮の室長であった。

夏日雜詩十二首（十二）

清渠南北列書寮

隔柳唔啣聽不覺

清渠

南北書寮を列ね、柳を隔てて唔啣ごい聽かまひしからざるを聽く。

一聞水流晴意響

兩邊燈影夜涼饒

一聞いっかみの水流

晴意響き、兩邊の燈影夜涼饒しげし。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷八

復習をしているのか、それとも予習であろうか。「唔啣」は讀書の聲であり「聽不覺」は「喧しくない程度に聞こえてくる」のである。熱心に素読をしている塾童の様子が窺える。

次は、文化六年十二月二十九日、頼山陽が都講として初めて廉塾に來た時の詩である。（十首中最後の句）

赴備後途上

旅館寒燈句 平生徒讀過

旅館寒燈の句、平生

徒いたちに讀み過す。

今宵聞爾誦 涕泗忽滂沱

今宵爾その誦を聞き、涕泗忽ち滂沱たり。

山陽が廉塾に着いたとき、塾生（又は塾童）が盛唐の詩人、高適の「除夜作」を朗誦するのを知り、漫ろ身に浸るものがあつたと詠んでいる。「聞爾誦」というのは寮で素読をしている塾生の声を聞いたというのである。

塾生の学習に対する熱心な姿勢、それもよそ行きではない平素の姿が窺える詩である。勿論此の詩の主題は山陽自身の心情を詠うものであるが、その素材の一つに実際に聞こえてきた塾生の朗誦の聲が、詩の中心とも云うべ

き転句に据えられて、学習に熱中している塾生の様子を彷彿と浮かび上がらせる。

〔「旅館寒燈句」は、一家団欒、楽しかるべき除夜を旅の途次に迎えて、一際募る望郷の思いを詠んだ、唐の高適の「除夜作」旅館寒燈獨不眠、客心何事轉凄然。故郷今夜思千里、霜鬢明朝又一年。のこと〕

又、文化三年六月十七日、伊澤蘭軒が長崎に行く途中、廉塾に立ち寄った。蘭軒の『長崎紀行』にその時の様子が、次のように認められている。

茶山の廬驛に面して柴門あり。門に入て數歩、流渠あり。埧橋を架て柳樹茂密、その上を蔽ふ。茅屋瀟灑、夕陽黄葉村舎の横額あり。…屋傍に池あり。荷花盛に開く。渠を隔て塾あり。槐寮といふ。學生十數人案に對して書を讀む。

「學生十數人案に對して書を讀む」というのだから、塾生か塾童が机に着いて講義を受けている様子が見えたのであろう。学習に余念のない塾童の実態を思い描くことができる。

廉塾の夏の講席は暑い。それも並一通りの暑さではない、「暑若煨」なのである。それを我慢して一生懸命に学習をして「やれ終わった」と帰って行く様子を詠った詩「夏日雜詩十二首（十）」がある。

村童日日挾書來 講席偏愁暑若煨 村童 日日 書を挟んで來る、講席 偏に愁ふ 暑の煨くが若くなるを。

歸路逢牛臥涼處 直將牧豎疊騎歸 歸路 牛の涼處に臥するに逢ひて、直ちに牧豎と疊騎して歸る。

〔「黄葉夕陽村舎詩」後編卷八〕

「煨」は煨火、埋すみ火のことで、煨火が施されているのではないかと思えるほど暑い。そんなに暑い講席で懸命に学問に取り組む塾童の姿が、今日の前に見ているかのように浮かび上がって来る。

次の詩は手習いに疲れて硯を洗った塾童が、洗い終わってもなお流れの水を弄んでいる。学習の場の一風景で

ある。おそらく根氣を詰めて一心不乱に手習いをして、すっかり疲れてしまったのであろう。清らかな流れの水に手を浸して暫くの間、気晴らしをしている様子が微笑ましい。

即事

垂楊交影掩前楹 下有鳴渠徹底清 垂楊影を交へて 前楹を掩ひ、下に鳴渠の徹底清める有り。

童子倦來閑洗硯 奔流觸手別成聲 童子倦み來りて 閑に硯を洗へば、奔流手に觸れて別に聲を成す。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷四

しかし、何と言つても子どものことだから時には羽目はずすこともあつた。

偶成

隄防暴漲已三回 又見黄泥没徑苔 隄防暴漲すること 已に三回、又見る黄泥徑苔を没するを。

童子廢書忙出戸 直從草際捕魚來 童子書を廢し忙ぎ戸を出で、直ちに草際従り魚を捕らへて來る。

〔黄葉夕陽村舍詩〕遺稿卷五

廉塾の裏手を流れる高屋川は大雨が降るとよく氾濫した。そうすると鯰や泥鰌が大水と一緒に道まで出て、草際であつぶあつぶし出すことを知っている子どもたちは、もう手習いどころではない。慌ただしく外へ飛び出して行って、魚を捕まえて帰つて來た。こんな微笑ましい光景もあるのだつた。これが子どもの本領である。

これらの詩から窺える塾生や塾童の学習に向かう姿勢は、真面目で真摯である。塾童はそれなりに子どもらしい本領が発揮されていて、まっとうな精神的成長が感じられる。

(3) 塾生の実態

塾生の出自は武士・医者・僧侶・町人・村役人等の農民の子弟で、福山藩内・四国・九州・奥羽地方の者であ

った。

「塾生預り銀差引算用帳」(『広島県史』近世資料編VI)文化八年(一八一二)〜文政七年(一八二四)の十四年間、三百二十六名について塾生の入退数を見ると次の通り。

退塾	入塾	文化8年
8人	28人	9
15	25	10
38	32	11
18	12	12
8	17	13
15	22	14
32	26	

退塾	入塾	文政元年
42人	28人	2
22	42	3
15	15	4
27	18	5
21	24	6
29	22	7
13	15	

この表で見ると、十名余りから三十名前後くらいが在塾していたようである。北條霞亭が文化十年九月二十七日、弟碧山に宛てた書簡の中に「此方さして相替候儀も無之候。當時は塾中出入書生三十人許居申候。」とあるので、通いも含めて平均三十人前後であったようだ。在塾期間は二〜三年くらいが最も多く、その間も出入りは頻繁であった。北條霞亭の末弟敬助(撫松)は、文政二年から文政四年二月まで在塾していた。これほど長い者は稀であった。

「塾生預り銀差引算用帳」に次のように記帳されている。

卯三月廿二日より巳二月十三日迄

一 七拾八匁式分 卯八月十七日うけ取

一 百貳拾九匁七分八厘 辰八月十三日飯料受取

己卯(文政二年)、甲辰(文政三年)、辛巳(文政四年)

北條霞亭は末弟の敬助を文政(己卯)二年三月、「廉塾」に入塾させた。四月の書簡で弟の碧山にその現況を「敬助(撫松沖)も昼間は塾(廉塾)へ参り居申候。随分無事講業に従事いたし候」と知らせている。

盆と正月には大抵の者が帰郷していた。出入りはかなり自由であった。年齢は十〜二十歳代の者が多かったようだ。諸国を遊歴する文人で一時ここに足を留める者も多かった。

(2) 日常生活

「廉塾」の時期になって茶山は「廉塾規約」(『広島県史』近世資料編VI)なるものを作った。これは「黄葉夕陽村舎」の時期にはなかったものである。塾には常時三十名ばかりが生活していたようである。一度入塾したら何年間か決まった年数を留まらなければならないといった束縛はなかった。それは各人の自由に任されていたので、何か月か居て退塾する者もいたし、一旦郷里に帰って又、何か月かすると入塾してくる者もいた。そのように入出入りが激しくなると、塾の風紀も乱れがちになる。三十名ばかりが集団生活をするとなると、学問の指導だけでなく日常生活指導もしなければならぬことになり、儀礼を重んじる茶山にとつても大変なことだったであろう。ここでは塾生がどのような日常生活を送っていたかを見ることにする。

(1) 塾生の日常生活

「廉塾」は原則として全寮制（「槐寮」「南寮」「敬寮」があった）で、貧富親疎の別なく同様に遇するというのが茶山の方針であつた。塾の食事も質素なもので朝夕は茶漬、魚は月に三四度くらい雑魚が出るくらいであつた。

茶山が牛海道士（備後国福山の真言宗三寶院派の修験者）に宛てた次の書簡により、当時の寮生活の一端を伺うことができる。

帶屋君の舍弟入塾之事きつとわたくしも先日之御はなし、おろ覺にて候、上帶屋とはおもひもかけず候ひき、扱平生美食等になれ、丁稚つかひ候て過しゝ人は、ちと學舎之不自由にこまり候、朝夕は茶づけ、午飯に、なすび汁等、月々三四度雜肴にても買ひ候のみに候、雅容有之候時、茶や飯の給仕にもつかひ候、此段も御申入置可被下候、何さま内よりはつらく候故、内がゆるければ來て居る人はなきものに候、かゝることも御談しおき可被下候、學舎入用は、日々米五合、月々錢七百にて、日數をしるしおき、あまればかへし、油かみゆひ等は、其の日とによりいたし候、筆墨勿論なり。これは申にても不及候得共、申さねばこゝへ聞合せ、かしこへきゝて、はつらはしく候、中秋頃ちと御出可被下候 不一

八月六日

菅 太 中

青 龍 院 様

（上帶屋は胡町西側質商の富豪家で文雅の士が続出している。下帶屋は源兵衛が小間物商、向店は喜七郎が薬商を営む豪商であつた）（『備後史談』第二卷第四號）

牛海道士から「上帶屋の舍弟を入塾させて欲しい」という依頼を受けた茶山が、「平生美食をして、丁稚を使うような贅沢な暮らしに慣れている人は、廉塾の生活には堪えられないだろう」と断る書簡である。「廉塾規約」の

「雜司之事」には厳しい決まりがあり、平素丁稚を使っているような人には長続きできにくいといのである。「廉塾規約」を挙げておく。

廉塾規約

覚え

- 一 読書の人 銘々 行儀相正し候事者勿論に候へ。日々よみ聞かれ候本ミな其の事二候ゆへ、当塾出来候より作法の事別に定めも不致候。然処まま心得違の人有之、色々の事出来候得者、今月一つ今年一つと制禁を立て候事に候。然処書生衆段々入替り、其事未承知無之方も有之候様に相見候へ。仍而今度壺所にかき集め御目にかげ申候。面々とくと熟覽有之相守り候様被致度候。
- 一 素読いたし候人日々かけぬ様に受け習ひ可被致候。講席不参の節ハ其訳可被申出候。
- 一 受ならひ或者さらへ等をも随分静にし、文字覚へ候様可被致候。妄りに大声被致候てハ、余人の妨げにも相成申候。平生書物或ハ机の上を跨越へ候事、有之間敷候。
- 一 講釈・輪講有之候前に、其の書を熟読いたし、席後に又再見いたし聞漏し候処ハ可被尋候。講席にて互に顔を見合せ、或者笑ひ、或者睨ミなといたし候事有之間敷候。中坐被致間敷候。懶眠被致間敷候。
- 一 詩文会者月に六度有之候得者其外妄に作るへからず、読書を第一に可被致候。詩文も読書にあらざれハ出来不申候物二候、六度者かけぬ様に作らるへく候。
- 一 塾の書物内分にてとり出し候事無用二候。借覽いたし度候得者主人へ可被申出候。
- 一 余人の席へ参りむた咄し被致間敷候。用事有之候ハ、講席の次手三度の食事一所に集り候故其時相済ミ可申候。尤素読・質疑又ハ無抛用事ニ付被參候共、濟次第早く帰り可被申候。万一長居いたし候人候ハ、其の席

- 中より相糾し可被申候。新塾へハ告て可被參候。
- 一 同席に居候人ニても起居の時ハ必礼式挨拶丁寧に可被致候。互に鄙猥の詞を用ひ被申間布候。
- 一 小うた浄瑠璃ハ小声ニても被致ましく候。詩も午前は吟する事無用ニ候。
- 一 宗客有之候節古塾者勿論何方も平生より静に可被致候。
- 一 謔書に倦ミ候とて、立騒き相撲どり被致間布候。
- 一 後輩幼学の人を者年長の人随分いたわり、行儀等をしへ候様にいたし、かり初二もなふり候様の事ハ被致間敷候。
- 一 年長又ハ学事成り候て衆人も遠慮いたし候様の人ハ、自身より其の心得有之、随分乗りの参らぬ様可被致候。
- 一 人より無理を申かけ候か、或ハ不作法いたしかけ候時ハ、其の相手にならず大抵堪忍可被致候。堪忍なりかたき事を者其まゝ主人へ可被申出候。凡戲譁過て礼なけれハ後者争になり候。
- 一 掃除毎日いたし候ハ勿論、望・晦に大掃除可被致候。其時 銘々書物・筆・硯・傘・笠・下駄・草履改めらるへき事、此の方の道具もより償可有之候。其人知れ不申候ハ、其席中或ハ惣塾中より弁せらるへく候。
- 一 本箱・挟箱ニて我席をとりかこミ、かげにかくれ居り候事有之ましく候。
- 一 用事は雑司の人弁し候へ者妄に門を出申間布候。事ありて出候ハ、必主人へ可被申出候。下女ともへ申捨候て出候ハあしかるへく候。人を送り候者門前にかきるへし。もし又遠人で再たひ来らず候人ハ此限にあらず。然とも主人へ相談あるへく候。
- 一 槐寮より拍子木鳴り候ハ、誰にても返事いたし早々参り可被申候。
- 一 火事盜賊急病人等ハ格別、平生步行ニ走り候事ある間布候。
- 一 火の用心専一の事。夜臥の時行燈ハ古塾ニ一つ南寮ニひとつ指しおき其余ハ消し可被申候。火鉢・煙草盆の火

ハ灰に埋ミ、縁側へ可被出候。火鉢を夜着に籠め候事無用ニ候。

一 主人留守の節ハ別而火事盗人の用心可被致候。長輩ハわけて少年輩へも可被申談候。

一 内分にて酒肴の類惣て飲ミ喰ふ物取扱ひ被致ましく候。

一 食事の時飯汁など落し、覆し被申ましく候。札ハ飲食よりはしまると申候へハ、第一つゝシミ可被申候。

一 書生中にて札銀内々にてかりかし被致ましく候。もし無抛入用の事有之候時ハ、主人へ可被申出候ハ、如何様共相成可申候。

一 金銀札錢等懐中不可有之候。貯へ候人ハ主人へ預けらるへく候。

雑司之事

一 雑司当番の人ハ終日応対の間へ出勤可被致候。

一 表門ハ早朝に開き晚六つ時に閉ち可申候。客ある時ハ見合あるへし。裡の路次ハ第一籬の方を閉ち、木戸ニハ錠をおろし錠にハかぶせ箱を可被掛候。鎖鑰さく共に或ハ損し或ハ紛失被致間布候。

一 掃除は坐敷・庭除并ニ門前まで不残致し可被申候。

一 食事の給仕ハ静にいたし、飯汁こほれぬ様に氣をつけられ、飯後ニハ何彼とりかたつけ、飯台ハ水をかけ随分潔よく拭ひ可被申候。

一 賓客の時并ニ使ひの者など参候時、取次応対茶烟草盆等の事より一切其場相当の世話可被致候。

一 買物等に町へ出候ハ、人々を取集め一日一度ニ可限候。尤飲食無用の物ハ決て取來る間布候。

一 風呂の事順番遅滞無之候様取計ひ、晩に早く仕廻ひ可被申候。

一 課業録の世話幼輩より可被致候へ共、無人の時ハ雑司の人可被致候。

一 三塾も小雑司をたて、其の寮々一日の世話可被致候。古塾ハ朝水鉢、南寮ハ橋の燈籠、敬寮は町並の門を開

閉いたし候様之事色々可有之候。病人之世話是迄ハ大雜司の受持ニ候処、兎角行届かね候間、以後ハ小雜司の場ニて一切心を御添可被成候。

一 夏楚を掌り候人ハ食坐・講席・爐火・燈油・草履の事に於て不作法の人有之候ハ、嚴に法を加へ、其外も心をつけ教誨督責可被致候。

一 凡不行儀の事何事ニても心を可被付候。元來此方へ説書に見へ候事如何成訳と被思候や。銘々の親兄達も若き人を手放し、他所へ出し候てハ、第一病氣等の事より種々の氣遣ひも有之、膝下に差置相応の用事等にも可差使を、其不自由をも不被願候ハ、各方よき人にも可被成申か、又ハ文盲ニて一生を送り候半よりハ、物の端ニても心得候様になり可申かと申様の慈悲心を以て被差越候事ニ候へハ、等閑ニ心得られ候てハ親兄の心ニも背き、又物習ふへき月日を打捨候事自身の損とも可申候。凡人仕官の身者其勤向き有之、農商者其渡世の用事御座候得者、一生の中閑暇の時節二十前後の年より外者無之候。此間を取逃し候てハ、家持候後も入湯參宮等二月三月の隙ハ有之候へ共、一年二年の閑暇者無之者ニ候。其大事の時節を無用の慰ミ事なし果し候者誠に大なる其身の損ニ御座候。又一郷一村に幾千百人か住居いたし候得共、其の間に読書致させ候親兄は稀なる者ニ候。偶左様の親兄を持候人は其身の大幸に候得者、其心を無下にいたし候も扱々心なき事に御座候。扱又私は不調法なる者に候得共、各方遠方より遙々と相見へ滞留も被致候ゆへ、何卒少々の御爲ニもなり可申様ニと存候て、私一人ニて者講積点削等の事も行届き不申候事と存し、余人をも頼候て手伝ひ囉ひ候事に御座候。此心をも少々推量被下度候。下男下女等ハ勿論、大工・畳屋等を使候も大半者各方の世話を仕候にて御座候。左候へ者各方出精有之孝弟の道をも被心得、書生と申せハ行儀もよき物と人も思ひ候様になり被下候得者、私か世話も其甲斐有之、又各方親兄達の慈悲心ニにも大に不被叛候様ニ可有之候事ニ御座候覽。

一 凡当座ニて面白き事ハ後に必面白からず成り候ニて、当座退屈難儀なる事ハ必後の用にたち申候者ニ御座候。

是ハ平生の事ニて考見候ハ、申に不及相分り可申候。其一つを申さハ、今日大酒大食をいたし候へハ其時ハ快く候へ共、後ハ頭痛腹痛となり候。投跡に残り候事ハ何もなく、昨日の食今日の爲にハならず候。今日文字を覚候へ者其文字ハ六十年も七十年も心に残り用立ち候事不少候。此類を推して可被心得事ニ候。

一 主人仕かたあしき事心つかれ候ハ、一一可被仰下候。「朝に道をきゝ夕に死すとも可也」と見へ候へハ、老人とて御遠慮有之へからず候。これハ御頼申候。同社中に心に叶不申候人有之、そちらにて党をむすひひそかに色々の相談とも出来候ことと折節きこへ候事も御座候。万一有之候ハ、年長の人より御申出可被下候。

以上のように「廉塾」の規律は日常生活の細部に亘つて指示されていた。個々人の家庭に於る躰よりは、よほど行き届いていたのではないかと思われる。「雑司の人」というのは、塾生の中から当番に選ばれ、塾の雑役に携わる人のことで、この人は終日「応対の間」に出勤して、表門の朝夕の開閉、座敷と庭の掃除、食事の給仕、賓客の接待、風呂の世話等をした。「小雑司」は専ら寮に関する雑役に当たつた。「廉塾」の規律は厳しかつたといつても、茶山は塾生たちの意見や不平をちゃんと聞いてやっていた。最後に次のような一項がある。

一 主人仕かたあしき事心つかれ候ハ、一一可被仰下候。「朝に道をきゝ夕に死すとも可也」と見へ候へハ、老人とて御遠慮有之へからず候。これハ御頼申候。同社中に心に叶不申候人有之、そちらにて党をむすひひそかに色々の相談とも出来候ことと折節きこへ候事も御座候。万一有之候ハ、年長の人より御申出可被下候。

即ち、「主人のやり方の悪いところに気がついたら一々言いなさい。老人だからと言って遠慮はしないように。」

この社中にも心に適わないことがあるからと、陰でこそそそ党を結ぶといった様子が時折あるようだが、そんなことはしないで自分で言いくければ年長の人が申出なさい」というのである。とは言つても茶山が書簡で「何さま内よりはつらく候故、内がゆるければ来て居る人はなきものに候」と認めているように、坊ちゃん育ちの塾

生には眩しいものがあつたようだ。

このような規約ができていても子どものことだから、なかなか杓子定規に守られるという訳にはいかない。

即事

晏起家童未掃門 繞簷梨雪午風暄

晏起の家童 未だ門を掃かず、簷を繞る梨雪 午風暄かなり。

一雙狂蝶相追去 直自南軒出北軒

一雙の狂蝶 相ひ追ひて去り、直ちに南軒より北軒に出づ。

〔黄葉夕陽村舍詩〕前編卷五

「表門ハ早朝に開き晚六つ時に閉ち可申候。」「掃除は坐敷・庭除并二門前まで不残致し可被申候」と「雑司」の者の為すべき決まりがあるが、子どものことだからつい寝坊をしたのであろう。「晏起家童未掃門、繞簷梨雪午風暄」つまり「朝寝坊をした子どもはまだ門を掃いていない、軒を繞って咲く梨の花を吹く昼時の風は暖かい」と詠われている。昼近くになつてもまだ門の辺りの掃除が出来ていないというのである。「春眠不覺曉」といったところか。

「大雑司」(寮全体を取り締まる係)であろうか、先生の様子にも常に気遣いをしている様子の分かる詩がある。次に挙げる二首がそれである。

獨讀閑窗

溪雲擁屋黯難開 數尺芸窗雜樹隈

溪雲 屋を擁して黯 開き難し、數尺の芸窗 雜樹の隈。

讀到奇文會心處 不知童子點燈來

讀みて 奇文の心に會する處に到り、知らず 童子の燈を點じ來るを。

〔黄葉夕陽村舍詩〕遺稿卷七

谷間からの雲が家屋を包んで薄暗い。書齋は雜木林の隅にあるから一層暗い。「讀到奇文會心處」讀書に没頭して灯りもつけずにいると、「不知童子點燈來」子どもが灯火を持って来てくれたのにも気づかなかつたというのである。

又、次の詩も先生に対する塾童たちの心遣いが詠われている。

病中即事二首（又）

家童知我愛奇葩 時換盆栽慰病痾 家童 我の奇葩を愛するを知り、時に盆栽を換へて病痾を慰む。

數日牽牛委衰颯 朝來忽出鳳仙花 數日 牽牛 衰颯に委せ、朝來りて忽ち出す 鳳仙花。

〔黄葉夕陽村舍詩〕遺稿卷七

子どもたちは茶山が珍しい花を好むことを知っていて、時々盆栽を交換して病氣見舞いをしてくれる。數日にして朝顔が衰え萎れると、今朝はやって来て鳳仙花の鉢を差し出すのだった。

茶山は日常生活の中で、塾童たちがその本領を発揮する場面に屢々遭遇し、それを詩に詠んでいる。次の詩はその最たるものであろう。

夏日雜詩十二首（九）

涼棚待月向溪濱 恰值前峯上半輪

涼棚 月を待ちて 溪濱に向かひ、恰も前峯 半輪を上すに値ふ。

童子爲儂添勝槩 聚沙激水作金鱗

童子 儂が爲に 勝槩を添ふ、沙を聚め水を激して金鱗を作す。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷八

月の出を待つて谷川に向かうと、ちょうど前峰に半月が上つて来た。昼間に子どもたちが水遊びをして砂で水をせき止めたその一部が崩れ、ちよろちよると水が流れ出してさざ波がたち、それに月光が射して金の鱗のようにきらきらと輝いて見えた。何と見事な風景だ。子どもたちは私のために勝れた景色を作ってくれたのだと、茶山は囃らずも子どもたちの作り出した芸術に感嘆したのである。

子どもたちの一挙手一投足に新鮮な感動を覚え、それを肯定して包み込む包容力の大きさが茶山にあるから、細かく敲しい「廉塾規約」を作っても、塾童たちは萎縮することなく、天真爛漫にすくすくと成長していったの

である。

(2) 「廉塾」の椿事

秩序の保たれた規律正しい日常生活の中であつて、文化八年三月二十七日、廉塾にはちよつとした椿事が出来た。

讃岐の人で二十三歳にして廉塾の塾生となつた牧棲碧が、無断で塾を出奔して大騒ぎとなつた。牧東渚（牧家の養子となつて牧家を嗣いだ）に宛てた茶山の書簡には次のように認められている。

三月廿七日朝、藤兵衛殿いつくともなく出奔いたされ候。朝飯前迄起出られず候故、鐵之助夜着をあけて見候處、反故籠を入れて有之候よし、夫より人をさし出し、爰かしこ承合せ福山船宿手城あたり迄搜候へども一向しれ不申候。尤も小兒に御座候へば八方相索候而搜出し御宿元迄人にもつけ御歸し申候へ共、廿歳以上の人には隠れ候事も上手也。また人にかどはかされ候こともなく候故、さほどにも不仕候ひき。唯私薄徳無術、凡來宿之人歸るかごとくおもはしむること□□御先方へ對し甚氣之毒に御座候、御次に金比羅へ宜御申可被下候。

一、此間にて藤兵衛殿何もかはり候も見え不申候。其内大坂に心友之人の躰に而度々のぼれのぼれと申こし候様子見及候物有之候。大坂は竹山之次に居申候而只今の中井より學問宜候よし平生被申候よしに候。

一、廿六日朝ふく山へ参度被申候に付、いそかぬ用事ならば兩三日御待被成よ、私か用事に而参被下度事有之候（これは詩會へ名代に頼まんとせし也）由申候へば随分待可申と申ことにて御座候ひき。

一、玉しまへ晝を學びに参度これはすでに金比羅へも相談有之、久兵衛殿（父石潭）より委書被仰下候。これは場所あしく花柳にちか付候路次ゆへ私はこのみ不申候。然れどもいまだ藤兵衛殿には追々相談可申置先誘引いたし候□□を戒進遣申候。私方におめては非道かゝりしことも無御座候。書生中に申分とも有之哉、聞合

候處さしたることも無御座候。

一、二月末日染木綿をとらへ調られ人にあつらへ羽織に仕立させられ候、ひとへにて黒さやの襟をかけ候處旅用意と見江候。左候へば人はしらず自身の心かけは久しき事と見江候。妻をむかへられ候。其人心に不叶自身いれんとするをば入れさせず、夫故すこしだゝけといふ氣味有之候など、これは心やすき人へ咄も御座候よし。これら申上候わたしもしらぬ分、必貴下様ぎりに御きゝ可被下候。金比羅へは御さたなし可然や。

大抵私方塾中之退屈第一と見江候。別に申上候ことも他出するに及ほどの事とも見江ず候。御勘辨可被下候。畢竟前に申候晉帥無徳無術かゝること出来候事恥ケ敷次第に御座候。草々申上越候、恐惶謹言。

三月廿八日認

昔 太中 晉帥

高島信藏様

〔備後史談〕第十五卷第六號

「牧棲碧」(一七八八〜一八三三)。讃岐の人。名は畏驥、諱は景周、字は徳稱、號は棲碧山人・詩牛、通稱は藤兵衛。

この話を纏めてみると以下のようなのである。

「三月廿七日の朝のこと、藤兵衛(牧棲碧の通称)が、何処へか出奔した。朝飯になつても出て来ないので鐵之助が布団をめぐつてみたところ、反故籠を入れて人が寝ているかのように誤魔化していた。あちこち手を尽くして捜したが見つからない。子どもではないし、廿歳以上ともなると隠れることも上手い。また、人に拐かされたという心配もなさそうだし暫く様子を見ることにした。考えてみると藤兵衛は前々から出奔の準備をしていた様子だ。大坂の方に親友らしき人が居て、前々から度々上坂しろと言つて来ていたようだ。廿六日の朝、福山へ行きたいと言うので、急ぐ用事でなければ二、三日待ちなさい。私が用事で行くことがあるからと言うと、随分待つようだと不服そうであった。又、玉島へ画を習に行きたいと言うので、花柳界に近いところだから、この

話を勧めた人に追々相談して戒め留めて貰おうと思つていた。二月末に染木綿を調達して、羽織に仕立てさせていたのは旅立ちの用意だったようだ。妻を迎えたようだが、自分の思つている人は入れないで、自分の心に適わない人を迎えたことが気に入らないようだった。これは心安い人に話されたことで、茶山は知らない分だから貴方の所で留めておいて欲しい」といったようなことが述べられている。

文化八年は廉塾にとつて波乱に富んだ幕開けとなつた。二月六日には頼山陽が京都に高飛びしているし、それから二か月足らず後にこの事件である。茶山も「大抵私方塾中之退屈第一と見江候」と云つてするように、山陽にとつても棲碧にとつても、廉塾の田舎の生活は刺激がなく退屈であつたのかも知れない。

藤兵衛は約一年後、前過を後悔し、佐々木大次なる人の斡旋の陳謝状を持参して忽焉と廉塾へ帰つて来た。茶山が牧東渚に宛てた次の書簡がある。

内々 藤兵衛殿忽然來塾、佐々木大次書を以斷ども被申、自身も前非を悔候様被申候。

内々カカアに一年斗も滞留之様被申候由、左候はゞ貴書中に少々被及其事候所可有御座候所、何とも不被仰越、又去年御内室とも被迎候よし承候。これも風説のみ也。いかゞ御座候哉承度候。

「妻に一年ばかり遊歴してくるからと伝えておいたはずだが」と弁明しているが、それならばそちらからそのことについて何らかの通知があるはずであるし、藤兵衛が内室を迎えられたことも風聞だけで、事実であるのかどうなのか私は正式には聞いていないと言うのである。尚、この頃（文化九年）牧棲碧（字は徳稱）を詠んだ茶山の詩が『黄葉夕陽村舎詩』後編巻四に収められている。

牧徳稱來訪次韻以謝 牧徳稱 來訪す 次韻して以て謝す

一葉扁舟一鈎簑 相思百里滄波 一葉の扁舟一鈎の簑、相思ひて百里滄波を渉る。

當時詩社看零落 厚意如君更幾多 當時の詩社 看す零落す、厚意 君が如きは 更に幾多ぞ。

(3) 塾生の生活費

茶山は塾「黄葉夕陽村舎」を「郷塾」として認可を求めたとき、自分の家屋も、田地も付けて藩に差し出し、自分が藩から貰う扶持米はそっくり塾の費用に繰り入れた。塾田から採れる利米は塾の収入とし、余った扶持米で田畑を買い足すなどして、教師の生活費や、書籍代、塾の修復費、貧しい書生の扶助金などを支払った。それでも経済的には十分成り立ったので、塾生からは飯料・書物料・髪結料など生活に必要な諸雑費を取るだけで、授業料に当たる束脩は取らなかつた。貧しくて飯料を出せぬ者には学僕として家事を手伝わせながら学問をさせた。支払いは盆暮れ二度の勘定にして、あり合わせのある時に出せばよいように便宜を図つてもいた。予め塾生から金銀を預かり「預り銀差引算用帳」なるものをつけて、塾生が必要とする経費（飯料・書物料・髪結費等の諸雑費）はそこから支払い、必要に応じて塾生に渡したり、貸し付けたりしていたので、塾生が当座の金に困ることはなかつた。

「預り銀差引算用帳」の記載例 〔広島県史〕近世資料編VI

けいさい入塾

未十一月五日 申三月十日迄

未十月廿一日

一金子百疋

加藤とら蔵ふへ代受取

一七拾六匁老分四厘

新井久米之介飯料

一七匁三分

着物代

八拾三匁四分四厘

内 八拾目

未十二月二十九日うけ取

残而 三匁四分四厘不足

【「辛未」文化八年（一八二一）

「壬申」文化九年（一八二二）

甲原元ちう（玄壽）

申九月廿九より日十一月十日迄

一金子百疋

申十一月八日あつかり

一札拾四匁

酉十一月十日より戌五月六日江戸出立

一金四兩

酉十一月十一日あつかり

但し老分十六

出し

内

一金貳歩

酉十二月廿九日わたし

一札拾老匁

戌五月朔日受取

一八匁

五月二日わたし

あさきしま代

一四匁

同三日わたし

ひきやくちん
しま代取かへ

一拾三匁
い三月廿九日えどより帰る

子二月廿六日帰生

「壬申」文化九年（一八一二） 「癸酉」（一八一三）

塾生の生活費は一日、銀七く八分、一月大体二十三く四匁、年に金四兩二歩（当時の奉公人一年の給銀よりはるかに多い額）であった。

（3）廉塾の行事

廉塾の行事として夏の「観蛸」と秋の「重陽」の山登りがあつたようだ。『黄葉夕陽村舎詩』巻一の巻頭には春の「野遊び」を詠んだ「春日雑詩」と題する五言古詩が載せられているから、時にはこういうこともあつたのかも知れないが、塾生たちの詩は見かけない。しかし、「観蛸」や「重陽」の詩は見られるし、よほどのことがない限り「重陽」の山登りは、毎年の恒例行事になつていたようだ。

（1）観蛸

廉塾では蛸の季節になると竹田村に蛸を観に行き、九月九日には山に登ることが年中行事に組み入れられていた。「竹田蛸」は茶山の編纂した『福山志料』の下竹田村のところに、「ハサマ川 宇山村ヨリで長二千三百二十五間中川ニ入此川蛸多シ、大サ境内ニナラヒナシ長サ一寸弱ナルモノアリ」と記されていて、宇治川や、石山の源氏蛸・平家蛸よりも大きいと言うことで有名である。

茶山は文化七年五月六日、諸生を連れて竹田に螢を見に行った。

① 藤田綏（塾生。字は按仲・萬平）の「遊竹田記」

茶山先生、同大槻子繩子節二君、看螢竹田村。諸生従者十餘人。皆携螢囊、徘徊溪邊。撲流螢、而亦飲酒於池上。岡崎吳質分與肉曰、勿再。皆食之。後或稱受。吳質曰不再。衆皆笑之。飲酌久。人皆沈醉、縛螢囊於竿還。往々失之。時夜及三更。

茶山先生は大槻子繩（陸中の人、仙台藩儒、養賢堂學頭。塾生であった）・子節（陸中の人、塾生であった）の二君と共に、螢を竹田村に看る。諸生従ふ者十餘人なり。皆螢囊を携へ、溪邊を徘徊す。流螢を撲ち、而して亦池上に飲酒す。岡崎吳質（品治郡向永谷の人、塾生）は肉を分與して曰く、再びすること勿れと。皆之を食らふ。後或もの受けんことを稱ふ。吳質曰く、再びはならずと。衆皆之を笑ふ。飲酌すること久し。人皆沈醉し、螢囊を竿に縛りて還る。往々之を失ふ。時に夜三更に及ぶ。『備後史談』第十二卷第八号）

② 菅公詩の「竹田觀螢詩」九首（『黄葉夕陽村舍詩』遺稿附録）の内より

四月七日與諸君同觀螢竹田村 九首

四月七日 諸君と共に竹田村に觀螢す 九首

(一)

花作輕塵懶出門 天教夏景役吟魂 花は輕塵と作りて門を出づるに懶し、天は夏景をして吟魂を役せ教む。
 嫩晴恰好飛螢候 攜酒來看水竹村 嫩晴 恰も好し 飛螢の候、酒を攜へ來り看る 水竹の村。
 花は輕い塵となつて飛び門を出るのも氣だるい、空は夏の景色で詩心を起こさせる。

雨も晴れて飛螢の候にはちようどよい、酒を提げて水竹の村へ来て看る。

〔嫩晴〕雨が始めて晴れて日が出る。

(七)

秧尖一點影將浮

木末三星光忽流

秧尖あうせん

一點影將まさ

に浮かんとし、

木末の三星

光忽たち

ち流る。

分隊撲螢何處好

童環石瀨我林阪

隊を分ちて

螢を撲つに

何れの處か好き、

童は

石瀨を環り

我は

林阪。

稲の苗の尖端に 一点の光が將に浮き上がろうとし、梢の三つの星の光は忽ち流れた。

隊に分かれて 螢を撲とうとするが どの辺りがよいだろうか、子らは早瀬の辺りに行き 私は林の隅を選ぶ。

〔秧尖〕稲の苗の尖端。〔石瀨〕早瀬。石の上を川が流れている浅くて流れが速い所。〔林阪〕林の隅。

(八)

小螢如沸大螢翺 渡水穿林焚轉旋

小螢は

沸くが如く

大螢は翺た

ぶ、水を渡り

林を穿ち

焚けい

として轉旋す。

軟風時動莎叢過 千點飄成星滿天

軟風時に

莎叢を動かし過ぐれば、

千點飄成ふうせい

し星

天に満つ。

小さな螢は沸くように出 大きな螢は翺ぶ、水を渡り 林を穿つて光り輝いて飛びめぐる。

柔らかい風が 時々ハマスの繁みを動かして過ぎれば、千点もの ひらひらする星が 空いっぱいになる。

〔焚〕光り輝く。〔轉旋〕めぐる。〔飄成〕漂う。ひらひらさまよう。〔莎叢〕ハマスの繁み。

(九)

童僕相呼收飲具 醉中緩緩吟詩步

童僕

相呼びて

飲具を收め、

醉中

緩緩

詩を吟じて歩む。

何愁村夜暝烟横 聚得羣螢照歸路

何ぞ愁へん

村夜

暝烟の横たはるを、

羣螢を聚め得て

歸路を照らさん。

石使いを呼んで盃などを収めさせ、酔っぱらってゆるゆると詩を吟じながら歩く。

どうして愁えることがあろうか 村の夜 暗烟が横たわるのを、沢山の螢を集めて 帰路を照らせばよい。

「童僕」召使い。「緩綬」綬やかなさま。「既烟」暗煙。

菅公壽は茶山の次弟・猶右衛門汝梗（一七五二〜一七八一）の嫡子で、名は公壽、字は萬年、俗称は養介（助）、後に長作と言う。廉塾に学び、茶山の養子となるが三十九才で歿している。

北條霞亭が都講として廉塾に来たのは文化十年八月十五日であった。文化十三年に「竹田観螢詩」と題して七言絶句八首を作っている。この時に参加したのは約二十人ばかりで半数が塾童であった。先ず出発の時の情景が次のように詠われている。

③ 北條霞亭「竹田観螢詩」八首

(一)

観螢諸伴半兒童 踊躍嬉嬉趁午風 観螢の諸伴半ばは兒童、踊躍嬉嬉として午風を趁ふ。

廿輩一行何所帯 紗囊苕箒或魚籠 廿輩の一行何の帶ぶる所ぞ、紗囊苕箒或いは魚籠。

廉塾を出発したのは「趁午風」の語から昼食後間もなくであったようだ。みんなが持っていた物は「紗囊・苕箒・魚籠」であった。「紗囊」は蚊帳の布切れで作った螢籠。「苕箒」は草箒。「魚籠」は魚を入れる籠。ついでにヤマメでも捕ろうとしているのだ。

(二)

野路幾又隨意行 笠檐相望入蒼靑 野路幾又ぞ意に随せて行く、笠檐相望めば蒼靑に入る。

知他因例漁溪物 隔竹時間撒網聲 知る他例に因りて溪物を漁るを、竹を隔てて時に聞く撒網の聲。

里道と高屋川との間は水田で畦道が幾筋も通っていた。その幾筋もの道を子どもたちは、それぞればらばらになつて行ったのであろう。互いに呼びあい、かぶっている笠（菅笠であろう）を傾けて顔を上げると、先頭は青々

とした田圃の方を行く。竹藪を隔てて時々網を打つ音が聞こえてくるのは、溪流の魚を捕っているらしい。

(五)

夕風含雨草微聲 兩兩三三出暗青 夕風雨を含みて草微かに響り、兩兩三三暗青を出す。

忽爾縱橫千萬點 溪巒眞箇疊金屏 忽爾として縱橫千萬點、溪巒眞箇金屏を疊ぬ。

夕暮れになって風が立ち始め、草が微かに香る。螢が二匹三匹と草の中から出て青く光り始めたかと思える間に、忽ち幾千万と縱横に飛び交い、谷も山も真に金屏風を畳みかけたようになった。

「巒」くねくね曲がつた山。低く円い山。「眞箇」まことに。

門田朴齋は文化七年(一八一〇)初夏、十四歳のとき次の詩を作っている。

④ 門田朴齋の詩

竹田村觀螢

溪水聲中冷焰青 翠楊萬處認流星 溪水聲中冷焰青く、翠楊萬處流星を認む。

穿林穿竹照幽徑 無月無風點細萍 林を穿ち竹を穿ちて幽徑を照らし、月無く風無く細萍に點ず。

(『備後史談』第十二卷十一號)

溪流の流れの音の中螢の光は青く、翠の柳の至るところに流星を認める。

林を穿ち竹を穿ちて幽い徑を照らし、月は無く風は無く細かい浮き草に螢の火が点々として。

「冷焰」螢の光。「翠楊」翠の柳。「細萍」細かい浮き草。

又、文化十四年(一八一七)二十一歳の時、朴齋は次の「觀螢記」を記している。

竹田觀螢記

每歲麥秋之際、先生令塾子觀螢竹田村。今茲四月念三日、霖雨初晴。風日甚佳。先生乃使奴買酒、治行厨、命

觀螢之遊。諸子輕裝出。少長凡三十餘人。距驛門里許。或吟或和、取路於山麓。或釣或網、泝川流。

余亦把竿而從。須臾獲魚數頭。林端得石橋。橋高架溪上。幅僅履大。渡之不覺足心自酸。從此分徑陟山。回看來路、黃麥如雲。峰巒是畫。獨蛇山頂、宿雲翻墨。疑有物而疑。

已而東下山脚、有憩亭。數輩先在、而後半亦尋至。所携籃魚猶能澆洌噉嚼。從此而南行入澗。澗源有一池。新水渺瀰。波光可掬。是爲觀螢之處。

諸子班荆發行厨。烹魚以爲殽。鱖魚尤美。細酌至黄昏。草間螢火稍稍放微光。少焉兩三穿竹、八九點水。纔能飛散、東西忽已徧漫。上下煌耀的歷如繁星、爛乎雲漢。使人頓爲張鷟乘槎之想。於是乎衆皆欣然叫奇。南顧北走、揮帚翻扇。收之囊者、不知幾萬點矣。

當是時樽中既空。勝情勃勃不忍拋去、遂又釀村醪、爛醉放歌以盡興、夜深始還。先生方酌。因獻盛囊以供其賞。余意、斯觀也非前度比。因記所見以贈後日之遊者。若夫歸路則暗途、醉行無所知。

每歲麥秋の際、先生塾子をして竹田村に觀螢せしむ。今茲四月念三日、霖雨初めて晴る。風日甚だ佳し。先生乃ち奴をして酒を買ひ、行厨を治めしめて、觀螢の遊を命ず。諸子輕裝して出づ。少長凡そ三十餘人なり。驛門を距つること里許りなり。或いは吟じ或いは和し、路を山麓に取る。或いは釣り或いは網し、川流を泝る。

余亦竿を把りて從ふ。須臾にして魚數頭を獲る。林端に石橋を得たり。橋高く溪上に架く。幅僅かに履大なり。之を渡れば覺えず足心自ら酸たり。此れ從り徑を分かちて山を陟る。來る路を回看すれば、黃麥雲の如し。峰巒是れ畫なり。獨り蛇山の頂、宿雲墨を翻す。疑ふらくは物有りて蛭たるかと。

已にして東に山脚を下れば、憩亭有り。數輩先に在り。而して、後半も亦尋いで至る。携ふる所の籃魚猶能く澆洌噉嚼す。此れ從り南行して澗に入る。澗の源に一池有り。新水渺瀰たり。波光掬ふべし。是れ觀

螢の處と爲す。

諸子 荊を班けて行厨を發く。魚を煮て以て殼と爲す。鱸魚は尤も美なり。細酌して黄昏に至る。草間螢火稍稍微光を放つ。少らくありて兩三竹を穿ち、八九水に點す。纔に能く飛散し、東西忽ち己に徧漫。上下煌耀的歴として繁星の如く、雲漢に爛たり。人をして頓に張騫の槎に乘るの想ひを爲さしむ。是に於て衆皆欣然として奇を叫ぶ。南顧北走し、帚を揮ひ扇を翻す。之を囊に收むる者、幾萬點かを知らざるなり。

是の時に當たり樽中既に空なり。勝情 勃勃として抛去するに忍びず、遂に又 村醪を醸して、爛醉放歌以て興を盡くし、夜深くして始めて還る。先生方に酌す。因りて盛囊を獻じ以て其の賞に供す。余意ふに、斯の觀や前度の比に非ず。因りて見る所を記し以て後日の遊者に贈らんとす。夫の歸路の若きは則ち暗途、醉行して知る所無し。

〔浣刺噉嚼〕魚が口を動かすこと。〔鱸魚〕はや、はえ。〔徧漫〕遍く広がる。〔煌耀的歴〕光り輝き明らか
なようす。〔張騫〕漢の武帝のとき、月氏に使いして匈奴に抑留され、後、大宛・康居・大夏に使いして國
威を挙げた。〔勃勃〕勢いよく出る様子。〔釀〕錢を出し合う。〔村醪〕濁り酒。〔爛醉〕酔っぱらう。

〔醉行無所知〕どう帰っていいかわからない。
この日、朴齋は次の詩を作っている。

或手紗囊或帶樽 尋螢此日出柴門 或いは紗囊を手にし 或いは樽を帶び、螢を尋ねて此の日 柴門を出づ。
相携諸伴多生客 問我何邊是竹村 相携ふ 諸伴 生客多し、我に問ふ 何れの邊か 是れ竹村ぞ。

或る者は薄絹の囊を手にし 或る者は酒樽を持ち、螢を尋ねてこの日 柴の門を出た。

〔備後史談〕第十二卷十一號

同道している諸々の連れは初めての者が多い、私に問うどの辺が竹田村かと。

「門田朴齋」(一七九七〜一八七三)。備後百谷の出身。幼名は小三郎、母は茶山の妻宣の妹。文化五年十二歳で廉塾に入門、茶山の養子となるが後、離縁。福山藩儒。「生客」初対面の客。

(2) 重陽

廉塾の年中行事の大きいもの一つに重陽の節句の山登りがあった。登る山はいつも同じではなく、鑿鑿山であったり、茶臼山であったり、御領山であったりした。茶山が藩主に召されて江戸に行っていたり、雨であったり、来客があつて出掛けられなかったり、金粟園(茶山の居宅)で招宴を張ったりしたときは、山登りをしていない。文政六年(一八二三)は、九月七日に江戸在住の北條霞亭の訃報が届いたので、山登りはしないで数日前から逗留していた小野泉藏(一七六七〜一八三二。備中国浅口郡長尾村の人。拙齋に師事し後に詩文を茶山と山陽に学ぶ)と対酌しながら詩を賦して霞亭の死を悲しんだ。

文化六年(一八〇九)九月九日、菅公壽は次の詩を作っている。

己巳重陽呈宮原高嶋兩君、余時在病蓐二年

己巳重陽 宮原 高嶋兩君に呈す 余 時に病蓐に在ること二年なり

兩歳重陽竝病間 就荒松菊對衰顔 兩歳 重陽 竝びに病間、荒に就く松菊 衰顔に對す。

人能佳節皆成醉 我撫吟鬚獨自閑 人は能く佳節に皆醉を成せども、我は吟鬚を撫でて獨り自ら閑たり。

黄葉歸雲村樹杪 蒼烟斜日野川灣 黄葉 歸雲 村樹の杪、蒼烟 斜日 野川の灣。

聞君攜酒登高去 試問何邊落帽山 聞く君酒を攜へ高きに登り去くと、試みに問ふ何れの邊か落帽の山

なる。

(『黄葉夕陽村舍詩』遺稿附録)

二年 重陽の節句は病に有り、庭は荒れかけているが松や菊は衰えた顔に向き合ってくれる。人々は目出度い日に親しんで皆酔っているが、私は白髪鬚を撫でて独り閑だ。

黄葉山の帰雲は村樹の梢にかかっている、蒼い烟は棚引き夕陽は野川の湾に沈まんとしている。貴方が酒を携えて山に登ったと聞いたが、ちょっと問うてみるがどの辺が落帽の山ですか。

「己巳」文化六年。「就荒」荒れかけている。陶淵明の帰去来の辞に「三徑就荒、松菊猶存」（三徑は荒に就くも、松菊は猶ほ存せり）とある。「吟鬚」白くなった鬚。「杪」梢。「落帽山」「落帽之孟嘉」の故事。『晉書』孟嘉傳に「九月九日、桓温燕龍山。僚佐畢集。時佐史並著戎服。有風至吹嘉帽墜落。嘉不之覺。温使左右勿言。欲觀其舉止。嘉良久如廁。温令取還之、命孫盛作文嘲嘉、著嘉坐處。嘉還見、即答之。其文甚美。四坐嗟歎。」（九月九日、桓温龍山に燕す。僚佐畢く集ふ。時に佐史並びに戎服（軍服）を著る。風有りて至り嘉の帽を吹きて墜落す。嘉之を覺らず。温左右をして言はしめず。其の舉止を觀んとす。嘉良久しくして廁に如く。温取りて之を還さしめ、孫盛に命じて文を作らせ。嘉を嘲り、嘉の坐處に著く。嘉還りて見て、即ち之に答ふ。其の文甚だ美なり。四坐嗟歎す。）とある。

九日與林子瓊登高途中口號

九日 林子瓊と高きに登る途中 口號

重陽何可廢登高 時有客來攜酒蟹 重陽 何ぞ高きに登るを廢すべけんや、時に客來りて酒蟹を攜ふる有り。
不管城鐘催晚照 白雲紅樹入詩毫 管せず 城鐘の晚照を催すに、白雲紅樹詩毫に入る。

（『黄葉夕陽村舍詩』遺稿附録）

重陽の日どうして高い山に登ることを止めることがあろうか、時に客が来て酒や蟹の足など持参する。城の鐘が夕陽の光を促すに構わず、白雲や紅樹は詩人の筆に入ってくる。

「酒蟹」酒と蟹の足。「不管」構わぬ。「詩毫」詩人のすぐれた筆。

文化七年（一八一〇）九月九日、茶山（六十三歳）は頼山陽・河相君推・塾生凡そ二十五人ばかりと備後國安那郡鞆谷に登った。そこで茶山は次の詩を作っている。

九日同諸兄友登高鞆山分得還字

九日 諸兄友と鞆山に登高す 分ちて還字を得たり

白沙翠竹路彎環 相伴歸雲憩且攀 白沙翠竹路彎環す、歸雲を相伴ひて憩ひ且つ攀る。

一醉何須嫌魯酒 重陽同得上齊山 一醉何ぞ須ひん魯酒を嫌ふを、重陽同に齊山に上るを得たり。

客有尋奇更深入 石上寒聲水幾灣 客に奇を尋ねて更に深く入る有り、石上の寒聲水幾たびか灣る。

樽前爽氣峯層出 使人吹笛遠呼還 樽前の爽氣峯層出で、人をして笛を吹きて遠く呼び還さしむ。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷三

白い沙 翠の竹路は曲がりくねっている、帰る雲を連れにして休んだり攀ったり。

一醉するのに魯酒を嫌う必要はない、重陽の日一緒に齊山に上ることができた。

客の中に珍しさを尋ねて更に深く入った者がいた、石の上を流れる寒い水音は幾たび灣ることか。

酒樽の前の爽やかな気配、峯の層が現れた、人に笛を吹かせて遠くに行った人を呼び還させた。

〔河相君推〕（二七五六〜一八一八）備後國安那郡西中條村の人。茶山の親戚。豪農・酒造業を営む。

〔魯酒〕味の薄い酒。〔齊山〕中国安徽省貴池県にある山の名。晩唐の詩人、杜牧「九日齊山登高」の詩が

ある。ここは「鞆山」を指す。

文化九年（一八一二）九月九日茶山（六十五歳）は塾生たちと茶白山に登り雨に値あつた。

九日小雨同登茶白山分得韻歌

九日小雨 同ともに茶白山に登る 分ちて韻に歌を得たり

侵雨登高興若何 翻折陰澹作清和 雨を侵して登高す 興若何、翻かへりて折よこぶ陰澹清和を作すを。

雖然沾濕歸休速 如此歡娛得不多 沾よ濕すと雖い然ども歸りを速やかにする休よれ、此こくの如き歡娛得ること多

からず。

霞外孤城秋野潤 松間遠水暮鴻過 霞外 孤城 秋野潤く、松間 遠水 暮鴻過ぐ。

衰翁那問明年健 漫逐羣童醉且歌 衰翁 那なぞ明年の健を問はん、漫りに羣童を逐ひて酔ひ且つ歌ふ。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷四

雨をものともせず 高山に登る 興は如何、却つて喜ぶ 曇つたやすらかさがのどかであることが。

濡れるからといって 早く帰らないで欲しい、こんな歓楽を得ることはそんなに多くはないのだから。

霞の彼方の孤城 辺り一帯は 秋の野が広がり、松林の間に続く流れを 日暮れの水鳥が飛び過ぎた。

老いばれ親父おやじは どうして明年の健康を問おうか、やたら子どもたちを追いかけて酔っぱらい歌う。

〔侵〕しのぐ。ものともせず。〔陰澹〕閑かさ。〔清和〕のどかなさま。〔沾濕〕濡れる。〔明年健〕杜甫の七言律詩「九日藍田崔氏莊」（九日 藍田わんてんの崔さいし氏の莊きやう）に「明年此會知誰健、醉把茱萸仔細看」（明年此の會誰たか健たかなるを知らん、酔よひて茱萸しゆいを把りて仔細しじゆに看る）とある。

文政三年（一八二〇）九月九日、風牀上人・小野泉藏・北條霞亭・塾生と御領山に登る。（風牀上人・小野泉藏は九月六日に廉塾に來た）御領山で雷雨に遭い国分寺に避難した。

九日與二客及諸子遊鑿鑿澗、值雷雨入國分寺、晴後再入澗飲石上。分得韻文。

九日二客及び諸子と鑿鑿澗に遊ぶ。雷雨に値ひて國分寺に入る。晴後再び澗に入りて石上に飲む。分ちて韻に文を得たり。

檜聲斷未開雲 且犯餘飛入翠氣
檜聲 幾かに断えて 未だ雲を開かず、且く餘飛を犯して 翠氣に入る。

俄頃夕陽呈明媚 攀林弄水客幾群
俄頃 夕陽 明媚を呈す、林を攀じ 水を弄ぶ 客幾群ぞ。

登高候晴還此厄 亦喜山野屢改觀
登高 晴れを候ひ還た此の厄あるも、亦た喜ぶ山野の屢ば觀を改むるを。

歸鞋後先踏月光 人影在沙沙路長
歸鞋、後先して 月光を踏み、人影 沙に在りて 沙路長し。

避雷入寺歡較損 此遊終非惡重陽
雷を避けて 寺に入り 歡較損するも、此の遊 終に 惡しき重陽に非ず。

〔黃葉夕陽村舍詩〕後編卷八

軒を打つ雨の音は幾かに途絶えたがまだ雲は開かない、先ずまだ残っている雨滴に逆らつて翠の氣に入る。程なく夕陽は清らかな美しさを表した、林をよじ登り水を弄ぶ客は幾群れであろうか。

高きに登り晴れを候つても こんな災難はあるが、それでも嬉しいのは山野が屢々眺めを改めることだ。

歸り道は後になり先になりして月光を踏み、人影は沙に映つてその沙道は長い。

雷を避けて寺に入り 歡樂は少し損なわれたが、この遊は結局のところ悪い重陽ではなかつた。

「檜聲」軒を打つ雨音。「翠氣」翠の氣。「明媚」自然の景色が清らかで美しい。「歸鞋」歸り道。

このとき、風牀上人は次の詩を作っている。

重陽同茶山霞亭先生及小野泉藏諸子、登御領山。午時雷雨急、避國分寺。分韻得五歌。

重陽 茶山霞亭先生及び小野泉藏の諸子と共に、御領山に登る。午時 雷雨急なれば、國分寺に避く。韻を

分ちて五歌を得たり。

殷雷驅雨兩翻河 避雨俄然蕭寺過

殷雷 雨を驅りて 雨河を翻す、雨を避け 俄然 蕭寺に過ぎる。

先倒酒瓢拌醅酏 且鬪詩韻費吟哦

先づ酒瓢を倒して 醅酏を拌ち、且つ詩韻を鬪はせて吟哦を費す。

籬沾菊藥傳香遠 溪漲泉聲激石多

籬に菊藥 沾ひ 香を傳ふること遠く、溪に泉聲 漲り石に激すること多し。

再欲登高盡餘興 西山已耐夕陽何

再び登高して餘興を盡くさんと欲すれども、西山 已に夕陽に耐ふるを何んせん。

盛んな雷は雨を驅り立てて 雨は河をひっくり返したよう、雨を避けて俄に蕭寺に立ち寄る。

先ず酒の瓢箪をひっくり返して酔いを分け合ひ、更に詩韻を鬪わせ詩歌を歌う。

垣根に菊の花は潤い 遠くへ香を伝え、溪川に 泉の流れは漲り 石に激しくぶつかる。

更に登高して余興を尽くしたいが、西山は 已に夕陽を迎え入れようとするのをどうしようもない。

「酒瓢」酒を入れる瓢箪。「御領山」備後国安那郡下御領村にある山。鑿々川が流れていて、国分寺が近くにある。

以上、廉塾の生活を見てきたが、全寮制ということもあって、指導者は学問を教授するだけでなく、生活の面での指導も大変であったと思われる。人数が多くなり入れ替わりも頻繁になると、規則も乱れがちになる。そこで茶山は「学問をする人はそれぞれ行儀を正しくするのは当然である。平素学んでいる書物には皆なそういうことが述べられているのであって、塾ができてからそういったことについての規則は別に定めもしなかったが、このところ時々心得違ひをする人が出るようになり、書生衆も入れ替わり立ち替わりするようになったので、この度規則を一所に書き集めることとした」と「廉塾規約」を作らねばならなくなった理由を説明している。

この規約は細々と相当に厳しかった。しかし、「主人仕かたあしき事心つかれ候ハ、一一可被仰下候。『朝に道

をきゝ夕に死すとも可也」と見へ候へハ、老人とて御遠慮有之へからず候。これハ御頼申候。同社中に心に叶不申候人有之、そちらにて党をむすひひそかに色々の相談とも出来候ことなと折節きこへ候事も御座候。万一有之候ハ、年長の人より御申出可被下候」と述べている。「主人の仕方の悪い所に気づいた場合は一言つて欲しい。老人だからといって遠慮はいらない。陰で党を結んで云々するようなことはしないで、年長の者を通してでも申し出るように」と言うのであつて、茶山は塾生たちの意見や不平をきくことにも吝かではなかつた。又、「一生のうち学問をするには最も適切な二十前後、家にあつても働き手として役に立つ時期に、こうして学問をさせてくれる親兄の心遣いを考え、自分の立場を自覚して、大事の時節を無用の慰み事をなし果たすことのないように」と学問をさせてくれる親兄弟への感謝の気持ちも忘れてはいけなないと訓戒している。

夏の螢、秋の重陽の山登りは単調になり勝ちな日常生活の中の刺激であつたに違いない。観螢も昼から出掛けて行くのだった。酒を持ち途中で魚を釣ったりしながらの楽しい遠出である。螢を見て一里ばかりの道のりを歩いて帰つて来るのだから帰着する頃はすっかり夜も更けていたと云う。重陽の山登りには、毎年来る客があつた。風牀上人・小野泉藏等である。頼山陽・河相君推・北條霞亭が加わつたこともある。塾童・塾生が二十から三十名くらい加わつて賑やかに出掛けている。「廉塾規約」の中に「詩文会者月に六度有之候」と決められているので、観螢や重陽の山登りは詩作の好材料であつたと思われる。

塾生の観螢の詩や重陽の詩は十首に近い連作が見られるものもある。ともあれ月に六度の作詩は相当に厳しいものがあつたらしく、牧棲碧について面白い逸話が『詞華集 日本漢詩』第二卷（汲古書院）に載せられているので紹介しておく。

棲碧、懶不耐事。蒙被索句、或終日不起。蓋詩淫。聞棲碧在家、一夕吟苦。妻、謂曰、呻吟聲促、何苦如此、殆似我曹免身之時。棲碧笑答曰、卿曹免身、腹自有物。我腹中空洞無一物。而強要出奇。苦不亦勝乎。

棲碧、懶にして事に耐へず。被を蒙りて句を索め、或いは終日起きず。蓋し詩淫なり。聞く棲碧家に在りて、一夕吟じ苦しむ。妻、謂ひて曰く、呻吟聲促る、何ぞ苦しむこと此の如きや、殆んど我曹が免身の時に似たりと。棲碧笑ひて答へて曰く、卿曹の免身、腹に自ら物有り。我が腹中空洞にして一物も無し。而るに強ひて奇を出さんことを要す。苦も亦勝らずやと。

棲碧が詩作のとき声をあげて苦吟しているの、妻が「何をそんなに苦しんでいるのか。まるで私が分娩しているときのようなだ」と言つたところ、棲碧は「お前がお産をするときは腹に物があるからだ、俺の場合は腹にもないのに、強いて産み出そうとするのだから、苦しいことはお前の比ではない」と言つたのである。

廉塾の生活の中では塾生の死という辛い場面に遭遇することもあった。

三谷尚玄（一七八六〜一八〇九）は文化六年（一八〇九）一月九日、二十三歳の若さで寮に於て亡くなった。菅家の墓地の網付谷に葬り、茶山が碑文を書いている。

合田才治（一七九三〜一八〇九）文化三年（一八〇六）十四歳で入塾して、文化六年（一八〇九）六月二十九日、僅か十七歳で歿した。三谷尚玄が亡くなつてから約半年しか経っていない。才治が塾にいた間（文化三年〜五年末）に作つた詩、一二三首が茶山により刪正され一冊の詩集として編集され、茶山はその跋文を書いた。

高橋子貫（一七九八〜一八一三）文化十年（一八一三）十二月二十六日、臥床二日にして廉塾にて急逝す。（盲腸炎であつたらしい）十六歳。茶山は墓に詣でて詩を詠み、詩の後に跋を誌している。

森岡綱太（一八〇六〜一八二二）文化十四年（一八一七）十二歳で入塾し、少年の遊事を避け徹頭徹尾読書三昧の修学研鑽時代を送っていた。文政四年（一八二二）三月休暇を取つて郷里の讃岐に帰省したが四月十一日、十五歳で歿した。いずれは片腕になつてくれるであろうと囑望していた茶山にとっては、悔やんでも余りある死

であった。その死を悼んで茶山は五十句から成る五言古詩と墓誌銘を作っている。

以上廉塾の学習と生活を具に見て来た。茶山は都講の確保には非常に心を砕いている。頼山陽を都講として迎えたときは「これで塾は安泰」と一安心したが、一年そこそこで山陽は京都に行つてしまった。茶山の落胆ぶりは察するに余りあるものがあつた。その後を埋めるために讃岐の牧東渚（丸龜藩の正明館の教授であつたが二十三歳の時その職を辞して文化三年廉塾に寄寓していた）に都講として来てくれなしかと礼を尽くして、再三再四誘いをかけ都講の確保に尽力している。「廉塾規約」には塾に関わる人たちや、地域の人たちへの配慮も述べられていて、学問一辺倒の人間としてではなく、礼儀作法や人間としてのしつかりとした生き方をも身につけた、全てを兼ね備えた人として成人してもらいたいという茶山の教育方針を伺うことができる。又、とかく単調になりやすい生活に減り張りを持たせるために、「竹田の観螢」や「重陽の山登り」を年中行事として殆ど毎年実行している。江戸出府などで長期の旅をしている以外は茶山自身も欠かさず参加した。七十歳を過ぎてもなお茶山は講義を続けている。塾生や塾童たちはそうした茶山の姿を生きた手本とすることができたに違いない。茶山は経営能力にも優れたものを持っていて、塾の運営には細々とした配慮がなされている。

3、茶山の遺言書

茶山の遺言書に相当すべき「菅太中存寄書」〔『広島県史』近世資料編VI〕がある。文政二年（一八一九）七十二歳の時に書いたものを、茶山が最晩年に至つて書き直し補筆したものである（刪補した年月日は未詳）。文中に門田朴齋に関することも書かれているので、真実の遺言書とは言えない（朴齋は文政十年に離縁されているので）。これにより茶山は塾経営に関しては既に文政二年の頃から考えていたことが分かる。自分亡き後の塾の経営方針

を二十三項目に亘つて箇条書きにし、その後「右者卯の年（文政二年）十一月十三日に書付候分、只今の姿と少しことかはり候處も御座候故、こゝかしこ刪補いたし此より以下ハ今度書足し候分也」と記して、以下更に二十項目を付け足している。その全文を次に掲げる。

菅太中存寄書

私 跡江書殘し候一書之うつし自筆に可認候本意ニ御座候へ共、此頃書手を痛候而無拋請他筆候事恐入奉存候一拙者元來此塾をたて候事、はしめの志一字の塾をのこし置候ハ、後來是を學種にいたし取続候事もやとのミニ御座候處、其後、後太平記かニ、石州の人小屋瀬次郎備後神邊へ學問にゆきしと申事あり、されハ昔も物よみ致し候處有之やと存候ニ付、追々成就も致可申様にと心懸候處、十余年前失火ニ而家藏不殘焼亡いたし、其前家業に造酒致し居申候、其酒 四百石計一時ニ流れ捨たり候へハ、大抵其時の直段ニ而四拾貫目余之損毛ニ候、其仕込多くハ借金ニ而大半ハ皆人之物ニ候、夫を償ひ候物無御座候故家内離散いたし候外手段無之、夫故内々去方へ申上候所、夫ハ奢侈にて散在致し或ハ物有て不払候とハ違ひ財物不殘焼亡いたし候事、誰も夫をかへせと申人ハ有之まし、もし急ニ責候人あらハ又承り申さんと仰被下候様の事ニ而、段々銀主も了簡つき取償居申候、左候得者只今の有物ハ一々御上より被下候ものニ御座候御扶持御下ケ銀等有之を以取償候へハ也仍右私存付ニ而これを後々に至り水の泡と致シ候こと恐多しとや申さん、又嘆かハしとや申さん、夫故皆々御上へさし上奉り、利米を拝領仕候而、此場所をとりつゝ候様ニ仕度心ニ願出申候、もし願のことく被仰付被下候ハ、随分貞心ニ學業を守り被下度候

一 利米少く候而衣食ニもたり不申候事ニ候へハ、此志を繼候而御出情下候は、田地等買まし候て跡よりそへてさし上候様ニも相成可申か、これら者各の御心法により可申候、然し各へ對し少き物を差むけ無理なる頼と可

申候、これらの所瀬志瀬志をあわれとおほしめし成就致候様ニ被成下度候

一 塾ニ付候田地は勿論、外田地屋敷等もミな々々上へさし上候而、利米はかり被仰付被下候様ニ願出置候、もし相叶候ハ、各配分いたし、それにて各の家内暮し候様致さるへくか、至而少し分りの事ニ候得共、今更いたし方も無之候、此の上ハ銘々の余贏よぶた(残余)出来候時一々田地ニ致し、増次第に上へさし上候而、申受候利米相加ハリ候様ニなり候得者、追々懐もやすく貧生のはこくミも出来可申候、凡事皆此塾成就のためになり候様ニ心懸可被下候、尤身分不埒或ハ不仕合ニ付借銀等出来候とき者、自身引受塾ニ付候物にてさし払候事有之間鋪候、左候へハ塾の田はいつ迄も有之候て、これを以余人を替人ニ被成下候様に申上置候、右之通ニ候へハ、身分相立不申候時ハ身分のミ、妻子あれハ妻子を引つれ引退可申候

一 此願望ハ晋帥久しく心さし置候へ共、不仕合ニ而田宅も出来兼申候、少分の事ニ而各へ難事を托し候こと不本意ニ候、然とも菅三一人ニ而小家の畑をたて候事ハ可仕候處、各を引受候ハ此志を継もらひたき念願に候、これハ最初より噂も仕置候事に御座候、必々頼入候

一 塾もさひしく人も不来候時も可有之候覽、其のときハ余人すすめ候而、誰を一人入れ候へハ行れ候など、人をさしてすすめ候人可有之候、塾ハ芝居と違ひはやらす候而も宜候、これらのこと頓着有之間敷候、とかく身持宜敷人をよく取たて、書をよく読候へハ宜しく、是を樂ともなくさミとも思召さるへく候、名教中自有樂地人地人をうらやみ候事ありましく候

一 廉塾の事既ニ有司へさし上候得者私の宅ニあらず、損し不申様可相守こと勿論なり、講釈ハ来住に随ひ日々々慢有へからず、一人一日を請取諸事取計、一昼夜相つとめ代人来て前人退へし塾にハ書生のミさし置く、各家内共に自宅に居て塾に出勤すへし、元来拙者も自宅に有て出勤いたし候へ共、失火類焼の後塾ニ居候なり、塾の法則ハ別にあれハここにのせす

一 凡そ出勤する人ハ妻をもつてて勝手の世話可被致候、當番に非る人も出て講釈ハ可被致候 當番ハ勿論なり、講時のミ出候人も諸生の行儀可被正候

一 後の藪より竹の根入込候得者家を損し候故、必年に兩度ツツ間の溝をさらへ根を断へし

一 前溝ハ川北・川南の用水也、其用心有へし、溝掘のとき酒を人夫にあたへる事例也、ミそほりの前日二人をやとひ岸の草を刈るへし、是を刈らざるハ人夫引穿ちて岸を損す

一 塾の西薪屋の下、西の屋根下廣く隣家の地をかりたるなり、年貢八年々出ス也、尤杏庵にかるととき永代借候約に而、上に屋普請をもちたせし也

一 東の垣の外新宅の畑迄は塾の敷地也、余人の畑まじらず、前は境目しれたれハしるさず 塾より東の町並みもとハ人家二三軒に不過、洗物ハ周蔵西の溝にて済み候也、只今人家たてまし本溝へ洗物にも出候ゆへ土手へ道も付候、道の代ハ幸蔵より年々一合ツツ出シ候約束に候

一 前の田はもとハ少し広し、門をたてる時埋めてせばくなる、西隣よりかりたる分も南ハうつめし所少々つゝ有之候、大抵見渡しにて知へし

一 書物ハ一人入用之物ハ二人ニかり、二人入用之物者一人ニかり候而、年々土用干に一處にあつめ点檢可被致候
一 諸道具玩器等も右之例に可准候、其内塾につけ候物と銘々の物と引分ケ、私宅に客など有之塾の物借もちゆる事有之候ハ、客済みて後又塾へかへし可被置候

一 凡塾を預り候人不行跡にて退居致し候ハ、あとをつゝけ候人ニ米ハ御渡し被下たき事ニ候、たとひ不行跡と申にても無之、退屈いたし岡山に住たきの廣しまに移宅仕度のと申様のこと、京大坂にも住居なとゝ申様の事有之候へハ、米ハ余人ニ御渡し被下候様に願ハるへく候、其人もち行候事ハ有間しく候

一 凡他出する事有とも留守の人必あとの業を引受守るへし、他行の日數ハ一人ハ多く一人ハ少きと云様に有之へ

からず、大抵見合てすへし

一 園の植木ミたりに移動すへからず、必伐らて不叶候ハ、諸人相談してすへし

一 私死後門人入塾すくなき事も有へし、なき事も可有、左様之時ハ見合せ他所へ出講釈などするも不苦、大抵年寄らされハ人も集らぬもの故、人を喰さんとしても聞く人なし、其時他所へ出候ハ、西山もわかき時は被致拙者もいたし候

一 銀子のこり候ハ、不時の病氣などの間に合候ほとハたくはへて置へし、其余は田を買上へあけ学田を増すへし
一 村方に訟ことなと有之候とき少も相談にのるへからず

一 塾中の溝ハ川北・川南の用水なれハ中に植物なといたすへからず、川骨などうゑ候てへりをほりて流水のうちへ出ぬ様にすへし、早トキのとき分水のいましめに番人等きたること有之時ハ、門をあけて入らしむへし、溝掘のときハ今迄の致采有之、凡来る役人人夫にも丁寧に挨拶すへし

一 家用たり不申候時御上ハ勿論人の物をかり申間敷候、先達而一日の算用いたしそれにて何事もすめ候得者済候物ニ候、宋の東坡ハ一日の用たけ錢を天井にかけ置、入用之時絵竿ニてかけおろし用られ、余り候へハ別にたくはへて客の用にいたされ候、よき手本といふへし

一 右者卯の年（文政二年）十一月十三日に書付候分、只今の姿と少しことかはり候處も御座候故、こゝかしこ補いたし此より以下ハ今度書足し候分也

一 塾田利米割合一年之入を十二に分ち候内

五ツ分 菅三へ御渡し可被下候、右者本家を守り候へハ慶賀祭事等之入用も有之候勿論塾田の内へかれか田地も入こミ候得者、酒株 料をも別ニ彼へわたし候様仕度候、且塾の万事世話いたし候料候

三ツ分 堯佐へ御渡し可被下候 是ハ日々講釈をいたし候料にあて候、これハあとにて買そへ候手當もすこしめくミかけ候ゆへ、少く候、先只今の姿ニ而書きをき候

四ツ分 是又講釈素読指南の料に候、これへ御渡し可被下候、其人ハ未不定候

一 塾ハ御上へさし上候得者私宅とハ不被存、銘々居處より一日かはりに一人宛塾へ出昼夜諸事可被^{うかが}闕候、一人私慮に不落候事ハ相談致さるへく候、塾中にて分らぬことハ外へも諮詢可有之候、およそ一日替りニ塾へ出、講釈質問は勿論対客よりはしめ、諸人の応対諸生之行儀を正し、家の修覆を見合候よりぬす人の要心迄のころ方なくいたし、妻ある人ハ夫婦つれにて出、食物等之世話、火の用心迄もいたさるへく候、明日の人来り候て、前日之人夫婦共に退かるへく候、勿論講釈制限ハ當番ならさる人も銘々の受道をハ出て可被勤候 当番夫婦ハ塾にて食事いたし、出席の人者居處にて可被闕候

一 右之食物にて可也に衣食をさへ、少々宛ニても蓄へ置き、講師を一人も二人も増候様ニと御心掛可被下候 まし候へハ其居處と其衣食とハ備ふへき事勿論なり

一 堯佐三分外一人四分ハ何卒五分つゝにいたし申度候、只今にて出来兼候へ共、預しめ其心得に被成下度候、扱心のごとく追々出来候ハ、今一家も二家も講師をたて置度候、其御含ミ有之度候

一 財を蓄候方色々有之り候由、先此身之處ニ而取締候方第一二候、ある人一年の入を三百六十日に割合せ、是非とも一日の分ニ而一日を凌候様ニいたし、夜咄の客など有て油たらさる月ハ、月末には火をともし、来月の一日よりまた火をともしほとにして暮せしか、後にハよほと財をあつめ候由、世上の家をかさり、衣におこり酒食に美をあつむるために財をあつむるハ人もいやしめとも、塾をひろめ人を導く爲にするは心に愧さる處なり

一 塾の師たる人罪科ありて自退候か、若又御上より退られ候かにても、塾田は塾に付たる物なれハやはり塾につたわり候ハ、師たる人もかくまわれ可^う申候。何卒塾を永久にと申処爰に御座候、もし常の在家のごとく其主

人につきて田地もなくなり候而ハ塾もそれきりに候覧、御上へ願出候事も是第一二候

一世に酒好ミ候人ハ菓子をこのます、たまさかに有之候へとも其身たしなみて兩方ハいたさず候人も有之、尤の事二候、桑事も詩歌山水の好ミ有人は声伎にうときものなり、何もかも欲する處皆これをせんとすれハいそかしく、余の事ニさゝはる物なり、書生ハ詩歌山水等之好を声伎の樂にかへる心可然候

一 塾田之利米余るときは山林田畑にても買置、講師一人もまし候様にいたすへき事

一 講師之内不埒不行儀之事有之候て家内立退候ハ、勿論其跡に其人の拝領致来候田地利米ハ残り可申候、是ハ相談之上何方ニ而も貯置、相応の人を招候而相統講積爲致候様被成下度候、立去候一人の分を跡ニ殘候二人へは御渡下さる間敷候、是者相応之人無之内ハいく年ニ而も右米御預り置被下候而、残り候人の分不時の用有之候共、夫者一人の分ニ而しき候様ニ仕度候、もし又一人死亡仕候ハ、其妻子を其米ニて養候者当然ニ候得共、其内少々をわかち夫ニてつもり候時一講師を入候様ニ仕度候、素読所ハ住人無之各交代致シ勤候ニ、人々住居いたし候家ハいまた無之候、大抵堯佐ハ吉十後口之新塾と申にマツと小池を埋め、夫に立そへをいたし居候て可然候、今一人ハ敬寮可然候、せまきときハ是もすこし之物立そへてもよし、菅三ハ勿論新宅ニ居るへし、銘々我々の居處へ移候後ハ門の西の二間ハ今の納戸其次之間槐寮と壁をへたて塾に可致候、およそか様之類申置度候こと多く候得共あまり数々になり候、大抵前後御見合せ相准し候様ニ御取計奉頼候、是等只今も未決候、隨時之時宜可有之候

一 人々の内若退去せられ候か、有故而一人ニなり候かにて余人を入候ときハ、随分丁寧律儀之人を御待可被下候、才子など申候人、色々の作略有之候人、立身望の人、自慢らしき人、山を心かけ候人等不宜候人よりすゝめ候共御断可被下候、久しくつゝき不申候ものニ御座候、つゝき候而もわかき人をそこなひ候、扱一家立のき候而儒生入候ときハ、其居處ハ役宅のことく後人入かはり候而可然候

一 銘々の一族中に貧なる子有之候共、元來學業に志も無之且才も無之者を塾中にて養ひ候事有へからず、左候得者御上より下され候物を私勝手に用ひ候二当り候、私一族にも一人やしなひ教へくれよと申者御座候ひしか共、右之義を申断申候、若又才有て用立候ものあらハ、一族ハ勿論他人ニ而も此例にあらす候

一 塾田売申間敷候ハ勿論、質入二いたし候而借財致し候事も致され間敷候、若不勝手ニ付売カへ候事御座候ハ、其地のよしあしを考へ其利米之積をいたし、もとの石数に不替候田をもとめ可申候、相応之田無之時ハ有之候迄ハ右銀子御世話人中を頼あつけ置へく候、勿論一々御上へ御願申候而御下知を受へき事二候

一 御領分中へ教諭に参り孝弟のことをおしへ度候、是ハ上に御ゆるしなけれハならぬ事御免あらハなすへし、御免有之なすとも食物ハ勿論、病氣にて駕籠等やとひ候共、村之厄介に成へからす候

一 凡そ在方ハ村々庄屋名主上下を隔候而、上へ申立候こと下へ申聞せ候事時宜有事と見へ候故、よそ二而は村中に上の衆に交り候人之有るを忌み候こと之有り候由、又村中に頭めき候人有之を忌候事有之候由、又村中に頭めき候人有之をも好ミ不申候故、よりより何角につけて手寄之士人へあしく申置候様の事有之由ニ而、左候得ハ物誑候人万一自悟らしく候へハ其崇益甚なるよしに候、此辺左様之事ハ無之候得共、後々に出来候半も不被計候と心得居候而、随分村役人を丁寧によくあしらひ可申事第一二候

一 田地他村ニ有之地主之手届不申候得者、佃家年年あしく作り候而、はてハ其身へやすく買取候事も有之候、是ハ備中の故人之家ニ有之候事、今ハ得こらへす売捨候、其後ハ上田となり物もよく出来候よし其主人の話なり
一 大石内蔵介屋敷とて山科に有之京之医者某持来候、内蔵介内室之一家に候よし、後にやすく売候故人々怪ミ、貴家の系図とも可成く田地なり、何として被売候やと問候へハ是ハ山科にて世話する人、或は崩崩れ修覆せし料幾ほと、或は垣仆れ結かへ候賃何ほと、或は村中ニもめ事有之其割合何ほとと申立、其外早滂ニ付色々ノ損あり、年に利米ハ一合もなく、公租者此方より足し償候様の事、逆も持つゝき候事出来不申候故無是非売捨

候よし答候由ニ而、これハもと其医師算にうときを侮りていたしかけ候事と或人かたり候、か様之事此辺にてハ聞不及候得共、地主たる人心得て者ゐ可申事也、尤塾田ハ世話頼候人有之、講師ハ夫に不及候事に候半なれとも、算学ハ六芸の一也、尤児輩ニ算数を教へ候も職分の一ニ候得者此心かけ可有之候

一 算ハ日用の事障有ときは小生に教ゆへし、又小笠原茶儀等をもすこしは可教候、読書のミ学問にあらされハ也、其外暇あれハ願書・証文・受状などの書法も教へ申すべく候

一 切塾の蓄へ多くなり候へハ、師員をまし生徒をまし候ハ勿論なり、近村ニ子をおろすといふ事有之候、これを少々の家を立乳母を置はこくませ候ハ、爲国一人も人を多くする也、是ハ今よりいふにあらねと出来候ときハすへきなり、後々にハ其人多くなり入用もいらさる様になり候也、その育候子十歳以上丁稚下女にも出し候得者也、此事一家ニ致し候時ハ是を学ひてする人も有るへし、一郡にいたし候ハ、又郡ニもつたへ習ふへし、小利にあらす候

一 小饑饉のとし米老石出し、人にも勸候へハ人も出し候事此前も兩度有之候、これらも出来る時節あらはすへきなり、塾はかりニてすれハ尤よき事なり

一 か様之事いふて限も無之候得共 各之志のむかふ所をしらしむる也、是に限らす善ハ小なりともなすへし、悪ハ小也共なすへからず、何れニも私多年之念願ニ候へハ

成就致候様願上申候

菅 太中

伊 十郎 殿

武 十郎 殿

序 平 殿

市左衛門 殿

伴 助 殿

新九郎 殿

勘四郎 殿

堯 佐 殿

菅 三 殿

某 此人ハ不定候

右一書塾之世話頼候人并わかもの共へ申遣候積ニ御座候、恐入候事ニ御座候へ共御手元へ一通御預り置被下度奉願上候、後日ニ塾ニ而申分も出来候得者、其時御見合被下候ために差上置申度候、書中ニ見へ候微志何卒成就仕候得者、生前身後之大慶誠ニ不過之候事ニ御座候、重畳奉願上候

菅 太中 印

晋 帥

御元ノ御衆中

郡御奉行御衆中

御大目附御衆中

本文之余意左之通ニ存寄候、これハ世話人并塾内へ殘し候二者書き不申候、老輩一兩人へ内々申置候積りニ御座候

- 一 不埒有之候而退き候事ハ私晋卿も堯佐も菅三も同様之事ニ御座候、是者銘々之身代ニ而も持損候而、他国へ参り候も非人乞食ニなり候も同様之事與奉存候
- 一 御願申上候利米割合堯佐分少く相当り候こと、是ハ私跡式ニ定置申候故、行々菅三と同事ニ仕候積ニ御座候而少々芽組有之候得共、只今ニ而決定不仕候故有たけにつもり候、外一人も行々同様ニ仕度候、是者又々伺候事も可有御座候
- 一 不仕合ニ而早世の人有之幼子共御座候時、後家年わか候ハ、乳呑候内ハ親里へつれ帰り候而もよし、子なきハ再嫁させてもよし、これら其ときニ臨候時宜可有御座候、其夫の食分御座候故夫を分ち候ハ、老婦にても致し方御座候覽。其子も才不才ニ而是又遣ひ方可有之候、もし又仕合よく多人数になり候ハ、家法取りおさめ候方も臨時に立可申候、結局多人数なれハ法もたちよく守る事も守らねハならぬ様ニなり候よしニ御座候、人ハ善人なれハ誰人もミなほしかり候故はめ口多く候、悪人なれハ追退候こと講師とても同様ニ候得ハ、格別座食の人ハ出来申間敷奉存候、万一愚鈍いたしかたなきもの出来候而も掃除等之用にたて候而、下男のことくあしらひ不^つ申候ハ、可宜候半やとも奉存候
- 一 塾田をまし講師をそへ饑をすくひ産育を助ル候ことなど、跡を嗣候人の志の的を立おき候ニ而成就仕候事也、私生なからへて仕候ても無覚束候、況やわかきもの共勿論あてになり不申候得共、的なくしてハ心そへそれ行候物ニ御座候、たとへハ機を織かけて置き、跡をつゝけて織れよと申す類ニ而、綿のたらぬ所を段々ニして一匹二匹にもせよと申ニ而候、一尺二而も織かけ置不申候てハ銘々の好ミにて外の事をはしめ候様にもなり行可申哉と奉存候故、あらかしめたて候機ニ御座候、勿論成就仕候へハ無此上事ニ御座候、只今位の小塾ニ而も絶不申候様ニと奉存候か本意ニ御座候
- 一 大意ハ、講師ハいく人かはり候而も私家族ハ断候而もこれハ不埒有之候へハ、富商豪農ニ而も中々必と仕か

たく候 塾と塾田とハ残り候様ニ支度志願ニ御座候、此事御含被置被下度奉願上候ニ而御座候

一 私なからへ候内様子ニより少しの事ハ積りをかへ候事も可有御座候、誰をかしこにおき某をハこゝに居らしむると申類ニ候、か様之類其時に臨ミ候而又々申上候事も可有御座候へとも、大意ハかはり申候事有御座間鋪候

「伊十郎」から「勘四郎」までは川北村・川南村の庄屋で、学問所の世話人であり、「堯佐」は朴齋・「菅三」は茶山の弟、汝榎（長作・萬年）の子、茶山にとっては甥で共に塾の教師である。

茶山はこの「書付」を宛名の九名に渡し、宛名以下の六項目の心覚えを付け加えて、福山藩の大目附以下の役人に提出した。

塾田の利米で塾を経営してゆくというのが茶山の塾経営方針であったから、嗣子の菅三や朴齋、また、塾の教師がこれを私物化することを厳しく禁じている。塾の教師の教育に対する心構えを「塾ハ芝居と違ひはやらす候而も宜候」つまり、「塾は芝居とは違い流行はやらなくてもよい」というのである。地道な教育活動を願う茶山の教育に対する姿勢が窺える項目である。晩年の補筆では利米の配分率まで決めていいる。塾を永続させる為に茶山が最も心を配ったのは塾田の管理であった。世話人を置き、塾田所在の村役人の差配に委せた。塾田は増やすように常に心掛けていいる。講師については最低三人は確保したい。もし利米の余裕があれば許せる限り講師の人数を増やしたい。後任者選びについては人物選択の基準を示している。世襲化することは望んでいない。「不埒有之候而退き候事ハ私晋卿も堯佐も菅三も同様之事ニ御座候、」即ち、「道理に外れて不届きな事があれば退くことは、自分も朴齋も菅三も同じ事である」と教育者には厳しい社会的責任があることを述べていいる。「村方に訟ことなと有之候とき少も相談にのるへからず」とは言うが、「小饑饉のとし米老石出し、人にも勸候へハ人も出し候事此前も兩交有之候、これらも出米る時節あらはずへきなり、塾はかりにてすれハ尤よき事なり」飢饉の時ではできる範囲

内で救恤きうじゆ（助け恵む）すべきであると言ひ、「善ハ小なりともなすへし、悪ハ小也共なすへからず」つまり、「よいことは小さいことでもすること、悪事は小さいことでもしてはいけない」と教師としての心の持ち方まで言及している。このように、塾に携わる者の日常に於る心構えなども、細々と記していて、茶山の性格の一面を識ることができる。

文政二年と言えば茶山七十二歳の時であるが、既に自分亡き後の塾の経営のことに思いを致す周到さである。

結 び

茶山が京都に遊学を志した目的は、寛政八年（一七九六）四十九歳のとき、自分の経営する塾「黄葉夕陽村舎」を、藩の郷塾に取り立てて貰うべく願ひ出た書簡の中に述べられている。つまり、

「神辺は 風俗の乱れた処であり、村のお歴々でも博打はする、富くじは買うといった有様で、自分も同類であった。ところが自分は、ふとしたきつかけから俳諧・発句などを覚え、少しずつ読書に向かうようになった。人からは馬鹿よ、阿呆よと笑われたが、病身なのが幸いして、先ず「医者になる」ということを表向きに掲げたので、大つびらに学問をすることができるようになった。これが僅かな「種」となり、自分の弟や藤井料介などに教えているうちに、少しずつ雅趣に向かう人も出て来て、今の若者や少年で遊民と呼ばれるような者はいなくなつた。このように僅かな学種でも絶えなければ、後々人材を出すようになるだろうというのが一つの望みである。また、そうすることが孔子や如来への私の報恩謝徳の一つでもあり、天地への忠でもあらうと思つている。

昇平二百年、今の世の中あちこちに働かないで暮らす人が多い。その間なにをして暮らしているのやら。いいところで茶香、中ほどでは猿樂、下々は賭博でこの昇平を過すのは残念なことだ。この学問の種さえあれば、

何人かは学問の方へ向く人も出て来るだろう。左道が民を惑わすのも民の愚から入ることである。たとえ一郷一國を照らすことはできなくても、暗夜に一点の火が残ったように、少しの種で幾つもの挑燈になるに違いない。

当今、武を講ずる人は国々に満ちているが、文は日々枯れ枯れになりつつある。この現状を一髪一糸でも引き留めたく思う志は、わが大日本国への露ばかりの忠ではなからうか。まして文がなければ武も根本はなく、統紀もなく、武があつても真の武ではないということになる。だから学問は武の爲にも助けの種になるのではなからうか。」というのである。

茶山は六回の遊学で医業も身につけた。学問は勿論である。その人柄故が、茶山の周りには多くの人が集まつて来た。何よりも終生変わらぬ情義で結ばれた頼春水、西山拙齋を知る切つ掛けとなつたのも、この遊学の早い時期であつた。この巡り会いは茶山の人生の大きな宝である。律儀で努力家で筋道の通つた純粋な生き方の春水、自分の考え方をしっかりと持ち剛直とも言える生き方をした拙齋から、茶山は生きる上での多くのことを学んだ。

特に多感な青年期に世情に目を向け、政治の在り方を正當に批判する。こういつた姿勢は拙齋からの影響に拠るものであろう。拙齋との交友関係が密になつた頃の茶山の詩には、政治や世情に対する批判の詩が多い。詩集『黄葉夕陽村舎詩』の巻一・二あたり三十五歳以前の作とされるものである。世の中を真つ直ぐな目で見て、的確な判断を下す力は塾を経営してゆく上で、最も基本となるものではなからうか。「遊学」の時期を終え「黄葉夕陽村舎」の時期を経て、塾を藩に移管した「廉塾」の時期へと、茶山の目標とした「学問の種」は多少の紆余曲折はあつたが、まずまず順調に育つていった。

第二章 茶山周辺の人たち — 友人・弟子 —

はじめに

第一章で茶山を取り巻く人たちを見てきたが、その職種の範囲の広さ、人数の多さは驚くばかりである。藩主・儒官・藩儒・藩士・家老・教授・医者・医官・僧侶・道士・法師・法眼・詩人・歌人・画家・庄屋・書肆・篆刻家・学者・祠官・祀官・山伏・商人等々挙げてゆけば切りがない。

特に京都遊学最後となった安永九年（一七八〇）二月末から五月下旬までの約三か月に亘る交友は『第二・北上日記』に登場する人だけでも八十数名に上る。六回の遊学を終えて神辺に塾「黄葉夕陽村舎」を開設してからの茶山は、藩主に召されて江戸に二回、京都・大坂・奈良方面に二回、合計四回の大きな旅をした以外は、殆ど郷土でその生涯を送ったのであるが、名声は広く全国に知れ渡り、神辺に茶山を訪ねる人も多くなつた。神辺は宿場町であり、西から上方への街道筋にも当たっていたので、道すがら寄る人もあつたが、船で瀬の浦に上がった人でも、わざわざ「黄葉夕陽村舎」を訪れて行く人が数を増していった。「黄葉夕陽村舎」の時期や「廉塾」の

時期になると一々その人数を数えることは困難だ。そこで茶山の一生の内、関わりを持った人を載せた名簿（『菅茶山略年表』（菅茶山記念館・神辺町教育委員会）により数えると、一〇七四名にものぼる。茶山の交友関係はその数が非常に多く、交友の内容はそれぞれに趣きがあるが、ここでは茶山の友人の中から頼春水と西山拙齋、門弟の中から頼山陽と門田朴齋の四人を取り上げることとした。以下その理由を述べる。

茶山と頼春水の出会いは、茶山がまだ京都に遊学中の安永二年（一七七三）三月中旬のことで茶山二十六歳、春水が二十八歳の時であった。春水は三月中旬の頃、大坂江戸堀に新居を構えて「青山社」と称する塾を開設した。茶山はそこを訪ねたのである。茶山は「刻春水遺稿序」に次のように述べている。

：爾後交寢深、歸省藝州往來每過余。：先生易實年七十一、中間凡五十年矣。居相距三日程、一月不得信、輒必相問安否。有如舊婚媾。時尋雞黍、頻接雁鯉。

：爾後 交り 寢く深く、藝州に歸省の往來 毎に余に過る。：先生 易實の年 七十一、中間凡そ五十年なり。居の相距たること三日の程、一月 信を得ざれば、輒ち必ず安否を相問ふ。舊 婚媾の如き有り。時に雞黍を尋ね、頻りに鴈鯉に接す。

初対面以来、春水は帰省の往復の時には必ず茶山を訪ねたし、二人の中は「一か月も音沙汰がないと必ず安否を尋ねる。時にはご馳走をし合ったり、頻りに手紙のやり取りをした」という親密な間柄になり、その友情は終生続いた。

茶山と西山拙齋との初対面は、茶山が三回目の京都遊学から郷里に帰っていた明和八年（一七七二）春である。拙齋は茶山より十三歳年長であり、このとき拙齋は既に十数年間の京都遊学を経験しているので、茶山にとつては朋友というよりむしろ師に近い存在であった。以後、拙齋が寛政十年（一七九八）六十四歳で歿する迄の二

十七年間、茶山と拙齋の親交は途切れることなく続いた。「拙齋以嚴、先生以和。而其意歸於一已」(拙齋は嚴を以てし、先生は和を以てす。而れども其の意は一つに歸するのみ)と「茶山先生行状」には書かれている。このように性格的には正反対の二人が、終生変わることなく親密なる交友を結ぶことができたのは何故だろうか。

また、茶山・春水・拙齋の三人は終生変わらぬ友情で結ばれていた。頼春水は儒官であり、西山拙齋は阿波藩や加賀藩からの招聘を固辞して承けず、終生野にあつて、郷里備中鴨方で欽塾を経営し、子弟の教育に生涯をかけた人である。茶山は藩の要請を一旦は断つたが、終には儒官に準じる扱いを承け、俸禄をもらい塾の経営に当たっている。春水のように純然たる儒官ではないし、拙齋のように藩とは全く縁のない生き方ではない。春水と拙齋の間を取った生き方であると言えようか。このように生き方も性格も三者三様、それぞれ異なるのに、この三人が終生強い絆で結ばれた交友関係を保つことができたのは何故であろうか。それらについて考えてみる。

頼山陽は、都講として廉塾に来たのであるから、単なる門弟とは言い難い面もあるが、茶山から作詩の指導を受けたら、『日本外史』作成に当たっては、助言を貰ったりしている。山陽については紆余曲折あったが、茶山の配慮や親切から都講として廉塾に来ることとなった。しかし、僅か一年二か月余りで後足で砂をかけるようにして京都に高飛びしてしまった。その後、山陽に対する茶山の立腹や、心のわだかまりから二人の交わりは一時期中断するが、茶山は山陽を見捨てることなく、終生師弟として、時には父親代わりとして深い交わりを持つこととなる。

茶山の詩集である『黄葉夕陽村舎詩』を編集したのは山陽であり、「茶山先生行状」も山陽が書いた。茶山の生涯で心の領域を最も大きく占めたのは山陽ではあるまいか。ある時は心を痛め、ある時は怒り心頭に発することもあり、ある時は憐れみも寄せ、また、ある時は頼りにもした山陽であった。子どものいない茶山にとって頭の良い放蕩息子を持った心境だったのではなからうか。茶山の山陽に対するここまでの繋がりは、「自分にとつて親

友である春水の息子だから」ということだけでは無いものを感じる。それは何であろうか。そのことについて考えてみる。

門田朴齋は茶山の後室、宣のぶの妹の子であるから茶山の甥に当たる。文化六年（一八〇九）朴齋十二歳、茶山が六十二歳のとき、廉塾に入門して茶山の教えを受けた。二十歳で安那郡西法成寺村の庄屋に任じられたが、殆ど廉塾で起臥していた。子どものいない茶山は文政三年（一八二〇）正月廿五日、朴齋を養子にすることを藩に願ひ出て許可を受け、三月五日にその身柄を引き取った。茶山七十三歳、朴齋二十四歳のときである。朴齋は庄屋の職を辞して菅姓を名乗り、名も惟ゆいと変え、二十五歳の頃からは茶山を援たすけて廉塾での助教もした。ところが茶山は亡くなる一か月余り前に、朴齋の養子縁組みを突然解消した。茶山の後室、宣のぶ（朴齋にとっては伯母）が亡くなって一年余りしか経っていなかった。朴齋が茶山の養子となつて七年後のことである。この離縁はこれまで茶山が最も心を痛めてきた廉塾存続にも関わる大きな問題であるにもかかわらず、こうした強硬手段を取らざるを得なかつた茶山の心の内を推測する。

以上、頼春水、西山拙齋とは友人としてのつき合ひであり、頼山陽とはある時は子弟の関係であり、また、ある時は親子に近い関係であり、時には詩の友としての交わりであつた。門田朴齋は十二歳の時に入門させ、弟子として学問を教えたが、長じては塾のことも手伝わせた。朴齋が二十四歳の時に養子として迎えたが三十一歳の時に離縁をした。これら四人とのつき合ひを通して茶山の人と為りを考察する。

第一節 茶山と春水

頼春水（一七四六〜一八一六）名は惟寛、字は伯栗・千秋、通称は彌太郎、春水と号した。安芸国竹原に出生。父享翁の家業は紺屋、春水はその長男であった。頼山陽の父。明和元年（一七六四）、十九歳で上方に出て、堺で趙陶齋の巻願けんごを受けた。一旦帰郷したが同三年、再び大坂に出て片山北海に学び、北海を盟主とする混沌社中の最も年少の詩人として、同じ社中の河野伯潛や葛子琴らと親交を結んだ。尾藤二洲や古賀精里と識りあったのは安永二年（一七七三）三月中頃であった。大坂では伏見町や新天満町に住んでいたが、安永二年三月中旬に江戸堀の「南軒」に新居を定めて家塾「青山社」を開設した。天明元年（一七八一）三十六歳で安芸浅野藩の藩儒（三十人扶持）となる。天明三年（一七八三）三十八歳の七月七日、浅野侯世嗣齊賢なりかたの伴読となり江戸詰を命じられた。茶山より二才年長で、山陽に関わって終生の友となる。文化十三年（一八一六）二月十九日、七十一歳で歿した。

一、出会い

茶山と春水の出会いは安永二年で茶山二十六歳、春水二十八歳であった。昔茶山撰の「刻春水遺稿序」によつてそれを知ることができる。

刻春水遺稿序

賴先生千秋在浪華。余行次其近里、聞其爲詩人。而造其居。則一見如舊。談次、出示近著遊記。叙事明暢、迴別時調。乃知先生非尋常詩人也。爾後交淺深、歸省藝州往來每過余。因聽其持論、辨學統、排異說、正正堂堂、誘余不少。乃知先生非尋常文人也。及解褐其國、接僚友、導子弟、嚴溫並施。其伴讀世子、建白啓沃、無所依違。乃知先生非尋常經生也。要之今時難得之人爾。余之初見時、先生年二十八、余則少二年。先生易質年七十一、中間凡五十年矣。居相距三日程、一月不得信、輒必相問安否。有如舊婚媾。時尋雞黍、頗接雁鯉。今而思之、宛乎如在目前焉。

今茲癸未、令弟千祺、令子子成、將梓其遺詩及文、徵序於余。余不嫻於文。然於交誼、弗可辭也。略舉所見、以塞其責。至若其善書札、名高海內。於其事業才識、蓋一塵而已。因不復贅云。嗚呼其學殖抱負、概見於詩文。則視而知之者多矣。若夫所未及言、與言之、所不可盡。深知其濫奧者、果誰居。臨書慨然久之。文政癸未春三月、備後菅茶山晉帥禮卿謹撰。

賴先生千秋は浪華に在り。余行きて其の近里に次り、其の詩人爲るを聞く。而して其の居に造る。則ち一見にして舊の如し。談次、出して近著の遊記を示す。叙事明暢にして、迴かに時調に別なり。乃ち先生尋常の詩人に非ざるを知るなり。爾後交り寢く深く、藝州に歸省の往來、毎に余に過る。因りて其の持論を聴くに、學統を辨じ、異説を排すること、正正堂堂として、余を誘ふこと少なからず。乃ち先生尋常の文人に非ざるを知るなり。褐を其の國に解くに及び、僚友に接し、子弟を導くに、嚴溫並び施す。其の世子に伴讀たるや、啓沃を建白するに、依違する所無し。乃ち先生尋常の經生に非ざるを知るなり。之を要するに今時得難き人なるのみ。余の初めて見えし時、先生年二十八、余は則ち二年少し。先生易質の年七十一、中間凡そ五十年なり。居の相距たること三日の程、一月信を得ざれば、輒ち必ず安否を相問ふ。舊婚媾の如き

有り。時に雞黍けいしよを尋ね、頻りに鴈鯉げんりに接す。今にして之を思へば、宛まとして目前に在るが如し。

今茲癸未、令弟千祺、令子子成、將に其の遺詩及び文を梓せんとし、序を余に倣まねむ。余文に於て嫺嫺ならず。然れども交誼に於て、辭すべからざるなり。略はぼ所見を擧げて、以て其の責を塞ふさんとす。其の書札を善くするが若きに至りては、名は海内に高し。其の事業才識に於ては、蓋し一塵なるのみ。因りて復た贅ぜいせずと云ふ。嗚呼 其の學殖抱負、概して詩文うたふに見る。則ち視て之を知る者多し。夫の未だ言ふに及ばざる所の若きは、與たに之を言ふも、盡くすべからざる所なり。深く其の蘊奥を知る者、果たして誰か居らん。書に臨み慨然として之を久しくす。文政癸未春三月、備後の菅茶山晉帥禮卿謹撰。

〔明暢〕論旨がはつきりして、よく通る。〔廻別時調〕時代の調子に安易に乗らない。〔學統〕學問の流れ。

〔解褐〕仕官する。〔建白啓沃〕上役に意見を申し上げる。〔啓沃〕君主を教え導く。〔易寶〕賢人の死。孔子の弟子である曾參が臨終の時敷いていた大夫用の簀すいを、身分に相応しないと云って取り替えさせて死んだという故事。〔禮記〕檀弓。〔婚媾〕身内同士の結婚。〔雞黍〕ご馳走。〔嫺〕習熟する。〔贅〕無駄口。

よけいな言葉。〔文政癸未〕文政六年。

以上の「序」によつて、茶山と春水の初対面は、安永二年で茶山二十六歳、春水が二十八歳の時であったことが分かる。それ以来、「一月 信を得ざれば輒ち必ず安否を相問ふ。舊婚媾えんごうの如き有り。時に雞黍けいしよを尋ね、頻りに鴈鯉に接す。」といった親密なる交遊を持つこととなる。

二、春水 仕官以前の交友

1、春水 初めて神辺を訪う

安永五年（一七七六）三月二・三日の両日、春水の父、亨翁の七十歳古稀の寿宴が、郷里竹原に於て開かれた。大坂南軒に居住していた春水は、二月二十二日に大坂を発つて帰郷した。其の往復、神辺に立ち寄り茶山を訪ねている。この時のことが頼惟勤著『寶曆明和以降浪華混沌詩社交遊考證初篇』に次のように書かれている。

二月二十二日、大坂の南軒より發程、同日中に大仁村を通過、二十九日晝に神辺に到着、茶山（二十九歳）を訪い、三月一日歸家。二日・三日壽筵、…二十二日夕方に茶山を再訪、二十三日茶山の先導で鴨方に赴き、西山拙齋（四十二歳）に始めて會い、以後二十八日岡山に至るまで拙齋・茶山と同行、その間二十七日に奥内（宮内の誤り）を通過…二十九日に閑谷に到り、五月四日朝、兵庫を立て夕方、浪華に歸着した。

二十三日茶山の先導で鴨方に赴き、春水（三十一歳）は初めて西山拙齋に會つたが、この時春水は次の五言律詩を賦した。

同普禮卿訪西山士雅途上

普禮卿と西山士雅を訪ぬる途上

沿涉相携去 路回天草池

沿涉し相携へて去けば、路は回る天草の池。

彩幡新樹寺 華表古松祠

彩幡新樹の寺、華表古松の祠。

鷄黍非爲約 琴書自有期

鷄黍約を爲すに非ず、琴書自ら期する有り。

誰知求友意 已有野禽知

誰か知らん友を求むるの意、已に野禽の知れる有り。

〔春水遺稿〕卷二

流れに沿うて一緒に行けば、路は天草の池を回っている。

彩りの美しい旗は新樹の寺に翻り、鳥居は古松の祠の所にある。

「馳走は約束したわけではない、琴書は自然に期待している。

誰が知るだろうか友を求める意を、己に野鳥だけが知っている。

「天草池」 鴫方の拙齋の至樂居から一里ばかり西南にある池。「彩幡」彩りの美しい旗。「華表」鳥居。

茶山・春水・拙齋の三人は備中国宮内村の有木山に登った。拙齋は次の七言律詩を作った。(廿九日は廿七日の間違い)

丙申四月廿九日宿宮内藤井氏、同頼千秋菅禮卿登有木山、謁納言藤公墓。

丙申四月廿九日 宮内藤井氏に宿し、頼千秋菅禮卿と同に有木山に登り、納言藤公の墓に謁す

南竇遺蹤誰復求 閑雲黯淡夕陽愁 南竇の遺蹤 誰か復た求めん、閑雲 黯淡として夕陽愁ふ。

断碑僧拂苔三尺 荒寺鳥歸松一邱 断碑 僧は拂ふ 苔三尺、荒寺 鳥は歸る 松一邱。

勿道兒溪徒壓死 那知猯谷匪嘉謀 道ふ勿れ 兒溪 徒に壓死すと、那ぞ知らん 猯谷 嘉謀に匪ざるを。

冤魂不盡當年恨 幽咽暗泉傍石流 冤魂 盡さず 當年の恨み、幽咽 暗泉 石に傍ひて流る

〔拙齋西山先生詩鈔〕上卷)

罪を得て南に流された人の足跡を誰が再び尋ねるだろう、閑かな雲は薄暗く夕陽は愁いを帯びている。

壊れた石碑を拭う僧 苔は三尺も積もっている、荒れた寺 鳥は帰って行く 松林の丘へ。

言わないで欲しい 兒溪は成親が空しく圧死した所だと、誰が知ろうか 鹿ヶ谷の変は良い謀ではなかったと。

無実の罪で死んだ人の亡魂は 当年の恨みが尽きないだろう、幽かに咽ぶ薄暗い泉は 石に沿うて流れている。

「宮内藤井氏」吉備津神社の神官。「有木山」吉備中山のことで、吉備津神社が祀られている。「鹿ヶ谷の

変」の藤原成親なつちかの墓がある。「鹿ヶ谷の変」治承元年（一一七七）、藤原成親・師光・成経らが京都東山鹿ヶ谷の俊寛の山荘で、平家討伐を謀議したが、多田行綱の密告により発覚し、師光は朱雀大路で斬首。成親は備前国児島に配流され、後に謀殺される。俊寛・成経は鬼界島まがひまに配流され、多田行綱も陰謀に参加した罪で、安芸国に流される。事件の背景は、急速に台頭して来た平家一門に対する貴族層の反発があり、猿楽の座興から政治批判が出た程度のもので、平家が反対勢力を制圧する為に作り上げた陰謀とする説もある。「南竄」罪を得て南へ流されること。「竄」は島流しにする意。「黯淡」薄暗いさま。「斷碑」割れた石碑。「見溪」成親が殺されたとする所。「猯谷」鹿ヶ谷。「嘉謀」良いはかりごと。「冤魂」無実の罪で死んだ人の亡魂。「幽咽」ちよろちよると水が流れる。むせび泣く。白居易「琵琶行」に「間關鶯語花底滑、幽咽泉流水下難」（間關たる鶯語花底に滑らかに、幽咽する泉流水下に難めり）「時には花の下に鳴く鶯の如く伸びやかに、ある時は水の下を咽び流れる泉流のようにつかえがちとなる」とある。

2、春水 安永八年帰坂の時

春に竹原に帰省していた春水が、帰坂の途中神辺に寄り、茶山を訪ねた。春水はその時の様子を認めた書簡を、竹原の父と叔父に宛てて差し出している。

…私儀十二日、尾道發足仕候而、天氣も能よ、七ツ頃ニ神邊へ着仕候。兼而召連くれ候様、申來り有之候、桑田元厚と申も、今ヤ〜と相待候、早速福田と申村申遣候所、翌朝右元厚親父、儀兵衛參り逢申、萬々頼ミ申候。翌日ハ雨天ニ候。乗物にて笠岡迄罷越候、而太中一家内、胡屋淺右衛門と申ニ一宿仕候。其翌十四日、鴨方西山拙齋へ罷越候。此邊、右太中同道ニ候。其翌十五日ハ、天氣能、右西山同道諸門人一所ニ魚崎ニ而中藤又四

郎と申へ参り候。是ハ去春、罷上候而此方へも被尋候。其邊ノ大庄屋ニテ大家ニ候。此所ニ而晝飯、それより右又四郎同道ニ而、玉島より上成、中原和助参り候。此にてハ六七人の客ニ成候。殊更ニ階作り之大座敷出來有之候。此方へ右之記ヲたのミ申度との事ニ候。其翌十六日ニハ西山拙齋ニ門人二三人、菅太中、良玄と申僧と此方十人計同行にて出立、倉敷岡惣右衛門へちよと立寄候而其晚岡山ニ宿申候。夜分二川上良迪へ知らせ遺候へハ、酒肴持せ來候而旅宿ニ而面白候。…夜ニ入候而大坂へ入候。入り口、大仁村餞別の所へ立寄候へハ、廿日ニハ多ク歸り候半と、橋本とはりまや専助と兩人、辨當など爲持待受にて大ニ興じ候而初夜頃ニ歸宅仕候。

(頼棋一『春水書簡集』)

即ち、二月十二日に尾道を発つた春水は、その日の午後四時頃神辺に着いた。以前から茶山を通して春水に話してあつた桑田元厚という者が春水に弟子入りをしたいと、到着を今か今かと待っていた。到着したことを知らせると、早速、翌朝父親と一緒に神辺にやつて来た。十三日は雨、春水等は籠で笠岡に行き、茶山の親戚、胡屋淺右衛門宅に一泊する。十四日は鴨方に西山拙齋を訪ねて一泊。十五日は天気も良く、拙齋は数人の門弟を連れ、春水、茶山も一緒に魚崎の大庄屋中藤又四郎を訪ねて昼食。昼食後、又四郎も加わつて一行十六、七人で中原子幹の鎖青亭に行く。十六日は拙齋とその門人二三人、菅太中、良玄という僧と十人ばかりで出立、倉敷の岡惣右衛門方へ立ち寄り、拙齋と茶山はここで春水と別れ、それぞれ郷里に帰った。春水はその晚岡山に宿し、大坂に着いたのは廿日であつた。大坂には葛子琴と藤井元知が弁当を持って迎えに来ていた」という内容である。

3、茶山京遊中(六回目)の交友

安永九年(一七八〇)正月、茶山は神辺を發つて六回目、最後となつた京都遊学をする。二月二十五日迄は京

都に滞在していたと思われるが、その間の記録（『第一・北上日記』と称されるべきもの）は失われてしまったのか現在のところは未詳である。『第二・北上日記』は現存していて、茶山が藤枝得中（春水に入門する）を連れて二月二十五日に京都を発ち、舟で大坂に赴こうとするとところから始まっている。天氣が定まらなくて、結局二月二十七日未明に、舟は大坂の西国橋の下に着き、待ちかねていた春水を江戸堀の青山社に訪ねる。二月二十八日は、今回の最も大きな目的の一つでもあった池田の荒木商山に会うため、（茶山は春水から折りに触れて、荒木商山のことを聞いていて、機会があれば一度会ってみたいと望んでいた）春水の紹介状を持って出かけた。それは摺扇（扇）に書き付けた次の詩である。

二月梅花落古津 吟箒將問李溪春 二月の梅花 古津に落つ、吟箒將に問はんとす 李溪の春。

相逢合若舊相識 本是烟霞同病人 相逢へば合に舊相識の若かるべし、本と是れ烟霞同病の人。

二月の梅花が 古い渡し場に散る頃、詩人が あなたの春を訪ねようとしている。

互いに会えば 古くからの知友のようでしょう、もともと二人は 風流を愛する人だから。

「李溪」荒木商山の号。商山（一七三六〜一八〇七）は攝津国池田の人で、名は廷喬、字は伯遷、商山または李溪と號し、別に梅里・北山という號もあった。大坂の懷徳堂に入り、中井整庵や五井蘭州に学ぶ。

混沌社の盟友でもあった。春水は『師友志』のなかで商山のことを次のように述べている。「好んで詩を論じ、識趣あり。本邦古今の詩を選びて、『熙朝詩薈』と称し、十巻と爲す。人となり恬淡寡言、風趣愛すべし」と。

三月 三日 茶山が春水宅を訪ねると、客が雑踏していた。暮れ方桑田元厚を伴い舟で淀川を遡って京都に帰る。
四月十一日 茶山・拙齋等一行五人が鞍馬に行こうと、聖護院村を出発しようとしていたところへ春水が訪ねてくる。「立談して、詩を移し」午頃出立した。

五月 六日 千秋・子琴・伯照・子原と共に田中鳴門を訪う。

五月 十日 今井子原宅に招飲。子琴・安道・伯照・千秋・尚太郎と共に往く。

五月十二日 茶山送別の為、小西伯照が棧船を岸に着け、送別の準備をして待つていた。千秋・子琴・子雅（拙齋）・得中・元厚等と是に乗り、詩酒飲を尽くす。

夜半に子雅と茶山は帰郷の為の舟に乗ったが、風が逆風であったため出航出来ず、十六日まで春水の世話になりながら、春水を介して知り合った友人を訪ね歩いたり、五百羅漢や大仁村などを尋ねたりして過ごし、十七日になつてやつと出航出来た。備後国鞆の浦に上陸したのは、五月二十日の夕刻か、二十一日の午前中であつたと思われる。茶山は大坂では主として春水の家に宿泊しながら、混沌社の盟友たちと詩酒徹逐の日々を過ごしていた。

三、春水 仕官以後の交友

1、春水 安芸浅野藩の儒官となる

天明元年（一七八一）十二月十七日、春水は安芸浅野藩の儒官となつた。そのお達しを聞き茶山は次の七言絶句を賦した。

寄頼千秋

潔身何必在邱樊 趨舍隨時樂事存
 休爲微嫌徒躑躅 十年短檠也君思

身を深くするに 何ぞ必ずしも邱樊に在らん、趨舍時に随ひ樂事存す。
 微嫌の爲に 徒に躑躅するを休めよ、十年の短檠也た君思。

身の潔白を保つためには必ずしも田舎に引つ込む必要はない、進退は時に応じて楽しみがあるもの。少しばかり嫌だからと躊躇することはない、十年書物に親しんで来られたのもまた君恩というものだ。

「趣舎」進むと止まると。「躑躅」たちもとおる。足踏みする。「短檠」丈の低い燭台。

安芸浅野藩の儒官となつた春水は、藩命によつて広島と江戸の間を往復することが度重なつた。春水はその都度、必ず神辺に立ち寄つた。當時を回顧して春水は『在津記事』下巻に次のように記している。

歸省往反、歴訪知舊。一宵の話、瀝瀉肝膈。亦自可樂。又、持陳諸膝下、資其承歡焉。若岡元齡兄弟・西山士雅・吉田孔夷、或一過之。若昔禮卿、往反必過之。以其家在官道也。但士雅留余尤甚。以余匆忙、目爲流民。余則往反有期。不得緩一日。士雅乃從容、率其門生、送余數里、別後就其近地、遊覽山水、留連數日、或經旬余云。

歸省の往反、知舊を歴訪す。一宵の話に、肝膈を瀝瀉す。亦自ら樂しむべし。又、持して諸れを膝下に陳じ、其の承歡に資す。岡元齡兄弟・西山士雅・吉田孔夷の若きは、或いは一たび之に過る。昔禮卿の若きは、往反必ず之に過る。其の家官道に在るを以てなり。但だ士雅余を留むること尤も甚し。余の匆忙を以て、目して流民と爲す。余は則ち往反期有り。一日を緩くするを得ず。士雅乃ち從容として、其の門生を率ゐて余を送ること數里、別後其の近地に就きて、山水を遊覽し、留連數日、或いは旬余を経ると云ふ。

天明二年（一七八二）四月九日、前年の暮れに芸藩の儒官となつた春水は、取り敢えず妻子を大坂に残したまま単身で広島に帰つたので、四月朔日、妻子を迎えるために広島を出立した。途中、竹原・尾道を経て九日、神辺に茶山を訪ねた。以下『春水日記』には次のように書かれている。

九日晴。發尾道…投神邊禮卿。

十日雨。禮卿送余、與俱上途雨又甚。笠岡ニて胡屋平藏立寄。晡後、到鴨方西山氏。

十一日晴。士雅（拙齋）・禮卿皆送、玉島、藤枝元旋立寄。宿上成繁屋和助。

十二日 與士雅別。禮卿携元厚相送。到倉敷。過岡惣右衛門、酒食之饗應有之、郊外一里ニシテ別。宿藤井驛。

春水は四月十六日に大坂に着き、一か月余り滞在したが風雨の日が続き、又、妻子を残して五月二十八日、單身陸路で帰藩した。その途中六月四日に茶山を訪ねた。以下『春水日記』に拠る。

六月四日 神邊三宿。禮卿・廣右相饗。夜分、海道士來ル。

〔廣右〕 江原廣右衛門。本在屋菅波家の縁者。〔海道士〕 尾道の牛海道士。茶山の古い雅友。

五日 禮卿兄弟（茶山の弟恥庵）同道ニテ、尾道へ行、勝島嘉藤太（敬仲）舟遊、到賀島而宿。

六日 賀島遊覽。回舟送禮卿兄弟於松永而抵尾道、命輿、過三原・本郷到竹原。

〔勝島嘉藤太（敬仲）〕（一七六〇〜一八〇八）名は惟恭、通称敬助、翼齋と号した。祖父・父共に好学の士であった。詩文を良くし、『藝備風土記』十卷を著し、随筆集『行餘紀聞』がある。〔恥庵〕

（一七六八〜一八〇〇）名は晉寶、字は信卿、一の字は圭二、恥庵と號す。六人兄弟の末っ子で茶山とは二十歳の年の差があり、この時は十五歳の弱年であった。

2、茶山の不快と解消

天明三年（一七八三）八月八日 春水は江戸邸にある浅野齊賢なつかたの侍読として江戸詰めを命じられた。このことは茶山の耳にも達していたので、春水は江戸への往路必ず神辺に立ち寄るものと茶山は期待していたが、春水等は航路であったため、この度は茶山を訪ねることができなかつた。杏坪も遊学の為に同行していたし、大坂在住の春水の岳父飯岡義齋いのかぎさきが病氣であるとの報せを受けていたので、それを見舞うため妻の梅颯と四歳の山陽も一緒に

あつた。そんなどさくさに紛れて、春水は茶山に何の連絡も取らないで、八月八日に航路で広島を發つたのである。茶山は春水が訪れないので、旅程の事などを尋ねる書簡を差し出したりしたが、行き違いになつていて、春水から何の音沙汰もないので不快に思い、春風に春水の様子を尋ねる書簡を出した。そこで、春風は江戸にいる春水と杏坪に宛てて八月二十日、次のような手紙を出した。

菅禮卿より此間私方へ書狀差越申候。此度江戸御出之儀御傳言ニ而被仰聞候のミニ而御細書も不被下、年來御願念に預候儀故、此度江戸行之儀委敷御様子も不被仰下御不審存候由ニ御座候。尚、私より御様子しらせくれとの儀ニ御座候。只今君侯も御在藩ノ事學館當時ノ御場合ニ御座候所關東御出之儀如何、外二色々取沙汰も有之旁以御様子承度由也。私よりあらく見聞之儀不怪様ニ申遣候。大坂御上リノ内禮卿への御狀御座候哉。左様も無御座候ハ、禮卿へ御狀御下し被遣度奉存候。

更に十月十一日付けで春風は春水に書簡を送った。

禮卿へ一書被遣度奉存候。御出立後御様子相尋申來候儀者先達而申上候。一向御書通無御座候而者御疎遠ニ相成申候。

以上の書簡によつて春風が、事の行き違いから春水と茶山の仲が悪くならないようにと、氣遣いをしている様子が伺える。程なく理由も分かり茶山の不快も解消されたようで、茶山は江戸の春水に宛てて次の四首の七言絶句を贈った。

寄懷頼千秋 四首 頼千秋に懷ひを寄せる 四首

(一)

江心明月照清漪 彼美遙遙天一涯 江心明月 清漪を照らす、彼の美 遙遙たり 天の一涯。

日夕秋風人萬里 長空何處寄相思 日夕 秋風 人は萬里、長空 何れの處にか 相思を寄せん。

江の中程に映った明月は清らかな細波こまなみを照らしている、賢人であるあなたは、遙かな天の果てにおられる。日暮れ方は秋風が吹き私は貴方から万里の彼方、見渡す限りの広い空 何処に思いを寄せればよいのか。

(一)

君居東武紫霞關 我住西薇黄葉山 君は東武紫霞の關に居り、我は西薇黄葉の山に住む。

驛馬門前日來去 幾時能載故人還 驛馬門前日び來去す、幾時か能く故人を載せて還らん。

あなたは東武の霞ヶ関に居り、私は西備の黄葉山に住んでいる。

驛馬車は門前を毎日々々 往つたり來たりしている、何時になつたら親友を乗せて還つて来るでしょうか。

(三)

東都華麗勝西都 將第侯家幾百區 東都の華麗なること 西都に勝り、將第侯家幾百區なるべし。

楚國爲誰能設醴 齊王舊自好吹竽 楚國誰が爲にか能く醴れいを設けん、齊王舊自り竽うを吹くを好む。

東都の華麗であることは 西都に勝っており、將軍の屋敷や 諸侯の家は 幾百區に及ぶことでしょう。

楚國は誰のために能く醴れいを設けることだろう、齊王は 旧くから竽うを吹くことを好む。

〔設醴〕客を厚くもてなすこと。〔醴酒不設〕漢の穆生は酒を好まなかつたので、楚の元王は特に醴酒を設けて之を厚遇した。後、王戊ぼの時に至つて之を設けなくなつたので穆生は楚を去つたという故事。客を待遇する礼の漸く衰えるを言う。〔漢書〕楚元王傳〕〔齊王舊自好吹竽〕齊王が竽を好むと云うのに、齊に仕えようとした者が、王の門に立って瑟（大琴）を鼓して、三年入ることができなかつた故事。転じて人の好むところに添わない意。（韓愈「答陳商書」）

(四)

才美世機皆貝錦 心平官路豈羊腸 才美世機皆貝錦べいぎん、心平かなれば官路豈に羊腸ならん。

不須狡兔爲三窟 且學靈龜解六藏 須まひず狡兔 三窟を爲すを、且かつつは 靈龜に學びて 六藏を解さん。

才能の美世の中の交渉 全て美しい錦のよう、心が平穩なら 官路もどうして曲がりくねつてしましようか。狡兔が三窟を爲すような小賢しいことを用いず、更まうは明智の龜に學び六爻の藏するところを解するとよい。

「狡兔三窟」小賢しい策略。「狡兔」ずる賢い兔。悪賢い役人を喩えた。「三窟」ずる賢い兔は常に隠れ家として三つの穴倉を持つと言われている。「靈龜」靈妙な徳を持つもの。その明智に喩える。「易」頤おん 初九しよくに「舍爾靈龜、觀我朵頤。凶。象曰、觀我朵頤、亦不足貴也。」(爾なんぢの靈龜を舍すてて、我を觀おんて頤たを朶る。

凶。象に曰く、「我を觀おんて頤たを朶る」とは、亦た貴ぶに足らざるなり。初九は陽剛で「頤」の下体、震動の初めに居る。六四に正応があるが、自ら養うに足る素質を持つ。然るに六四に応ぜんとして動く。

そこで自らの靈龜(明智)を捨てて我(六四)を見て、物欲しげに頤を垂れている象である。勿論、凶の占いである。爻辞に「我を觀おんて頤たを朶る」と言うのは、本来、貴ぶべき明智を持つているのに、それを捨てて動くので、もはや貴ぶには足りないのである。」とある。「六藏」六爻の藏するところ。「六二、顛頤、拂經。…(六二は中正であるが、陰柔で自ら養うことが出来ず、必ず陽剛による。…)六三、拂頤貞、凶。…(六三は、不中不正で、下体震動の極に居る。…)六四、顛頤、吉。…(六四は、陰柔で位正しく上体艮止の初めに居り、下に正応の陽剛がある。…)六五、拂經、居貞吉。…(六五は、柔中で君位にあるが、陰柔不正で万民を養い得ず、上九の賢者に頼つて養う。…)」とある。

以上、四首は『黄葉夕陽村舍詩』巻二に収められている。この詩のすぐ後に次の五言絶句が掲げられている。

頼千秋寄怪石二枚 一得諸觀音版、一得諸甲州路上、菊花一枝 桔梗原所采、賦此爲謝

頼千秋 怪石二枚を寄す 一は諸を觀音版に得、一は諸を甲州路上に得たり、菊花一枝 桔梗ヶ原にて采る所なり、此れを賦して謝と爲す

菊見君心苦 石知君操剛

菊に君の心苦を見、石に君の操剛を知る。

願言磨不磷 晩節益芬芳

願言磨するも磷ろがざれば、晩節益す芬芳ならん。

菊にあなたの心の苦しみを見る、石にあなたの志の堅いことを知る。

常々どんなに磨いても薄くならなければ、晩年の節操は益々香ることでしょう。

〔操剛〕志が堅い。「操」堅く守って変えない志。「願言」つねづね。「願」は、つね。一説に「思う」の意。

「言」は語助。「ここに」の意。『詩經』「邶風」二子乗舟に「願言思子、不取有害」（願言子を思ふ、害有ることなけん）「彼らのことを思いわび、禍なからんようにと祈る」とある。〔磷〕薄い。薄らぐ。『論語』

陽貨に「不日堅乎、磨而不磷」（堅きを日はずや、磨すれども磷ろがず）「真に堅いもののかをいうのに、如何に磨いても薄くならぬものだ」とある。〔晩節〕年をとってから。晩年の節操。〔芬芳〕評判。

此の詩の注に「怪石二枚」は「一得諸觀音阪、一得諸甲州路」とあり、「菊一枝」は「桔梗原所采」とあるところから、春水は各れを採取した所から茶山に送ったことがわかる。

天明四年（一七八四）九月九日に茶山は、岡岷山に託して春水に七言絶句一首を贈っている。それは次の詩である。

重陽托岡岷山寄書頼千秋附以菊花

重陽 岡岷山に托して書、を頼千秋に寄せ 附するに菊花を以てす

偶逢驛使正重陽 親拗籬花挿八行

偶ま 驛使に逢ふに 正に重陽、親ら籬花を拗りて 八行に挿む。

脩程到日應乾萎 領取交情一種香

脩程 到る日 應に乾萎すべきも、領取せよ 交情 一種の香を。

〔黄葉夕陽村舍詩〕前編卷二

偶々 馭使に逢いました ちようと重陽の日に、親しく垣根の花を取って 手紙に挟みます。

永い行程で 届く頃には乾燥しているかも知れませんが、受け取って下さい 友情の気持ちの一種の香りを。

〔驛使〕 宿場から諸方へ文書を伝達する使者。

一時抱いた春水に対する茶山の不快の念は解消し、二人の仲は旧に復していることが、これらの詩を通して伺える。

3、茶山『遊藝日記』の旅

『遊藝日記』は、天明八年（一七八八）六月五日から七月六日まで、門弟の藤井暮庵を伴って、安芸国を旅した時の紀行を漢文で認めたものである。六月五日に神辺を出立。福山で一泊し、尾道で一泊して三原を過ぎ、西条・海田を経て広島に至り頼春水邸を訪ね宿す。春水の下僕の案内で市内の国泰寺・白神社・広島城・東照宮を廻り、春水邸に数日滞在して己斐・草津・廿日市・地御前を経て宮島に渡り管弦祭を見る。宮島に一泊して厳島神社に詣でる。帰途は又、春水邸に宿し海田・西条・三永・三津を経て竹原に寄り春風宅に宿す。本郷・三原・尾道を経て七月六日神辺に帰着した。この一か月間の安芸地方の旅を記した紀行文である。

天明八年（一七八八）五月、（十日前後と思われる）西帰途中の春水は茶山を訪れ宿した。その時、春水は次の二首を賦した。

菅禮卿宅 菅禮卿の宅

投宿薫風夕 新醅斝幾餅 投宿す 薫風の夕、新醅 幾餅を斝す。

主人侑杯起 簞箔引流螢 主人 杯を侑めて起ち、箔を簞げて 流螢を引く。

風薫る夕べに泊まった、新しいどぶろくを 幾瓶 空けたことか。

（『春水遺稿』卷三）

主人は杯を進めて立ち上がり、簾を掲げて螢を導く。

別禮卿 禮卿に別る

官橋楊柳巷 野店棟花村 官橋楊柳の巷、野店棟花の村。

主人西出郭 追餞盡餘樽 主人西のかた郭を出で、追餞して餘樽を盡くす。

官橋柳の町、野店辛夷の花咲く村。

主人は西に送つて郭を出で、名残を惜しんで残りの酒を尽くす

春水はこの時、六月には宮島の管弦祭を見に来るようと茶山を誘つた。六月五日、茶山と門弟の藤井暮庵は、福山・尾道・西条・海田を経て十日の午前中に広島に入り、春水を研屋町の藩邸に訪ねた。茶山が訪れた時、春水は藩の学問所に出かけていて留守で、弟の頼杏坪と息子の久太郎（後の山陽。この時が茶山と山陽との初対面であった）に迎えられた。その時のことを『遊藝日記』に次のように記している。

十日陰、午前至廣島。訪頼氏于礎工街。千秋不在、千祺及久太郎出迎。須臾千秋至自頼宮。晩雨。

陰、午前廣島に至る。頼氏を礎工街に訪ぬ。千秋不在にして、千祺及び久太郎出で迎ふ。須臾にして千

秋 頼宮自り至る。晩雨。

春水が帰つて来て飲談一頻りの後、茶山と春水は七律を一首ずつ作つた。茶山の詩は次の通り。

廣島訪頼千秋分得螢字 廣島に頼千秋を訪ね分ちて螢字を得たり

離居屈手幾秋螢 夜雨西窓酒滿餅 離居手を屈すれば幾秋螢ぞ、夜雨西窓酒は餅に滿つ。

十載趨朝頭未白 學家迎客眼俱青 十載朝に趨きて頭未だ白からず、家を擧げて客を迎へ眼俱青し。

雲低隣屋木陰邃 石倚勾欄苔氣馨 雲は隣屋に低れ木陰邃く、石は勾欄に倚りて苔氣馨し。

喜見符郎耽紙筆 童儀不倦侍書楯 喜び見る符郎の紙筆に耽り、童儀して書楯に侍するを。

〔黄葉夕陽村舍詩〕前編卷三二

お別れしてから何年になるでしょうか、夜の雨は西の窓を打ち、酒は瓶に満ちている。

宮仕えして十年になられますが、頭はまだ白くない、一家を挙げて歓迎してくださいました。

雲は隣の屋根にまで垂れて木陰は深々としている、石は手すりに近く苔の香が漂って来る。

好もしく思ったのは山陽が一心に何か書いて、行儀正しく飽きもせず書窓に倚っていること。

〔符郎〕山陽を指す。

この茶山の詩に次韻して、春水は次の七言律詩を賦した。

夏六月十日、菅禮卿携藤井土晦至、有詩次韻志喜

夏六月十日、菅禮卿は藤井土晦を携えて至る、詩有り次韻して喜びを志す

庭陰既夜見流螢 懷抱相傾酒幾餅 庭陰 既に夜にして流螢を見る、懷抱 相傾けて酒幾餅。

投我詩囊新紫翠 示君齋壁古丹青 我に投ず詩囊の新紫翠、君に示す齋壁の古丹青。

燈前細雨鳴蛙近 檐角輕颺稗竹馨 燈前 細雨 鳴蛙 近く、檐角 輕颺 稗竹 馨る。

自喜三年仳離後 山林舊話對窓楯 自ら喜ぶ三年仳離の後、山林 舊話 窓楯に對するを。

〔春水遺稿〕卷三二

庭の木陰は既に暗く螢の飛ぶのが見え始めた、胸中の想いを傾けて、幾瓶の酒を空けたことか。

私に寄せる新しい山水の風景詩、貴方に示す書齋の壁に掛けた古い水彩画。

燈火の前には細雨が降り、蛙の鳴き声は近い、軒先に吹く軽やかな涼風に、若竹が馨る。

自ずから喜ぶ三年別離の後、山林の窓辺に相對して昔話に花が咲くのを。

「齋壁」書斎の壁。「佻離」別れ離れる。

十二日も茶山は春水宅に逗留した。

この時の様子が『春水日記』、『遊藝日記』には次のように認められている。

『春水日記』

十四日雨、禮卿問話。

十九日雨、…禮卿・料助殿島より來。

廿一日雨、…水樓ニテ禮卿饗應。

廿一日雨、…禮卿又來告別、強留、詞筆及夜。

廿二日雨、…禮卿出立…

『遊藝日記』

十二日午晴、晚復雨、皆宿賴氏。久太郎甫九歳、秀發不好戲弄。喜客侍坐、終日不倦。學詩及書畫。皆可觀。

午晴れ、晚復た雨、皆賴氏に宿す。久太郎甫めて九歳、秀發にして戲弄を好まず。客を喜びて侍坐

し、終日倦まず。詩及び書畫を學ぶ。皆觀るべし。

十三日午晴、就逆旅。午後、千秋遣蒼頭爲導、登国泰寺。巨利也。佛前帳帷、皆本藩所織、精工不謝京錦。次詣白神祠、遂周中城、出北郊。礁樓無數、濠塹幾重、邸第壯麗、嚴然大藩也。渡川東轉、謁東照宮。宮不甚大。而美麗瀟洒、丹彩目を眩ます。途中、且雨、且霽、至此滂沱。經櫻馬場・猿猴橋・京橋、還逆旅。夜千秋見訪。大雷迅雨、言語難辨。自初更至。

午晴れ、逆旅に就く。午後、千秋蒼頭をして導を爲さしめ、国泰寺に登る。巨利なり。佛前の帳帷、皆本藩の織る所、精工京錦に謝らず。次に白神祠に詣で、遂に中城を周りて、北郊に出づ。礁樓無數、

濠塹幾重、邸第壯麗、嚴然たる大藩なり。川を渡りて東轉し、東照宮に謁す。宮は甚だしくは大ならず。而れども美麗瀟洒、丹彩目を眩ます。途中、且つ雨、且つ霽れ、此に至りて滂沱たり。櫻馬場・猿猴橋・京橋を経て、逆旅に還る。夜千秋訪はる。大雷雨、言語辨じ難し。初更よ自り至る。

十四日 辰時やうや纒収。午訪千秋。晚復雨。

辰時 纒やうや収まる。午千秋を訪ぬ。晚復た雨。

十五日 雨、午訪千秋。

雨、午千秋を訪ぬ。

十六日 雨、…余訪頼氏。晚同千秋還逆旅。…

雨、…余頼氏を訪ぬ。晚千秋ととも同に逆旅に還る。…

十九日 雨、欲往岩國不果。便舟還草津。…晚還廣島、適頼氏告至、乃就舊館。千秋使僮再來、勞行間疾。夜訪千

秋…

雨、岩國に往かんと欲して果たさず。便ち舟にて草津に還る。…晚廣島に還り、頼氏にあ適きて至れるを告げ、乃ち舊館に就く。千秋僮けんをして再來して、行を勞ねぞらひ疾を問ふ。夜千秋を訪ふ…

〔僮〕下僕。

廿日 晴、千祺來、戒移具水樓、以開別筵。…午前、詣千秋。千秋在泮未還。千祺携酒爲導、同遊北郊、出市渡川而左。…申時乃抵水樓。…觀者、分韻製詩。千秋及余七律、千祺五古、堅良・土晦五律、季明七絶、久太郎作書及畫。美酒盛饌、擊歎而別。夜已三更。

晴れ、千祺來りて、具を水樓に移して、以て別筵を開かんことを戒ぐ。…午前、千秋に詣いたる。千秋は泮はに在りて未だ還らず。千祺酒を携へて導を爲し、同ともに北郊に遊び、市を出でて川を渡りて左す。…申

時に乃ち水樓に抵る。：観者、韻を分かつて詩を製る。千秋及び余は七律、千祺は五古、堅良・士陸は五律、季明は七絶、久太郎は書及び畫を作る。美酒盛饌、飲を罄くして別る。夜已に三更。

〔浮〕昔、諸侯の学宮。「堅良」林堅良（一七四〇～一八〇三）名は義之、字は強卿、栗園と號した。

竹原の人で、詩文に巧み、頼家の家庭医であり、頼家とは親交があつた。「季明」藤季明。賀茂郡上三永の儒医藤原春園の弟。春水の門下生であつたと思われる。

廿一日陰、早辭逆旅、詣頼氏告别。千秋書札、名于海内。求者接踵。每過余郷、邑人爭先來乞う。此行亦請托者數十人。此日爲愁、因揮寫二十余幅、以見貽。留談至昏。遂宿焉。夜雨。

陰、早く逆旅を辭し、頼氏に詣りて告别す。千秋の書札、海内に名あり。求むる者踵を接す。余が郷に過る毎に、邑人先を争ひて來り乞ふ。此の行亦た請托する者數十人。此の日愁を爲す、因りて揮寫二十余幅、以て貽らる。留談して昏に至る。遂に宿す。夜雨。

廿二日 早發廣島。千秋使季明送至猿猴橋、千祺使蒼頭送至海田驛：

早く廣島を發す。千秋は季明をして送りて猿猴橋に至らしめ、千祺は蒼頭をして送りて海田驛に至らしむ：

廿四日 晴、：探頼千齡。千齡千秋弟、千祺兄也、余始見之。而以伯季故相知十余年、不啻傾蓋如故、盛膳芳醇、歡至子夜。

晴、：頼千齡を探ぬ。千齡は千秋の弟、千祺の兄なり、余始めて之れを見る。而れども伯季の故を以て相知ること十余年、啻に傾蓋故きが如きのみならず、盛膳芳醇、歡子夜に至る。

〔千齡〕頼春風（一七五三～一八二五）春水の弟で杏坪の兄である。通稱を松三郎、名を惟彊と言ひ、字は千齡。若くして大坂に出て、医術を古林見宜に学び、頼家の後を嗣いで医業で一を生を送つ

た。茶山とは文通は交わしていたが、出会うのはこの時が初めてであった。

廿五日 晴、同登照蓮寺、…還宿頼氏。

晴、同に照蓮寺に登り、…還りて頼氏に宿す。

廿六日 晴、午後發竹原。千齡治具、祖道尾梨阪。毛氈而坐、勸酒及飯。酬酢移時而別。更命弟子石某・童龜送、度嶺乃回。…

晴、午後 竹原を發す。千齡 具を治めて、尾梨阪に祖道す。毛氈して坐し、酒及び飯を勸む。酬酢して時を移して別る。更に弟子石某・童龜に命じて送らしめ、嶺を度りて乃ち回る。…

〔酬酢〕酒を酌み交わす。〔祖道〕旅行の時に道祖神を祀り道中の安全を祈る。送別の宴会。

4、親族に類する交友

安永二年（一七七三）大坂江戸堀の春水南軒を茶山（二十六歳）が初めて訪ね、春水（二十八歳）と初対面してからは、「二月不得信、輒必相問安否。有如舊婚媾。時尋雞黍、頻接雁鯉」（一月 信を得ざれば、輒ち必ず安否を相問ふ。舊婚媾の如き有り。時に雞黍を尋ね、頻りに鴈鯉に接す）とか「未有一句無一書」（未だ一句にして一書無きは有らず）といった親交を持つようになり、春水が東上するとき、西帰する時は必ず茶山を訪ね、宿泊するのが習わじとなっていた。茶山が春水との出会いをどんなに楽しみにしていたか、その様子を枕雲上人は、「端午後二日、茶山菅先生席上、謁春水頼、先生賦此以呈」（端午の後二日、茶山菅先生席上、春水頼先生に謁して、これを賦し以て呈す）と題する四十六句から成る七言古詩の中で次のように詠んでいる。

（略）

燈下披簡心飛越 尊食打包辭庭闈 燈下簡を披けば、心は飛越す、尊食、打ち包みて庭闈を辭す。

日午始届山下驛 主人待賓卷書幃 日午始めて山下の驛に届る、主人賓を待ちて書幃を巻く。

澆花洗硯忙家童 下榻掃席割鮮肥 花に澆ぎ硯を洗ひて家童忙し、榻を下し席を掃ひ鮮肥を割く。

〔竹間齋遺稿〕

燈下に手紙を披いて読むと、心も飛ぶ思い、朝食も包んで貰って家を飛び出した。

午頃やっと黄葉夕陽村舎に着いた、茶山は賓客を待って書齋の帳を巻き上げる。

花に水をやり、硯を洗わせるなど家童は大忙し、腰掛けを下ろし、席を綺麗にし、新鮮な肉を裂く。

〔枕雲上人〕備後国府中の明浄寺（真宗）の第十代住職。名を了秦、字は昇道、枕雲と號した。又、竹間齋、間齋という別號がある。茶山とは詩文の交わりがある。郷里の儒医、内田紫邏に医学を学び、後大坂に出て葛子琴に詩を学び、更に京都に出て村瀬榜亭に儒学を、小澤廬庵と上田秋成に国文学を学んだ。上田秋成の「藤簑冊子」六巻は枕雲が校訂上梓した。〔尊食〕朝早く寢床の中で食事をする。〔庭闈〕親の居る部屋。〔下榻〕賓客に接すること。後漢の陳蕃が友人 徐穉以外は腰掛けを片付けて客に接しなかつた故事。〔蕃在郡不接賓客、唯穉來特設一榻、去則懸之〕（蕃郡に在るとき賓客に接せず、唯だ穉來たれば特に一榻を設く、去れば則ち之を懸く）とある。（『後漢書』徐穉傳）

枕雲上人は、「茶山から西帰の春水が七日頃に神辺に着くという手紙を貰って、灯の下で開いて読み、心も飛ぶ思いで、朝食も取らず弁当を包んでもらって家を飛び出した。昼頃、黄葉夕陽村舎に着いてみると、茶山は書齋の帳を巻き、家童に指図して花に水を注がせたり、硯を洗わせたりして大忙し。自分でも腰掛けを下ろし、席を掃除し、新鮮な肉を割いて、春水をもてなす準備に大童であった」というのである。この詩句から茶山が久しぶりに春水に会うことを、我が兄弟に会うかのように、浮き浮きと心待ちにしている様が手に取るように窺える。

(1) 恥庵 春水邸訪問

寛政元年（天明九年が一月二十五日に改元され寛政元年となる）四月十三日に、茶山の弟の恥庵（二十一歳）が春水邸を訪ねた。前の年、茶山が春水の世話になりながら宮島の管弦祭に行った時の話を聞いて、自分も行ってみたいと思つたようで、春水は江戸詰で留守であつたが、同行の者一人を連れて出かけ、春水邸に宿し山陽と初対面した。

『梅颯日記』に拠ると、

十三日 晴、菅太中弟（恥庵）來問。同行一人有り。夕、宮島へ渡。：

十六日 晴、：菅氏弟、宮しまより歸、夜宿。

十七日 晴、：菅氏弟、申ノ刻斗出立。：

とある。十歳の山陽と恥庵はこの時が初対面で、後に山陽は恥庵歿後、その墓誌を書くほどの親密な付き合いを持つのである。

(2) 茶山の父の死

寛政三年（一七九二）二月十八日、茶山の父、樗平が歿す。春水は前年九月に東上していたので、このことを竹原の春風からの書簡によつて知り、四月十二日、茶山に宛てて次のような弔慰の書状を送った。

竹原同姓共より書通に而承候得者御親父様御儀御長病之所御養生御叶不被成二月十九日曉天御逝去被成候由、皆様御愁傷之程可申上様無御座奉存候、尚御節哀御尤奉存候。右御弔慰迄、以愚禮如此御座候、恐惶謹言。

頼彌太郎

四月十二日

惟完

菅太中様

菅圭二様

〔備後史談〕第七卷第三號

十一月六日、春水西帰の途中茶山を訪う。『春水日記』に「六日 神邊信宿」とある。六、七日と二泊したものである。

寛政四年（一七九二）三月、春水は藩主浅野重晟侯から五十日間の休暇を賜った。美作国湯原温泉で湯治でもしようとして、三月二十六日に広島を發つ。四月一日、父の一周忌も終わつたが、尚、喪に服している茶山を訪ねる。三日、茶山と共に河相君推（茶山と遠戚関係）の松風館に招かれる。次の詩はその時の作である。

河相保之松風館同菅禮卿賦 河相保之の松風館にて 菅禮卿と同に賦す

長松之下故人家 鳴玉溪流不覺譁 長松の下 故人の家、鳴玉 溪流 譁 しきを覺えず。

傳杯更愛幽香度 屋角微風橘柚花 杯を傳へて 更に愛す 幽香の度るを、屋角の微風 橘柚の花

〔春水遺稿〕卷三

長松の下にある 故人の家は、溪流の音はするけれど 喧しくはない。

杯を交わし合えば 幽かな香が快く伝わってくる、家の角の 柚の花の香を微風が運んでくる。

茶山は服喪中につき詩作なし。春水は五日に神辺を出発し、九日に湯原温泉に着いた。一か月近く体を休めて、四月末日帰途に着き再び茶山を訪ねた。『暮庵先生行狀略記』に「同年（寛政四年）五月朔日頼先生ヲ招ク先生此トキ作州ヨリ還リ金粟園ニ逗留詩ヲ呈ス一夕止宿翌日菅氏ニ歸ラル」とあることにより、五月一日に春水は藤井暮庵の「南北春水村舎」に一泊したことが分かる。

(3) 茶山の母の死

春水が来訪する度に茶山の母は、春水の嗜好に合わせたものを作って饗応したようで、春水もそれに対し感謝の気持ちを抱いていた。寛政五年（一七九三）十月八日、春水が西帰の途中茶山を訪ね信宿した時、『春水掌録』の「癸丑西上日程曆」に次のように認めている。

八日 神邊。神邊ニイタル。禮卿兄弟ソノ它二三子會晤。禮卿母堂予ガ嗜好ヲ諳ジ供給コトニ厚シ

九日 神邊。夕陽村舎ニ往ク。（「夕陽村舎ニ往ク」とは茶山の居宅金粟園から塾の「黄葉夕陽村舎」に行くといふこと）

寛政八年二月一日、茶山の母半が歿す。その墓誌を春水が書いた。茶山は感謝の気持ちを次の詩に託して送る。

頼千秋爲余作先妣碑銘、子成作亡弟墓誌。各自書以贈。已而刻成、打榻數紙、頗覺致差訛。賦此寄謝。

頼千秋 余の爲に先妣の碑銘を作し、子成 亡弟の墓誌を作す。各自書して以て贈る。已にして刻成り、打榻數紙、頗る差訛を致すを覺ゆ。此れを賦し寄せて謝す。

端楷新麗玉交柯 石質其如缺畫多 端楷 新麗 玉柯を交ふ、石質 其れ缺畫多きが如し。

獨喜頼家文化脚 一團風韻自難磨 獨り喜ぶ 頼家の文化の脚、一團の風韻 自ら磨し難し

（「黄葉夕陽村舎詩」前編卷八）

端正な楷書 新鮮で麗しい書体は 玉が枝を交えているようだ、石質は（母を奉り過ぎて）避諱が多いようだ。ただ嬉しく思う 頼家の文化の支えを、一族の風雅高尚なことは 自ら受け継がれている。

「妣」亡母。「差訛」誤り。違い。「端楷」正しく楷書で書く。「缺畫」文字の筆画を省くこと。避諱の一方法。

(4) 茶山癱を患う

寛政十二年（一八〇〇）正月、茶山は癱うちを患い病臥する。その時の事が『春水日記』・『梅颺日記』には次のように書かれている。

『春水日記』

十四日 晴。…修神邊禮卿之書、有癰腫之患、太助明朝發。

十九日 微雪。…太助歸自神邊。…

『梅颺日記』

十四日 晴。…神邊太中病氣の由、こまかく申來、爲見廻太助遣す。明早朝發足。

十九日 晴、陰、夕がた雪少ふる。太助神邊より歸る。

〔太助〕頼家の下僕。

頼杏坪は「茶山更癱をやめると聞て人つかはしてとへりける序によみて送る」とて、「見すに思ふ我心をも汲みて知れ 君か病のあさかれとのみ」と歌を詠んで贈った。

（重田定一『頼杏坪先生傳』）

西山拙齋は寛政十年十一月五日、六十四歳で歿したが、それは九月頃に、腰に出来た癱が原因であつたことを知っている人たちなので皆憂慮した。茶山は幸い完治した。

(5) 春水 恥庵と嵐山に遊ぶ

寛政十年（一七九八）秋、茶山の末弟の恥庵は京都に塾を開いた。寛政十一年には京都に開設した塾で門弟を指導しながら、儒者としての一步を踏み出していた。

寛政十二年（一八〇〇）三月十一日、春水は江戸に向かう途中、茶山を訪ねて宿し十二日に神辺を出立した。

二十日に京都に入り、二十五日まで金山重左衛門、若槻幾齋に泊まり、茶山の弟の恥庵等と嵐山などに遊ぶ。

『春水日記』

廿日晴。入京抵邸、過金山宿若槻氏。

廿一日晴。暖甚。(金山)土紹、晉卿、與過東邊宿金山。

「晉卿」は「晉寶」(恥庵の名)の誤り。

遊嵐山 嵐山に遊ぶ

春風于役緩 枉路過皇州 春風于役緩かにして、路を枉げて皇州に過ぎる。

更攪嵯峨勝 且爲汗漫遊 更に嵯峨の勝を攪り、且く汗漫の遊を爲す。

烟霏鐘磬寺 花霧管絃舟 烟霏鐘磬の寺、花霧管絃の舟。

雅賞亦恩遇 賦詩夸友儔 雅賞亦恩遇、詩を賦して友儔に夸る

〔春水遺稿〕卷五)

春風の中 于役も厳しくないので、路を逸れて帝都に立ち寄る。

更に嵯峨の地に名勝を訪ね、暫く気儘な遊びをする。

霞の中に鐘磬の寺を訪ね、花霧の中に管絃の舟遊びをする。

風流な遊びは藩主のお恵み、詩を賦して仲間を誇ろう。

「于役」君命によって他国に使者として行くこと。『詩經』王風・君子于役に「君子于役、不知其期。曷至哉。」(君子役に于く、其の期を知らず。曷くにか至らんや。)―貴方はお仕事で出かけられ、お帰りは何時かは分からない。何処まで行かれたのでしょう―とある。「汗漫」行方を定めず放浪する。「鐘磬」鐘と磬と。共に楽器の名。「磬」は石または玉製。掛けて打ち鳴らす。「恩遇」手厚いもてなし。

この頃が春水の人生で尤も心爽やかな良き時期であった。恥庵は春水のこの詩に次韻して次の詩を作った。

平安遊近頼文學于役江戸、追隨三日、臨別賦贈、次其嵐山舟遊韻

平安にて頼文學の江戸に干役するに邂逅し、追隨すること三日、別れに臨み賦して贈り、其の嵐山舟遊の韻に次す

萍蹤歎聚散 相値在皇州 萍蹤 聚散を歎き、相値ひて皇州に在り。

雲樹七年別 琴樽三日遊 雲樹 七年の別れ、琴樽三日の遊。

連侍陳徐榻 又同李郭舟 連りに陳徐の榻に侍し、又李郭の舟を同にす。

鶯花却無頼 草草送明儔 鶯花却つて無頼、草草明儔を送る (「恥庵詩草」)

あちこち集まつたり散らばつたりすることを歎き、やつと会えて京都にいる。

雲と樹は七年の別れがあり、琴と酒樽を携えて三日の遊び。

連日陳徐の優待をいただき、又李郭の親交と同じ待遇。

鶯や花は却つて役に立たない、早々と輩を送つてしまふ。

『萍蹤』浮き草が、あちらへ行つたり、こちらへ行つたりするように、一定の定まり場所がないこと。

『陳徐の榻』後漢の陳蕃が榻を壁に掛けておいて、親友の徐穉が来たときだけ壁から下ろして坐らせ優遇したという故事。「李郭舟」後漢の李膺が郭太と同じ舟に乗つたという故事。友人が親しむ喩え。「郭太洛に遊び河南尹李膺と親交有り。名は京師に奮う。後、郷里に帰るや諸儒の送る者車千乘に及ぶ。独り膺と同舟して済り衆賓望んで神仙となす」(『後漢書』97・98)『高士傳』下。「無頼」放蕩で頼りにならない。『史記』高祖紀に「始大人常以、臣無頼、不能治産業。不如仲力。今某之業所就、孰與仲多。」(始め大人常に以へらく、臣は無頼にして、産業を治むること能はず。仲が力むるに如かず、と。今某の業就る所、仲と多きこと孰れぞや。)とある。「明儔」仲間。ともがら。

恥庵はこの詩の終わりに次のような脚注をつけている。

先生、留京、主幾齋先生。余、日夕過從。先生看花嵐山、余又、陪遊。會淇園先生舟遊花下、因同乘其舟。故五六及此。

先生、京に留りて、幾齋先生を主とす。余、日夕過從す。先生花を嵐山に看たるとき、余も又、陪遊す。淇園先生の花下に舟遊するに會ひ、因りて同に其の舟に乗る。故に五、六此れに及ぶ。

「先生」春水。

春水は後にこれを見て、上欄に次のように書いている。

是爲寛政庚申。伯恭、知余在水、次介信卿、相見。乃上船。伶樂合作、遊人指目。會十時梅厓、携妻兒、在水一方。亦要而與飲口益劇。余、有詩。拙甚。信卿爲藏之、有人問焉。輒以不記對云。信卿早没、梅厓尋死、伯恭亦逝已四、五年矣。

是れ寛政庚申爲り。伯恭、余が水に在るを知り、次ぎて信卿を介して、相見ゆ。乃ち上船す。伶樂合作し、遊人指目す。會ま十時梅厓、妻兒を携へて、水の一方に在り。亦要して與に飲口すること益す劇し。余、詩有り。拙甚し。信卿の之を藏するが爲に、人の焉を問ふ有り。輒ち記さざるを以て對へて云ふ。「信卿早く没し、梅厓尋ぎて死し、伯恭亦逝きて已に四、五年なり」と。

「寛政庚申」寛政十二年。「伯恭」皆川淇園。「信卿」恥庵の字。「伶樂」樂人。「指目」注目する。

「十時梅厓」(一七四九—一八〇四)名は賜、字は子羽、梅厓と號した。大坂の人。儒学を伊藤東所に、書を趙陶齋に学ぶ。書画に秀でていた。伊勢の長島蕃に仕えたが寛政十二年に致仕して大坂に帰る。この嵐山の遊は致仕後のこと。

この遊の後、恥庵は体調悪く、この年八月二十七日、京都の僑居に於て三十三歳で歿す。杏坪は後に長い七言古詩を作つて、悼惜の意を述べている。

(6) 神辺大火

文化四年（一八〇七）二月十八日、神辺大火により茶山宅も類焼する。茶山は三月朔日附けて、三原の青木新四郎に宛てて次の書簡を認めた。

…失火之事折節大風ニ而在所之火事ニハ大事ニ候ひき。火もとすこし遠く候故手もとの書物、ならひに府志之引書、諸方よりかり候珍書、系図、感状等のこときものこれ第一ニ取出し候。家内其外怪我人も無之、其上の喜三御座候。其他八家くら衣服等ひとつも残らず、書物もよそへ預し分よほどやき申候。塾ハのこり而それにかたつきみ申候。いまた荷物等四五軒之分入みたれ打かさなりみ申候故、昨今其事等に打かゝりみ申候。殺風景御推察可被下候。頼長崎行もやみ申候由、千齡儀右衛門など催有之候よし羨敷奉存候。辭安留守に母上死去之よし、いまたたしかには不申參候へとも相違なきことと聞き候故私ハ去冬弔書とも遣し申候。よきなくさみとおもへハ跡にかゝること出来、いつれこゝらか世上無情之事と奉存候。其内又々可申上候。先は御深切之御禮萬一を申述候ため草々申上候。恐惶謹言。

三月朔

菅太中 晉帥

青木新四郎様

『備後史談』第十五卷第十一号

『春水日記』に、

「二月二十三日晴、寒甚。神邊（茶山）失火之報」とある。

「青木新四郎」（一七六〇～一八一六）名は淵、字は子讀、通称は新四郎、充延と號した。安藝國三原に生まれる。幼時より学を好み、詩文は特に長じていた。茶山や頼兄弟とも親交が有り、伊澤蘭軒とも親しかつた。

著書に『三原志稿』八巻がある。「府志」福山志料。「頼長崎行もやみ申候」山陽が九州に旅行をすると云うこ

とであつたが、立ち消えになつた。「千齡儀右衛門など催有之候よし」春風と石井豊洲が三月二十一日竹原を發つて長崎遊歴をしている。

五月 杏坪が江戸から西帰の途中、類焼見舞いに寄る。

茶山は杏坪の見舞いに対し、次の詩を作つた。

災後頼千祺過訪 災後頼千祺 過り訪れらる

吾文不救畢方災 酒甕書車盡作灰 吾が文救はず 畢方の災を、酒甕 書車 盡く灰と作る。

門外幸餘楊柳在 長條暫繫白駒回 門外幸ひに楊柳を餘して在り、長條 暫く繫ぐ 白駒の回るを。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷二

私の詩文は火災を救わなかつた、酒の甕や書庫は全て灰となつてしまつた。

門外は幸いに柳も焼けないで残り、長く垂れた枝は暫く白駒を繋ぎ留めることができる。

〔畢方〕火災を司る怪鳥。『山海經』に見える。「其の状鶴の如く一足。赤文青質にして白喙、名づけて畢

方と曰ふ」とある。「酒甕」土蔵が焼けて、酒三百石、酒造器具類が鳥有に帰した。「書車」書庫は半焼、

当時は『福山志料』編集集中で他から借りていた大切な書類が焼けたが、蔵書の大半は助かつた。

火災に対する山陽の見舞い状。(父、春水と同封)

呈菅先生書

今日晡、得先生書。時家翁出在巖舎。襄見書皮上、有失火字、心不安、遲翁歸、披封、則先生亦罹災。驚嘆不措。年非龍蛇。何君子之遭厄也。然丙丁之歲、祝融爲虐、亦其當爾。先生非有王參元之富。則小子不敢爲柳子厚之賀也。獨意、先生詩、已言盡天下之奇。而艱厄之事、其所未遇、是有未盡也。造物小兒、乃以此變局、試其筆端。先生必有以答之。後音寄示是希。餘復何言。弔慰之言、家翁盡之。襄不復言。二月念二。迫暮燈下。

とであつたが、立ち消えになつた。「千齡儀右衛門など催有之候よし」春風と石井豊洲が三月二十一日竹原を發つて長崎遊歴をしている。

五月 杏坪が江戸から西帰の途中、類焼見舞いに寄る。

茶山は杏坪の見舞いに対し、次の詩を作つた。

災後頼千祺過訪 災後頼千祺 過り訪れらる

吾文不救畢方災 酒甕書車盡作灰 吾が文救はず 畢方の災を、酒甕 書車 盡く灰と作る。

門外幸餘楊柳在 長條暫繫白駒回 門外幸ひに楊柳を餘して在り、長條 暫く繫ぐ 白駒の回るを。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷二

私の詩文は火災を救わなかつた、酒の甕や書庫は全て灰となつてしまつた。

門外は幸いに柳も焼けないで残り、長く垂れた枝は暫く白駒を繋ぎ留めることができる。

〔畢方〕火災を司る怪鳥。『山海經』に見える。「其の状鶴の如く一足。赤文青質にして白喙、名づけて畢

方と曰ふ」とある。「酒甕」土蔵が焼けて、酒三百石、酒造器具類が鳥有に帰した。「書車」書庫は半焼、

当時は『福山志料』編集集中で他から借りていた大切な書類が焼けたが、蔵書の大半は助かつた。

火災に対する山陽の見舞い状。(父、春水と同封)

呈菅先生書

今日晡、得先生書。時家翁出在巖舎。襄見書皮上、有失火字、心不安、遲翁歸、披封、則先生亦罹災。驚嘆不措。年非龍蛇。何君子之遭厄也。然丙丁之歲、祝融爲虐、亦其當爾。先生非有王參元之富。則小子不敢爲柳子厚之賀也。獨意、先生詩、已言盡天下之奇。而艱厄之事、其所未遇、是有未盡也。造物小兒、乃以此變局、試其筆端。先生必有以答之。後音寄示是希。餘復何言。弔慰之言、家翁盡之。襄不復言。二月念二。迫暮燈下。

菅 先生

襄 再拜

〔山陽書翰集〕續編)

菅先生に呈する書

今日の晡くれ、先生の書を得たり。時に家翁は出でて餐舎くわしやに在り。襄書皮上に、失火の字有るを見て、心安からず、翁の歸を遅まちて、封を披ひらけば、則ち先生亦また罹くわい災さいす。驚嘆措おかず。年は龍蛇に非ず。何ぞ君子の厄に遭ふや。然れども丙丁の歳、祝融虐を爲すは、亦また其れ當まさに爾しかるべし。先生王參元の富有るに非ざるなり。則ち小子敢へて柳子厚の賀を爲さざるなり。獨り意ふに、先生の詩は、已に天下の奇を言かり盡つせり。而し艱厄の事は、其の未だ遇はざる所、是れ未だ盡さざる有り。造物小兒、乃ち此の變局を以て、其の筆端を試さんとす。先生必ずや以て之に答ふる有らん。後音に寄示されんことを是れ希ねがふ。餘は復た何をか言はん。弔慰の言は、家翁之を盡くせり。襄復た言はず。二月念二。迫暮燈下。

襄 再拜

菅 先生

〔襄〕山陽。〔龍蛇〕辰巳。「年非龍蛇」この年文化四年は、丁卯であるから辰の年ではないの意。〔祝融〕火を司る神。火災。〔王參元之富〕柳宗元の賀状に「京城人、多言足下家有積貨。好廉名者皆畏忌。不敢道足下之善。今幸爲天火之所滌盪。凡衆之疑、舉爲灰燼。足下之才乃可以顯白而不汚。是祝融回祿之相吾子也」(京城の人、多く足下家に積貨有るを言ふ。廉名を好む者は皆畏忌す。敢へて足下の善を道はず。今幸に天火の滌盪てまたく(洗い流す)する所と爲る。凡そ衆の疑ひ、舉げて灰燼と爲す。足下の才能乃ち以て顯白にして汚れざるべし。是れ祝融回祿の吾子を相あくるとある。造物者が先生の文才を試みようとするの

であるから、良い詩文を作って造物者に答え、それを自分にも見せて欲しい、というのである。春水は別に書簡によつて見舞った。「造物小見」天のいたずら。

四、山陽に関わる交友

1、山陽脱藩

(1) 茶山搜索に協力

寛政十二年（一八〇〇）九月二日に竹原の大叔父傳五郎が死去した。当時江戸詰だった春水の名代として、山陽を弔慰に遣らうという相談が、杏坪（春水の末弟）と梅颯（春水の妻）の間で纏まり、五日早朝、供の太助と共に竹原に向けて出発したが、山陽は途中で太助を撒いて脱藩してしまった。当時、脱藩は追打ちの刑に相当する行為であったから、頼家の人々の狼狽は一通りではなかった。当然神辺の茶山の方へも報せが走った。茶山が頼一家と親しかつたこともあるし、神辺が平素山陽の憧れであった三都への街道筋でもあつたからである。茶山も考えられる限りのあらゆる手だてを尽くして協力を惜しまなかつた。

茶山の日記に次のような記事がある。

九月十二日 雨。石井儀右衛門、小頼に跟つひ（小頼を跟つけ）て来る。

「石井儀右衛門」豊洲と号す。山陽より四歳年長で頼家とは緊密な関係にあつた。寛政四年に春水の門弟となる。「小頼」山陽。「跟」後を追う。

十三日 雨。廣人二人、千齡の書を持ちて来る。亦た小頼を物色する也。

叔父の杏坪が、九月二十三日付けで大坂の中井竹山と若槻幾齋に宛てた書簡には、次のように認められている。

先達て、追手の者二組差上せ候様に申上候所、一組は菅太仲（茶山）指揮にて、海邊（山陽道）より讃州處々探索、此間歸着仕り候。

二十五日 廣人四人來る。

二十六日陰。頼千齡（春風）の使人來る。夜、君推（河相）、定吉を招きて議し、定吉を遣はして、作州へ適かしむ。

十月 三日陰。石井儀右衛門、頼仲叔（杏坪）の書を持ちて、遂に岡山へ之く。

五日晴。獲捕の四人、大坂より書面致し、亡人（山陽）の京に在るを告ぐ。使人竹原へ之く。

六日陰。石井（儀右衛門）、岡山より至り、遂に宿す。

七日晴。（石井）既に去り、復た、瀬山、伊助と來り、遂に同に京師へ之く。役金十二枚貸す。千齡の書を得る。瀬山二人去りし後、竹原の使、來り還る。

二十一日晴。石井、手島の書、斑鳩驛（兵庫県）より至る。久郎（山陽）の遁去を告ぐ。鐵平をして吉和へ之きて、其の事を告げしむ。

二十九日陰。頼久太郎京師より至る。一行十名。米清家（神辺の宿屋）に宿る。二里正（藤井暮庵と部落長）及び余、往きて之を護衛す。夜雨。

茶山を初め、多くの人々の日夜を分かたぬ搜索にも関わらず、山陽の行方は香として分からなかつた。京都の福井新九郎方に身を寄せていることを知らせる手紙が、梅颯の許に届いたのは、一か月後の十月四日であつた。

〔福井新九郎〕寛政十一年三月二十五日、春水の塾に入塾。七月六日帰京している。

山陽の脱藩騒動に関して茶山の尽力大なるものがあつた。当時江戸詰めであつた春水はどんなに心を痛めたことか。留守を守っている梅颯を初め頼家の人たちが茶山の協力をどんなに心強く思い、感謝したことか想像に難くない。事件落着後、春水は菅野眞齋（山陽より七歳年長、享和二年入京）に宛てた書簡の中で感謝の気持ちを次のように認めている。

今度など、京、金山（重左衛門）粉骨之計ひ、神邊禮卿（茶山）など之深情は、皆々拙者が為メニ計ひたまはり候事は、實感荷之事共に御座候。
 （『頼山陽全書』上巻）

（2）山陽 幽閉生活

当時、江戸詰であつた春水が、山陽脱藩についての知らせを受け取つたのは、寛政十二年十月十日であつた。春水はその日のうちに江戸藩邸の年寄、山田圖書に宛てて「山陽の持病治療と学問修業のため、京大坂又は西国筋に遠遊させ切りにしたい。その為に家督を相続できないことになつてもやむを得ない」といつた内容の内申を差し出し、何とかして脱藩扱いにしないで済ませたいと思つた。しかし、藩としては脱藩扱いにせざるを得なかつた。藩法では藩士の嫡男脱藩の場合、「追打」の厳命あるところだが、十月十二日に中島榮次より恩命の旨が伝えられ、十四日、正式に恩命の旨が達せられ、山陽の「追打」は免れた。十二日の『春水日記』に「榮次至、致尊意。感激不知所厝」（榮次至り、尊意を致す。感激厝^お所を知らず）と認められている。山陽の身の処し方は座敷牢に幽閉ということで、広島杉木小路の春水邸には、十月二十三日より大勢の大工が来て勞作に励む。

二十三日 晴、陰雪ちる、寒。大工大勢來り、（幽屏の一室）仕がまへする。今夜大かた歸らんとの事にて、夜へかけ、さう動いふばかりなし。：

二十四日 ……大工今夕迄にて済。 …… 『梅颯日記』

十一月三日、山陽は迎えに行つた一行と共に広島島の春水邸に帰り、享和三年（一八〇三）十二月七日までの満三年間（二十一歳〜二十四歳）をこの座敷牢で送る事となるのである。その名も一時「憐二」と改称させられた。享和元年（一八〇二）（寛政は十三年二月五日改元され享和元年となる）五月十三日（山陽の脱藩騒動から八か月後）、春水は西帰の途中、茶山を訪ねる。その時、次の五言律詩を作っている。

過香禮邸席上題畫山水 菅禮邸に過ぎり、席上 畫山水に題す

拂拭衣上塵 始知山屋好 拂拭す衣上の塵、始めて知る 山屋の好きを。

花禽娛耳目 雲月炤懷抱 花禽 耳目を娛しませ、雲月 懷抱を炤らす。

後素寫幽情 藹然滿輕縞 後素 幽情を寫し、藹然として 輕縞を滿たす。

安棲我其間 與松石同老 我をして 其の間に安棲し、松石と 同に老いしめん。

〔春水遺稿〕卷五

衣の塵を払い落とし、始めて 山家暮らしの好きを知った。

花や鳥は 耳や目を娛たのませてくれ、雲や月は 心の中の思いを照らしてくれる。

絵画は奥深い情趣を写し出し、和やかに 生絹を満足させる。

私をその畫の中に 安らかに棲すまわせ、松や石と一緒に老いたものだ。

〔懷抱〕心の中の思い。胸の中。〔後素〕絵画。絵は素（白い）絵の具で最後の仕上げをするから云う。〔藹然〕「藹」茂る。草木が蔓延る。和やかな気分。〔縞〕白色の目の細かい生絹。

黄葉夕陽村舎を訪れて茶山に会い、「旅衣の塵を払い山家の新鮮な空気に触れ、花に目を愉しませ、鳥の鳴き声に耳を傾ける」春水は、やっと八か月間の心の暗闇から抜け出した気持ちになったのだろう。「雲月炤懷抱」の句には、茶山の献身的な協力で何如に感謝しているか、その心の中を「月の光によって照らし出してお見せしたい」という気持ちを籠めているのではなからうか。又、「安棲我其間、與松石同老」には「自分もその画の中に入って

安らかに棲息し、松や石と共に静かに老いを迎えたものだ」という気持ち詠っているのではなからうか。脱藩・幽閉と山陽の事で心を痛め、この八か月、心身共に休まる日はなかった。精神的にも肉体的にも疲れ果てて、安息の境地に身を置きたいと心底思っている春水の姿が、この詩から彷彿と浮かび上がって来る。

一方、山陽は同じ屋敷に生活しながら父や母は勿論、叔父たちとも顔を合わせることはできなかった。幸いなことに幽閉生活を送るようになってから、癩癖の発作も起こらず、ひたすら読書の日々を送った。その書物は『論語』を初めとして経書の数々、史類、文章の書など数十冊で、頼家執事格の梶山與一・手嶋伊助を通し、春水の許可を得て差し入れられた。享和二年八月の終わり頃から翌年の三月頃迄の間のことである。(春水は第七回目の江戸詰の為、享和二年八月二十七日広島を発ち、翌年五月十六日帰藩した。)

「梶山與一」名は思齋、字は君修、通称與一、後に六一と改め、立齋と號す。藩の徒士で春水と杏坪に学び、学問所詰となり、『藝備孝義傳』その他、春水・杏坪の編纂物には大抵、浄写校合に従事し、頼家の信任を得ている。「手嶋伊助」梶山與一よりも更に家に密着していた。平素、喫緊の時には遠く江戸までも手伝いに出かけて行くような人物である。

享和三年十二月六日、「圍」御寛免の達しがあり、家族とも対面できることとなったが、十二箇条に亘り細かい決まり事が決められ、芸藩の外へは出られず、藩内でも在所での一人歩きは禁止されて、完全に自由の身となつた訳ではない。晴れて自由の身となるのは文化二年五月十五日である。春水も心配事が完全に解消した訳ではないが、著述に心血を注いでいる山陽の姿に、一先ず安心すると同時に、親として誇らしい気持ちも抱いていたように、文化二年三月二十日、茶山に宛てて次のような手紙を送っている。

狂豚事、文章のみに打かゝり申候。此節は、本朝の史を編集する(『日本外史』)と申候而大規模をおこし居候。

(享和は四年二月十一日を以て文化と改元される)

2、春水の依頼

享和三年（一八〇三）十二月初めに山陽を廢嫡した春水は、文化元年（一八〇四）三月二日、出石藩儒櫻井東門へ、山陽の身上について次のような依頼の手紙を差し出した。（三月二日出、四月十六日着信）

貴書被下、豚兒事、順快候半と、御垂問被下、不堪惠荷奉存候。去暮（享和三年十二月）より順快にて、只今は復常、是迄之通に罷在候。家内一同團樂情話、相樂居申候。孫（事庵）も、四才に御座候所、無類之丈夫にて、安心仕候。

當年廿五才に相成候豚兒は、病廢（病氣、廢嫡）候て罷在候。元來、山林（隱退）之志に御座候故、右之次第廢嫡、（景讓養嗣）に取計申候。彌本快仕候はゞ、貴邦へ遊學仕らせ、御教育被下候様、奉希度奉存候。貴地へ罷越候趣、（本藩へ）願書相調候義も候はゞ、城崎湯治之願に仕候様にとも心寄罷在候。

この春水の依頼に対する櫻井東門の返書は、「遊學のことは断る」ということであつた。それに対し春水は七月十三日、次のような答書を送つた。

尊兄之外、御托し可申方無之と存詰候事に而申上候。尤、私方に而も、（山陽）遠遊之事、急には出來不申候故、御承知被下候ても、今年には差上不申候。

この時（七月十三日）、春水は茶山に山陽の身柄を托すべく次のような書簡を差し出した。

…何卒貴地か鴨方辺共（京大坂に候へば更妙）にて、養子に遺候所は有之間敷候哉。左候はば他國へ養子に遺度と申候て、此地を引払ひ可申候。後は濟み可申候。屹度養子の先の有之にても無之、ただ可也に住居相成候て、朝夕烟を立てる事も出來候はば其土地に暫時宅をかまへ候迄の計にてもよく候。…何分去年婚事にて物入

いたし、其上かかる物入事にも可及と痛心御察可被下候。老兄の厄多きも、老拙が家眷のために及老境、かかる不快の事むしむ盆集仕候事、御憐察可被下候。

〔盆集〕多くの人が一時に集まり合う。

「神辺か鴨方の方に山陽を養子として遣わすような所はあるまいか。京・大坂なら尚更結構だが。養子先であっても、そうでなくても、何とか生活していけるような所であれば、その地に暫く宅を構える迄の計でいいのだが」という依頼であった。茶山はこの年の一月二十一日、福山藩主阿部正精侯に召されて江戸に出府し、十一月五日まで神辺を留守にしていたので、この書簡は留守中に届いたのであり、その返書のこととは詳らかでない。

3、茶山 春水の窮境を救う

文化六年（一八〇九）二月頃から、山陽廢嫡後、頼家の嗣子となった従弟の景讓と共に山陽の遊蕩が始まる。二月下旬頃から十一月中旬頃までの『春水日記』・『梅颺日記』には、その頃の山陽の行状が綴られている。

『春水日記』

四月 九日 夜分、權兒事二付不寐。

二十日 癩兒、晝出遊、不歸、夜分不寐。

六月十一日 夜分、大兒不見二付狼狽。寺尾・進藤邊、諸所見舞。

廿三日 有、戒久兒。

十一月十四日 今夜、久兒不歸、懊惱甚、

『梅颺日記』

三月 朔日 久・權、昨日歸遅く、いましめらる。(春水に)

廿六日 久、素平へ行、沙汰ナシ。

四月 九日 權二郎、学問所へ出、直ニ駒井・室屋邊へ行、歸遅、御機嫌(春水)あし。

廿三日 久太郎、熊田より手紙來、行よしにて、おそく歸、大御不機嫌。

五月廿六日 癩生(山陽)夜、出る様子也。

晦日 (山陽・景讓) 兩人共、夜出る様子、交々出る躰。

六月十一日 久太郎、夜、断なしニ出、門前邊にて涼ミしといふ。

廿三日 夜、久太郎存寄申上、又御用聞の事也、伊助列座。

十一月十四日 夜更、久太郎無斷出、土生とやらへ行し由、度度と御機嫌あし。

十八日 久、悪事の筋、御多聞より御聞、御話。

山陽と景讓の遊蕩は親にとつては、頭痛の種であつた。

文化六年三月二十二日、春水はこの頃の山陽の遊蕩を憂い、次のような書簡を茶山に送っている。

：是は無它、大豚(山陽)事に候。治情と狂態と益甚、又々及敗露可申かと心痛仕候段、御憐察可被下候。小豚

(景讓)を誘ひ、游治等之事、全然浪華町家少年輩之情態に候へば、結局如何可有之候や、苦心御察可被下候。

別居候事も申居候。

「治情」色事。「敗露」世間に知れ渡る。「浪華町家少年輩之情態」春水が大坂にいた頃、伏見から浪華へ淀川を下ったとき、数人の虚無僧姿の非行少年に出会つた。その時のことを『在津紀事』(春水が明和三年、二十一歳で来坂し、天明元年、三十六歳で広島藩儒となつて離坂するまでの十六年間の交遊を、六十五歳になつてから記述した回想記)九一の中に「舟枚方ひらかたに抵いたる。岸上に五六人有り。舟を呼びて乗る。皆悪少年。所

謂虚無僧侶なり。言貌粗豪。傍若無人。衆皆沮喪し、敢へて一語を出ださず。……とある。

その時の「悪少年」と山陽・景讓が同じではないかと嘆いている。

つまり、「山陽の近頃の様子は、女遊びと正気ではない状態が益々甚だしくなり、又しても世間に知れ渡るのではないかと心を痛めている。後継者に据えた景讓まで遊蕩に連れ出す始末で、これでは別居も考えてみようかと思つている」と云う内容である。それは頼家にとつては又々新たな心痛の種であつた。

茶山は九月十六日付け（着信、九月十八日）で次のような書簡を春水に送つた。

一筆致啓上候。時節新冷肌侵、彌玉集御清祥被成御座候半と承度存候。然ば久太郎殿部屋住と申體にて御座候、不苦御座候はば私方へ申請申度存候。私も御案内の老境、間塾附屬いたして人無之木鞠申候に付存寄候事に御座候。可相成事に御座候はば御相談被成被下（度）候、御返答次第にて可然人にも指上可申候、先任御聽合書中如此御座候。此方間塾もいまだ半經營に候へば學力有之人に無之候ては取續出來がたく候間、偏所希に御座候。尚近々可申上候。恐惶謹言。

〔『頼山陽全書』全傳上卷〕

茶山はこのとき、六十二歳の老境に達していた。間塾を經營しているが、後継者がいなくて困っている。だから、山陽を部屋住みという体裁で申し受けたく思うと云う内容である。茶山には子どもがいない。弟が二人いたが、次弟の汝榎は天明元年三十歳で歿し、末弟の恥庵は寛政十二年、三十三歳で歿している。汝榎の子、長作を養子にしていたが、病弱で二年來病床にある。（文化八年、三十九歳で歿す）というような事情で、廉塾の後継者問題は茶山にとつて頭痛の種であつた。

この書簡を受け取つた春水は、築山捧盈に相談をして茶山に次の返書を送つた。（文化六年十月十九日付）

…親迎の事被仰下、是は君か父か命じ不申候ては、つまらぬもの、今の通りにて頭陀袋ものなり。士人には飽申候など申、放言か、妄語か（に）有之候など被仰下候事、此元にては、疾首此事に候へ共、此儀は、かの者

へ申遣候。其譯は、此地に築山嘉平といふ人有之、用人職にして、磊落也。：渠を殊の外、所謂ヒイキにいたし、此上にもと精力を盡し、周旋申候。專家へ罷越候様に相成候も、此人の蔭にて候。

〔頼山陽全書〕全傳上卷)

「築山嘉平（捧盈）」藝藩の用人職。山陽には特別に目を掛け、山陽も師父のように敬慕していたので、神辺行きについて春水は捧盈に相談をしたのである。「親迎」自ら出迎える。「妄語」でたらめ。口から出まかせ。根拠のない言葉。「疾首」頭を病む。頭を痛める。

「茶山翁自ら山陽を廉塾へ招いて下さったが、これは藩主の浅野侯か、父親の自分が命令しなければ駄目であろう。今日の儘では、山陽は乞食（頭陀袋もの）同然になってしまつたろう。（この頃では）武士であることが嫌になつたと申し、無責任な投げやりな言葉や、口から出任せな言葉を吐くようになった。頭の痛むことだ。幸い築山嘉平という人がいて、この人は芸藩の用人職で、志が大きく小さな事に拘らない人であり、山陽を特に愛顧してくれている。この度も築山捧盈の周旋のお陰で、廉塾へ送ることに決定することができた」ということである。

こうして春水の頼みは聞き届けられた。春水は早速十月中に藩の当局に宛てて、山陽を廉塾の都講として出したいと言う旨の内願書を提出し十二月二十一日付けで、聴許ちやうまの達しを受けた。（『頼山陽全書』全傳上卷）

芸藩当局から許可が降りた翌日、春水は茶山に宛てて、九月十六日付け茶山の書簡に対する正式な返書を送った。それは次の通り。

：然ば：相談一決仕、彌任御來意申度存候、いまだ少年之儀、御家法相守候義、無覺束候得共、素より遊學勞差上申候間、いか様にも無御用捨御鞭策被成下、御教育の程、厚奉頼候、右貴意如此御座候、恐言。

4、山陽 廉塾を去る

文化六年（一八〇九）十二月二十九日に廉塾に到着した山陽は、翌七年正月十日から『論語』の講席を担当して、都講としての勤めを始めた。しかし、四月頃には神辺の田舎暮らしの無聊と、塾生を教えることに張り合いのなさを感じ始めた。廉塾は茶山の名を慕って、全国各地から多くの文人墨客が訪れる。それは山陽にとつて刺激にはなつたが、同時に、以前から抱いていた三都への宿志を募らせることもなつた。揉めて加えて、福山藩の家老内藤景堅邸で催された詩会での待遇に不満を感じたこと、その後、茶山から福山藩に出仕するように勧められたり、妻帯を勧められたこと等、いろいろな経緯が重なって、遂に廉塾を去ることを決意し、自分の思いを手紙に託して茶山に訴えた。茶山も山陽の宿志の強いことを悟り京都市行きを認めた。山陽は廉塾に来てから僅か一年二か月余りで、神辺を去ることとなつたのである。父春水は山陽上洛については、茶山に一任した。

山陽が大坂の篠崎小竹に宛てた手紙に「：小子出張の件、先日申上候通、國元より許し申越候。菅翁まかせと申事、國元官邊は、それにて濟申候。表向は神邊滞留と申事にて、昔に渡切候事は、内々上まで通り居候也：」とある。茶山の期待に背いて廉塾を去つたばかりでなく、数名の優秀な塾生を連れて行つてしまつたことに対しても、茶山は腹に据えかねるものがあつた。

文化八年二月二十五日、茶山は、讃岐の旧門人牧百毅に宛てた手紙に次のように認めている。「書生中、用立候人は、皆々召連參候に付、差当、兒共斗になり候て、講釈も手ばり候。：俄に大風が落ちた様にて、さびしく候」と。

山陽が「大風一過」のように慌ただしく去つて行つた後、茶山は幾分の安堵もあつたであろうが、落胆と憤怒

の入り混じった気持ちもあつたことと思われる。しかるに、茶山は山陽の上京について、後々春水の方へも問題が起こらぬように、いろいろと細かい注意を払っていた。以下の手紙などによつてそれを伺うことができる。

文化八年十月三日付けで木村雅壽が山陽に宛てた手紙に「…昔翁より廣の方（春水）への振合、宜御つくるひ被成候思召の様に承候…」とある。つまり、「山陽の上京について、広島藩の方に面倒なことが起こらないように、茶山が色々と繕っている」というのである。

「木村雅壽」字は鶴卿、通称考安。備後国府中の人。文化二年十五歳で廉塾に入り、文化八年、山陽より二か月早く廉塾を辞して、家業の医学を学ぶ為に京都に出た。

又、この頃、茶山は江戸の伊澤蘭軒に宛てて、次のような手紙を認めた。廉塾に於る山陽の不行跡をあげつらつた後に「追啓内書御覽後火中」として次のように言う。

…右之類之事、多候よし。私ハ、よくいひきかせ、行々志改り候ハバ、塾後住にも可仕心に御坐候處、中々顔色・氣持、急に直り候様にも見へ不申、彼が望ニまかせ、上京いたさせ候。かゝることハ、備後ニ而ハかくしてやり候心、誰にも不申候故周兵衛なども、しり不申候。もし君側之人へも可申様之ことも御坐候ハバ、宜奉願上候。尤、周兵衛が右之企も、人の推量ニ候へども、さも無之事もあるべし。左候へば、隱便も宜候。私も三四十年之志に而、さいじ蕞爾（たる）小書院（廉塾）をたて、御前（藩主）を奉勞、御手跡之額をも願うけ、永久にも傳度候處、かのごとき聲ニ附し候ハ、心ニ非ズ候、御推察可被下候。都合を申せば、藝侯ハ學問ずき也、彌太郎（春水）ニハ一子也、藝州に而何も不被用、藝に居らぬ奴といふ處にて見候ハバ、判然たることも候へ共、私も、あれほどニあらふとハ、夢にも不存候ひき。かへすくも周兵衛もし此事を打いださず候ハバ、大幸に候、それなりに御秘し可被下候。勿論、事、大になり、言てかへらぬこと、我兄御身の越度にもなりそふに候ハバ、御用心可被下候。か様に申上候こと、備後へハ、いよ／＼しれぬがよく候。

周兵衛というのは「河相周兵衛」のこと。備後深津郡千田村の庄屋で土地の有力者。茶山と遠戚関係にあたる。福山藩の用達を勤め、義倉を創設して藩財政の立て直しに尽力した功勞者。その周兵衛が、山陽を再び廉塾に取り戻そうと画策しているという噂が茶山の耳に入った。そのような事になったら、山陽の爲にも、頼家の爲にも、廉塾の爲にも良い結果を生まない。どうあってもこの企ては阻止せねばならぬと茶山は考えたのである。茶山とは年来の親交ある伊澤蘭軒は、阿部侯の典医で儒者でもあり、藩主の信任も厚かったので、藩の方にそういう働きかけがあったら頼むという気持ちを入れて認めたものである。山陽のやり方に対して腹に据えかねることは多いが、「我兄（春水）御自身の落ち度にもなりそうだ」と、茶山は春水のことを気に懸けているのである。

文化九年九月十七日付けで、茶山が牧百穀に宛てた手紙に「……久太郎勘當せること一向不承候。尤私方は勘當と申に而はなし、離縁いたし暇乞いたし出候と申に而候。其後に不埒のこと御座候故、私書状遣し不申候と申ほどの事に候……」とあるが、これは山陽の父春水や叔父の春風・杏坪に累が及ぶのを慮つての表面上の措置であった。表面上は勘當とか喧嘩別れというのではない、黙って山陽を送り出した格好にして、後は音信を絶つというのが茶山の思惑であったのだ。

以上の手紙から、茶山の厚意を踏みにじって自分の思いを遂げたばかりではなく、廉塾の「書生中、用立候人」ばかりを何人か引き連れて京都に高飛びした山陽に対し、茶山は腹の虫の治まらない気持ちであったと推察できるが、常に春水や春風・杏坪等の上に累が及ばないようにと気配りをしていることが伺える。

5、春水の心遣い

廉塾を一時の足掛かりにしてまで、自分の宿志を遂げようとした山陽の遣り方に対して、春水は茶山に申し訳

ないという気持ちで一杯であった。茶山の気持ちを慮つて何とか心を和ませて欲しいと考え、妻の梅颯から茶山の妻宣宛てに、次のような手紙を書かせた。

先達では細々との御文下され、忝拜しまゐらせ候。扱とや、久太郎儀、段々御とめ被下候へ共、何分上方へ登り申度存念にて、とゞまり不申、御ゆるし被遣候由。すでに先月六日出立致しまし候由、先頃より薄々其儀承知致しまし候へ共、かほど迄急に登り候事とは存不申、扱々、自身の望にまかせ、親の存意に叶はぬ事をかへり見ず候段、不埒千萬なる事に候。あなた様に居申候へば、此上もなき安心成事に御座候に、遠方に参り、扱々不安心千萬成事、いかゞ致し居申候やらんと、寐覚にも存出し候へば、やるせなき御事、御察し被下度候。しかしながら、御門人方も御つけ下され、路用等も御やり被下候由、細々仰下され、扱々忝、のこる處もなき御憐愍の段、筆紙にも盡しがたく、難有存候。太中様にも折角御愛被下、つきましては御世話も御させ遊ばされ度思召候所を、右之通に相成、いかにも思し召しの程、恐入まゐらせ候次第に御座候。御しかりも御尤千萬に存候へ共、此上ながら御見捨不被下、遠方ながら御世話に思し召し、あしき子を御持なされ候と、思し召し、御やり下され候様、ひとへに頼上まゐらせ候。此段慮もじながら、太中様へも、よろしく仰上被下候様頼みまゐらせ候。早速に御辺事御禮等申上候筈に御座候所、餘りく面白からぬ事ゆへ、一日く延引に成まゐらせ候。幾重にもく御ゆるし下され度候。人らしき人になれかすと祈りまゐらせ候外なく候。何もく大方ならぬ御世話様になりまし、御恩を忘れ不申候へと存じまゐらせ候。先は御返事御禮旁、あらくめで度かしく。この手紙には、春水の茶山に対する陳謝の気持ちも込められている。この後、春水は山陽に対し勘当同然の態度を取り文通なども絶った。茶山に対しては逆に、書簡や詩を寄せて気持ちを和らげようとの心遣いがなされた。この年の初冬には茶山を訪ねて会えなかつた夢を見て詩を贈った。それに対して茶山は次の詩を賦した。

千秋夢尋余不值有詩、次韻卒答

千秋夢に余を尋ねて値へず詩有り、次韻し卒答す

久望鴻書忽一封 開看語語覺情濃

久しく鴻書を望めるに忽ち一封、開き見て語語情の濃やかなるを覺ゆ。

君懸幽夢遙來訪 我誦佳詩宛相逢

君は幽夢を懸けて遙かに來り訪ふ、我は佳詩を誦して宛として相逢ふ。

燈火夜深山驛雨 篷窗霜落海城鐘

燈火夜は深し山驛の雨、篷窗霜は落つ海城の鐘。

塵泥何事交偏厚 狂直如今世不容

塵泥何事ぞ交り偏へに厚き、狂直如今世に容れられざるも。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷三

長い間 手紙を待つていたところ忽ち封書が届いた、開いて見て一語一語気持ちの濃やかなることを覺えた。

貴方はぼんやりとした夢の中で 遠く訪ね來られた、私は佳詩を誦し名指して相逢う。

灯火がともし夜は更け 神邊は雨、篷舟の窓には霜が降り 竹原の鐘の音が聞こえて來る。

俗世間など何事であろうか 我々の交遊は厚く、狂直であることは 現今 世間には受け容れられない。

その年の十二月に春水は茶山に、伊豫国の八十歳になる老婆が織った綿布を贈っている。それを謝して茶山は次の詩を送った。

頼千秋寄贈豫州婆子八十餘歲所織條布賦謝

頼千秋 豫州の婆子八十餘歲織る所の條布を寄贈す、賦して謝す

九十村婆尚巧思 槿機織出柳條奇

九十の村婆尚巧思、槿機織り出す柳條の奇。

故人贈我知何意 欲警頽齡乏色絲

故人 我に贈るは知んぬ何の意ぞ、頽齡の色絲に乏しきを警めんと欲す。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷三

九十の村の婆さんは尚巧みに思いを巡らす、綿を紡ぐ機が織り出す 柳條のすぐれていること。

親友が私に贈ってくれた気持ちには分かつている、老齡の私の言語が美しさに乏しいのを戒めるためだと。

文化九年（一八一二）正月七日、春水は茶山からの便りが暫く途絶えていることを氣遣い塾生二人を神辺に遣り次の二首の詩を贈った。

未有一句無一書 三冬消息若爲疎 未だ一句にして一書無きは有らず、三冬いつふゆの消息いひかん若爲いかにぞ疎なる。

東風欲寄梅花信 夢後曉窓殘月虚 東風あづまかぜ寄せんと欲す 梅花うめがはなの信、夢後むご曉窓けうまう殘月ざんげつ虚し。

今まで十日に一書が無いことはなかつた、この冬三か月も音信がないのはどういうことでしょうか。

もう春風が梅花の便りを寄せようとしていますが、目が覚めて明け方の窓に懸かる残月が虚しいことです。

憶人人日使人行 不但文章尋舊盟 人を憶ひて人日にじつ人を行かしむ、但ただに文章ぶんしょう舊盟きうめいを尋ぬるのみにあらず。

春色草堂無恙否 一封書信寄吾情 春色はるいろ草堂そうどう恙無つやきや否や、一封いつふの書信しよへんに吾われが情なさけを寄す。

〔與樂叢書〕卷九十五「春水詩稿」

貴方のことが気にかかつて 正月七日に 使いを遣った、ただ単に 文章や旧友を尋ねるだけではありません。
春の気配の草堂で 恙無くいらつしやいますか、一封の書翰に 私の思いを寄せます。

この詩に次韻した茶山の詩は次の通り。

次韻千秋人日見寄

偶擬探春誰共行 老懷轉切舊詞盟 偶たまま探春たんしゆんを擬ほつして 誰たれと共にともか行かん、老懷らうゐ轉切てんせつなり 舊詞盟きうしめい。

有人恰袖君書至 喜見君情同我情 人ひと有り恰あたかも君きみが書かきを袖そでにして至る、喜よろこび見る君きみが情なさけ 我われが情なさけに同じきを。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷四

偶然 探春に準なぞらえ誰と一緒に行こうかと思つていた、年寄りの懐おもいは何とも切ない 古い詩仲間を思つて。

訪ねる人が有り まさしく貴方の便りを持って来た。貴方の心持ちと私の心持ちが同じなのを嬉しく思つた。

6、春水・山陽父子の和解

文化十年（一八一三）三月一日、春水は聿庵（山陽と最初の妻御園淳子との間に生まれた子）を携えて有馬温泉に行くために広島を発つ。途中竹原に寄り、先祖の墓詣でをする。三原で観梅をし、妙正寺に登る。九日、尾道を経て神辺に着く。

六日、山陽はこの旅のことを人伝に聞いていて篠崎小竹に次のような書簡を送った。

老父（有馬）入湯（の）事は、うすく承り候。實に決候事にや。左あらば、私只今不通にては、此方にて承歡出來がたく、是と申も茶（山）翁、不齊威（不機嫌）候故也。こまりたる者に御座候。如何様に申遣候ても、承知せられ不申、是急埒明不申ては、一日増一日に不孝候。何卒御老人様より（三島）茶翁へ取持、枉てまげ齊威せられ候様、偏に御口添奉願候。同じく父執に御さ候へば、事體得宜可申と奉存候。子成は悪者にして、そこを枉て御宥被遣よと被仰遣度候。まけおしみ強き叟故、いけ申間敷候。此義偏に奉煩老拳候。左なければ、老父上り之時、一向つまらぬ者に御座候。生涯之後悔返り不申候。茶翁へは度々申遣候。一字之答なし。私書狀遣しそれへ御口添よりは、私より御願申上候故、御取持被下候と敷。左なくとも、此度之入湯など之事體、被仰遣度奉願候。

一方、茶山は春水と山陽親子の和解をさせるべく、京都の金山重左衛門と大坂の篠崎三島に宛てて「春水親子を居間（中を取り持つ）調停せよ」という内容の書簡を送っていた。（三月二十日前後）三月十一日から十五日まで春水が神辺に滞在していたので、恐らくその間に春水を説得していたものと考えられる。

二十四日、春水が篠崎家を訪れる。篠崎小竹より山陽宛ての書簡があり「春水は廿一日に大坂に着いて、廿三日

は吹田屋を訪ね正午頃、篠崎家に来訪された。貴方のことに付いては万事こちらへお任せ、京都では金山家に托すということ、茶山からも家父（三島）に書状が参り、（春水親子を）『居間調停せよ』との事であったから、此の書簡が着き次第、早々下坂あらば、そのまま京都にて『御陪遊』が出来るように取りはからう」といった内容であった。又、この日、春風から「春水上京の事についての報告」の書簡（三月六日発）も山陽の許に届いた。

廿六日、篠崎小竹から、春水が篠崎家に着いたという報せを受けた山陽は急遽下坂し、篠崎家を訪れて五年ぶりに父子は対面した。文化六年十二月二十七日に山陽が広島を発つて、神辺の廉塾へ行くのを見送つてから足かけ五年が経っていた。春水は次の詩を詠じている。

浪華書懷

來駐浪華江水干 魚蝦春味舊盤餐 來り駐る 浪華 江水の干、魚蝦 春味 舊盤餐。

是我井州十霜地 風光總作故鄉看 是れ我が 井州 十霜の地、風光 總て故郷の看を作す。

〔春水遺稿〕卷八

浪華にやつて来て 江戸堀の岸辺の家に暫く留まった、魚やえびは春の味で 昔の晚餐が懐かしい。

此処は私が十数年間過した大坂だ、風光は総て故郷のように感じられる。

山陽は三月二十六日に春水と対面してから、ひと先ず帰京し四月四日に春水等が上洛するのを待つことにした。春水が上洛してからは数日間、父に随つて京都の各地を巡り、四月十二日に有馬温泉に行く春水一行を伏見まで見送る。春水等が大坂に帰つて来たのは四月十九日であった。山陽は下坂して父と会い、四月廿三日に帰途についた春水一行を西ノ宮まで見送った。春水は帰広の途中四月二十九日、神辺に寄り三泊して、五月三日に神辺を後にした。この間のことを春水は『癸酉有馬往還日記』に次のように記している。

廿九日 七日川なぬかがわもあさくて事故なく人足にてわたりたり。高屋など過て神邊につきたれば、先生（茶山）、門

人ひきまとゐて驛頭まで出られたり。

朔日 塾生のために揮寫し、餘一などハ先生の書を乞ふ。(竹田定之丞と語)

二日 此日もとまりていあれば、又來たることも容易ならねバとまりて話し、本陣なる菅波にゆきて新築の館舎を見て暮かたに歸る。又先生夫婦と夜もすがらかたる。

三日 朝とくたちいで、ゆかんとするに、けふハ山手の甲屋へ立より候へと先生導をなす。此家にハ福山水

野侯の時に如雲といへる山師ありしが、その築し假山今ハ三ヶ所のミ残れり。甲屋その一なりと也。
主人父子あつくもてあつかひて時をうつす。此所にて禮卿と別る。悵然たり。

このとき茶山は次の詩を賦した。

千秋還自京、再信草堂、賦呈 千秋 京自り還り、再び草堂に信る、賦して呈す

黄鳥來稀燕子羣 白櫻飛盡棟花芬 黄鳥 來ること稀にして 燕子羣がり、白櫻 飛び盡して 棟花 芬し。

今春吾舍多佳客 最是兩回留得君 今春 吾が舍 佳客多し、最も是れ 兩回 君を留め得たり。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷四)

鶯が来ることは稀で、燕が群がっている、櫻は散り尽くして、棟の花が芳しい。

今年の春は、廉塾に、佳客が多い、最も是れ二回も貴方を留めることが出来たことにもよる。

神辺に三泊四日逗留した春水一行が、広島に向かつて出立した日、茶山は芦田川を過ぎて二十里も西に送って行った。その途中、茶山は次の詩を賦した。

送千秋過蘆水途中賦呈 千秋を送りて蘆水を過ぐ途中賦して呈す

長隄穩並筍與行 四野薰風午鳥聲 長隄 穩やかに並ぶ 筍與の行、四野の薰風 午鳥の聲。

兩月再逢眞可喜 誰知一倍切離情 兩月に再び逢ふ 眞に喜ぶべし、誰か知らん 一倍 離情の切なるを。

『黄葉夕陽村舎詩』後編卷四)

長い堤を 穏やかに 籠を並べて行くと、辺り一帯は風薫り 午の鳥の鳴き声が賑やかだ。

二か月に 再び会えるとは 本当に喜ばしい、誰が知るでしょうか 離別の情が一倍切ないことを。

茶山のこの詩に次韻して春水は次の詩を詠んだ。

次韻菅茶山

出閭廿里送吾行 聯載籃輿伊軋聲

出閭 廿里 吾が行を送る、聯載 籃輿 伊軋の聲。

楊柳渡頭分袂去 白頭相顧若爲情

楊柳 渡頭 袂を分かれて去る、白頭 相 顧るは 若爲情ぞ。

〔春水遺稿〕卷八)

村里を出て二十里 私の行くのを送ってください、籠を連ねて行くと がたがたと軋む音。

柳の下の渡し場で お別れです、白髪頭で 振り返って見る それはどんな気持ちでしょうか。

春水が広島に到着したのは五月十三日であった。茶山と春水はこの後、再び逢うことはなかった。

五、春水の死

文化十二年(一八一五)正月廿八日、山陽廃嫡の後、頼家の嗣子となった景讓が二十六歳で没した。病名は「勞症」と記されている。春水の悲嘆は推察に余るものがあり、二月尽日まで日記の筆を絶つたほどである。景讓にとっては伯父(春水)の家督を相続するため、山陽の長男である聿庵を差し置いて、頼家に入る事への心労があったことであろう。春水・梅颯はその心情を思いやり、強く胸を痛めたのである。ここ数年來健康が優れなかった春水は、景讓の死から益々体調を崩し、『梅颯日記』によると、「少々御風氣にて藥加減」「御風氣輕くなし」「御痰

ガイ（咳）ゆへか息タハシキ方、夜分甚「晩方より夜へかけ、あせ御取」等々、殆ど連日春水の健康状態の悪いことが記されている。

春水は文化十二年十一月廿三日に登城したのを最後に、以後自邸で病の床に着いた。十二月に入り宿病しゆくわの上に胸痞むすひを發す。年が明けて文化十三年（二八一六）二月朔日、江戸藩邸より、春水の看病の為に藤田以敬（雄助）を送られる。（正月十一日出立）山陽の「春水行状」に「東邸ノ小臣藤田雄佐トイフモノ、嘗テ業ヲ受ケタリ、君ノ疾篤キヲ聞キ、官長ニ請ヒ、來リ問ヘリ、ソノ年七十五、二千餘（漢）里ヲ遠シトセズシテ來訣スル、亦君ガ誠信、物ニ孚ふスルヲ見ルニ足レリ（山陽）」とある。

春水はその真情を喜び次の七言絶句を賦した。

〔孚〕養い育てる。

二十八字謝藤田以敬自江戸至 二十八字 藤田以敬江戸自り至るを謝す

侵凌氷雪五十程 白髮來尋白髮生 氷雪を侵凌しんりやうして五十程、白髮來り尋ね白髮生ず。

相見不言相感泣 三十餘歳舊交情 相見て言はず相感泣かんもす、三十餘歳 舊交情。〔春水遺稿〕卷八

氷雪を侵して 長い長い道のりを、白髮頭が尋ねて来てくれた 白髮頭の私を。

互いに相会って 言葉はなくただ感泣するばかり、三十年余りの 旧い交情だった。

この詩が春水の絶筆となった。春水が亡くなる数日前からの『梅颯日記』には、次第に悪くなつてゆく春水の病状が次のように記されている。

二月九日陰。…今朝と覺ゆ、徳太郎・お三穂・（竹原一族）・助十郎へ、御遺金（分配）の事、金數（金額）吉川に御書せ、そのわきへ名前員數御記。

十一日晴。…今朝かと覺ゆ、餘一に御命じ、すみ・紙の用意し、書を遊ばす。（別記、病床日記に、「十一日 清、五半詩、揮毫、「梅颯」二大字、春水有所付」梅颯ノ號コ、ニ出ツ、蓋シ絶筆ナルベシ。とあ

る」これが春水一期の絶筆となった。

十二日晴。…醫師が來た事さへしかと覺へず、「醫師はまだ來ぬか」と囁語を發するほどの意識不明の危篤状態に陥った。

十七日 御快方、御せい心も儘かに御見え被成、今日何日との事御尋申上候へば、十五日と被仰候。今夜に

入り、御喘鳴、御寢起しげく、御難儀成御様子。

十八日 御ねおきしげく、御夜食御すゝめ申、かゆ、吸物わんふたに一つ餘御上り、夜四つ過（十時）、三

白見廻、一時（二時間）たらず見合、歸。それより御ねぶりのごとく、御靜かに、九つ過（午前零

時過）御終。 「三白」輕美三白。淺野侯の侍医。

文化十三年（一八一六）二月十九日、午前零時、春水は七十一歳の生涯を閉じた。この日が忌辰と定められた。

茶山の弔詩

関千秋訃

時賢相繼北邱塵 知己乾坤餘一人 時賢相繼ぎて 北邱の塵、知己乾坤 一人を餘す。

玉樹今朝又零落 此身雖在有誰親 玉樹今朝又零落す、此の身在りと雖も 誰有りてか親しまん。

時に賢者と言われる人々が 相繼いで亡くなり、親しい人は この世にたつた一人を残すのみだった。

その高士 春水が今朝 又亡くなられた、私はこの世に残つたが これからは誰と共に親しめばよからうか。

この弔詩の欄外に山陽は次のような評語を記している。

襄讀至此廢卷累日、既而再闔畢卷、每感逝者之不得目此光景。亦恨不使誦此篇什也。

襄讀みて此に至り卷を廢して累日、既にして再び閲して卷を畢り、毎に逝く者の此の光景を目することを得

ざるを感ず。亦た此の篇什を誦せしめざるを恨む。

まとめ

茶山と春水の初対面は、安永二年（一七七三）の春、茶山二十六歳、春水二十八歳の時であった。それから五十有余年、二人の交友は実に内容の濃いものであった。春水の毛筋ほども曲がったことを許さない、神経質なまでに生真面目で几帳面な性格が、茶山の細かいことに拘らない、大様で懐の広い性格とよく合致したのである。茶山の「人と為り」については山陽の「茶山先生行状」に良く言い尽くされている。

先生爲人、偉軀幹、方面高類。及老、朱顔白髮、望之有威。而接物謙和、恂恂如田舍翁。善談諺、不欲以名高自尊大。以故自藩府吏士、至郷閭朋友、無新舊雅俗、皆不失其驩心。如同無分別者。然天質聰明、洞曉世故物情、暗辨淑慝、人不能欺也。

先生の人と爲り、軀幹、偉にして、方面高類。老ゆるに及び、朱顔白髮、之を望むに威有り。而れども物に接するに謙和にして、恂恂として田舍翁の如し。談諺を善くし、名の高きを以て自ら尊大にするを欲せず。故を以て藩府の吏士自り、郷閭朋友に至るまで、新舊雅俗と無く、皆な其の驩心を失はず。合同、分別無き者の如し。然れども天質聰明にして、世故物情に洞曉し、暗に淑慝を辨ずれば、人欺く能はざるなり。

「軀幹」体。「方面高類」角張った顔、高い頬骨。「謙和」人に譲って穏やか。「恂恂」誠実な様子。「驩心」嬉しく思う心。「洞曉」明らかに悟る。「世故物情」世間の事情。世間の習わしや人々の心。「淑慝」善と悪。

「茶山は外見はいかめしいが、穏やかで誠実、田舎の翁といった感じである。よく冗談を言い、有名だからといって尊大に構えることはない。藩府の役人であろうと、田舎の友達であろうと、風雅な人、卑俗な人であろうと分け隔てすることはない。性来聡明で世間の事情に通じており、善悪、良否はきちんと弁えているので、人は

欺くことができなかつた」というのである。

嫡男である山陽の脱藩は、頼一族にとつて命運のかかった大問題であり、春水にとつて生涯で最も心を痛めた大事件であつた。茶山はその問題に初めから終わりまで我が事のように関わつた。搜索に対する献身的な働き、山陽脱藩後、廉塾の都講としてその身柄を引き受ける。しかし、山陽の身勝手から僅か一年余りで京都に高飛びした。その後始末、そのため不仲になつた父春水との和解等々、時宜に叶う適切な措置を講じた。それは山陽が言うように「天質聰明にして、世故物情に洞曉し」ている故の措置であつた。

藩儒として神経の休まる時のない束縛多い生活の中で、茶山と盃を酌み交わす一時は、春水にとつて心身共にくつろげる時間だつたのではなからうか。多くを語らなくても、相手の苦境を見抜く洞察力と、その苦境を取り除く打開力、悩みを抱えている人を温かく包み込む包容力、茶山はそういう力を兼ね備えた人であつた。

第二節 茶山と西山拙齋

西山拙齋（一七三五―一七九八）、幼名は友吉、長じて見利、字を思義といい、後、正に改む。字は子雅（又は士雅）、拙齋・拙翁・石顛・緑天・雪堂・逍遙・乗食舎・至樂居・山陽逸民等の号がある。後、拙齋を以て通称とした。備中国鴨方に生まれる。父恕玄（蘭亭）は郷里では名の聞こえた医者であつた。拙齋は寛延三年（一七五〇）十六歳で大坂に出て、古林見宜（正桂、一六九四―一七六四）に医術を学ぶ。儒学を母方の縁者、岡字齋（白駒、

龍洲、一六九二（一七六七）に学んだが、孚齋が衰老のため外孫の那波魯堂が代講した。岡孚齋は明和四年十一月八日七十六歳で歿した。孚齋歿後、魯堂が京都に移徙したため拙齋も徙った。菅茶山、柴野栗山、頼春水等と親交を結んでいる。魯堂の没後その才を高く評価され、阿波侯や加賀侯から仕官の招聘を受けたが断つた。阿波藩の儒官であつた柴野栗山が、幕府から拙齋を去ることとなつた時、拙齋は親友の栗山や頼春水が推薦したにも関わらず固辞して受けなかつた。君命を受けて来た使者が幾日も滞在して説得したが聞かず、郷里鴨方に於て私塾（欽塾）を開き、地元の子弟の教育の為に一生を過ごした。

茶山が三回目の京都遊学から郷里に帰っていた明和八年（一七七二）春、拙齋の初めての訪問を受けてから、拙齋が亡くなる寛政十年（一七九八）迄の二十数年間、茶山と拙齋の親交は途切れることなく続いた。

一、茶山・拙齋の交遊

1、京都・大坂での交遊

拙齋と茶山は共に那波魯堂に師事しているが、二人は直ぐには会っていない。そのことについて茶山は『拙齋先生行状』に「初與晉帥同時在京師。互欲相識、而參差不相值。旋各歸家。辛卯春、訪晉帥草堂、遂同尋梅於柞原。時先生三十七、而晉帥二十四也。」（初め晉帥と同時に京師に在り。互に相識らんと欲するも、參差として相値はず。旋つて各の家に歸る。辛卯の春、晉帥を草堂に訪ひ、遂に共に梅を柞原に尋ぬ。時に先生三十七、而して晉帥は二十四なり。）と述べている。〔辛卯〕明和八年（一七七二）。

明和三年（一七六六）茶山は十九歳で初めての京都遊学をし、市川某に古文辞学（荻生徂徠の唱えた学）を、

和田泰純に医学を学ぶ。第二回目の遊学は明和五年（一七六八）であり、第三回目は明和七年（一七七〇）である。この三回目の遊学の後、明和八年（一七七二）の春、拙齋の方から郷里神辺に帰っていた茶山を訪ねて来て、二人は初めての出会いを持つ。拙齋が京都遊学を終える二年ばかり前のことであった。そのとき茶山は二十四歳、拙齋は三十七歳であった。従って拙齋は茶山より十三歳年長であり、拙齋は既に十数年間の京都遊学を経験しているのので、茶山にとっては師のような存在であった。初対面した二人は柞原に梅見に行った。以後、拙齋が寛政十年（一七九八）六十四歳で歿する迄の二十七年間、二人は親交を持つこととなる。この二人の交友について頼山陽は、『茶山先生行状』の中で「備中西山拙齋翁以同門故、往來最密、聲氣相輔。拙齋以嚴、先生以和、而其意歸於一」（備中の西山拙齋翁は同門の故を以て、往來最も密にして、聲氣相輔く。拙齋は嚴を以てし、先生は和を以てするも、而も其の意は一に歸す）と記している。又、茶山自身も『拙齋先生行状』の中で「能悉先生平生、在交遊間、無有如吾帥者」（能く先生（拙齋）の平生を悉すは、交遊の間に在りて、吾帥に如く者有ること無し）と述べている。以下、二人の交友の様子を年を追って見てゆく。

安永元年（一七七二） 茶山二十五歳・拙齋三十八歳

茶山は第四回目の京都遊学をした。このとき茶山は拙齋と共に、江戸に行く佐々木良齋を近江国粟津の義仲寺まで送っている。拙齋は「送佐長史奉使東都」（佐長史の使を東都に奉ずるを送る）と題する次の七言絶句二首を詠んだ。

(一)

君向海東吾海西 秋風秋雨兩淒淒 君は海東に向かひ 吾は海西、秋風 秋雨 兩ながら淒淒たり。

天涯何限關山月 客夢相尋幾度迷 天涯何ぞ限らん 關山の月、客夢 相尋ねて 幾度か迷はん。

あなたは海を東に向かい 私は西に向かう、秋風と秋雨が寒々と侘びしく吹き降りする中を。

空の涯は^は どうして故郷の月を限ることがあるうか、旅先で見る夢で互いに尋ねて何度迷うことであろう。

〔天涯〕非常に遠い所。故郷を遠く離れた土地。〔關山〕郷里の境にある山。郷里。

(一)

相別琵琶湖上秋 秋雲空羨伴東遊 相別る琵琶湖上の秋、秋雲空しく羨む東遊に伴ふを。

西溟吾亦揚帆去 爭奈各天風雨愁 西溟吾は亦帆を揚げて去る、爭奈せん各天風雨の愁。

〔拙齋西山先生詩鈔〕上卷

互いに琵琶湖畔の秋に別れを告げる、秋の雲があなたの東遊に伴うのを私は空しく羨むばかり。

西の空は暗い私は帆を揚げ(西に向かい)去って行く、どうすればよかろうそれぞれの天の風雨の愁いを。

〔客夢〕旅先で見る夢。〔西溟〕西の空の暗いこと。

茶山はこの詩の上の欄外に「是義仲寺前分手作、光景宛在目」(是れ義仲寺前にて手を分かちし時の作、光景宛ら目に在り)と記している。「義仲寺前分手」は安永元年である。また、この詩の一首後の詩に「和菅敦詩韻」と題する次の七言律詩がある。この詩も同じ時の作である。

和菅敦詩韻 菅敦詩韻に和す

列壑參差香積城 秋風驅雨幾陰晴 列壑參差香積城、秋風雨を驅せて幾陰晴。

空林飛瀑潮音合 孤岫長松天籟迎 空林飛瀑潮音合し、孤岫長松天籟迎ふ。

鼎坐飽嘗禪味淨 手談殊覺子聲清 鼎坐飽くまで嘗む禪味の淨、手談殊に覺ゆ子聲の清。

臥雲連日論交處 何羨當年支許情 臥雲連日交を論ずる處、何ぞ羨まん當年支許の情。

〔拙齋西山先生詩鈔〕上卷

連なる谷は不揃いでそんな所に義仲寺がある、秋風は雨を走らせて幾たび曇ったり晴れたりしたことか。

人気がない林は流れ落ちる滝の音と潮の音が合致し、峰の長松は風を迎えている。

三人で坐りどこまでも禅の清らかさを味わう、碁を打っていると殊更感じられる子聲の清々しさ。隠居して連日交遊を論ずる処、どうして羨むことがあるか当年の支伯と許由の情を。

「列壑」連なる谷。「香積城」ここは高台寺を指す。「空林」人気がない寂しい林。「飛瀑」高所から落ちて
いる滝。「孤岫」山の頂。峰。「天籟」天から洩れる自然の音の意で風のこと。自然の音。「手談」碁を打つこと。「子聲清」碁石をうつ音か。「臥雲」隠居して未だ仕えない喩え。「方干、寄李頻詩」に「弟子已攀桂、先生猶臥雲」とある。「支許」支伯と許由。共に舜が天下を譲ろうとしたが受けなかつた賢人。

この詩の上の欄外に茶山は次のように記している。

是時魯堂、與主僧對局、魯堂連贏。余與先生請雛僧爲導、尋長嘯子墓、又觀寺弄風鳥。

是の時 魯堂、主僧と對局して、魯堂連りに贏つ。余は先生（拙齋）と雛僧に請うて導を爲さしめ、長嘯子の墓を尋ね、又寺弄の風鳥を観る。

木下長嘯子の墓は京都の高台寺にある。茶山と拙齋は魯堂に連れられてこの寺に來た。魯堂が主僧と碁を打っている間に、茶山と拙齋は小坊主に案内させて、木下長嘯子の墓を尋ねたり、寺に飼われている風鳥（極楽鳥）を観たりしたというのである。

〔長嘯子〕（二五六九〜一六四九）木下長嘯子。江戸初期の歌人。豊臣一族の武士として秀吉に仕えたが、関ヶ原の役後、京都東山や小塩山に隠棲し和歌を細川幽齋に学ぶ。藤原惺窩・林羅山ら儒家との交遊も深く、蹴鞠・茶道にも通じた人。

この詩は『黄葉夕陽村舍文』卷之四の「題義仲墓詩後」という文章によって、安永元年に作られたものであることが分かる。（第一章「菅茶山の行跡」、第一節「京都遊学」、4 京都遊学四回目参照）「題義仲墓詩後」は、茶山が安永元

年に義仲寺を訪れたときのことを、四十数年後の文政二年に懐古して書いたものである。

以上の事柄から、茶山は安永元年には上洛して拙齋と共に魯堂の元に居たことになる。

安永二年（一七七三） 茶山二十六歳・拙齋三十九歳

八月、茶山は拙齋と共に魯堂に従って洛西の西岡に遊んでいる（『菅茶山略年表』、『西山拙齋年譜』）ところをみると、安永元年から翌二年にかけて茶山は京都にいたものと考えられる。

九月には拙齋が京を発つて郷里鴨方に帰り、至樂居に家塾「欽塾」を開いているので、この遊は送別を兼ねたものであったのかも知れない。

安永三年（一七七四） 茶山二十七歳・拙齋四十歳

安永三年から安永八年（一七七九）まではお互いに訪ねたり、訪ねられたりしながら頻りに交遊を続けている。

但し茶山はこの間に五回目の遊学をしているのではないかと考えられる。（第一章第一節「京都遊学の時期」のところでも触れている。）

安永四年（一七七五） 茶山二十八歳・拙齋四十一歳

藤井料助（暮庵）が河南村の庄屋となり茶山に入門する。

安永五年（一七七六） 茶山二十九歳・拙齋四十二歳

四月二十七日、茶山は拙齋・春水と備中宮内有木山に登る。このとき拙齋は「丙申四月廿九日宿宮内藤井氏同頼千秋菅禮卿登有木山謁納言藤公墓」（丙申四月廿九日 宮内藤井氏に宿し頼千秋菅禮卿と同に有木山に登り納言藤公墓に謁す）と題して七言律詩を作った。（第二章第一節「茶山と春水」二「春水仕官以前の交遊」参照）

四月二十八日、茶山・拙齋・春水の三人は、岡山の姫井桃源宅に宿泊する。

〔短井桃源〕（一七五〇～一八一八）備中鴨方の出自。名は元詰げんてつ、字は仲明、桃源と号した。天明五年池田藩

の儒官となる。文化元年は池田家祖廟の執事、和意谷墓地及び閑谷饗の事を司った。茶山より二歳年少。

四月二十九日、前日の三人は閑谷饗を見学する。茶山はその時「閑谷」と題する四十二句から成る五言古詩を詠んでいる。(第三章「茶山の文学(漢詩)」、第二節「政治批判詩」、一の2「京都遊学期後半の政治批判詩」参照)

賦得中秋月用禮卿見寄韻

賦して中秋の月を得たり 禮卿の寄せらるる韻を用ふ

丹梯何處廣寒宮 鏡裏山河影一同 丹梯たんでい 何れの處か 廣寒宮くわつかんまゆう、鏡裏の山河影は一同。

唯見金輪升地軸 那知玉斧代天工 唯だ見る金輪地軸のぼを升るを、那ぞ知らん 玉斧 天工に代るを。

雲開八萬三千戸 露遍東西南北叢 雲は開く八萬三千戸、露は遍ままし 東西南北の叢。

縹渺霓裳曲多少 欲攜仙侶御光風 縹渺へうぼうたり 霓裳げいしやう 曲多少ぞ、仙侶たづなを攜へ 光風に御せんと欲す。

広寒宮への 赤い梯子は 何処だろう、月に照らされた山河は 影が同じだ。

唯だ 金輪が 地軸のぼを升るのを見るだけ、玉斧が 天工に代わると どうして知ろう。

雲は 八萬三千戸に開け、露は 四方の草むらに しっかりと降りている。

遠く幽かに 霓裳羽衣の曲が響き渡っている、世俗を離れた仲間と 光風に御したいものだ。

「丹梯」赤い梯子。転じて仙境に入る道。「廣寒宮」月中の宮殿の名。「金輪」黄金の飾りをつけた車輪。「地軸」大地を支えているという軸。「天工」天の職事。「縹渺」果てしなく広いさま。遠く幽かなさま。白居易の「長恨歌」に「忽聞海上有仙山、山在虛無縹渺間」(忽ち聞く海上に仙山有り、山は虚無縹渺の間に在りと)とある。「霓裳曲」霓裳羽衣曲。楽曲の名。唐の玄宗のとき、天人の舞楽にならって作られたといわれる音楽。白居易の「長恨歌」に「漁陽鼙鼓動地來、驚破霓裳羽衣曲」(漁陽の鼙鼓どよ地を動もして來り、驚破けいは

す 霓裳羽衣の曲」とある。「仙侶」俗離れた連れ。「光風」雨後の美しい景色。雨後の空の心地よい様。

又、拙齋は「次韻管禮卿」(管禮卿に次韻す)と題して七言律詩六首を詠んでいる。(ここでは略す)
この年の冬、茶山は病臥の拙齋を見舞った。そのとき拙齋は感謝の気持ちで次のように詠っている。

禮卿見過分得韻侵 禮卿過らる分ちちて韻に侵を得たり

山脚衝寒又海濤 謝君訪疾故相尋 山脚 寒を衝きて 又海濤、君に謝す 疾を訪ふて故らに相尋ぬるを。

奚囊兼祝青囊卷 談綺勝聽綠綺琴 奚囊 兼ねて祝ふ 青囊の卷、談綺 聴くに勝る 綠綺琴。

微外峩洋論異調 樽前霜月照清吟 微外 峩洋 異調を論ずれば、樽前 霜月 清吟を照らす。

剪燈還喜宵方永 頌得幽居至樂心 燈を剪り 還た喜ぶ 宵方に永きを、頌ち得たり 幽居 至樂の心。

〔拙齋西山先生詩鈔〕上卷)

山の麓を寒を衝き また海岸を、あなたに感謝します わざわざ病氣見舞いをして下さったことを。

奚囊とそれに青囊を下さった、面白い話は 綠綺琴を聴く以上に勝っている。

琴をかき鳴らし 峩峩 洋洋と 調べを論じていると、酒樽の前の霜月は 清らかな吟詠を照らす。

燈を剪つて 還た 宵の永いことを喜び、幽居 至樂の心を分かち合った。

〔山脚〕山の麓。山の裾。「海濤」海の水際。「奚囊」景勝を探索しながら出来た詩を入れる囊。「青囊」医学に関する書物を入れる囊。「綠綺琴」漢、司馬相如が梁王から賜った琴の名。「古琴疏」に「司馬相如作

玉如意賦。梁王悦之、賜以綠綺之琴・文木之几・夫餘之珠。琴銘曰桐梓合精。」(司馬相如 玉如意的賦を作る。梁王 之を悦び、賜ふに綠綺の琴・文木の几・夫餘の珠を以てす。琴の銘に桐梓合精と曰ふ。)とある。

〔峩洋〕伯牙が鍾子期の弾ずる琴の音をよく理解した故事。「列子」湯問に「伯牙鼓琴、志在登高山。鍾

子期曰、善哉、峩峩兮若泰山。志在流水。鍾子期曰、善哉、洋洋兮若江河。」(伯牙 琴を鼓して、志高山

に登るに在り。鍾子期曰く、善きかな、峩峩として泰山の若し。志流水に在り。鍾子期曰く、善きかな、洋洋として江河の若し。」とある。「幽居」世を捨てて閑かに暮らす。

安永六年（一七七七） 拙齋四十三歳・茶山三十歳

拙齋には次の詩が見られる。

別後寄謝禮卿子明 別後寄せて禮卿 子明に謝す

寂寥蓬簞下 佳友互逢迎 寂寥蓬簞の下、佳友 互に逢迎す。

助我田元亮 起予菅禮卿 我を助く 田元亮、予を起す 菅禮卿。

詞華窮變化 道體見流行 詞華 變化を窮め、道體 流行に見る。

同病期松柏 親交難弟兄 同病 松柏を期し、親交 弟兄を難しとす。

風雱曾點撰 稼圃樊遲情 風雱 曾點の撰、稼圃 樊遲の情。

願署金蘭簿 歲寒尋此盟 願はくは 金蘭の簿に署し、歲寒 此の盟を尋ねん 《拙齋西山先生詩鈔》上卷

佐びしい 蓬や茨の生い茂る粗末なところに、佳き友を出迎えてもてなす。

私を助けるのは 内田子明、私の氣付かなかったことに気づかせるのは 菅禮卿。

すぐれた詩文は 変化を極め、道の本体は 流行に現れている。

同じ境遇に苦しむ者は 変わりなき節操を期待し、親しい交わりは 弟兄以上である。

雨乞いのまつりは 曾點を撰ぶ、植え付けの畑は 樊遲の心掛け。

願いたいことは 親友の名簿に署名し、歲寒松柏の心を持った 盟友を尋ねること。

「子明」内田子明（一七三七—一七九一）備前国兒島郡粒浦の医者。諱は元亮、字は叔明、又の字を子明と言ひ、省齋と號した。文藻に富む。拙齋と親交が厚かった。墓誌銘を拙齋が書いている。「蓬簞」蓬や茨

の生い茂る粗末なところ。「逢迎」人を迎え出てもてなす。「田元亮」内田子明。「起予」私の思いつかなかつたところを気づかせてくれる。『論語』八佾第三に「子曰、起予者、商也始可與言詩已矣。」（子曰く、予を起す者なり。商や始めて與に詩を言ふべきのみと。）とある。「詞華」あやのあることは。すぐれた詩文。「道體」道の本体。道は天道人道の道で、もと無形であるが仮にこれを「體」と言う。「松柏」冬季の大寒に遭つても些かも色を変えない松柏を言う。君子が隘窮患難に処して節操を変えない喩え。『論語』子罕第九に「子曰、歲寒、然後知松柏之後彫也」（子曰く、歲寒くして、然る後に松柏の彫むに後るるを知るなり）とある。「同病」同じ境遇に苦しむ者。「風雪」「雪」は雨乞いのまつり。「曾點」字は皙。孔子の弟子。嘗て子路・曾點・冉有・公西華の四人が孔子に侍坐していた。孔子は四人に志を言させた。曾點は「暮春には春服既に成り、冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞雩に風し、詠じて帰らん」と。孔子は喟然として歎じ、吾は點に與せんと言う。（晩春の好季節には、春服に着替えをして、元服したばかりの二十歳くらいの青年五六人と、十五、六歳のはつらつとした童子六、七人を連れて郊外に散策し、沂の温泉に入浴して舞雩の雨乞い台で一涼みして歌でも歌いながらかえつて来たいものです）と言った。孔子は深い溜息をつきながら「私は點の仲間入りがしたいものだ」と言った。『論語』先進第十一。「稼圃」「稼」は五穀（稻・黍・稷・麥・菽）を植え付けること。「圃」は野菜畑。「樊遲」孔子の弟子。「稼圃樊遲」は『論語』子路第十三に「樊遲請學稼。子曰、吾不如老農。請學爲圃。吾不如老圃。樊遲出。子曰、小人哉樊遲」。「樊遲稼を學ばんと請ふ。子曰く、吾は老農に如かずと。圃を爲るを學ばんと請ふ。吾は老圃にしかずと。樊遲出づ。子曰く、小人なるかな樊遲）。「金蘭簿」親密な朋友の姓名を記録する帳簿。「金蘭契」は同心の友の交わりの固いことは金よりも堅く、その美しいことは蘭よりもかぐわしい。極めて親密な交わりの喩え。『易』繫辭上に「二人同心、其利斷金。同心之言、其臭如蘭」とある。

十日曉夢菅禮卿來訪 十日曉に菅禮卿の來訪を夢む

渭樹江雲想望頻 登高况復菊花辰 渭樹 江雲 想望 頻りに、登高 況んや復た菊花の辰。

吟窻遙夜相思夢 先迓茶山一故人 吟窻 遙夜 相思の夢、先づ迓ふ茶山一故人。

『拙齋西山先生詩鈔』上卷

別れた後は 思慕の情が頻りである、高い山に登ったりましてや菊の花を浮かべた朝などは。

詩作の部屋の 長い夜 互いを思う夢、真つ先に迎えるのは 親友である茶山だ。

「迓」迎える。「渭樹江雲」別後の思いをいう。一人は渭浜に在り、一人は江水の辺に在って両地相隔たつてゐるをいう。友人相思の情をいう。杜甫の「春日憶李白詩」（春日 李白を憶ふ詩）に「渭北春天樹、江

東日暮雲」（渭北 春天の樹、江東 日暮の雲）とある。「想望」思いのぞむ。思慕する。「遙夜」長い夜。

安永七年（一七七八） 拙齋四十四歳・茶山三十一歳

この年二月に拙齋は、備前国兒島郡粒浦の医者である内田子明と共に茶山を訪ねて来た。

五月十七日には茶山が拙齋を訪ねている。このとき、拙齋は塾生数名を従えて茶山を上成村の拙齋の別荘に案内した。鴨方を発つて東に向かい、玉島を経て上成村へ行く途中に詠んだ拙齋の詩がある。

自玉島赴上成途中得輕字 玉島自り上成に赴く途中 輕字を得たり

水風蕭颯夕陽晴 屢袖相攜笠子輕 水風 蕭颯として夕陽晴れ、屢袖 相攜へて笠子 輕し。

遮莫梅天留滯久 前村到處有同盟 さもあらばあれ 梅天留滯久し、前村 到處 同盟有り。

『拙齋西山先生詩鈔』上卷

水を渡る風の音が もの寂しく夕陽は晴れ、靴を履き 共に行けば かぶり笠は軽やか。

どうであれ 梅雨空は 停滯することが長い、前の村には 到るところに 盟を結ぶ友がいる。

「蕭颯」物寂しく吹く風の音。「屨袖」「屨」は靴。靴を履く。「笠子」かさ。かぶり笠。

上成村では拙齋の弟子の中原子幹に招かれ、子幹の鎮青亭での詩会に臨み、拙齋は次の七言律詩一首を詠んだ。

中原子幹鎮青亭分烟空雪散山依然得烟字

中原子幹の鎮青亭にて「烟空雪散山依然」を分ち烟字を得たり

鎮青亭子枕晴川 好引高朋開綺筵 鎮青亭子 晴川に枕む、好し 高朋を引きて 綺筵を開かん。

吟榻緑濃風外樹 靜窓茶熟雨餘烟 吟榻 緑は濃し 風外の樹、靜窓 茶は熟す 雨餘の烟。

犬牙田隴分堤陸 燕尾枝流接海天 犬牙 田隴 堤陸を分ち、燕尾 枝流 海天に接す。

更約湧金樓上宴 清樽泛月採蓮船 更に約す 湧金 樓上の宴、清樽 月を泛かぶ 採蓮の船。

〔拙齋西山先生詩鈔〕上卷

鎮青亭は 晴れた川に枕のせんでいる、好し 高尚な友だちを呼び寄せ 美しい筵を開こう。

吟榻に 緑濃き風外の樹、静かな部屋には 茶を沸かす 雨あがりの烟がたつ。

食い違う田圃の畝は 堤と畦を分ち、燕の尾のように 枝分かれた流れは 海と空に接している。

更に約す 湧金 樓上の宴、清樽に 月を泛かぶ 採蓮の船の上。

〔中原子幹〕（一七五三〜一八三八）備中国浅口郡上成村の人。名は貞固、字は子幹、蕉齋と號した。拙齋

の高弟。「亭子」あづまや。「高朋」高尚な友達。「犬牙」犬の歯のように入り組み食い違いになっている。

〔田隴〕田の畝。「堤陸」堤と畦。「吟榻」詩歌を作る席。「海天」海と空。「湧金」月が出ることをいう。

これらのことは拙齋から春水に宛てた次の書簡によって知ることができる。（安永七年七月二十八日付け）書簡の終わりに次のように認められている。

禮卿五月十七日來顧。玉嶋上成備前粒浦迄相伴いたし内田元亮宅ニも久しふり應酬。六月四日ニ敝宅迄歸り候

處、備前姫井哲字仲明ト申友人來會候而十日迄鼎座談論候。尤『大極圖述』校合其餘暇一二唱和も仕候。其時愚作得意ノ警聯ニ「模圖俱玩先天易、擊節痛排非聖書」ト申有之候。禮卿仲明モ壓倒セラレ候ヤ、瞠乎無言候。何々。十一日、晚紫崑僧へ禮卿相伴十三日、分手候。逗留中、彼是唱酬二百二十餘篇、禮卿作居。其半候五七古或排律等行歩中ニ出來候才捷ハ陪舊日候。病氣も留歡中快方ニテ歸後もいよいよ快然之由此比申こし候。元齡病後、濕風臥葺候由、先日貴簡轉達ノ時も他筆ニテ申こし候。近日如何いたし候や。定而快氣と察居申候。書簡の内容は次の通りであつた。

「五月十七日に茶山が拙齋を訪ねて来たので、上成村の別荘に案内した。六月四日に鴨方に帰つて来ると、備前の姫井仲明（桃源）が来ていた。十日まで三人（茶山・拙齋・仲明）で室鳩巢の『大極圖述』の校合をしたり詩を作り合つたりした。そのとき拙齋が『大極圖述』について「模圖俱玩先天易、擊節痛排非聖書」（圖を模して俱に玩ぶ、先天の易、節を撃ちて痛く排す、非聖の書）と詠んだ詩句に茶山も仲明も感歎した。十一日の晩、六條院村明王精舎の紫巖上人を訪ね、十三日に茶山と拙齋は約一か月に及ぶ詩酒徵逐の日々に別れを告げた。この間に皆で唱酬した詩は二百二十餘篇にもほり、中でも茶山の詩は半分を占めていたといふのである。これらの詩は『漁歌唱酬』と題する詩集一卷に纏められたらしいが、この詩集は現存しない。

「玉嶋上成」鴨方の東北数里の所にある風光明媚な村。拙齋の弟子の中原子幹らが拙齋の為にささやかな別荘を建てて提供した。茶山が撰した『拙齋先生行状』に「本州上成村、東枕長川、南眺江中諸嶋、景境絶佳。門人中原子幹、大田子齡等、營一堂於川上、以爲先生行窩。最宜雪天。因名、曰雪堂。先生時往留賞、或攜客遊焉。」（本州の上成村は、東は長川に枕み、南は江中の諸嶋を眺め、景境絶佳なり。門人中原子幹、大田子齡等、一堂を川上に營みて、以て先生（拙齋）の行窩と爲す。最も雪天に宜し。因りて名づけて、雪堂と曰ふ。先生時に往きて留賞し、或は客を攜へて遊ぶ。）とある。「姫井哲仲明」（二七五〇～一八一八）備中国鴨方の生まれ。

名は元喆げんてつ、字は仲明、桃源または静修と號した。池田藩の藩儒、和田一江に学び、伊藤仁齋父子の著書に親しんだが、後、朱子学に転じた。池田藩の儒官となり、池田家祖廟の執事、閑谷饗のことを司る。文政元年八月、六十九歳で没す。茶山より二歳年少。拙齋の親しい友人であった。「先天易」「先天」は天に先立つ義。天運時機の来ることを前知する。「易」「乾」文言曰、先天而天弗違、後天而奉天時、天且弗違。(文言に曰く、天に先だちて天違はず、天に後れて天の時を奉ず、天すら且つ違はず。天の時に先立つて事を行つても、天は大人(有徳者)なすところにもとり違ふことはなく、天の時に後れてそのことを奉じ行つても、大人はよく天の心に合してその事のよろしきを得る。)[「瞠乎」「瞠」見張る。見つめる。「紫崑僧」六條院村明王精舎の紫巖上人。「擊節」拍子をとる。白居易の「琵琶行」に「鈿頭銀篋擊節碎、血色羅裙翻酒汚」(鈿頭の銀篋は節を撃ちて碎け、血色の羅裙は酒を翻して汚る)「螺鈿を散りばめた銀の笄は歌の拍子をとつた為に折れてしまい、血の色をした薄絹の裙は酒がこぼれて染みがついた」と。

六月十三日、拙齋と茶山らは上成村に別れを告げて、途中聯句を作つたりしながら備前国兒島郡粒浦に向かう。そのとき次の聯句を作つた。

上成赴粒浦途中聯句 上成自り粒浦に赴く途中の聯句

吟杖纔追一日晴 吟杖纔かに追ふ 一日の晴

滿襟蒼翠畫中情 滿襟 蒼翠 畫中の情 拙齋

澄江倒浸峯巒影 澄江 倒に浸す 峯巒の影

人在松梢擊汰行 人は松梢に在りて 擊汰して行く 茶山

詩人の杖は纔か一日の晴れを追うて行く、襟元に染まって画の中の気分

遊んだ江には逆さまに写つた連なる山々の峰、人は水面に写つた松の梢の上を棹さして行く 茶山

「滿襟」襟元いっぱい。 「撃汰」船の棹が波を打ちながら進んで行く。「汰」は波。

粒浦から鴨方に帰る途中、渡し場で船頭から「前夜、この川に溺死体が浮かんだ」と聞かされた。拙齋は次の七言絶句を詠んだ。

自粒浦還書事 粒浦よ自り還る 事を書す

渡頭烟雨喚舟還 昏黒蒼茫水拍波 渡頭 烟雨 舟を喚びて還つ、昏黒 蒼茫 水波を拍つ。

篙子慇懃迎我說 前灘昨夜有浮屍 篙子 慇懃に 我を迎へて説く、前灘 昨夜 浮屍有り」と。

〔拙齋西山先生詩鈔〕上卷

渡し場は 烟雨が立ちこめている 舟を喚んで還つ、日が暮れて 蒼黒く広々とした水が 堤を拍つ。

船頭が 懇ろに 私を迎えて説明した、前の瀬に 昨夜 屍が浮かんでいたと。

〔渡頭〕渡し場。渡口。〔昏黒〕日が暮れて暗くなる。日没。〔蒼茫〕青々として広い。〔篙子〕船頭。

上の欄外に茶山は「余亦親見其語」（余も亦親しく其の語るを見たり）と記している。

茶山と拙齋は帰途、又、次のような聯句を詠んでいる。後に春水が三・四句を補った。

斜風細雨好同遊 斜風 細雨 同遊に好し 子雅

夾路新秧野水流 路を夾みて 新秧 野水流る 茶山

看過題名相感舊 題名を看過して 感舊を相ふ

舊歡恨少頼千秋 舊歡 恨むらくは 頼千秋を少く 千秋

斜めに吹く風 細かい雨 同に遊ぶには好い 子雅

路を夾んで 新しく稲の苗が植えられ 小川の水が流れて行く 茶山

題名に目を通して 昔を懐かしく感じる

昔を懐かしく思うが 恨まれるのは 頼千秋が少けていること
千秋

「看過」目を通す。「感舊」昔を思つて心に感じる。

安永八年（一七七九）安芸国竹原に帰省した頼春水は、二月十四日に鴨方の拙齋を訪ねてその夜は拙齋宅に一泊し、翌日、拙齋は春水・茶山と数人の門下生を連れて中藤又四郎（魚崎という所の大庄屋）を訪ねる。そこで昼食をとり、又四郎も加わつて玉島から上成村の中原子幹の鎮青亭に行く。到着したとき一行は十数人にもなつていた。十六日は、拙齋、春水、茶山ら十人ばかりで倉敷の岡元齡宅に立ち寄る。晩に岡山に着いた。ここで拙齋は鴨方に、茶山は神辺に帰り、十七日に春水は岡山を發つた。

この年の五月十七日に茶山は、大空上人と鴨方に拙齋を訪ね、玉島・長尾に遊んでいる。拙齋に次の詩がある。

同禮卿又僧玄道登山禮卿疲甚戲贈 禮卿又僧玄道と同一山に登る 禮卿 疲れ甚しく 戯れに贈る

穿青鑽緑暮山風 杖屨颯然如駕空 青を穿ち 緑を鑽る 暮山の風、杖屨 颯然として 空を駕するが如し。

近日許詢怯登陟 勝情多是屬林公 近日 許詢 登陟に怯ゆるも、勝情 多く是れ 林公に屬す

『拙齋西山先生詩鈔』上卷

青を穿ち 緑を鑽つて吹く日暮れの山風、杖と屨は 颯爽として 空をしのぐようだ。

近ごろ茶山は 健脚の許詢の山登りに怯えているが、勝情の多くは 是れ 林公と同類だ。

「玄道」大空上人。名は玄道、字は大空。遍照寺に居ること二十年、天明三年に寺を弟子の大了上人に譲り、高野山の某寺に遷りそこで没す。年月日不詳。「杖屨」杖とくつ。「許詢」晋の人。字は元度。山水に遊ぶことを好み、体が登陟に適していた爲に、「許詢は山水を賞する情を持つているばかりでなく濟勝の具（健脚）を備えている」といわれた。（『尚友録』十五）こゝは登山で疲れの甚だしかった茶山を揶揄している。「颯然」風がさーっと吹いて来る音の形容。風が吹いて木の葉が落ちる形容。「登陟」登ること。「勝

情」山水をめぐる心。「林公」晋の僧、支遁。字は道林。ここは大空上人を指す。

西山拙齋の詩集を繙くと、この数年間は茶山に関する詩が数多く見受けられる。

安永九年（一七八〇）最後の京都遊学、茶山三十三歳・拙齋四十六歳

安永九年は茶山の最後の遊学となった年である。京都遊学の期間中、茶山と拙齋がこれほど長期間行動を共にしたことはなかった。『第二北上日記』（第一章 菅茶山の行跡 第一節 一の6 京都遊学六回目参照。）によると、拙齋と茶山は中山子幹の世話で、聖護院村の僑居に間借りをしてほとんど行動を共にしている。『易』の会講をする、詩会を催す、あちこちの寺院の瀑涼を観る、大坂に行き春水宅に滞在する、混沌社の多くの詩人達と詩酒徹逐の時を持つ、木津港で舟遊びをするなど、多くの詩友と交わった。

「中山子幹」（一七四五～一七九〇）佐渡国瓦田の人。名は惟楨、字は子幹、通称は五兵衛、後に貞藏と改め、漸廬と號した。初めは徂徠学を学ぶが、後に京都に出て那波魯堂に師事し、朱子学に転じ、聖護院村の塾の執事となる。晩年は聖護院宮盈仁親王の侍読となった。寛政二年四十六歳で京都に歿す。

時には、お互いの意見の違いから気まずくなることもあったようで、三月廿二日と廿四日の『日記』に次のような記事がある。

廿二日 晴、吉松淳甫來。談話移時而出。夜与諸子講易。子雅良齋議論不合。至四更、弁論未定。呼酒歡呼。

良齋遂留宿焉。

吉松淳甫來る。談話に時を移して出づ。夜諸子と易を講ず。子雅良齋議論合はず。四更に至りても弁論未だ定まらず。酒を呼びて歡呼す。良齋遂に留り宿す。

「吉松淳甫」（一七五六～一七八七）岩見国の人。名は正修、字は潤甫、通称は儀一郎、文山と號した。大坂に遊学し、片山北海、頼春水に学ぶ。津和野藩の藩儒。「良齋」佐々木良齋。源長秀、字は茂伯、聖護院王府の長

史であったところから佐長史と呼ばれた。寶曆六年の頃に京都で六如上人、西山拙齋等と詩窮社を結んだが寛政六年七月に歿した。

この日、「子雅と良齋は議論が合わない。午前二時頃に至っても弁論はまだ決着がつかない」とあるように、拙齋と良齋は意見が合わず良齋は宿泊した。

廿四日 …… 晩 梁山、珉川、於春篁亭、折簡招余輩。子雅不往、子幹及余往。

…… 晩 梁山 珉川は、春篁亭に於て、折簡して余輩を招く。子雅往かず、子幹及ひ余は往く。

「子雅不往」とは、廿二日の良齋との議論の不一致が尾を引いていて拙齋は機嫌を損ね、わだかまりを残したらしい。廿四日の晩に梁山と珉川が茶山と拙齋を招いてくれたが、拙齋は行かなかったというのである。

〔梁山〕小西左仲。好古。字は尚奇、梁山と號した。京都の儒者で那波魯堂に学んだ。寛政七年春に歿す。

〔珉川〕奥田珉川。詳かではないが大坂の儒者で那波魯堂の弟に奥田尚齋、名は元繼、字は志李という人がいる。この人のことではないか。

茶山が最後の京都遊学を終えて帰郷したのは、五月二十日か二十一日頃ではないかと考えられる。(第一章「菅茶山の行跡」第一節「京都遊学の時期」6「京都遊学六回目」参照)

最後となった京都遊学を終えて帰郷した茶山は、暫くの間は郷里に落ち着いていたものと思われる。

『菅茶山略年表』によると、

九月十八日 拙齋は春水と共に茶山を訪ねるが、生憎茶山は不在で会えなかった。

十月 八日 茶山は春水や牛海法師と共に拙齋を訪ねる。

ところがように春水が拙齋を訪ねると、二人は必ず茶山を訪ねるのだった。

茶山は『拙齋先生行狀』の中で次のように述べている。

(先生) 嘗送頼千秋、因俱造晉帥家。佯爲送行而出。千秋初不知其意。每過數里、輒將分袂、停杖而揖。先生笑曰、興盡則回。君、勿顧矣。且談、且行。行五十里、千秋始覺。一行、拍手、路上謹謹然。已入晉帥門。未及寒暄、先語以此事。得意之狀可掬。

(先生) 嘗て頼千秋(春水)を送り、因りて俱に晉帥(茶山)の家^いに造る。佯^{いつは}りて行を送ると爲^なして出づ。

千秋初め其の意を知らず。數里を過ぐる毎に、輒^{すなは}ち將に袂を分かつたんとして、杖を停めて揖^{ゆう}す。先生笑ひて曰く、興盡くれば則ち回^{かへ}る。君、顧る勿れと。且つ談じ、且つ行く。行くこと五十里にして、千秋始めて覺^{さと}る。一行、手を拍ち、路上に謹^{くふんくわしぜん}謹然たり。已にして晉帥の門に入る。未だ寒暄に及ばずして、先づ語るに此の事を以てす。得意の狀^{まご}掬すべし。

つまり、「ある時、春水が拙齋を訪ねて来た。辞して広島に帰ろうとする春水を、拙齋は『そこまで送ろう』といった恰好で送ってくれたが、數里を過ぎる度に春水は、『もう此処でいいから』と袂を分かとうとするが拙齋は、『興が尽きれば帰るから』と言つて何処までもついて来る。喋り歩くこと五十里にして、春水は初めて拙齋も茶山を訪ねたかつたのだと悟り、路上で手を叩いて大笑いした。二人は茶山の門に入るや、挨拶もそこそこに語るにこの事を以てし、三人は相顧みて哄笑したのであった」ということで、得意の狀、思うべしである。

このように茶山、拙齋、春水の交遊の密なることは他に類を見ないほどであった。

2、郷里に於ける交遊

安永九年（一七八〇）正月に最後の京都遊学をした茶山は、その期間中の殆どを拙齋と共に行動し、五月二十日頃郷里に帰つて来たと思われる。郷里に於ては毎年春・秋には必ず訪ねたり、訪ねられたりの交遊を欠かさなかつた。この度はその主なものを取り上げる。

天明二年（一七八二） 茶山三十五歳・拙齋四十八歳

十月十四日、茶山の末の弟（信卿）が拙齋の門下生となつた。茶山は次の詩を詠んで弟に贈つた。
送家弟信卿從西山先生讀書 家弟信卿 西山先生に従ひて書を読むを送る

師道尊嚴視君父 此風輒近漸莽鹵 師道の尊嚴 君父に視ふも、此の風 輒近漸く莽鹵す。

當時老宿尤伊川 何論諸生笑韓愈 當時 老宿 伊川を尤む、何ぞ論ぜん 諸生の韓愈を笑ふを。

今人習俗益披猖 朝來暮叛窮慢侮 今人 習俗 益す披猖、朝に來り 暮れに叛きて慢侮を窮む。

教孝誨忠知是誰 盍敬其本培其土 孝を教へ忠を誨ふは知る是れ誰ぞ、盍ぞ其の本を敬し其の土を培はざる。

吾弟成童始遊方 輕裝唯挾書幾部 吾が弟 成童 始めて遊方す、輕裝 唯だ書幾部を挾むのみ。

擇師喜得就端人 恐汝陪奉愆儀矩 師を擇び端人に就くを得たるを喜び、汝 陪奉して儀を愆らんかと恐る。

贈言不用摘春華 拙詞漫配表微譜 贈言 用ひず 春華を摘ぶるを、拙詞 漫りに配す表微が譜。

義重在三勿背違 才無知十但勤苦 義は在三を重んじ 背違する勿れ、才は十を知る無ければ 但だ勤苦せよ。

稱閥弊風非一朝 立雪美談自千古 閥を稱する弊風 一朝に非ず、雪に立つの美談 自ら千古。

行矣觀汝事乃師 他年成業粗可觀 行け 汝が乃の師に事ふるを觀れば、他年の成業粗ほ觀るべし

〔黄葉夕陽村舎詩〕前編卷一

師の道の尊嚴なること君臣父子の道と同様であるが、この風儀は近年次第に軽んじられてきた。

宋代の伊川が皇太子を諫めた時 嚴しいと咎めた老臣、韓愈をつまらぬ事で笑った弟子達 何をか言わんや。今の人たちの習俗はますます破れ廢れ、朝来たかと思ふと暮れには叛いて侮り軽んじる。

忠を教え 孝を教えてくれる人は 誰か、どうして教育の根本を敬い、その土を培わないのか。

私の弟は十五歳になって初めて遊学の途についた、輕装で ただ幾冊かの書物を持って行くだけだ。

師を選び 言動正しい人を得て 何よりの喜び、心配するのは お前が師に仕え弟子の道を誤らないかだ。贈る言葉として 美辭麗句は用いない、拙い詞だが 劉表微の譜に準えて 思うままに作つてみた。

義は 君・父・師の恩に報ゆること、これに背くな、お前には一を聞いて十を知る才はない 只管刻苦勉勵せよ。学閥を称する弊風は 一朝にして出来たものではない、「雪に立つ美談」は遠い昔からのものである。

さあ行け お前が師に事えている姿を見れば、将来どの程度学業が達成できるか 察しがつく。

〔家弟信卿〕茶山の弟（二七六八〜一八〇〇）。名は晉寶、字は信卿、一の字を圭二と言ひ、恥庵と号した。

六人兄弟の末っ子で長兄の茶山とは二十歳の年齢差があった。〔表微〕宋、趙楨の字。單父の人。進士。官は真宗の時、兵部員外郎。天聖の初め、吏部侍郎、禮部尚書に擢んでらる。

拙齋も又、恥庵を歓迎して次の詩を詠んだ。

十月十四日 天明二年菅晉寶適至分得韻微

十月十四日 天明二年菅晉寶 適至まる 分かちて韻に微を得たり

送客江頭吟月歸 適逢小友訪幽扉 客を江頭に送り 月に吟じて歸る、適ま小友の幽扉を訪ぬるに逢ふ。

才情憐爾忘年契

彩筆光兼談屑飛

才情 爾を憐しむ 忘年の契、彩筆 光は談屑を兼ねて飛ぶ

〔備後史談〕第十五卷第一号

客を川の畔まで送って 月に吟じながら帰った、たまたま若い友が 私の幽居をたずねてくれたのに逢った。その優れた貴方を慈しみ年の差を忘れ才徳を尊敬し合う契りは、絵筆を振るい時間は話題を兼ねて尽きない。

〔談屑〕話の絶えないこと。話の種を屑のように多く持っていること。

天明五年（一七八五） 茶山三十八歳・拙齋五十一歳

二月廿一日 頼杏坪と渡邊圓淨（伊豫の人。名は忠、俗称友左衛門）が神辺に茶山を訪ねて来る。

廿三日 茶山は圓淨・杏坪と共に、笠岡に滞在中の梨木祐爲を訪ね泊す。

廿四日 茶山・圓淨・杏坪に備後府中の住人、木村仲平正誠・五弓美方正直も加わり歌会など催す。

廿五日 茶山と頼杏坪が拙齋を訪問。

廿六日 三人は占見村に花見。

廿八日 茶山・杏坪・拙齋に恥庵も加わって玉島・笠岡に遊ぶ。

三月 一日 更に姫井桃源も加わり、上成村の中原子幹の湧金樓に会し詩を賦す。

十日 一同神辺に行く。

十一日 一同は神辺の龍泉寺に遊ぶ。

十二日 西中條村の河相君推（西中條村の素封家、邸宅を松風館と称す）を訪ねる。

十三日 四人（茶山、拙齋、桃源、杏坪）は中條村の河相子蘭宅に遊ぶ。

十四日 中條村の黄龍山遍照寺に登る。

十五日 安井村に近藤伯協（医師）を訪ねる。

十六日 近藤伯協の案内で父石村（現在は府中市に属す）へ行く。

廿一日 神辺、西福寺詩会に行く。

廿二日 神辺、光蓮寺靈昌に招飲される。茶山と拙齋は一年前の同じ日にもここに来ている。

廿三日 皆は黄葉夕陽村舎を去り、拙齋は鴨方に、杏坪は廣島に、桃源は岡山に帰る。

〔『普茶山略年表』に拠る〕

このたびの交遊は二月二十一日に始まり、まる一か月に亘るものであった。神辺を去るに当たり三人は合作の和歌を残している。

奉 謝

普茶山のぬしへ

籃輿らんよして送るなさけは 正（拙齋）

風物をみながら 柔（杏坪）

見つつ残夢をぞ繼ぐ 哲（桃源）

天明乙巳やよひ三日

この年七月五日には茶山が拙齋を訪ね数日滞在している。このように三週間から一か月に亘る交遊は珍しくなかつた。

寛政元年（一七八九） 天明九年一月二十五日年号が寛政に変わる。茶山四十二歳・拙齋五十五歳

茶山は七月頃、疝（マラリヤ病）に罹つて病臥した。このとき次の詩を詠んでいる。

患店 戲似應師

店を患ふ 戯れて 師に應ずるに似たり

帝憐斯身常帶寒

扇此炎氣烘五官

帝斯の身の常に寒を帶ぶるを憐れみ、此の炎氣を扇ぎて五官を烘く。

或憎我輩誇曝背

伐彼層氷加雙肩

或いは我輩の曝背を誇るを憎みて、彼の層氷を伐りて雙肩に加ふるか。

一身氣候須臾轉

燕雪未消吳牛喘

一身の氣候 須臾にして轉じ、燕雪 未だ消えざるに吳牛喘ぐ。

八寒焦熱感何業

平生極口訕佛法

八寒 焦熱 何の業を感じるや、平生 口を極めて 佛法を訕る。

幸然隔日賜寬暇

散帙能對古人坐

幸然 隔日 寬暇を賜ひ、帙を散じ 能く古人に對して坐す。

世間炎涼君知不

朝來恩門晚來讐

世間 炎涼 君 知るや不や、朝來の恩門 晚來の讐。

狂狂附勢逐臭輩

東走西奔不少休

狂狂として勢に附し 臭を逐ふ輩、東走 西奔 少くも休まず。

〔黄葉夕陽村舍詩〕前編卷三

天帝は、斯の身がいつも寒がりであるのを憐れんで、此の暑氣を扇いで 五官を烘くのだろうか。

或いは 我輩が 日向ぼっこを誇るのを憎んで、彼の層氷を伐つて 両肩に加えたのか。

一身の氣候は 忽ち変わり、燕の地方は 雪が未だ消えないのに 吳の国では牛が月を見ても喘ぐ。

八寒 焦熱 何の業を感じるか、平生 口を極めて 仏法を悪く言う。

思いがけなくも 一日置きにくつろげる暇をいただき、書物を散らし 能く古人に對して坐す。

世間は 熱いか涼しいか あなた 知っていますかどうですか、朝方の恩門は 日暮れ方の敵。

狂狂として勢に付き 臭を逐ふ輩、東に走り 西に奔走し 少くも休まない。

〔帝〕天帝。〔炎氣〕暑氣をいう。〔五官〕五つの感覺器官。視（目）・聽（耳）・嗅（鼻）・味（口）・触（皮膚）。〔曝背〕背中を日にさらす。〔燕〕中国北部の河北省あたり。〔吳牛喘〕〔吳牛 月に喘ぐ〕で暑さの烈

しい吳の国では、牛が月を見てもそれを太陽かと思つて喘ぐという。〔焦熱〕焦げるような暑さ。〔平生極

口誦佛法幸」の句の右横に「自願口業尤多罪猶」、左横に「未懺平生口業罪」の注がある。「朝來」今朝がた。「恩門」恩のある家。弟子が先生などを指して言う。「晚來」日暮れ方。

同じころ拙齋も同病に罹っていた。茶山の方が先に癒えたので、茶山は九月五日に拙齋を見舞い、九日の重陽の節句まで鴨方にいた。この日は拙齋の詩によれば、地理学者として聞こえていた備中の古川古松軒が、東北地方から北海道への視察を終えて帰ってきて、拙齋宅を訪ねている。

拙齋は『拙齋西山先生詩鈔』下巻に次の五言古詩を収めている。

重陽前四日、昔禮卿見訪。賦此志喜。禮卿及余、俱患疝瘡、伏枕累月。禮卿先起訪余、余亦尋愈。情見乎辭。

重陽の前四日、昔禮卿訪れらる。此を賦して喜びを志す。禮卿及び余、俱に疝瘡を患ひ、枕に伏し月を累ぬ。禮卿先ず起ちて余を訪ね、余も亦尋ぎて愈ゆ。情辭に見はる。

相遇殊相喜 與君同病憐
相遇ひて殊に相喜び、君と同病憐れむ。

徂夏迨晚秋 枕頓臥各邊
徂夏より晚秋に迨び、枕頓各邊に臥す。

或恐應永訣 會晤在黃泉
或いは恐る應に永訣すべく、會晤は黃泉に在らんかと。

曳筇君先起 來及上九筵
筇を曳きて君先に起ち、來りて上九の筵に及ぶ。

摘菊鳩方馥 秉蘭叢未薦
菊を摘みて鳩方に馥し、蘭を秉るも叢未だ薦まず。

指點新圖畫 對讀舊遊編
指點す新たに圖きし畫、對して讀む舊遊の編。

尚論連晝夜 吟眺盡山川
尚論して晝夜を連ね、吟眺山川を盡す。

何用登高屐 臥遊飄欲僊
何ぞ用ひん登高の屐、臥遊飄として僊ならんと欲す。

况迎僊翁駕 月下坐團圓
況んや僊翁の駕を迎へ、月下團圓に坐す。

新聞休明治 薰成登熟年
新たに聞く休明の治、薰成す登熟の年。

吾儕願老健 擊壤賦園田 吾が儕よ願はくは老健にして、擊壤園田を賦せんことを。

友に遇うて 殊更に嬉しい、貴方と同病で 互いに同情し合ったものだ。
夏の終わりから 晩秋に及び、同じ時に あちらとこちらで枕についた。

ある時は恐れた 永遠の別れになるかと、遇うのは あの世だろうかと。

杖を曳いて 貴方が先に起き、やつて来て 重陽の節句の筵に連なつた。

菊を摘んで 盃に入れると芳しい、藤袴を乗つたが 束はまだ萎まない。

新たに図いた絵を 指さしながら、向かい合つて 古い遊記を読む。

尚 昼夜を問わず 論評し合う、吟じ眺め 山川を尽くす。

どうして下駄を履いて 高所に登る必要があるうか、臥していても飄々として 仙人の気分だ。

ましてや 貴方の輿を迎えて、月下 團圓に坐す。

新たに聞いた 立派で明らかな政治、善い感化を受け 五穀豊饒の年と。

吾が友よ 願うことは 年老いて尚健康であり、太平無事の世で 園田を賦して欲しいということ。

「閑」ふじばかま。「復夏」行く夏。晩夏。「枕頓」時を移さず枕につく。「會晤」会う。「會」も「晤」も

会う意。「上九」九月九日。「臥遊」寝ながら山水の画を眺めて、その地に遊んだ気分になって楽しむ。「坐

團圓」団欒の座にいる。「古川翁」古川古松軒。(一七二六—一八〇七)備中国下道郡新本村の人。名は正辰、

字は土曜、通称は平次兵衛。当時、地理学者として聞こえていた。天明八年に幕府の巡見使に随行して東

北地方から北海道迄視察している。後にこのときの視察記として『東遊雜記』を記している。「休明治」

立派で明らかな政治。「薰成」善い感化を受けて成就する。「登熟」五穀の豊かに稔ること。「擊壤」堯の

時、天下が太平であった故、老人が下駄打ちの戯れをして堯の徳を歌つたという故事。転じて太平無事を

形容する詞として用いられた。

十二句の「對讀舊遊編」の後に「綾山田生爲余畫采石磯黄山諸名勝於障壁間。頗有幽致。席上偶有岱史黄山導等遊記。相與披閱。」（綾山田生余の爲に采石磯黄山の諸名勝を障壁の間に畫く。頗る幽致有り。席上偶たま有岱史黄山導等の遊記有り。相與に披閱す。）「綾山田生は私の爲に、石を采り磯黄山の諸名勝を障壁の間に画いた。頗る趣が有る。席上偶たま有岱史黄山導等の遊記が有った。相與ともに披ひいて見た。」の注が有る。十七句の「況迎僊翁駕」の後に「重陽日、古川翁適至、盛談東事。」（重陽の日、古川翁たま適たま至り、盛んに東事を談ず。）「重陽の日に地理学者の古川翁が、適たままやつて来て盛んに東北地方から北海道辺りの視察談を話す。」の注が有る。「僊翁駕」仙人の乗った車。「僊」は「仙」に同じ。ここは茶山が来たことをいう。

『西山拙齋年譜』に拠ると、拙齋は安永二年八月に魯堂や茶山と西岡に遊んだのを最後に京都を發たまつて郷里に帰り、「欽塾」を開設して子弟の教育に携わっている。しかし、茶山最後の京遊となった安永九年正月には、拙齋も上洛して中山子幹の世話で二人は聖護院村の僑居に間借りをし、詩酒徵逐の日々を送っている。四月廿七日、京都を後にして帰郷の途に着いた茶山は、廿八日の朝大坂に着いた。拙齋はあと暫くは京都に残っていたらしく、大坂での茶山は頼春水宅に起居して、混沌詩社の人々と詩酒徵逐の時を過ごし、五月十二日、帰郷の爲の船に乗った。この時は拙齋も一緒であったから、拙齋は茶山と一緒に帰郷するため、前日くらいに大坂に来ていたものと思われる。帰途の船に乗ったものの風雨が激しいため港で足止めを余儀なくされて、十七日まで大坂で過ごすこととなった。二人が漸く郷里に帰り着いたのは五月下旬である。

郷里に於ける二人の交遊は、訪ねたり訪ねられたり毎年逢わない年はなかった。年に二度も三度も往来することも稀ではなかった。天明二年（一七八二）十月十四日に茶山は、末弟の信卿を拙齋の門下生として送り出した。

福山に天明の農民一揆が起こったとき、拙齋は茶山に七言絶句一首を贈って憤りを共にした。茶山と拙齋が時を同じくして疔病（マラリヤ）に罹ったとき、先に治った茶山が拙齋を見舞った。ともあれ、二人は忌憚無く話し合える間柄で、そうであるから二人の交友は生涯変わることなく続いたのである。

二、茶山・拙齋の政治についての意見

1、拙齋の政治詩「述感篇」について

拙齋は天明七年（一七八七・五十三歳）から寛政二年（一七九〇・五十六歳）までの二年半の間に、「述感篇」と題して五言絶句百三十篇を詠み、当時の社会事情に対する感想や批判を吐露している。その跋文で拙齋は次のように述べている。

右述感詩、百三十章、起自丁未八月、訖於庚戌正月。其間、美刺相半、瑜瑕不掩、務記時事之實、不問格調如何。眎之友朋、竊述盍各之志爾。夫諫鼓謫木、見於唐虞之際、眎賦矇誦、酌於三王之世。野人放言、奚爲昭代之累哉。若夫僭狂之誚、風伍之嗤、固所不辭也。觀者其察諸。

寛政二年孟春人日 山陽逸民 溥題

『西山拙齋全集』第一卷

右感を述ぶるの詩、百三十章、丁未八月自り起り、庚戌正月に訖る。其の間、美刺相半ばし、瑜瑕掩はず、務めて時事の實を記し、格調の如何を問はず。之を友朋に眎して、竊に盍各の志を述ぶる爾。夫れ諫鼓謫木は、唐虞の際に見れ、眎賦矇誦は、三王の世に酌む。野人の放言、奚ぞ昭代の累ひと爲らんや。夫の僭狂の誚り、固より辭せざる所なり。觀る者其れ諸を察せよ。

寛政二年孟春人日 山陽逸民 溥題

右感を述べる詩、百三十章は、天明七年（二七八七）より起こし、寛政二年（一七九〇）の正月に終わる。その間、褒めることと誹ることが半々で、美点と欠点を覆い隠すことなく、できるだけそのときの出来事や事柄の真実を記し、品格とか調子がどうであるかなどは気にせず、これを友朋に示して、個人的な考えとして各々の志を述べただけである。朝鼓を備えたことは、よく治まった世だと言われる唐虞の際に現れている。盲人が詩を作り諳んじることが、三王の世に酌む。田舎者の無責任なことばなど、どうして太平の世の迷惑になろうか。もしそれが僭狂だという誹り、風俗の嗤を受けたとしても、もとより弁解はしないところである。この詩を読む人はこれらのことを察してほしい。

〔丁未〕天明七年（一七八七）。〔庚戌〕寛政二年（一七九〇）。〔美刺〕褒めると誹ると。〔瑜瑕〕美点と欠点と。〔瑜〕美しい玉の光。〔瑕〕玉のきず。〔盍各〕何故に各々自分の志を言わないのか、須く各自の志意を言うべきである。『論語』公冶長に「顔淵・季路侍。子曰、盍各言爾志」（顔淵・季路侍る。子曰く、盍ぞ各々爾の志を言はざる）とある。〔諫鼓〕臣民から朝廷に進諫しようとする者のため、朝廷の門外に鼓を備えて打たせた鼓。〔唐虞際〕「唐」は陶唐、「虞」は有虞、堯と舜との二代をいう。『論語』泰伯に「唐虞之際、於斯爲盛」（唐虞の際には、斯れより盛んなりと爲す）とある。〔瞽賦瞽誦〕盲人が詩を作り、盲人が諳んじる。〔矇矓〕は古、盲人を楽工としたことから楽工をいう。〔三王〕夏の禹王・殷の湯王・周の文王又は武王をいう。〔僭狂〕上を犯し気狂いじみた行爲をする。〔山陽逸民〕拙齋の號。

〔述感篇〕の詩はどのようなものか、幾首か選んで内容を検討する。（番号は「述感篇」の順序を示す。）

⑤ 三輔得其人 弊風乍一新

剷除殘墨吏 海内自歸仁

三輔 其の人を得れば、弊風 乍一新せん。
殘墨の吏を剷除せば、海内 自ら仁に歸せん。

三輔はそこに相応しい人を得るならば、よくない習わしは忽ち一新するだろう。腹黒い役人を削り去れば、国内は自然に仁に帰るだろう。

〔三輔〕漢代、長安以東を京兆尹、長陵以北を左馮翊、渭城以西を右扶風とし、これを三輔という。

〔剷除〕削り去る。〔殘墨吏〕不法に財を貪る役人。

「三輔はそこに相応しい人を置けば、悪い風習は一新し、不法に財を貪る役人は払い下げられて、国内は自然に仁政が敷かれるようになるだろう」というのであつて、現在の世の中がその逆であることを暗に示唆しているものと考えられる。

⑥ 雖竭官倉粟 其如億兆痛 官倉の粟を竭くすと雖も、其れ億兆の痛むを如せん。

一傳蠲賑令 先使蒼生蘊 一たび蠲賑の令を傳へ、先づ蒼生をして蘊らしめん。

政府の倉の粟をすっかり出すとは言つても、億兆の病むのをどうしたらよからう。一度金品を与えて救うというお触れを出して、先ず万民を蘇らせよう。

〔痛〕病む。疲れる。〔蠲賑〕年貢を許し、民を救う。〔蒼生〕万民。全ての人民。

「民の多くが飢えている。政府の倉の貯蔵米を出し尽くしても焼け石に水だ。とても億兆の痛む者を救えはしない。取り敢えず蠲賑令を出して、万民を蘇らせたらどうだろうか。」下々にまで行きわたらない政治に苛立ちを感じ、「為政者たる者は何らかの策を考えよ」という叱責が込められている。

⑩ 節儉禁奢侈 祖宗有舊章 節儉にして奢侈を禁ずるは、祖宗に舊章有り。

率先振遺烈 風化自無疆 率先して遺烈を振はば、風化自ら疆無し。

儉約をして贅沢を禁ずることは、代々上に立つ者に古くからの掟がある。

率先して前人の残した旧章を盛んにすれば、民を風化して自ら疆がないだろう。

「祖宗」歴代の祖先。「舊章」古いおきて。「遺烈」前人の残した功績。いさお。「風化」上の者の徳で下の者が感化されてよくなる。「疆」限り。際限。

歴代、上に立つ者には古くからの掟がある。それは、「節儉にして奢侈を禁ずる」ことである。上に立つ者が率先して祖宗の舊章を盛んにすれば、民を感化して世の中は限りなく良く治まるだろう。上に立つ者が贅沢三味の暮らしをして、民は貧に苦しんでいるのが現状であるので、為政者としてあるべき姿を考えて欲しいという訴えである。

㊦ 搗搗藩邸吏

勝會事奢淫

搗搗たる 藩邸の吏、勝會して 奢淫を事とす。

相府頌新政

泥丸下一鍼

相府 新政を頌かたば、泥丸 一鍼を下さん。

得意そうな藩邸の役人、盛んな宴会をして 贅沢ばかりしている。

上の役所が 新しい政治のやりかたを敷けば、眉間に 一本の鍼を下すだろう。

「勝會」盛んな宴会。「奢淫」奢り邪なことをする。「相府」宰相の役所。「頌」分かつ。分配する。「泥丸」道家の語。脳をいう。又両眉の間をいう。「一鍼」一針。体の悪い部分に刺し、病気を治すもの。

藩邸の役人は盛んな宴会をして、贅沢な暮らしをしている。上の役所が正しく新しい政治を行い、彼らの急所に鋭い鍼を一本打ち込めば効果があるだろうに。その役目を為すべき相府も全く仕事をしていない、というもどかしさが感じられる。

㊧ 捐金賑餓者

儲穀抑商權

捐金 餓者を賑はし、儲穀 商權を抑ふ。

州郡如相效

春風遍八埏

州郡 如し 相效はば、春風 八埏に遍し。

寄付金は 飢餓の者を救い、蓄えた穀物は 商人が利を貪らないように抑える。

州や郡が それに效うようになれば、春風は八方 遍く行きわたる。

「儲穀」蓄えた穀物。「商權」商業上の勢力。「八埏」八方の遠い果て。「效」倣う。真似る。

寄付金は飢えた者を救済するし、貯蔵米は商人が利を食らないうようによく管理する。各州や郡がそういうふうになれば、国は穏やかに治まるであろうに。実際には飢餓を救うために寄付金が使われていないし、蓄えた穀物は悪徳商人が利を食っている。世の中に春風は行き渡っていないという嘆きが詠われている。

⑤⑦ 山陽新縣令 清儉懲貪奸 山陽の新縣令、清儉 貪奸を懲らさん。

欲恤窮黎苦 先寒黠吏肝 窮黎の苦しみを 恤はんと欲すれば、先づ 黠吏の肝を寒やさん。

山陽の新縣令は、清儉で 欲深く食る者を懲らすであろう。

貧民の苦しみを 救おうとすれば、先ず 悪賢い役人の肝を冷やすことだ。

「清儉」潔白で儉約。「窮黎」貧民。「寒」身震いする。おののく。「黠吏」悪賢い役人。

山陽に出された新縣令は、潔白で儉約、欲が深く食る者を懲らすというものであった。貧民の苦境を救えば、悪賢い役人は私腹を肥やすことが出来ず、肝を冷やすであろうというのである。

以上見てきたように「…ならば…であろう」というような表現であるが、それは当今の実情がそうであつて、それを単刀直入に批判するのは憚られるので、拙齋は婉曲に表現したのである。しかし、相当に辛辣な悪政批判であると言える。

茶山は拙齋のこの『述感篇』を読んだ後で、次のような七言律詩を賦している。

題拙齋先生述感篇後 拙齋先生述感篇の後に題す

一軸新章寫素襟 平生抱負轉堪欵 一軸 新章 素襟を寫す、平生の抱負 轉 欵ぶに堪へたり。

青燈閒照憂時淚 華髮空知好古心 青燈 閒照 憂時の淚、華髮 空しく知る 好古の心。

借問王通來獻策 何如白傳醉聯吟 借問す 王通 來りて策を獻ずるか、白傳 醉ひて聯吟するを 何如せん。

詩家近日争虚飾 誰信狂言是雅音 詩家 近日 虚飾を争ふ、誰か信せん 狂言 是れ雅音なるを。

〔黄葉夕陽村舎詩〕前編卷三

一卷の新章は本心を写している、平生の抱負はますます敬うことができる。

青く燃える灯火は閑かに憂時の涙を照らし、老人は空しく知っている 好古の心を。

尋ねてみるが 王通が来て天子に策を献上したのか、白居易が酔っぱらって聯吟するのはどんなふうか。

詩家は 近頃 上辺の飾りばかりを争っている、狂言が正しいことばであることを 誰か信じるだろうか。

〔狂言〕「狂」の右傍に「俗」と記入がある。「華髮」白髮。老人。「好古心」古の聖人の学を好む心。〔王通〕隋、龍門の人。広く詩・易・禮を修め、儒家を以て自ら居り、講学已まず。仁寿中、長安に遊び太平十二策をたてまつ上るも用いられず、河汾に居て教授す。〔白傳〕白居易。〔唸〕吟ずる。〔吟〕の古字。

2、茶山の藩政批判詩

茶山は三十歳代には世情を批判する詩を多く詠んでいる。そういった詩は主として『黄葉夕陽村舎詩』卷一・卷二・卷三に見られる。卷一の「御領山大石歌」「秋半六首」「耕牛」「龍盤」「山居」「狂痴」「吉備公廟」「時情」「偶作二首」、卷二の「山行」「雜詩三首」「璇璣」、卷三の「開元琴歌」「窮鄰」「途上」などには、世情に対する感懐や、幕政・藩政に対する批判めいたものが詠み込まれている。その代表的なものは、卷一所収の七十二句から成る五言古詩「有鳥三首」で、「鳥」に準えて「天明の新政」と謂われた藩の悪政を痛烈に批判している。次に掲げる「偶作」は狡知猾才うごちかあさい、巧言令色を以て藩主に取り入り、福山藩の藩政を掌ることを任された猾吏が、藩主の威光を笠に着て藩士や家老らを蔑視し、専僭せんせんに事を用い、罪のない民を罰したり、賄賂を貪ったりして、福山

の藩政を攪乱した所謂「天明の新政」といわれた政治に対する批判を詠んだ詩である。

偶作 二首 (一)

季秋龍未見 郊野正西成 季秋龍未だ見れず、郊野正に西成。

魯國爲長府 徭夫犯曉行 魯國長府を爲り、徭夫曉を犯して行く。

晩秋だというのに、まだ蒼龍星を見ない、郊野は正に取り入れの真つ最中。

魯国では長府を造るといふ、そのため労役に召された徭夫が晩前から出掛けて行く。

「龍未見」「龍」は蒼龍星。十月初めの暮れ、東方に見える。この星が現れて後、農事がやっと暇になる。

しかるに、この星が「未見」なので、農家は収穫のため多忙の最中である。「西成」秋に穀物が実る。五

行説で秋は西に当たるとある。「魯國爲長府」「論語」の「魯人爲長府」の注に「長府は蔵の名なり」とある。魯

の蔵は財貨の府にて長府と名付ける。ここは福山藩の倉庫を建ててをいう。「徭夫」労役。

(二)

新政何多事 中宵始放衛 新政何ぞ多事なる、中宵始めて衛を放つ。

干旄城外至 不識自誰家 干旄城外に至り、誰が家よりするかを識らず。〔黄葉夕陽村舎詩〕前編卷一

新政を行う為に、何と多忙な事よ、夜中になってやっと役所を開放される。

干旄を持ち城外に出て行く先は、誰の家かは知らない。

「中宵」夜中。「衛」役所。「干旄」牛尾の飾りをつけた旗。「不識自誰家」「誰家」は家老たる者が、藩主

の威光を笠に着て横暴な振る舞いをする新参者の家に行つて、藩中の事柄の一つについて伺いを立てなければならぬという本末転倒も甚だしいことを以て、明言を避けたものと思われる。

農家にとつて一年中で一番忙しい取り入れの時期に、労役に駆り出されるとは暴政も甚だしいという批判が込

められている。藩は新政を行うために、農事の最も多忙なときに夜中まで働かせ、夜明け前には労役に駆り出すという過酷な労働を課している。「偶作」はこういった悪政に対する批判を詠った詩である。「千旌城外至、不識自誰家」の二句は、夜半近くまで城中での仕事をして、城外に出た家老は、藩中の事柄の諸々について一々伺いをたてるために、猾吏の家に赴かねばならない。このような本末転倒も甚だしいことに対する茶山の怒りの気持ちが、「不識自誰家」とぼかした表現に現れている。こういった詩は多分に拙齋の影響を受けて作られたものと考えられる。所謂青年期と言われる三十歳代の茶山の政治批判詩は、青年期特有の世情や政治に対する批判を詠んだものが多く、しかも長詩が多い。しかし、年とともに批判を真つ向からぶつけるのではなく、農村詩の中に自然に溶け込ませるといった形に変化させているのである。

3、茶山の農村詩に込められた政治批判

茶山の京都遊学期間は、十九歳から三十三歳までの十数年間である。その間に往ったり来たりを六度繰り返して、三十四歳で郷里神辺に塾「黄葉夕陽村舎」（後に「廉塾」）を開き、子弟の教育に關わって生涯を終えている。郷里に落ち着いてからは、郷土近辺（備中・備後・安芸地方）の人々との交遊が主で、福山藩主阿部正精に召されて二度の江戸出府をしているのと、京都・奈良・大坂方面へ二度の長期旅行をしている他は、郷土に於る生活が殆どであった。そのため茶山の農村詩は、郷土の農民の暮らしぶりを目の当たりにして、その折々の感慨を詠んだものが多い。次にそのような詩を挙げてみよう。

江良路上（一）

千處耘歌四野風 夫須棋點一叢叢 千處耘歌四野の風、夫須棋點一叢叢。

時清城市皆絲管 誰信歡聲出此中 時清くして 城市 皆絲管、誰か信ぜん 歡聲 此の中より出づるを。

〔黄葉夕陽村舎詩〕後編卷七

あちこちから百姓の歌が野を渡る風に乗ってくる、あちこちにすげ笠が碁石を置いたように一群ずつ見える。

時代は清く 町は皆 管弦に浮かれているが、誰が信じるだろうか 平和を歎ぶ声が此の中から出ている事を。

〔江良〕福山市駅家町。「耘歌」百姓の歌。「耘」は草きる。土を返し雑草を抜く。「夫須」すげ笠。「棋點」碁石を置く。「絲管」管弦。

太平の世が続いて、城市には管弦の音色が満ち、人々は此の世の春を謳歌しているが、この平和は今、田植えをしている農夫たちの歌声の中から生まれ出ているのだと、心底感謝している人が果たしているのだろうか。世が穏やかに治まっていることは喜ばしいことではあるが、それは骨身を惜しまず働く農民によって支えられているのだということを為政者に分かつてもらい、農民が報われる政治をして欲しいと茶山は願っている。それは更に次のような詩になつて続く。

秋半 六首 (一)

秋半還徭役 清閑付病身 秋半 還た徭役す、清閑 病身に付す。

汗邪未收穫 流峙自精神 汗邪 未だ收穫せず、流峙 自ら精神。

尋藥雲生屐 看碑雨墊巾 藥を尋ぬれば 雲は屐より生じ、碑を看れば 雨は巾を墊す。

笑他憂國意 卻在釣魚人 笑ふ 他の憂國の意、卻つて 釣魚の人に在り。

〔黄葉夕陽村舎詩〕前編卷二

秋半ば また出役の要請があつた、私は 世の騒乱を離れて 病床に伏している身で関係ないが。

足田は まだ收穫が終わっていない、水は流れ 山は峙つ如く 天地には自然の摂理があるのだ。

菓草を採りに（山に）入ると足下から雲がわき上がり、道端の碑を見れば雨が頭巾を濡らしている。

お笑いだ 真に国を憂える その心は、為政者ではない 却って釣糸を垂れているあの人の中にある。

【秋半】秋の半ばは農家にとっては取り入れの秋でもあつて、一年中でも最も多忙な時。【徭役】ぶやく。

勞力税。【汗邪】「汗」は「汚」に同じ。低い土地。くぼ地。湿田のこと。【流峙】水は流れ、山は峙つ。

秋の半ばは収穫の時で、農家にとつて一年中で最も多忙を極める。その忙しい時期に又しても藩は労役の要請をして来た。為政者たるもの「不違農事」を厳守するのが鉄則ではあるまいか。秋の長雨が続いて「汗邪未收穫」湿田はまだ収穫も終わっていないのに。藩主は真に民の幸せを考えているのだろうかと茶山は嘆く。天候次第では収穫も覚束ない。それでも情け容赦なく税は取り立てられる。それは次の詩に詠まれている。

偶作 備中路上

城隍前月頻祈雨

野觀今朝更禱晴

城隍じやうくわう

前月頻りに雨を祈り、野觀今朝更に晴を禱る。

本自農家無暇日 又聞村吏索糧征

本自もとよ

農家暇日無し、又聞く村吏糧征を索むるを

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷二

城の周りのから堀では前月頻りに雨を祈り、野の高台では今朝更に晴れることを禱っている。

もともと農家は暇になる時はない、又村の役人が綿の税を取り立てていると聞く。

早が続けば雨を祈り、雨が続けば晴れることを願う。農家にはもともと暇というものは無い。粉骨砕身働いても我が身が豊かになるのではない。「又聞村吏索糧征」村の役人が綿の税を取り立てて行くと、肩を落として溜息をついている農夫の姿が彷彿として目の前に浮かんでくる。農民に対する温かい政治を茶山は願ってこの詩を詠んでいる。次の「横尾途上」「秋半」も同じく税を納める人々を詠んでいる。

横尾途上

閒行全勝藥 忘却抱痾身

閒行 全く藥に勝り、忘却す抱痾の身。

飛鳥還知晚 狂花自作春

飛鳥 還た晚を知り、狂花 自ら春を作す。

霜前山已瘦 水後市偏貧

霜前山 已に瘦せ、水後市 偏へに貧し。

大路城門近 喧然輸稅人

大路城門 近し、喧然たり 税を輸る人。

閑かな生活は全く薬に勝り、病氣持ちの体のことも忘れさせる。

鳥たちはまた 日暮れを知つて埒へ帰り、季節外れの花も 春はちゃんと知つて咲く。

霜の降りる前の山は 樹々が葉を落とし、川水の瘦せる晩秋は 市もひっそりと静まる。

大通り城門のあたりが、騒々しくなつたのは 税米を輸送する人達だ。

〔閒行〕 閑かな生活。〔抱痾身〕 病氣持ちの体。〔市偏貧〕 賑わつていた市がひっそりと静まる。

秋半 六首 (二)

題詩坐深夜 心意轉幽閑

詩を題して 深夜に坐せば、心意 轉 幽閑なり。

犬吠疎簾外 風生雜樹間

犬は吠ゆ 疎簾の外、風は生ず 雜樹の間。

孤燈明古壁 墜葉響空山

孤燈 古壁に明るく、墜葉 空山に響く。

渡口喧人語 前村輸稅還

渡口 人語 喧しく、前村 税を輸りて還る

詩を作ろうと 深夜に坐っていると、心はますます静まってくる。

犬は 吠える 簾の向こうで、風は 吹き抜ける 雑木の間を。

孤つの燈火は 古びた壁を 明るく照らして、落ち葉は 人気のない山に響く。

渡し場は 人々の声が 喧しい、前の村では 税を送つて還つて来たらしい。

二首とも首聯から頸聯までの六句は、もの閑かな情景描写であり、尾聯二句で其の閑けさが急に破られて読者の

注意を惹く。六句までが自然の撰理に従った静寂の境地であるだけに、尾聯一句の税を送り出す人のざわめきは際立ち、農民たちの税を納めることが出来た安堵感と共に、言葉にならない虚無感も伝わって来る。「朝は朝星、夜は夜星」を頂いて、早朝から夜遅くまで汗水垂らしてせせせと働いた収穫物を、税として差し出さなければならぬ農民の無念さが、茶山には痛いほどわかるのである。

藩政や幕政を批判しても、今、目の前にある神辺の農民の生活を、一朝一夕にどうすることもできないと悟った茶山は、現体制の中で農民が安定した暮らしをするためにはどうすればよいかを考えた。

抑も茶山が京都遊学を志したのは、ゆくゆくは郷里の若者を教育して学問の種を根付かせたいと考えた為であった。山陽道の街道筋に当たっていた神辺は、風俗の乱れ目に余るものがあつた。茶山はこの弊害を取り除く方法は、若者の教育しかないと考えた。「郷塾取立に関する書簡」(『広島県史』近世資料編VI)で次のように述べている。

：昇平二百年、在々処々に鋤鋤取らぬ人、城市に算をせぬ人、肆頭しとうに坐せずして済む人も少なからず、その間何をして暮らし候事や、この学種さへ之有り候はば、数人の後に聞く人世をさとし候人、出生すまじきや。上は茶香さか、中は猿楽、下は賭博にてこの昇平を過かし候も、口惜しき次第ならずや、左道の民を惑はし候こと、皆民の愚より入り候。：されば暗夜に一点の火残りたる如く、たとひ一郷一国を照らすこと能はずとも、これ又少しの種にて、幾つの挑燈にもなるべきに候ふ：

即ち「現今、太平の世を迎えて二百年、鋤鋤を持たなくなつた人、町中でちゃんとした商売をしない人などが少なくなつて、皆何をして暮らしているのかと思われる。もし学種さえあれば学問を聞いた人の五、六人に一人くらいは、世を論ず人も出てくるのではなからうか。茶香・猿楽・賭博などにこの昇平の世を暮らすのは口惜しいことだ。邪な道を歩む民を惑わすことは、皆民の愚から入つてくることだ。(学問は)：暗夜に一点の火が残つ

たぐらひ些細でも、たとい一郷一國を照らすことができるほど大きくなくても、少しの種で幾つかの燈を挑げることにもなるはずだ」というのである。こういつた考えから、茶山は三十四歳のとき、塾「黄葉夕陽村舎」を開いた。幕政や藩政ばかりを批判していても始まらない。ここで学ぶ者の中の何人かが、やがて正しい政治を志し、働く人の努力が報われるような世の中を築いてくれるに違いないと茶山は確信し、それを願つての塾設立であつたと考へる。

4、農民に寄せる優しさ

塾童の教育に携わるようになった茶山の詩は、政治批判の色合いは内面におさめられ、健気に働く農民への温かい眼差しが感じられる詩が多くなつた。それらの例を幾首か挙げてみる。「二訳」は第三章茶山の文学 第三節 農村詩 参照)

夏日雑詩 十二首 (六)

村翁擔水踏畦登 種稗田高山半層
 自道移來經久早 三回灌遍例能升

村翁 水を擔になふて 畦がけを踏みみて登る、稗ひえを種多て 田は高く 山の半層。
 自道いふ 移いり來りて 久ひしき早ひを經るも、三回灌そそぐこと 遍あまくすれば 例おほ

ね能よく升あると

夏日雑詩 十二首 (八)

早田爭水四郊喧 處處松明路不昏
 村婦夜深來慰勞 左懷孩乳右盤殮

早田かんでん 水を争あひて 四郊かまひす 喧し、處處に松明ありて 路みち 昏くらからず。
 村婦 夜深よく來りて 慰勞す、左には孩乳わかこを懷き 右には盤殮ばんらん。

江村秋事 七首 (一)

柳葉無風帶露飛 隔江村落晚依微 柳葉 風無きに露を帯びて飛び、江を隔てて村落 晩れて依微たり。

扁舟載稻誰家婦 極負孩兒自棹歸 扁舟 稻を載すは誰が家の婦か、孩兒を極負して自ら棹さして歸る。

以上挙げた詩は、過酷な労働に従事する農夫(婦)が詠われているのであるが、でき上がった詩から受ける感じは、ほのぼのとした優しさである。「夏日雜詩」六は、水桶を担いで山の中腹の田圃に水を運ぶ翁が「三回も万遍なく濯ぐと何とかよく実るよ」とこともなげに話す。しかし、暑い日照りの中、どう考えても並大抵ではない。

「夏日雜詩」八は、日照りのため田圃に引く水争いで、夜警をしなければならぬ夫、左手に乳飲み子を抱え、右手に晩飯を持って、松明の明かりを頼りに応援に駆けつけるかみさん。この詩も農民の生活の過酷さが詠まれているのに、微笑ましい温かさが感じられる。「江村秋事」一の詩も「夏日雜詩」八に似たような感覚の詩で、健気に爽やかな感じを受ける。どの詩をとってみても内容は深刻で重い。しかも、こうして懸命に働いてもその殆どが税として持って行かれるのであってみれば、その怒りを何処にぶつけたらいいのだろうか。茶山はひたすら優しい眼差しを農夫たちに向けるしかなかったたのである。これらの詩から温かさ、優しさ、爽やかさが感じられるのは、農夫に対するそのような茶山の気持ち、そのまま詩の上に現れているからであろう。茶山の政治への批判は、文学に於てはこのような形をとって結実していると言えるのではあるまいか。

拙齋は天明七年(一七八七)五十三歳の八月に筆を起こし、寛政二年(一七九〇)五十六歳、正月迄の凡そ二年半の間に「述感篇」と題して五言絶句百三十篇を詠み、更に補遺十篇を加えて、当時の幕政・藩政を批判している。「政治が…であるならば、世の中は…であるだろう」といった表現であるが、裏を返せば相当に辛辣な政

治批判である。当時は幕府の権勢が世を圧し、言論の拘束が極めて厳しかったので、赤裸々に横政を批判する愚を敢えて避けたものと考えられる。

花田一重著『西山拙齋傳』に拙齋の人と為りについて「潔癖で鉄心石腸の士であり、勤皇の志が厚く、口を開けば霸政を斥ける談を為す」と述べられている。その名が今上天皇（光格天皇）に達し天謁を賜った。天皇は拙齋が尋常の儒生でないことを見抜かれ、之を召そうとして侍臣に「唯だ悲む、朕は關東の如く多額の禄を與ふる能はざるを」と言われたと漏れ聞いた拙齋は「臣誓つて關東の禄を食まず。若し天子の召命あらば躬を以て君に許し、普天の下、王臣の義を盡さざらんや。吾豈に禄の厚薄に依つて聖天子に背かんや」と感泣したと伝えられている。『西山拙齋傳』花田一重著 淺口郡教育會出版）後に、執政松平定信・阿波藩・加賀藩が辞を卑くして招聘しようとしたが、頑なに固辞したのはこのとき心に誓うところがあつたからであらうか。

片や茶山は三十歳代の所謂青年期に、悪政に対する批判の詩を数多く詠んでいる。拙齋の「休否録」所収の茶山「政治批判詩」の内容は、相当に激しいもので板本『黄葉夕陽村舎詩』には載せられていないものが殆どである。（詳しくは第三章「茶山の文学」第二節「政治批判詩」で述べる。）板本『黄葉夕陽村舎詩』前編卷一所収の「政治批判詩」は長詩が多く、幕政批判よりも藩政批判の方が多い。それは、茶山の生活が郷土に根ざしたものであり、明けても暮れても村人の生活の有り様を目の当たりにしていたし、その子弟の教育に携わっていたので、どうしても藩政のしわ寄せを受ける農民への同情が厚くならざるを得なかつたものであろう。

三、茶山・拙齋の仕官についての態度

1、拙齋と阿波藩招請

寛政二年（一七九〇）西山拙齋五十六歳の冬、阿波侯は拙齋を招聘すべく家臣、横野允文を使者として遣わした。横野允文は、拙齋に仕官を勧める柴野栗山・頼春水の書簡を携えて鴨方に赴いた。柴野栗山・頼春水の書簡、それに対する拙齋の復書は次の通り。『西山拙齋傳』花田一重著

(一) 柴野栗山の書簡

横野多門次罷越候に付一筆啓上候。…此度阿波藩が御請待被申度旨に付多門治罷越候。此義僕より表向御推舉之事は少し差つかへ有之いたしかたく御座候。是等之事も人傳并書中には難申解候。少も御氣遣之筋には無之候。何れにいたし申候も御出勤被成候様いたし度奉存候。當時世上に而彼藩之事色々輿論も有之候へ共、少も御氣遣之筋は無之候。舊君之事をおもねり候とや思召されつらんとは存候得共、當阿波侯賢明仁恕尊道好學所は十分御請合申候。老兄御義被慕候事に候。御取扱之事は可申入候へ共、尚又御望も御座候はゞ拙者方へ以御内々可仰聞候。尚又如何様にも御相談いたし方も可有之候。乍去右様に自拙者得貴意候事は決而外へは御さた御無用に御座候。皆々内分に而得御意候事に御座候。いづれにいたし候而も少も御ふためは取計申まじく候。爲道御出勤くれく希候に御座候。此書御一覽之後火中希候。寒中御自重專一に奉存候。此元近狀多門次へ御聞可被下候。…

頓首再拜

十二月十九日

西山老兄座下

この書簡の内容は、「阿波藩から拙齋を招待したいということについて、多門治が参った。このことについて私から表向き推薦申し上げることは、少々差し支えがあり出来かねる。人伝や書面では説明しにくい。このところ、世上では阿波藩のことについて色々と輿論があるが、今の阿波侯は賢明仁慈、尊道好學の方で少しも氣遣いはない。貴方がことが慕われているのだ。希望があれば私が内々にお伺いするし、どのような相談にものる。外へは漏れない方がよいと思うし、爲にならないことは取り計らわれない。この一書は御覧になったら焼いて欲しい」といったものである。

(2) 拙齋の復書

この書簡に対して拙齋は次のような復書を送った。

此度横野子與兄啣阿波君侯之尊命、弊廬へ御來訪被下、兼而正事被爲聞召候由にて、爲御聘物金子五百疋眞綿參把拜領被仰付候。曾て不存寄御事甚恐入奉存謹而頂戴仕候。隨而御儒職に被召出俸祿貳百五拾石被下置之旨委細御演說承之重々忝仕合に奉存候。乍然先生兼々御熟知被下候通り正鷲材薄力謏劣無狀之者、大藩學政之任に與り候程之材力毛頭無御座候。且年來多病之上客歳六月より臙月迄瘡痂臥葺、至今春漸々平癒仕候得共、老嫗疎懶殊に甚敷、窮巷中の講説さへ久々相止居申候仕合に御座候得は、筮仕之義者一日も勤まり候筋骨無御座趣、早速横野兄へ披肝縷々御斷申上候。此段乍憚御憐察被下宜敷取成御斷仰上可被下候。但草莽之一情民御優待被成下候御事、誠に賤宗之面目寒郷之榮重々難有感佩仕候。高尚其事など申様なる傲睨不遜之心底は決而無御座候得共、右多病老衰不堪拜趨候故不得已強而御斷申上候ま、此段も乍憚御含置被下宜敷御斷被仰上可被下偏に奉頼上候。

先生御内々御深懇被仰下候趣、竝に頼文學よりも縷々勸諭被申聞逐一謹承深領厚意候得共、右之仕合無據違來命候段甚以恐入奉存候。萬惟御垂察被下失禮之罪幾重にも御容赦可被成下奉希候。

正頼首再拜

五春上元之日

〔客歳〕去年。前年。〔笠仕〕初めて仕官する。〔披肝〕真心を打ち明ける。

即ち、「横野子與兄が阿波侯の尊命を承けてご来訪くださり、御聘物金子五百疋、眞綿參把拝領するようにとのこと、思いも寄らないことで甚だ恐れ入ることだが謹んで頂戴した。二百五十石を以て儒職に召したい旨、忝なく仕合わせに思うが私は愚かな才能、浅い才知だから大藩学政の任に預かるほどの材力はない。その上、年来の多病で仕官を勤める体力もない。在野の怠け者の私をご優待いただいたことは、光榮と有り難く感佩致している。決して驕り高ぶった不遜の心底ではない。多病・老衰で拜趨に堪えない故で已むを得ず、強いてお断り申し上げるのだ。その所をお含み置き下さり、宜敷くお断り下さるようにお頼み申し上げる。」というのである。

(3) 頼春水の書簡

今度阿藩之土横野多門次名允文字子與に托一書。…扱今度老兄御儀南阿より被聘度思召に相聞候。先頃多門次方へ相見丁寧致其師柴博士之意、其後柴博士へも参り得面談候所、同方より拙者へ内々其意味被申談、何分御打立御南渡候様被致、其待遇之趣は魯堂同様勿論にて、此節別而一藩御教授之事被托度、何分人才も追々被育候様にとの事に候。密々承候處、當君候御儀、誠に御躬まじり行之旨たま儲致承知候。是則御出可被成御儀之第一に奉存候。出處之事御精詳は其御元に御座候。先拙者承候所には十分御出被成候而可然儀と奉存候。尚博士よりもくれ／＼可申參候へとも、此地に居合せ候私事ゆへ、私よりも同様申遣しくれ候様被相托候。此横子與久々從遊之士にて候。

是へ厚可被托其意候。勿論同人も私へくれく咄候て、何分早々御打立致度との事委細は直に御聞可被成候。來十五日此元發軔はつじん之由にて今日預來訊候。即右托之一書直に面前に相認申候。時下寒威御自愛可被成候。…

頼 彌太郎惟完

隴月十日

西山 拙齋 様

「躬行」自分自身で行う。「実践躬行」。「發軔」出発。

「今度 南阿よりあなたを招聘したいとの思し召しだと聞いた。待遇も先師魯堂と同じであることは勿論、別に一番のご教授の事も托され度いとの事である。内密に承るところでは当藩主は自分で実践なさり、言行が一致する方であるとのこと。是れは仕官成さるべき儀の第一だと思ふ。仕官するかしないかはあなたが決められることだが、私が承る所では十分仕官されて然るべきだと思ふ。博士も同様のお考えで、私からもよく申し遣わしてくれよと托された。横野子與へ厚くその意を托されますように。横野子與も私へくれく咄しなされて、何分にも早々に出立致したいとのこと、委細は直接聞いて下さい。來る十五日に此処を發つとの由、そこでこの一書を直ちに認めたようなことだ。」といった内容であつた。

この春水の書簡に対する拙齋の復書は次の通り。

(4) 拙齋の復書

此度阿藩徵聘之事々々勸諭被下柴博士よりも内々に而被仰下謹承之候。乍然かねて御熟知被下候通、庸劣無似且多病老衰加以去年病後之羸憊るふはい候得は、いか様の御優待に而も仕官は決而一日も勤まり不申候。且又先師魯堂同ま之ま可ま以下之ま返ま以ま入ま存ま候。自ま自省ま侯ま處ま先ま師ま之ま與ま正ま才ま學ま之ま高ま卑ま寔まにま岑ま樓ま寸ま木ま之ま譬ま不ま啻ま候。旁ま以ま不能ま應ま

辟就徵候之趣、委細横野兄へ披瀝申斷候。此事は柴博士へ具に申上候まゝ御聞被成下候。禮卿へ露封書被遣拜覽後早々神邊へ旨指撰書共に轉達いたし候。阿侯賢明恭儉尊道好學之御様子貴書中及博士書中にも被仰下、且此度御聘幣兩種拜領被仰付、御使者口演之御趣意等誠に古昔卑禮厚幣絀貴下士之遺風御慕被成候御事、恭喜之至奉欽慕候得共、右之仕合故不得已辭退仕候。始自隗之思召に御座候得は、自今已後定而千里之駿追々駢集候而、學政翕然維新之化行乎其國可申と遙想仕候。服部先生も愆愆被下候由禮卿へ之御書中に被仰下候。倍々不存寄事に而、大藩之徵聘諸賢之推奨を蒙り候御事、寔に賤宗之面目寒郷之光華甚以大慶仕候。鄙諺所謂遠いが花香聞ての千兩見ての一兩と申事存出し不堪愧赧候。またよく出るよりわらく引こめとやらんも申ならはし候得は、強而御斷申上候と御使者へ申答へ候ひき。心緒萬惟、御憐察可被下候。

五春十六日

「庸劣」平凡で愚か。「無似」愚か。「羸憊」弱り疲れる。「自揆」自らはかる。自ら治める。「恭儉」人に対しては恭しくし、自分の身を守るとは慎み深くする。「卑禮」へりくだって人を敬う。高い地位の人が下位の人を礼遇する。「厚幣」手厚い贈り物。贈り物を丁寧にする。「絀」退ける。退く。不足。「欽慕」敬い慕う。「駢集」並び集まる。「翕然」多くの人の意見が一致するさま。「愆愆」勧める。傍から勧める。「鄙諺」俗間に行われる言い習わし。

内容は「愚かな才能、浅い才知で大藩学政の任に預かるほどの材力はない。ましてや先師魯堂同様の格禄下さるとの趣、甚だ恐れ入るが『岑樓寸木』の譬のようにには参らない。詳しい事情は横野兄へ全て披瀝して断つた。柴博士へも具に申し上げたのでその方から聞いていただきたい。大藩の徵聘、諸賢の推奨を蒙ったことは一族の面目であり、賤宗の面目、寒郷の光華と甚だ以て大慶に存じている。俗の諺に『遠いが花香、聞きての千兩、見ての一兩』と申すこと、また『よく出るよりわらく引こめ』とやら申す習しもある。使者へは強てお断り申し

上げると答えた。心緒萬惟、御憐察下さい」というのである。

阿波藩からの使者横野允文には、次のような詩を詠んで断つた。

阿波國臣横野允文字子與、俗称多門治。銜其君命、來自東都、徵余儒職。固辭不就。賦此奉謝。分得韻支。

阿波の國の臣横野允文字は子與、俗称多門治。其の君命を銜み、來ること東都自りして、余を儒職に徵す。固辭して就かず。此れを賦して謝し奉る。分ちて韻支を得たり。

村落春寒嬾臥時 忽驚星使過茅茨 村落 春寒 嬾臥の時、忽ち驚く星使茅茨に過ぎるを。

大藩徵聘眞卑禮 諸老舉推逾感知 大藩の徵聘 眞に禮を卑くし、諸老の舉推 逾よ知に感ず。

雨齋泥龜偏曳尾 風恬斥鷃益安枝 雨 齋れて泥龜 偏に尾を曳き、風恬にして 斥鷃 益す 枝に安んず。

君侯如問老奴態 爲報驚駘不足羈 君侯如し老奴の態を問はば、爲に報ぜよ 驚駘 羈ぐに足らずと。

村落は春寒く怠け伏せつてゐる時、急なことで驚いた阿波藩からの使者が粗末な家に立ち寄られたのを。

勢力ある大名より礼を尽くしてお召しがあつた。多くの先輩が皆推薦しますます知友を感じる。

雨が齋れて泥龜はひたすら尾を曳きずり、風が安らかになつて斥鷃は益々枝で安息している。

君侯がもし私の様子を尋ねられたなら、愚か者は引き留めるには足らないと報告して下さい。

『泥龜』『莊子』秋水篇に神龜の話有り。莊子が川で釣りをしていた。楚王が大夫二人を使いとして莊子の所へ行かせ、國を治めて貰いたい旨を申し入れた。莊子は釣り糸を垂れたまま振り返りもしないで尋ねた。「楚に死んで三千年も経つ龜が居る。王は大事に箱に入れて廟にしまつてゐる。龜はそれを喜ぶか、それとも生きて泥中に尾を曳くのを喜ぶと思ふか」と。大夫たちは「生きてゐる方を喜ぶ」と答えた。莊子は「私もそうしよう」と言つた。『斥鷃』うずらに似た小鳥。『老奴』年寄りを卑しめて言う語。ここは拙齋が自分を卑下して言う。『驚駘』愚か者。自分の才能の謙称。

復命 憑君善爲辭 菲才詎敢望先師
復命 君に憑る 善く爲に辭せよ、菲才 詎んぞ敢て 先師に望まん。

謔言 鯁議志雖在 矩步繩趨病不支
謔言 鯁議 志在りと雖も、矩步 繩趨 病みて支へず。

有若 寧升尼父坐 侯芭未識子雲奇
有若 寧んぞ升らんや 尼父の坐、侯芭 未だ識らず 子雲の奇。

莫言 鴻鵠七難得 禽尚遺蹤聊可追
言ふ莫れ 鴻鵠 七もて得難く、禽すら尚 遺蹤 聊か追ふべしと。

魯堂先生、嚮仕阿藩、藩旨欲以吾、爲狗續。故言。(魯堂先生は、嚮に阿藩に仕へ、藩旨 吾を以て、狗續と爲さんと欲す。故に言ふ。)

〔拙齋西山先生詩鈔〕下

報告は貴方が頼りだうまく辞退して下さい、鈍才がどうして敢えて先師の前に出られようか。

直言 正しい言論に志があるとは云つても、法度に適つた歩行 礼儀に適つた行いが病身には支えられない。

有若が孔子の坐に どうして昇ることができようか。侯芭は揚雄の奇をまだ認識していない。

言わないで下さい 鴻鵠は七では得難い、小禽も尚 蹤を遺しているともかくもそれを追うべきだと。

魯堂先生は、嚮に阿藩に仕えておられた。藩のおぼしめしは、私を以て先生の後任にしようとした。故に言う。

「復命」命令を受けてしたことの結果を報告する。「憑」頼る。力とする。「謔言」遠慮無く率直に述べた言葉。直言。正しい言葉。「鯁議」強く正しい言論。「矩步」歩行が法度に適うこと。「矩」のり(法)。「繩趨」礼儀に適つた行いをする。「繩趨尺步」「繩」正す。「趨」貴人の前を歩くときの礼儀。「有若」春秋、魯の人。孔子の門人。字は子有。前五三八〇?孔子より十三歳年下。孔子の没後その貌が孔子に似ているので門人が立てて師とせんとした。「侯芭」漢、鉅鹿の人。揚雄の弟子。太玄經・法言を受け、雄が卒して心喪すること三年。「子雲」揚雄の字。前漢末の学者・文人。辞賦に長じ、法言・方言・太玄經等を著わした。前五三〇一八。「鴻鵠」おとりやくぐい等の大きな鳥。大人物・豪傑・英雄などの喩え。「七」矢に

糸を繋いで鳥を撃ち、糸を絡ませて鳥を捕らえるもの。「遺蹤」あとかた。残ったあと。

「村落は春まだ寒く、懶臥してるところへ、阿波藩の使者が礼を卑くして私をお徴しに來られた。多くの先輩が推奨して下さった。謔言鯁議に志があるとはいっても、私は鈍才で礼儀作法も弁えず病身である。とても先師の後に就くことはできない。君侯にお伝え下さい。駕駟は引き留めるには足りない。復命は貴方を頼りとしています。うまく辞退して下さい」と使者 横野允文に贈った詩である。

茶山はこの詩の上の欄外に次の二つの評を記している。

「二詩清秀、殊見其用意」(二詩 清秀、殊に其の用意を見る)

「一結恨粗率、而緊要之詩、不可棄也」(一結の恨粗率にして、緊要の詩、棄つべからざるなり)

「粗率」手荒く飾り気がない。精細でない。「緊要」非常に重要で、第一にやらなければならないこと。

拙齋は阿波藩招聘を断つたことを、次の詩文を贈つて茶山に知らせた。

有阿州之聘也。柴博士栗山、頼文学千秋、皆寄書札勸奨。千秋又有露封書。寄菅禮卿、使予轉致。予已以老病固辭。使者□□始閱露封書。詳述筮仕事。云云。因戲賦一詩、併附其書、致之禮卿。其詩云、辟世蒿萊未飽閑、幡然思欲別青山。堪慚猿鶴舊儔侶、漫逐鸛鷺新隊班。蓋調諱也。禮卿、果以爲信然、齋書亦從臾之。予迺答以其實。又疊前韻、以明本志。

阿州の聘有るなり。柴博士栗山、頼文学千秋、皆書札を寄せ勸奨す。千秋又露封書有り。菅禮卿に寄せ、予をして轉致せしむ。予已に老病を以て固辭す。使者□□始めて露封書を閲す。筮仕の事を詳述す。云云。因りて戯れに一詩を賦し、併せて其の書に附し、之れを禮卿に致す。其の詩に云ふ、「世を蒿萊に辟けて未だ閑に飽かざるに、幡然として青山に別れんと思欲す。猿鶴の舊儔侶に慚づるに堪へて、漫りに鸛鷺新隊班を逐ふ」と蓋し調諱なり。禮卿、果して以て信に然りと爲し、書を齎して亦た之を從臾す。予は迺ち

答ふるに其の實を以てし、又前韻に疊かさねて、以て本志を明かす。

阿州のお聘めいしが有つた。柴博士栗山、頼文学千秋、皆手紙を寄せて勸奨する。千秋には又露封書が有つた。菅禮卿に寄せ、私をして轉送させた。私は已に老病を以て固辭した。使者□□始露封書を読む。詳しく仕官の事を述べている。そこで戯れに一詩を賦し、併せて其の書に附け之を禮卿に送る。其の詩に云う。「世を草深いところに辟けて 未だ閑に飽きないのに、翻つて青山に別れようと思う。舊い仲間の猿や鶴への恥ずかしさに堪えて、漫りにまんらん鴝鷲まんとんの新しい列に加わろうとしている」と。蓋し調戲である。禮卿は、果して尤もなことと為し、書を下さつて之を勧めた。そこで私は即ち其の實際を答え、又、前韻に疊かさねて、本志を明かした。

〔轉致〕転送。〔笠仕〕吉凶を占つて官に仕えること。初めて仕官する意。〔鴝鷲〕朝廷に並ぶ百官の列。鴝も鷲も鳳凰の類で、飛ぶときに整然と列を作るところからいう。

量材量力自清閑 蚊背奚容令負山 材を量り力を量りて自ら清閑、蚊背奚んぞ容に山を負はしむべけんや。
誰謂高風不屑就 難將老病逐清班 誰か謂ふ高風就くを屑しとせずと、老病を將ち清班を逐ひ難し。

〔拙齋西山先生詩鈔〕下)

能力と力量を知つて 自ずから閑かな境遇にいる、私は微力で どうして重任に堪えることができようか。

誰が言うか 高尚な風格が 官職に就くことを 屑しとしないのだと、年老い病を持っているので 清く貴い官に従うことが難しいのだ。

〔清閑〕世の中のごたごたを離れた閑かな心境。〔蚊背…負山〕微力で重任に堪えない。〔高風〕高尚な風格。氣高い人柄。〔清班〕清貴の官。

茶山はこの詩文の上の欄外に次のような評を記している。

「先生樂易善謔、此見其故態」(先生の善謔を樂易するや、此に其の故態を見る)

「樂易」心に樂しむ。「謔」ふざけ。おどけ。「故態」もとからの有り様。

拙齋が阿波藩の要請を断つた理由を聞いて、茶山は次の詩を贈った。

西山先生辭阿波聘賦此奉贈 西山先生 阿波の聘を辭す 此を賦し贈り奉る

泰山鴻毛但隨遇 畏犧業已薄莊周 泰山 鴻毛 但だ遇ふに隨ひ、犧を畏るるは業已に莊周を薄んず。

蠖屈鷹揚唯視義 解瓢何必做許由 蠖屈 鷹揚は唯だ義を視るのみ、解瓢何ぞ必ずしも許由に做はんや。

況今夔龍會要津 遷喬宜乘太平春 況んや今 夔龍 要津に會す、遷喬宜しく太平の春に乗ずべし。

先生蒲柳年亦殘 只恐瞞仕陷素餐 先生は蒲柳年も亦殘す、只恐る瞞仕して素餐に陥るを。

苛辭大藩厚幣招 非是少室索價高 苛しくも辭す 大藩厚き幣招を、是れ少室の價高きを索むるに非ず。

名唄利藪事紛紛 世間幾人能知君 名唄 利藪 事紛紛たり、世間幾人か能く君を知らんや。

濁酒論心林館月 半池荷葉夕風薰 濁酒 心を論ず 林館の月、半池 荷葉夕風薰る。

〔黄葉夕陽村舍詩〕前編卷三

どんな役目でも仕事に軽重はない 出会つた仕事に隨う、犠牲を畏れることは 已に莊周をよくないとした。才能を懐いて隠棲するか 仕官をするか 義を視て決めればよい、瓢を解いて許由に真似ることがあるうか。まして今は夔龍の名臣が 政治の要のところにいる、鶯が幽谷から出るように 今出て行つてもよいときだ。先生は病身で年を取っているからと、只だ厚祿で仕官しても功績や才能がないことを心配される。

大きな藩の厚い幣招を厳しく辞退されたが、是れは俸祿の値を高く求めているのではない。

名譽や利益のことには無頓着だが、世間の人の何人がよく先生のことを理解しているだろうか。濁酒を飲み胸襟を語るうちに 折りから林の館を照らす月、池の半程からは蓮の葉の香が夕風に乗ってくる。

拙齋が阿波藩からの招聘を辞退したことに対する茶山の考えを、この詩を通して纏めてみると、「官の仕事に軽重はない。ただ出会った仕事に従えばいい。王の犠牲になることを恐れて招聘を断った莊周の話や、堯帝が召し抱えようとした時、「汚らわしいことを聞いた」と言つて潁川の水で耳を洗い、その招聘を辞退したと伝えられる許由の話は極端すぎる。その莊周や許由と同じようなことをする必要はない。才能を抱いたままで隠棲するか、出仕するかのどちらが人として道理に叶った生き方か、義を視てから決めればよいことだ。筋が通り、やり甲斐がある仕事だと思えば毛嫌ひする必要はない。ましてや今は、舜の二人の賢者、夔・龍にも喩えられる名臣が政治の要の所におられるとのこと、今は仕官をしてもやり甲斐があるのではないか。出仕してその手伝いをされてもよい。しかし、ご自分が病身で老衰していること、功績や才能がないのに厚禄仕官することを氣遣つて、藩の招聘を辞退された。先生は名譽や利益には無頓着な人だから、これは俸禄の価を高く求めていることではないと私にはよく分かつている。しかし、口さがない世間の人の何人が、先生の真意を本当によく理解しているであろうか。中にはとんでもない憶測をする連中がいるかも知れない。」という。

なお、それから二年のち、寛政四年（一七九二）拙齋五十八歳の十月廿五日、加賀藩は儒臣木下槌五郎（京都で拙齋と交遊有り）を遣いせしめて、拙齋を藩学長に任ぜんとしたが、拙齋は固辞して受けなかつた。木下の齋もたらした書には次のように認められていた。

甚だ以て恐入り候へども申上候。此度新に學校を建てられ候處、程朱の正義を専らに修め、學長に備へ申すべき諄儒之なく候故教育の道行届申さず、漸く志を立て候學徒も其志を挫き申すべきやと、學校中二三の執事も辛苦の様子に御座候。寡君求賢の志深く先生を大に慕はれ候故、私情に於てしやういふ敵邑の學流も振起いたしたく。若し仕を肯ぜずんば賓遊數年せよ。

とあつたが拙齋は辞退した。

2、茶山の福山藩仕官について

茶山は福山藩から再三出仕の要請を承けたが初めは断った。しかし、終には儒官に準ずる扱いを承け、俸禄も貰っている。その辺りの事情について年次順に考察してみる。

天明六年（一七八六）茶山三十九歳・拙齋五十二歳

茶山は二月二十三日、阿部正倫侯に召されて福山に行った。それは、七月に開設される弘道館の教授に任用しようという藩の意向が伝えられたものであったが、茶山は病弱を理由に断り次の詩を賦した。その時に詠んだ七言律詩「雨中同賞庭下海棠、分得韻侵 時有辟命」（雨中同に庭下の海棠を賞し、分かちて韻に侵を得たり 時に辟命有り）に茶山の思いが表されている。（第一章「菅茶山の行跡」第二節「郷里神辺の時期」3「藩との関わり」参照）

寛政五年（一七九三）茶山四十六歳・拙齋五十九歳

藩命により福山米屋町で月二回漢籍の講釈をする。気任せでいいからとの要請で承けている。いつまで続いたかは詳らかでない。

寛政七年（一七九五）茶山四十八歳・拙齋六十一歳

冬 御家人にとのお召しがあったが、病弱を理由に陳情表を出して断る。

このように茶山は病弱である事を理由に藩のお徴しを辞退した。

茶山が福山藩の要請を断ったことについて、拙齋は次のような詩を賦している。

寄贈菅禮御

川北川南旬日遊 穿紅鑽緑此淹留 川北川南旬日の遊、紅を穿ち緑を鑽り此に淹留す。

春郊載酒冠童伴 野寺枕流鷗鷺儔 春郊酒を載せ冠童伴ふ、野寺流れに枕す鷗鷺の儔。

白石清泉君自適 名崖利藪我何求 白石清泉君自ら適ふ、名崖利藪我何をか求めん。

百年同占升平樂 肯向廟廊分國憂 百年同じく占む升平の樂、肯て廟廊に向かひ國憂を分かつたんや。

禮卿 近有福山侯之徵、固辞不就、故篇末及之

神辺の川北村 川南村で十日も遊び、花を探り緑を求めてここに逗留する。

春の郊外に酒を携え 若者や子どもを連れて出かけ、野寺の側の流れに私と貴方は並んで枕する。

白い石清らかな泉 貴方は悠々自適の暮らし、名声や利益を私はどうして求めようか。

百年同じように占有してきた太平の樂しみを、敢えて政治に関わつて國憂を分かつことがあるうか。

禮卿 近ごろ福山侯の徵有るも、固辞して就かず、故に篇末之れに及ぶ

〔川北川南〕川北村、川南村。「名崖」限りない名譽。

弘道館の教授に任用しようという藩の要請を、茶山が断つたことを聞いて詠んだ拙齋の詩である。終わり二句は茶山が福山侯の招きを固辞したことに對する共感を述べたものであり、「名声や利益などを求める必要はない。

花を探り緑を求め、自然の中で悠々自適の暮らしを樂しむ、其れがあなたには適している。敢えて出仕して國憂を分かつことはない」というのである。

茶山は再三に亘る藩の要請を断っていたが、次第にお召しを承けるようになった。

寛政八年（一七九六）四十九歳

「郷塾取立に關する書簡」を藩に提出し受理され「黄葉夕陽村舎」を「廉塾」と改める。

享和元年（一八〇一）五十四歳

七月二十六日 「御儒者各弘道館出席大目付觸流同様無足之格令」の辞令を賜り、藩の儒官に準じられ弘道館に出講することとなる。

十二月十七日 「御紋付き御上下」を拝領する。

この頃から儒官に準ずる扱いを承け、藩命があればそれに従っている。

享和四年（一八〇四）（二月十一日 文化元年と改元）五十七歳

一月 八日 江戸出府を命ぜられる。（一月廿一日〜十一月五日）

文化二年（一八〇五）五十八歳

五月 六日 五人扶持を増俸され、（従来の五人扶持に増補され、十人扶持となる。）

府志（領内地誌）の編纂を命ぜられる。

文化六年（一八〇九）六十二歳

二月十三日 『福山志料』稿本を福山藩に献納する。

四月 五日 阿部氏福山藩入封百年の祝典に列席。賀詩を作る。

四月 七日 『福山志料』編纂の賞与として「着肩衣及び金十五兩」を賜る。

文化九年（一八一二）六十五歳

七月廿三日 阿部正精侯から勇鷹神社造作を命ぜられる。

文化十年（一八一三）六十六歳

十二月十五日 福山城に招かれ上下格を賜る。

文化十一年（一八一四）六十七歳

三月 藩主阿部正精より江戸出府の命を受ける。五月六日発く文化十二年三月末日帰郷。

六月 七日 藩主阿部正精に謁見し、『福山志料』の増補訂正を命ぜられる。この度の江戸出府期間中は主として『福山志料』の校合をする。

文化十二年（一八一五）六十八歳

二月 七日 藩主阿部正精から十人扶持加増される。

四月 二日 帰郷報告のため福山城に登城する。

十二月廿四日 福山藩から御紋付き麻袴・金五百疋を拝領する。

文化十四年（一八一七）七十歳

三月 一日 福山城に呼ばれ金を賜り七十歳を祝される。

文政六年（一八二三）七十六歳

九月 一日 福山藩から大目付格に命ぜられ三十人扶持を給される。

文政九年（一八二六）七十九歳

七月十三日 福山藩が阿部正精の訃報を知らせ、登城を命ずるが病気を理由に断る。

十二月廿二日 福山城に登城し阿部正寧まさやすに謁見し、酒食・大盃・筆・墨・箋・煙具など賜る。「十二月廿二日始

謁 公賜酒食及菓子諸文具等」と題し詩を賦す。〔黄葉夕陽村舎詩〕遺稿卷六）

文政十年（一八二七）八十歳

一月十一日 福山城に登城し、阿部正寧に謁見し御手熨斗を拝領する。お目通りは病気を理由に断る。「雨日

入城路上二首」と題して詩を賦す。〔黄葉夕陽村舎詩〕遺稿卷七）

二月 二日 八十歳の誕生日に福山藩士十一人が来訪し、八秩を祝う。福山藩主第六代阿部正寧まさやすから垢付羽織

まとめ

茶山が十九歳で京都遊学を志したのは、郷土に学問の種を残したいという一念からであった。三十三歳で遊学を終え、三十四歳で郷土神辺に塾を開設して着実にその志を適^なえ始めたが、自分亡き後も塾を健全に継続するためには藩の力が必要であると考えた。そこで四十九歳のとき塾「黄葉夕陽村舎」を郷塾として藩に取り立てて貰うべく申し出て認可され、呼称も「廉塾」と改めた。私塾を藩に移管したとはいっても、実質的には元の儘の建物を茶山が管轄して、一切を取り仕切ることも茶山に任された。天明六年（一七八六）三十九歳の時には、弘道館の教授に任用したいという藩の要請をことわり、寛政七年（一七九五）四十八歳の時には、御家人にとのお召しがあつたがこれも辞退しているが、私塾を藩の郷塾として移管してからは、藩とは強い絆が出来たわけである。茶山が五十歳代に入ってから、藩との繋がりが密になってゆく。このあたり西山拙齋と藩との関係とは全く異なる点である。拙齋が政治批判詩「述感篇」を詠んだのは、五十三歳から五十六歳にかけてであり、『休否録』が編まれたのは、寛政二年（一七九〇）、茶山四十三歳、拙齋五十六歳のときである。茶山もこの頃は頼山陽が「忌諱に触れん」と評したほど激しい政治批判の詩を詠んでいた。そういった詩は「版本」からは省かれている。こういう過激とも言われる茶山の政治批判詩は拙齋の影響大なるものがあると考えられる。寛政十年（一七九八）十一月五日（拙齋六十四歳・茶山五十一歳）に拙齋は歿するが、その頃から茶山の政治批判は農村詩の中に形を変えて詠まれるようになった。折しも茶山と藩との繋がりが密になった頃と重なる。藩との繋がりが濃くなってあからさまに藩政批判はできなくなった。しかし、明けても暮れても納税の為に汗水垂らして働く農民の姿を目

の当たりにしていると、同じ農家出身である身には、他人事ひとごととは思えない感情が湧き上がってくるのを抑えることはできなかつた。藩政に対する要望も自おのずから頭をもたげてくる。茶山のそういった思いは、農民の立場に立つて詠われた農村詩の中に詠み込まれていったのである。

第三節 茶山と頼山陽

頼山陽（一七八〇～一八三二）江戸時代後期の儒者。名は襄のぼる、字は子成しせい、通称は久太郎ひまたろう、山陽と号した。別号に三十六峰外史。安永九年（一七八〇）十二月二十七日、大坂に生まれる。父頼春水は安芸国竹原の出身であるが、当時は大坂江戸堀に家塾 青山社を開いていた。母は大坂の儒医 飯岡義齋いのかの娘 静子（梅颯と号す）で和歌や書に秀でた才媛である。天明元年（一七八一）十二月、父春水は広島藩の藩儒となり居を広島に移した。山陽は天明二年（一七八二）三歳の六月、父に遅れること半年にして母と叔父 杏坪に付き添われ広島に入った。天明三年（一七八三）父春水が「世子伴讀」として江戸詰を命じられた為、山陽は母に連れられて大坂に移り住む。天明五年（一七八五）五月、六歳の山陽は母と広島に移り住むこととなる。天明七年（一七八七）九月、癩癬発症。天明八年（一七八八）六月、茶山と初対面。寛政九年（一七九七）三月、十八歳になった山陽は、叔父 杏坪に伴われて江戸に遊学するが、翌年の寛政十年（一七九八）五月初旬には帰郷する。この遊学の往復とも神辺に茶山を訪ねている。寛政十一年（一七九九）二月二十二日、藩医、御園道英の娘、淳子と結婚。山陽は二十歳。寛政十二年九月五日脱藩するが、二十八日に京都の福井邸で発見され、十一月三日、広島に連れ戻され幽閉生活に入

る。享和元年（一八〇一）二月十六日、妻淳子を離縁する。二十日に淳子は山陽の嫡男（聿庵）を出産するが、聿庵は頼家に引き取られる。享和三年（一八〇三）十月山陽は廢嫡され、十二月に幽閉を解かれる。文化二年（一八〇五・二十六歳）五月には門外自由の身となったので、八月に父春水や叔父頼杏坪他身内の者が連れ立って竹原に先祖の墓参をした。ここで茶山と三度目の出会いをし、茶山の厚情にこころが慰められる。以後、山陽は茶山にしばしば書簡を送り心の思いを訴える。それに対して茶山から励ましや慰めの言葉を貰ううちに、茶山を慕う気持ちが強くなつていった。茶山の要請もあつて文化六年（一八〇九）十二月二十九日、都講として廉塾に招かれる。しかし、僅か一年余りで廉塾を去つて京都で開塾する。文政十年（一八二七）五月、心血を注いで作上げた『日本外史』を松平定信に献上。『日本外史』は、やがて広く天下に流布し、特に若者の精神を鼓舞した。生涯を著述・旅・趣味に生きたが、結核を病み天保三年（一八三二）九月二十三日、五十三歳の生涯を閉じた。

一、初対面から上京まで 天明八年（一七八八）～文化八年（一八一二）

1、初対面と再会

(1) 初対面

茶山が山陽に初めて出会つたのは天明八年（一七八八）六月十日、茶山四十一歳、山陽九歳の時である。この年五月初旬、頼春水は江戸からの帰り、茶山を訪ねて神辺に立ち寄り一泊している。茶山はその時、六月には宮島の管弦祭を見に来るようにとの誘いを受けていたらしい。茶山は六月五日に弟子の藤井暮庵を伴つて、福山・尾道・西条・海田を経て、安芸国の旅（『遊藝日記』の旅）をしながら、十日の午前中に広島に入り頼春水を研屋

町の藩邸に訪ねた。春水は藩の学問所に出かけていて生憎留守で、弟の頼杏坪と息子の久太郎（後の山陽）に迎えられた。その時のことを『遊藝日記』に次のように記している。

十日 陰、午前至廣島。訪頼氏于礎工街（研屋町）。千秋（春水）不在、千祺（杏坪）及久太郎（山陽）出迎。

須臾千秋至自領宮。晚雨。

春水が帰って来て欵談一頻りの後、茶山と春水は韻字を分かち各々七律を一首ずつ作った。茶山の詩は次の通り。

廣島訪頼千秋分得螢字 廣島に頼千秋を訪ね分ちて螢字を得たり

離居屈手幾秋螢 夜雨西窓酒滿餅 離居手を屈すれば幾秋螢ぞ、夜雨西窓酒は餅に滿つ。

十載趨朝頭未白 學家迎客眼俱青 十載朝に趨くも頭未だ白からず、家を擧げて客を迎へ眼俱青し。

雲低隣屋木陰邃 石倚勾欄苦氣聲 雲は隣屋に低れ木陰邃く、石は勾欄に倚りて苦氣聲し。

喜見符郎耽紙筆 童儀不倦侍書櫺 喜び見る符郎の紙筆に耽り、童は儀にして倦まず書櫺に侍するを。

〔黄葉夕陽村舍詩〕前編卷三

お別れしてから何年になるでしょうか、夜の雨は西の窓を打ち酒は瓶に満ちている。

廣島藩に仕えて十年になられますが頭はまだ白くない、一家を擧げて欵迎してくださった。

雲は隣の屋根にまで垂れて木陰は深々としている、石は手すりに近く昔の香が漂って来る。

山陽が紙筆を持ち行儀正しく書窓に倚って、一生懸命に何か書いているのを好もしく思いました。

春水と久しぶりに会った感慨等を述べた後、目に止まった山陽の様子を「山陽が紙筆を持ち行儀正しく、書窓に倚って懸命に何か書いているのを好もしく思った」との感想を抱いた。十二日も茶山は春水宅に逗留したが、山陽について抱いた感銘をこの日の日記に次のように認めている。

十二日、午晴、晚復雨、皆宿頼氏。久太郎甫九歳、秀發不好戲弄。喜客侍坐、終日不倦。學詩及書畫、皆可觀。

十二日、午晴、晩復た雨、皆頼氏に宿す。久太郎甫めて九歳、秀發にして戲弄を好まず。客を喜びて侍坐し、終日倦まず。詩及び書畫を學び、皆觀るべし。

茶山は初対面の山陽に対して「喜見符郎耽紙筆、童儀不倦侍書檣」と詠じ、行儀がよく英氣が発散していて、子どもらしい遊びを好まず、父親の客を喜び、大人の側にいても一日中退屈せず、詩や書畫を學んでいる。なかなか見所のある子どもだという印象を抱いたようだ。

(2) 再会・山陽の江戸遊学

杏坪は春水に代わって江戸にいる藩公の世嗣、浅野齊賢なかにたの侍読となるためと、十八歳の山陽を遊学させるために、寛政九年（一七九七）三月十二日、山陽を伴って広島を発ち、途中十七日に神辺に寄り茶山を訪ねた。山陽が黄葉夕陽村舎を訪ねたのはこれが初めてである。山陽は江戸到着後、直ちに尾藤三洲の教えを受けたが、一年後には早くも帰郷することになる。寛政十年（一七九八）四月四日、一年余りの江戸での生活を切り上げて叔父の杏坪と共に帰広の途についた。その帰途、五月初め再度神辺に立ち寄った。その時茶山は次の詩を賦している。

頼久太郎寓尾藤博士塾二年、歸路過艸堂、因賦此爲贈

頼久太郎 尾藤博士塾に寓すること二年、歸路艸堂に過ぎる、因りて此れを賦して爲に贈る

千里遊方何所成 談經二歳侍陽城 千里遊方 何の成す所ぞ、經を談じて二歳 陽城に侍す。

歸來有獻尊親物 不獨奚囊珠玉盈 歸り來りて 尊親に獻する物 有りや、獨たに 奚囊に 珠玉たまの盈みつるのみならずや

〔黄葉夕陽村舎詩〕前編卷五

遙々千里の遠くへ遊学して何を成して来たか、經学を學んで二年 陽城（尾藤三洲）に侍したが。

歸って来て二河親に差し上げる物がありますか、ただ詩の囊だけが一杯になっただけではないだろうね。

遠く江戸に遊学して、昌平覺に学びながら僅か一年で帰広するのは早すぎると思つたのであろう。少々揶揄的な内容である。山陽が早々に江戸遊学を引き上げた事情は詳らかでないが、帰郷後の『春水日記』・『梅隠日記』に屢々持病（天明七年九月・八歳の時発症）の「痼症」の記述があるところから、江戸に於てもこの病に悩まされていたのではなからうか。

2、山陽脱藩に際しての搜索

寛政十二年（一八〇〇）九月二日、安芸国竹原の大叔父伝五郎死去。父春水は江戸詰め留守であつた為、山陽が父の名代として弔間に行くこととなり、九月五日六ツ半（午前七時）、供の太助を連れて出立した。しかし、途中太助を撒いて行方を眩まし脱走してしまつた。山陽が行く先は、三都（江戸・京都・大坂）であろうと考えられ、当時その街道筋の宿場にも当つていた神辺を通るであろうかと、茶山の方にも搜索を依頼した。茶山の日記（富士川英郎『菅茶山』上引用）に次のような記事がある。

九月十二日 雨。石井儀右衛門、小頼しなに跟まひて来る。

「石井儀右衛門」豊洲と号す。寛政四年、春水の門弟となる。山陽より四歳年長。頼家とは緊密な関係にあつた。「小頼」山陽。「跟」後を追う。

十三日 雨。廣人二人、千齡の書を持ちて来る。亦た小頼を物色する也。叔父の杏坪が、九月二十三日付けで大坂の中井竹山と若槻幾齋に宛てた書簡には、次のように認められている。

先達て、追手の者二組差上せ候様に申上候所、一組は菅太仲（茶山）指揮にて、海邊（山陽道）より讃州處々探索、此間歸着仕り候。

二十五日 廣人四人來る。

二十六日 陰。頼千齡の使人來る。夜、君推、定吉を招きて議し、定吉を遣はして、作州へ適かしむ。

十月 三日 陰。石井儀右衛門、頼仲叔の書を持ちて、遂に岡山へ之く。

(山陽が、京都の福井新九郎方に身を寄せていたことを知らせる手紙が、十月四日に梅颯の許に届いた) 「福井新九郎」寛政十一年三月二十五日、春水の塾に入塾。七月六日帰京。

五日 晴。獲捕の四人、大坂より書面致し、亡人(山陽)の京に在るを告ぐ。使人竹原へ之く。

六日 陰。石井(儀右衛門)、岡山より至り、遂に宿す。

七日 晴。(石井)既に去り、復た、瀬山、伊助と來り、遂に同に京師へ之く。役金十二枚貸す。千齡の書

を得る。瀬山二人去りし後、竹原の使、來り還る。

二十一日 晴。石井、手島の書、斑鳩驛より至る。久郎(山陽)の遁去を告ぐ。鐵平をして吉和へ之きて、其の

事を告げしむ。

二十九日 陰。頼久太郎京師より至る。一行十名。米清家(神辺の宿屋)に宿る。二里正(藤井暮庵と部落長)

及び余、往きて之を護衛す。夜雨。

十一月三日 山陽は迎えに行つた一行と広島島の春水邸に帰り、十月二十三日頃から準備されていた座敷牢に入れられ、脱藩騒動は一先ず落着した。事件落着後、春水が菅野眞齋(山陽より七歳年長、享和二年入京)に宛てた書簡の中に「今度など、京、金山(重左衛門)粉骨之計ひ、神邊禮卿(茶山)など之深情は、皆々拙者が為メ二計ひたまはり候事は、實感荷之事共に御座候」(「頼山陽全書」上巻)と認められている。

以上のことから、山陽の脱藩騒動に関して茶山の尽力大なるものがあつたことを知ることができる。

こうして、山陽は寛政十二年十一月三日（二十一歳）から享和三年十二月七日（二十四歳）までの満三年間、幽閉生活を送ることとなった。（寛政は十二年十二月を以て終わり、翌年は享和と改元された）山陽はこの三年の間に多くの書物を読み、多くの文章を書いた。山陽の名を高からしめることとなった『日本外史』の初稿もこの間にほとんど出来上がった。

3、山陽を廉塾に招くまで

（1）山陽の謹慎解ける

文化二年（一八〇五）五月九日、山陽は謹慎を解かれ、自由に外出できる身となった。（『頼山陽全書』全傳上巻）尤も芸藩の外へは出られず、藩内でも在所での一人歩きは禁止されていた。八月二十六日、春水は山陽三年間の幽閉生活の保養と、景讓（春水の弟、春風の息子）の継嗣を先祖の墓前に報告する目的で竹原に赴いた。茶山も招かれて九月十八日、西山拙齋の次男孝恂を伴って頼家の菩提寺、照蓮寺に一泊する。この日のことを記した山陽の文が『頼山陽全書』文集巻三に「龍頭山序」と題して収められている。

「龍頭山」照蓮寺。

備後菅先生及其弟信卿（恥庵）、與我家翁・諸父、結交有年於此。往歲、先生訪家翁・家叔父於廣島、訪家仲父於竹原。爾後家翁・家叔父、數役于東、途過先生。未嘗不飽會晤也。家仲父則延領東望焉耳。去年先生以事東游、會重陽、問家叔父霞關邸舍。罄歡終日云。家翁・家仲父。歆羨不已。以書勸先生西游。今茲乙丑九月、余奉家翁、展墓于竹原。則先生瓢乎來會也。於是卜日、集于邑之龍山。山富仙石、雅趣橫生。先生顧於其庭曰、吾之始（天明八年）游此也、距今十有八年矣。其樹木視諸昔、益蕃矣。予因是思之、自今以後十餘年、復繼斯游、其蕃者、將何如哉。菅・頼二家之聚處、未有若今日之會焉。獨恨家叔父不與焉。以尋去秋之游也。至若信

卿、則下世於六七年前（寛政十二年）矣。人之聚散死生、蓋不若草木之蕃邪。則今日之會、宜罄歡極娛。未可期十餘年之後也。是予所以作此序、以勸諸長詞賦云。

備後の菅先生及び其の弟信卿（恥庵）、我が家翁・諸父と、交わりを結ぶこと此に年有り。往歳、先生は家翁・家叔父を廣島に訪ひ、家仲父を竹原に訪ふ。爾後家翁・家叔父、數ば東に役せられ、途に先生に過ぎる。未だ嘗て會晤に飽きざるなきなり。家仲父、則ち領を延ばして東望するのみ。去年、先生、事を以て東遊し、重陽に會ひ、家叔父を霞關の邸舎に問ふ。歡を罄して日を終はると云ふ。家翁・家仲父、歎羨して已まず。書を以て先生に西游を勸む。今茲に乙丑九月、余、家翁を奉じて、竹原に展墓す。則ち先生、飄乎として來會するなり。是に於て日を卜し、邑の龍山に集ふ。山は泉石に富み、雅趣、横生す。先生、其の庭を顧みて曰く、「吾の始めて（天明八年）此に遊ぶや、今を距つること十有八年なり。其の樹木、諸を昔と視ぶれば、益す蕃れり。」と。予、是に因りて之を思ふ、今自り以後十餘年、復た斯の游を繼がば、其の蕃れる者、將たまた何如ぞ。昔・頼二家の聚まる處、未だ今日の會の若きは有らず。獨だ家叔父の焉に與らざるを恨む。以て去秋の游を尋ぬるに、信卿の若きに至りては、則ち六七年前（寛政十二年）に下世するなり。人の聚散死生は、蓋し草木の蕃るに若かざるか。則ち今日の會、宜しく歡を罄して娛しみを極むべし。未だ十餘年の後を期すべからざる也。是に予、此の序を作し、以て諸の長詞賦を勸むる所以を云ふ。

「會晤」會う。「歎羨」非常に羨ましがる。「乙丑」文政二年。「横生」やたらに發生する。「下世」死ぬ。この出会いから後、山陽は茶山に宛てて屢々書簡を送った。文化二年十二月十三日付けの書簡は次のような内容であった。

先月念一（廿一日）之尊書、此節相達、拜披敬讀、茲、審德履萬福、大降鄙心候。如諭、竹原拜眉之大幸、夢寐難忘、家翁と毎時申出、以天樂之資と仕候。：其節も願置候而、其後も申上候とおり、小子江何ぞ御大作御

結構、御惠可給候様、精々奉希候。時々披玩、排悶自遣、猶觀光霽と存候而、又誇人之寶と仕申度存候。

〔萬福〕 数え切れないほどの幸せ。〔天樂〕 天道を樂しむ。

竹原での茶山との出会いは山陽にとつて「夢寐にも忘れ難い」ことであつた。その時、山陽は茶山に「詩の大作を頂ければ時々披玩して鬱々とした思いを晴らしたいと思ふ」と云い、「人に誇る宝としたい」とも述べている。

小子事、傲骨摧殘、非復昔時襄侯へ共、其所志不必下恒人。唯々前時客氣所使、立身一敗、百事瓦裂、名迹湮埋、悲歎窮徑仕候而、詬罵所萃、殆無完膚候へば、得先生月旦、解脱此軀仕候のみならず、所謂青萍結緑、倍價薛下候義、偏奉希候。

〔摧殘〕 砕け損なう。〔湮埋〕 憂いのために気が塞がる。〔詬罵〕 そしり罵る。〔月旦〕 批評。後漢の許劭が從兄の靖と毎月の初め、郷里の人物を評し合つた故事。月旦評。〔後漢書〕許劭傳「青萍結緑」「青萍」は良劍の名。「結緑」は美玉の名。李白の「與韓荊州書」に「青萍結緑、長價於薛下之門」とある。薛燭は春秋・越の人で刀劍を鑑定し、卞和は周・楚の人で宝玉を発見し楚王に献じた人。〔蒙求〕の標題「卞和泣玉」

「自分は驕り高ぶつて人に頭を下げたくない氣骨を持つていたが、それも砕けて昔の襄ではないけれども、志すところは普通の人に下らない。ただ以前は若氣の至りから、立身も破れ諸々のこともばらばらに砕け、受け継ぐことになつていた家名も嗣がないことになり、途に窮して悲嘆にくれている。諸人の罵声で完膚ないほどだが、この上は先生の批評を得ることによつてこの身を解脱したい。それだけでなく、薛燭や、卞和のような鑑識眼のある先生に、自分の「青萍結緑」（良劍と美玉のこと。自分の作を譬えた）を認められたい」と訴えている。

山陽は、青萍（良劍）が薛燭に結緑（美玉）が卞和によつて見出され、値打ちが上がつたように茶山によつて自分の才能が見出されることに望みを繋いでいるのである。

保養第一之尊敬、扱々冗人を不被弃、眷愛之意、身に餘、難有奉存候。此節少眼宜ヤと申様に御座候へば、又

々耽校讀、著作にかゝり候へ共、度々休、不長休之尊教存出、優游工夫仕居申候。菟角、心氣短促、自損精神候事多く、是に而長壽成業無覺束奉存候。併、竹原行以來、家翁復常之狀を目覩、小小心胸爲之爽快、氣色取直候。是と申も、先生春風（恩情）被我父子、淪肌、淪髓仕候事と感戴仕候。先生御病身之事共被仰下、病雖若先生、而壽得若先生、成名得若先生、則於小子、志願足申候。

「元人」役に立たない者。無用な人。「眷愛」目をかける。

「眼の方が少し良いと校読に耽つたり、著作にかゝりきりになるであろうが、少しやつては少し休むという風に氣ままにゆつくりするように。兎に角保養を第一にせよとの仰せは、親身も及ばぬ身に余るご厚情、有り難く存じます。先生も病身である事など伺い、病は先生のようにであっても、寿も名を成すことも先生のようにであれば、私の志願も足りると云うものです」（『頼山陽書簡集』上巻第一編）といったような書簡を何度か茶山に宛てて送っている。

（2）春水の頼み

文化元年（一八〇四）七月、山陽廢嫡（文化元年三月）直後、春水は茶山に宛てて頼みの書簡を出した。

…何卒貴地か鴨方辺共（京大坂に候へば更妙）にて、養子に遣候所は有之間敷候哉。左候はば他國へ養子に遣度と申候て、此地を引払ひ可申候、後は済み可申候、屹度養子の先の有之にても無之、ただ可也に住居相成候て、朝夕烟を立てる事も出来候はば其土地に暫時宅をかまへ候迄の計にてもよく候。…何分去年婚事にて物入いたし、其上かかかる物入事にも可及と痛心御察可被下候。老兄の厄多きも、老拙が家眷のために及老境、かかる不快の事ふんじよ盆集仕候事、御憐察可被下候。『盆集』多くの人が一時に集まり合う。

内容は「神辺か鴨方の方に山陽を養子として遣わすような所はあるまいか。京大坂なら尚更結構だが。養子先で

あつても、そうでなくても、何とか生活していけるような所であれば、その地に暫く宅を構える迄の計でいいのだが」というのである。

文化六年（一八〇九）二月頃から、山陽廃嫡後、頼家の養子となつた従弟の景讓を連れて、山陽の遊蕩が始まる。二月下旬頃から十一月中旬頃までの『春水日記』・『梅颯日記』には、その頃の山陽の行状が綴られている。春水はこの頃の山陽の遊蕩を愛い、次のような書簡を茶山に送つた。

…是無它、大豚（山陽）事に候。治情と狂態と益甚、又々及敗露可申かと心痛仕候段、御憐察可被下候。小豚（景讓）を誘ひ、游治等之事、全然浪華町家少年輩之情態に候へば、結局如何可有之候や、苦心御察可被下候。別居候事も申居候。

「山陽の近頃の様子には、女遊びと正気ではない状態が益々甚だしくなり、又しても世間に知れ渡るのではないかと心を痛めている。後継者に据えた景讓まで遊蕩に連れ出す始末で、これでは別居も考えてみようかと思つている」と云う内容である。

山陽に見れば、廃嫡され芸藩の外へは出られず、藩内でも在所での一人歩きは禁止されているという拘束の中で、無聊をかこち心中には鬱憤が渦巻いていたのである。その鬱憤を晴らす方法が遊蕩だったのであろう。それは頼家にとっては又々新たな心痛の種であつた。

茶山は九月十六日付けで次のような書簡を春水に認めた。それは文化元年七月（山陽廃嫡直後）、春水が茶山宛に頼みの書簡を出したのに対する正式な返書とも言えるものである。それが春水の手元に届いたのは九月十八日であつた。

一筆致啓上候。時節新冷肌侵、彌玉集御清祥被成御座候半と承度存候。然ば久太郎殿部屋住と申體にて御座候、不苦御座候はば私方へ申請申度存候。私も御案内の老境、間塾附屬いたして人無之木鞠申候に付存寄候事に御

座候。可相成事に御座候はば御相談被成被下（度）候、御返答次第にて可然人にても指上可申候、先任御聽合書中如此御座候。此方間塾もいまだ半經營に候へば學力有之人に無之候ては取續出來がたく候間、偏所希に御座候。尚近々可申上候。恐惶謹言。

〔頼山陽全書〕全傳上卷）

「私も御案内の老境」とあるが茶山はこの時六十二歳。「間塾附屬いたして人無之木鞠申候」の「間塾」は茶山の經營していた「廉塾」である。茶山には子どもがいない。弟が二人いたが、次弟の汝梗は天明元年三十歳で歿し、末弟の恥庵は寛政十二年、三十三歳で歿している。汝梗の子、長作を養子にしていたが、当時、病弱で二年來病床にあつた。（文化八年、三十九歳で歿す）というような事情で、廉塾の後継者問題は茶山にとつて悩みの種であつた。だから、山陽を部屋住みという体裁で申し受けたく思うと云う内容である。この書簡を受け取つた春水は、築山捧盈に相談をして茶山に次の返書を送つた。（文化六年十月十九日付）

：親迎の事被仰下、是は君か父か命じ不申候ては、つまらぬもの、今の通りにて頭陀袋ものなり。士人には飽申候など申、放言か、妄語か（に）有之候など被仰下候事、此元にては、疾首此事に候へ共、此儀は、かの者へ申遣候。其譯は、此地に築山嘉平といふ人有之、用人職にして、磊落也。：渠を殊の外、所謂ヒイキにいたし、此上にもと精力を盡し、周旋申候。尊家へ罷越候様に相成候も、此人の蔭にて候。〔疾首〕頭を痛める。

〔頼山陽全書〕全傳上卷）

「茶山翁自ら山陽を廉塾へ招いて下さつたが、これは藩主の浅野侯か、父親の自分が命令しなければ駄目であろう。今日の儘では、山陽は乞食（頭陀袋もの）同然になつてしまつたろう。（この頃では）武士であることが嫌になつたと申し、無責任な投げやりな言葉や、口から出任せな言葉を吐くようになった。頭の痛むことだ。幸い築山嘉平という人がいて、この人は芸藩の用人職で、志が大きく小さな事に拘らない人であり、山陽を特に愛顧してくれている。この度も築山捧盈の周旋のお陰で廉塾へ送ることに決定することができた」ということである。

築山嘉平（捧盈）は藝藩の用人職で、山陽には特別に目を掛け、山陽も師父のように敬慕していた。神辺行きについて、春水は捧盈に相談をしていたようで、『春水日記』にそのことが認められている。九月二十一日「夜分、（山陽の身上に付）築山内談及三更」。九月二十七日「築山殿、来話密々」。十月十八日「夕方、築山殿へ行、及夜」。

十月二十一日「築山殿へ行、内々談」等。

こうして春水の頼みは聞き届けられた。春水は早速十月中に藩の当局に宛てて、山陽を廉塾の都講として出したいと言う旨の内願書を提出し、十二月二十一日付けで聴許の達しを受けた。（『頼山陽全書』全傳上巻）

藝藩当局から許可が降りた翌日、春水は茶山に宛てて、九月十六日付け茶山の書簡に対する正式な返書を送った。それは次の通り。

…然ば：相談一決仕、彌任御來意申度存候、いまだ少年之儀、御家法相守候義、無覺束侯得共、素より遊學旁差上申候間、いか様にも無御用捨御鞭策被成下、御教育の程、厚奉頼候、右貴意如此御座候、恐言。

「然るべき方面に相談致し、御申し越しの意に沿うべく一決致しました。まだ少年の儀、ご家法を守るか否か覚束ない思いではありますが、遊學旁々差し上げますので、ご容赦なくご鞭策ご教育下さるようお願い上げます。」と言った内容であった。

(3) 山陽 神辺に赴く

(1) 迎えの使い広島へ行く

『茶山日記』

十二月二十三日 陰、寒。昌平をして広島へ之きて、久太郎を迎えしむ。

〔昌平〕茶山の門人と思われる。

『梅颯日記』

十二月二十四日 神邊（山陽）迎の人、門人一人・僕一人來。晝過。

『春水日記』

十二月二十五日 晴、午後、神邊迎之人參。

「神邊迎之人」が山陽を迎えに行ったのは二十四日から二十五日かということであるが、迎えの人が昼過ぎに到着したことから考えて、当時の交通事情では『春水日記』の二十五日の方が正しいであろう。

(2) 山陽 廉塾へ

文化六年十二月二十七日、この日は山陽三十歳の誕生日であった。

『春水日記』には

十二月二十七日 雪。早朝出立

『梅颯日記』には

十二月二十七日 雪。久太郎、早朝出立。清助・惣三、岩鼻迄送。都具・兵藏ゑんかう（猿猴）橋迄。

と山陽出發時の様子が認められている。

山陽が廉塾に行くに当たって、春水は出迎えの使者に次のような茶山宛ての書簡を託した。

：然ば此度久太郎儀、御引取可被下と、御迎御兩人、遠方御越、御丁寧御紙表等、感刻之至奉存候。且御内上様始、皆様御加筆、辱奉存候。愚妻も右御至懇之義共、可然申上くれ候様申出候。爲御肴料、金貳百足被送下、幾久敷相納仕候。御殷勤御義、痛入奉存候。久太郎義、御迎人相托、明廿七日發足差上申候間、乍此上御教育之程奉希候。

（『頼山陽全書』全傳上巻）

この書簡によつて、山陽を迎える為に茶山は、結納に相当する「御紙表」のようなものを認め、「御肴料」として「金貳百疋」を納めるという心遣いをしていることが分かる。

更に春水は廉塾で生活をするに当たつて、六箇条の心得書を山陽に授けた。それは次の通り。

廉塾へ罷越候ては、

- 一、先生家法、大切に守り、先生存意、毛頭背き申間敷候義は勿論、諸事瑣細の事たりとも、相伺取計候事。
- 一、先生家學精勵いたし、諸學徒熟和、厚く一同に課業無怠候事。人材を賊ひ不申様にと、常に心置可然候。
- 一、近邊其外附合、謙遜を主とし、別て福山御家中、失禮無之様可致候事。出入之男女共、率爾之事無之様可致候事。

一、飲食衣服、自己内分の取計有之間敷、たとひ薬餌たりとも、同様の事。錢穀の出入自分雜費共、皆々差圖を受、取計候事。

一、朝暮行事・起伏之時刻等、自己之便利にて、自由ケ間敷く義、不可有之候事。

一、近所の出歸共、度々相伺候事。此地は勿論、諸方共書通ハ、度々是又相伺候事。

右六ヶ條申渡候間、尚先生教示遵奉可有之候。勉之。文化六年己巳十二月。

〔頼山陽全書〕全傳上卷)

4、山陽の廉塾生活

山陽は文化六年(一八〇九)閏十二月二十九日、(閏で大晦日)神辺に到着した。(茶山六十三歳、山陽三十一歳)文化七年(一八一〇)の茶山と山陽に関する記事を『日譜』(『頼山陽全書』全傳上卷)や『年表』から拾う。

正月 十日 康塾新年の開講式。山陽都講として『論語』の講席を擔當す。

正月十一日 讃岐の高島信藏宛に茶山は次の書簡を認めている。

雲翰忝拜見仕候。如來命甫歳之御吉兆千里同風目出度申納候。貴家御安泰被成御越年候由、重疊目出度奉存候。

先以御返事旁如此御座候。尚期永陽之時候、恐惶謹言

正月十一日

菅太中晉帥

高島信藏様

ここまでは、年賀の挨拶で山陽の代筆である。茶山は自筆で次の追記を認めている。

乍次申上候、頼久太郎事、康塾後任職と申様の物に相たのみ、年内引越、開講の日も相勤させ候、私同様思

召可被下候、心は養子に候へ共、姓もものとのごとく、衣紋も頼家の着により候事に御座候。

草薙金四郎氏は『備後史談』第十四卷第十二號に於て、

『頼山陽全書』全傳中卷に二、三辭句を變へて引用せられ、「宛名不明の書翰」としてゐるが、確かに前記年賀状の追記である事は斷然明瞭である。山陽は前年の文化六年の十二月廿九日茶山塾に都講として來り、

三十人余の塾生を指導してゐたのである」と述べている。

この手紙の冒頭の余白には、「尚今來少々不快に御座候而、御返事本文代筆を以申上候。御次も御座候はば皆様へ宜御斷奉願上候」と認められている。

後に茶山は、山陽の文章力について伊澤蘭軒に与えた書簡の中で、「…文章は無雙也…」と認めている。山陽の文章の巧さに一目置いていた茶山だから、安心して代筆をたのんだものと考えられる。

〔高島信藏〕後の牧東渚。字は百毅、通称は信藏、東渚と号す。文化三年十一月中旬から黄葉夕陽村舎に寄寓していた。山陽がいなくなつた後を都講として頼みたいと茶山が囑望した人である。

正月十五日 茶山と山陽は菅波氏本分家、及び藤井暮庵・桑田徳太郎（備後山南村の人）・庄屋江原與兵衛（茶山の親族）、その他へ年賀。

正月十八日 日課初め。十日に続いて『論語』の講義。

正月 某日 茶山と共に塾生館林萬里の豊後隈町に歸省するを送り、丁谷梅林にて別る。

「館林萬里」豊後国日田の人。名は廷秀、字は萬里。廣瀬淡窓の遠縁に当たり、淡窓に句読を受け、博多の龜井塾で学び、のちに芸州に遊び、惠美三百に医術を学ぶ。

二月廿八日 茶山は山陽と塾生の佐谷惠甫（筑前秋月藩の藩医箕浦東伯の子）を同伴、千田市村の諸家歴訪。

三月廿八日 茶山は山陽、惠甫を同伴、松風館（兒島家）に招かれ西山復軒（西山拙齋の子）等と同席。

四月十三日 茶山と共に福山藩老職内藤景堅（角右衛門―東門大夫）邸「凝翠軒」の詩會に招かれる。

山陽はこの日の人々の自分に対する扱いに不満を感じ、七月二十六日付け築山捧盈に宛て書簡で次のように認めている。

…扱又、私義福山家老の方へ詩會に罷越候節、客方のあしらひと存居申候處、菅太中養子と申様のあしらひにて、呼葉に致申候。是さへ口惜存居申候處、役人の方にては、私に本姓を捨、菅氏を名乗せ申様の積に相聞え申候。全體、學統相續と申て、寺の後住のものを申事故、可然義と存居申候處、右之通にては、一儒者の身に大に恥と仕候事、父に對し申譯無之候。

「自分は当然客人として扱われるものと思つていたが、まるで茶山の養子のようにあしらわれ、名前も呼び捨てにされ憤慨した」と云うのである。

四月十四日 茶山と共に「舒嘯園」に招かれ『中庸』を講ず。即夜歸塾。

四月十七日 楊井順次來塾、濱焼の鯛を茶山に贈り、山陽の都講となりしを賀す。

廉塾に来てから四か月、山陽はここでの生活に倦怠を感じ始めていたことが、叔父頼春風に宛てた書簡で伺える。それは次の通り。

襄事不相替落々消光陰居候。生徒日滋候へども、皆々鹽踏連中に而、實之書生は無之事御座候。さりながら、隨分力を入、追々俊髦景附候様支度存居申候。

〔俊髦〕才徳が衆に優れている。

「私は志を得ない日々を送っている。皆塩踏み連中で実の書生はいない有り様。しかし、力を入れて追々才徳優れた人物に育て上げたいと思っている。」という内容であった。

四月十九日 春水より魚菜を送られ、一同會飲。

四月廿二日 石井豊洲へ一書を發す。

「さきに（十三日）福山の國老東門大夫といふもの、茶翁および僕を招飲す、待遇極めて倨れり。僕のこと、（廉塾）に來りしは、（仕官の身として）かゝる事を避けんが爲のみ、而もまた之等の事あり。人生到る處、意の如くならざること多し。これを浮雲に附せんのみ」

〔頼山陽全書〕全傳上卷

〔石井豊洲〕（二七七六〜一八六二）安芸竹原の人。名は威臣、字は儀卿、通称は儀右衛門、豊洲と号した。春水の弟子。三原蕃士。頼家とは緊密な關係にあつた。

四月廿八日 小竹へ手紙——『史記』の買入れを頼む事・茶山の三島七十壽詞（文化三年の作）は、今尚未達との來書に茶山も驚き、早速發送すべく、同時に館林藩（後、濱田藩）大坂藏屋敷留守居奥村幸右衛門（名就道）六十壽詞も後便に附すべしとの事。

手紙には又、

此節、樹色麥氣、悉皆非平生所慣視。加之螢火亂飛、遠近山巒樹竹、爲其所燭、毫髮可悉、是差快耳目耳。（神邊に来て見ると広島とは事變り、螢を眺めてゐる外には、何の楽しみもなかつた）と認めている。

「毫髪」毛筋。ごく僅か。「小竹」篠崎小竹。篠崎三島の養子で、茶山の『花月吟』の序文を書いている。山陽とは終生の友として親交を持ち、山陽の力になった。「三島」篠崎三島。(一七三七〜一八一三)大坂の人。儒者。名は應道、字は安道、通称は長兵衛、三島と号した。茶山は安永九年(一七八〇)最後の京都遊学となった第六回の上洛の四月廿九日、丹後の小西伯照を訪ね、そこで初対面して親交を結ぶようになった。

四月三十日 平野に遊び、螢狩。

四月 某日 北林より來書。

「足下の才高うして年の壯なる、志氣未だ定まらずして、或は丘園の閑寂を厭ひ、村學の陋に堪へず。逸志また生じて、舊癖且動き、名都輕俊の輩と、鹿を文圍ぶんゐに逐ふを思はんことを恐る」

彼は、山陽が廉塾に腰を据えて、じっとしていることを忠告した。

「北林」武元君立(一七七〇〜一八二〇)備前国和氣郡北方の人。字は君立、通称立平、北林と号した。二十二歳のとき林祭酒の門に入り、のち備前藩の儒臣となり、閑谷齋の教授となる。武元登登庵の弟。

五月三十日 春水・春風より、山陽の身上に就き、茶山宛の手紙達す。

六月 九日 暮庵を訪ひ、『禮記』聴講。

六月十五日 茶山と共に千田村に遊ぶ。雷雨に會ひ、茶山先だちて歸る。

この日のことを茶山は日記に次のように記している。

「十五日、陰、風。子成と千田へ之く。大雨遙雷。和泉屋堪左エ門なる者の江戸より至りて、獄中の事を語るに會ふ。子成、留りて宿し余は歸る。月明」

(富士川英郎「菅茶山」下)

六月十六日 午後、晴間を待ち歸塾。

六月十九日 山陽、痢を病む。(年表より)

六月廿四日 浴後、納涼、小早川景波に出逢ひ、即目の小記を作る。

「余、黄葉村に來り、既に寒暑を経たり。暑さは藝にくらべて酷だしく、加ふるに蚊・蠅の人を困ましむるを以てし、終日一室に偃仰す。浴後、後門を出で、涼を川上取る。一水潺湲たる外は、乾沙荒草の目に滿つるのみ。余指さして(近ごろ廣島より歸れる)景波に謂つて曰く、廣州の泛遊、(今ごろは)想ふに方に樂しかるべし、と。因て悵然たること、これを久しうす」

「小早川景波」(一七八二〜一八八〇)名は贛、字は景波、通称は文吾、號は採薇又は樂々齋。惠美三白に醫を学び、詩文に巧みであった。廉塾の塾生。「偃仰」寝たり起きたり。「潺湲」水の流れる音。涙が流れるさま。「泛遊」広く遊ぶ。

六月廿九日 茶山と共に、その本家普波家の招飲に赴く。

七月十五日 春水より茶山へ手紙。

七月十六日 前述、北林の來書(四月某日)に答えて次のように認めた、

「さきに(四月)諭しを承け、襄を勉めしめらる。村學の陋を厭ふ勿れ、繁華の樂を慕ふ勿れと。襄、すでに壯(三十一歳)なり。また往年の態(狂態)をなすを慮かるなかれ。然れども、この數个の磊砢は、終に消磨する能はず。(而も北林の)なんぞ自から消磨せざるといふは、人に強ゆるに、その能くせざる所を以てするなり」「大抵少壯の志氣は、老いに至つて乃ち沮茶す。すでに沮せる者の心を以て、未だ沮せざるもの、自ら律せんとするも、その技、決して行ふべからざらん。我が君立(四十三歳)の如きは、則ち未沮・已沮の間(中年)に在り、居間調停、その任、歸するあり。豈良策なからんや」「俗語に稱す。醉人、本性を失はずと。謂はゆる本性とは番椒の性は辛く、甘艸の性は甘しといふ類是れなり。番椒をして甘く、甘艸をして

辛からしむるが如きは、此の理なきなり」

「磊砢」胸の中に不平が積もる様子。「沮茶」疲れた様子。

七月廿六日 築山捧盈へ手紙。悶々の情、自ら遣ることを得ず、昂ぶる氣を抑えることが出来なくて、心の内を訴えること滔々数千言、一代の運命を開拓すべく、それを藩士金春市左衛門二男（市之丞弟）傳九郎の手に托して届けさせた。

（廣島に在りて）籠居以來、日本外史と申、武家の記録二十卷、著述成就仕居候へども、是は區々たる事に、引用の書なども不自由、私心に滿不申、愚父壯年之頃より、本朝編年之史、輯申度志御座候處、官事繁多に而、十枚計致かけ候儘にて、相止申候。私義、幸隙人に御座候故、父の志を繼、此業を成就仕、日本にて必要之大典とは、藝州之書物と、人に呼せ申度念願に御座候。此義、三都に居申候而、書物を廣く取集め、多聞の友を多く取不申候而は、出来仕らぬ事に御座候。

と三都を目指す目的を述べ、捧盈の心情に訴えて力を借りたいと願った。（以下、手紙を纏める）

「經書講釋等も不得手之義、得手と申候ては、史學と文章に御座候」と廉塾での經書講釈は私には向いていない。爲すなら史學・文章の方面で少しでもお国のご用に立ちたい。父も壯年の頃より本朝編年史等を手がけたが、官事繁多につき仕上がっていない。その父の志を自分が受け継いで、やりおせたいと思う。それにつけても田舎ではどうにもならない。三都に出て書物も広く求め、多聞の友とも多く交わり、不肖の私ではあるが名を天下に挙げ、末代までも芸州の某と呼ばれたい。脱藩騒動以來、彼是れ小十年間「懸り人の様に、黙々と不面白暮し」をして来た。

「去冬此方（茶山塾）へ參候一件、家長共、私へ一向知らせ不申、間際に相成、漸發言仕候」

納得出来なかつたが、既に願ひ出た後で辞退も出来ず、追ひ立てられるように罷り越したような次第だ。広

島に居れば都会へ出る機会もあつただろうが、此処に居たのではその頼りも絶え果ててしまったと日夜悲嘆に暮れている。福山公辺で私に知行を取らせ、士儒に取り立てる働きがあり、茶山先生の方からも「福山藩に仕えたらどうか」と勧められたが、藩に仕えるのならば大恩のある広島藩に仕えるべきで、畜生ならいざ知らず、苟も人であれば余所の藩に仕える等もつての外だ。

扱又、私に妻を迎へ申候様被勸候。此義も辭退候譯は、「父之家を繼ぐべき身でありながら、「箇様之身分に相成」つたのだから、「常並の人間の暮しを」考えては、天罰が当たるといふものだ。

こういつた内容の書簡であつた。

八月十五日 茶山と共に、内藤景堅の雅会に列す。夜、松永に至り月見。

「内藤景堅」福山藩家老。福山城三の丸東御門内にその邸宅があつたところから「東門大夫」と呼ばれていた。

八月十六日 茶山は神邊に帰る。山陽は佐谷惠甫（筑前秋月藩の藩医、箕浦東伯の子）と共に松永の詩会へ行き、

一泊して十七日に神邊に帰る。（年表より）

八月廿八日 茶山より伊澤蘭軒へ手紙。

「私方へ、頼久太郎と申を、寺の後住と申やうなるもの、養子にてもなしに引うけ候。文章は無雙也。爲人は千藏（在江戸、頼養堂）よく存居申候。年すでに三十一、すこし流行におくれたをのこ、廿前後の人の様に候。はやく年よれかすと奉存候事に候」

「伊澤蘭軒」（一七七七—一八二九）名は信恬のぶたか、字は澹父（愴甫）、通称は辭安。蘭軒・菘かぶ（蘭）齋さい・都梁・笑仙等と号した。医者・儒者。江戸本郷真砂町生まれ。父、信階の後を継いで福山藩の藩医を務めた。

八月三十日 浅野齊賢侯に扈從して、江戸へ赴く途中の、杏坪・景讓（名を權二郎と云い、頼春風の次男。山陽
 廃嫡の後を嗣いで春水の養子となった）、及び藩士松宮半五郎の一行來訪。暮庵等同席會飲。山陽は席上、景
 讓の爲にそのはなむけ禮として沿道の地理と史蹟を詳しく圖解して『東道筭記』と題した。（『東道筭記』ここには
 略す）

八月 某日 茶山に代わり、福山藩士今村蓮坡（名は完、字は緯夫、通称は五兵衛）編『宋元詩類聚』の序文を
 作る。茶山より、十八日、蓮坡への手紙に、

「拙序も、久太郎代筆をたのみ、出來かゝり申候。自作よりは宜候」とある。

九月 七日 萬年同伴、惠甫（佐谷）の筑前に帰るを送り、横尾にて別る。

この日の茶山の日記には次のように認められている。

「土成と長作（萬年）惠甫を送つて、横尾に到る。土成、數、長作に先に還らんことを勸む。長作、仍
 従つて行く。既にして手を分つ。而れども土成復た送りに橋上に至り、留談してよ晷を移す。長作、茶店に
 在りて、土成の還るを待ち、風寒の冒す所となるに至れりと云う」（富士川英郎『菅茶山』下）

九月 九日 重陽。兒島左一、茶山を訪ね、鼓山に遊ぶ。塾生ら一行二十五人と同伴。作詩、茶山七律一首、山

陽七絶三首有り。〔鼓山〕安那郡湯野村とうやさん鑿々山。

九月十四日 茶山と共に、藩老職三浦遠江邸に招かれる。

九月十五日 塾生三省と共に、その父の招きに赴き、一泊。

九月十六日 歸塾。

九月廿一日 春水より、茶山へ手紙達す。

月日不明（秋） 同じ一構への内に寓居しているにもかかわらず、山陽はその心の内を口頭では述べず、「上菅茶

山先生」と文章で（漢文）伝えた。（附録二参照）

十月十日 山陽はこの日より『日記故事大全』を講義。

十一月十四日 口頭に代えて、更に茶山へ手紙。（附録二参照）

十一月廿三日 茶山は、十四日の手紙を見て、

「その志望の在る所は、諒解を與へたであらうが、京坂行を執行するに就いては、その裏面をも考慮して、生活上の設計を立てねばならぬとの注意もあり、それに對して、一々その意見を尊重すると共に、これに對應すべき處置と、自身の覺悟に就き、その件々を具して、更に手紙の上に、これを述べ、（略）十九箇條について、それぞれ覺悟のある所を誓うている。」と『日譜』に述べている。

十二月 六日 小竹へ一書面發す。（略）

十二月十一日 春水より京坂行の事、茶山の意向次第差支なしとの手紙達す。

文化七年一月から十一月末までの山陽の行動について『日譜』や『年表』には以上のように纏められているが、その間の山陽の行状について、茶山の文化八年八月十五日付、賴杏坪宛て書簡（附録二参照）の主だったものを挙げると、次のように記されている。

【一月】

一、見え候而より先かみゆひのゆふた髪がきらひにていはせて引ほくこと御坐候故、髪は妻にいはせ候。

一、出遊せねば足がわるくなるといふことにて三日にあげず出られ候故、私も寒を忍びてつきありき候。広島にては日々ありき候に一里二里は往還いたし候へば腹もこなれ候、塾に而内に計め候而は病を長じ可申とて日々諸生を誘引遊行有之候。私も三度に一度は酒肴ども調へ同行いたし候。

一、或日市村といふ処に紅梅大樹有之とて見に参候路千田といふ所に前に池あり葦屋三四家白梅さかりにひらき候、扱々幽雅なるよき所と私ほめて過候へば、令姪幽雅にはこまり入申候、此上之幽雅は御免可被下と申され候。私も驚きふりかへり見申候へば顔色も不宜候。むめの盛なれば正月の末か。

つまり「田舎は嫌いだ」と突つかかるような態度で言つたと云うのである。

【三月】

一、三月比か下女某あまりやくに不立候故出し申候事有之、其時川南あたりへゆき、彼下女は拙者手をかけ候を追出し候、かゝることにて中々居られる物にてはなしなど被申候よし、其いひ様いかふ上手なれば、近村ふく山あたり迄こぞりて、それは太中があしゝなど一等之沙汰になり候よし。

役に立たない下女に暇を出したところ、「拙者手をかけ候を追出し候」と言い触らし、福山辺りまで評判になつたと云う。

一、講釈会説など出来候に、始は丁寧に見え候が、三四月比より段々減少になりいかゞと見え候処六月比よりふと精出候而史記三四十枚ほどよまれ候、不思議とおもひ見申候内諸生の氣にいらぬにはきかせもせず、六七人をのみ相手にいたされ候、外の書生にはとかく素説をせい出せなど申ことよし、私もきのどくさに笛の師をたのみひまなる物へは学ばせまぎらかし候。

講釈会説などは「氣にいらぬ者には聞かせもせず、六七人をのみ相手に」して他の者には「素説を精出せ」と相手にしない。

【四月】

一、龍泉寺と申に桜ひらき候とて同伴参候に、いまだ花もひらかず其地大工など取乱し申候へば酒肴は八幡社に而開き候、其山近村を一覧いたし候、諸生中に一人村家を指さし山水の画の事を申候、其時令姪元來あり

て益なき家は一軒もなきがよしと被申候、やがて私を見て此村は塾計なればよしと被申候は私へすこし挨拶と見えたり。

正月末だったか「梅見」の時と同じ調子で、突つかかるような態度である。

【五月】

一、五六月か其次の女が気に入候、これはもとの女の時の事にこりはて、みぬふりにて居申候処、子をはらみ候よし申たて、ゆすり候て銭をとり候、其次の女これは令姪きびしくしかりつけ候ことたびくにて、或は長屋へ這入り泣候ことも有之よし、晋帥謹而按ずるにこれはいふことをきかざりしなるべし、とふく某女かけおちをしていに候。

一、福山一大夫家に切島つゝじ盛なるとき被召候。其婦にたばこやといふ家へ一宿いたし候、其翼みなどやといふ家へ慈仙が来るとて令姪被參候、饗応などいたし候とて程へてたばこやへ被帰候而同道神辺へ帰候こと有之（私方へ被參候初めよりはなしに出た女画史と会っていたものと思われる）みなとやは女画史が伯父也、芝居の粹といふおとこ也。

一、令姪は一趣向あることゝ見え、晋帥があしらひあしくあれではいられぬなどゝいひありき、内に而はいよゝく傲然諸生をあつめて足をうたせ按摩とらせ悉皆若殿などゝいふやうに見え候、始見え候より私が姪に土五郎妻が姪庄三郎二人を御そばやくにつけ置、手水湯烟草之火等よりせなをたゞき候ことまで申付をき候へ共、のちには諸生に寵幸之者出来二人は氣に入らず候ひき。

【九月】

一、福山一大夫へ被召同道にて參候こと有之、其時上大夫之子など出会有之候、帰後令姪悪口のゝしり候よし聞候人申候は、あれはあしきこと也、こゝにゐる氣ならば重かまて而慎まるべしと私へいと申候こと有之。（九月十

四日)

一、白岩三省と申諸生これ令姪大氣に入にて彼方へ茸狩と申て招きし事あり、内々きけば令姪より頼みの由也、其夜尾道に花柳の遊はなくしき事のよし也、また中秋後松永詩会に被参候、この時も大さはぎのよし。(九月十五日)

【時期不明】

一、砂糖もちがすきゆへ不断出し、ならづけがすきゆへ与兵衛方よりつづけ候、魚鳥の肉あるときは酒の間せよと命ぜられ必下女にのませるなど、私方に元来なき事なれどこれも御意にまかせ候、一年も家内それにかゝりゐる申候様に被思候。

「私方に元来なき事なれど」食べ物の我が儘も殆どきいた。家内は一年間それにかかり切りであつたという状態である。

一、氣に入たる輩には折ふしあんななどさせ火燧へあたらせ夏は裏門より川堤へ火入をもたせ出、ふそくと咄有之候、これは女色のはなしにて右之輩をしたしみひそかに上京同道のことどもたのまれ候よしに候、左候へば上京も久しき工面と見え候事に候、口才はよほど上手と見え其輩はしんせつなる人たのもしき人など申外書生をもよりくすゝめ候よし、同心せぬ輩いろくとはなし候、外に書生に非ざる物にも其口才に打ちみ候人有之哉、これらも私にかくしいろくど働候ことも段々承候へば、金よほど借し候人も有之よし。

一、令姪発足之あと隣人来りて申候は、若旦那様は金につまりて御出に候哉、只今迄はかくし候へ共処々より債客参り近所に一宿いたし呼出したしかけ合候処、何分やがて広島へ帰り候、其時に払可申など御断被成候、一人二人に非ずと申候。

また、伊沢蘭軒宛の茶山の書簡にも次のようにある。

備前某（岡山的那須耕助なるべし）と云豪家へ、金をかり二遣し、これも贖狀二而取出し候よし。この類ハ、處々二而多候事二御坐候。

以上これらの書簡によると、山陽の廉塾に於ける一年間は、我が儘放題、したい放題であつたという感じを受ける。そのような山陽に、茶山は辛抱強く接したと思われる。

5、茶山、山陽の上京を認める

文化七年九月某日、茶山との間に意志の疏通がうまくいかなかった山陽は、一構えの内に寓居していたにも関わらず、胸中に積もる鬱憤を「上菅茶山先生」と云う漢文体の書面にして茶山に差し出した。

：藩議欲襄就官、待以好爵重俸。襄朽廢人也。而蒙收録焉、不可不謂之知己者也。覆而考之、不知襄者矣。襄唯不欲仕也。是以此。使襄欲仕、則有父母之邦在。：夫父母之邦、義所當仕、不得謂不欲之也。而有所不能焉。襄天質多病、疎放爲習、不能整衣裳、不能久坐、不能屈伸、不能時起臥、不能從而入、從而出。至○踞蹠嚙、爲不情之言、以相應沓、尤所不能也。

（足十沓）

私を福山藩に仕えさせようとの意向があるようだが、それは私の望むところではない。もし仕官するのであれば、それは父母の邦の広島藩であろうが、自分は天質多病である上に疎放にして礼儀知らずであり、とても宮仕えはできそうにない。

襄之家、非有先登斬首之功也、非有積日累歲之勞也、及家翁之身、遭遇右文、起布衣、上朝班、遂至忝師範之任。撫存待遇、無所不至。襄常見其感激思報、蹙蹙不解。爲襄者、安可不竭力致身、以繼其志哉。抑人各有能、有不能。自量所能、要之於終、雖身之不列於朝、或足以圖尺寸之報。是襄所以燕息度年也。今乃願通籍委贄於

他邦、是胡爲哉。使襄禽獸則可、苟亦人也、則何心處之、亦何面目以見天下之人乎。

「先登」先駆け。「撫存」いたわり慈しむ。「蹇蹇」非常に苦しみ悩む。「竭」尽くす。有る限りを出す。

「燕息」くつろぎ休む。「賈」名刺代わりの進物。「胡爲哉」なんするものぞや。

頼家は無位無官の士より起ちて朝班に上り、師範の任を忝なくするに至った。その撫存待遇、至らざる所の無い君の恩に報いる為にも、自分は他藩に仕えることは出来ない、興奮気味に述べている。これに対する茶山の反応は未詳。

十一月十四日 更に山陽は茶山に宛てて、口頭に代え次のような長文の手紙を書いた。

乍恐奉申上候。當春以來、此義可申上と奉存候へども、餘り難申出事に御座候故、幾度も囁囁仕至於今日候。

私三都二而舌耕支度と申素志者、先生にも嘸御承知可被下、夫故可取家督をも棄申候位之義に御座候處、以前之振舞、粗忽之至ニ屏居仕居候。

「囁囁」云おうとして云えない。口をもぐもぐさせる。「舌耕」書物を講義して生計を立てること。

「屏居」遠慮して外界と交わらない。
と云う書き出しで起こし、

：其内ニ私上下之評判取直候、再家督させるの、再官祿を與へ家を成させるのと、種々世話に致御座候へ共、私素願と齟齬仕候故、一切面白く存不申、萬事杆格、鬱々暮居申候て、無聊之餘、郷黨之毀譽も顧不申義共有之、父兄の憂をなし居候處、昨年冬（十二月十三日）に及、家叔父（杏坪）私方へ參、母と私を呼、神邊先生より被仰越候旨を申開候。是迄一向夢にも存不申事にて、答様も無之、母義申候は、彼レ事は、三都之素望御座候故、神邊へは進じ申間敷と申候所、叔父申候は、神邊と申候ても、又々京攝へ出申候事も出來可申、同所を根城と致、何方へも自由に遊歴相成候故、此地に居候とは、大ニ違ひ申候間、何分罷越可申、已に家君と議

定、公邊へも願出、先生へも御許諾申上候義とて、其節之御返書を示し申候。此通故、違背は相成不申と申候故、私は菟角無之應受仕、扱十日程も仕、俄二上途罷越、何分先生之思召ニ於ては、誠に難有義、非言所能謝。罷越候以後も、誠ニ猶子之恩、是又筆紙に難盡義ニ御座候」

「杆格」お互いに相手を受け入れない。「猶子」甥、姪、養子。

自分が神辺に來たのは自分の意志からではなく、両親や叔父のお膳立てに拠るもので、山陽に知らされた時は引くに引けない状態であつたと、神辺に來た前後の経緯について率直な告白をしている。

されども、右之趣にて、何共心濟不申、鞅々怛々かぢうたいふ之中に月日を送り、少壯之年を、空しく蓬蒿の下ニ過し申候義と奉存候へば、悲歎有餘候。然るに、先生之恩意は、一日くくと相重、其上委託之思召も、次第ニ深く相成候。此處之意に急き候も如何と、心壹つに苦ミ申候、とつ置つ相考候處、所詮此口申候ても、取上くれ候もの無之、先生へ打明恩歎き申上候外、無計と決斷仕、不顧憚、ケ様ニ申上候義ニ御座候。誠に何とも恐入候義ニ候へども、此趣意御聞分被下、廣大之御憫恕を以て、私生來之大願成就仕候様被成下候義は、出來申間敷哉、御伺申上候。先生は、私へ(廉塾を)御任せ被成、御くつろぎ可被成御本意ニ御座候處、其義は應受不仕候て、翻て私之願を達し被下候様申上候段、思召候處も如何敷奉存候。然し、所不能を強て仕居候ては、却て御不安之基御座候故、誠實之所を申上候。左もなくては、口情彌縫くちやひほ仕候而、後に飽飛候はゞ、負心之甚と可申候

「鞅々怛々」心に満足せず不平に思い愁えるさま。「彌縫」取り繕う。一時的な間に合わせ。

志が満たされないまま田舎で月日を重ね、少壯の年を空しく送ることは、悲嘆余りあることである。先生の思も日に日に積もり、任せられる仕事も次第に深くなつてゆく。あれこれ考えても相談出来る人はなく、先生に打ち明けるしかない。「この趣意を聞き分け下さり廣大之御憫恕を以て、私生來之大願成就仕候様被成下候義は、出來申間敷哉、御伺申上候。」のあたり、切羽詰まった山陽の氣持ちを窺うことが出来る。山陽が恐れていたのは茶山

の怒りに触れて、広島に帰されることであつた。書簡には更に続けて「広島へ申し遣り、差し戻す等と仰せ下さいませんように」、「此處得斗御勘辨下さ」と歎願している。

「憫怒」あわれみ。

：もししく此義御怒に觸、左様ならば此方に、もはや構候義は無之候故、広島へ申遣、差戻可申杯と被仰下候ては、益困窮仕候間、何卒、此處得斗御勘辨被下、思召二落候義に御座候はゞ、國元親・叔父杯へ呑込候様御款說被下、何方へも、程能居合、安心の地を得候様二、先生之御取斗壹ツを奉仰候。：喪、死罪謹白。菅茶山先生帳下。

茶山はこの書簡や、廉塾に来てからの山陽の挙動から、その志の強いことを勘案し、志望を叶えざるを得まいと一応の諒解を与え、生活上の設計について注意を与えた。山陽はその意見を尊重し、これに対応すべき処置と自身の覚悟に就き、その件々（あのことこのこと）を十九箇条にわたつて具体的に手紙に述べ十一月廿三日に茶山に差し出した。それには茶山の心遣いに対して、一つ一つ覚悟のあるところが述べられていて、生活設計はしっかりしていた。金銭に関しても「親には鏝一文たりとも厄介にはならぬ」ときっぱり断言して覚悟の程を示していたので、茶山には遮二無二、猪突の空元氣に駆られてのことではないと思われた。山陽の才能を高く評価していたことと、広島に帰すことで年来の親友である春水の、悩みの種を増殖させたくないと考えたことから、茶山は山陽の上京を認めたのである。それは文化八年五月十五日付けの頼杏坪宛の菅茶山書簡に次のように認めていることから伺える。

：田舎に而は昨日之こと今日は国中にしれ候、隣之事もしれず候京大坂に住居候而年よるを待候も上策なるべし、幸に上京之願も出候へば私はみきりにもいたしがたく候へ共、広島へはいなれぬおのこ也よき事ならんと竹原へも上京を御許容被成よと申遣候こと也、私は去々年令兄様より火急なること有之よし被仰越候ゆへ、何がさておき右之趣向を出し候、其わけは元來承及候には頼家はことの外敵敷、親子も君臣のごとく一間へも入

がたき勢、且又家内相談ごとありても久太郎をばのけ物にして家内に止まらせられず、それゆへすねて時々あばれもするなど、申事、又はあの才子をあの様にしてぢぢめ置はむごき事あれにては才ものびぬ道理也云々右は広島の評判のよし、右之通ゆへ私方に而少々もゆるめ候はゞ言ことをきかれ候半などおもひ付候、

：私人の子を引よせ而後住になるか京へやらふかなど、申こといかゞとも被思召候覧、これは去々年弥太郎様より急に他国へ養子にてもやりあとをくらませねばならず、いかなる貧家にてもよし上方尚よしなど、被仰越候をこゝかしこ思ひあはせての事也、勿論御国は久離勘当といふことにはならず左様の人は困ひへ入おく事のよし、これは長門も同様の由、左候へば養子といふて其地を出候より外趣向なし、これらは晋帥も合点のことにて外々ならば熟縁いたさず御帰し申と申処を、幸に上方之願書出候故竹原へも広しまへも申遣候、其志を遂げさせられ可然と申上候、広へかへられぬをしりし故也、令姪は夙志しゆくし之上方なれば踏所をも不覚と申様に見え候、弥太郎様よりも一生之交友中真知己と申物晋帥一人也と被仰越候、

「久離」縁を切る。長い間離れている。「夙志」早くから持っていた志。

6、山陽、廉塾を去る

文化七年十二月十一日付「篠崎小竹宛頼山陽書簡」(「頼山陽全書」全傳上巻)によると、

僕東上の志、御懇憑しんとう被下、ケ様に申呉候ものは、外に可有とも不覺候：此方、先生(茶山)は承知にて、相談して見やふと被申候へ共、広島辺如何可有之候と案居申候。

とある。これに拠ると山陽の上洛について、茶山は不承不承ではあつても、そうするのが最善の策であろうと承知したことが分かる。いよいよ山陽の上洛が決まって、茶山はさすがに感慨深いものがあつたのだろう。大晦日

の十二月三十日に、「除日」と題して次の七言絶句を詠んでいる。【慇懃】傍から勧める。

六十三載夢中移 前路函函亦可知 六十三載夢中に移る、前路 函きゆうくわん 亦また 知る可たけんや。

明日村閭又春色 閒遊仍舊作兒嬉 明日 村閭 又 春色、閒遊 舊またに仍なりて 兒嬉なを作なさん。

六十三年を振り返って見ると夢のように過ぎてしまった、これから先の見通しは一体どうなることだろう。

明日の村里に又春が訪れるが、のんびりとこれまで通り子どもと共に遊ぶとしよう。

年が明けて文化八年一月七日、山陽は塾生の木村楓窓（一七九一〜一八三七。二十一歳、備後府中の人。楓窓と號す。茶山の弟子で『筆のすさび』を校訂した）が上京するに当たり、唐詩の句を集めて「集唐句送木村生入京。時余亦將追遊。」（唐句を集め木村生の京に入るを送る。時に余も亦將に追遊せんとす。）と題し、次の七言絶句を詠んだ。

每依北斗望京華 毎に北斗に依りて京華を望む（杜甫）

要自狂夫不憶家 要は 自らおのづかに狂夫家を憶はず（劉禹錫）

他日期君何處是 他日 君に期す 何の處か是れなる（盧同）

宮前楊柳寺前花 宮前の楊柳 寺前の花（王建）

いつも北斗星を見て京華に思いを寄せていた、畢竟自分は狂った男で家のことなんか憶ってはいない。

今後の君に期待している。何処で華々しい活躍をするだろうかと、

といった内容である。この詩から山陽が、常日頃いかに三都を夢見ていたかを窺い知ることができる。

一方、茶山は廉塾を去る山陽に次の詩を贈った。（二月六日）

子成將東行 子成 將まさに東行せんとす

僻處偏悲歲月移 擔簞千里訪親知

僻處 偏ひとへに悲しむ 歲月の移るを、簞とうを擔になひて千里 親知を訪はんとす。

由來上國饒才子 誰伴樊川作水嬉 由來上國才子饒^{おほ}し、誰か樊川を伴ひて水嬉を作さん。

片田舎で年を重ねることを偏^{ひと}へに悲しんだ、君は遊学の志を抱き遠く親知を訪ねようとしている。

もともと上方は才子が多い処、誰が杜牧のような君を伴い船遊びをしてくれるだろうか。

後に『黄葉夕陽村舎詩』後編卷三にこの詩が収められた時、山陽は欄外に、

「辱贈已十年矣。一覺夢驚、鬢絲禪榻、非復舊小杜也。」

贈を辱^ぢくして已に十年。一たび覺めて夢に驚く。鬢^{びし}絲禪^{ぜん}榻、復た舊の小杜に非ざるなり。

「禪榻」世俗との交渉を断ち、禪門の正常な境地に身を置くこと。「小杜」杜牧。ここは頼山陽のこと。と書き付けている。さすがに感慨を禁じえなかつたのである。

何かにつけて問題を投げかけ、悩ましてくれた山陽であつたが、いよいよ廉塾を去るとなると、安堵や、憤懣や、今後の心配や様々な思いが入り交じつて、茶山は肩の力が抜けるような思いを抱いたのであろう。山陽が廉塾を飛び立つた後、文化八年二月二十五日に嘗ての門人である讃岐の牧百毅宛てに認めた書簡の中に、

私方、久太郎（山陽）、急に上京仕、下帷開店とかにて、八日に急に發程、夫に付、書生中、用立候人は、皆々召連參候に付、差当、兒共斗になり候て、講釈も手ばり候。畢竟久太郎右參候先はこれにて相すみ候へとも俄に大風の落ちた様にて、さびしく候。

と心の中を吐露している。

一方、山陽は廉塾を去るとき、心は既に宙を飛んでいる状態であつたであろうことが、次に掲げる八月十五日付け杏坪宛茶山の書簡から想像できる。

白岩三省（塾生）といふもの聘使として尾道へ參事を極め候よし、夫より発足用意せまり取物も取あえず残置候こともそこくに出立有之候。

「尾道へ参事を極め候よし」というのは白岩三省を遣いに出して女画史、平田玉蒔に会う算段をさせていたといふのである。

〔平田玉蒔〕（一七八五〜一八五五）名は豊、一つに章、玉蒔と号した。家は尾道の豪商。画を四條派の八田古秀に学び、花鳥人物に巧み。

二、上洛以後 文化八年（一八一二）〜文化十三年（一八一六）

寛政十二年（一八〇〇）山陽は二十一歳のとき脱藩という重罪を犯し、三年間の幽閉生活の末に廢嫡された。志す方向へは進めず、放埒な生活に明け暮れる山陽に心を痛める春水の苦境を救うべく、茶山は文化六年（一八〇九）の暮れ、自分の経営する廉塾の都講として山陽を招くこととした。謹厳実直で煙たい存在の父親から逃られ、自分の良き理解者である茶山の元に行けることは、山陽にとって喜ばしいことであった。しかし、山陽は半年も経たないうちに、単調な神辺の田舎生活に飽き足りないものを感じるようになった。その上、予てから抱いていた上方で名を挙げたいという夢を棄て切れず、文化八年二月六日、僅か一年二か月の神辺での生活を辞して上京してしまった。山陽が上京してから五年間、茶山の山陽に対する態度は不機嫌で、山陽の手紙にも必要最低限の返事しか認めない。詩の斧正を願っても知らぬ顔であった。ここからは山陽が廉塾を辞して上京した後、茶山が山陽にどのように関わったかを中心にみてゆく。

1、山陽の上洛

(1) 山陽より茶山への書簡 — 状況報告 (文化八年三月四日付)

廉塾を辞して上京した山陽は、閏二月下旬、小石元瑞の保証で京都新町通丸太町上ル春日町に家を借りたことなどを手紙で次のように茶山に知らせた。

先日、伊藤文佐へ相頼、發一書信、近々相達可申候。菟角多雨鬱陶御座候。山間は左様も無御座候敷。尊履若何承知仕度存候。客居仕候へば、憶親憶師、心緒萬端、□にて心魂飛揚候とは、大ニ違申候。廣島之御左右、御聞被成候はゞ、何卒御親筆に無之ても、代筆にてなりとも、被仰越被下候様奉希候、篠崎へ向け被下候方、早速申候。

〔小石元瑞〕(一七八四—一八四九) 元俊の長男。久留米藩儒。名は龍、通称は玄瑞、檉園と号した。父の後を嗣いで高名。頼山陽・田能村竹田らと親交があつた。〔客居〕他郷に住む。

①：私義五六日前、新町通・丸太町上ル所に獄居相定申候。随分立派なる家にて、八疊・六疊二間にて、二階八疊に住、下にて舌耕仕候積御座候。疊・立具・鍋釜をそへ、壹ヶ月・三拾目と申候。少高く御座候へ共、世話なしに御座候故、當分此方に居申候。其内、外、利口之處も御座候へば、と聞合居申候。…

三月三日、大内の鬮鶏を縦覽せしめらる。余、門生とゞもに往けり。…余群中に躑躅して困むこと甚だし。忽ち一人の笑いながらにして來り揖するを見る。これを視れば鶴脚(楓窓)なり。吾が手を握つていふ、君來ること何ぞ速かなる。…

〔躑躅〕ひどく畏れる。〔揖〕挨拶する。

舞踏不知過幾旬 三千里外再生身 舞踏知らず幾旬を過ぐるや、三千里外再生の身。
 登登一拜金鶏後 命答君恩骸奉親 登登一たび金鶏を拜するの後、命は君恩に答へ骸は親に奉らん。

舞踏知らず幾十日が過ぎたか、三千里外に再び生くる身となった。

とんとんと手を打つて一たび金鶏を拜んだ後、命は主君の恩に答えるため、骸かたは親に奉げよう。

「舞踏」足踏みして喜び躍る。「登登」力を用いるため互いに掛け合う掛け声のさま。音を表す擬声語。とんとん。

昨日（上巳、御所）鶏合に誘はれ、公家門の外にて、考安（楓窓）ニ逢、交一二語居候内ニ、後口より袖を引候もの有之、回顧候へば、家母之歌友・立芥屋映雪と申尼に逢申候。先以て（廣島邸一同）安全之様子承、降心仕候。近日此方へも尋くれ候て、親土産の話にさせ可申存居候。鶏合見物など、あまり物見だけ、早過申候へ共、御所様、まだ拜み不申候故、參申候。

徹居、室定候日に、昌平來着、如何しテ遅カリシヤと申候へば、何やら差さへ間有之、先月十八日に（神邊）出立、大坂へハ私上京ノ一日後に着候由、コ、ニ奇ナルハ、龜吉に御座候。昌平と同道にて參候由、神邊先生ニ御懸合申候ヤとも申候へば、左にては無之、昌平は其處にて尋不申と申事、私其御地ニ居候内、何とて一言不及其事候イシヤと申候へば、グズくと申居、參候翌日、直ニ半コウ頭になり申候。私方に寄宿致候て、醫家へ通度と申事に御座候。昌平は、學問を専と仕候由申居候。龜吉事、如何敷存申候間、一應御尋申上候。さて此地へ參候後も、此漢には奇なる事のみ御座候。

扱、借家にて主人になり候へば、一錢の物入も心こころ挂かけにて、扱々□□家翁、井先生などの雅言（日頃の言葉）存出候事御座候。②表札は、頼久太郎僑居と致置、屋敷（廣島藩京邸）之□などに見答られ候時之申開き仕候へども、何卒築山などの世話に、天下晴候様に、近々仕度□□に御座候。先ハ、此度便急、右徹居相定候事斗申上候。不盡。三月上巳後一日。

①「五六日前に新町通・丸太町上ルに仮住まいを定めた。新宅は神邊の四疊一間より大分広い。疊・立具・鍋釜

が備わっており、少し高いが（二ヶ月・三拾目）そのうち気の利いた所もあればと心懸けておく積もりだ。借家でも主人ということになると、一銭の物入りにも心掛けが必要で、父や先生が日頃おっしゃっていたことが思い出される。」

②「表札は頼久太郎僑居とした。」という報告である。

(2) 山陽より茶山への書簡——思いがけぬ障害（文化八年三月十三日付）

三月十二日、麩屋町に金山重左衛門を訪ねたところ、意外な警告を受けた。山陽はそのことを次のように茶山に知らせた。

① 着京後、兩度書狀差上申候。追々相届可申候。其後御安泰被為入候哉。承知仕度奉存候。私義、無恙僑居仕居候間、御安意可被下候。尤② 昨日金山へ初て面會仕候處、國元より滯留届、此地御留守居へ申來居候。□ □はばつと致候事は出來不申候。教授も初られ申間敷候。右先便に申上候表札等も、若何と申候。備後より出懸候故、其義には及不申候。大目に而、内分之沙汰とのみ存居候旨（金山に）申候へば、それにても、此地留守居は目附同様之もの故、内分之沙汰に而は置申間敷、いやなる事に御座候趣、段々申候故、私も自身は差而頓着も無之候へども、家翁之不首尾にども成候ては恐入候事故、大坂より早便を頼、國元築山と申へ申遣、内々伺申候。それ迄は竄跡匿影居候。先慈仙方に一所に隠れ居候積御座候。是は五條御影堂林阿彌と申にて尋候へば、しれ申候也。體に寄候へば、浪華へ下り居候義も可有之候。篠崎へ御尋可被下候。

「金山重左衛門」京都麩屋町に住む春水の親しい友人。津和野藩用達の人。「竄跡匿影」逃げ隠れする。

扱③ 何卒國元へ又々御懸合被下、此役遂かけ候宿志けしとみ不申候様に奉願候。又々西歸候様之義出來候ては、小子無生之心候。是は不申候共、御推亮被遊可被下候。此義御頼申上度、今日借宅引拂候二臨み、走筆發書候。

國元へ出候否と、前後に相達可申哉、何分此上ながら宜敷御懸合被下度、御面倒ながら奉願候。心緒難申盡候。臨椿悵然、不盡。

尚々、小石元瑞は、致懸候世話ゆへ、矢張受よろしく、不遠上り候様約束置候。書生はそれへ話置候。三省は依然自隨候。何も御氣遣被下まじく、國元へも左様被仰遣可被下候。町内之所も差支なき様仕置候。

書添申候。届状なども、所々へ届候。門人なども、稍々附かけ申候所、口惜キ事になり申候。邸へはしれ居可申奉存候。(藩侯へ)直言上などに逢ひては、迷惑至極之事に御座候。萬御考、早便に御答奉待候。不知築山有何等處置、ドン(鈍)ナル事申來候ては、再度の恥に御座候。

〔臨椿悵然〕意外なことに出会い、失望して恨み嘆く。

①「上京後、二度ほど書狀を差し上げました。追々相届くことと思ひます。」と云うことだが、茶山は手紙を受け取つても、必要でない限り返書を認めなかつたものと思われる。

②昨日 金山を初めて訪ねたところ、「京都の留守居へ國元からの滞留届けが出てあるか。その届けが出ていないと教授も始められないだろう。」頼久太郎の表札等も、如何のものか」と言う。「備後より出懸けているのだから、其の義には及ばないのではないか。大目にて、内分の沙汰とばかり思っているが」と言つたところ、「それでも此の地の留守居は目附同様のものだから、内分の沙汰では置くまい」といやなことを言うので、私も自分はさして頓着もしないが、父に累が及ぶと困るので、大坂より早便を頼み、國元の築山と申す者へ内々に伺つている。返事がある迄は跡を竄し影を匿し、一先づ慈仙方に隠れて居るつもりだ。

③「國元へ懸け合い下さり、折角遂げ掛けている宿志が消し飛んでしまわないようにお願いする。又々西歸するようなことになるれば、私は生きた心地も無くなつてしまう。此のことを御頼み申し上げ度く、今日 借宅を引き拂うに臨み、走り書きにて手紙を認めている。國元へ出した書と、前後して達するかも知れないが、何分此上

ながら宜敷く御懸け合い下さるよう、御面倒ながらお願い申し上げる。」

やつと落ち着きかけたところへ、この難題が舞い込んで山陽は即刻塾を閉じ、書生は檀園ていえんの医塾へ托して、慈仙の寓居（四條寺町大雲院）へ一時身を隠すこととなった。

(3) 山陽より茶山への書簡 — 茶山にすがる（文化八年三月十八日付）

引き続き三月十八日、山陽は茶山に宛てて次のような書簡を送った。

：扱は、藩邸の方は（手續）相濟候事にや、未濟に候はゞ公然開肆之義如何、すべて藩法と申もの、家中の上京候へば、藩より坂（大坂蔵屋敷）留守居へ申越御座候所、篠氏門人に、廣島屋敷之中背頭田中藤三郎（篠崎三島門人、広島蔵屋敷詰）と申もの有之、數年公事の下働を致、熟練致居候、此男を呼寄、内談仕、小子是迄の成行、逐一打明咄申候所、猶其老父（藤七）と熟談仕可申とて歸家、其後又參候て、父子共了簡に、

① 此義ハ一向不苦事と被存候、金山の申所は、通例之仕官人之、表向之事に候。此度ハ、神邊學塾相續と申事、表向ならずとも、國元君上迄通知被成候事にて、年限なしの滯留に御座候へば、其義父同様の人より、差圖有之、京都門人引立之爲に、久太郎名代として差遣候杯之旨、表面書狀を彌太郎様へ被遊、それを役人へ彌太郎様より差出、内届相濟候て、たとへ出立の跡になり候ても、萬事明白に相成可申候。唯今之所にても、さして恐候事ハ有之間敷、國元御親父に、難のかゝる事はなき事と被考候趣、右父子之考ニ御座候。猶坂邸留守居も、其男、親しく出入致候故、内々尋試候事も出來候とも、夫にも不及旨申候故、小生も、先々安心仕候。されども、猶々事明白に相成候様の計を考、是又外に申上候所も無之尊家へ御照合申上候。

此度、先生莫大之御慈悲にて、數十年の抑塞を御拔被下、優曇華うとうんげ之喻之如き欣躍仕居候所、右之通相成候ては、小子も天壤間一大恨事ニ御座候て、生活于世候心も無之様に奉存候。此上ながら、宜敷御工夫なし被下、② 小

子は扱置、愚父身上、浮沈二氣遺無之様、枉て奉煩度、萬所仰望御座候。小子一身之義に御座候へば、奮然決斷仕、誰が如何様に申候ても、びくとも不仕候へ共、又々累家翁候てハ、小子遂志得時候ても、何心處之□□哉、御憐察被遊可被下候。夫故御答被遊被下迄、當地（大坂）に相愼罷在候故、早便御求させ、御面倒ながら御答御聞せ可被下候。

③ 三島老先生などは、變姓名候ても、此邊に踏留候へ、如何様とも世話可仕、何卒屹度改て、菅氏養子になり、舊國之籍を脱候へば、此後彼は八ヶ間敷事無之、唯今よりにても、昔久太郎と名乗候ては如何など被申候。是等は、家翁杯を不累ためには、至極之計ニ御座候へ共、尊家を奉累候儀、恐入候義奉存候。さりながら、此度之一件、全尊家傳へにて成就仕候。さなくては、決して不出來候儀に御座候へば、菟角尊家之御名目は離不申候儀に奉存候。：扱、此方の便（勝手）計に、色々の義御望申上候義何とも恐入候へ共、三島老人之被申候様に、御計ひ被下候義は相成申間敷哉。

菟角家翁などは、上國立身之事無覺束先躑踏に遣置候へども、いつ歸候も不可知杯と、淺く見居申候。又、分別なをり候て、少々の爵俸にても、本國にて曝遣し度など、矢張初念すたり不申候。④ 小子など、國恩はいつ迄も忘不申候へども、終身浪人にて居申度事ハ、數十年來、宿志少しも移轉不仕候へば、此後如何様に暮し方難澁仕候ても、仕官可仕とは存不申候。本國へ不仕候へば、いつぞやも申上候様に、外へは死とも參不申ハ勿論之事ニ御座候。是等之處、御考被下、終身羈縻を免れ候手段、此上ながら御計可被下、千萬奉願候。先書には、國元用人（築山）へ直にも可申遣奉存候へども、それにては、事跨り候て不宜、先生の御差圖と申ものにて、何方迄も貫候事に候へば、外へ申遣候事無之と、相止申候。 【羈縻】馬を繋ぎ止める。

且又、私直照合ニ相致候ては、萬事手重に相成、乘引ならぬ様の義も出來可仕、内々の照合も後には表立候様に相成候ては、以の外の事に御座候故、此後とても、左様の照合ハ不仕候。唯々尊前へ御伺申上候故、内々宜

敷御照合被下度奉願候。小子上京致居候事、洛中無隠、追々尋來候ものも有之、甚勢宜敷御座候處、金山に被攪擾、扱々口惜奉存候。然し不遠御一左右も可被下、其達次第、再上（入京）仕候様に照合置候故、尊答奉翹企候。申上度山々御座候へ共、あまり冗長に相成、奉瀆尊覽候故申留候。夫人二宜敷被仰上被下度奉希候。草々不盡。

〔翹企〕足をつまだてて待つ。望み待つ。

尚々、金山ハ菟角先年之□□（脱藩）之時之様に存、疑ひ申鹽梅にて、右世話致候元瑞へも、彼男には御困可被成奉察、此方も、先年ハ大に困り果し扱、手帑に申越候由、惣て緩怠之體、倨侮之語、何とも親切とは不被存候へ共、家翁の後難にて、嚇し申候故、私も大ニ狼狽仕候。ケ程にせずとも、不苦事にてありつらんと、只今にては奉存候。〔倨侮〕驕り悔いる。

⑤ 何様生我者父母、成我者茶山と心得可申と、三島老人も被申候。此度之恩徳之終に成様仕度奉存候。邸吏の申候様之處（以下断簡）

三月十六日の早朝に大坂に着いた山陽は直ちに篠崎家を訪ねた。篠崎家には既に篠崎三島・小竹父子、篠崎氏の門人で廣島屋敷の中背頭田中藤三郎他、二・三名の者が集まつていた。色々協議する中で藤三郎が「こういう事は父親が詳しいから」と一旦家に帰り、父親の意見を聞いて来た。父親の言うことは次の通りであった。

- ① 「金山の言うことは通例の仕官人の表向きのことであつて、山陽の場合は神辺学塾相統ということ、表向きにしなくても、義父同様の茶山の名代として京に遣わされているという旨を、表面上の書状にして父春水に差し出し、其れを春水の方から役人の方へ提出すればよい。それで国元の父、春水の方へも累の及ぶことはない。」
- ② 「自分は扱て置き、父上の身に浮沈の氣遣いが無いように、仰望する次第である。自分一身のことならば、奮然決断して誰がどのように言つてもびくともしないが、父に累が及ぶようでは、自分が志を遂げてどうしようもない。」

山陽は父親を引き合いに出して茶山の同情を買おうとしている。

③「三島老先生などは、『姓名を変えても此の辺に踏み留つたらどうか。昔氏の養子になり広島籍を抜ければ、此の後彼れは是れ喧しいことはなくなる。今からでも、昔久太郎と名乗つたらどうか』と言われる。これ等のことは父に累を及ぼさないためには、至極の計だが尊家を累つらわすことになる。しかし、此の度の一件は全て尊家のお陰で成就したことである。そうでなかったら決して出来なかつたことで、此の方の勝手ばかり言うようだが、三島老人の申されるように昔氏の養子になることを、お計らい下さるわけにはゆくまいか。」というのである。

顧みれば八か月ばかり前、福山藩家老から茶山の養子のように扱われた山陽は腹を立て、築山棒盈に宛てた手紙で『一儒者の身に大に恥と仕候事、父に對し申譯無之候』と言っている。それから一年にも満たない今、山陽の余りの身勝手さを茶山は承認する筈はない。父春水も山陽のこうした得手勝手な行為に對し、茶山への申し訳なさもあつて、脱藩以来再び勘当同然の処置をとつた。(名前は結局「羅井徳太郎」と称することとした)

④「自分は国恩はいつまでも忘れはしないが、終身浪人で過ごしたいという宿志は変わらないので、今後どのよう暮らし方に難渋することがあつても仕官しようとは思わない。本国に仕えないのだから、他国に仕官することが無いのは勿論のことである。」

ここでは自分の意志の固いことを強調している。

⑤『我を生む者は父母、我を成す者は茶山と心得。』と三島老人から言われた。

茶山のご機嫌を取るようなことを述べている。

茶山からは四月十四日に「…京坂にての住居の事、少しも差支無之、官邊振合、浪華邸吏にき、あはせ候通の事にて御座候」(京坂にての住居のことは少しも差し支えない。官邊のことも浪華官吏の言う通りである)という簡

単な返事が返ってきた。

山陽は同年五月中旬に再度、京都新町通丸太町上ルに開塾することができた。

(4) 山陽より茶山への書簡 — 泣き落とし (文化九年三月二十一日付)

父とも絶交状態になり、茶山の不機嫌はまだ解消していないと感じた山陽は、文化九年三月二十一日、茶山に宛てて次のような書簡を出した。

：私事、後悔などと申義は、毛頭無之、追々繁昌の方にも有之、娯樂も有之候故、よくも脱官羈候義と、毎々慶天歡地仕居候。されども、吾身の自由(上京一件)に付ては、兩親・叔父など、老體蹇々勤勞仕居候儀存出し空恐しき様奉存候。：御取成にて解合、① 文通にても致候事出來候へかしと祈候へども、是は先生御機嫌次第にて、國元の許否相決候義と奉存候。先生不機嫌の上は、兩親とても、いつ迄も不通の事と奉存候。是に付ても御齋威之程、黙禱仕候。

全體去々願出候如く、私義始より尊塾相續之義出來がたくと存居候て、國元出立前も不納得之所を、不意に申付、差上候事故、日夜不安、次第に恩誼相重候ては、飽飛之罪益甚候へば、一日も早く願出、双方情愿にて好處置可有之と、扱てこそ若右奉願候所、案外御海容被遊被下、國元の方もよろしく仰取被下、數年來の宿願を遂げ、今日中原に翱翔仕候も、全く先生の御陰と奉存候。左なくば、いつ迄も田舎に屈首、鬱々終身可申と、是又毎時心中に御禮申上居候事に御座候。それ故に、備後人彼是とひいきの引たをしと申様に、相留候者も御座候へども、右の東上の計議は、少しもしらせ不申候。獨與先生決之申候。先生にも、私をどうあつても後住に被遊度とて、御呼寄被下候御初心にも無之、左あればよし、左なくば抜一抑塞之人、使遂其志焉と申思召之義は、浪華へ被遣候御答にも、被仰下候通に御座候。左候へば、東上一件に付、左まで深意痛絶と申義

も有之まじくと奉存候。

「情愿」慎む。素直。実直。「翱翔」羽をのばして飛びめぐる。

しかるに、② 去歳以來、菟角御機嫌不直、乞正候義御座候ても、しかく御答も被遊不被下候は、如何の義に付思召に違ひ候事ニヤと、自顧未得其説候。或は東上の節、塾生二三輩も随從候義、悉く私よりそのかし候様に被思召候ニヤ。又跡より一兩輩も追來候も、其約ありてなど、被思召候ニヤ。此義も、たとへ私よりそのかし候にもせよ、せぬにもせよ、世間の職敵、同商買の得意を取るなど、申凡鄙なる論には無之、たとへば龜井道載（南冥）が弟子なれば、京にても江戸にても、道載方の師を尋ね隨從仕度存じ、（村井）椿壽門人なれば、上京候ても椿壽の（醫）術を持ち候人に付と申氣味にて、其者從來信先生候故、波及於小子仕、外師に従ふよりはと申意と奉存候。小子も、節度使部下小將外征候時、節度帳前之健兒を分隸せられ、戰場にておくれを取らぬ様に致しもらひ候様の心持に存候。苦からぬ事とのみ存居候。（自注）譬喩類不恭候へども、實意申上候）

「龜井道載」南冥。福岡藩に仕えた儒官。甘棠館かんたうの祭酒となり、徂徠學の振興のために努力していたが、寛政四年七月に祭酒の地位を追われ、塾居謹慎を命ぜられた。豪放な言動によつて、屢々同藩内の朱子学者たちの反感を買っていたことは事実だが、この失脚は寛政二年の異學の禁の影響だったであらう。

實に新店にて、一人にても弟子あるを好み候時節に候へば、來者不拒と申様に仕候段、御察被遊可被下候。是等の事に付、折角憐才恤窮之念、化爲鳴鼓致討之心に候にやと奉存候。もし左様の思召にも御座候へば、

③ 以來尊塾の弟子尋ね來り候とも、先生御添書無之候はゞ、直に逐返し候様に可仕哉とも存居申候。しかし、左候ては世間には、愈先生と私の際不和とのみ存可申とも奉存候。先生と不和と申候ては、私京住仕度候ても、不得已國元へ引戻され、又々舊日の如く檻養にて終身申さねばならぬ様に可相成と、そののみ口惜奉存候。

④ 私はともかくも、家翁の命つゞき申間布と、毎度の義ながら、やる方なく奉存候。毎度御聞も可被下、國

元官邊、御地に居候由にて、先生御指圖にて上京仕居候趣故、相住居候事の由傳承候。こゝをしくじり候へば、終身埋木となり候趣と、家翁より毎度金山邊へ申參、なげき居申候趣に御座候。されども従前國元の不首尾、御救被下、其御禮にも尊塾御世話仕らねばならぬ所、又々我儘を申、上京と申ものに候へば、家翁などは對先生、面皮無之、其上色々の義奉煩尊體候事は相憚、嘔喘仕居候様に相見申候。さぞく日夜そのみ案煩居可申候と奉存候。此義、先生御汲取被下、いつく迄も御見棄なく、國元公邊首尾よろしき様に、御なし被下候はゞ、家翁生前の大慶無此上と奉存候。⑤先生饒使痛憎小子、獨不念家翁の痛心疾首乎。ケ様に申候程ならば、只今迄の處、ケ様のはこびならぬ様に可仕事、今更左様に申上候は若何と、申ものも可有之候へども、もはや騎虎の勢不可中止候。何事も打棄歸國仕候ても、一向ツマラヌものに御座候。此上は坐斷輩下、土に喰付候ても成家申さねばならぬ事に御座候。其義の成否は、先生の御懇慈に御座候。いかに激昂仕候ても、主と病に勝てぬと申様に、本國公邊のさわり出來候ては、萬事夢泡に歸し申候。是は禍福喫緊の處にて申上候。是を除て申候ても、

〔輩下〕都。京師。〔喫緊〕肝心要。大切。

⑥海内諸公知襄者、無如先生候様に、平生存居申候。作一詩、構一文候ても、先生の賞鑒を經不申候内は、おもしろからず奉存候。左様に存居候所に、只今の様に、秦越に相成候ては、假使遂其志も、無所聊賴候。

〔賞鑒〕人物や書画等の良し悪しを調査弁別して褒める。

知己と申ものは、千載上下にも難遇ものに御座候所、折角得先生、爲之依歸居候て、鹿豕の群をなさずとも、千里咫尺、效寸尺於支下塾の場、聊爲先生の聲援申度、心懸居候處、案外に御座候。先生に於ては、如襄輩十百人、其有其亡、固無加損於先生候。襄に在ては、天壤間一大遺憾に御座候。此義考安（備後府中の醫、木村）などにも毎時申居候。從來の父執、雅愛眷々に候所、不圖其報復、我儘を働き候故、諺に所謂襄が來て憎しと思召候事も甚敷と奉存候へ共、縷々申上候通に候へば、其處は御捐棄被下、改て函丈に事ふるを得申候は

ゞ終身千里索居候とも、心は帳下に侍従仕候意にて、欣幸之至可奉存候。勿論獨襄受賜うけたまはるのみならず、家翁も一大安慰、無此上と奉存候。只今の通にては、始終奥齒に物のはさまり候様にて、一時も安心仕まじく遼察仕候。〔咫尺〕極めて近い距離。〔捐棄〕捨てる。〔函丈〕師の尊称。

ケ様に申上候義、一は情實、一は利害にて、不得不然候。必御煩敷思召候被下まじく奉希候。文句雅俗混辭仕候は、儒生の書柬の常に御座候へば、輕薄に嫌しき處も可有之候へ共、所謂情促辭うながす、不知所裁候たちにて御座候。今日幸便有之候段承、渡鴻の節緩々とも奉存候へ共、一刻を遅くすれば、家翁一刻の不安に御座候へば、亂筆ながら奉申上候、萬々御恕亮ゆるし可被遊下候。何分裏を先生へ日夜讒諛ざんげ仕候ものは無之哉の様に奉存候。左候へば、如何様に申上候ても、先入爲主、入り申間敷とは奉存候へ共、在襄盡其當然申度、不顧憚如此御座候。いつまで申上候ても盡期も無之候へば申留め候。

三月廿一日

恐惶

〔情實〕私情がからんだこと。〔渡鴻〕雁の渡る季節。〔讒諛〕人を悪く言つて諂う。

淡州行ノ詩、惡詩壹俵ほど御座候へ共、一々は奉煩も恐入候。此十二月の好には、餘程骨折申候。五山・詩佛などに作らせ候はゞ、よき事を可申候へ共、不案内の上に拙手愧入候。褒も貶も、先生の外無可仰人候故、何卒此度は御棄置なく被仰下度、萬々奉希候。一字にてもよろしく候。外へは見せ不申候、私獨心得に仕候事に御座候。御批正の後、竹原（春風）へ被遣、鳥渡御見せ被下候はゞ、猶更忝奉存候。またあの方より御返し申上候節は、御面倒ながら御上せ可被下候、御煩勞恐入候。

〔淡州行〕山陽は文化九年正月末から二月初旬頃まで淡路遊歴をしている。従つて新年開講は二月十一日と大分遅れた。

淡路舟中

泉攝諸山對向舟 海雲滄渤盡望頭 泉攝の諸山 對して舟に向かひ、海雲 滄渤として望頭を盡くす。

多情唯有摩耶色 送我依依到淡州 多情 唯だ 摩耶の色有り、我を送りて 依依たり 淡州に到る。

攝津の諸山は 舟に対して向き合ひ、海の雲は 盛んに沸き上がり 眺めは 尽きない。

情趣が多いのは 唯だ 摩耶山の色、私を送つて 名残を惜しむうちに 淡路島に到つた。

〔滌渤〕雲や霧が盛んに起こる形容。「摩耶」摩耶山。神戸市灘・北・中央の区境に聳える山。六甲山地の
前山をなす孤峰で、山頂からの眺望は雄大。中腹に仏母摩耶を祀る切利天上寺がある。標高七〇二米。八

州嶺。

歸舟

礮島遙乘浪華舟 海南雲日數回頭 礮島 遙かに乗る 浪華の舟、海南の雲日 數ば頭を回らす。

舟人指點山山色 濃是泉州淡紀州 舟人 指點す 山山の色、濃きは是れ泉州 淡きは紀州。

淡路島 遙か遠く乗る 浪華の舟、紀州南の風景に 屢ば 頭を回らす。

舟の人は 指し示す 山々の色、濃色 是れは泉州で 淡色は紀州だと。

〔礮島〕礮馭おのころじま盧島。太古、伊弉諾・伊弉册いざなみの二尊が天降つた島。淡路島の西南。一説に西北にある小島を
いう。「海南」和歌山県北西部。

色字、先生御嫌候へ共、下旬へノツツキ、不得不然候。往反疊韻に御座候。淡にては紀州案外近く、呼之可接候。
されども歸舟より見候へば、泉州よりは遠くなり申候。淡にては、紀淡の山如犬牙に候。

賴 徳太郎

自京車屋町御池上所西側

備後神邊

昔 太中 様

要用書

① 「両親や叔父などと」文通ができるようにと祈っているが、これは先生の御機嫌次第であって、先生が不機嫌の上は、両親ともいつ迄も不通の事と思われるので、機嫌を直して頂くようお願いする。」

② 「去年以来、と角ご機嫌が宜しくない。詩の批正を乞うても、しかくお答も下さらないのは、どういふことなのだろうか。自ら顧みて未だにその説明がつかない。或は東上の節、塾生の二・三人が随従したことを、悉く私がそゝのかしたと思っておられるのか。又後から一・二の輩が追って来たことも、その約束があつてのことだなどと思っておられるのか。このことも、たとえ私からそゝのかしたにもせよ、せぬにもせよ、世間の職敵、同商賈の得意を取るなどというような凡鄙な論では無く、たとえば龜井道載（南冥）の弟子であれば、京でも江戸でも、道載方の師を尋ねて随従したいと思ひ、（村井）椿壽の門人であれば、上京しても椿壽の（醫）術を持つ人に付くという具合で、其の者が従来の先生を信じるがために、私に波及するのであつて、外の師に従うよりはと申す意と思われる。私も、節度使の部下の將軍が外征の時、陣中の健兒を分け与えられて、戦場で遅れを取らないようにしてもらうのと同様の心持ちだと思ひ、苦しからぬ事とのみ思っている。」

立て板に水を流すように滔々と捲し立てられると、嘆願というよりむしろ茶山に突つかかっているような感じを受ける。

③ 「これからは、廉塾の弟子が訪ねて来たら先生の添え書きが無ければ直に追い返すようにしようかとも思っている。しかし、そうすると世間の人は先生と私の間が不和だと思ふだろう。そうなる私は京には居れなくなり、やむを得ず国元へ引き戻され、以前のように檻養にて身を終えなければならなくなる。そのみがか口惜し

く思われる。」

④「私のことは良いとしても、父が命を縮めることになりはすまいかと、いつものこと乍らやる方なく思われる。国元官辺では、先生の指図で上京していることになってるので、ここをしくじれば終身埋もれ木となつてしまふだろうと、父は心配しているようである。以前国元の不首尾をお救い下さり、そのお札にも尊塾のお世話をしなければならぬ所、又々我儘を言つて上京し、その上いろいろのことで先生を煩わせているので、父は先生に對し合わせる顔が無く、申し訳なく思つていように見受けられる。」

⑤「先生にはたとえ痛く私が憎くても、父が頭を痛めていることを氣遣われぬことはないのでしよう。」
父親の苦衷を慮つて、泣き落として茶山の氣を引こうとしている。「ここまで来れば嘆願と言うよりむしろ脅しに近い言い振りであり、詰つたり脅したり、泣き落としにかかつてはいる。」

⑥「海内諸公で私を知る者は先生を置いては無い。作詩一つも構文一つも、先生の添削を経なければつまらない。只今のように添削が頂かれなければ、たとえ志を遂げても頼るところはなくなる。」

山陽はひたすら茶山に縋り、その温情を願つてゐる。

この手紙に対する茶山の返事がないところを見ると、茶山は山陽の嘆願を全く無視していたようである。

2、春水と山陽の和解

(1) 山陽より篠崎小竹への書簡——春水の有馬温泉入湯の件 (文化十年三月六日付)

茶山は山陽の不埒な行為を許してはいないが、旧來の親友、春水の落胆と苦境を救うべく、二人の間を何とかして和解させてやりたいと水面下で動いて、文化十年、春水が有馬温泉に行く折りを機会に、二人を対面させ父

子の和解を果たさせようとした。

山陽は、春水の有馬温泉入湯の旅のことを人伝に聞いて、文化十年三月六日、篠崎小竹に次のような手紙を送った。

老父（有馬）入湯（の）事は、うすく承り候。實に決候事にや。左あらば、私只今不通にては、此方にて承取出來がたく、是と申も茶（山）翁、不齋威（不機嫌）候故也。こまりたる者に御座候。如何様に申遣候ても、承知せられ不申、是急埒明不申ては、一日増一日に不孝候。何卒御老人（三島）様より茶翁へ取持、枉て齋威せられ候様、偏に御口添奉願候。同じく父執に御さ候へば、事體得宜可申と奉存候。子成は悪者にして、そこを枉て御宥被遣よと被仰遣度候。まけおしみ強き叟故、いけ申間敷候。此義偏に奉煩老拳候。左なければ、老父上り之時、一向つまらぬ者に御座候。生涯之後悔返り不申候。茶翁へは度々申遣候。一字之答なし。私書狀遣しそれへ御口添よりは、私より御願申上候故、御取持被下候と敷。左なくとも、此度之入湯など之事體、被仰遣度奉願候。

「父が有馬温泉入湯の旅に出られることは本当であろうか。私は今、父とは文通も絶たれている。というのも茶山翁の不機嫌が原因で困っている。どうか三島老人様から茶山翁に取りなし、無理にも機嫌を直して頂くよう口添え願いたい。茶山翁は負け惜しみの強い人だから、一通りではいかないかも知れない。父とこの機会に仲直りできないと生涯の後悔となり取り返しがつかないことになる。茶山翁へは度々申し遣ったが一字の返事もない」といった内容である。

山陽は知らなかったがこの件に関しては茶山の根回しもあり、篠崎三島らの働きもあって、山陽父子は再会し和解ができたのである。山陽は後で茶山が自分たち父子の間の調停を取り持ってくれたことを知り、次のような礼状を認めている。

(2) 山陽より茶山への書簡——茶山への礼状 (文化十年五月朔付)

二月廿七日出之尊書、四月四日相達、難有拜披仕候。先以其節益御勇健被遊御座、恭慶之至奉存候。小生無異罷居候條、乍憚御放念可被遊下候。誠に道光上人及山田主人(安藝山田友益)などへ度々煩言調停之義相頼候所、御面倒とも不被思召、御聞納被下、家翁上京に付、篠(崎)・金(山)二家へ態々御狀被遣、小子對面之義、御従史被下候段、難有奉存候。即二家取持に而、此度久々に而對顔相許、頗承歡心候段、全御恩庇と感戴仕候。早速以書狀御一謝可申上筈之處、久々之對面、處々負劍(隨伴)に無寸暇、色々心配之筋も有之やうく此兩三日、事口候様に覺申候に付、認此書、先御謝辭迄、若此御座候。此書未達候前、已に家翁歸途奉訪候而、此地之様子ども、御聞可被遊候故、委曲は不奉汗尊聽候。草々不備 [歡心] 喜び嬉しく思う心。

五月朔

頼徳太郎 拜

茶山老先生

函丈

別啓

道光師などへ遣候書面中之語、又々尊意に觸犯仕候義御座候趣恐入候。是は東行以來、家翁齋威不仕候義、全く先生御機嫌不宜候故と相聞へ候故、ケ様に申上候迄之義に而、前後倒錯仕候は、語言之失に御座候間、不被以辭害志候様奉希候。萬奉期後便候。 [觸犯] 禁止されている点に触れる。禁を破る。

喪 頓首

山陽はこれで茶山の自分に対する機嫌も直ったと単純に思ったようだが、茶山の機嫌はそう簡単には直らなかつた。

3、茶山と山陽の再会

(1) 山陽の心遣い

茶山は江戸詰め藩主阿部正精侯まさよしから召されて、文化十一年五月六日に神辺を発つて東都への旅に上った。山陽とは文通を絶っているので知らせなかつたが、噂でこのことを知つた山陽は、大坂の篠崎小竹に頼んで、茶山の旅程を調べて貰い、武元登登庵景文と共に茶山に会うことができた。廉塾を去つてから三年振りの再会であつた。山陽は茶山が大坂・京都に滞在した数日間を、登登庵と共に専ら茶山の世話に努めた。

〔武元登登庵景文〕(一七六七〜八一八) 備前国和氣郡北方村の人。名は正質、字は景文、通称は周平で、登登庵、行庵、泛庵と号した。幼くして藩校の閑谷齋に入り、神童と称せられた。茶山に私淑し、山陽、田能村竹田ら多くの文人墨客と交わり、諸国を遊歴して悠々自適の生涯を送つた。

五月二十一日、「石場」で別れるに当たつて茶山は「勢田途上 是日與送者別于石場」と題する次の七言絶句を詠んだ。

勢田途上 是の日 送者と石場に別る

蹄輪絡繹路彎環 不識何邊送者還

蹄輪ていりん絡繹らくまきとして 路彎環みちわんくわんす、識らず 何れの邊りあたか 送者の還る。

只有恨人行且顧 滿湖烟雨暗逢山

只恨人ただこんじんの行きて且つ顧る有り、滿湖の烟雨逢山を暗くす。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷五)

車の往来が引き続いて絶えない道は弓なりに曲がり、今頃送つてくれた者はどの辺りを選っているだろうか。只だ私は歩いては何度も後ろを振り返るのだった、湖は烟雨に煙つて逢坂山を暗くしている。

後に山陽はこの詩の上の欄外に次のような評を付けている。「爾時 景文與襄衝雨而還。乞得民家麥稈代笠。亦頻頻回顧矣。」（爾の時 景文と襄と雨を衝きて還る。民家に麥稈（麦の藁）を乞ひ得て笠に代へたり。亦頻頻として回顧す。）つまり、「私たちも雨を衝いて還り、途中、民家で麦の藁を乞うて笠の代わりとし、頻りに後ろを振り返りながら還った」というのである。そうして次の行には「恨人作離人如何」（恨人は離人に作すは如何）の評が有る。「恨人」は「離人」にしたらどうかというのである。又、更に次のようにも記している。「一路新舊逢迎皆殷殷。紀姓字景文及襄、蒙知最舊。而戀戀奉送。乃概乎呼送者而已。不知尊意奚若。」（一路新舊逢迎して皆殷殷たり。紀姓字は景文及び襄、知を蒙ることも最も舊し。而して戀戀として送り奉る。乃て概乎として送者と呼ぶのみ。知らず尊意の奚若を。）つまり、「一路新舊歓迎してもてなし、別れに臨み皆憂えている。登登庵と私は就中最も古い馴染みであり、別れるに偲びがたく思つて送り申し上げているのに、大ざっぱに『送者』とだけであるのはどういう理由からか」というのである。この詩は「是の日送者と石場に別る」というのであるから、「送者」が「登登庵と山陽」であるということは、欄外に山陽が評をつけていなければ分らない。山陽はそこに茶山のわだかまりを感じた。確かにこのときの茶山の気持ちにはわだかまりがあった。それは「送者」と他人行儀な表現をする一方で、「不識何邊送者還」（この雨の中をあの二人は今、どの辺りを還っているだろうか）と氣遣い「只有恨人行且願」（恨みの心を抱く私は歩いては又振り返るのだった）と、些か後ろ髪を引かれるような気持ちを詠っているのだ。

この詩の一首置いた次に茶山は「櫻川有懷韓聯玉」（櫻川にて韓聯玉を懷ふ有り）と題する七言絶句を載せている。

鄭公郷近轉相思 千里交情數卷詩

鄭公郷近くして 轉た相思ふ、千里の交情 數卷の詩。

藤架陰中豆粥 却將片事想仙姿

藤架陰中 豆の粥、却つて 片事を將ちて 仙姿を想ふ。

〔黄葉夕陽村舎詩〕後編卷五)

聯玉伊勢人。近寄余詩、乞紋聞。聯玉曾西上、路歇櫻川茶店紫藤棚下。主人供以豇豆粥。比入京、人間來路佳興。聯玉先舉此、且曰、數日遊況皆不及斯幽致矣。是日、余亦憩此。因賦此。

聯玉は伊勢の人なり。近ごろ余に詩を寄せて、紋聞を乞ふ。聯玉曾て西上し、路に櫻川茶店の紫藤棚下に歇ふ。主人供するに豇豆粥を以てす。京に入る比、人來路の佳興を問ふ。聯玉先づ此れを舉げて、且つ曰く、數日の遊況皆斯の幽致に及ばずと。是の日、余も亦此に憩ふ。因りて此れを賦す。

聯玉の郷里は 此処 桜川から近いので、そぞろにあなたのことが思われる。

千里も離れた処でも 親しい交情を持ち、数巻の詩稿のやりとりをしているのだから。

あなたは桜川茶店の藤棚の陰で、ささげ豆入りの粥を賞味したと詠んだ。

却つてそのさりげない事を將つて、俗を脱した姿を想う。

聯玉は伊勢の人である。最近私に詩を寄せて、序文を頼んできた。聯玉は以前西上し、路に桜川の茶店の紫藤棚の下に歇うた。(そのとき) 主人が豇豆入りの粥を提供してくれた。京に入る比、人が來路の興味深い処を尋ねた。聯玉は真つ先に此れを舉げて言つた、「數日の遊況はどれも、斯の奥深く閑かな趣には及ばない。」と。是の日、私も亦此に憩う。因つて此れを賦す。

〔聯玉〕伊勢の人。先祖は中国の人で日本に帰化した。日本名を山口凹巷と言ひ、字を聯玉と言う。北條霞亭の先輩で、霞亭を都講として廉塾に幹旋した。〔鄭公〕唐の文学者鄭虔、滎陽の人。字は弱齋。家が貧しくて文字を習うのに紙が無く柿の葉を用いた。官は天寶の初めは協律郎、玄宗に召されて弘文館博士、著作郎となる。山水画に巧み、地理に長ず。〔豇豆粥〕ささげの入つた粥。〔片事〕さり気ないこと。〔敘〕序文。

また、三首置いて「呈韓聯玉、韓聯玉同子文來二姪從焉」（韓聯玉に呈す、韓聯玉子文と同に來たり二姪從ふ）と題して次の七言絶句を詠んでいる。

説出胸懷是我倫 相知何問舊將新 胸懷を説き出たせば是れ我が倫、相知何ぞ問はん舊と新。

尤忻今世昌黎伯 温藉終非木彊人 尤も忻ぶ今世の昌黎伯、温藉終に木彊の人に非ざるを。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷五

胸中の思いを話し出してみればまさしく我が友である、知人をどうして旧友と新顔を比べる必要があるうか。尤も嬉しいことは聯玉が今の世の昌黎伯にも比すべき人で、優しく穏やかで、朴念仁でないことだ。

〔子文〕佐藤子文。伊勢国の人。霞亭の友人で文化十年十一月に廉塾に入塾し、文化十一年二月十四日に伊勢に帰る。〔昌黎伯〕唐の韓愈（七六八〜八二四）。字は退之。死後、文公と諡された。昌黎（河北省通県）の人。古文復興運動の指導者。詩人としても白居易と併称される。ここは韓聯玉と韓退之が同姓であるところから、準えた。〔温藉〕優しく穏やか。〔藉〕は人に寛大なこと。〔木彊人〕朴念仁。無骨者。融通の利かない人。

この詩のすぐ前には次の七言絶句がある。

關驛示佐藤子文 子文伊勢人、去年來寓余家今春辭去

關驛にて佐藤子文に示す 子文は伊勢の人なり、去年來たりて余が家に寓し今春辭去す

薇西二月送君時 再會寧知今日期 薇西二月 君を送りし時、再會 寧んぞ知らん今日の期を。

人事難常亦堪喜 勢南一夜復傳屐 人事 常なり難きも亦喜ぶに堪へたり、勢南 一夜復た 屐を傳へんとは。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷五

備後神辺で二月に君を送った時、今日の再会があるなどとどうして思っただろうか。

人事は平常通りにはいかないというが、これ以上の喜びはない、勢南での一夜復た盃を交わそうとは。

「人事」人間の事。「關驛」伊勢の国。関の地蔵で有名。「菰西」吉備の国の西で備後。ここは神辺。「菰」は「備」。「傳扨」伝盃。

「勢田途上 是日與送者別于石塲」と同じ旅先で詠んだ「櫻川有懷韓聯玉」「韓聯玉に呈す」「關驛示佐藤子文」に何れの詩にも名前が明記されている。「櫻川有懷韓聯玉」には「韓聯玉」について、「關驛示佐藤子文」には「佐藤子文」についてそれぞれ詳しい解説までつけているのだから、山陽が訝しく感じたのは当然である。茶山の胸中也山陽に対する「恨」の気持ちは未だ解消していなかったのである。

(2) 茶山の戒め

この東遊中に詠んだ茶山の詩には、旅で同伴した人たちについては皆、名前が記されている。先にも述べたように「櫻川有懷韓聯玉」は後の注に「聯玉伊勢人」と長い説明を記しているし、「呈韓聯玉」にも「聯玉同子文來二姪從焉」と丁寧な引きがつけられている。「關驛示佐藤子文」の引きには、子文についての紹介がなされている。送った人の名前が書かれていないのはこの詩だけである。茶山は此の詩がやがて山陽の目に触れることを承知の上で、意図してそうしたのだと考えられる。それでは茶山の意図したものは何だったのだろうか。それは、山陽のこれまでの数々の不埒な行為に対して、茶山が憤激を抱いていることを知らしめるためであり、後日「恨人」を「離人」にしたらどうかと山陽が評したにも関わらず、直さなかったのは、茶山の抱いた山陽に対する恨みの心を、忘れて欲しくなかったからだと考える。

この旅の道中の六月二日、箱根に宿したとき次の作がある。

宿宮根嶺

驛舎無蚊霧氣清

却忻暑路入山程

驛舎蚊無く霧氣清く、却って忻ぶ暑路

山程に入るを。

誰知今夜宿雲表

枕上近聞湖水鳴

誰か知らん今夜

雲表に宿して、枕上近く湖水の鳴るを聞かんとは。

〔黄葉夕陽村舎詩〕後編卷五)

筥根の宿場の泊まりは蚊もいなくて霧の気配が清々しい、却って嬉しかった暑い道が山路に入ったことが。

誰が知るだろうか今夜雲の上に宿って、枕に近く湖水の波音を聞いていようとは。

この詩の結句「枕上近」の原作は「東山頂」であった。山陽はこの詩の欄外に「三四似不甚承接。作誰知山驛傍湖水、枕上近聞波浪鳴。山程作雲程、或山驛作嶺市如何」(三四甚だしくは承接せざるに似たり。「誰か知らん山驛湖水に傍ひ、枕上近く波浪の鳴るを聞くを」と作し、「山程」は「雲程」に作し、或いは「山驛」は「嶺市」と作すは如何)と評記している。この詩の場合、茶山は山陽の評のように「東山頂」はすんなりと「枕上近」に直しているところを見ると、何が何でも山陽の評を無視している訳ではない。「勢田途上」の「恨人」を「離人」に直さなかつたのは、甘くすれば付け上がる山陽の氣質を茶山は熟知しており、先にも述べたように、山陽の行為に對する茶山の恨みの心を忘れて貰いたくないと考え、敢えて直さなかつたものであろう。

しかし、茶山もこのときは自分の剛情なまでの態度に、幾分自省の気持ち働いていたものと思われる。それは承句・転句の「不識何邊送者還、只有恨人行且顧」の部分で、「この数日、自分のために誠心誠意尽くしてくれ二人が、傘も持たず雨の中を還って行ったが、今どの辺りを還っているだろうか」と心にかかつて、何度も振り返らずにおれなかつたというところから察せられる。

4、茶山の不機嫌はれる

(1) 茶山の辛抱

茶山の山陽に対する不機嫌は、文化六年の歳末、山陽が廉塾に来てから少しずつ積もっていた。それは、山陽が茶山の期待に添う都講でなかったからである。それでも茶山は、できるだけ山陽に合わせるように忍耐強く努めた。

或る日、市村という処に梅見に行ったとき、前に池があり藁屋三四軒、白梅がさかりに咲いているのを見て、茶山が「扱々幽雅なるよき所」とほめると、山陽が「幽雅にはこまり入申し候、此の上の幽雅は御免蒙りたい」と突っかかるような言い方をしており、諸生の一人が村家を指さし山水の画の事を申したところ、「元来あつて益なき家は一軒もなきがよし」と何かにつけて突っかかるような態度であつた。腹ごなしに散策をしたいと山陽が言うので、茶山は寒さを我慢し、酒肴を準備して付き合つたり、入手困難な食べ物も山陽の好みに合わせて調達したり、塾生への依怙最厚にも茶山としての工夫を凝らして補佐したり等々、茶山は相当に辛抱強く山陽に関わっている。しかし、山陽は自分の宿願を叶える為に、茶山の恩情に応えようともせず上京してしまい、上京の際には塾で役立ちそうな書生を連れて出てしまつた。後で茶山が困ることなど全く頓着していない。上京後も自己中心的な嘆願などをして、茶山は迷惑を掛けられることが多く、不機嫌はおさまるところか益々増幅していった。文化十三年（一八一六）正月八日に、山陽が小野移山亭に宛てた書簡の中に「茶（山）叟、菟角機嫌なをらず、如何之事哉と疑惑仕候。コマツタモノ也」とあるところから、その不機嫌は実に数年間にも亘っていることがわかる。その人柄を「温厚寛容」と称される茶山からは考えられないことである。ともあれ、茶山の不機嫌は直

つたのか。直つたとすれば何時なのか。

(2) 春水の死

文化十三年二月十九日、春水が亡くなった。二月十八日に「父危篤」の知らせを受け取った山陽は、その日のうちに京を出立して廿二日神辺に着いた。休む間もなく茶山の駕籠を借り、夜をかけて広島春水邸に着いたのは、春水葬儀の三日後だった。総てを終えて京に帰る途中、山陽が神辺に寄つたのは三月二十四日で、その日のうちに帰るつもりだったが、茶山に引き留められて二十六日まで滞在した。明日は出立という前夜、茶山は「今晚も名残じや」と言つて山陽の泊まっている部屋に話しに来た。山陽は茶山から弔慰の手紙を貰つた礼状を、次のように認めて、既に広島から茶山の元に差し出していた。

先頃夜分唐突罷出候處、乍例御優待、輿丁之義甚奉煩、殊に御輿拝借被仰付、萬端御心付被下難有仕合奉存候。一步も相急候節故、失禮のみ申上候。扱、廿四日早朝迄に駈付申候處、既に葬後三日と申所に而、擲地^{ていぢ}慟哭、五内崩裂仕候。萬々御憫察被遊可被下候。誠に罪惡深重と申事、常言に御座候へ共、如襄^{しんご}則眞^{まこと}个左様にて御座候。先日は竹田貞之丞(器甫)殿便に、御弔書被下、片便に御座候へば、御不沙汰に打過申候。今般又御便被下、北條君、門田君よりも御弔意、忝奉存候。禮俗、喪服中は酬答不仕例に御座候へ共、格別之御義、且先日奉煩候御禮も有之、旁強援筆如此御座候、恐惶不次。

三月七日

不肖孤 襄 拜復

茶山老先生

座下

尚々、北條先生其外へ別に不奉答、宜敷奉煩候。私義も先人存意有之、乍在服、草々歸京仕候様、諸叔も申候。

尤母義淋しがり申候所、見兼申候故、廿日頃迄は滞留仕候様に上へも届置申候。憂服に而執謁候義如何敷奉存候へ共、先人より訓戒之義も申置候事も有之候旨、下りがけにも可被仰聞候。彼是推參仕候覚悟に罷在候。乍此上御見棄被遊不被下、先人在時同様に、不相替御眷顧被遊被下候様、千萬奉冀候。(文化十三年三月七日付)

この手紙で山陽は、「誠に罪惡深重という事は、常に言われる言葉ではあるが、真に私独りに有る言葉のように「思える」と述べているが、これは十数年間に亘り父親を手こずらせ、心配ばかりかけて来た父への懺悔の言葉であると共に、茶山に対する懺悔の気持ちでもあったと思われる。

(3) 茶山の不機嫌解消

山陽は明日は神辺を辞すという前夜、母梅颯に宛てて次のような手紙を認めた。

神邊より申上候。竹原、尾道より連綿申上候通、私義、二十四日朝、尾道着岸仕候而、其日七時前、神邊へ著仕候。先生(茶山)在宿、懇切慰藉。其夜一宿。翌朝(自注―二十五日)出立と存候所、被留候故：岡山之人油屋何某と申好人物、折節來會、明日(自注―二十六日)罷歸候故、私と同道、同人宅に一宿致呉と申候二付、其意にまかせ可申：菅塾二ハ、櫻ハ皆々盛過二而、柳など青々と致居申候。先生に御病中之義ども悉敷御物語仕候。此以後ハ別而御見棄不被下、御在世之時同様ニ不相替御懇意可被成下と、深く相話申候事二候。庭前など、陪從先生之事など存出申候。先生も、寝汗など出候様之症有之候由、左なければ、自身弔ニ可往と存候へ共、不及力候故、四十九日迄之内、名代可遣存居候杯と被申候。：しかし、菅塾ふすま、屏風などにも、大人御遺墨多く御座候故、觸目起感申候事に候。先生(春水)も此方より精神たしかなる人故、いづれ此方が先きと存候處、案外なる事などと被申候。何分命數無致方候：今晚も名残じやとて、先生御はなしニ御出：：

(文化十三年三月二十五日付)

茶山も「先生（春水）は私より精神たしかなる人故、いずれ私が先に逝くと思つていたのに、案外なる事であつた。何分、天命であれば致し方もないこと……」と、しみじみ語つたりして、このとき二人は心の底からうち解けて話し合うことができた。自分の方が先に逝くと思つていたのに、春水に先立たれてしまつた茶山としては、春水が生きている間に山陽との仲を修復しておけばよかつたと、後悔の念があつたのだろう。茶山と山陽の間の数年間に亘つて続いたぎくしゃくした関係は、この時を機に氷解した。その後、茶山が亡くなるまでの十年余り、ある時は詩友として、又ある時は父親代わりとして茶山と山陽の仲は続いた。

5、茶山の死

文政十年（一八二七）八月十一日、「茶山重体」の知らせを受けた山陽は、莫大の思誼ある先生のこと、直ぐにも見舞いたくて取るものも取り敢えず、八月十二日に京都を發つて西下した。その帰途・到着後のことなどを、山陽は五言律詩四首に詠んだ。

問蒼翁病不及而終賦此志痛四首

蒼翁の病を問ふも及ばずして終る 此れを賦して痛みを志す 四首

(一)

治裝忙上路 聞病遠關心

装を治めて 忙しく路に上る、病を聞きて 遠く心に關く。

暮宿追星見 宵征送月沈

暮宿 星の見るるを追ひ、宵征 月の沈むを送る。

吾行雖意憚 父執念恩深

吾が行意に憚ると雖も、父執 恩の深きを念ふ。

冀及少閒日 猶陪微醉噓

冀はくは 少閒の日に及び、猶 微醉の噓に陪せん。

慌ただしく旅支度を調べて西下の道に着いた、「病重し」と聞いて気にかかる。

日暮れの宿星を見ながら、夜をかけてひたすら歩き月の沈むのを見る。

私の行いは心に憚るところはあるが、父の親友の恩の深さをつくづく噛みしめている。

どうか暫くの間でも病がよくなって、ほろ酔い機嫌の吟にお付き合いたいものだ。

〔宵征〕夜、歩く。〔父執〕父の親友。〔少聞〕病気が少しはよくなる。

(二)

聞病趨千里 中途得計傳 病を聞きて千里に趨り、中途にして計傳を得たり。

不能同執縛 顧悔晚揚鞭 同に縛を執る能はず、顧て悔ゆ鞭を揚ぐることの晚きを。

舊宅柳依約 空幃燈耿然 舊宅柳依約として、空幃燈耿然たり。

傷心臨沒語 待我託遺編 心を傷ましむ臨沒の語、我を待ちて遺編を託すと。

「病重し」と聞いてひたすら走り続けたが、途中で訃報に接した。

皆と一緒に棺の綱を取ることができなかった、出発するのが遅れたことを後悔するばかり。

到着したとき廉塾の柳はぼんやりとして、人氣のない部屋の灯りはほのかに明るかった。

心が痛む 臨終の時のことば、私を待つて『黄葉夕陽村舎詩』の遺稿を託すと言われたという。

〔縛〕棺を引く綱。〔舊宅〕廉塾。〔依約〕ぼんやりと立っているさま。

(三)

忘年呼小友 知己獨斯翁 忘年小友と呼ぶ、知己獨り斯の翁。

推輓藝場上 拔離官網中 推輓す藝場の上、拔離す官網の中。

一尊時燭跋 千里屢郵筒 一尊時に燭跋、千里屢ば郵筒。

寂寞文章事 細論誰復同 寂寞たり 文章の事、細論 誰か復た同にせん。

年令の差を忘れ 私のことを「若い友」と呼んで下さった、私をよく知ってくれているのは先生だけ。
 芸場の上に推薦して下さったり、官網の中から抜き離して下さった。

酒樽を傾けて夜が更けるまで飲んだ、遠くまで度々書を送って下さった。
 寂しくなった 詩文の事、これからは誰と細論をたたかわせばよからうか。

「推輓」人を用いるようにと上の人に薦める。「推」後ろから押す。「輓」前から引つ張る。「燭跋」灯火が燃え尽きて夜が更けたこと。

(四)

曾栽記花木 手畜識鵝鳧 曾て栽^うゑし 花木に記^{おぼ}えあり、手づから畜^かひし 鵝鳧を識^しる。

觸目皆堪涕 辭門未作驅 觸目皆涕するに堪へたり、門を辭して 未だ驅^なを作さず。

新阡勞顧望 舊校慮荒蕪 新阡顧望を勞し、舊校 荒蕪を慮^{おも}はる。

分手勉孤子 肯能堂構無 手を分かつとき 孤子を勉めしむ、肯て 堂構^{だうこう}を能くするや無^{いな}や。

〔賴山陽全書〕詩集)

嘗て植えた花木に覚えがあり、自分で飼っていた鶯鳥や鴨にも見覚えがある。
 目に触れるもの皆 涙の種、門を出てもまだ歩き出すことができない。

新しい墓道を振り返ってみて、廉塾が荒れ果てるのではないかと心配だ。

別れるとき孤子(菅三)を励ましたが、ちゃんとうまくやってくれるだろうか。

「鵝鳧」「鵝」がちよう。「鳧」かも。「新阡」新しい墓道。「舊校」廉塾。「孤子」菅三。茶山の甥、萬年(公壽)の子で、廉塾の後を嗣いだ。この時は十八歳であった。「堂構」父祖の業を立派に継ぐこと。

京都を発つ前に宮原節庵（山陽の門弟、尾道の人）に宛てて、手紙を書き送ったがその中に「…脱官網には莫大な恩誼有り、不可惣然不往、養子不縁などは氣毒千萬に候。如何なる事ニヤ、それも承に可參候。」と述べた部分があり、「脱藩騒動の時には莫大な恩誼を受けていることではあるし、それほど憂うことではないかも知れないが、朴齋の離縁のことなども聞きたいし、兎に角急いで行つてみよう」という程度で、この時点ではまだ幾分の余裕があり、切羽詰まった状態とは思つていなかったようだ。しかし、帰途の途中で訃報に接してからの落胆ぶりは、詩によく表れている。茶山の臨終に間に合わなかったことへの後悔が「不能同執紼、願悔晚揚鞭」（同に紼を執る能はず、願て悔ゆ鞭を揚ぐることの晩きを）と詠っている。「傷心臨没語、待我託遺編」（心を傷ましむ臨没の語、我を待ちて遺編を託すと）には、茶山もどんなにか山陽の到着を待ったであろうとその心底を思い遣り、山陽もどんなにか「臍を噛む」思いをしたことであろうと察する。第三首では、「自分を最もよく理解し、分かってくれる人は茶山をおいてはない」と言い、「これからは誰と共に詩文のことを語ればよいのか、語る人はいない」と嘆く。しかし、気を取り直してこれからの廉塾のことに思いを致し、普三に望みを託すのである。

山陽の胸中には、これまでの茶山の温情が目まぐるしく駆けめぐり、父、春水の死に臨んで抱いた懺悔と同じ思いが湧いて来たのではなからうか。

まとめ

茶山は初対面の山陽に対して「久太郎甫九歳、秀發不好戲弄。喜客侍坐、終日不倦。學詩及書畫。皆可觀」と『遊藝日記』に認めているように、秀発にしてなかなか見所のある子どもだという印象を抱いた。以後、十八歳の山陽に再会するまで会うことはなかったが、父親の春水や叔父の杏坪から、山陽の作った詩などを見せられた

りして、その才能を高く評価していた。寛政五年四月六日付け頼杏坪宛茶山書簡に次のように認められている。
 「久太郎様御作よく御出来なされ候、書も見事に候、さてさて御羨しき御事、私共に於ても大慶に存じ奉り候、千秋兄（春水）に申候へば、諛（つちやう）に似申候故申さず候ひきき令兄様（春水）は江戸御留守也、萬事我が兄（杏坪）御世話、漂煦宜しきを得候らん、莫大の御手柄と存じ奉り候」
 「御作よく御出来なされ候」と述べている山陽の詩とは、寛政五年（一七九三）正月に詠んだ「癸丑歳偶作」と題する次の古詩である。

十有三春秋 逝者已如水 十有三春秋、逝（ゆ）く者 已（すで）に水の如し。

天地無始終 人生有生死 天地 始（し）終（つう）無く、人生 生死有り。

安得類古人 千載列青史 安（い）くんぞ 古人に類して、千載（せんざい）、青史に 列するを得ん。

「十四歳を迎えた今、過ぎ去った十三年を振り返ると、月日の移り変わりの早いことを実感する。真（まこと）に月日は川の流れのように一刻も休まず移り変わって二度と帰っては来ない。天地は悠久で永久不滅の存在である。それに対して、人間は生まれたならば必ず死ななければならない。そうであるならば、何とかして古の偉人（のぶと）に類り、歴史の上に我が名を留めたいものだ」と、先ず自分の過ぎ去った十三年の日々を振り返り、続いて悠久なる天地と無常なる人生に思いを致し、終わりに自分の将来の抱負を詠っている。

寛政五年（一七九四）の正月、父春水は江戸に祇役（しやく）していたため、山陽はこの詩をすぐに父に送った。春水は友人の赤寄海門に見せた。海門は感心して昌平黌の教授である柴野栗山に見せた。栗山はこれまで山陽の才能の優秀であることを聞き及んでいたので、春水に「千秋（春水）、子あり、これをして實才たらしめず、乃ち詞人たらんことを欲するか。宜しく先づ史を讀み、古今の事を知らしむべく、而して『通鑑綱目』より始めよ」即ち、「春水はよい子を持たれた。詩人として終わらせるのではなく、実才（實際の役に立つ才能）を成就させてはどうか。

先ず歴史を研究させ、『通鑑綱目』から始めさせたらどうか。」と言ったといふのである。

この年の六月四日に海門は西帰し、途中広島に頼杏坪を訪ねて本川の水楼で一酌した。春水は赤寄海門が西帰する時には、春水邸に寄って栗山の言ったことを裏に伝えて欲しいと頼んでいた。その場に山陽も侍坐していたことでもあり、海門はこれを伝えた。『頼山陽全書』全傳上巻に「赤寄先生、藝に過ぎりて裏に諗ぐ。裏乃ち發憤してこれを讀む。」とある。山陽の学問の方向はこの栗山の言葉にその基が築かれたのではなからうか。

ともあれ、茶山が九歳の山陽と初めて出会ったとき、「秀発にしてなかなか見所のある子どもだ」という感想を抱いたが、十三、四歳の頃の山陽は春水にとっても自慢の息子だったのである。

〔赤寄海門〕（一七三九〜一八〇二）薩摩国谷山村の人。諱は楨幹、字は彦禮、通称は源助、海門と号した。熊本の藪孤山の門に入り、薩摩に帰ってからは藩主島津重豪に登用され藩校造士館の助教となる。しばしば江戸と薩摩の間を往復した。晩年は幕命により昌平黌で書を講じた。〔祇役〕江戸時代、参覲する藩主に従って江戸勤めをする。〔通鑑綱目〕「資治通鑑綱目」の略。書名、五十九卷。宋の朱熹が『資治通鑑』によって別に義例を設けて、「綱」と「目」とにわけて纏めた史書。

茶山は春水・春風・杏坪、所謂る頼三兄弟と終生親族にも劣らぬ親密なる交際を持った。そのため山陽が廉塾で都講としてその任を果たしてくることを切望したが、その期待は悉く裏切られた。

廉塾に来てからの山陽の行状を認めた杏坪宛ての書簡（4「山陽の廉塾生活」の所に既出）には、幾分の誇張があるかも知れないが、それには理由があった。その理由は次に掲げる伊沢蘭軒宛菅茶山書簡（『頼山陽全書』全傳上巻）に語られている。

追啓内書 御覽後火中

先達而兩度、久太郎事申上候へども尋常之事ニ而御坐候。勿論、人之惡事を一々に申上候も心にあらざ候故、ざつとあらく笑話とも奉存候也。然るに、此頃承候へば、周兵衛出府いたし候次に、取なしに而君側之人へも申上、京よりつれ歸りて、又神邊塾へおし入レ候隱謀有之候よし。うそか、誠かしれず候へども、爲念申上候、一通り御きゝ可被下候。

一、前年（寛政十二年なるべし）、久太郎藝州公府之贗手形をいたし候事あらはれ、入牢きじきよ殿科とも可申候處、狂氣と申たて、檻へ入レ、あたまをそりて坊主にし、やうく事にまぎらかし候由。そのうち狂氣快見へ候故、檻を出し申度願にて、また髪をたて候し。

一、去々年か、土家之妻か、後家かを姦通いたし、其繪すがたをかけ物にいたし、自身、詩にて贊をし、こゝかしこもちありき候よし。其事、大評判、また官裁かゝるべき所を晉帥たのまれ、季布廣柳車（楚の季布、任俠の名あり、項羽、兵に將たらしめ、しばく漢の高祖を窘めしが、羽滅びて後、高祖、懸賞して布の所在を探求す。布は濮陽の周家に匿れしが、周家の主人、布を廣柳車の中に置く。茶山、自ら擬す）の心に引きうけ候。（自注——然るを（文化七年十二月）來ると三月もたゝず、晉帥をおとし入レンと計り候。）

一、備前某（岡山的那須耕助なるべし）と云豪家へ、金をかり二遣し、これも贗狀ニ而取出し候よし。この類ハ、處々ニ而多候事ニ御坐候。右之類之事、多候よし。私ハ、よくいひきかせ、行々志改り候ハ、塾後住にも可仕心に御坐候處、中々顔色・氣持、急に直り候様にも見へ不申、（ことし春）彼が望ニまかせ、上京いたさせ候。かゝることハ、備後ニ而ハかくしてやり候心、誰にも不申候故周兵衛なども、しり不申候。もし君側之人へも可申候様之ことも御坐候ハ、宜奉願上候。尤、周兵衛が右之企も、人の推盤ニ候へども、さも無之事もあるべし。左候へば、穩便も宜候。私も三四十年之志に而、蕞爾さいじ小書院（廉塾）をたて、御前（藩主）を奉勞、御手跡之額をも願うけ、永久にも傳度候處、かのごとき輩ニ附し候ハ、心ニ非ズ候、御推察可被下

候。都合を申せば、藝侯ハ學問ずき也、彌太郎ニハ一子也、藝州に而何も不被用、藝に居らぬ奴といふ處にて見候へば、判然たることも候へ共、私も、あれほどニあらふとハ、夢にも不存候ひき。かへすくも周兵衛もし此事を打いださず候ハ、大幸に候、それなりに御秘し可被下候。

勿論、事、大になり、言てかへらぬこと、我兄御身の越度にもなりそふに候ハ、御用心可被下候。か様に申上候こと、備後へハ、いよくしれぬがよく候。(故高橋太華氏遺愛)

周兵衛とは「河相周兵衛」のことで、家は備後深津郡千田村の庄屋で土地の有力者であり、茶山とも遠戚関係にある。福山藩の用達を勤め、義倉を創設して藩財政の立て直しに尽力した功労者でもあった。その周兵衛が、山陽を再び廉塾に取り戻そうと画策しているという噂が、茶山の耳に入った。そのような事になったら、山陽の爲にも、頼家の爲にも、廉塾の爲にも良い結果を生まない、どうあってもこの企ては阻止せねばならぬと茶山は考えたのである。伊澤蘭軒は茶山とは年来の親交があった。福山藩の典医で儒者でもあり、藩主の信任も厚かったので、藩の方にそういう働きかけがあったら頼むという気持ちを込めて認めたものである。

茶山にとつては、山陽を父親の元に帰すのが最も楽な方法だったのであろう。しかし、そうすれば伸びるはずの山陽の才能は、發揮されずに萎んでしまふに違いない。(文化八年五月十五日付け 頼杏坪宛 茶山書簡) 又、「一生之交友中真知己と申物晋帥一人也」(文化八年五月十五日付け 頼杏坪宛 茶山書簡) (頼桃三郎『詩人の手紙』) と思つてくれている春水やその兄弟に、悩みの種の丸投げはとても出来ない、茶山もつおいつ考え抜いた挙げ句に、山陽を上京させることが最善の道だと判断したのである。物事を感情的に処理するのではなく、最善の策を冷静な判断でもつて考える度量と忍耐強さが茶山にはあった。

その後、茶山と山陽の間には交わりの途絶えた一時期があったが、廉塾を去った山陽に対して、茶山は脱藩以来再び勘当同然になつていた父子の間(春水は、山陽が茶山の厚意を無視して廉塾を去ったことに対する怒りと、

茶山への気兼ねもあつて、山陽とは二年余り音信不通であつた。を取り持ったり、詩の批正をしたり、何くれと無く面倒を見た。山陽も旅先から珍しい酒などを贈つたり、詩作の数々を送つたり、母を伴つての上京の途中に廉塾を訪ねて逗留したりと、終生子弟の関係を超えて父子のような関係を続けている。「茶山先生行状」の中で、山陽は次のように云う。

襄之父及叔父、自在浪華、與先生交。及歸仕國、祖距不甚遠、交如兄弟。襄於先生、既爲父執。嘗辱援引、督其塾生周歲、已而入京師、郵筒往來、未嘗斷絕。過見獎許、號爲知音、每作一詩、未嘗不示及。

襄の父及び叔父、浪華に在りし自り、先生と交はる。歸りて國に仕ふるに及び、祖距甚だしくは遠からず、交はり兄弟の如し。襄の先生に於るや、既に父執爲り。嘗て援引を辱うし、其の塾生を督すること周歲、已にして京師に入り、郵筒往來、未だ嘗て斷絶せず。過ぎりて獎許せられ、號して知音と爲し、一詩を作る毎に、未だ嘗て示し及ぼさずんばあらず。

「祖距」道の隔たり。「父執」父の親友。「周歲」滿一年。「獎許」⁺獎め許す。「知音」心をよく知つてくれる親友。

また、山陽は『黄葉夕陽村舍詩』遺稿の序を撰して次のように記している。

每託京商賣繅還者、寄示詩稿歲兩次、促使評隲。辭不敢、曰、然則、吾商子詩亦應辭也。余不得已、細論相質。毎に京商の繅を賣りて還る者に託して、詩稿を寄示すること歳に兩次、促して評隲せしむ。辭して敢てせざれば、曰く、然らば則ち、吾も子が詩を商することを亦應に辭せんとすべしと。余 已むを得ずして、細論して相質す。

「繅」合わせ糸で織つた目の細かい絹織物。中国で古く書物の巻物の材料とした。「評隲」批評をして正す。

性格的には自己中心的で気まま勝手な山陽ではあったが、茶山はその才能を高く評価していた。茶山の期待や厚意を踏みにじって、廉塾を飛び出して行った山陽を許し、三十七歳で父春水に死別した山陽に、茶山は父親代わりとも云えるほど親身に関わった。茶山は大きな度量と公正なる判断力と人を見る目の確かさを備え持った人であったと云えよう。

第四節 茶山と門田朴齋

門田朴齋（一七九七〜一八七三）は文化五年（一八〇八）、十二歳で廉塾に入門して、茶山の教えを受けることとなった。そのころは既に五言絶句を二十九首も作っており、茶山もその才能を高く評価していた。二十歳で安那郡西法成寺村の庄屋に任じられたが、殆ど廉塾で起臥していた。二十四歳の一月、子どものいない茶山から養子に望まれて菅姓を名乗り、二十五歳の頃からは茶山を援けて廉塾での助教もした。茶山に随従して観梅や、重陽の山登り、福山藩老中の詩会などにも参加して十分に才子振りを発揮した。ところが茶山の養子となって七年後、突然にこの養子縁組は解消された。茶山の後室、宣のぶ（朴齋にとつては伯母）が亡くなって一年余りしか経っていない時で、茶山の亡くなる一か月余り前のことであった。その理由は何であったのか、この事柄を通して茶山の「人と為り」について考察する。

一、朴齋の生い立ち

朴齋の「字號」について濱本鶴賓氏は、『備後史談』第八卷第一號に「朴齋 幼名は小三郎、又正三郎、一時東作といふ。諱は少年時 惟隣、後ち重鄰。字は堯佐。號は初め百溪、又綠峯、干々齋、後ち朴齋。隱居して朴翁。茶山の養子時代は蕉叢と稱した。」と紹介し、続いて第三號で詳しく次のように記している。

本傳(一) 字號の項に、朴齋が茶山の養子時代『菅蕉叢』と稱したとあるは『菅憇叢』の誤字である。朴齋は初憇め「惟鄰」と字した。「惟」の古文は「憇」、「鄰」の古文は「叢」である。即ち二字ともに古文を用ひたものである。惟は『説文』に「凡思世从心隹聲」とある。鄰は『書經』に「臣哉鄰哉」とある。左右の輔弼を「鄰」といふので、字の意義は大体解る。「隣」は「鄰」の俗字である。文政八九年の詩には「奉乞頼山陽先生慈斧 菅叢拜具」と記し、山陽はその詩稿に「小菅詩艸」と朱書してゐる。小さい茶山といふ意であらう。

朴齋の父は備後国安那郡百谷村の山手八右衛門重武、母は同郡西法成寺村の門内正峯の三女で、茶山の後妻である宣の妹である。重武の父重由が家産を失つたので重武夫婦は門田氏に拠るところとなり、寛政九年(一七九七)二月十八日、門田家で朴齋を出産した。その翌年、両親が離婚したので朴齋は母の兄、久兵衛政周(品治郡の大庄屋)に育てられ門田姓となる。朴齋が誕生したとき茶山は五十歳。山陽十八歳。(山陽はこの年、杏坪に連れられて江戸に行く途中、初めて神辺に茶山を訪う)家には久兵衛政周の子で、朴齋より三歳年長の富十郎(のち儀右衛門と改称。諱は政資、字は富卿、晩年鶴翁と號す。文化四年十四歳で西法成寺村、服部本郷両村の庄屋となり、慶應三年七十四歳で歿す)がいて、朴齋を実弟のように可愛がった。母は大婦の後、御調部諸毛材医師萩原仲禮に再嫁する。父は文政五年正月三十日、五十八歳で病没し、朴齋の兄紋三郎重經が山手家を嗣いだ。門

田家は代々庄屋で門閥家であった。

二、廉塾の時期

1、入塾

朴齋は文化五年（一八〇八）八月十三日、十二歳で廉塾に入門した。そのときの様子が朴齋の六男の『先考朴齋府君行狀』（以下『行狀』とする）に次のように述べられている。

文化五年戊辰、君年甫十二、入茶山蒼翁之門、始受句讀。幼而聰敏穎悟、數月終四書五經句讀業、歲暮粗通經史大儀、兼賦詩若干。茶翁及僧道光、大愛賞其才。…

文化五年戊辰、君年甫^{はじ}めて十二、茶山蒼翁の門に入り、始めて句讀を受く。幼にして聰敏穎悟、數月にして四書五經の句讀の業を終へ、歲暮粗^はぼ經史の大儀に通じ、兼ねて詩若干を賦す。茶翁及び僧道光、大いに其の才を愛賞す。…

朴齋はこの年二十九首の五言絶句を詠み、茶山の批正を受けて『服池漁唱』と名付けた詩稿を作る。門田家の近くにある池が服部池と呼ばれていたところからそれに因んで名付けたものである。その最初の詩は次のようなものである。

九月十三夜見月 三首 九月十三夜 月を見る 三首

(一)

明月穿湘箔 開樽興不孤 明月 湘箔を穿ち、樽を開けば興 孤ならず。

把盃同宴喜 人各醉如愚 盃せきを把とりて 宴喜とくを同とにし、人 各おのの酔よひて 愚おろなるが如し。

明月は竹の簾すだれを穿くち、樽さかを開ひけば 興趣きんそは一通りではない。

盃せきを把とつて 酒宴しゆゑんの楽たのしみを同とにし、人ひとはそれぞれが酔よつばらい 愚おろか者のようだ。

〔湘箔〕竹の簾。〔宴喜〕酒盛りをして楽しむ。

(二)

雲霽臨明月 清光到井梧 雲はは霽はれて 明月めいげつに臨まみ、清光せいこう 井梧けいこに到いたる。

共傾樽酒盡 乘醉正踟躕 共ともに傾かけて 樽酒さかは盡つき、酔よひに乘のじて 正ただに踟躕ちゆうじゆうす。

雲はは霽はれて 明月めいげつを臨まみ、清せいらかな光ひかりは 井戸端いどのの青梧せいこに到いたる。

皆みなで傾かけて 樽酒さかは盡つき、酔よひに乘のじて 足元あしもとはためらう。

〔踟躕〕ぶらつく。ためらう。ぐずぐずする。

(三)

嬋娟今夜月 庭樹露華凝 嬋娟せしげんたり今夜こんやの月つき、庭樹ていじゆ 露華ろゑ 凝こる。

綺席開樽酒 賞遊興可乘 綺席きせき 樽酒さかを開ひき、賞遊しょうゆう 興きん 乘のずべし。

艶えんやかで美しい 今夜こんやの月つきは、庭ていの樹じゆの露華ろゑに注つがれる。

美しい宴席いひげに 樽酒さかを開ひき、遊あそびを楽たのしみ 興きんに乘のるべし。

〔嬋娟〕艶えんやかで美しい。色いろつやが美しい。〔綺席〕美しい宴席。〔賞遊〕遊あそびを楽たのしむ。

文化六年（一八〇九）朴齋は十三歳を迎え、廉塾での生活も二年目に入った。この年、詩の多くは七言絶句で二、三首の七言律詩を交えて八十首の詩を詠んでいる。

佐谷泉五十川水野諸君自讚州還賦此呈

佐谷 泉 五十川 水野の諸君 讚州自り還る 此れを賦して呈す

別來蕭瑟獨悲哀 堪羨四君賦作才 別來蕭瑟として 獨り悲哀、羨むに堪へたり 四君 賦作の才。

定識逍遙多雅興 今朝海上泛舟回 定めて識る 逍遙して 雅興の多きを、今朝 海上に 舟を泛かべて回る

〔備後史談〕第八卷第一號

別れて以來 ひっそりと寂しく 獨り悲哀にくれていた、羨ましいかぎりだ 四君の賦作の才は。

はつきりと分かる 逍遙して 雅興の多かつたことが、今朝 海上に 舟を泛かべて回つてきた。

〔蕭瑟〕秋冬の間に木の葉を落とす風の音。〔佐谷〕佐谷惠甫。筑前秋月藩の藩医、箕浦東伯の子。

〔五十川〕養洲五十川篤悦。五十川初堂じんどうの父。

2、朴齋の廉塾生活

文化六年（一八〇九）十二月二十九日（大晦日）、頼山陽が廉塾に都講として来た。朴齋と山陽は初対面であった。一夜明けて翌文化七年（一八一〇）、朴齋は十四歳の元旦を迎え、次の七言律詩を作り茶山に呈す。『行狀』に「年甫十四、元旦君賦七律、以呈茶翁。會頼山陽翁在坐、見之大歎賞曰く、此子奇才、眞老手也。」（年甫はめて十四、元旦君 七律を賦し、以て茶翁に呈す。會たまたま頼山陽翁 坐に在り、之を見て大いに歎賞して曰く、此の子奇才、眞に老手なり。）と記されている。その詩は次のようなものであった。

文化庚午元日 文化庚午の元日

春到乾坤淑氣催 海東捧日瑞雲開 春は乾坤に到り 淑氣 催し、海東 日を捧げて 瑞雲 開く。

塔前着緑千條柳 門外放香五出梅 塔前 緑を着く 千條の柳、門外 香を放つ 五出ごしゅつの梅。

幽谷早鶯遷樹轉

崑丘仙鶴挾雛來

幽谷の早鶯樹を遷りて轉り、崑丘の仙鶴雛を挾みて來る。

團欒同慶太平代

復對辛盤把壽杯

團欒 同に慶ぶ 太平の代に、復た辛盤に對し 壽杯を把る。

〔備後史談〕第八卷第一号

春は天地に到り 新春の穏和な気がきざす、海の東から日を捧げてめでたい雲が開けてくる。
堦きざしの前には 緑を着けた 千條の柳、門の外には 香を放つ 五出の梅。

幽谷の早鶯は 樹を遷つて轉り、崑丘の仙鶴は 雛を挾んでやつて來た。

團欒 同に慶ぶ 太平の代に、復た 辛盤に對し 祝いの杯を把る。

「文化庚午」文化七年。「五出」花卉が五枚あること。楊荊の「梅花落詩」に「窗外一株梅、寒花五出開」

(窗外一株の梅、寒花五出開く)とある。「辛盤」元日に食して春を迎える食物。葱・韭・蒜(んにく)

・薤(らっきょう)・蒿芥(からしな)など五種の辛い野菜を混ぜて盤に盛った物。五辛盤ともいう。

在塾中の朴齋については『行狀』に「日夜奮勵、研磨經史、傍學詩文、才學益進」(日夜奮勵して、經史を研磨し、傍ら詩文を學び、才學益す進む)とある。この年六十八首を作り、悉く山陽の批正を受けた。朴齋は毎日山陽の教えを受け心から山陽に傾倒していった。

茶山を慕つて廉塾を訪ねる人は近郷のみならず、九州や四国など遠來の客も多く、田舎生活の無聊を託っていた山陽にとっては、唯一の刺激であった。この年の二月六日には豊後国日田の館林萬里が廉塾を訪れた。朴齋は次の七言絶句を詠んだ。

館林萬里見過其明日小寺子和來 分韻同賦

館林萬里過らる 其の明日 小寺子和來る 韻を分ちて同に賦す

習習春風花發初 喜迎二子到茅屋

習習たる春風花發くの初め、喜び迎ふ二子 茅屋に到るを。

留君投去双車轄 同賦新詩興有餘 君を留めんと投去す 双車の轄、同に新詩を賦して興餘り有り。

〔備後史談〕第八卷第一号

そよそよと吹く春風に花も開き始めた、嬉しく迎える館林萬里と小寺子和が来られたのを。

君を留めようと投去する 双車の轄、同に新詩を賦して興は尽きない。

〔館林萬里〕豊後国日田の人。幼少の頃から廣瀬淡窓の家に寄寓し、淡窓に句読を受ける。(第二章三節「茶山と山陽」参照) 〔小寺子和〕(一七八二〜一八四九) 名は廉之、字は子和、葵園と号した。儒者。敬業館の教授。笠岡の稻荷神社の祠官で敬業館の教授でもある小寺清先の三男。〔習習〕春風がそよそよと吹くさま。和らぎのびるさま。〔轄〕車軸の端につけ車輪を止めつける鉄製の轄。〔投轄〕懇ろに客を引き留めること。来客が乗って来た車の轄を井戸に投げ込んで、急用があっても帰れないようにした故事〔漢書〕陳遵傳)。

このとき山陽は次の七言律詩を詠んでいる。

豊後館萬里見過其明備中小寺子和來 同賦

豊後の館萬里過らる 其の明備中の小寺子和來る 同に賦す

面識神交逢兩難 豈圖今日此團欒 面識 神交 逢ふこと兩つながら難し、豈に圖らんや 今日 此の團欒。

新知忽趁舊知到 客土便爲郷土看 新知 忽ち舊知を趁ひて到り、客土 便ち郷土と爲るを看る。

彭澤柳楊烟合淺 洞庭蘋藻水猶寒 彭澤 柳楊 烟は合に淺かるべく、洞庭 蘋藻 水は猶寒し。

東西各自分飛去 濁酒且無辭罄歡 東西 各自 分れて飛び去る、濁酒 且く歡を罄すを辭すること無かれ。

〔頼山陽全書〕詩集卷六)

面識ある者と神交のみであった者が一堂に会することは難しい、思いも寄らなかつた今日の此の團欒は。

新しい知人は忽ち昔なじみを追うてやつて来て、他郷は便ち郷土と為つたのを見る。

淵明の柳楊の烟は当然のこと、淺いに違ひない、洞庭湖の蘋藻をとるには水がまた寒い。

東西に各自分れて飛び去つて行く、濁酒を且く飲んで、飲待を罄すことを、辞退しないで欲しい。

〔面識〕互いに顔を見知っていること。知り合い。〔神交〕精神上の交わり。互いに名を慕うだけで、まだ顔を合せていない交わり。〔趁〕追う。良い機会を掴む。〔彭澤〕陶淵明のこと。〔蘋藻〕かたばみも。古来これを取つて宋廟を祭り王侯にすすめた。

二月十日 茶山・山陽・朴齋等は豊後に帰るといふ館林萬里を見送り旁々、沼隈郡山手村の榮谷に遊ぶ。この夜雨が降り、萬里は神辺に帰つて改めて十一日に出発した。この時、朴齋は次の詩を詠んだ。

榮谷看梅 榮谷に梅を見る

鶴橋西去訪梅花

花滿孤村澗水涯

鶴橋

西去梅花を訪ふ、花は滿つ 孤村 澗水の涯り。

笑艷幽香依老樹

嘖嘖戲鳥惜飄葩

笑ひて

幽香を艷ぎて 老樹に依り、嘖りて 戲鳥を驅ひて 飄葩を惜しむ。

短籬矮屋踈疎竹

細草微風淺淺沙

短籬

矮屋 踈疎たる竹、細草 微風 淺淺たる沙。

對此能成幾時賞

又催歸杖夕陽斜

此れに對して 能く成さん 幾時の賞、又 歸杖を催して 夕陽斜なり。

〔朴齋先生詩鈔〕初編上

鶴橋を西に去つて梅花を訪ねる、花はひっそりした村 谷川の涯りに満開だ。

笑つて幽香を艷いで 老樹に依り、嘖りて 戲鳥を追い払い ひらひらと散る花びらを惜しむ。

短い垣根 低い家 まばらな竹、細草に微風 浅い水際。

これらに對してどれほどの楽しみを成すことができようか、又 帰りをうながして 夕陽も斜になつた。

〔飄葩〕ひらひらと散る花びら。〔艷〕臭いをかぐ。〔矮屋〕低い家。

陪茶山先生頼子成看梅榮谷 茶山先生 頼子成に陪して梅を榮谷に看る

尋梅携杖去 花發繞村居 梅を尋ね杖を携えて去けば、花は發きて村居を繞る。

共坐幽香裡 傳杯興有餘 共に坐す幽香の裡、杯を傳ふれば興に餘り有り。〔備後史談〕第八卷第一号)

梅を尋ね杖を携えて去けば、花は開いて村の住まいを廻っている。

皆で一緒に坐る幽香の裡、杯を廻せば興は尽きない。

〔幽香〕 幽かな香。

茶山は、次の七言絶句を詠んでいる。

送館萬里到梅林分得韻微 館萬里を送りて梅林に到る分ちて韻に微を得たり

離宴尋梅向翠微 生憎雪白照征衣 離宴 梅を尋ねて翠微に向かふ、生憎に雪白く征衣を照らす。

清香滿谷携難得 付與東風送客歸 清香 谷に滿ち攜へんとするも得難し、東風に付與して客の歸るを送る。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷三)

別れの宴を開こうと梅を尋ねて青い山に向かう、生憎雪が白く旅衣を照らしている。

清らかな香りは谷に満ちているが携えることは難しい、春風について客の還るのを送る。

〔離宴〕別れの宴。〔翠微〕青い山に霧が立ちこめている形容。

山陽は次の七言絶句を詠んだ。

觀梅榮谷 梅を榮谷に觀る

自是尋春去較早 氷肌不許窺全姿 自らは是れ春を尋ねて去くこと較早し、氷肌許さず全姿を窺ふを。

猶勝卷裡埋頭去 數尺瓶頭看一枝 猶勝る卷裡頭を埋め去り、數尺の瓶頭一枝を看るに。

〔頼山陽全書〕詩集卷六)

春を尋ねて去くには少し早い、梅の花は全姿を見せることを許してはくれない。それでも書物の中に頭を埋め去り、数尺の瓶に一枝を看るのよりは勝っている。

〔氷肌〕氷のように清く美しい肌。梅の花の形容。

三月二十一日 備前の武元君立が来訪。二十七日まで逗留。朴齋は次の七言絶句を詠んだ。

暮春備前武元君見訪 暮春 備前の武元君 訪はる

楊柳青青隼水涯 偶然剥啄日斜時 楊柳 青青たり 隼水の涯、偶然 剥啄す 日斜ならんとする時。

賦詩滿坐新知樂 相對獻酬把酒扃 詩を賦す 滿坐 新知の樂しみ、相對して 獻酬し 酒扃を把る。

〔備後史談』第八卷第一号)

楊柳の青青と茂る隼水の岸边、偶然人が訪ねて来た日もう斜に傾こうとする時。

詩を賦す人たちとは新しく知り合った樂しみ、相對して盃のやりとりをし酒を酌み交わす。

〔武元君立〕備前国和氣郡北方の人。字は君立、通称立平、北林と号した。備前藩の儒臣、閑谷巖の教授となる。登登庵の弟。(第二章三節「茶山と山陽」参照)。「隼水」高屋川をいう。「剥啄」訪問者が戸を叩く音。「新知」初めて知る。新しい知り合い。「獻酬」盃のやりとりをし互いに酒を酌み交わす。「酒扃」盃。

酒杯。

茶山は次の二首の詩を詠んだ。

武君立來訪 武君立來訪す

(一)

一池春水半牀書 遮莫鄉隣過從疎

一池の春水半牀の書、遮莫鄉隣過從の疎なるを。

此日故人遙命駕 恰逢花影滿庭除

此の日故人遙かに駕を命じ、恰も逢ふ花影の庭除に滿つるに。

池いっばいの春の水 寢床半分は書物で散らかっている、ままよ隣り近所ながら訪問することも稀。此の日旧友が遠くから来られた、ちようど花影が庭先に満開の時の出逢い。

〔半牀〕寢床の半分は書物。書物を散らかしている状態。〔過従〕訪問する。

(11)

花前勸酒莫辭頻 戲蝶鳴禽也惜春 花前酒を勸む頻りなるを辭する莫れ、戲蝶鳴禽也た春を惜しむ。
一載芳時知幾日 百年蘭友更誰人 一載の芳時 知ぬ幾日ぞ、百年の蘭友 更に誰人ぞ。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷三二

花の前で酒を勧めること頻繁なのを辭退しないで下され、戯れる蝶鳴く小鳥も也た春を惜しんでいる。一年のうち花の芳しい時期は幾日あることか、百年の蘭友は更に誰がいるでしょうか。

「一載芳時」一年のうち花の咲く好季節。「蘭友」極めて親密な友人。「金蘭之友」同心の友の交わりの固いことは金よりも堅く、其の美しいことは蘭よりも香ばしい。極めて親密な交わりの喩え。『易经』繫辞上に「二人同心、其利斷金、同心之言、其臭如蘭」とある。

山陽は次の七言絶句を詠んだ。

武元君立到 武元君立 到る

明時多病一身間 同隠黄薇好往還 明時 多病 一身の間、同に黄薇に隠れ 往還を好む。

語盡十三年内事 溪頭□藉看青山 語り盡す 十三年内の事、溪頭 □藉 青山を見る

〔頼山陽全書〕詩集卷六

太平の世 病気がちな我が身は閑だ、あなたと共に 吉備国に籠って 往き来を好んだ。

語り尽くす 十三年内の事、谷川のほとり □藉 青山を見る。

「明時」よく治まっている太平の世。「一身間」我が身は閑。「黄薇」吉備国。現在の岡山県。「十三年内事」山陽（十八歳）は江戸へ遊学した。途中叔父の杏坪に連れられて黄葉夕陽村舎に寄り一泊している。寛政九年（一七九七）三月十七日のことである。その時から今日までの十三年間のこと。

『黄葉夕陽村舎詩』の刊行について、茶山はその詩稿の整理や校訂は全て山陽に任せていた。山陽は『黄葉夕陽村舎詩』遺稿序で次のように述べている。

昔茶山翁爲余父執。余少小、每見其書柬中時有詩、輒覺其可喜、欲睹其全而未得也。既壯、蒙其延引、往督其塾講論。會有請刊其詩者、屬余校理。乃盡發其篋、始得縱觀之。其詩不專一體。而經六如師評者大半。翁諒余曰、癸丑、北遊時所作、吾趣向略定者。宜以此爲準。余領其意、妄爲抉擇。余讀書處者、翁室隔水竹相對。每有評論、使童生擊卷往復、以筆代舌。如此周歲。

昔茶山翁は余が父執爲り。余少小のとき、其の書柬中に時に詩有るを見る毎に、輒ち其の喜ぶべきを覺え、其の全てを睹んと欲して未だ得ざるなり。既にして壯、其の延引を蒙り、往きて其の塾の講論を督す。其の詩を刊せんと請ふ者有るに會し、余に校理を屬す。乃ち盡く其の篋を發き、始めて之を縱觀するを得たり。其の詩は一體を専らにせず。而して六如師の評を経たる者大半なり。翁、余に説けて曰く、癸丑、北遊の時に作る所は、吾が趣向略定れる者。宜しく此れを以て準と爲すべしと。余其の意を領けて、妄りに抉擇を爲せり。余が書を讀む處は、翁が室と水竹を隔てて相對す。評論有る毎に、童生をして卷を撃て往復せしめ、筆を以て舌に代ふ。此の如きこと周歲なり。

文中の「水竹を隔てて相對する茶山の室に卷を撃て往復した童生」は朴齋であった。山陽はこの年『黄葉夕陽村舎詩』の編集や校訂に携わる傍ら、『蔚囊小結』（京都の建仁寺の天隱和尚が唐詩の七言絶句を輯録した詩集

三、養子の時期

1、朴齋、茶山の養子となる

文政三年（一八二〇）正月廿五日、茶山（七十三歳）は朴齋（二十四歳）を養子とすることを藩に願ひ出て許可を受け、三月五日、その身柄を引き取る。朴齋は庄屋の職を辞して菅姓となり、帯刀勝手、御通掛次席となる。『行狀』には次のように記述されている。

伯舅門田政周君病没、長子政齋君襲大里正職。而府君亦爲西法成寺村里正、在菅氏塾如故。而茶翁配門田氏、即府君母氏之姉也。無子、故茶翁使君辭里正、而養以爲子。時年二十四。

伯舅門田政周君病没し、長子政齋君大里正の職を襲ぐ。而して府君亦西法成寺村の里正と爲るも、菅氏の塾に在ること故の如し。而して茶翁の配門田氏は、即ち府君の母氏の姉なり。子無く、故に茶翁君をして里正を辭せしめて、養ひ以て子と爲す。時に年二十四。

〔門田政周久兵衛〕文化十三年十二月二十四日朝没す。久兵衛は西法成寺村の大庄屋で茶山の妻となつた宣の弟。朴齋の生母の兄に当たる。早く孤兒となつた朴齋を養つた。〔伯舅〕伯父。

既に廉塾の都講となつていた（文化十年八月十五日）北條霞亭は、手紙でこのことを郷里の弟、碧山に次のように報じている。

菅太中翁も此節門田堯佐といへる男（いつぞや御達被成候敷）、久しく塾に罷在候少年、翁の妻の姪に御座候、これを養子にいたしたき願書御上へ差出され候。菅三幼少、何になり候やらまだしれ不申候故の事と見え候。

堯佐も大分近來學問上り候。もはや廿四五になり候。

「翁の妻の姪」とは茶山の妻、門田宣の妹の子だから甥に当たる。「菅三」は萬年（茶山の弟。養子にしたが三十歳で没す）と井上氏敬（のち、霞亭の妻となる）との間の子で、このとき十一歳であった。朴齋は寛政九年（一七七七）生まれだから、この年二十四歳。朴齋は文化十三年（一八一六）二十歳の時、安那郡西法成寺村の庄屋に任じられたが、茶山の養子となった時その職を辞した。

2、作州湯原に湯治

朴齋は幼少より余り健康体ではなく、作州湯原に湯治に行くことも屢々であった。途中に叔父の家もあり、往復の途上立ち寄る便利もあった。「作州途上」「湯原雜詩五首」「湯原雜吟五首」など、作州湯原へ湯治往復の詩が数多くある。

この年は、一か月ばかりも作州湯原に湯治し、三十首ばかりの詩を作って「壬午作遊吟稿」と名付けた。茶山はそれを評して「詩學漸進、亦見以慰老懷」（詩學漸く進み、亦以て老懷を慰むるを見る）と記して、朴齋の詩の上達を喜んでゐる。又、この年は『作州遊記』を成した。次の七言絶句もこの時の作である。

湯原

浴者來遊各數句 楚言齊語日交親 浴者來り遊ぶ 各の數句、楚言齊語 日々交はり親しむ。

南鄰昨會笙歌客 北舍今邀飲博人 南鄰昨會す笙歌の客、北舍今邀く飲博の人。

〔朴齋先生詩鈔〕初編上)

湯治に來遊する者は各々數十日、各地の方言が日々交わり親しむ。

南鄰りの人は昨日会った笙歌の客、北の舎りの人は今日邀く飲博の人。

〔楚言齊語〕各地の方言。〔笙歌〕笙の笛と歌。〔飲博〕酒飲みと博徒。

茶山の養子となつた朴齋は、このように時々湯治に行つたりする以外には特に変わったこともなく、茶山の留守中は代講をするなど塾生の指導に当たつた。

3、山陽・霞亭に詩の批正を請う

朴齋の山陽を慕う気持ちは変わららず、一年分の詩を纏めて送り山陽の批正を請うていた。文政五年（一八二二）には忍庵馬屋原周迪（福山藩医。玄益という。伊澤蘭軒の弟子が京に修業に上る時、次の詩を贈つて山陽を慕う意を寓した。（朴齋、二十六歳）

馬屋原周迪之京師、余不與別筵、發後賦此、以寄兼呈頼山陽先生。

馬屋原周迪 京師に之く、余別筵に與らず、發後此れを賦し、以て寄せて兼ねて頼山陽先生に呈す。

故人忽爲千里遊 朝辭鄉友上孤舟 故人忽ち千里の遊を爲し、朝に郷友に辭し孤舟に上る。

陽關數曲人多少 爭勸盃觴會一樓 陽關數曲 人は多少、争ひて盃觴を勸めんと一樓に會す。

我獨此時不相遇 離心空逐長江流 我は獨り此の時 相遇はず、離心 空しく逐ふ 長江の流れ。

安得江風吹轉我 冷然直到帝王州 安にか江風を得て吹きて我を轉じ、冷然として直ちに到らん 帝王の州。

與君對酌鴨川酒 一宵拂盡滿胸愁 君と鴨川の酒を對酌し、一宵 拂ひ盡くさん 滿胸の愁。

又願與君同栖止 日訪山陽外史氏 又願ふ 君と栖止を同にし。日に 山陽外史氏を訪はんことを。

〔朴齋先生詩鈔〕初編上

親しい旧友は忽ち千里の旅を爲し、朝に故郷の友と別れて孤り舟に上る。

送別の歌「陽関」を数曲歌い多くの人が、争って別れの盃を勧めんと一樓に会したが。

私は独り此の時は会えなかった、離心は空しく長江の流れを逐うだけ。

何処にか江風を得て我を転じ、軽やかに直ちに帝王の州に連れて行ってくれないか。

あなたと向かい合つて鴨川の酒を飲み、一夜払い尽くしたい胸いっぱい愁を。

又願うあなたと住む処を同じにし、毎日山陽外史氏を訪ねることを。

「陽関」送別の時に歌う曲名で、王維作「送元二使安西」の「勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人」を頭に描いていたのであろう。「冷然」軽妙なさま。

文政六年（一八二三）朴齋は二十七歳になつたが、一か月ばかり作州湯原に湯治し、三十首ばかりの詩を作つて「癸未作遊詩稿」と名付けた。この時は北條霞亭の批正を請うべく江戸邸に送つたが、八月十七日に北條霞亭は四十四歳で没し、その後届いた為、未亡人敬が年末に持ち帰つた。霞亭の訃報は九月九日に神邊に届いた。朴齋はその死を悼み、次の弔詩を詠んだ。

重陽聞霞亭先生訃 重陽に霞亭先生の訃を聞く

雖逢佳節豈能歡 空把凶音不忍看 佳節に逢ふと雖も豈に能く歡ばんや、空しく凶音を把りて看るに忍びず。

但道多年病仍舊 何圖一日起終難 但道ふ多年病みて仍ほ舊しと、何ぞ圖らん一日起つこと終に難きを。

流雲過眼風光慘 暮雨傷心雁影寒 流雲眼を過ぎ風光慘たり、暮雨心を傷ましめ雁影寒し。

萬里醉君黃菊酒 憶陪吟屐向前櫺 萬里君に酔む黃菊の酒、吟屐に陪し前櫺に向かひしを憶ふ。

〔朴齋先生詩鈔〕初編上

佳節に逢つてもどうして能く歡ぶことができようか、空しく弔報を手にして看るに忍びない。

但だ言う 長年 病気がちであつたが、どうして予想できようか 或日 起つことが終に難しくなつたと。
流れる雲は目の前を通り過ぎて行き 景色を見れば心が痛む、暮れの雨は心を傷ましめ 雁の影は寒々と。
萬里も離れているあなたに 黄菊の酒を捧げ、後に従つて前の峰に登つたことを憶い出している。

〔佳節〕 九月九日の重陽の節句。〔酌〕 酒を地にふりかけて神を祭ることをいう。〔吟履〕 詩人の履き物。
〔前櫓〕 くねくね曲がつた前の山。〔風光〕 風景。眺め。

寄挽霞亭先生 寄せて霞亭先生を挽む

鑽仰千秋欲托身 棟梁摧折哭蒼旻 鑽仰 千秋 身を托さんと欲す、棟梁 摧折 蒼旻に哭す。

孤棺卜葬天涯土 萬里招魂帳下人 孤棺 卜葬 天涯の土、萬里 招魂 帳下の人。

白苧紅牋新著作 寒松晚菊舊音塵 白苧 紅牋 新著作、寒松 晚菊 舊音塵。

寵褒將盡濟川用 廊廡偏知歎惜頻 寵褒 將に盡きんとす 濟川の用、廊廡 偏に知る 歎惜の頻なるを。

〔備後史談〕第八卷第一号

先生の徳を仰ぎ見て 長く身を託そうとした、重要な地位にある貴方が挫き折れて 私は天に慟哭する。

孤占い定められた墓書で天涯の土となられた、萬里も離れたこの地に魂を呼び寄せんとする弟子。

白や紅の紙に書かれた 最近の著作、寒松 晚菊など 古い手紙が思い出される。

寵褒も尽きようとしている 川を濟るときの用に立つことも、福山藩では嘆き惜しまれること頻である。

〔鑽仰〕 聖人の道と徳とを探索し仰ぎ見る。後世学問などを慕い求め、努力して探索する意。『論語』子罕に「仰之爾高、鑽之爾堅」(之を仰げば爾よ高く、之を鑽れば爾よ堅し)とある。顔淵が孔子の全貌を語つた言葉。〔棟梁〕 一国の重任に当たたる人。『世説新語』賞譽に「庾子嵩、目と嶠、森森如千丈松、雖磊砢有節目、施之大厦、有棟梁之用。」(庾子嵩、和嶠を目すらく、森森として千丈の松の如く、磊砢として節

目有りとも雖も、之を大厦たいかに施せば、棟梁の用有り。と、「庚子嵩は和嶠を評して言った、茂り立つこと千丈の松の如く、ごつごつとして節くれだつてはいるが、大家に用いられれば、棟や梁の働きを為すであろうと。」とある。「摧折」挫き折れる。「孤棺」墓を据える場所から千里も離れた所だから「孤棺」と言う。「卜葬」墓を据える所を占う。「蒼旻」青空。天。「招魂」死者の魂を呼び寄せて慰め祭る。「帳下人」弟子たちをいう。「白苧」白い紙。「苧」は紙の異称。「紅牋」紅の紙に書かれた文字。「新著作」最近の著作。「舊音塵」古い手紙。「寵褒」可愛がり褒める。「濟川用」川を濟わたる時には、お前が舟や楫かになつて私を渡して欲しい。「書經」下、説命上に「…若濟巨川、用汝作舟楫、…」（…若し巨川を濟わたらば、汝を用もちちて舟楫しゅうしよと作なさん。…）とある。「廊廡」福山藩。「歎惜」嘆き惜しむ。

4、朴齋の結婚

文政七年（一八二四）正月廿九日に朴齋の結婚願書が藩庁に出され、三月十五日に華燭の典が挙げられた。朴齋は二十八歳であつた。新婦は、備中成羽藩山崎主税助義柄の医官岡伯庵の女で名前は靜。藩庁日誌に次のようにある。

文政七年申年正月廿九日、山崎五郎様御醫師備中國成羽に罷在候岡伯庵と申者娘、太中倅堯佐妻に縁談申合度旨願出、二月三日願濟、三月十五日引取婚儀相整申候達。

媒酌は菅波武十郎（茶山の遠縁に当たり、和歌の嗜みの深い人）が務めた。

『朴齋先生詩鈔』初編上に「成羽」と題する詩がある。これは「甲申」（文政七年）の作だから朴齋夫婦が新婦の家に舅を訪ねたときのものと思われる。それは次の詩である。

成羽

嶺雲高捲野雲橫 下盡羊腸是邑城 嶺雲 高く捲き 野の雲は横たはる、下は羊腸を盡し 是れ邑城。
 何料樵歌纒斷處 市樓燈火見箏聲 何ぞ料らん 樵歌 纒かに断ゆる處、市樓の燈火 箏聲を見る。

『朴齋先生詩鈔』初編上

嶺の雲は 高く捲き野の雲は横たわっている、下はなんと 曲がりくねった路の先に町がある。

思つてもみなかつた 樵の歌が僅かに断える処に、市樓の燈火や 箏の音を見るなどは。

朴齋夫婦は茶山邸に同居し、朴齋は積極的に茶山の代講などもして、茶山の相続人としての自覚を持った。『行狀』に次のように記されている。

於是日則教育學生、應酬賓客。其他瑣微家務悉執之。夜則挑燈、披卷而努力、至鷄鳴甫就寢。

是に於て日に則ち學生を教育し、賓客に應酬す。其の他の瑣微の家務悉く之を執る。夜は則ち燈を挑げ、巻を披きて努力し、鷄鳴に至りて甫めて就寢す。

5、朴齋周辺の弔事

(1) 実母の死

文政七年(一八二四)十月廿一日、生母が没した。生母は大婦の後、御調郡諸毛村の医師、萩原仲禮に再嫁していた。このとき朴齋は二十九歳であった。

文政八年(一八二五)正月に次の詩を詠んでいる。

乙酉元日

戸戸相慶來往路 滿間淑氣霽春雲 戸戸相慶す 來往の路、滿間の淑氣 霽たる春雲。

誰知別人銜恤 遙向他山拜母墳 誰か知らん 別に人の恤ひを銜む有るを、遙かに他山に向かひて 母の墳に

拜す

〔朴齋先生詩鈔〕初編上

各家ではみな祝っている。往ったり来たり路、村中は目出度い気が立ちこめ 空は和やかな春の雲。

誰か知ろうか 恤ひを銜む人のいることを、遙かに他山に向かつて 母の墳を拜む。

〔來往〕行ったり来たり。〔滿間〕村中。〔銜恤〕父母の喪にあう意。恤ひを銜む。

山陽はこの詩を次のように評している。二句蓼莪遺音、不獨用其字（二句は蓼莪の遺音、獨だ其の字を用ひざるのみ）と。「蓼莪」は親を養おうとして、養うことのできない孝子の心を詠んだ詩で、『詩經』小雅に「無父何怙、無母何怙。出則銜恤、入則靡至」（父無くんば何に怙らん、母無くんば何に怙らん。出でても則ち恤ひを銜き、入りても則ち至しき靡し）とある。

又、朴齋は母の位牌に次のように銘している。

嗚呼是先妣門田氏之神主也。父門田則翁、母杉原氏、配先考山手八右衛門府君。實生三子。而會兩家有違言、使先妣大歸。鄰尚在懷抱。因爲舅氏所養。文政七年甲申十月廿一日卒。享年五十四歲。葬在舅氏塋域。戊子十月兒山手鄰誌。

嗚呼是れ先妣門田氏の神主なり。父は門田則翁、母は杉原氏、先考山手八右衛門府君に配す。實に三子を生む。而して兩家の違言有るに會ひ、先妣をして大歸せしむ。鄰（朴齋の諱。少年時惟隣、後ち重鄰）尚懷抱に在り。因りて舅氏の養ふ所と爲る。文政七年甲申十月廿一日卒す。享年五十四歲。舅氏に在りて塋域に葬る。戊子十月 兒山手鄰誌す。

〔先妣〕死んだ母。〔神主〕儒家の葬式で死者の官位・姓名を書いておたまやに安置するもの。位牌。

「先考」死んだ父。「違言」言い争い。道理に背いた言葉。「大歸」嫁に行った娘が離縁になつて実家に帰る。「懷抱」乳飲み児。「塋域」墓地。

(2) 養母、宣の死

生母に続いて、その七か月後の文政九年（一八二六）五月十九日、養母宣（茶山後室、朴齋にとつては伯母）が没した。享年七十歳。朴齋はこの年三十歳であつた。十二歳で廉塾に来て、二十四歳で茶山の養子となつた朴齋を、子どものいなかつた宣は十八年間に亘つて実子同然に可愛がつた。朴齋はこの春、養母が古稀を迎える喜びの詩を知己朋輩に作つてもらふように「賀辭賦」をもとめたばかりであつた。その文は次の通り。

爲宣堂乞言文

不肖今の母は即ち生母の姉なり。吾が茶山先生に歸ぐも、久しくして子無し。先生塾堂を開き子弟を教育すること此に五十年、既に老いて其の業を繼ぐべきもの無し。乃ち不肖姻あるを以て取りて子と爲す。蓋し其の緒を承けしめんと欲するのみ。而して不肖當時年少才劣、先生教養の嚴と雖も學業以て立つ無し。安んぞ他日を期すべけんや。而も吾が母の不肖を愛する實に其生む所に過ぐ。其の意常に不肖の學成らず。徳の進まざるを以て憂となし、以て謂へらく、苟も學成り徳進み、永く先生の業を墜す無くんば可なりと。是に於て、先生に奉承するの暇あらば則ち瀚濯縫紉して以て不肖に衣せ、爨炊烹飪して以て不肖に食せ、唯だ不肖の成業を之れ期す。而して未だ嘗て不肖を撓すに他事を以てせず、嗚呼不肖の父有る彼の如く、母有る此の如し。宜しく學成り徳進むこと、飛鴻の冲天に颯り、逸馬の大路に奔るが如くなるべきなり。而るに誚劣鹵莽自若たり。』

今春吾が母始めて古稀なり。將に筵を堂上に張らんとす。不肖何を以て其の歡心を奉ぜん。官路に登り、依阿容悦、紆青拖紫を曳き、以て壽觴を稱ぐべきか。其の欲する所に非ざるなり。金盤玉鼎、異饌珍味、以て其の

前に列ね、以て壽牖を稱ぐべきか。其の欲する所に非ざるなり。況や不肖の財力能く辨ずる所に非ざるなり。』吾が父母俱に山林の間に隠れ、耕織暇あれば則ち鳥を聴き、花を栽ゑ、歌詠自ら娛しむ。若し果たして大方君子の一言を得て以て壽と爲さば、其の心或は慰むる有らん。而して其の憂を忘るゝを得ば、則ち不肖學の未だ成らず、徳の未だ進まざる有りと雖も、心苟くも其の憂を忘るれば、支體康彊、飲食坐起、庶幾は常と異る無けん。而して其の髮緑なるもの益す緑を加へ、其の壽其れ無疆ならん。則ち大方君子の賜なり。

〔備後史談〕第八卷第四号)

「歸」嫁ぐ。「姻」身内。「緒」物事の解決の鍵。「奉承」おおせを承諾する。「瀚濯」洗濯する。「縫紉」裁縫をする。「爨炊烹飪」炊事煮炊きをすること。「撓」たわめる。まげる。「冲天」高く天にのぼる。天をつく。

「謏劣」才知が浅くて人に劣る。「鹵莽」荒っぽく細かく気を配らない。ぞんざいで手抜かりがある。「自若」元のままで動かない。「依阿容悅」媚びへつらう。阿りへつらう。「歡心」喜んで嬉しいと思う心。「紆青拖紫」身に印綬を帯びて高官にのぼること。青を紆き紫を拖く。青は青綬、紫は紫綬。「饌」飯。お膳立てをした食物。「康彊」体が丈夫。「無疆」限りなし。極まりない。

宣は五月十二日に発熱し一週間ばかりの患いで、あつげなく亡くなつてしまつた。廿一日、前夜は大雨大風であつたが午後は雨勢も衰えた。この日、宣の葬儀が行われた。

四、朴齋離縁

1、茶山八十歳を寿ぐ賀詩

文政十年（一八二七）朴齋三十一歳、茶山はこの年八十歳を迎える。朴齋はそれを賀し次の七言律詩を詠んだ。

養父茶山先生八十壽言恭賦奉呈 丁亥 養父茶山先生八十壽言恭しみ賦して呈し奉る 丁亥

才拙難傳叔夜琴 承歡聊且作巴吟 才拙にして傳へ難し 叔夜の琴、歡しみを承へ聊且か巴吟を作す。

窓含春靄花光煖 簾挂朝暉竹影深 窓は春靄を含み花光煖かく、簾は朝暉に挂かり竹影深し。

覆育有恩成骨肉 惋愉無意問衣簪 覆育 恩有り骨肉と成り、惋愉 衣簪を問ふに意無し。

階庭別見芝蘭秀 爲要滋培竭我心 階庭 別に芝蘭の秀づるを見る、爲に要す 滋培して 我が心を竭さん。

〔朴齋先生詩鈔〕初編上

才能が拙いので 叔夜の琴を伝えることはむずかしいが、 歎びを承えて私は詩を作る。

窓は春の靄を含み 花の光は煖かく、 簾は朝日を掛けて 竹の影は深い。

保護し 育てていただいた恩が有り 養子と成った、 嘆きや愉びは 官吏になることでは無い。

茶山の膝下で茶山の甥の晋三が 愛育され大分成長している、私は晋三を慈しみ育てることに心を竭そう。

〔丁亥〕文政十年。「叔夜琴」「広陵散」の琴の曲名のこと。晋の嵇康（字は叔夜）が隠者から授けられた

もので、嵇康の死後、伝える者が絶えたという話を踏まえる。「巴吟」自作の詩歌の謙遜語。巴人が歌う歌の卑しい調子。「承歡」人の機嫌を取り持つ。相手の歎びにうまく気持ち合合わせる。白居易の「長恨歌」

に「承歡侍宴無閑暇、春從春遊夜專夜」(歡しみを承へ宴に侍りて閑暇無く、春は春の遊びに従ひ夜は夜を専らにす)とある。「覆育」保護して育てる。「成骨肉」養子になつたこと。「惋惜」嘆くことと愉しむこと。「衣簪」官吏の服装。転じて官吏をいう。「別見芝蘭秀」茶山の甥、萬年の遺児、菅三が茶山の膝下で愛育され、大分生育したこと。「爲要滋培竭我心」私が一人前にして後を嗣がせよう。

この詩は茶山の傘寿を賀すものであるが、頸聯・尾聯の「覆育有恩成骨肉、惋惜無意問衣簪」からは、離縁のことを予知していたのではなからうかと考えられる。即ち「自分は茶山の保護を得て親子の契りを結んだ。官吏となつて出世しようという意はない」と廉塾に於て茶山の後を嗣ぎ、その事に専念しようと言じ、尾聯で「階庭別見芝蘭秀、爲要滋培竭我心」つまり、「茶山の膝下では茶山の甥である萬年の遺児、菅三が大分生育した。自分はこれを慈しみ育てることに、精一杯の力を尽くそう」というのであるが、茶山にとつて菅三は血縁があるのだから、菅三を一人前に育て上げれば、自分は身を引かざるを得ないというのが朴齋の立場である。理屈では分かつていても、自分の気持ちの上では鬱々としたものがあつたのではなからうか。詩に詠われた言葉の裏に朴齋の哀愁が漂っているように感じられる。『行狀』にも「…而翁女弟及女姪、讒君有日。至此乘翁病、百方讒焉。君知之。而勢不能爲辨說…」(…而して翁の女弟及び女姪、君に讒して日有り。此に至り翁の病に乗じ、百方讒す。君之れを知るも而も勢辨説を爲す能はず…)とあるところから、朴齋は予てからこうした動きの有ることを察知していたことが分かる。

2、朴齋離縁の経緯

朴齋は文政十年(一八二七)七月に茶山に離縁されるが、ここでその経緯について纏めておく。

(1) 朴齋の「日記」・『行狀』・茶山の「経歴簿」より

七月四日晴、菅三母、及び千姑、讒余有日。余知之、而不能防。是日大人逐余。伯兄携余歸家。時夜四鼓、内
寓武十家。

菅三母、及び千姑、余を讒して日有り。余之を知るも、防ぐ能はず。是の日大人余を逐ふ。伯兄、余を携へて家に歸る。時に夜四鼓、内は武十の家に寓す。

〔大人〕茶山。〔伯兄〕一番年長の兄で門田儀右衛門。〔内〕妻、静。〔武十〕菅波武十郎。朴齋と静の結婚の媒酌人。和歌を嗜む。

七月五日晴、中山大夫、使今村郡宰、言余無罪于茶山翁。翁不聽。(中山大夫、今村郡宰をして、余の無罪を茶山翁に言はしむ。翁聽かず。)

七月六日内自神邊至于法成寺村。(内神邊より法成寺村に至る。)

七月九日官命、許余父子訣別。余復姓門田氏。(官命じて、余が父子の訣別を許す。余姓を門田氏に復す。)

『行狀』には、

養母門田氏病沒。沒後茶翁亦病。而翁女弟及女姪、讒君有日。至此乘翁病、百方讒焉。君知之、而勢不能爲辨說。文政十年丁亥七月四日、茶翁遂使君夫妻大歸於門田氏。未幾茶翁病沒。…

養母門田氏病沒す。沒後茶翁亦病む。而して翁の女弟及び女姪、君を讒して日有り。此に至り翁の病に乘じ、百方讒す。君之を知るも、而も勢辨説を爲す能はず。文政十年丁亥七月四日、茶翁遂に君が夫妻をして門田氏に大歸せしむ。未だ幾もなくして茶翁病沒す。…

と記されている。

つまり、「茶山にとつては姪にあたる菅三の母 敬と、茶山の妹 千姑（千田村荒木氏に嫁いだ茶山の妹ミツ）の讒言により、七月四日に茶山は朴齋離縁の事を決め、七月九日に官命が下り離縁となつた」というのである。これも一つの理由であろうが、後継者と決めていた養子を、妹や姪の讒言だけで茶山が簡単に解除する訳はない。

茶山から伊澤蘭軒宛てた返書（文政十年三月二十二日付伊澤蘭軒よりの書簡に対する）に「梅兒冢あたりへの散行、さてく羨しく候。ことに弱冠前後の俊髦しゅんぼうを携たるをや。私は兒なし。養子もとかく相應せず。才子過て傲慢、こまり申候。…とあるところから、傲慢である朴齋は塾の後継者としては不適當であると、茶山は常々思っていたものと考えられる。それでも朴齋にとつて伯母である妻の生存中は、朴齋を離縁することができなかった。妹や姪の朴齋に対する讒言が重なつたこと、自分自身そろそろ死期を覚悟していた（一か月ばかり後に茶山は没している）のではなからうかと思われること、妻がなくなつて一年三か月を経ていること等を勘案して、茶山は朴齋の離縁を決意したものと考える。

このことは次の茶山の経歴簿に拠つても肯定できる。

七月 九日 倅堯たすけ佐儀不熟に付離縁達し。

八月十一日 病氣難治症に付塾の心得書、以太中 孫 本家本庄屋 菅三儀 養子に致度旨 問合、御伺之上 勝手

次第相願候様。

八月十三日 男子無御座に付、御領分 安那郡川北村 百姓菅三と申者孫に御座候間、養子仕度願、即日願濟。

〔備後史談〕第八卷第五号）

この経歴簿に拠ると茶山は自分の病氣の不治を自覚し（茶山は八月十三日歿）、生前に姪孫菅三を養子にしておこうと思つたのだらうと考えられる。

口上之覺（門田朴齋離縁ノ件）

私養子堯佐儀不熟二付 離縁仕同人妻共、御領分 品治郡西法成寺村 門田儀右衛門方江指戻候。此段 御達申上候。右之趣 御年寄衆中迄 宜キ様被仰達可被下候。已上

七月九日

菅 太中

大御目付中

口上之覺

私弟東作義京都頼久太郎方江指遣儒學執行爲 仕申度奉存候。右之趣不苦思召候ハ、宜ク被仰達可被下候。以上

八月

門田儀右衛門

御郡方 御帳元衆中

(2) 朴齋の不满

朴齋は茶山の措置に対して、不满を抱いていた。それは次の七言絶句二首に表されている。更にこの詩の前に叙した文によって、詳しく知ることができる。

丁亥七月出菅氏所懷二首 丁亥七月 菅氏を出づ 所懷二首

(一)

一片氷心在玉壺

何人投擲委泥汚

一片の氷心

玉壺に在り、何人か 投擲して

泥汚に委ねしむ。

廿年鞠育叨恩愛

誰慮家庭是畏途

廿年

鞠育 恩愛を 叨くするも、誰か慮はん

家庭 是れ畏途なると。

〔備後史談〕第八卷第五号)

私の心は壺の中の一片の氷のように澄み切っている、誰が投げ出して汚ない泥に委せてしまったのか。廿年養い育てていただいた恩愛を感謝するが、誰が思っただろう 家庭がこんなに危険で恐ろしいものと。

「投擲」なげうつ。「鞠育」養い育てる。「畏途」危険で恐ろしい道。

起句の「一片氷心在玉壺」は王昌齡の「芙蓉樓送辛漸」の詩「寒雨連江夜入吳、平明送客楚山孤。洛陽親友如相問、一片氷心在玉壺」の結句、「自分の心は壺の中の一片の氷のように澄み切っている」を踏まえており、「私の心は一点の曇りもない」というのであろう。「それなのに誰がこんなひどい目に合わせたのか（承句）。廿年間（十二歳で廉塾に入門して三十一歳で離縁になる）養い育てられ、その恩愛を忝なくするが、誰がこんなひどい家庭だと思つただらうか」というのである。「畏途」は危険で恐ろしい道の意で、『莊子』達生に「夫畏塗（途）者、十殺一人、則父子兄弟相戒也。必盛卒徒、而後敢出焉。不知乎。人之所取畏者、衽席之上、飲食之間。而不知爲之戒者過也」（夫れ畏塗（途）なる者、十に一人を殺せば、則ち父子兄弟相戒むるなり。必ず卒徒を盛んにして、後敢て出づ。亦知ならずや。人の畏を取る所の者は、衽席の上（寢室の中）、飲食の間なり。而して之が戒めを爲すを知らざる者は過なり）「もしも此処に危険な道路があつて、十人のうち一人が殺されるようなことがあれば、父子兄弟は互いに警戒し合い、必ず護衛の従者を沢山連れて外出するようになる。これこそ人の知の働きである。人が畏れ慎まねばならぬことは、実は寢室の中、飲食の時など、情欲の動くところにある。これに對しての警戒をすべきことに気づかぬ者は、養生の道に於て過つた者である」とある。こういった思いを抱いての作と考えられる。

(11)

高歌一曲歩秋暉 世事何須問是非 高歌一曲秋暉に歩む、世事何ぞ須ん是非を問ふを。

回首黃楓山色好 孱顏亦有帶雲時 首を回らせば黃楓山色好し、孱顏亦雲を帶ぶる時有り

『備後史談』第八卷第五号)

声高く一曲歌いながら秋の日射しの中を行く、世の中のこととはどうして是か非かを問う必要があろうか。

見回せば黄葉した楓で山の色は美しい、その高く聳える山も雲がかかるとあるのだ。

【辱顔】山が高く聳え立っているさま。

鬱屈した気持ちの彷彿とする詩である。朴齋はこの二首の詩の前に次のような叙の文を記している。

余者山手氏之子也。有故幼育於母家、冒其姓門田。年十二從游菅茶山翁。翁無子養其姪萬年爲嗣、早歿。乃子養余。養母即余生母姊也。數年病卒。而有萬年遺孤既長。於是翁逐余、以萬年遺孤爲嗣。余也既出菅氏復歸母家。寄食内兄富卿、冒其姓如故。于時文政丁亥七月四日也。間居無聊、獨以吟咏自遣。門田惟鄰堯佐。

余は山手氏の子也。故有りて母家に育てられ、其の姓門田を冒す。年十二從ひて菅茶山翁に遊ぶ。翁子無く養ひて其の姪萬年を嗣と爲すも、早く歿す。乃ち子として余を養ふ。養母は即ち余が生母の姉なり。數年にして病みて卒す。而して萬年の遺孤有りて既に長ず。是に於て翁余を逐ひ、萬年の遺孤を以て嗣と爲す。余也また既に菅氏を出でて復た母家に歸る。内兄富卿に寄食し、其の姓を冒すこと故の如し。時に文政丁亥七月四なり。間居無聊、獨り吟咏を以て自ら遣る。門田惟鄰堯佐。

【萬年遺孤】菅三。茶山の次弟猶右衛門（汝榎）の子が萬年（公壽）、萬年の子が菅三である。【菅三】諱は惟繩、字は昭叔、通称は菅三、天保二年に三郎と改める。号は良齋・懶庵・自牧齋。文政十年十月十五日に廉塾を嗣ぐ。天保八年十月弘道館勤務を命ぜられる。萬延元年七月三日、五十一歳で没す。文政七年に朴齋が茶山の養子となつたとき、菅三は九歳であつた。【丁亥】文政十年。

山陽はこの文に次のような評を加えて警告している。そのためか朴齋は朱で抹消している。

自叙豈可如此暴露。君子小人、宅心之異、立言之殊、於是乎見、慎旃。

自叙豈に此の如く暴露すべけんや。君子小人、心を宅おくの異、言を立つるの殊、是こゝに於てか見みる。旃こゝを慎こゝまん。

「立言」自分の考えをはっきりと発表すること。
 朴齋は離縁された後、「宮怨」と題する次の七言絶句三首を作っている。

宮怨 (一)

一身專寵幾年過 縦入西宮恩亦多 一身寵を専らにして幾年か過ぐ、縦西宮に入れども恩亦多し。
 妍醜從來吾敢比 低頭無意望姪何 妍醜從來吾敢て比べん、頭を低れて姪何を望むに意無し。

この一身に寵愛を独り占めして幾年が過ぎたことか、たとえ西宮に入ったとはいえ恩も亦多い。
 美しいとか醜いなどこれまで敢て気にしなかった、今は頭を低れて姪何を望むつもりはない。

「西宮」漢の長信宮。成帝の妃の班婕妤が趙飛燕姉妹に君寵を奪われてここに退いた。王昌齡の「西宮春怨」に「西宮夜静百花香、欲捲珠簾春恨長」(西宮夜静かにして百花香し、珠簾を捲かんと欲すれば春恨長し)とある。又、王昌齡に「長信秋詞」と題して「火照西宮知夜飲、分明複道奉恩時」(火は西宮を照らして夜飲を知る、分明なり複道に恩を奉ぜし時)とある。「妍醜」美しいと醜いと。「姪何」漢の武帝の邪夫人。

(二)

随意涼風透碧蘿 莎蛩在砌露華多 意に隨ひて涼風碧蘿を透し、莎蛩砌に在りて露華多し。
 重門寂寂誰相問 低唱君王御製歌 重門寂寂として誰か相問はん、低唱す君王御製の歌。

意に随つて涼しい風が青々とした蔦葛を透し、蟋蟀は階段下の石畳に在つて露はしつとりと降りている。
 重門はひっそりとして誰が訪ねて来ようか、低い声で唱う君王の御製の歌を。

「碧蘿」青々とした蔦葛。「莎蛩」莎雞。蟋蟀。(こおろぎ)の属。『詩経』豳風「七月」に「九月在戸、十月蟋蟀入我牀下」(九月戸に在り、十月は蟋蟀我が牀下に入る)とある。「砌」階段下の石畳。「君王

御製歌「ここは茶山の詩を指すのであらう。

【山陽評】 濫藉所謂溫柔敦厚、可謂詩也已。(濫藉 所謂の 溫柔敦厚、詩と謂ふべきなるのみ。)

「濫藉」「濫」は「熅」、温かい。「藉」助ける。「溫柔敦厚」「溫柔」穏和柔軟。「敦厚」懇ろで人情が厚い。

(三)

懶復粧樓掃翠蛾 羊車何敢望重過

復た粧樓にて翠蛾を掃くを懶る、羊車 何ぞ敢て重ねて過ぎるを望まん。

獨悲新幸人追妬 口角至今猶自波

獨り悲しむ新幸人追ひて妬み、口角 今に至るも猶 自ら波だつを。

〔朴齋先生詩鈔〕初編上

復た粧樓で眉を掃くのを懶る、羊車が再び立ち寄ることをどうして敢えて望むだらうか。

獨り悲しむ 新に幸を得た人が 昔を追うて妬み、今に至るも尚過去を掘り起こしがやがや言うことを。

「粧樓」女性の住む楼。化粧をするための楼。「翠蛾」緑の眉。美人の眉を言う。「羊車」帝が女の元に來

て泊まるときの為の小車。「口角」口先。言い合う。

【山陽評】 群娃口角、自行自止。以馬耳風待之可矣。何足恤哉。(群娃の口角、自ら行き自ら止まる。馬耳風を

以て之を待てば可矣。何ぞ恤ふるに足らんや。)

「群娃」群がる美女。ここは叔母の敬とミツを指す。

五、朴齋、山陽を慕い上京

1、故郷を発つ

文政十年（一八二七）七月二十五日、朴齋（三十一歳）は西法成寺村を発つて福山に至り、山岡機外を訪ね、二十六日に鈴木宜山、今村蓮坡、小野高任を訪ね別れを告げた。

〔山岡機外〕（一七八一〜一八四七）名は源左衛門、諱は次隆、字は子高、機外と号す。福山藩の郡奉行で扶持は二百二十石。〔鈴木先生〕（一七七二〜一八三四）諱は圭、字は君璧、宜山と号した。天明八年に福山藩の儒医として召される。文化三年、茶山と共に『福山志料』の編纂を命ぜられる。〔今村蓮坡〕（一七八一〜一八五九）諱は勝寛、字は士猛、通称は綽夫。蓮坡又は楓溪と号した。福山藩の郡奉行。弘道館の読書係などを務めた。

福山別鈴木先生 福山にて鈴木先生に別る

訪君告別飲君酒 酒何清冽情何厚 君を訪ねて別れを告げ 君が酒を飲む、酒の何ぞ清冽にして情の何ぞ厚き。
我今蹭蹬向東州 蕭蕭行李獨上舟 我今 蹭蹬して 東州に向かはんとなす、蕭蕭 行李もて 獨り舟に上る。

西風吹淚願殘日 衰柳誰繫別離愁 西風 涙を吹きて 殘日を願れば、衰柳 誰か繫がん 別離の愁ひ。

見君諄諄提我耳 努力加餐曷游子 君 諄諄として我が耳に提ぶるを見る、努力して加餐せよと游子を励ます。
蒼波渺漫歸未期 醉把君手感君知 蒼波 渺漫として 歸未だ期せず、酔ひて君が手を把り君の知に感ず

〔備後史談〕第八卷第五号

あなたを訪ねて別れを告げ、あなたの酒を飲む、酒の何と冷たく清く澄んで、情の何と厚いことよ。

私は今頼るところを失つて、東州に向かおうとしている、ひっそりと寂しく行李を持って独り舟に上る。

秋風が涙を吹いて夕日を顧ると、衰柳に誰が繋いでくれるだろうか、別離の愁いを。

あなたの懇ろな教えが私の耳に示される、努力してしっかり食べよと、旅人の私を励ます。

若い波は広々と広がり歸つて来る期日はまだ分らない、酔うて貴方の手を把り貴方の知己に感謝する。

〔踏躑〕 足場を失つてよろよろするさま。〔諄諄〕 繰り返し丁寧に教える。ねんごろに。〔加餐〕 食物を沢

山とつて養生する。体を大切にする。〔感君知〕 貴方が私のことを本当に解つてくれることを謝している。

文政十年（一八二七）、朴齋は山陽を追うて上京する。次の詩は出発前の作である。

舟路將上京師而未發雜吟四首 舟路將に京師に上らんとして未だ發せず雜吟四首

(一)

行年三十未離郷 發憤擔箠天一方 行年三十未だ郷を離れず、發憤 箠を擔ふ 天の一方。

聞説京城是人海 葵心最在頼山陽 聞説 京城 是れ人海、葵心 最も頼山陽に在り。

三十になるまで 未だに故郷を離れないでいたが、意気を奮い起こし箠を担いで 天の一方に向かう。

聞くところによると 京城は人の海だと、徳を仰ぎ慕う心は 頼山陽だけに在る。

〔箠〕 柄のある大きなかさ。〔擔箠〕 は遊学して官を求める。『史記』虞卿傳に「虞卿者、游説士也。蹠蹠

擔箠、説趙孝成王。」（虞卿は、游説の士なり。蹠を蹠み箠を擔ひ、趙の孝成王に説く。）とある。「蹠蹠擔箠」

は、草履を履き、柄のついた箠を背負つての意。〔葵心〕「葵藿之心」「葵藿傾陽」に同じ。〔葵〕は「向日葵」

向日葵の花が太陽に向かうように、君主又は長上を仰慕する心。『宋書』卷六十八「武二王、彭城王義康

傳」に「臣草莽微臣、竊不自揆、敢抱葵藿傾陽之心、仰慕周易匪躬之志。故不遠六千里、願言命侶、謹貢

丹愚、希垂察納。」(臣は草莽の微臣、竊かに自ら揆らず、敢て葵藿傾陽の心を抱き、仰慕す周易 匪躬の志。故に六千里を遠しとせずして、願言命侶、謹みて丹愚を貢り、垂察を納めんことを希ふ。)とある。

〔「草莽」草むら、藪。転じて在野、民間。「草莽臣」は仕官しないで民間にある者。〕「揆」図る。方法。はかりごと。〔「葵藿」野草の名。「葵」と「藿」。豆類で食物の下等なもの。〕「葵」と「藿」が日光の方に傾き向かう。君主又は長上を尊敬してこれに忠誠を尽くすこと。〔周易〕宋学で『易経』をいう。〔「匪躬之志」一心の利害は思わずに君に尽くす忠節の志。〕「匪躬」は我が身を顧みない。〔願言〕つねづね。毎々の意。「願」は「つね」。一説におもう意。「言」はここにの意。〔命侶〕「命儔」(命儔)の略。同類を呼び引くこと。〔儔も「侶」も仲間。「命」と「嚙」は呼ぶ。〕「丹愚」己の真心の謙称。〔垂察〕思いやる。「推察」に同じ。

(二)

江天一碧渺鷗波 那處中秋景最多 江天一碧 渺鷗の波、那れ之處か 中秋景 最も多き。

若使舟船如我意 柁樓看月泊須磨 若し舟船をして我が意の如くあらしめば、柁樓に月を見て須磨に泊さん。

江と天は 碧一色 広々とした海原の波に鷗、中秋の景が最もよいのは何処か。

若し舟船をして私の意の如くあらしめるならば、柁樓に月を見て須磨に泊りたいものだ。

〔柁〕かじ。船を進める方向を定める道具。

(三)

治裝三日雨留行 枕上無端夢水程 装を治むるも 三日 雨行を留め、枕上 端無く 水程を夢む。

西吹入扉鳴紙帳 恍疑帆腹帶風聲 西吹、扉に入りて紙帳を鳴らす、恍として疑ふ 帆腹 風を帯ぶるの聲。

旅支度を整えたが 三日も雨が続き 足留めを食らった、枕辺に ふと 水上の道のりを夢見る。

西風が吹いてきて扉から入り 紙の帷を鳴らす、かすかに聞こえたような気がする 帆が風をはらむ声。

「治裝」旅装を整える。「裝」旅に出る準備。「無端」端緒がない。はからずも。どうしてそうなったか何の原因もなく。ふと。「水程」水上の道のり。「紙帳」紙製の蚊帳。紙で作ったカーテン。「恍」ぼんやり。

(四)

宥然一誦漆園經

羞與鯤鵬有逕庭

宥然

一誦す

漆園の經、羞らくは

鯤鵬と逕庭有るを。

猶願道逢榮辱外

鸞鳩亦得徒南冥

猶願

ふ榮辱の外に道逢し、

鸞鳩亦南冥に徒るを得んと。

〔朴齋先生詩鈔〕初編上)

嘆きつつ誦える 莊子の經、羞かしいのは 鯤鵬と自分とは大きな違いが有り 足元にも及ばないこと。それでも尚 願う 榮辱の外で思いのままに生き、鸞や鳩のような小鳥ながら 南の大海に徙りたいと。

「宥然」嘆いてぼんやりする。「莊子」逍遙遊に、堯が天下の民を治めんと汾水の陽まで来た時、「宥然喪其天下焉」(宥然として其の天下を喪へり)「堯は自分のやっていることが小さく見え、嘆きつつ天下のことをわすれてしまった」とある。ここは、どうせ自分は鯤鵬にはなれないと嘆くこと。「漆園」莊子の異名。漆園の役人になったことがあるからいう。「羞」山陽と自分とは大きな違いがあることが恥ずかしい。

「鯤鵬」「鯤」想像上の大魚。「鵬」鳳に同じ。想像上の大鳥。やがては大物になる。「莊子」逍遙遊第一に「北冥有魚、其名爲鯤。鯤之大 不知其幾千里也。化而爲鳥。其名爲鵬。鵬之背、不知其幾千里也。怒而飛、其翼若垂天之雲。是鳥也。海運則將徙於南冥」(北冥に魚有り、其の名を鯤と爲す。鯤の大きいなる其の幾千里なるを知らず。化して鳥と爲る。其の名を鵬と爲す。鵬の背、其の幾千里なるを知らず。怒して飛べば、其の翼は垂天の雲の若し。是の鳥や、海運れば則ち將に南冥に徙らんとす)とある。ここは山陽を準えている。「逕庭」非常な違い。「猶願」自分はとても大物になれる筈はないが、それでもやはり鯤鵬になりたいと願う。「榮辱」誉れと辱め。「鸞鳩」「鸞」と「鳩」でどちらも小鳥。

朴齋は文政十年（一八二七）八月二十七日夜、舟に上る。次の七言絶句を作った。

八月念七夜福山港開舟 八月念七夜福山港に舟を開く

遊志飛騰輕別離 如何至此忽生悲 遊志飛騰 別離を輕んずるも、如何せん此に至りて忽ち悲しみの生ずるを。

木綿橋畔風燈影 送者望舟猶在涯 木綿橋畔 風燈の影、送者 舟を望みて猶涯に在り。

〔朴齋先生詩鈔〕初編上

遊学の志を抱いて別離を軽く考えていたが、どうしようもない此に至って忽ち悲しみが湧いて来たのを。

木綿橋の畔、風にゆれる燈、送る者は舟を望んで猶涯に在る。

〔遊志〕他国に遊学する人。〔飛騰〕飛び上がる。〔風燈〕風の吹く所のともしび。

〔山陽評〕寫情有色、又暗裏有所本佳。（寫情色有り、又暗裏に本づく所の佳なる有り。）

舟は二十八日の明け方、備中飽浦に着いた。次の七言絶句がある。

備前舟中

棹歌驚斷五更眠 回望雲濤已渺然 棹歌 驚斷す 五更の眠り、回望すれば雲濤已に渺然たり。

就裏孤鴻飛滅處 遠山如在是鄉天 裏に就きて孤鴻飛びて滅する處、遠山在るが如し是れ郷天。

〔朴齋先生詩鈔〕初編上

ふな歌に五更の眠りを覚まされた、振り返って見れば雲と濤が已に渺々と広がっている。

中でも一羽の鴻が飛んで見えなくなった辺り、遠くの山が在るようなのは是れ故郷の空。

〔棹歌〕ふな歌。櫂を押して舟を進めるときの歌。〔驚斷〕びっくりする。〔五更〕午前四時頃。〔就裏〕裏

は「中」、「就裏」は「なかんづく」に同じ。とりわけ、中でも。

この夜は岡山東南に碇を下ろした。二十九日は播磨灘を過ぎる。

念九夜過榛洋 念九夜 榛洋を過ぐ

快意風帆發葦陽 直過薇海絕榛洋 快意風帆葦陽を發す、直ちに薇海を過ぎ榛洋を絶る。
 孤身何處非漂泊 猶且回頭戀故郷 孤身何れの處か漂泊に非ざる、猶且つ頭を回せて故郷を戀ふ。

〔朴齋先生詩鈔〕初編上

心地よい風をはらんだ帆が葦陽を出発した、直ちに吉備の海を過ぎ播磨灘を絶る。

独り身は何処が漂泊で無いところがあるうか、それでも猶頭を回らして故郷を恋しく思う。

〔念九〕二十九日。「榛洋」播磨灘。「快意」心地よい。「葦陽」福山。「薇海」吉備の海。

八月晦に大坂に入る。

八月晦抵大坂 八月晦 大坂に抵る

秋江渺渺夕陽傾 哀雁飛鷗媚爛晴 秋江渺渺として夕陽傾き、哀雁飛鷗爛晴に媚ぶ。

十萬人家雲不隔 布帆無恙浪華城 十萬の人家雲隔てず、布帆恙無し浪華の城。

〔朴齋先生詩鈔〕初編上

秋の江は広々として夕陽が傾き、哀しそうな雁飛ぶ鷗は光り輝く晴れに媚びているかのようだ。

十萬の人家は雲に隔てられずに見え、舟は無事に大阪城のもとに到着した。

「爛晴」明らかに晴れる。「爛」あきらか。光。輝く。「布帆」布の帆。舟。

浪華港寬寫田子廣船 浪華港に寫田子廣の船を寬む

不識何邊駐桂橈 北堂南陌湧笙簫 識らず何れの邊にか桂橈を駐む、北堂南陌笙簫湧く。

客中堪慕惟郷友 着意尋君第幾橋 客中慕ふに堪へたるは惟だ郷友、意を着けて君を尋ぬ第幾橋。

〔朴齋先生詩鈔〕初編上

船ほどの辺りに碇を下ろしたのか分からない、北里や南巷から笙の笛の音が湧き上がってくる。

旅にあつて暮うことができるのは惟だ同郷の友、ひたすらあなたを尋ねるが第何番目の橋だろうか。

「桂橋」「桂」の香木で作った舟の棹。ここは葛田子廣の舟を探している。「北堂南陌」大坂の繁華街。「寄食」の九句に「北里笙南巷鼓」とあるのと同じ。「第幾橋」第何番目の橋か。

【山陽評】絶唱 可知。南不問島内、北不尋新地、論人は好人、論詩是好詩。(絶唱 知るべし。南は島内を問はず、

北は新地を尋ねず、人を論ずれば是れ好人、詩を論ずれば是れ好詩なり。)

二日の正午頃、京都に入る。

入京

世路曾懷風浪憂 帝郷聊作汗漫游

世路曾懷く風浪の憂ひ、帝郷 聊か汗漫の遊を作す。

故園遮莫抛鱸膾 一醉行尋鴨水秋

故園 遮莫 鱸膾を抛ち、一醉 行きて尋ぬ 鴨水の秋。

〔朴齋先生詩鈔〕初編上)

世に処する道は 昔は風波の憂いと思つていたのに、京へいささか放浪の旅に出た。

故郷は ままよと鱸のなますを投げ捨てて、思い切つて 賀茂川の秋を尋ねる。

「帝郷」帝の居るところ。「汗漫」行方定めず放浪する様子。広くて捕まえどころのないさま。

「鱸膾」鱸のなます。西晋の張翰が故郷の呉の秋の風味を思い起こして、官を辞しすぐに故郷に帰つたという故事。(『晉書』張翰傳)「遮莫」それならそれで仕方がない。ままよ。

【山陽評】一二不覺着對。三四下字、又無心映帶佳。(一二覺へずして對を着く。三四下字、又無心に映じて佳を帶ぶ。)

頼山陽は八月十二日(茶山の死の前日)に茶山重病の知らせを聞き、急ぎ西下の途に着いたが臨終には間に合

わなかつた。山陽が神辺に到着したのは十八、九日であつたらしく、二十日の葬儀には参列した。

九月四日、朴齋は京都に山陽を訪ねたが山陽は備後からまだ帰つていなかつた。次の詩を詠んでいる。

山陽先生西游未歸先候其居 山陽先生 西游して未だ歸らず 先づ其の居に候ふ

鴨水潺湲透草堂 東山正與步檐當 鴨水 潺湲として 草堂を透り、東山 正に步檐に當る。

皐比何日人歸坐 滿架芸籤且自香 皐比 何れの日か 人歸坐す、滿架の芸籤 且た 自ら香る。

〔朴齋先生詩鈔〕初編上

賀茂川の水はさらさらと流れて 草堂を透り、東山は 步檐から正面に見える。

虎の皮の敷物に坐られるのは何時のことか、滿架の芸籤は また自ら香っている。

〔潺湲〕水の流れる音。〔步檐〕歩廊。〔皐比〕虎の皮で、儒者の敷物。〔芸籤〕書籤。書籍の表の標識紙。

〔山陽評〕芸籤 厩厩 安能滿架（芸籤は厩厩、安んぞ能く架に滿たん）

〔厩厩〕僅か。

九月六日に朴齋は再度山陽を訪ねたが、山陽はまだ帰つていない。ちょうど福山に下るという下榭呉服店（当下榭、下榭、上榭）呉服店が京都から福山へ出張店を出していた）の人に逢い、家郷に次の詩を託す。

旅情

故國迢迢天一涯 有誰相識話襟期 故國 迢迢として 天の一涯、誰有りてか 相識 襟期を話さん。

始知爲客難堪處 最在辭家未久時 始めて知る 客と爲りて 堪へ難き處、最も家を辭して 未だ久しからざる

時に在り

〔朴齋先生詩鈔〕初編上

故郷は遙か遠く 天の涯だ、胸中を話せる友として 誰がいるだろうか。

始めて知つた 旅人となつて 堪え難いのは、家を去つて未だそれほど経つてはいない時分だと。

〔迢迢〕遙かに遠いさま。〔襟期〕心の中の思い。（承句の右の傍らに「山陽未歸故也」と書き込み有り）

【山陽評】古人未道破者十四字、亦足千古。(古人未だ道破せざる者十四字、亦千古に足る。)[「十四字」転結句。]
 九月九日、朴齋は再三山陽を訪ねたが山陽はまだ帰っていない。

九日問山陽先生宅未歸 九日 山陽先生の宅を問ふも未だ歸らず

陶家九日菊花開 待盡先生歸去來 陶家 九日菊花開き、待ち盡す先生の歸去來を。

倦鳥始還天已暮 誰留籃輦進新醕 倦鳥 始めて還り天已に暮るるに、誰か籃輦を留めて新醕を進むるや。

〔朴齋先生詩鈔〕初編上

山陽の家では九日菊花が開き、先生のお帰りを待ち尽くしている。

疲れた鳥はやつと埒に還り陽は已に暮れたのに、誰が駕籠を留めて新しいどぶろくを勧めているのか。

【陶家】陶淵明。ここは山陽の家を指す。「倦鳥」飛び疲れた鳥。陶淵明の「歸去來辭」に「雲無心以出岫、

鳥倦飛而知還」(雲は心無くして以て岫を出で、鳥は飛ぶに倦きて還るを知る)とある。「新醕」新しいど

ぶろく。

【山陽評】用典誰能横佚。能盡可謂難也。(典を用ふること誰か能く横佚ならん。能く盡すは難しと謂ふべきなり。)

【横佚】自由自在に辞を陳べる。

2、朴齋、山陽の塾に入門する

九月二十二日、朴齋はやつと山陽に会えて入塾する。『史記』列伝を読了し、山陽の撰する『韓蘇古詩』を写し終えた。『戰國策』を学び、詩は一日一首は必ず作る。当時の山陽塾の日課は「詠文」「作詩」、聴講は「書經」「文章軌範」「八大家文」「蘇詩」「孟子」等であった。

文政十年（一八二七）十一月二日に岳父岡翁と妻から書簡が届き、朴齋は旅窓に於ける当時の心境を七言古詩に次のように詠んだ。

寄食

寄食人家卅歲餘 耕無半畝住無廬

人家に寄食すること卅歲餘、耕すに半畝無く住むに廬無し。

況此隻影來京國 身外唯有數卷書

況んや此れ隻影京國に来るをや、身外に唯だ數卷の書有るのみ。

滿眼袂服事游嬉 千秋之業誰期興

滿眼 袂服 游嬉を事とすれば、千秋の業誰か興すを期せんや。

成立如登九折坂 埋首陳編手引錐

成立するは九折の坂を登るが如し、首を陳編に埋め手に錐を引く。

北里笙南巷鼓 燕姬按曲趙姬舞

北里の笙南巷の鼓、燕姬は曲を按じ趙姬は舞ふ。

席上調來金玉羹 酒間笑劈麒麟脯

席上調へ來る金玉の羹、酒間笑劈す麒麟の脯。

應笑堅坐田舎兒 柳條不折鶴不騎

應に笑ふべし堅坐田舎の兒、柳條折らず鶴騎らず。

硯田會有西成日 故山歸隱岩爲室

硯田會ず有らん西成の日、故山歸隱岩を室と爲さん。

度形薛衣量腹炊 閉戸著書吾事畢

度形薛衣腹を量りて炊ぎ、戸を閉ぢ書を著して吾が事畢らん。

〔備後史談〕第八卷第六号）

他人の家で生活すること三十年あまり、畑作をするにも半畝も無く住むための廬も無い。

ましてや独りぼっちで京の都に來たのではないか、自分の身以外は唯だ數卷の書籍が有るだけ。

そこら中の着飾った女達と遊び楽しむ事に専念すれば、永遠の仕事に興す事など誰が期待できようか。

事を成就するのはつづら折りの坂を登るようなものだ、首を古書に埋め手に錐を持つ。

北里の笙の笛南の巷の鼓、燕姬は曲を調え趙姬は舞う。

席上には調理された上等な羹、酒の席は劈くほどの笑い麒麟の乾し肉。

まさしくお笑いだ そんな席に堅くなつて坐る田舎の兒、別れの柳枝を贈ってくれる者はなく 出世もできず。それでも 学問を続けておれば 會かならず 稔りの日があるだろう、故郷の山に隠居し 岩を室としよう。

この身に相応しい粗末な衣服に 食事を切りつめ、戸を閉ざし 書を著あして 私の仕事を畢おえるとしよう。

「隻影」独りぼっち。「滿眼」目の届く限り。「袷服」晴れ着。「九折」つづら折り。「陳編」古い書物。「手引錐」手に錐きぎを持って。「引錐」は「引錐刺股」で蘇秦が学に勉め、錐を股に刺して眠気を防いだ故事。「國策」秦策に「讀書欲睡、引錐自刺其股、血流至足」（書を読まんとすれば睡を欲す、錐を引きて自ら其の股を刺せば、血流 足に至る）とある。「北里」遊里。もと紂王ちゆうわうの時の艶っぽい舞樂の名。「燕姬」燕の地方の女。歌舞をよくする。李白の「幽歌行」に「趙女長歌入彩雲、燕姬醉舞嬌紅燭」（趙女 長歌して彩雲に入り、燕姬 醉舞して紅燭に嬌なまめく）とある。「金玉」得難く珍重すべきもの。「夔」あつもの。吸い物。「劈」つんざく。破る。「脯」薄く切った乾し肉。「堅坐」堅くなって坐る。「硯田」詩人や文人などの硯を農夫の耕作地に喩えた。ここは学問が仕事であつてそれを続けること。「西成」秋に穀物が稔る。「度形」身に叶つた恰好。「薛衣」粗末な着物。

まとめ

朴齋は十二歳で茶山の廉塾に入門したが、既に年に五言絶句三十首ばかりを作るほどの秀才であつた。『先考朴齋府君行狀』に、

…始受句讀。幼而聰敏穎悟、數月終四書五經句讀業、歲暮粗通經史大儀、兼賦詩若干。茶翁及僧道光、大愛賞其才。…

…始めて句讀を受く。幼にして聰敏穎悟、數月にして四書五經の句讀の業を終へ、歳暮粗ぼ經史の大儀に通じ、兼ねて詩若干を賦す。茶翁及び僧道光、大いに其の才を愛賞す。…

と述べられている。又、同じく、

日夜奮勵、研磨經史、傍學詩文、才學益進。(日夜奮勵し、經史を研磨して、傍ら詩文を學び、才學益す進む。)ともあるように、その才子ぶりは衆目の認めるところであった。

茶山には子どもが無く二番目の弟、汝榿の子萬年(長作、茶山にとっては甥に当たる)を養子にしたが、文化八年(一八一)五月十七日に三十九歳で歿した。茶山は七十三歳のとき、妻宣の妹の子、即ち宣にとつては甥に当たる朴齋(二十四歳)を養子として迎えたが、七年後の文政十年(一八二七)、茶山は亡くなる一か月ばかり前の七月九日に朴齋を離縁した。その理由は何だったのであろうか。

朴齋は「丁亥七月出菅氏所懷二首」(丁亥七月菅氏を出づる所懷二首)の叙の文で次のように述べている。

養母即余生母姉也。數年病卒。而有萬年遺孤既長。於是翁逐余、以萬年遺孤爲嗣。余也既出菅氏復歸母家。寄食内兄富卿、冒其姓如故。

養母は即ち余が生母の姉なり。數年にして病みて卒す。而して萬年の遺孤有りて既に長ず。是に於て翁は余を逐ひ、萬年の遺孤を以て嗣と爲す。余也既に菅氏を出でて復た母家に歸る。内兄の富卿に寄食し、其の姓を冒すこと故の如し。

茶山が八十歳になつたとき朴齋は「養父茶山先生八十壽言恭賦奉呈」(養父茶山先生八十の壽言恭しみ賦して呈し奉る)と題して傘寿を祝う七言律詩を詠んでゐる。その後半部「覆育有思成骨肉、榮枯無意問衣簪。階庭別見芝蘭秀、爲要滋培竭我心」(覆育恩有り骨肉と成り、榮枯衣簪を問ふに意無し。階庭別に芝蘭の秀づるを見る、爲に要す滋培して我が心を竭さん)は、「縁有つて茶山と親子の契りを結んだからには、官吏として出世

しようとは思わない。茶山の膝下で茶山の甥である萬年の遺児、菅三が大分生育した。自分はこれを慈しみ育てることに、「精一杯の力を尽くそう」というのであるが、このとき朴齋は自分の養子としての地位が、遅かれ早かれ菅三にとって代えられるであろうことを予知していたと考えられる。

その『行状』に、

養母門田氏病没。没後茶翁亦病。而翁女弟及女姪、讒君有日。至此乘翁病、百方讒焉。君知之、而勢不能爲辨説。文政十年丁亥七月四日、茶翁遂使君夫妻大歸於門田氏。未幾茶翁病没。…

養母門田氏病没す。没後茶翁亦病む。而して翁の女弟及び女姪、君を讒して日有り。此に至り翁の病に乗じ、百方讒す。君之を知るも、而も勢辨説を爲す能はず。文政十年丁亥七月四日、茶翁遂に君が夫妻をして門田氏に大歸せしむ。未だ幾もなくして茶翁病没す。…

と記されているように、茶山の姪である敬（茶山の妹の娘で菅三の母）や妹（ミツ）が常日頃、自分のことを茶山に讒言しているのを朴齋は知っていた。

しかし、茶山が如何に身内の者の讒言とはいえ妹や姪の言うことだけで、養子縁組みを簡単に解消するという大衆を行うわけがない。茶山が伊澤蘭軒に宛てた手紙に、

…私は兒なし。養子もとかく相應せず。才子過て傲慢、こまり申候。…

とあるところから、朴齋が傲慢である爲に塾の後継者としては不適當であると、茶山は常々思っていたのであると考えられる。

離縁されて二年のち文政十二年（一八二九）に、朴齋は福山藩儒に拔擢され十人扶持となり、江戸詰を命ぜられた。文政十三年（一八三〇）から丸山学問所で講義を始めた。天保二年（一八三一）三月、奥勤兼役となり福山藩主阿部正寧の侍読を務めた。天保七年（一八三六）十二月、阿部正弘が襲封するや、上下格に昇進した。こ

のように朴齋は順調に出世していったが、嘉永六年（一八五三）六月、ペリーが浦賀に通交を求めて来たとき、藩主に次のような尊王攘夷論を建言し、その結果朴齋は侍読を解任されている。

：數年間海防怠惰者、亦幕府勘吏所爲也。勘利之吏、失人和害國政如此。則退此輩、方今最所應先也。不然則必先倡和睦交易之利說、移天照大神之皇國、而變夷狄禽獸之風、貽萬世之醜辱。而上觸天子之怒、下招萬民之嗤笑必矣。此臣之所以希君上猛省、以孟明爲明鏡也。臣固淺學、而自君上之幼、叨荷殊恩、侍讀日久。故一字一淚、敢獻卑言、以諫爭焉。亦以爲職分之一端也。頓首謹白。

：數年間の海防の怠惰は、亦幕府勘吏の爲す所なり。勘利の吏、人の和を失ひ國政を害すること此の如し。則ち此の輩を退くること、方今最も應に先とすべき所なり。然らざれば則ち必ず先に和睦交易の利説を倡へ、天照大神の皇國を移し、而して夷狄禽獸の風に變へ、萬世の醜辱を貽さん。而して上は天子の怒に觸れ、下は萬民の嗤笑を招くこと必なり。此れ臣の君上の猛省し、孟明を以て明鏡と爲すことを希む所以なり。臣固より淺學、而も君上の幼き自り、叨なくも殊恩を荷ひ、侍讀たること日久し。故に一字一淚、敢て卑言を獻じ、以て諫争す。亦以て職分の一端と爲すなり。頓首謹白。

「勘」調べる。問いただす。「倡」唱える。事を始める。「貽」送り与える。残し伝える。「叨」妄りに。忝けなくする。「殊恩」格別の恩義。「諫争」言い争いをするまで強く諫める。

家國徒懷千古愁 家國 徒らに千古の愁を懷く
一封聊擬主恩酬 一封 聊か主恩に酬いんと擬す
如今無復辛慶忌 如今 復た無し 辛慶忌
敢望朱雲免斷頭 敢て望まん 朱雲の斷頭を免れんことを

〔先考朴齋府君行狀〕

国家は徒らに千古の愁を懐いており、一封の書類を奉って主恩に酬いようとした。今は朱雲が断頭を免れたようなことを敢て望むだろうかそれは無い。

「一封」一封の書類。「辛慶忌」漢、狄道の人。武賢の子。字は子眞。烏孫の赤谷城に屯田して戦功があった。朱雲が張禹を誅せんことを請うたとき、帝は怒って雲を誅せんとしたが、慶忌が免冠叩頭して力争したので、朱雲は誅殺を免れることができた。（『前漢書』六九）

朴齋は嘉永六年（一八五三）十月十五日、阿部侯から職を解かれ家を福山に移した。

以上のことから朴齋は性格的には聊か過激で熱血漢であったと考えられる。研ぎ澄まされた刃のような鋭さを持ち、茶山の言う「才子過て傲慢」な人だったのであろう。

そういう人柄は廉塾の後継者としてどうかと茶山は危惧したものと思われる。それでも茶山は何とか教育をして、廉塾の後継者に育て上げようと努力したに違いない。山陽のときもその才能を高く評価するが故に、性格的な欠点を何とか正そうと一年余りも関わって来た。山陽の廉塾に於ける生活は、文化七年の正月から始まった。梅見に行ったとき、茶山に突つかかるような態度をとったり、腹ごなしに散策をしたいというので、茶山は寒さを我慢し、酒肴を準備して付き合ったり、入手困難な食べ物も山陽の好みに合わせて調達したり、塾生への依怙最原にも、茶山としての工夫を凝らして補佐したり等々、茶山は相当に辛抱強く山陽に関わった。しかし、山陽は自分の宿願を叶えるために、茶山の恩情を蔑ろにして上京してしまった。上京の際には塾で役立ちそうな書生を連れて出てしまった。後で茶山が困ることなど全く頓着していない。にもかかわらず山陽は、上京後は自分の都合で茶山を必要とすることに頼って来た。山陽の父春水と茶山とは旧来の親友であったため、春水の苦衷を察する茶山は極力山陽の面倒を見て来た。しかし、山陽の上京後は書簡にも必要でない限り返書は認めなかった。必要

な場合は用件のみといった状態が数年間続いた。それは「茶山も相当に依怙地だ」と思えるほどの頑固さであった。

朴齋を離縁した場合にも、こうした山陽の場合と似通った事情があつたのではなからうか。朴齋を養子に迎えて生活を共にするようになってからは、眼に余るような言動が屢々あり、それでも茶山は何とか廉塾の後継者として相応しい人物になつて欲しいと期待を掛け続けていたに違いない。しかし、朴齋は茶山の願い通りにはならなかつた。

「才子過て傲慢で困る」という言葉の裏には、「塾童に対する温かみがない」「時として塾童を見下げた行為がある」といった意味合いも感じられる。又、阿部藩主から解任されたことから、自分の信念を貫くためには、周囲の斟酌等は一顧だにしないと云つた頑なさがあつたのだらう。死期を悟つた茶山はいつまでも「温厚寛大」であることはできなかつた。土壇場に来て茶山は、廉塾存続の為に朴齋を離縁するという苦渋の決断を下したものと考へる。

以上のことから茶山の「人と為り」をいうとき、一般的に言われるように「温厚寛大」では済まされないものがある。大事を前にしたときは、梃子でも動じない頑固さを持つ人でもあつたということであらう。

第三章 茶山の文学（漢詩）

はじめに

頼山陽撰の「茶山先生行狀」に、

福山侯、與林祭酒論詩。祭酒曰、當今、詩家當以菅太中爲魁。侯命吏廉問、更悉得其學行兼茂狀。始賜俸五口。時寛政四年壬子八月也。

福山侯、林祭酒と詩を論ず。祭酒曰く、當今、詩家當に菅太中を以て魁と爲すべしと。侯吏に命じて廉問せしめ、更に悉く其の學行兼茂の狀を得たり。始めて俸五口を賜ふ。時に寛政四年壬子八月なり。

と記されている。

寛政四年（一七九二）八月、第四代福山藩主阿部正倫と昌平齋の大学頭林祭酒（述齋）が詩について話しているとき、祭酒が「當今、詩人の第一人者として挙げられるのは何と言つても菅太中だろう」と言つた。阿部侯は「菅太中」について余り認識がなかつたので調べさせたところ、茶山が自分の領内の者で学問、徳行ともに兼ね

備わった人物であることを初めて識ったというのである。寛政四年といえ、茶山は四十五歳であつた。昌平饗の林祭酒が茶山の名前を口に上すくらいだから、この頃すでに東都に於て茶山の名は、相当に知られていたものと思われ。

第三章では、林祭酒をして「當今、詩家當に菅太中を以て魁きまがけと爲すべし」といわしめるほど人々の心を捉えた茶山の詩の魅力は何か。それを茶山の青少年期の作「花月吟」、青壮年期の「政治批判詩」、主として郷里神辺に腰を落ち着けてから多く見られる「農村詩」、塾経営に携わるようになってから多くなつた「子どもを詠う詩」から考察する。また茶山の詩に対する考え方を「茶山の詩論」から検討し、「江戸時代の漢詩界に於ける茶山」について触れることとする。

「花月吟」二十首は七言律詩で、桜の花の咲き始め、満開の時期、散りかけた頃などそれぞれの趣を詠じ、それに月を配して桜の花の美しい時と、月の美しい時とが一致する風情、或いは相背く風情などを詠っている。

「花月吟」について茶山は「題花月吟後」（花月吟後に題す）で「花月吟二十首、余少年時、倣唐伯虎所作。以織靡似時様、棄而不録。」（花月吟二十首は、余が少年の時、唐伯虎に倣なまひて作る所。織靡にして時様に似たるを以て、棄てて録せず。）と述べている。即ち、「花月吟」二十首は、自分が少年時代に唐伯虎（中国、明の詩人。「花月吟」十一首がある）を真似て作ったものであるが、織靡でその時代の傾向に似ているので、棄てて取り纏めていないというのである。

これらの詩は「花月」ということは通り、一首々々、花・月の美しい風景が詠われている。習作のようであるから、今目前にしている風景に感動して詠んだ詩ではなく、嘗て観たことのある風景を思い浮かべたり、絵画で見たことのある風景を詠ったり、或いは観念の風景詩であつたりして、後日、茶山の到達した理想とする詩の在

り方とはかけ離れたものであった。

茶山は古賀精里の長子 穀堂に宛てた書簡で、詩とは「述實事寫實際、不倣前人輩、不學時世粧、乃始爲非僞詩也。」（實事を述べて實際を寫し、前人の輩に倣はず、時世の粧を學ばずして、乃ち始めて僞詩に非ずと爲すなり）と述べている。即ち、「詩は實事を述べ實際にあるがままを寫し、前人の輩に倣わず、時代の装いを學ばない。そうであつて初めて僞詩でないと云える」というのである。詩に対する茶山の考え方がそうであるとすれば、唐伯虎に倣つた觀念の作である「花月吟」は「穢靡にして時様に似」ているので、「取るに足りないもの」として棄てて録せず」ということになるのであろう。しかし、茶山も初めはこのような「美しいだけの詩」を作つていたのである。ここでは茶山の作つた「花月吟」二十首のどういふところが「穢靡にして時様に似」ているのか。唐伯虎の「花月吟」十一首と比較しながら考察してみよう。

青壮年期の作品は、『黄葉夕陽村舍詩』前編卷一から卷三に収められていて長詩が多い。鳥に擬して藩政を批判した「有鳥三首」（前編卷一）七十二句、「道義地に陥ちた今の世には、古人の節操はなかなか容れられない。邪佞な人々がひたすら政治の恩恵に浴していることが嘆かわしい」と、時勢を慨嘆する「感事贈拙齋先生」（前編卷一）六十句、山歩きをしながら辺りの風景に寄せて自分の感懐を詠じた「山行」（前編卷二）一〇六句、武家政治を批判し、「日本の国は天子の治める世の中にならねばならぬ」といふ感慨を詠う「開元琴」（前編卷三）七十句、などがある。

「耕牛」「龍盤」「時情」「山居」「吉備公廟」（前編卷一、七言律詩）、「秋半」六首（前編卷一、五言律詩）など七言律詩・五言律詩にも政治批判や世情批判の詩は多い。このような政治や世情を批判・慨嘆する詩は特に青壮年期に多く見られるが、晩年にも五十七歳の作「大猪川歌」（後編卷二）、七十四歳の作「木鳳歌」（後編卷二）、七十九歳の作「綿羊圖」（遺稿卷六）など、藩政の在り方を批判したり、優れた人物が世に認められない現状を批

判したり、福山藩の徴税役に宛てたりした批判詩や時勢を慨嘆する詩がある。『黄葉夕陽村舎詩』を刊行するに当たり、茶山が準備していた「草稿」（広島県立歴史博物館蔵）前編巻一から巻三を見る機会に恵まれたが、幕府や藩府の「忌諱とがめに触れ」そんな詩は、板本『黄葉夕陽村舎詩』には載せていない。それらについても検討する。

京都遊学を終えて郷里に帰った茶山の活動範囲は、自と郷土を中心としたものになっていった。少し足を延ばしても備前・備前・安芸地方程度である。毎日の生活の中で目に触れるものは農山村の風景であり、そこに暮らす人々の姿であった。「実事を述べ実際にあるがままを写す」のが茶山の作詩の姿勢であるから、目に触れた実事、感じた有りの儘を詩にすると自おのずから農村詩が多くなる。

茶山が塾「黄葉夕陽村舎」を開設して、子弟の教育に携わるようになってからは、純真で無邪気な塾童の一挙手一投足に新鮮な驚きを覚えることが多くなり、茶山はその感動を詩にした。同時代の人で茶山ほど子どもを詠った詩人は見当たらなかった。茶山の子どもを詠う詩は『黄葉夕陽村舎詩』の中に八十八首収められている。これらの詩を通して茶山の文学（漢詩）の特徴や、茶山の人となりについて考えてみる。

茶山には纏まった詩論はない。古賀穀堂に与えた書簡や、六如上人・竹田器甫・北條霞亭・道光上人等の詩集に著した茶山の序文から「茶山の詩論」を考察することができると考え、それぞれに当たって検討する。また、茶山詩に対する人々の評から、江戸時代後期の漢詩界に於て茶山はどのような役割を果たしたのか、ということについても触れる。

茶山は遊学後の生涯に四度の長期の旅をしていて、それぞれの旅先で目に触れ、肌で感じた新鮮な紀行詩を多く詠んでいるが、この度は取り上げない。

第一節 『花月吟』

茶山の詩の最も早い時期のものに「花月吟」（桜花と月を主題とした七言律詩二十首）がある。これは茶山の京都遊学のごく早い頃の作であるが、茶山自身「花月吟二十首、余少年時、倣唐伯虎所作。以纖靡似時様、棄而不録」（花月吟二十首は、余が少年の時、唐伯虎に倣ひて作る所。纖靡にして時様に似たるを以て、棄てて録せず）と述べて、詩集『黄葉夕陽村舎詩』には載せなかつた。京都遊学初めの頃の茶山は古文辞学を学んでいた。従つてこの頃の茶山は、江戸時代中期に漢詩の主流であつた護園学派の詩風の影響を受けて、美しい辞句を連ねた纖靡な詩を作っていたようだ。この詩は茶山の友人である中村圃公（備前藩の藩儒）のたつての願ひによつて、文政七年に小冊子『花月吟』として出版された。

『花月吟』について土生玄碩の『師談録』には次のようにある。

〔茶山〕嘗賦月梅詩各二十律、示之和田先生。先生、示之村瀬栲亭。栲亭嗟歎曰、雖宿儒不可及也。時年二十五六耳。（茶山）嘗て月梅詩各二十律を賦して、之を和田先生に示す。先生、之を村瀬栲亭に示す。栲亭嗟歎して曰く、宿儒と雖も及ぶべからざるなり。時に年二十五六なるのみ。）と。

〔村瀬栲亭〕（二七四六〜一八一八）京都の人。名は之熙、字は君績、通称は嘉右衛門、神洲、又は栲亭と號した。秋田藩儒から京都の儒者となる。〔宿儒〕長い経験と研究を重ねた学者。〔月梅詩〕〔土生玄碩〕〔師談録〕は第一章 菅茶山の行跡第一節 5 京都遊学五回目 参照。

つまり、茶山は「花月吟」二十首を和田先生に見せた。先生はこれを村瀬栲亭に示した。栲亭は「宿儒でも及ばない」と感歎したというのである。時に年令は二十五、六歳くらいであった。

茶山は文化四年（六十歳）二月十八日の神辺大火で家を全焼し、若い時の作品はこのとき焼失したらしく、二十歳代前後の作品として現在わかっているものは、「花月吟」と二十五歳のときの作と思われる「江湖」二首と題する七言律詩、安永四年（二七七五）二十八歳の頃の作と言われている「寄紀州西山子綱」と題する五言古詩くらいのものである。以下「花月吟」を取り上げ、若い頃の茶山詩についてその特徴をみてゆくこととする。

以下、一、小冊子『花月吟』についての紹介、二、茶山詩「花月吟」、三、唐白虎詩「花月吟」、四、茶山詩と唐白虎詩の比較、最後に「まとめ」をする。

一、『花月吟』のテキストについて

使用底本 『詩集 日本漢詩』第九卷 富士川英郎・松下忠・佐野正巳編 昭和六十年 汲古書院
『詩集 日本漢詩』第九巻の内容について

慶應義塾大学斯道文庫本 中一冊 文政十一年刊 黄色表紙で、題簽はない。見返は四周单边で、「備後菅茶山先生著／花月吟／余曩爲某生校此篇將捧之有一生竊而刻之謬誤不少因今改刻云／岳洲漁隱識」本文は十丁で七行十五字詰。奥附は「文政十一年戊子春正月發行／大阪書舗 河内屋吉兵衛・加賀屋善藏」である。初めに「花月吟序」と題して岡山藩儒中邨耘撰（文政丙戌秋日書于白鷗精舎）の「花月吟序」が載せられ、終わりに茶山の「題花月吟後」という文と、浪華 篠崎弼の跋が載せられている。

異本

一、静嘉堂文庫本 半一册 薄茶色表紙で、書き題簽「茶山先生花月吟 完」書扉があり四周双辺で、上部に鬼が両手を掛けて上から覗いている絵があり、「中村先生校／茶山先生花月吟／修堂藏版」とある。田浦晋の「文政甲申（七年）冬十月下浣」序と浪華 篠崎弼の「文政甲申十一月」の跋がある。茶山の詩のあとに「附録花月吟 唐伯虎」として唐伯虎の「花月吟」十一首が掲載されている。本文は八丁で九行十七字詰で使用底本と内容は異なっている。

二、富士川英郎蔵本 半一册 茶色表紙、書き題簽で「菅茶山先生花月吟 全」見返は赤紙刷りで四周双辺「菅茶山先生著／菅茶山花月吟／浪華 青木嵩山堂梓」静嘉堂文庫本にある田浦晋撰の「茶山先生花月吟序」が載せられ、続いて篠崎弼の跋があつて両者の「文政甲申」の年月がなくなっている。その次に眉山外史山岐善太積善撰の「茶山先生花月吟後序」が新たに載せられている。更に「附唐六如花月吟」として、唐六如（唐伯虎）の詩十一首が載せられている。本文は静嘉堂文庫本に同じ。奥附は刊記なく「和漢洋書籍發兌處／青木嵩山堂」となっている。

以上のことから、菅茶山の花月吟は、文政甲申（七年）序を附した本（静嘉堂文庫本）が刊行されたが、誤りが多いため文政十一年に改訂版（斯道文庫本）が出版された。更に明治になって、文政七年版に山岐善太積善撰の「茶山先生花月吟後序」を付け加えて、再刊行されたことがわかる。

「唐伯虎」は明、呉縣の人、唐寅（てい）のことで字は伯虎、又は子畏、號は六如（六如居士）・桃花菴・魯国唐生・逃禅仙吏・江南第一風流子。吳中四才子の一人である。弘治中、郷試第一に中あたる。画を善くし、詩文に長じていた。寧王宸濠に聘せられたが、其の異志あるを知つて伴いっしょり狂し、終に放還せられた。著に『畫譜』がある。『明史』二百八十六

『花月吟』について、それぞれの「序文」「跋文」を掲げておく。

(1) 備前藩儒 中邨転撰「花月吟序」

花月吟序

一勺不足以言中冷。然其味、则可品也。一瓣不足以言大庾。然其香、则可評也。茶山先生之詩、有澹泊者、有豐腴者、有高雅遠韻者、有幽清芳潔者、咀嚼焉可挹掬焉。要之非到其岸、而味之、入其林、而玩之。則豈可盡其無量香味哉。此篇也、先生少時所作、出遊戲之餘者。未足以盡先生所謂、一勺之水、一瓣之花耳。然有佳味焉。有情香焉。其爲中冷大庾也決矣。

文政丙戌秋日書于白鷗精舍

備前 中邨 転撰

一勺 以て中冷を言ふに足らず。然れども其の味、則ち品すべきなり。一瓣 以て大庾を言ふに足らず。然れども其の香、則ち評すべきなり。茶山先生の詩、澹泊なる者有り、豐腴なる者有り、高雅遠韻なる者有り、幽清芳潔なる者有り、焉を咀嚼し挹掬すべきなり。之を要するに其の岸に到りて、之を味はひ、其の林に入りて、之を玩ぶに非ざれば、則ち豈其の無量の香味を盡すべけんや。此の篇や、先生少時作る所、遊戲の餘に出づるものなり。未だ先生の所謂、一勺の水、一瓣の花を盡くすに足らざるのみ。然れども佳味有るなり。情香有るなり。其の中冷大庾爲るや決せり。

少しの水を以て中冷泉を言うには足りない。しかしながらその味は一勺あれば品評することができる。一つの花びらを以て大庾嶺を言うには足りない。しかしながら、その香は批評することができる。茶山先生の詩は、あつさりしたもの、実りの多いもの、高尚で優雅、奥深い趣のあるもの、容易に知り得ない深みのある清らかさ、芳しくて潔いものであり、それらは、よく味わうと汲み取ることができる。要するにその岸に到

ってこれを味わい、林の中に入ってこれを愛でるのでなくては、どうして其の無量の香味を味わい尽くすことができようか。此の篇は、先生が少年の時に作ったものであるが、游戲の程度を越えている。いまだ先生の所謂の一勺の水、一瓣の花を尽くすだけでは足りない。しかしながら好い味わいが有る。情も香も有る。故にそれが中冷大庾であると決定することができる。

〔中邨耘〕（一七七七〜一八五〇）備前藩の藩儒 中村岳洲。名は耘、字は圃公、通称は元之介、または、元三郎、岳洲と号した。姫井桃源・赤松滄洲・皆川淇園・六如上人らに学んだ。茶山や頼山陽らと交遊があった。〔中冷〕中冷泉。泉の名。江蘇省丹徒縣の西北、石山籜の東。他に南冷・北冷があつて、三冷と称した。この泉水は茶に宜しく、就中、中冷を称して第一泉という。〔大庾〕大庾嶺。五嶺の一。江西省大庾縣の南。古、塞上という。漢が南越を伐ち、庾勝をして城を此処に築かせ大庾と名付けた。又、臺嶺とも言い贛粵（いんごう）の衝に当てる。唐の張九齡が新経を開鑿し、梅をうえて梅嶺と名付け梅の名所となる。五代の後には全く荒廢したが宋の時、蔡挺が松を道傍に植え、関を嶺上に立て梅関と命名した。〔澹泊〕淡泊。心があつさりして無欲なさま。〔豊腴〕土地がよく肥えて作物がよくできる。〔高雅遠韻〕「高雅」高尚で優雅。「遠韻」奥深いおもむき。深遠なる韻致。〔幽清芳潔〕「幽清」は人が容易に知り得ない深みのある清らかさ。「芳潔」は芳香あつて潔白なこと。〔挹掬〕すくう。「挹」も「掬」もすくう。くむ。〔丙戌〕文政九年（茶山七十九歳）

(2) 茶山「題花月吟後」

花月吟二十首、余少年時、倣唐伯虎所作。以纖靡似時様、棄而不録。友人中邨圃公、頃將梓之、乞題詹詹。往時京人村瀨栲亭、見而評之、有藍氷等語。今又爲圃公所取。所謂世間隨處、有知音者矣。吁羊棗瘡痂、安知後來不

有同嗜之人乎。

花月吟二十首は、余が少年の時、唐伯虎に倣ひて作る所。織靡にして時様に似たるを以て、棄てて録せず。友人中邨(村)圃公、頃將に之を梓せんとして、題せんことを乞ひて詹詹たり。往時京人村瀬榜亭、見て之を評し、藍氷等の語有り。今又圃公の取る所と爲る。所謂世間隨處に、知音の者有るなり。吁羊棗瘡痂、安んぞ後來同嗜の人有らざるを知らんや。

花月吟二十首は、私が少年の時、唐伯虎の真似をして作ったもので、織靡でその時代の傾向に似ているので、棄てて取り纏めていない。友人の中村圃公が、この頃これを木版に彫ろうとして、序文などを頼み、いろいろと言つて来てやかましい。昔京都の村瀬榜亭が、これを見て批評し「元にした唐伯虎より優れている」と言つたことがある。今又、圃公が取り上げる所となる。所謂世間のあちこちに、私の作った意図を分かつてくれる者がいるのだ。なんと棗や瘡蓋を好んで食べるという物好きもいる。どうしてこの後、同じ好みの人が無いと言えるであろうか。

「詹詹」おしゃべり。多言。「藍氷」「荀子」勸學に「學不可以已。青取之於藍、而青於藍、冰水爲之而寒於水」(學は以て已むべからず。青は之を藍より取りて藍よりも青く、氷は水之を爲して水よりも寒し)とある。「羊棗瘡痂」物好き。「羊棗」は、なつめ。曾子の故事。「孟子」盡心下に「不忍食羊棗」とある。亡くなつた父親が棗を好んで食べていたので、曾子は棗を食べると父を思い出すと言つて食べなかつた。棗は誰もが好んで食べるというほど美味しいものではない。「瘡痂」かさ。「痂」はかさぶた。劉邨という男がかさぶたを鰻魚(フグ又はアワビをいう)の身に似ていて美味しいと言つて食べた話。(出典は

『瑯琊代醉編』瘡痂)

(3) 浪華 篠崎弼の跋文

茶山先生和唐六如花月喩二十首、聞先生少時、所戲作。蓋先生、生得風雅三昧、其心澹然、如鏡與水。此首々、皆花月之映、而爲韻語者。自他人觀之、則有可愛、而不可捉之妙矣。物之照鏡水也、色相萬千、而鏡水不疲。故以此卷盡先生者固非也。雖然拈花微笑、笑不外於花。指月示人、人因指觀月。則以先生之妙、不在此卷者、亦非也。

浪華 篠崎弼 書

茶山先生唐六如に和す花月喩二十首は、先生少時、戲れ作る所と聞く。蓋し先生は、風雅三昧を生得し、其の心澹然として、鏡と水との如し。此の首々は、皆花月の映にして、韻語と爲す者。他人自り之を觀れば、則ち愛すべくして、捉ふべからざるの妙有り。物の鏡水に照るや、色相萬千、而れども鏡水は疲れず。故より此の卷を以て先生を盡くすは固より非なり。然りと雖も拈花微笑、笑ひは花に外ならず。月を指して人に示し、人指すに因りて月を觀る。則ち以て先生の妙、此の卷に在らずとするは、亦非なり。

茶山先生が、唐六如に和す花月喩二十首は、先生が少年の時、戲れ作つた所と聞く。さて先生は、風雅に熱中することを天性としている。其の心はあつさりとして、鏡と水とのようである。此の首々は、皆花月のすがたを詠じたものである。他人より見れば、之れは則ち愛すべきものであり、捉えることのできない優れたものがある。物が鏡や水に映ると、色や姿は千變万化し、それでも鏡や水は疲れない。もとより此の卷を以て先生の全てが盡くされるとするとは言えない。とはいつても以心伝心、笑いは花に外ならない。月を指して人に示し、人は指されて月を觀る。則ち先生の妙は此の卷にはないとするのは、亦た誤りである。

「拈花微笑」釈迦が靈鷲山で説法をした時、大梵天王より受けた金波羅華を拈つて衆に示したところ、衆人はその意を解さなかつたが、ただ迦葉だけが独り微笑したという。これはその意を悟つたもので、以心伝心の妙処である。よつて釈迦は之に仏教の真理を授けたとの故事。「篠崎弼」(一七八一〜一八五一)豊

後の人。名は弼、字は承弼、通称は長左衛門、小竹又は畏敬と號す。篠崎三島（大坂の儒者であり混沌詩社の同人）の養子となる。

(4) 田浦晉撰「茶山先生花月吟序」

茶山先生花月吟序

人情感於内、而聲音歌於外者、自不可掩也。故歡愉之聲飛揚、悲哀之音慘戚。是以謫仙之豪放活達也、其辭自剛健逸宕也。少陵之忠愛誠實也、其詩自整齊委曲也。猶響之應聲、影之從形、是豈偶然哉。吾嘗讀茶山先生之集、其體規則整然、其辭温潤婉達、因思先生之爲人而不措焉。方欲西遊、一識其面、以接唔語、不幸而多病、不能往七八年。于茲常以爲恨焉。今年三月、西國之一書生來、而訪吾廬、出花月吟一小冊而見予。予讀之要妙精微、殆有風雅之遺音。於此也吾思慕之心愈切、亦以老親、故不能往。蓋書生者、先生之門人、而常知其行住坐臥之狀焉。曰温厚之長者、而能教育天下之人、才實今世之師表也。予聞之、益悅吾見之不違也。生謂予曰、此則先生之門人、中村圃公之所欲刻而託小子。小子飄飄書生、不能辨。君願刻之。予曰、有之哉、固所願也。遂命梓此。一小冊未足以盡先生。雖然江海之水味、可以驗于一口、一萼之花香、豈異千株之香芳哉。然則此集、亦先生風致之緒餘也。今此刻也、聊以就嚮思慕之意云爾。

田浦 晉 撰

人情 内に感じて、聲音 外に歌となるは、おつが 自ら掩ふべからざるなり。故に歡愉の聲 飛揚し、悲哀の音 慘戚す。是を以て謫仙の豪放活達なる、其の辭 自ら剛健逸宕なり。少陵の忠愛誠實なる、其の詩 自ら整齊委曲たるなり。猶響の聲に應じ、影の形に従ふごとく、是れ豈に偶然ならんや。吾茶山先生の集を讀むに當たりて、其の體の規則整然、其の辭の温潤婉達、因りて先生の人と爲りを思ひて措かざるなり。西遊せんと欲するに方り、一たび其の面を識り、以て唔語に接せんとするも、不幸にして多病、往く能はざること七八年。茲

に常に以て恨みと爲す。今年三月、西國の一書生來りて、吾が廬を訪ひ、花月吟の一小冊を出して予に見す。予之を讀むに要妙精微、殆ど風雅の遺音有り。此に於てや吾が思慕の心、愈よ切なるも亦老親有るを以て、故に往く能はず。蓋し書生は、先生の門人にして、常に其の行住坐臥の狀を知るなり。曰く温厚の長者にして、而して能く天下の人を教育し、才は實に今世の師表なりと。予之を聞き、益す吾が見の違はざるを悦ぶなり。生予に謂ひて曰く、此れ則ち先生の門人、中村圃公の刻さんと欲する所にして小子に託す。小子は飄飄たる書生にして、辨ずる能はず。君之を刻さんことを願ふ。予曰く、之有るかな、固より願ふ所なりと。遂に此れを梓せんことを命ず。一小冊未だ以て先生を盡くすに足らず。然りと雖も江海の水の味、以て一口に驗あるべく、一萼の花の香りも、豈に千株の香芳に異らんや。然れば則ち此の集、亦先生風致の緒餘なり。今此に刻し、聊か以て嚮の思慕の意を就すと爾云ふ。

田浦 晉 撰

人の情は内に感じて、音声の外に歌われるのは、自らはつきりしている。だから歎び愉しむ声は飛んで高く揚がり、悲しみの音はいたみ憂える。是を以て李白の心は豪放にして小さいことに拘らず、その言語は自然に強く逞しく小さいことに拘らない、杜甫は真心から人を愛し誠実であり、その詩は自ら整齐にして詳しい。猶お響きが声に応じ、影が形に従うようであるのは、どうして偶然であろうか。私は茶山先生の集を読むに当たって、その体裁が規則整然として、その言語は柔らかく艶があり、先生の人と為りを思つて忘れられない。今しも西遊して、一たび其の面を識り、会つて話したいと思つたが、不幸にして多病で、七八年往くことができなかつた。このことをいつも恨みに思つていた。今年三月、西國の一書生が來て私の廬を訪ね、「花月吟」一小冊を出して私に見せた。私がこれを読むに、非常に優れていて、細かいところまでよく整つていた。殆ど風雅の遺風がある。ここに於て私の思慕の心は愈々切実であつたが、年老いた親がいて往くことができない。しかし、書生は先生の門人でいつも先生の常日頃の様子を知っている。言うことに、（先生は）

温厚の長者であつて、よく世の中の人材を教育し、才能も実力も今の世の手本となる立派な人だと。私はこの話を聞いて益々私の先生を見る目に間違いがなかつたことを悦んだ。書生が私に言うことに、是れは則ち先生の門人の中村圃公が刊行しようとするところで、弟子である私に託された。私は軽々しい書生で、うまく事が処理できない。あなたにこれを刻することを頼むと。私は言つた。そういうことだつたのか、もとより願うところであると。遂に此れを木版にすることを命じた。この一小冊子はまだ先生を尽くすには足りない。そうであるとはいつても、江海の水の味は、一飲めばそれとわかり、一萼の花の香りを以て千株の芳香を証することもできる。されば此の集は、亦た先生の風雅の余りである。今此処に刻して、聊かさきの思慕の意を成就しようとするわけである。

「慘戚」いたみ憂える。「謫仙」謫仙人。李白をたたえた語。「剛健逸宕」強くたくましくしつかりしていて、小さいことに拘らない。「少陵」杜甫。「整齊委曲」正しく揃い、詳しいこと。「温潤婉達」柔らかで艶がある。「要妙精微」「要妙」は優れてよい。「行住坐臥」立ち居振る舞い。日常の行動。「小子」弟子。自分の謙称。私。「風致」趣。奥ゆかしい様子。

(5) 茶山先生花月吟後序

安藝詩人、頼襄、嘗品日本詩人、以茶山先生、爲之稱首。余以爲、襄之柳揚、常攬私意、不可悉信也。及謁見先生、誦讀家集而後、知先生之詩、拔萃逸羣、諸家無比。而深服襄之亦善知詩也。夫詩尚雅趣風調、苟乏雅趣風調、則千里一瀉才、起衰救溺之力、皆不謂之詩本色也。是韓蘇之所以不及李杜、而先生之所以超乎白石南海也。襄之眼力、蓋有見於是。是篇二十首、則先生少年之作、句雖工、意雖雅、固不足以盡先生。雖然不載於前後二集可恨。中村圃公、先生之故舊、表而章之信有以也哉。

眉山外史山岐善太積善 撰
浪速 齋落合和伯 通書

安藝の詩人、頼襄、嘗て日本の詩人を品し、茶山先生を以て、之が稱首と爲す。余以爲、襄の柳揚、常に私意を擡たごくし、悉くは信すべからざるなりと。先生に謁見し、家集を誦讀するに及びて後、先生の詩、拔萃逸羣にして、諸家比なぶ無きを知る。而して襄の亦善く詩を知るに深服するなり。夫れ詩は雅趣風調を尚たうとび、苟いやしくも雅趣風調乏しければ、則ち千里一瀉の才、起衰救溺の力も、皆之が詩の本色と謂はざるなり。是れ韓蘇の李杜に及ばざる所以にして、先生の白石南海に超ゆる所以なり。襄の眼力、蓋し是に見る有り。是の篇二十首、則ち先生少年の作、句工たぐみと雖も、意雅と雖も、固より以て先生を盡くすに足らず。然りと雖も前後二集に載せざるは恨むべきなり。中村圃公は、先生の故舊、表して之を章あきらかにするは信まことに以よるかな。

安藝の詩人、頼襄は、嘗て日本の詩人を品評して、茶山先生を以て、之を第一人者とした。私が思うに、襄の柳揚は常に私情を交えた考えが鋭く、悉くは信じることができないと。先生に謁見し、家集を誦讀するに及んで後、先生の詩は拔萃逸群にして、諸家比なぶものが無いことを知った。そうして襄の亦た善く詩を知ることことに深服したのである。夫れ詩は雅趣風調を尚たうとび、苟いやしくも雅趣風調が乏しければ、則ち千里一瀉の才、起衰救溺の力も、皆その詩の本来の面目とは謂われない。是れは韓愈や蘇軾が李白や杜甫に及ばない所以であつて、先生が白石や南海を超える所以である。襄の眼力は、思うにその点を見ているのであろう。是の篇二十首は、則ち先生の少年の作で、句は工たぐみとはいつても、意は雅とはいつても、固より先生を盡くすには足りない。とはいつても前後二集に載せないのは恨むべきである。中村圃公は、先生の古なじみで、表して之を章あきらかにすることは信まことに理由の有ることだ。

「稱首」第一人者。「楊柳」過大評価して宣伝すること。「擡」鋭い。刺す。「拔萃逸羣」「拔萃」集まった

多くの中から特に抜きん出る。「逸羣」人なみ優れる。衆に抜きん出る。「千里一瀉」一旦流れ出した川の
 水は一気に千里も流れ下ること。文章や弁舌が淀みのない形容。「起衰救溺」衰えた者を起たせ、溺れる者
 を救う。「本色」持ち前の性質。本来の面目。「韓蘇」韓愈と蘇軾。「李杜」李白と杜甫。「故舊」昔からの
 友人。「山岐善太積善」山木積善。伊勢国亀山の藩儒。字は伯虞、通称は善太、眉山、または狂庵と号した。

二、花月吟 寄平安故人倣唐伯虎體（平安の故人に寄せ唐伯虎の體に倣ふ）

①

一春花月動相睽 何夜花梢見月棲 一春の花月 動もすれば相睽く、何れの夜か花梢月の棲ふを見ん。

吟月遲花寒剪剪 坐花望月雨淒淒 月に吟じて花を遅ちては寒剪剪たり、花に坐して月を望めば雨淒淒たり。

月中私擬催花詔 花上誰懸取月梯 月中 私に擬す花を催すの詔、花上誰か懸けん月を取るの梯。

願得花園常貯月 花朋月侶每招携 願はくは花園常に月を貯へ、花の朋月の侶毎に招携するを得ん。

一春の花と月は 動もすれば互いに睽きあう、いつの夜花の梢に 月が憩うのを見るだろうか。

月に向かつて吟じ 花を待つては 寒さが身に染みる、花に坐して 月の出を望むと 雨が冷たく降る。

月の光の中に 私に準える 花を催す詔が降りてくれないか、花の上に誰か月を取る梯を懸けてくれないかと。

願わくは 花園に常に月を貯えて、花の朋月の侶を いつも招待したいものだ。

〔剪剪〕冷たい風の様子。〔淒淒〕寒さが身に染みるさま。

②

花開纒值月來臨 幾費期花待月吟 花開きて 纒かに値ふ月の來り臨むに、幾か費す花を期して月を待つ吟。

孤興探花迷月徑 餘耐思月宿花林 孤興 花を探りて月徑に迷ひ、餘耐 月を思ひて花林に宿す。

即今月下逢花意 去歲花前餞月心 即今きん 月下 花に逢ふの意、去歲 花前 月を餞きるの心。

花候幸當圓月際 好移月榻對花斟 花候 幸に圓月の際に當たる、好し 月榻を移して花に對して斟くまん。

花が開いて 纔かに 月が来て 臨むの に出会う、どれくらい 費したことか 花を期待し 月を待つての 吟。

独り興に乗じて 花を求め 月の小徑に迷い、ほろ酔い気分 で 月を思い 花林に宿す。

只今月の下で 花に逢う 気持ち、去年 花の前で 月を餞おつた心。

花の時節が 幸いに 満月の時に 当たった、好し 月に 照らされた 腰掛けを 移し 花に向かつて 盃を 傾けよう。

〔餘耐〕 酔いの名残り。「耐」は物事の最中。「即今」只今。目下。

③

花滿芳園月滿空 花姿濯濯月波融 花は芳園に満ち 月は空に満つ、花姿 濯濯たくたくとして 月波融あざかなり。

花延月色來池北 月轉花陰在檻東 花は月色を延ひきて 池北かほに來り、月は花陰に轉じて 檻東かどうに在り。

弄月簫傳花外閑 護花鈴響月前風 月を弄びて 簫は傳ふ 花外の閑、花を護りて 鈴は響く 月前の風。

恨無好句酬花月 抱月聊眠花氣中 恨むらくは 好句の 花月に酬ゆる無きを、月を抱きて 聊か眠らん花氣の中。

花は 芳しい園に満ち 月は 空に満ちている、花の姿は 光り輝き 月光は 明るい。

花は 月光を引き延ばし 池の北に來ており、月は 花陰に移り 欄干の東に在る。

月を楽しむ 簫の笛は 花外の高殿にまで伝わり、花を護つて 鈴は 月前の風に響く。

恨まれるのは 花と月に酬いる 好句ができないこと、月を抱いて 花氣の中で しばらく眠ることにしよう。

〔融〕 和らぐ。明らか。〔弄月〕 月を眺めて楽しむ。

④

溪月溪花好嘯吟 悠然見月立花陰 溪月溪花嘯吟するに好し、悠然として月を見て花陰に立つ。

月中幾日花無恙 花上何年月始臨 月中幾日か花恙無からん、花上何れの年か月始めて臨まん。

月夕花朝人競賞 花神月姊汝何心 月夕花朝人競ひ賞す、花神月姊汝何の心ぞ。

月終不答花還黙 月嶼花灘夜自深 月終に答へず花還た黙す、月嶼花灘夜自ら深し。

溪の月 溪の花は吟唱するには好い、ゆつたりとした気持ちで月を見て花陰に佇む。

月の中で 幾日 花は恙なく咲いているだろうか、花の上をいつの年から月は照らし続けているのだろうか。

月の夕べ 花の朝人は競つて褒めそやす、花の精 月の女神 あなたはどんな心ですか。

月は結局 答えず 花もまた黙ったままだ、月の島 花の海 夜は自ら深い。

〔花神〕花の精。花の魂。〔月姊〕月の女神。

⑤

幽棲迎月訪花期 月色花香泛酒卮 幽棲 月を迎へて 花を訪ふ期、月色 花香 酒卮に泛ぶ。

映月更高花品格 得花逾好月容姿 月に映じて 更に高し 花の品格、花を得て 逾上好し 月の容姿。

身随山月臨花影 手弄庭花掛月枝 身は山月に随ひ 花影に臨む、手は庭花を弄し 月枝に掛く。

絲肉人貪花月賞 幾逢花盛月圓時 絲肉 人は貪る 花月の賞、幾たびか花の盛りに 月の圓かなる時に 逢はん。

ひっそりとした住まいに 月を迎えて 花を訪ねる期、月の光 花の香は 酒盃に泛ぶ。

月に映じて一層高い 花の品格、花を得て 益々好い 月の容姿。

我が身は 山月に随つて 花影に向かう、手は 庭の花を弄んで 月の照らす枝に掛ける。

琴に合わせて歌い 人々は 花月を賞めることを貪る、幾度 花の盛りに 満月の時期に 逢えるだろうか。

⑥

乗月人來花隱家 論花評月岸鳥紗 月に乗じて人來る 花隱の家、花を論じ 月を評す 岸の鳥紗。
 月將皎潔方花艷 花把芬芳比月華 月は皎潔を將ちて花の艷なるに方しく、花は芬芳を把りて月の華なるに比ぶ。
 雨洗更鮮花弔月 風吹不落月憐花 雨洗ひて更に鮮やかに花は月を弔れみ、風吹きて落ちざる月は花を憐れむ。
 漫推月意窮花趣 驚見花梢月已斜 漫に月意を推し 花趣を窮む、驚き見る 花梢 月 已に斜なるを。

月光につられて 人は 花隱の家にやつて来た、花を論じ 月を評す 岸の鳥紗の人。

月は白く汚れない事を以て 花の艶つぼさと等しく、花は芳香を把つて 月の華麗なることと並ぶ。
 雨が洗つて一層鮮やかになって花は 月を弔れみ、風が吹いても落ちない月は 花を憐れむ。

とりとめもなく月の心を推察し 花の風情を窮めていると、驚いたことに 花の梢に 月は已に傾いていた。

「皎潔」月光が澄んで明るい。

⑦

山花開遍月方圓 月靜花閑別一天 山花開くこと遍くして月方に圓かなり、月靜かに 花 閑かにして別の一天。
 花氣銷嵐迎月出 月光穿樹攪花眠 花氣 嵐を銷して 月の出を迎へ、月光 樹を穿ちて 花の眠りを攪ます。
 踏花踏月尋奇石 凭月凭花聽暗泉 花を踏み 月を踏みて 奇石を尋ね、月に凭り 花に凭りて 暗泉を聽く。
 山月山花何限興 更橫江月訪花船 山月 山花 何ぞ興を限らん、更に横せん 江月に花を訪ふ船。

山花は遍く開き 月は方に満月である、月は靜かに 花は閑かにして 此処は別天地。

花氣は嵐を消して 月の出を迎え、月光は樹を穿つて 花の眠りを攪ます。

花を踏み 月光を踏んで 奇石を尋ね、月に凭り 花に凭つて 聞こえてくる泉の流れに耳を傾ける。

山月と山花はどうして興に限りがあるろうか、更に出船の準備をしよう 江月に花を訪ねるために。

〔機〕出船の用意をする。

⑧

載花載月一船輕 花岸疑看避月行 花を載せ 月を載せて一船輕く、花岸疑ひ看る 月を避けて行くを。

挹柁月潭花向背 停橈花樹月陰晴 柁を月潭に振れば 花は向背し、橈を花樹に停むれば 月は陰晴す。

月前蕩漾簪花影 花底狂顛挹月情 月前 蕩漾す 花を簪す影、花底 狂顛す 月を捉らふるの情。

聞唱春江花月夜 花林頭上月三更 聞かに唱ふ 春江花月の夜、花林頭上 月三更。

花を載せ 月を載せて 船足は輕く、花岸より 船が月を避けて行くのをいぶかしく思つて見た。

柁を月の潭に振れば 花はくつつくものと離れるものと、橈を花樹に停めれば 月は陰りと晴れと。

月前に漂う花を簪しにする影、花の下蔭は気が狂つたようだ 月を捉らえる気持ち。

聞かに唱う 春江花月の夜、花林の頭上に 夜半の月。

〔蕩漾〕漂う。〔花底〕花の下蔭。白居易「琵琶行」に「間關鶯語花底滑」(間關たる鶯語 花底滑らかに)と

ある。〔春江花月夜〕張若虛(揚州の人、玄宗の開元年間の初め、賀知章・張旭・包融と併せて「吳中四士」

と称された)の作。〔春江花月夜〕は南朝陳の後主が作つた樂府題の一つ。張若虛がこの題を借りて遠い旅に

ある夫を思う妻の心情を中心に、春江花月夜の情景を情緒豊かに詠い込んだ三十六句からなる七言古詩。

⑨

孤樽斟月坐花茵 最是花村二月春 孤樽 月に斟みて 花茵に坐せば、最も是れ 花村 二月の春。

花際月圓前夜夢 月前花比去年人 花際 月圓かなり 前夜の夢、月前 花は比ぶ 去年の人。

別花餞月顔看改 嘯月吟花興幾新 花に別れ月を餞り 顔看す改まり、月に嘯き花に吟じ 興幾たびも新なる。

憶得洛陽花月會 花枝帶月挿烏巾 憶ひ得たり 洛陽花月の會、花枝 月を帯びて 烏巾に挿すを。

孤り月の下に酒樽を斟んで花の敷物に坐れば、とりわけ是れ花村は二月の春だ。

花のほとりに月は満月だった前夜の夢、月の前で花は比ぶ去年の人と。

花に別れ月を餞りて顔は看るみるうちに改まり、月に嘯き花に吟じて興は幾たびも新たに成る。

思ひ出される京都での花月の会で、月を帯びた花の枝を黒い帽子に挿したことが。

「花茵」花の敷物。花のしとね。「烏巾」黒い帽子。

⑩

池頭歩月繞花轂 映月光容迴怨風 池頭月に歩みて花轂を繞れば、月に映ずる花容廻かに風を怨む。

水月光融花上下 岸花陰接月西東 水月光り融らかなり花の上下、岸花陰かに接す月の西東。

正欣月滿花如錦 也恐花殘月似弓 正に欣ぶ月滿ちて花は錦の如くなるを、也た恐る花残りて月弓に似んことを。

人定花梢月方午 花香薰徹月宮中 人定まりて花梢月方に午なり、花香は薰徹る月宮の中。

池のほとり月光の下を歩き花の群がり咲いた所を繞ると、月に映える花の姿は遠くから吹き来る風が怨めしい。

水に映じた月光は明るく花の上下を照らして、岸の花はひっそりと月の西と東に接している。

月が満ちて花が錦のようであるのを嬉しく思う、也た花が散つて月が弓のように細くなることを恐れる。

人は寝静まつて月はちようと正南あたり花の梢にかかっている、花の香は月宮の中にまで薫っている。

「融」明らか。和らぐ。「午」方角で正南。「月宮」月の都にあるといわれる宮殿。

⑪

花筵月席莫辭頻 月思花情正晚春 花筵月席頻りなるを辭する莫れ、月思花情正に晚春。

好取花前吟月客 生憎月下拗花人 好取す花前月に吟ずる客、生憎し月下花を拗する人。

移牀月地花添態 植杖花隄月轉親 牀を月地に移せば花は態を添へ、杖を花隄に植つれば月轉親しむ。

多少憐花憐月者 不知花月爲誰新 多少 花を憐れみ 月を憐れむ者、知らず 花月 誰が爲に新たなるを。

花の筵ひじら 月の席 頻繁であることを辞退しないで欲しい、月の思い 花の情は今や晩春。

好ましいのは花の前で 月に向かつて吟ずる客、とても憎らしいのは月の下で 花を拗くじる人。

牀を月地に移せば 花は態おもむきを添え、杖を花の隄つづみに植たてれば 月は益々親しむ。

花を憐れみ 月を憐れむ者の多くは、花と月とが 誰の爲に新たになるのか知っていない。

⑫

醉花醉月盡清流 何月何花不勝遊 花に酔ひ 月に酔ひて 清流を盡し、何れの月 何れの花か 勝遊ならざらん。

雲散月溪花帶咲 風生花塙月含愁 雲は 月溪に散じて 花は咲を帶び、風は 花塙はなぐさに生じて 月は愁ひを含む。

月中幾駐看花馬 花外頻維棹月舟 月中 幾いくたびか駐とどむ 花を見る馬、花外 頻りに維つなぐ 月に棹さきす舟。

一睡藉花兼枕月 花魂月魄夢相求 一睡 花を藉しき 兼なねて 月を枕にし、花魂 月魄 夢に相求めん。

花に酔い 月に酔うて 清流を上り下り、どの月どの花が 勝れた遊びでないだろうか。

雲は 月の谷に散り 花は笑みを帯び、風は 花の畑に生じ 月は愁いを含む。

月光の中 どれほど駐めたことか 花を見る馬、花の外 頻りに維つなぐ 月に棹さする舟。

花を藉しき 月を枕にして 一睡ひとねりし、花の心 月の心を 夢に求めよう。

〔花塙〕花畑。花壇。

⑬

耽月耽花不厭荒 無花無月恨難償 月に耽ふけり 花に耽りて 荒を厭はず、花無く 月無くんば 恨み 償なげ難からん。

十分月滿花多影 千樹花開月亦香 十分 月 滿みつれば 花は影多く、千樹 花 開けば 月も亦また香し。

前夜月昏花寂寞 來宵花謝月淒涼 前夜 月 昏くくして 花 寂寞たり、來宵 花 謝すれば 月 淒涼ならん。

寄言月下花邊客 莫負花姿與月光 言を寄す月下花邊の客、花姿と月光とに負くこと莫れ。

月に耽り花に耽つて過すことを厭いはしない、花が無く月が無ければ恨みは償い難いだろう。

十分に月が満ちると花は光り輝き、千樹が花を開けば月も亦た香る。

前夜は月が昏くて花も寂しそудだった、明日の宵花が項垂れていれば月はもの寂しいだろう。

月光の下花の辺りの客に言つておきたいことがある、花の姿と月の光とに負くことがないようにと。

⑭

月妍花好在何時 月未三竿花半枝 月 妍しく花 好きは 何れの時にか在る、月は未だ 三竿ならず 花は半枝。

翹月乞延花性命 倩花誰正月斜欹 月に翹へ花の性命を延ばさんことを乞ひ、花に倩誰か月の斜欹を正さん。

花留月住終難久 月棄花行不可磨 花 留まり月住まるも 終に久しくし難し、月 棄て花 行くや 磨くべからず。

對月恐沈花恐落 月酣花盛也堪悲 月に對して沈むを恐れ花落つるを恐る、月 酣に花盛なる也た悲むに堪へたり。

月が美しく花が好いのは何時頃だろうか、月はまだ高く昇つておらず 花も枝半分ほどだ。

月に訴えて花の性命を延ばして欲しいと願ひ、花に請うて誰が正すだろうか 月の傾きを。

花が残り月が住まっても 結局 長くは留められない、月が棄てて花が散つても呼び戻せない。

月には沈むことを恐れ花には落花を恐れる、月が酣で花が盛りであることはまた十分に悲しいことだ。

〔三竿〕竿を三本繋いだ高さに昇ること。〔性命〕生命。天から受けた持ち前。

⑮

春花春月卜春光 花近高樓月近牀 春花 春月 春光を卜ふ、花は高樓に近く 月は牀に近し。

月下花嬌傾國色 花前月皎出塵粧 月下花は嬌ぶ 傾國の色、花前 月は皎たり 出塵の粧。

花妖不妒月顔美 月兔應憐花氣芳 花妖にして妬まず 月顔の美なるを、月兔應に憐れむべし 花氣の芳しきを。

花倦月沈人未寐 花階月地曉蒼蒼 花倦み月沈むも人は未だ寐ねず、花階月地曉蒼蒼たり。
春花 春月 春光を占う、花は 高殿に近く 月は 牀に近い。

月の下 花は艶を帯び 絶世の美女のよう、花の前 月は澄んで清々しく 脱俗の粧が感じられる。

花は妖艶で 月の美しさを妬んではいない、月は 花氣の芳しさに心を寄せているようだ。

花は咲き疲れ 月は沈んでも 人はまだ寐ない、花の咲いていた階 月が照らしていた地に 暁は青々と近づく。

〔出塵〕俗社会から脱する。浮き世から逃れる。

⑬

一尊賞月賞花天 花正芬芳月正妍 一尊 月を賞し花を賞する天、花は正に芬芳 月は正に妍なり。

獨臥花塘唯月伴 誰吟月逕受花憐 獨り花塘に臥して 唯だ月のみ伴ふ、誰か月逕に吟じて花の憐れみを受けん。

月前紅雨花粘履 花上清霜月滿肩 月前の紅雨花 履に粘く、花上の清霜 月肩に滿つ。

花月年年促人老 從他花月醉留連 花月 年年 人の老を促す、從 他 花月に酔ひて留連せん。

一つの酒樽で 月を賞で 花を賞でる天、花は 正に芬芳と香り 月はいま正に美しい。

獨り花の堤に臥して 唯だ月だけを相手にする、誰が月の小逕に吟じて 花の愛しみを受けるのだろうか。

月前の 雨のように散る紅い花は 下駄に粘り、花上の 霜のような清らかな月光は 肩に満ちる。

花と月は年年 人の老いを促す、どうであれ 花月に酔って このまま居続けたいものだ。

〔天〕空中。〔紅雨〕花に注ぐ雨。赤い花の散る様子。

⑭

滿村花月墊川涯 月寂花恬是我家 滿村の花月 墊川の涯、月寂として 花恬かなり 是れ我が家。

流水無憑花背月 微雲有意月臨花 流水 憑る無く 花は月に背き、微雲 意有り 月は花に臨む。

徘徊月下悲花落 徙倚花邊怕月斜 月下に徘徊して花の落つるを悲しみ、花邊に徙倚して月の斜めなるを怕る。
 不奈月斜花落處 獨吟花月送韶華 奈せん月斜めに花落つる處、獨り花月を吟じて韶華を送るのみ。

村に満ちた花と月が野の川の果てまで続き、月は寂しそうで、花は静かである。是れ我が家。
 流水は頼る所も無く流れて花は月に背き、僅かな雲には思いが有り、月は花に臨む。

月下に徘徊して落花を悲しみ、花辺に立ちもとおつて、月が傾くのを怕れる。
 どうしようもない、月が傾き、花が散るとき、独り花月を吟じて春の長閑な景色を送るだけ。

〔恬〕のんびりした様子。安らか。「徙倚」立ちもとおる。彷徨う。「韶華」春の長閑な景色。

⑮

誰令花月長幽盟 月色增輝花亦榮 誰か花月をして長く幽盟ならしむ、月色輝きを増し、花も亦榮ゆ。

月是好賓花好主 花真難弟月難兄 月は是れ好賓、花は好主、花真に弟たり難く、月兄たり難し。

月中堪挹花芳意 花下深知月潔情 月中挹むに堪へたり、花の芳意、花下深く知る、月の潔情。

月既招吾入花社 好隨花月送斯生 月は既に吾を招きて花の社に入らしむ、好し花月に隨ひて斯の生を送らん。

誰が花月をして、長く趣ある仲間にしたのか、月の色は輝きを増し、花も亦た榮える。

月は好き客であり、花は好き主である、花は真に弟であり難く、月は兄であり難い。

月の中、酌むことができる、花の芳しい心、花の下深く知る、月の潔白な情。

月は既に吾を招いて、花の社に入らせる、好し花月に随つて、この生を送ろう。

〔挹〕酌む。〔堪〕持ちこたえる。……することができる。

⑯

繞屋櫻花映月飛 飛花點酒月排扉 屋を繞る櫻花、月に映じて飛び、飛花、酒に點じ、月扉を排す。

花風吹月花増彩 月露露花月更輝 花風 月を吹きて花 彩りを増し、月露 花を露して月 更に輝く。

惜月惜花偏夜短 殘花殘月又春歸 月を惜しみ花を惜しみて 偏に夜短く、殘花 殘月 又春歸る。

對花連吸杯中月 月影花香暗襲衣 花に對して連りに吸ふ杯中の月、月影 花香 暗に衣に襲ぬ。

家を繞る桜花は 月に映じて飛び、飛ぶ花は酒に一ひら 月は扉から射し込む。

花風は 月を吹いて 花は彩りを増し、月露は花を潤して 月は更に輝く。

月を惜しみ 花を惜しんで 偏に夜は短く、花を散らし 月を残り 又春は歸る。

花に對し 連りに 盃に映る月を吸う、月の光 花の香は 密かに衣に重なる。

㊦

洛陽花月幾回新 日狎耽花愛月人 洛陽の花月 幾回か新たななる、日に狎れ 花に耽り 月を愛でる人。

花下行遊連月夕 月前琴酒淡花辰 花下の行遊 月夕を連ね、月前の琴酒 花辰を淡す。

竝鑣乘月登花寺 聯句尋花宿月輪 鑣を竝べ 月に乘じて 花寺に登り、句を聯ね 花を尋ねて 月輪に宿す。

誰識一辭花月友 每逢花月轉傷春 誰か識らん 一たび花月の友を辭してより、花月に逢ふ毎に轉 春を傷むを。

洛陽の花と月は 幾回 新たになつたことか、毎日見に行つて 花に耽り 月を愛する私。

花下の行遊は 月の夕べを連ね、月前の琴や酒は 花の時を潤す。

鑣を並べ 月に乘じて 花寺に登り、句を聯ね 花を尋ねて 月輪に宿る。

誰が識るだらうか 一たび花月の友に分かれてから、花月に逢う毎に そぞろ春を傷む心が募るのを。

花寺月輪竝近都名勝(花寺 月輪は竝びに近都の名勝)

三、唐伯虎の『花月吟』

①

有花無月恨茫茫 有月無花恨轉長
花美似人臨月鏡 月明如水照花香

花有りて月無くば恨み茫茫たり、月有りて花無くば恨み轉長し。
花の美しきこと人の月鏡に臨むが似く、月の明らかなること水の花香

を照らすが如し

扶筇月下尋花步 携酒花前對月嘗

筇つゝに扶たすけられて月下花を尋ねて歩み、酒を携へて花前月に對して嘗む。

如此好花如此月 莫將花月作尋常

此かくの如き好花此かくの如き月、花月を將もちて尋常と作なす莫れ。

花が咲いて月が出なければ恨みは果てしないだろう、月が出て花が咲いていなければ恨みは益々長いだろう。
花の美しさは人が月の鏡に向かうようで、月の明るさは水が花の香りを照らすようだ。

杖を携えて月の下花を尋ねて歩き、酒を携えて花の前で月を見ながら飲む。

このような好い花このように美しい月、好花明月を以て当たり前だと言わないで欲しい。

②

花香月色兩相宜 惜月憐花臥轉遲

花香月色かたながら相宜し、月を惜しみ花を憐れみて臥すこと轉遅し。

月落漫憑花送酒 花殘還有月催詩

月落つるや漫まよに花を憑たもみて酒を送り、花残るや還なほ月有りて詩を催す。

隔花窺月無多影 帶月看花別樣姿

花を隔てて月を窺へば無多の影、月を帯びて花を看れば別様の姿。

多少花前月下客 年年和月醉花枝

多少の花の前月下の客、年年月に和して花枝に酔ふ。

花の香と月の輝き両方が揃つてとても好い、月との別れを惜しみ花を愛しんでなかなか寝床に就けない。

月が沈んでもそぞろ花を頼りとして酒を送り、花が散つてもなお月は有るので詩を作りたくなる。花を隔てて月を窺えばまたとない眺め、月光を帯びて花を看れば別の美しさ。

沢山の花の前月に照らされた客、毎年月に和らぎ花の枝に酔っている。

③

月臨花徑影交加

花自芳菲月自華

月は花徑に臨みて影交も加はり、花は自ら芳菲にして月自ら華やかなり。

愛月眠遅花尚吐

看花起早月方斜

月を愛し眠ること遅く花尚吐く、花を看ん起くること早く月方に斜なり。

長空影動花迎月

深院人歸月伴花

長空影動きて花月を迎へ、深院人歸りて月に伴ふ。

羨却人閒花月會

燃花翫月醉流霞

羨却す人閒花月の會、花を燃り月を翫びて流霞に酔ふ。

月は花の小徑に臨んで影は互いに入り混じり、花は自ずと美しく咲き香り月は自ずと華やかだ。

月を愛でて眠ることは遅くなるが花は尚咲いている、花を看ようと起きることは早くなるが月はまさに斜め。

大空に月光は動いて花は月を迎え、奥深い屋敷に人は帰つてしまひ月光は花に伴う。

羨ましく思う人々が花月の會を催し、花を燃り月を弄んで霞の中に酔うのを。

④

春宵花月直千金

愛此花香與月陰

春宵の花月直千金、此の花の香りと月の陰とを愛す。

月下花開春寂寂

花梢月轉夜沈沈

月下花開きて春寂寂、花梢月轉じて夜沈沈。

杯邀月影臨花醉

手弄花枝對月吟

杯もて月影を邀へ花に臨みて酔ひ、手に花枝を弄び月に對して吟ず。

明月易虧花易老

月中莫負賞花心

明月虧け易く花老い易し、月中花を賞する心に負くこと莫れ。

春宵の花月は千金にも値る。この花の香と月の光とを愛す。

月光の下花は開いて春はひっそりと、花の梢に月は移つて夜は閑かに更けてゆく。

盃に月光を迎え、花を前にして酔い、手には花枝を弄び、月に向かつて詠う。

明月は欠け易く、花は瞬く間に老いてゆく、月光の中、花を愛でる心に背くことがないように。

⑤

花開爛漫月光華 月思花情共一家 花開きて爛漫と、月光は華やかなり、月思、花情、共に一家。

月爲照花來院落 花因隨月上窗紗 月は花を照らさんが爲に、院落に來り、花は月に隨ふに因りて、窗紗に上る。

十分暗色花輪月 一徑幽香月讓花 十分の暗色、花は月に輪け、一徑の幽香、月は花に讓る。

花月世間成二美 傍花賞月酒須除 花月は世間二美を成す、花に傍ひ、月を賞して、酒須く除るべし。

花は開いて真つ盛り、月光はきらびやか、月の思い、花の情は共に、一家族のようなもの。

月は花を照らす爲に、中庭に訪れ、花は月光に随つて、窓の薄絹に影を映す。

十分なる月光の輝き、花は月に負けるが、小徑に満ちる幽香、月は花に讓っている。

花と月は世間では二つの美を成している、花の傍らで、月を愛でて、酒を掛けて買おう。

〔院落〕屋敷の中庭。〔窗紗〕窓の薄絹のカーテン。〔暗色〕月が明らかに照らす輝き。〔輪〕負ける。〔除〕現

金を払わないで掛けで買う。

⑥

一庭花月正春宵 花氣芬芳月正鏡 一庭の花月、正に春宵、花氣、芬芳たり、月正に鏡し。

風動花枝探月影 天開月鏡照花妖 風は花枝を動かして、月影を探り、天は月鏡を開きて、花妖を照らす。

月中漫擊催花鼓 花下輕傳弄月簫 月中、漫に撃つ花を催すの鼓、花下、輕やかに傳ふ、月を弄するの簫。

只恐月沈花落後 月臺花樹兩蕭條 只だ恐る、月沈み、花落りて後、月臺、花樹、兩つながら蕭條たるを。

庭いっぱいの花と月、正に春宵だ、花の氣は辺り一帯に芳しく香り、月光は今まさに充ち満ちている。

風は花の枝を動かして 月光を探り、空は月の鏡を開いて 艶やかな花を照らす。

月光の中でいつか打たれる花を催す鼓、花の下で軽やかに聞こえる月を賞でる笙の笛。
只だ恐れる月が沈み花が散った後、月見台花の樹木の両方がひっそりと寂しくなることを。

⑦

高臺明月照花枝 對月看花有所思 高臺の明月花枝を照らす、月に對し花を見て思ふ所有り。

今夜月圓花好處 去年花病月虧時 今夜月圓かに花好き處、去年花病み月虧くる時。

飲杯酬月澆花酒 □首評花間月詩 杯を飲み月に酬めて花に澆ぐ酒、首を□花を評し月に問ふ詩。

沈醉欲眠花月下 只愁花月笑人癡 沈醉眠らんと欲す花月の下、只だ愁ふ花月人の癡なるを笑はんことを。

月見台の明月は花の枝を照らす、月に對し花を見て思ふ所がある。

今夜は満月で花も美しく咲いている、去年は花が萎れて月が欠けたとき。

酒を飲み月に酬応して花に酒を濯ぎ、□首花を品定めし月に尋ねる詩。

十分に酒に酔って花月の下で眠ろうと思ふ、只だ愁えるのは花月が私の愚かさを笑うことだ。

⑧

花發千枝月一輪 天將花月付閒身 花は千枝に發き月は一輪、天は花月を將ちて閒身に付す。

或爲月主爲花主 纔做花賓又月賓 或いは月の主と爲り花の主と爲り、纔かに花の賓に倣ひ又月の賓。

月下花曾留我酌 花前月不厭人貧 月下花は曾ち我を留めて酌ましめ、花前月は厭はず人の貧を。

好花好月知多少 弄月吟花有幾人 好花好月知んぬ多少ぞ、月を弄し花を吟ずる幾人が有る。

花は千の枝に咲き月は一輪のみ、天は花月を以て閒な私にくれた。

或いは自分が月の主となり花の主となり、時には自分が花の客となり月の客となる。

月の下で花は即ち私を留めて酒を酌ませ、花の前で月は私の貧しさを厭わぬ。
 好い花好い月は沢山ある、しかし月を楽しみ花を詠う人が幾人有ることか。

〔閒身〕ひまな身。ここは作者を指す。

⑨

月轉東墻花影重 花迎月魄若爲容 月は東墻に轉じて花影重なり、花は月魄を迎へて容を爲すが若し。
 多情月照花間露 解語花揺月下風 多情月は照らす花間の露、解語花は揺らぐ月下の風。
 雲破月窺花好處 夜深花睡月明中 雲破れて月は窺ふ花の好き處、夜深くして花は睡る月明の中。
 人生幾度花和月 月色花香處處同 人生幾度か花月に和す、月色花香處處同じきに。
 月は東の垣根に移つて花の影が重なり、花は月の心を迎えて容貌を整えるようだ。

情の多い月は花間の露を照らし、言葉を解する花は月下の風に揺れている。

雲が途切れて月は窺っている花の好い處を、夜が深まって花は月明かりの中に睡る。

人生の内で何度花と月が和むことがあるだろうか、月の輝き花の香りは何処も同じなのに。

〔月魄〕月。月影。

⑩

花正開時月正圓 花如紅錦月如銀 花正に開く時月正に圓かなり、花は紅錦の如く月は銀の如し。
 溶溶月裏花千朵 燦燦花迎月一輪 溶溶月裏花は千朵、燦燦花は迎ふ月一輪。
 月下幾般花意思 花閒多少月精神 月下幾般か花の意思、花閒多少ぞ月の精神。
 待看月落花殘夜 愁殺花前問月人 待ちて看ん月落ちて花殘る夜、愁殺す花前月を問ふ人。
 花がちょうど開く時 月もちょうど満月、花は紅の錦のよう、月は銀のようだ。

ゆつたりとした月光のうち 花は千の枝に開く、鮮やかに輝く花は 月の一輪を迎える。
 月下 花の気持ちはどのようなものであろう、花間 月の心はどうであらうか。
 待って看よう 月が沈んで 花が散った夜、花の前に 愁え悲しむ 月を尋ねる人を。

〔溶溶〕月光の形容。〔燦燦〕ぴかぴかときらめく。鮮やかな様。

⑪

春花秋月兩相宜 月競光華花競姿 春花 秋月 兩つながら相宜し、月は光華を競ひ 花は姿を競ふ。

花發月中香滿樹 月籠花外影交枝 花は月中に發きて 香は樹に滿つ、月は花外を籠めて 影は枝に交はる。

榎花月落江南夢 桂月花傳郢北詞 榎花 月は落つ 江南の夢、桂月 花は傳ふ 郢北の詞。

花却何情月何意 我隨花月泛金卮 花は却て何の情ぞ 月は何の意ぞ、我 花月に隨ひて 金卮を泛べん。

春の花 秋の月 兩方とも宜しい、月は光り輝き 花は姿を競う。

花は月の中に發いて 香りは樹に滿ちる、月は花の外も引き込めて 影は枝に交わる。

梅の花に 月は沈んで 江南の夢、桂の月に 花は伝える 楚北の詞。

花はさてどんな情か 月はどんな気持ちか、私は花月に随つて 金の盃を浮かべよう。

〔榎花〕梅の花。〔桂月〕月の異名。月の中に桂樹があつて榮枯するとの伝説からいう。

四、茶山『花月吟』と唐伯虎『花月吟』の比較

1、全篇の構成

(1) 茶山

茶山の『花月吟』は二十首で、①・②首は春の初めの花と月の様子を詠んでいる。③から⑬は春闌の時期を詠み、⑭から⑳は晩春の様子が詠まれている。

それを纏めてみると次のようになる。

① 春の初め頃の様子で、花と月とがうまく揃わない。月が好くても「寒剪剪」たる状態で花は咲かない。花が好くても「雨凄凄」たる様で月が出ない。花月「相睨く」といった様子である。

② 花が開いて纔かに月が顔を出した。花を期待し月を待つのにどれ程の時間を費やしたことか。やっと「花候幸當圓月際」（花候 幸に圓月の際に當たる）花と月が揃った状態になったと、春の初め頃の様子が詠われる。

③ 「花滿芳園月滿空」花と月とがうまく合致した。「月を弄ぶ簫の笛は花外の高殿にまで伝わり、花を護る鈴は月前の風に響く」この素晴らしい趣をうまく句にできないのが恨めしい。

④ 溪月 溪花は嘯吟するには好材料だ。この月の中、幾日 花は無事であろうか。花陰に立ち悠然として月を見ながらそんな物思いに耽る。（「溪月溪花」については伯虎は詠んでいない）

⑤ 月に映じて更に高くなる花の品格。花を得て、逾好くなる月の容姿。こんな絶好の時に幾たび巡り会うことがあろうか。めったにないことだ。

⑥ 花も月も宜しい。花の艶なること、月の華麗なることを比較する人がいるが、それぞれの美しさを楽しみめばよいではないか。漫ろに月の心を推し量り、花の趣を窮めていると、月は既に花の梢に傾いている。

⑦ 山の花は一带に開き、月は満月を迎えた。月も花も閑か^かで此処は俗世間を離れた別天地だ。山花山月は興に限りがない。今度は江上に船を浮かべてみよう。

⑧ 江上で見る花と月。船は江上に浮かぶ月影を避けるようにして進む。楫や櫂の扱い方で眺める花や月の様子が異なる。張若虚の「春江花月の夜」を閑かに唱う。見上げると花林の上に夜半の月がかかっている。(「江上の花月」については伯虎は詠んでいない)

⑨ 花村は春闌^{たけなわ}。孤り月の下に酒樽^{さけ}を斟^けんで、昨夜のこと去年のことなどを思い出している。花に別れ月に餞^かれて集まった人々の顔が、看るみる残念そうになったこと。洛陽花月の会のことなどを。

⑩ 池の畔の花月。月光の下、花の群がり咲くあたりの池の畔を歩く。月と花は水の上にも影を写して上にも下にも眺められる。月が満ち花が錦のようであるのを嬉しく思い、反面この美しい花が散り月も細くなることを恐れる。

⑪ 月の思い、花の情^{こころ}は今や晩春。花の前で月に吟ずる客は好ましい。とても憎らしいのは月の下で花を弄^たる人。こういう人は、花と月が誰の為に新たにいいのか知らない人たちだ。花を愛し月を憐れむ人は多いが、花や月が自分の為に自然の摂理によって動いていることを知っている人は果たして何人いるだろうか。

⑫ 花や月に心酔する。どんな月、どんな花でも俗を離れた遊びだ。花を藉^しき月を枕にして一眠りし、花の心や月の心を夢に求めよう。

⑬ 満月になると花は月光を浴びて輝き、花が満開になると月も香る。昨夜は月が暗くて花は寂しそうだつたし、明晩は花が萎れていると月は寂しいに違いない。花と月とは持ちつ持たれつだ。月光の下花の辺りの人よ、花

の姿や月の光を楽しんで欲しい。

⑭ 月がたげなや醜みにくであるとしむことを恐れ、花が盛りであると散ることを恐れる。これは悲しいことだ。だから、月がまだ高く昇らないとき、花が枝に半分くらい開いたときに好い時である。

⑮ 花は艶つぼく高殿に近く咲き、月は澄んで清々しく寝台近くまで光が射し入り、どちらもそれぞれの美しさを誇っている。花は咲き疲れ月は沈んだが人はまだ寝ない。そろそろ春も闇を過ぎる。

⑯ から⑰までは春の盛りの様子が詠われている。(但し⑩は晩春)

⑱ 芬芳と香る花の堤に横たわり、美しい月だけを伴いしじみと考えた。月前に散る赤い花は下駄に粘り着き、花の上の清らかな霜は、肩に降り注ぐ月光。春も終わりに近づいた。年々歳々花も月も変わらないが、年々歳々、人は老いてゆく。花月に従いこのまま居続けたいものだ。

⑲ 晩春。花の散るのを悲しみ、月が沈んでゆくことを怕れるが、これは自然の摂理であつてどうしようもないこと。私はこうした花月を吟じながら過ぎゆく春を送るだけ。

⑳ 月は花を訪れる賓客であり、花はそれを迎える主人だ。私は月の中に花の芳しい心を酌むことができるし、花の下に月の潔い情を知ることができる。私は花月の仲間入りをした。この人生を花月に随つて送ろう。

㉑ 晩春。消えて行く月、散り行く花、春は去ろうとしている。行く春を惜しみ、花に向き合つて盃に影を落とす月を頻りに吸う。

㉒ 晩春。洛陽の花月に何度巡り会つたろうか。鑊くわくを並べて花寺に登った友、句を聯れんねて月輪に宿した友、その友と別れてから花月に逢う毎に、そぞろ春を傷む心が暮る私の気持ちを知つてくれる者がいるだろうか。

(2) 唐伯虎

- ① 杖を携えて月下に花を尋ねて歩き、花の前で酒を飲む。好花 明月が当たり前だと言わないで欲しい。花と月とがうまく揃うことは珍しいことで並のことではないのだから。
- ② 花と月とが揃って宜しいので、暫くも眠るのが惜しい。毎年のことだが、月の好い時に花の前で酔っぱらう。
- ③ 月を愛でて眠ることは遅くなり、花を看ようと起きることは早くなる。人々が花月の会を催し、霞の中に酔うのを羨ましく思う。
- ④ 春宵の花月は千金にも値する。盃に明月を浮かべて花の前で飲む。明月は欠け易く、花は瞬く間に老いてゆくのだから。月光の中、花を愛でる心に背くことがないようにありたいものだ。
- ⑤ 花は盛りに月はきらびやか。人々はこの二つの美の中に酔っている。花の傍らで月を愛で酒を掛けて買おう。
- ⑥ 花氣は芬芳と香り、月光は降り注ぐようだ。月光の中漫ろまろに打つ鼓、花の下軽やかに伝える笙の笛。ふと心が翳る。月が沈み花が散った後、月見台や花の樹木の両方がひっそりと寂しくなることを思うと。
- ⑦ 今夜の花月はどちらも好い。去年は花が萎れ月が欠けたとき、月に酒を供え花にも澆いでやった。十分酔ったので眠りたいが、花月に笑われるだろうか。
- ⑧ 花は沢山の枝に満開であるが月は一輪だ。ある時は自分が月の主人であったり、花の主人であったり。又、花の客であったり月の客であったり。花は月下に私を留めて盃を重ねさせる。
- ⑨ 花と月とが趣ある様で揃うことは最高だ。人生、このように花月に心和むことがどれ程あるだろうか。
- ⑩ 花が開くとき月も満月、月光を浴びた花には月の心が宿っている。月が沈み花が散った夜は、花の前に月を訪ねてきた人を愁え悲しませる。
- ⑪ 春の花 秋の月どちらも好い。梅の花は月が沈んで江南の夢をみているのか。月の下花は楚北の歌を伝えて来

る。花月はどんな心だろ。花月に随い金の盃を浮かべよう。

茶山は、桜の花と月の状態を春の初めの頃、春闌の頃、春の終わり頃といった順序で詠んでいる。詩の内容に物語性があり、一連の流れがある。例えば⑦で「花氣銷嵐迎月出、月光穿樹攪花眠、踏花踏月尋奇石、凭月凭花聽暗泉」（花氣 嵐を銷して月の出を迎へ、月光 樹を穿ちて花の眠りを攪ます。花を踏み 月を踏みて 奇石を尋ね、月に凭り 花に凭りて 暗泉を聴く）と詠んで、山の花、山の月は閑静で別天地の風情があり興趣に限りがない。今度は江月に花を訪ねる船を浮かべよう「更穰江月訪花船」（更に穰せん 江月に花を訪ふ船）と⑧に繋げて、江に船を浮かべ川面に映る月、江上から見る花を詠う。特に春も闌の頃は色々な場面の花月の様を詠っている。④は溪谷の花月、⑤・⑥では幽棲・花隠の家で見る花月、⑩池の畔の花月等々。

伯虎の詩は、十一首の詩に繋がりはなく、一首一首が独立して梅の花と月の美しい様子が詠われているだけである。

2、発想・表現

(1) 茶山

茶山は「花と月」は切り離せない関係であり、自分も「花月」の仲間入りをした、という発想で『花月吟』二十首を詠んでいる。

(1) 「花と月」は友・客と主・兄弟のような親密な関係である。

⑤ 映月更高花品格 得花逾好月容姿

月に映じて更に高し花の品格 花を得て逾よ好し月の容姿

「月光を浴びた花は益々品格が高まり、品格の高い花を得て、月は益々姿がよくなる」

⑥ 月將皎潔方花艷 花把芬芳比月華

月は皎潔を將ちて花の艶なるに方しく 花は芬芳を把りて月の華なるに比ぶ

「月の汚れない白さは、花の妖艶な美しさと等しく、花の芳しい香気は月光の華麗さと並べられる」性質は違っても、それぞれの長所が互いを引き立て合う友のような関係だという発想である。

⑦ 雨洗更鮮花弔月 風吹不落月憐花

雨洗ひて更に鮮やかに花は 月を弔れみ 風吹きて落ちざる月は 花を憐れむ

「雨が洗って益々新鮮になった花は 雨のために姿を見せない月を弔み、風が吹いても落ちない月は、風に散る花を憐れむ」と苦境に立つ友を気遣う心持ちである。

⑧ 花氣銷嵐迎月出 月光穿樹攪花眠

花氣 嵐を銷して月の出を迎へ 月光 樹を穿ちて花の眠りを攪ます

「花氣は嵐を銷して月の出を迎えてくれ、月光は樹木を穿って射しこみ花の眠りを醒ましてくれる」好き友の關係。

⑨ 載花載月一船輕 花岸疑看避月行

花を載せ 月を載せて一船輕く 花岸 疑ひ看る 月を避けて行くを

「花と月を乗せた船は船足も軽やかに、花岸から見ていると水面に映った月影を壊すまいと避けて行くようだ」相手を思いやる気持ち。

⑩ 雲散月溪花帶咲 風生花塢月含愁

雲散じて月は溪に 花は咲を帯び 風生じて花は塙に月は愁ひを含む

「雲が散ると月は溪谷を照らし、花は微笑するが如くに咲き薫る。風が吹いて 花は山の隈に、月は花が散らないかと心配そうだ」 相手を思いやる友情。

⑬ 十分月満花多影 千樹花開月亦香

十分月満つれば 花に影多く 千樹花開けば 月も亦香し

「皎々たる月光に照らされると花の影(姿)は多くなり、多くの樹木に花が開くと月も亦香る」「花と月」は互いに持ちつ持たれつの関係。

⑭ 前夜月昏花寂寞 來宵花謝月凄凉

前夜月昏くして 花寂寞たり 來宵花謝すれば 月凄凉ならん

「昨夜は月が昏くて花は寂しそうだつた。明日の宵、花が項垂れると月はもの寂しいに違いない」互いを思いやる友の気持ち。

⑮ 月下花嬌傾國色 花前月皎出塵粧

月下 花は嬌ぶ 傾國の色 花前 月は皎たり 出塵の粧

「月光の下では 花は艶を帯びて 絶世の美女のようであり、花の前では 月は澄んで清々しく 脱俗の粧が感じられる」互いを引き立て合う友の関係。

⑯ 花妖不妒月顔美 月兔應憐花氣芳

花妖にして 妬まず 月顔の美なるを 月兔 應に憐れむべし 花氣の芳しきを

「花は妖艶で月の美しさを妬まないし、月は花氣の芳しさを愛しんでいる」互いの長所を認め合う親友の関係。

⑰ 誰令花月長幽盟 月色增輝花亦榮

誰か花月をして長く幽盟ならしむ 月色輝きを増し花も亦榮またゆ

「誰が花月をして長く幽盟の關係を結ばせたのだろうか。月光が輝きを増せば花も亦た生き生きとしてくる」「月と花」とは互いに引き立て合う友のような關係だ。

⑱ 月中堪挹花芳意 花下深知月潔情

月中 挹おさむに堪へたり花の芳意 花下 深く知る月の潔情

「月の中に十分酌むことができる花の芳しい思い、花の下に深く知る月の潔白な情」互いに心の通じ合う親友のような關係。

⑲ 月は好賓花好主 花眞難弟月難兄

月は是れ好賓 花は好主 花眞まことに弟たり難く 月 兄たり難し

「月は花を訪れる賓客であり 花は月を迎える好き主人である。又、花が弟だとも言い難いし、月が兄であるとも言い難い。」「花と月」は気の置けない主客であり、仲のよい兄弟のように持ちつ持たれつの關係である。

⑳ 花風吹月花増彩 月露落花月更輝

花風 月を吹きて花 彩りを増し 月露 花を露うるはして月 更に輝く

「花風 月を吹いて花は彩りを増し、月に宿る露は花を潤して月は一層輝く」このように花と月とは持ちつ持たれつの仲だ。

(2) 茶山が「花月」の仲間に入る。

㉑ 恨無好句酬花月 抱月聊眠花氣中

恨むらくは好句の花月に酬ゆる無きを 月を抱きて聊か眠らん 花氣の中

「素晴らしい花月に相応しい好句を作つて酬（むか）はうことのできないことが恨まれる。月と一緒に花気に包まれて暫く眠ることとしよう」。「花月」と「自分」は同じ感情を持つものという発想である。好い姿、好い光景を醸し出してくれる「花月」に応えるだけの好い句が、自分にできないことを残念に思うというのである。

④ 月夕花朝人競賞 花神月姊汝何心 月終不答花還黙

月夕 花朝人競ひ賞す 花神 月姊 汝何の心ぞ 月終に答へず 花還た黙す

「月の夕べ 花の朝を人々は競つて褒め讃えるが、花よ月よ 貴方はどんな気持ちですかと尋ねる。しかし月も花も答えてはくれない」と、花月を自分と同じ感情を持つものとして扱っている。

⑩ 移牀月地花添態 植杖花隄月轉親

牀を月地に移せば 花は態を添へ 杖を花隄に植つれば 月轉親しむ

「腰掛けを月光の射す辺りに移すと花は風情を添えてくれるし、杖を花の堤に植てると月は益々親しんで寄つて来る」。自分も「花月」の仲間になった。

⑫ 一睡藉花兼枕月 花魂月魄夢相求

一睡 花を藉き兼ねて月を枕にす 花魂 月魄 夢に相求めん

「花を藉き月を枕にして一睡りし、花と月の魂を求めよう」。仲間である「花月」の心の底に入り込もう。

⑬ 寄言月下花邊客 莫負花姿與月光

言を寄す月下 花邊の客 花姿と月光とに負くこと莫れ

「月光の下 花を楽しむ人に言いたい、花の姿と月光とを乱さないで欲しい」と。仲間である「花月」を傷つけないで欲しいと「花月」を氣遣う気持ち。

⑭ 愬月乞延花性命 倩花誰正月斜欹

月に懇へて花の性命を延ばさんことを乞ひ 花に情ふ 誰か月の斜欹を正さんかと

「月に懇へて花の性命を延ばして貰いたいと頼み、花に情む 誰か月の傾くのを正してくれないかと」。「花月」の仲間になつた茶山は、「花月」の性命が少しでも長くあつて欲しいと願う。

⑭ 花留月住終難久 月棄花行不可磨

花月を留めて住まらしむるも終に久しくし難し 月花を棄てて行く磨くべからず

（「花月」の生命が少しでも長くあつて欲しいと願いながらも）「花は月を留めて住ませたとしても、結局は長く留めることはできない。月は花を棄てて行くけれども磨かないで欲しい」。花も月も自然の摂理に随つてその生を全うするのであるから、離れて行くことは辛い、有るがまま自然の成り行きに委せるのが最善だと、自ら自分を納得させている優しさが感じられる。

⑮ 花月年年促人老 從他花月醉留連

花月 年年 人の老を促す 從 他 花月に酔ひて留連せん

花月は年々美しい姿を見せてくれるが、年々人の老いを重ねさせる。そんなことはどうでもよい。私は、仲間である「花月」に全てを委ね、「花月」に心酔して居続けよう。

⑯ 月既招吾入花社 好隨花月送斯生

月は既に吾を招きて花の社に入らしむ 好し 花月に随ひて斯の生を送らん

「月は私を招いて花の社に入らせた。好し これからは花と月に随つて私の人生を送ろう」

茶山の『花月吟』は「花と月」が或る時は「友」のような関係であり、或る時は「主と客」のような間柄であり、又、ある時は「兄弟」のように切り離すことのできない、親密な繋がりのあるものだという発想で詠まれて

いる。そんな「花月」の中に私は招き入れられ、私も「花月」の仲間になった。これからは花月の友として生を送ろうと詠じ、「花月」を自然界の単なる「無情の物」として見るのではなく、「花月」は自分と同様に「有情の物」であるという感覚で作られた詩である。

(2) 唐伯虎

唐伯虎の『花月吟』十一首について茶山と同じく①・②の項目について見たが、①「花と月が友のような関係であったり、客と主のような間柄であったり、兄弟のように親密な関係である」といった内容の詩、又、②「伯虎が花月の仲間に入る」といった内容の詩は無い。伯虎の「花月」は鑑賞の対象として見ていただけであって、友でも仲間でもない。例えば次の詩等がそれに当たる。

⑧ 或爲月主爲花主 纔傲花賓又月賓

或いは月の主と爲り 花の主と爲り 纔かに花に傲ひて賓 又月に賓たり

⑦ 飲杯酬月澆花酒 □首評花間月詩

杯に飲み 月に酬めて 花に澆ぐ酒 首を□花を評し 月に問ふ詩

⑦ 沈醉欲眠花月下 只愁花月笑人癡

沈醉眠らんと欲す 花月の下 只だ愁ふ 花月 人の癡なるを笑はんことを

⑧ 月下花曾留我酌 花前月不厭人貧

月下 花は 曾ち 我を留めて酌ましめ 花前 月は 厭はず人の貧を

① 花却何情月何意 我隨花月泛金卮

花却て何の情ぞ 月何の意ぞ 我花月に隨ひて金卮を泛べん

「或爲月主爲花主（或いは月の主と爲り花の主と爲り）、「飲杯酬月澆花酒」（杯に飲み月に酬めて花に澆ぐ酒）、
 「只愁花月笑人癡」（只だ愁ふ花月人の癡なるを笑はんことを）、「月下花會留我酌、花前月不厭人貧」（月下花
 は會ち我を留めて酌ましめ花前月は厭はず人の貧を）、「花却何情月何意」（花却て何の情ぞ月何の意
 ぞ）等の句からは、恰も伯虎が「花月」と「友」のような関係を結び、「仲間」として「花月」の中に入り込んで
 いるかのような錯覚を覚えるが、これらの句は、單なる擬人法が用いられているだけである。

まとめ

茶山は「花と月」の関係を、友のようであり、賓客とそれを迎える主人のようであり、また兄弟のように持ち
 つ持たれつとの関係で、切り離すことのできないものだという。又、「月既招吾入花社」（月は既に吾を招きて花の
 社に入らしむ）と、その中には私は招き入れられ花月の仲間になった。「好隨花月送斯生」（好し花月に隨ひて斯の
 生を送らん）これからは花月を友として生を送ろうという。茶山はそのように花月と自分を一体化し、友のよう
 に近く親しい存在であるという感覚で詠じているので、作られた詩は觀念の作ではなく、現実にその光景を目の
 当たりにしているという臨場感を読者に与える。此の詩は茶山が「余少年時、傲唐伯虎所作」（余少年の時、唐
 伯虎に倣ひて作る所）と言っていることから、京都遊学中の初期、即ち二十歳前後の作であるうと考えられる。
 茶山は京都での春を何度か経験している筈で、実際に②「花寺に馬を馳せ、句を聯ね花を尋ねて月輪に宿」した
 こともあるようだから、その当時の光景を再現して詩に詠んだものと考えられる。自分自身が詩の中に入り込み、
 「花月」の身近にいて「花月」に語りかける。④・⑧・⑩の詩には特に「花月」を仲間としてみる優しい心遣い
 が感じられる。

④ 月中幾日花無恙 花上何年月始臨 月中幾日か花恙無からん、花上何れの年か月始めて臨まん。

月夕花朝人競賞 花神月姊汝何心 月夕花朝人競ひ賞す、花神月姊げつし汝何の心ぞ。

月終不答花還黙 月喚花灘夜自深 月終つひに答へず花還また黙す、月喚花灘夜おつが自ら深し。

「清々しい月光の中で花は何日くらい恙なく咲いているだろうか」と、やがて散りゆく花に思いを寄せ、美しい月の夕べ、新鮮な朝の花を人々は褒めそやすが、「月よ、花よ、貴方たちはどんな気持ちで聞いていますか」月は何れは欠ける時が来るし、花は遅かれ早かれ散ってゆくものと、茶山は月や花の気持ちを思いやつてこの詩を詠み、「月終不答花還黙」月も花も結局答えることはできないのであると結んでいる。茶山の優しい心の現れた句である。

⑧ 載花載月一船輕 花岸疑看避月行 花を載せ月を載せて一船軽く、花岸疑ひ看る月を避けて行くがごときを。船が「花を載せ 月を載せて、川面に映っている月影を壊すまいと避けるように行く」という描写は、優しい情こころがないと出て来ない表現である。

⑩ 正欣月滿花如錦 也恐花殘月似弓 正に欣ぶ月満ちて花錦の如くなるを、也また恐る花殘ちりて月弓に似んことを。

「月が満ち、花が錦のようであるのは本当に嬉しいことだ」しかし、この歎びが大きいだけに「花が散って、月が弓のように細くなったときのことを思うと恐ろしくなる」の部分には、茶山の優しい気持ちが現れている。

それでは茶山が『花月吟』を作った意図は何処にあったのだろうか。茶山自身が「題花月吟後」(花月吟後に題す)で「花月吟二十首、余少年時、倣唐伯虎所作」(花月吟二十首は、余が少年の時、唐伯虎に倣ひて作る所)と述べているように、伯虎の『花月吟』に準えて作ろうとしたものようであるから恐らく習作であろうが、「花月」という同じ素材でどれだけだけの詩が作れるか、自分自身を試してみようという気持ちも働いたであろうし、作って

いるうちに伯虎より優れたものを作りたいという意欲も湧いて来たのではなからうか。その意欲が伯虎の作の倍、二十首になり、場面設定も伯虎が詠んでいない「溪山溪谷の花月」「江上から眺めた花月」「池の畔の花月」など多彩であり、内容も真実味のあるものと工夫を凝らしていったと考えられる。その結果、京都の村瀬栲亭が「藍水」の語を用い「元にした唐伯虎より優れている」と評するほどの作になったものと考ええる。

茶山の『花月吟』二十首は其の京都遊学の前期に作られたものようであるが、遊学後期になると茶山は政治批判の詩を作るようになる。『花月吟』は本人も「題花月吟後」で言っているように「繊細似時様」（繊細にして時様に似たる）作であったが、政治批判の詩はそれに反して、政治への批判を直接に述べた真情吐露の作であり、『花月吟』と同じ作者のものとも思えない。その変化の裏にはどのような事情があつたのだろうか。

しかし、京都遊学を終えて郷里の神辺に帰ってからは、激しかつた政治批判の姿勢は詩の表面からは影を潜めて、農村の穏やかな風景と、そこで暮らす善良な農民の姿を詠うようになり、更に農村での暮らしが長くなると、純真無垢な農村の子どもの日々の生活の様子が描かれるようになる。

このような茶山の詩風の変化は何によるのであろうか。そこには茶山の生活の変化、即ち京都遊学、郷里神辺に帰ってからの農村生活、そして黄葉夕陽村舎の設立とその経営、福山藩への塾移管（廉塾）、などが背景として存在するものと考えられる。文学は生活の反映であり、茶山の生活の変化と其の詩風の変遷との関わりを調べることによって、茶山という「人」と其の文学の本質が明らかになるのではなからうか。順序として次に「茶山の政治批判詩」を取り上げることにする。

第二節 政治批判詩

茶山成年後の生涯は「京都遊学の時期」（十九歳〜三十三歳）と「神辺定住の時期」（三十三歳〜八十歳）の二期に纏めることができる。詩はその人の生活が反映されるものであるから、その作風つまり詠われる内容と、自分の思い、表現の方法は、生活環境の変化によって変わってくる。茶山の場合も遊学期前半と後半、遊学を終えて神辺に帰り郷里に落ち着いてから、青・壮年期と晩年とでは作詩の内容や表現の方法が変化している。

遊学期の前半は表現や語句に凝って、繊細で綺麗な詩を作っているが、遊学期も後半に入ると政治批判の詩を作り始めている。郷里に帰って落ち着いてからも十年余りは政治批判詩を作っている。しかし、晩年は農村の自然や、そこに暮らす農民を題材とする「農村詩」が多くなり、歳を重ねるにつれて、農村における子どもたちの純真な言動を詠う詩が多くなっている。茶山は友人・知人・文人・墨客など交友範囲が広いので、その人たちとの応酬詩や題面詩も多く、又、旅も好きだったので交遊詩や紀行詩も数多く残されているが、茶山の詩の持ち味は、やはり政治批判詩・農村詩・子どもを詠う詩に特によく示されている。ここでは、これらの詩の中から「政治批判詩」を取りあげる。

一、京都遊学期後半に於ける政治批判詩

従来、茶山の詩は「農村風景詩」に見るべきものが多く、それこそが茶山の真骨頂のように喧伝され、「政治批判詩」についてはあまり論じられていない。しかし、京都遊学の後半あたりから茶山は頻りに「政治批判詩」を作っているし、郷里に帰ってから十数年間は、拙齋や他の同志と共にそういった類の詩を多く作っている。

1、西山拙齋との出会いとその影響

明和八年（一七七二）二十四歳の時、茶山は西山拙齋と初めての出会いをする。それは茶山が三回目の遊学から神辺に帰っていた時であった。拙齋が神辺に茶山を訪ねて来て、ちょうど梅の花の見頃だったので、二人は三原に梅の花を見に出かけた。そのとき拙齋は古文辞学の非を語り、朱子学の是を説き、茶山に朱子学への改轍を勧めたものと思われる。それを証明する確たる資料はないが、このように考える理由として次の二つのことが挙げられる。

一つは、拙齋が茶山と出会う少し前に、師である那波魯堂に勧められ、その考え方に共鳴して、古文辞学から朱子学に変わっていること。

二つ目に茶山は遊学した初めの頃、市川某に師事して古文辞学を学んでいたが、拙齋と出会った後、安永元年（一七七二）四回目の遊学から朱子学に転向して、拙齋と共に那波魯堂に師事していることである。

拙齋は十六歳で大阪に出て、古林見宜（一六九四〜一七六四）に医術を、母方の縁者である岡白駒（一六九二

（一七六七）に儒学を学んだが、白駒は衰老であった為に間もなくして外孫である那波魯堂に師事することとなった。茶山は「拙齋先生行状」で次のように述べている。「魯堂も初めは岡宇齋（白駒）に師事して護園（徂徠學）を信じていたが、その否を悟り更めて程朱諸公の書を取り、従容潜玩して、心に会するところがあつた」と。拙齋は朱子学に転向した魯堂からの説得に、朱子学の正しいことを認識した。そこで茶山と共に三原に觀梅した時、おそらく茶山を説得したものと考えられる。年譜に依ると安永元年には、拙齋も茶山も共に上洛して魯堂のもとで学んでいるし、二人で江戸に向かう佐々木良齋（聖護院王府の長史）を送って、近江国粟津の義仲寺にも遊んでいる。『拙齋西山先生詩鈔』にこのとき作った詩が載せられているし、茶山は「黄葉夕陽村舎文」巻之四に「題義仲墓詩後」と題してその時の事を述べている。又、「西山拙齋年譜」（花田一重『西山拙齋傳』）によると、次の安永二年（一七七三）八月には拙齋と茶山は魯堂に従って洛西の西岡に遊んでいる。

茶山と拙齋との交友は、明和八年（一七七二）の初対面以来、拙齋が亡くなる寛政十年（一七九八・六十四歳）までの二十七年間、変わることなく続いた。拙齋は茶山にとって掛け替えない友人であり、畏敬の念を抱いて師と仰ぐ存在でもあつた。「我が国の政治は幕府ではなく、天皇が行うべきである」とする拙齋の考え方に茶山は強い影響を受けた。茶山が政治批判詩を作り始めたのは拙齋との交友が始まった頃からである。

2、京都遊学期後半の政治批判詩

『黄葉夕陽村舎詩』前編卷一の詩は、京都遊学時期に作られたとされている。その中から政治批判詩を抜き出すと、次のようなものが挙げられる。

- ① 閑谷
- ② 有鳥三首 有感而作
- ③ 御領山大石歌
- ④ 秋半 六首
- ⑤ 偶作 二首
- ⑥ 耕牛
- ⑦ 龍盤

⑧ 時情等である。それぞれ内容を検討する。

① 閑谷

連岡對森立 一路曲如弓
幽澗流其傍 蔡迂翠積中
行行數回轉 鬢宇忽穹崇
不圖巖林窟 有此絃誦叢
村民皆朴直 猶見舊流風
草昧戰爭時 割據幾姦雄
一變儒雅尚 實始自烈公
文治想當時 巍然兩學宮
隄防墾關役 遺稿壯四封
我曾觀泮林 今又此來登
屋樹何廣大 瓦甍何玲瓏
垣牆諸房舍 幾年乃竣功
顧思及公身 財用備且豐
不然大役餘 比間能不窮
方今稱時雍 郡國少荒凶
如何民逾婁 府庫動輒空

連岡對びて森立し、一路曲りて弓の如し。
幽澗 其の傍を流れ、蔡迂す翠積の中。
行き行きて 數ば回轉し、鬢宇忽ち穹崇たり。
圖らざりき 巖林の窟に、此の絃誦の叢有らんとは。
村民は皆 朴直にして、猶見る 舊き流風。
草昧 戰爭の時、割據するは 幾姦雄ぞ。
一變して 儒雅を尚ぶは、實に烈公より始まる。
文治 當時を想ふ、巍然たり 兩學宮。
隄防 墾關の役、遺稿 四封に壯たり。
我曾て泮林を觀しが、今 又此に來りて登る。
屋樹 何ぞ廣大なる、瓦甍 何ぞ玲瓏たる。
垣牆と 諸房舍と、幾年か乃ち竣功す。
顧思 公の身に及びて、財用 備はりて 且つ豊かなり。
然らずんば大役の餘に、比間 能く窮まらざらんや。
方今 時雍と稱し、郡國 荒凶少なきに。
如何ぞ 民 逾よ婁しく、府庫 動もすれば輒ち空なる。

節用與聚財 其法或未工 節用と聚財と、其の法或いは未だ工みならざらん。

生財有大道 萬世行斯通 財を生ずるに大道有り、萬世行へば斯に通ず。

宇宙軌非異 君民體固同 宇宙は軌異なるに非ず、君民は體固より同じ。

誰能反其本 推恩蘇三農 誰か能く其の本に反かん、恩を推さば三農を蘇らせん。

陶陶悲往昔 書聲靜雲松 陶陶して往昔を悲しめば、書聲雲松に靜かなり。

岡また岡と 丘陵が続いて、一本の道が弓なりになっている。

奥深い谷川が道に沿って流れ、うねり曲がって緑また緑の中（を流れて行く）。

どンドン歩いてゆくと 何度も道は曲がっている、学校が突然 目の前に高くそびえ立った。

こんな岩や林に囲まれた中に 学堂があり、こんな学習の場があるうとは 思いもしなかった。

村民は皆 素朴にして実直であり、尚も昔ながらの美風を備えている。

世の中の秩序が立たず天下が定まらない戦争の時、各地に立て籠もった悪賢い野心家達はどれほどだったか。

一変して 正しい儒学を尊ぶ者は、実に 芳烈公から始まる。

文政による 治世という当世を想うとき、見上げるほど立派な講堂と 聖廟により何うことができる。

堤を築き 田畑を開墾する営み、遺構は 四辺の国にまで知れ渡っている。

私は 以前 泮林を見たが、今 又 此処に来て登ってみた。

屋樹の 何と広大なことよ、瓦甍の 何と麗しく輝いていることよ。

垣牆や 諸々の建物は、何年を経て 竣工したのだろう。

考えてみると 芳烈公の代になって、資金面でも 運用面でも 豊かになった。

そうでなければ 大役の後に、行政組織がよく窮められないことがあるうか。

現今 和やかに楽しむと称して、郡国に荒凶が少ないのに。

どうしてか（福山藩の）領民はますます貧しく、藩庫もどうかすると空っぽである。費用の節約と財源の調達と、其の方法が或いは未熟なのだろうか。財を生ずるには 正当な道があり、万代行えば 則ち通じるものだ。

天と地の軌道の秩序は 別々のものではなく、主君と人民の関係も もちろん一体である。

誰がよくその根本に 背こうか 背くことはできない、（主君が）恩愛を及ぼせば 農事は蘇るだろう。

しばし立ちどまって過ぎし昔に懐いむを馳せていると、書生たちの素読の聲が松林の方から静かに聞こえてきた。

「草昧」世の中の秩序が立たず、天下がまだ定まらない時のこと。「泮林」「泮」は、諸侯の学宮の西南の濠ほをいう。中国周代の諸侯の学校は東西門以南に池、以北は牆かきをめぐらして泮宮と称した。此の池が泮水である。（学宮の半面にのみ水を回らすからいう。）閑谷学校にも泮水があり、「泮林」は水岸の林。「時雍」和らぐこと。「府庫」藩の蔵。「君民體固同」「礼記」緇衣に「民以君爲心、君以民爲體」（民は君を以て心と爲し、君は民を以て體と爲す）とある。「推恩蘇三農」「推恩」は主君が恩愛を及ぼすこと。「三農」は春耕、夏耘（夏に雑草を刈る）、秋収をいう。

この詩は、安永五年（一七七六・二十九歳）四月二十九日の作。頼春水は父の七十歳賀宴のため、二月二十九日に大坂から帰省しているが、帰坂の途中四月二十二日に茶山を訪ねて一泊し、翌二十三日、茶山に連れられて鴨方に西山拙齋を訪ねている。春水と拙齋はこの時が初対面であった。二十八日、茶山は春水・拙齋と岡山の姪井桃源（備中鴨方の生まれ。池田藩の儒官、閑谷齋の事を司る）を訪ね、二十九日に四人は閑谷齋を訪ねた。この詩はその時の作である。（『菅茶山略年表』）

「人里離れた山の中にある目を見張るようなこの立派な学舎は、備前池田藩の行政組織が良く機能している証

であろう。それに引き替え我が藩（備後福山藩）の政治はどこか間違っている。天地の軌道が整っていれば、自然界は安泰であるように、君民の関係がうまくいっていれば世は良く治まるであろう」と、主君の政治の在り方に対する批判をしながら、四人は閑谷賢の辺りを散策したのである。

② 有鳥三首 有感而作

有鳥丹穴來 將雛息城門

鳥有り 丹穴より來り、雛を將ゐて 城門に息ふ。

音聲令人悅 毛彩使人眩

音聲 人をして悦ばしめ、毛彩 人をして眩ましむ。

自稱鳳凰使 頗能張威權

自ら 鳳凰の使ひと稱し、頗る能く 威權を張る。

機身嚇鶯輩 刷毛狎鸚班

身を機てて 鶯輩を嚇し、毛を刷きて 鸚班に狎る。

雜禽接武至 嬌媚各爭先

雜禽 武を接して至り、嬌媚 各の先を爭ふ。

爪牙與羽翼 儔侶日滋繁

爪牙と羽翼と、儔侶は日に滋繁く。

且謂失此時 何日飽美鮮

且つ謂ふ 此の時を失せば、何れの日か 美鮮に飽かんと。

羣噪逞所欲 四境自騷然

羣噪 欲する所を逞しくし、四境 自ら騷然たり。

此鳥本微賤 貪狡比鳥鶻

此の鳥は本 微賤にして、貪狡なること 鳥鶻に比す。

既許巢厨廩 誰禁恣噬吞

既に 厨廩に巢ふを許さるれば、誰か 恣に噬吞を禁せん。

既許居樞要 誰禁播凶殘

既に 樞要に居るを許さるれば、誰か 凶殘を播くを禁せん。

君自百禽長 勿惑姦鳥言

君は 自ら百禽の長なれば、姦鳥の言に惑はさるること勿れ。

丹穴から 鳥がやって来て、雛を連れて 城門に住み着いた。

その声は 人を悦ばせ、羽の色は 目を眩ませるほどだ。

自ら鳳凰の使いだと称して、たいそう能く威光と権力を張つて大威張り。

その身を敬つて小鳥たちを威嚇し、身繕いして大鳥に押れ押れしくしている。

小鳥たちは此の鳥の後に付き歩き、競つてご機嫌をとる。

その爪牙となり羽翼となつて、仲間は日増しに増えていく。

謂うに此の機会を失えば、いつご馳走にありつけるかわからないと。

鳥たちが騒ぎ立てて欲を張るので、藩内は騒然となつた。

この鳥はもともと身分地位が低く賤しく、欲張りで狡猾なことは烏や鳶のようだ。

(藩の) 台所に住み着くことを許されているので、恣に私腹を肥やすのを誰も禁ずることはできない。

枢要の地位に居ることを許されているので、残忍な行いもしたい放題だ。

主君は百禽の長だから、どうぞ姦鳥の言に惑わされないうで欲しい。

「有鳥丹穴」「丹穴」は、伝説上の山名。金や玉を産出するという。(『山海經』南山經)。ここでは江戸のことか。「鳳凰」藩主阿部正倫を指す。「驚鷲」家臣たち。「君自百禽長」「君」は、福山藩主を指す。

1〜8句―貪欲な鳥が雛を連れて城に入り、鳳凰(江戸にいる藩主)の使いと称して小鳥(藩の役人)たちを脅し、鵝鶩(藩の重役たち)の機嫌をとっている。9〜16句―小鳥たちは先を争つて貪欲な鳥のご機嫌を伺い、その仲間は日ごとに増えている。かくて藩の内外は騒がしくなった。17〜24句―この鳥は本は微賤であつたが、烏、鳶のようにずる賢く、台所や米倉に巣くうことを許され、枢要の場所に在るので、誰も手が出せない。わが君は百禽の長なのだから、どうかこの邪悪な鳥の言に惑わされないようにしてほしい。

其二

朝翔鷲社側 夕止鷄築邊 朝あしたには鷲社の側かたはらに翔とび、夕ゆふには鷄築の邊とに止まる。

竦翻且張背 瞿瞿微聳端

翻を竦かして且つ背を張り、瞿瞿として聳端を微ふ。

本欲肥其羶 非爲酬君恩

もと其の羶を肥やさんと欲し、君恩に酬ゆるが爲に非ず。

本欲美其室 非爲救下民

もと其の室を美しくせんと欲し、下民を救はんが爲に非ず。

弱羽亦何罪 嘒嘒心膽寒

弱羽亦何の罪かある、嘒嘒として心膽寒し。

吐己口中食 供渠盤上餐

己の口中の食を吐きて、渠が盤上の餐に供す。

不然觸其怒 覆巢難再全

然らずんば其の怒りに觸れ、覆巢再びは全かり難し。

各自謀免禍 喙息誰得安

各自禍ひを免かるるを謀り、喙息誰か安きを得ん。

君栖碧梧枝 寧知巧智根

君は碧梧の枝に栖む、寧んぞ巧智の根を知らんや。

計成一飽颺 羅捕竟應難

計成りて一たび飽颺すれば、羅捕竟に應に難かるべし。

願借鸚鵡舌 一言發其姦

願はくは鸚鵡の舌を借り、一言もて其の姦を發き。

願借鸚鵡爪 一擊肉其肝

願はくは鸚鵡の爪を借り、一擊もて其の肝を肉にせん。

朝方には驚の社の近くを飛び、夕方には鶏の止まり木の辺りに止まる。

羽をそびやかしまた嘴を張つて、目玉を忙しく回して飛びかかる機会を窺う。

もとより自分の身を肥やす為であつて、主君への恩返しの為ではない。

もとより自分の住まいを美しくする為であつて、民衆を助ける為ではない。

小さな弱い鳥に何の罪があるというのか、びくびく懼れおののいて震え上がっているではないか。

自分が口に入れた食べ物も吐き出して、かれの大皿の上の料理に差し出す。

そうしなければ其の怒りに触れ、巢を覆されて二度と完全なものにはならないのだ。

だから各々が禍から逃れようと謀るのだ、鳥たちは誰が安心しておられようか。

あなたは青桐の枝に棲んでいらつしやるから、どうして悪賢い根性がわかるだろうか。

計略が成就してひとたび持ち逃げしたら、絡め捕らえることは結局難しいだろう。

願うことは鸚鵡の口を借りて、一言でもつてその悪賢さをあばくことだ。

願うことは大鷲の爪を借りて、一撃でもつてその肝を食肉にすることだ。

「翮」羽の軸。「竦」そびえ立つ。「瞿瞿」鋭い目つきで睨むさま。「鼻端」争いの糸口。「微」他人の考えや動静を私心でうかがうこと。「噤噤」おそれおののくさま。「喙息」口で息をするもの。「鷗鷺」「鷗」はクマタカ。「鷺」猛鳥のわし。

「この食欲な鳥は、自分の欲を満たすために小鳥を脅して其の食べ物を奪っている。主君（鳳凰）は梧桐の枝に棲んでいるために、この事は全くご存じない。このままにしておくとおくと大変なことになる。その悪事を（鸚鵡の舌）を借りて告発し、（鷗鷺の爪）を借りて退治してしまいたいものだ。」と、主君が江戸詰めで目の届かないのをいいことに、枢要の所を任された卑賤の輩（藩の勘定総奉行の遠藤弁蔵か、田沼意次の側用人三浦某の弟、山本弁助か）が、恣に權威を振るっていることに対して憤慨し、主君に目を開いてしつかり見て欲しいと訴える。

其三

姦鳥多種類 相呼互攀援 姦鳥種類多く、相呼びて互ひに攀援す。

惡水溢其傍 腐鼠滿其前 惡水其の傍に溢れ、腐鼠其の前に滿つ。

烏鴛方得意 啞喋日聾喧 烏鴛方に意を得て、啞喋日に聾喧。

鬼雀謂仙鶴 何獨甘辛酸 鬼雀仙鶴に謂はく、何ぞ獨り辛酸に甘んぜんや。

羣情異所趨 念慮在顯尊 羣情趨く所を異にするも、念慮は顯尊に在り。

凄凄守賤辱 何須才與賢 凄凄として賤辱を守るに、何ぞ才と賢とを須ひん。

百物殊所營 憂虞在饑寒 百物營む所殊なるも、憂虞 饑寒に在り。

昂昂背流俗 無適愚且頑 昂昂として流俗に背き、適ち 愚にして且つ頑なる無かれ。

不如降其志 從我且翩翩 其の志を降すに如かず、我に従ひ且つ翩翩たれ。

小以飽芳餌 大以乘華軒 小にしては以て芳餌に飽き、大にしては以て華軒に乗らんと。

仙鶴不能奮 垂翅再三嘆 仙鶴 奮ふる能はず、翅を垂れて再三嘆ず。

誰識凌霄姿 元自厭腥膻 誰か識らん 霄を凌ぐ姿、元自り 腥膻を厭ふを。

ずる賢い鳥は種類が多く、相互いに呼び合い引き合う。

汚い水はその傍らに溢れ、腐った鼠はその前にいっぱいになる。

鳥や鳶は我が意を得たりと、ついはみ食う音は騒がしい。

鬼雀は仙鶴に向かつて謂う、「どうして独り辛い苦しみに甘んじてよかるうか。

多くの人の求める目的は違つても、願うところは高い地位や身分である。

冷え冷えと賤しく侮辱される身分を守るのであれば、どうして才能や賢明さが必要であるう。

すべての者が生きざまは違つても、気に掛かり懼れるのは飢えと寒さだ。

意気高く世俗の習わしに背を向けて、愚直で頑固な生き方はやめよ。

その志を低くして、私に従つて 思う存分 飛び回るにこしたことはない。

（そうすれば）小さくは美味い食べ物一杯食べ、大きくは立派に飾つた車に乗る事もできるだろう」と。

仙鶴は奮えることもできず、翅を垂れて 何度も嘆いた。

誰が識ろうか 霄を凌いで飛ぶ我が姿、元來 汚れた肉など 食べたくもないことを。

「姦鳥」俗物のたとえ。「攀援」攀縁に同じ。物に掴まつてよじ登る。「啜喋」「啜」は水鳥が啄み食べる音。

「鬼雀」鴉の一。嘴大きく頸白く、反哺せぬもの。「昂昂」志向が高い様子。意気が高く揚がる形容。「華軒」立派に飾った貴人の乗る車。「凌霄」空を凌ぐ志気。「腥膻」生臭い獣肉。

この悪鳥の仲間はずに増えている。その中の「鬼雀」が「仙鶴」（悪鳥の誘惑に乗らない人）に、瘦せ我慢せずに仲間になつたらどうかと勧める。仙鶴は再三溜息つきながら、「誰か識らん 霄を凌いで飛ぶ我が姿。汚れた肉など欲しくもない」とそれを拒否する。

なお「悪鳥」は誰を指すのか。詳しいことはわからないが、藩主阿部正倫が江戸で召し抱えた山本弁助（田沼意次の側用人三浦某の弟）であるとか、また藩の勘定総奉行、遠藤弁蔵を指すとか言われている。

⑥ 耕牛

一 従刀劍換耕牛 四國謳歌二百秋

一たび刀劍を耕牛に換へて従り、四國謳歌すること二百秋。

魯衛柔盛依賈堅 金張儀貌學伶優

魯衛の柔盛は賈堅に依り、金張の儀貌は伶優に學ぶ。

青山有地人爭墾 碧海無邊水自流

青山地有りて人は争ひて墾き、碧海邊無くして水は自ら流る。

自古清時總如此 迂儒何問杞人憂

古より清時總て此の如し、迂儒何ぞ問はん杞人の憂。

刀劍を耕牛に換えてからは、国の内は太平を謳歌すること二百年。

「魯や衛」では祭祀の供物は商人任せ、「金氏や張氏」の威張り様は役者の真似ごと。

青山の地を人々は競って開墾し、碧の海は果てしなく水は自然に流れてゆく。

昔から好く治まった世は総てこんなもの、私などが余計な心配をすることもあるまいが。

「魯衛柔盛」「魯・衛」は、中国の周王朝の一族の者が封ぜられた国で、徳川幕府の御三家のような存在。「柔盛」は、祭祀の供物。「賈堅」は、商人ども。「金張儀貌」「金・張」は、漢代の金氏、張氏で、時の権力者を

指す。「儀貌」は、威張つて格好をつけること。「伶優」は役者のこと。「迂儒」世間知らずの儒者。自分のことをいう。「杞人憂」「杞憂」のこと。取り越し苦労。「列子」天瑞篇にある故事。

御三家(徳川御三家。尾張・紀州・水戸)や親藩では、先祖の祭祀における供え物などは全て商人任せだし、重臣たちの威張りようは、まさに役者の物まねでも見ているようだ。上から下まで天下の政治は形骸化して、これでは実際の効果は望めない。さすがに茶山も匙を投じているようだ。

⑦ 龍盤

龍盤虎踞帝王都

誰見當時職貢圖

龍盤虎踞帝王の都、誰か見ん當時の職貢圖。

祭祀千年周雅樂

朝廷一半漢名儒

祭祀千年周の雅樂、朝廷の一半は漢の名儒。

世情頻逐浮雲變

吾道長懸片月孤

世情頻りに浮雲を逐ひて變じ、吾が道長く片月に懸りて孤なり。

懷古終宵愁不寐

城鐘數杵起栖鳥

古を懷ひて宵を終ふるまで愁へて寐ねられず、城鐘數杵栖鳥を起す。

京都は龍が盤り虎が踞つたような帝王の都であるのに、嘗ての「職貢圖」は今や見ることもない。

朝廷の祭祀にあたっては千年もの間「周の雅樂」が奏され、朝臣の半ばは「漢の名儒」が占めていたのに。世情は頻りに「浮雲を逐う」ように變化して、吾が道は適えられず「空に懸かる片割れ月」のようだ。

昔を懷つて宵の終るまで愁えて眠られず、城の鐘が數回、城の鳥を目覺めさせる。

「龍盤虎踞」帝王の都の形容。龍が盤まり虎が踞っているような雰囲気のある地勢。そこは王者の現れる土地とされる。風水の考え方。「職貢圖」古来、各地からの貢ぎ物(産物)を記した図。「周雅樂」朝廷に伝えられた正しい音楽。「周」は、周王朝。理想的な政治が行われていた時代。「漢名儒」漢代の優れた儒学者。かつては朝廷を中心に行われてきた日本の政治も、今や幕府が行うようになって昔の面影は無い。世の衰えが

嘆かわしくて夜も眠れないでいる。

これらは食欲な悪人の為すがままになっている福山藩の現状、緊張感を欠いた親藩の政治、朝廷が全く無視されている現状を批判し慨嘆する内容であるが、批判の対象は大まかで具体的ではない。批判の対象が絞られ、悪政の内容が具体的に述べられる神辺定住後の作とは、そのあたりが異なっている。

その他の作の内容は次の通り。

③ 御領山大石歌（御領山の大石の歌）

御領山は神辺平野の北東端にある標高二三四メートルの山で、山上の山肌には岩石が露出し、八丈と呼ばれる大岩は有名である。この詩はその山の石に語りかける調子で、「この頃は朝も民間も古いきたりばかりを尊重して改めない。かりにも何かしようとする朝野の権力者らの怒りを買う。お前の気骨を認めて採り挙げてくれるような人はいないだろうから、何事も聞かざる言わざるで身の保全を図るにこしたことはあるまい。愚者を装い、汚れた俗世間に近づかぬがよい」と時勢を慨嘆している。

④ 秋半 六首

(一) 秋も半ば、農家にとっては最も忙しい取り入れの時期に、出役のお触れが出された。為政者たる者「不違農事」（農事を違へず）を厳守するのが鉄則ではあるまいか。

(二) 夜も更けた。物音もない夜の静寂しじまを破って、渡し場あたりが急に喧しくなった。税を送って還って来る人たちだ。朝は早くから働いてその収穫は税として持って行かれる。しかも、こんなに遅く。無情な為政者に対する憤慨。

(三) 史書を読んでいて専横暴を極めた魯国の陽虎の話が出て来た時、この国にも似たような輩が居ることに思い至った。孤り胸に抱く煩悶を誰に向かって告げたらよかろうか。（当時福山藩吏として悪名高かった家老

を諷諭)

(四) 昔からの歴史の潮流の乱れは今もって止まらない。我が身は何を為す術もなく、流れに身を任せている。悪吏横行の時勢を嘆き悪政を愁う。

(五) 樹の根っこに坐って、白髮頭の親爺が心の内を話している。「此のころ国境は特に変わったことが有るわけではないのに、政令は次から次へと沢山出される」と安定しない政治を嘆く。

(六) 隠遁したような自分は、何をしようという意欲もない。無用の人間は時勢に置いてきぼりにされるだけ。国を安んずる術とて持たない私は隠者になるしかないのか。

⑤ 偶作 二首

(一) 農家にとって一年中で一番忙しい取り入れの時期に、労役に駆り出すとは暴政も甚だしいという憤り。

(二) 城中での仕事をすませた家老は、藩中の事柄の諸々について、一々伺いをたてる為に、新参者の猾吏の家に赴かねばならないことへの憤り。

⑧ 時情

京都は天子の支配する都であるはずなのに、武家の権威は百年経った今もなお続いている。自分の考えとは違う現今の世の情勢を慨嘆する。

ただ慨嘆するばかりで自分には何もできないでいる、その苛立ちを詠ったのが京都遊学の最後に詠まれた「歳杪放歌」である。

歳杪放歌

歳としの杪せうの放歌

三十二年胡念念 單身千里六向東

三十二年 なん胡ごぞそう念ねん念ねんたる、單身千里六たび東に向かふ。

滿腔慷慨成底事 負郭田園半爲空

滿腔の慷慨 底事なかにごとをか成す、負郭の田園 半なかばは空と爲る。

唯有風月供多病 今年又盡伏枕中

唯だ風月の 多病に供する有り、今年も又盡く伏枕の中。

屠龍無用已知之 一寒如此於我宜

屠龍の無用なるは 已に之を知る、一寒此の如きも 我に於ては宜なり。

堪喜阿連蠶織字 尊前唱和餞歲詩

喜ぶに堪へたり 阿連の蠶くも字を識るを、尊前に唱和す 歳を餞るの詩。

三十二年の間 何と慌だしかつたことか、千里の道を身ひとつで六度も東に向かったのだ。

身に溢れる憤懣と慨嘆を抱きお前は一体 何をやり遂げたのか、郷里の田畑も半は自分の物ではなくなった。

唯だ 多病のうちに 日々が過ぎて、今年も又枕に伏したまま暮れた。

屠龍の学が役に立たないことは已にわかっている、貧しさが身に染みるのは情けない私には当然のことだ。

ただ嬉しいことは 弟が 何とか文字を覚えたこと、酒樽を前に 唱和するのは 歳を餞るの詩。

「忿忿」慌たださいさま。「滿腔慷慨」身体いっぱいの慨嘆。「腔」は、身体。「負郭田園」城壁に近い良田。

「屠龍無用」龍を屠る術を習得したが、龍はいないので役には立たない。「一寒如此」このような貧乏も。「阿連」ここでは弟（信卿）のこと。「尊」樽に同じ。

この衰えた世を何とかしたいと、この十四年の間に六度も京都に出て、田畑を売ってまで学問を続けてきたのに。「身に溢れる慷慨の思い」（幕政、藩政への憤懣）も空しく、何もできないでいる自分が情けなく、年の暮れに酷く落ち込んでいる。

茶山の京都遊学の目的は、初めは医学と古文辞学を学ぶためであったが、途中から朱子学に変更。また各地から集まってきた学者、文人との交流を通して、知識を広め見識を深めることも目的の一つであった。

六度目の京都遊学を終えた時、茶山は今後の身の振り方を考えたが、なかなか決まらなかったようだ。茶山は当時の、世に名を揚げて出世するための学問に疑問を抱いており、世のため人のための学問を更に続けるか、それとも神辺に落ち着いて親孝行をし、塾を開いて「学問の種を蒔く」仕事をするか、岐路に立たされていたが、

結局、悩んだ末に後者に決めた。（第一章第一節「京都遊学の時期」 二「神辺帰郷」秋半六首三）

二、神辺定住後に於ける政治批判詩

茶山が六度目の京都遊学を終えて神辺に帰ったのは三十三歳の夏、すなわち安永九年（一七八〇）であるが、折りしもその頃は老中田沼意次の全盛期であった。田沼意次は安永元年（一七七二）に老中となつて側用人役も兼ね、その権勢を恣にした。しかし天明の飢饉、それに続く百姓一揆もあつて田沼政治に対する世の批判は厳しくなるばかりであつた。その後、天明四年（一七八四）天明は一七八一〜一七八八）に若年寄であつた長子の意知が江戸城中で刺されて死亡したことで意次の権力は急速に衰え、六年（一七八六）八月に失脚。七年（一七八七）六月に松平定信が老中首座となる。

定信の「寛政の改革」が始まつた寛政初年の頃（寛政は一七八九〜一八〇〇）に、田沼氏の悪政を批判する西山拙齋の『休否録』、姫井仲明の『苞桑録』、冢村子徳の『剥復録』などが編まれている。

このうち拙齋の『休否録』には、序である「休否録引」の後に、「同志勸懲の資」として釋慈周（六如）、菅晉帥（茶山）、姫井元詰、釋熙道、頼惟寛、頼惟柔、菅谷長員、中井積徳、荒木番ら九人の田政批判の詩を附し、その後に拙齋の政治批判詩を続けている。長引く悪政に、学者、文人たちも我慢できなくなつて書きためていた作を拙齋が纏めたもので、勿論出版したわけではなく仲間内で流通させていたものであろう。

茶山もその同志として、かなり厳しい内容の批判詩を作っている。『休否録』には次の十七篇三十四首が引かれている。『勸懲の資』勸善懲惡の助けとするもの。

- ①古齋謳行 ②歎音 ③歎齊 ④西城二首 ⑤古意 ⑥元旦試筆 ⑦無題二首 ⑧又（無題） ⑨窮隣 ⑩春興

六首 ⑪詠史六首 ⑫後詠史六首 ⑬郢都篇 ⑭即事 ⑮丁屋路上 ⑯題畫虎 ⑰遙和中井竹山韻

これらの詩のうち、菅茶山の『黄葉夕陽村舎詩』刊本には⑨竊隣、⑮丁屋路上を除いた他の詩は載せられていない。『黄葉夕陽村舎詩』刊本を編集する元となった「草稿本」は、茶山が『黄葉夕陽村舎詩』を刊行するために準備していたもので、現在広島県立歴史博物館に蔵されている。「草稿本」には以上挙げた十七首は全て収められている。又、この「草稿本」には『休否録』に採られていない茶山の政治批判詩「人事」も収録されている。(以下、菅茶山の刊本『黄葉夕陽村舎詩』を「板本」と称す。)

『休否録』に採録されている政治批判詩の中から幾首かの例を挙げてその内容を考察する。(詩題の上の番号は右に挙げた『休否録』の作品番号とする。)

① 古齊謳行

古齊謳行

君不見臨淄繁華世所無

君見ずや臨淄の繁華世に無き所

諸侯邸館幾千區

諸侯の邸館幾千區

魯衛在南宋鄭北

魯衛は南に在り 宋鄭は北

家家金屋貯緑珠

家家金屋 緑珠を貯ふ

王孫公子日遊嬉

王孫公子 日に遊嬉し

出則獵圍入妓圍

出でては 則ち獵圍 入りては妓圍

自言昇平世茅土

自ら言ふ 昇平なれば 世茅土あり

今而不樂爲人嗤

今にして 樂しまずんば 人の嗤ひと爲らんと

又不見豎刀威勢少匹儔

又見ずや 豎刀の威勢 匹儔少なく

七輿車服新拜侯

七輿の車服 新たに侯に拜せらる

去年采地築城郭

去年 采地に城郭を築き

金碧爲門玉爲樓

金碧を門と爲し 玉を樓と爲す

又不見侯家各置一新官

又見ずや 侯家各々 一新官を置き

專掌就人窺容顏

専ら就人を 掌りて 容顔を窺はしめ

苞苴白日爭豐美

苞苴ほうじょ 白日 豊美を争ひ

權門黃金聳丘山

權門 黄金 丘山と聳ゆ

嗚呼爲侯爲伯君已足

嗚呼 侯と爲り 伯と爲り 君已に足る

采邑便嬖更何欲

采邑 便嬖 更に何をか欲する

猶聞前村後租期

猶なほ聞く 前村 租期を後おくらせ

白頭之吏將下獄

白頭の吏 將に獄に下されんとすと

あなた 見て いませんか 齊の都の繁華なことは この世にはないほどだと、諸大名の屋敷は 幾千区もある。

魯や衛は南に在り宋や鄭は北に在り（江戸の藩邸を指す）、家屋という家屋は 金の屋根で 美女を貯えている。貴族の子弟は 毎日遊び楽しみ、外に出れば 獵場での狩り 内に入れば 妓女との戯れ。

自ら云う 世は穏やかに治まり代々授かつた領土は安定している、今 樂しまなければ 人の嗤い者となると。

又 見て いませんか 威勢を張り 限られた仲間が 権力を握り、沢山の輿や車服を得て 新たに 侯に封ぜられた。去年（田沼意次が）領地に城郭を築き、金や碧を門とし 玉の樓としたのを。

又 見て いませんか 大名は各々 新しい官職を置き、人事を 掌つかさどらせ（田沼意次の）顔色を窺わしているのを。賄賂は昼間でも 豊美を競い、權門は 黄金が 丘山のように聳たかえているのを。

ああ 侯となり伯となり 君已に十分ではないか、領地も家来も十分に足りているのに 更に何を欲するののか。

猶お聞くことに前の村では租税の納期を遅らせた為に、白髪頭の官吏が、将に獄に下されようとしていると。

「臨淄」齊の都。「緑珠」晋の石崇に愛された女。「妓園」唐の申王が冬寒に多くの妓女を座側に侍らせて牆とし寒気を防ぎこれを妓園と称した。「茅土」領地。封土。「豎刀」「豎刁」の誤りか。「豎」は宮中の小役人。人を賤しめて言う語。「豎刁」春秋齊の人。齊の桓公の寺人（宦官）となり甚だ寵任される。桓公の卒するや、易牙・開方と共に齊国を乱す。「便嬖」へつらい媚びる。お気に入りの人。

I 『草稿本』とII 『休否録』との異同

I 君不聞 ↓ II 君不見 I 豎刁 ↓ II 豎刀 I 綵色 ↓ II 采邑

この詩は田沼親子の榮達と悪政を詠った詩である。

② 歎音

晋を歎ず

晋侯今春格大廟

晋侯は今春 大廟に格り

十五邦君應命從

十五邦君 命に應じて從ふ

輿衛各耀疆內富

輿衛 各の疆内の富を耀かせ

一一行装逞麗容

一一 行装 麗容を逞しくす

邊璋皎函玉轆轤

邊璋 皎函 玉の轆轤

鏤膺逶續錦模糊

鏤膺 逶續 錦は模糊たり

馬聲迴合千里野

馬聲 迴かに合す 千里の野

人肩相摩九軌途

人肩 相摩す 九軌の途

廟距公宮三日程

廟は公宮を距つること三日の程

傳食都城復驛亭

食は都城に傳へ 復た驛亭に

前驅將入寢園中

前驅 將に寢園の中に入らんとするに

後騎纒發國東門」

後騎は纒かに國の東門を發す

隣叟近日從絳至

隣叟 近日 絳從り至り

過我屢誇全盛事

我に過ぎりて屢ば誇る 全盛の事

君不見 滕薛貧民拙家計

君 見ずや、滕 薛の貧民は 家計に拙にして

富樂賣人償新稅

富樂なるに人を賣りて新稅を償ふを

晉国の王は此の春 先祖の廟に參拜し、十五の諸侯が命に應じてそれに從つた。

その行列は領内の富を耀かせ、衣裳はそれぞれ美しさを極めてゐる。

黄金の鞘飾り 鮫皮の太刀に玉の車輪、彫り刻んだ馬の胸當に 胸がいの環は銀 馬に着せた錦が目眩しい。

馬の嘶きは千里の野の果てにまで届き、従者は肩をすり合わせながら 大通りを行く。

大廟は お城から三日の程、食事は 都城に 復た驛亭に送られる。

前驅が 墓園の中に入ろうとする頃、後続の騎馬は やつと國の東門を出発する始末。

隣りの爺さんが 先日 都の絳からやつて来て、私の所へ 寄つて その素晴らしさを誇つた。

しかし皆さん 知っていますか 滕や薛の貧民は 家計が成り立たず、豊作の歳にもかかわらず 家人を売つて新

稅を納めていることを。

「大廟」日光東照宮を指すのであろう。「鑿琫鮫函玉轆轤、鏤膺鏿續錦模糊」「鑿琫」は、諸侯の帯びる刀の鞘の黄金の飾り。「玉轆轤」は、玉で飾つた車。「鏤膺」は、飾りを彫り込んだ馬の胸當て。「鏿續」は、白銀で飾つた馬の胸がいの環。「錦模糊」は、馬の背に掛けてゐる錦が目眩しいこと。「寢園」墓地。「絳」春秋

時代、晉の都。ここでは江戸。「滕薛」春秋時代の小国。ここは諸藩のこと。

I 『草稿本』とII 『休否録』との異同 I 富歳 ↓ II 富樂 I 殘税 ↓ II 新税

「晉侯」とは、春秋時代、晉の君主であるが、ここは時の將軍を指す。その日光東照宮参拝のお供を命じられた十五諸侯の行列の豪華さを述べているが、その費用は全てそれぞれの領民から搾り取ったもの。そのため諸藩の「貧民」は「富歳」にもかかわらず「人を賣」って「新税」を払わなければならない状態だという。福山藩主の阿部正倫も参拝の供を命じられ、その費用を捻出するために「新税」を取り立てているようであるから、此の作は藩主批判の詩とも言えよう。

I 「日光山御社参」安永四年閏十二月二十七日付け願奉行宛て安部正倫書状

『広島県史 近世資料編III』（広島県編集 一九七三年三月）

…來四月日光山御社参之御供相務候ニ付莫大之入用有之、中地拍子之手段を以右入用可相務事ニ無之、福山へ令勘弁候得共、別段之工夫も無之候、然ル上ハ大切成御用相務不申候与申場合ニ至り候而も、第一首尾合相掛如何之重キ事ニ至り可申哉、大切至極之事ニ候。然ル（に）年々勝手向困窮ニおよひ候事故、此度之入用大造成事申々才覚ニも及不申事ニ付、無是非此度在町へ用銀申付候、願津之義ハ兼々令言上通、町場も小分之者共之義故、用銀等之相務候地合ニ無之候段、兼々令察候事ニ候、然共此度之義ハ誠ニ御大造成御嚴重之義、依而御供相務候も大したる人数万端莫大之事共入用申々一通り之事ニ付、無拋在町へ用銀申渡候。…

II 安部正倫（前半生）の政治。譜代大名として幕閣の要職に就こうと躍起になっていた時期 『広島県史 通史

IV 近世II』（広島県編集 一九八四年三月）

④ 西城二首

(其の一)

西城放衙鼓鞞 赤九迎搏黒頭公

西城の放衙はうが 鼓は鞞とらう、赤九迎へ搏つ黒頭公。

橋梓共政古所稀 七輿新封分邦畿

橋梓けいし 政を共にするは 古より稀なる所、七輿しんぼう 新封 邦畿を分かつ。

平生叱咤走風雷 歸路輦創血迸衛

平生は叱咤 風雷を走らいにしず、歸路は輦れんきう 創 血 衛くに迸る。

公應誰敢詰其由 怪事喧傳市童謳

公應 誰か敢て 其の由を詰むさん、怪事 喧傳す 市童の謳。

西城では 退庁の合図の太鼓が 鞞と響く、赤九（佐野政言）は 待ち構えて 黒頭公（田沼意知）を搏つた。

親と子が共に政治をするのは古来稀であるが、（田沼親子は）七輿を戴き 新しい領土は都に近い土地を貰った。」

平生は 役人を叱咤し 怒鳴り散らしていたが、帰り道 輦創からは 刀傷からの血が街路に迸り落ちた。

公庁では誰が敢えて その訳を問いただそうか、この怪事は世間に言い伝えられ 子どもの唄にまで謳われた。

「佐野政言」新番組の佐野善左衛門政言。「放衙」役所が引ける。退庁。「赤九」蔡陽の人。字は文叔、諡は

光武。高祖九世の孫。王莽篡立の十四年、兵を春陵に起こして莽を昆陽に破り、更始帝を立てて蕭王と為す。

更始の役後、帝位に即き洛陽に都して天下を定む。後漢の光武帝。（『後漢書』一）ここは佐野政言を指す。「黒

頭公」少壮で三公（後漢は太尉・司徒・司空）の位に登るものをいう。ここは意知を指す。「橋梓」二木の名。

橋木は父道に、梓木は子道に喩える。単に父子をいう。田沼意次・意知親子を指す。「新封」新しい領地。「邦

畿」都に近い土地。周代王城を中心として方千里以内をいう。「輦創血迸衛」斬りつけられた意知が車に乗せ

られた。その車から血がしたり落ちる。「輦」は人が手で引く車。「創」は刃物で受けた傷。「衛」四方に通

じる道。「公應」公の役所。役場。

I 『草稿本』とII 『休否録』との異同 I 血迸街 ↓ II 血迸衛

田沼意次・意知親子の悪政に堪えかねた佐野政言は遂に意知を搏つた。権勢を駆使して賄賂を貪り、厳しい税を課して貧しい農民を苦しめる田沼意次・意知親子に対する憤懣は、人々の胸中に渦巻いていたが、齒軋りするばかりで手の下しようが無かった。そういった人々に代わって、佐野政言が意知を搏ってくれたのだ。その理由を問い詰る者はいなかったたのである。

(其の二)

王侯争挽廣柳車 瓦礫打柩人喧嘩 王侯争ひて挽く 廣柳車、瓦礫 柩を打ち 人は喧嘩す。

祇林新瘞聶政尸 士女百郡來供花 祇林 新瘞、聶政の尸、士女 百郡 來りて 花を供ふ。

空積賣官鬻獄金 難奪燃臍啖肉心 空しく積む 賣官 鬻獄の金、奪ひ難し 臍を燃やし 肉を啖ふの心。

笑刀既折衆情慄 氷山未消竟何如 笑刀 既に折れ 衆情は慄ぶるを、氷山 未だ消えず 竟に 何如せん。

王侯たちは争つて意知の葬儀の車を挽く、瓦や石ころで柩を撲ち 人は喧しく騒ぐ。

寺の新しい墓に埋められた聶政(佐野政言)の屍に、男や女が大勢やって来て花を供える。

官を売り鬻獄金を貯え空しい事をしたものだ、(人々が)臍を燃やし肉を啖うほどの心を奪うことは難しい。

表面は柔和を装い 内心は陰賊褊忌であった意知も既に殺され人々の気もはれたが、しかし悪政はまだ治まらなわけではない きてこれからどうしたものか。

「柳車」葬式に用いる車。「祇林」祇陀太子の園林。転じて寺をいう。「新瘞」新しい墓。「聶政」戦国時代韓の刺客。敵遂のために大臣の俠累を殺して自殺した。ここは佐野政言を指す。「空積賣官鬻獄金」今までは官職を金で売ったり、罪に陥れては金で罪を減刑したりして金を貯えていたが、今となっては空しいことだ。「燃臍」後漢の董卓が誅せられて尸を市にさらされたとき、その体が肥満して脂が多かったので、番人が火をその臍に置いたところ、数日間燃え続けたという故事。「笑刀」表面は柔和を装い、内心は陰險なこと。

I 『草稿本』とII 『休否録』との異同

I 街衢喧 ↓ II 人喧嘩 I 百羣 ↓ II 百郡 I 笑力 ↓ II 笑刀

これまでは金で官職を売ったり、罪を着せては獄に入れ金で罪を軽減したりして、せつせと金を貯え悪政の限りを尽くしていた意知だ。これまでの鬱憤を晴らそうと、人々は意知の葬儀の車に瓦や石ころをぶつけて騒ぐ。佐野政言の墓には士女が百郡からやって来て花を供える。田沼意知を誅殺した義士を称え、意知の悪政はまだ消えたわけではなく、課題はまだ残っていることを述べる詩。

「西城」二首の後に、拙齋の次の文が載せられている。

遁齋閒覽載此詩、謂開天名家逸詩。余按、此擬昌黎汴州、禹錫蔡州者、豈在元和以前。況俚言押韻、筋骨全露、固不足觀乎。隱居放言、西城二首不知何代何人作。赤九迎口、似指武元衡。而武無有父子共政之實、瓦礫打柩、似斥王涯、而王不聞王侯爭挽之事。疑是晚唐藩鎮閒事、逸于正史者。語句不多、寓警切矣。雖無名家縱橫之工、自非女郎穠艷之詩也。堯山堂外記、西城二首、擬退之短古、而畫虎類狗、斷非唐人筆。放言說是。

遁齋閒覽して此の詩を載せ、開天名家の逸詩と謂ふ。余按ずるに、此れは昌黎の汴州、禹錫の蔡州に擬ふる者、豈に元和以前に在らんや。況んや俚言押韻、筋骨全て露れ、固り觀るに足らざるか。隱居の放言ならん。西城二首は何代の何人の作かを知らず。赤九迎口は、武元衡を指すが似し。而れども武は父子共政の實有ること無く、瓦礫もて柩を打つは、王涯を斥くるに似たり、而れども王に王侯争挽の事を聞かず。疑ふらくは是れ晚唐藩鎮閒の事にして、正史を逸る者なるか。語句多からず、寓警切なり。無名家縱橫の工と雖も、自ら女郎穠艷の詩に非ざるなり。堯山堂外記に、西城二首は、退之の短古に擬するも、畫虎類狗、斷じて唐人の筆に非ざるなりと。放言說是。

「開天」「開元天宝」唐の玄宗年号。天下がよく治まった前半を「開元」、安祿山の乱が起こり天下が乱れ

た後半を「天宝」という。「昌黎」中唐の文人、韓愈の号。河陽（今の河南省孟県）の人。又、昌黎（河北省通県）の人ともいう。「汴州」河南省開封の古名。五代の梁及び北宋の首都。「蔡州」江蘇省江寧県の西。「俚言」鄙びたことば。「武元衡」唐の人。字は伯蒼。進士。官は徳宗の時、御史中丞、憲宗の時、機務を典る（『唐書』一五二『舊唐書』一五八）。「王涯」唐、太原の人。字は廣津。官は中書侍郎、同中書門下平章事、鹽鐵を総べ茶法を變じ、刻急にして下を苦しむ。李訓（唐の人、字は子訓、進士。謀を善くし陰險。鄭注に因つて進み、宰相となる）等と宦官を誅せんとし、事洩れて殺される。（『唐書』一七九『舊唐書』一六九）。「聞事」無駄ごと。不必要なこと。「退之短古」「退之」は韓愈の字。「短古」は句数の少ない古詩。「畫虎類狗」「虎を畫きて狗に類す」虎の絵を描いて出来損なえば、却つて犬に似てしまう。

⑦ 無題二首

(其の一)

狂風捲沙暗平楚 雞上隣屋犬吠主
父老羣噪關何事 道就方伯訟疾苦
須臾各鄉人涌至 西家乞酒東家黍
沿途毀傷貪吏廬 罵言聲震天宇
中有幾簇惡百姓 邑間隨處恐攫取
里胥昨日盡竄竄 俄作免鹿竄林塢
野人昨日皆燕雀 俄作雕鶚奮毛羽
比輩平時豈皆暴 一朝激怒勢難禦

狂風沙を捲きて平楚暗く、雞は隣屋に上り犬は主に吠ゆ。
父老は羣れ噪ぎ何事にか關る、道ち方伯に就き疾苦を訟ふ。
須臾にして各郷人涌き至り、西家に酒を乞ひ東家に黍。
途に沿ひて毀傷す貪吏の廬、罵言聲震天宇を發はす。
中に有り幾簇の惡百姓、邑間隨處攫取を恐る。
里胥昨日竄竄を盡くすも、俄に免鹿と作り林塢に竄る。
野人昨日皆燕雀なれども、俄に雕鶚と作り毛羽を奮ふ。
此の輩平時豈に皆暴ならんや、一朝激怒すれば勢難し。

鎮靖固有救肌寒

追捕何須嚴銃弩

鎮靖固より肌寒を救ふ有り、追捕何ぞ須ひん銃弩を嚴にするを。

傾城兵馬疲奔走

隣國聲援屯行伍

城を傾けて兵馬奔走に疲る、隣國の聲援行伍に屯す。

嗚呼今年鳥合擊可走

來年蜂起圍可虜

嗚呼今年の鳥合撃ちて走らすべきも、來年蜂起して圍みて虜とすべ

きや。

我恐窮鼠不怖貓

遂使億兆化豺虎

我は恐る窮鼠貓を怖れず、遂に億兆をして豺虎に化せしむるを。

狂風が砂を巻き上げて林は暗く、鶏は隣の屋根に上り犬は主人に吠える。

父老は大勢寄り噪いでいるが何事に関わっているのか、道々諸侯の長に就き悩みや苦しみを訴えている。

間もなくして各郷から人が涌くようにやって来た、西の家に酒を求め東の家に黍を求めている。

道に沿うて傷めつけられた欲深い役人の家、罵る声々が天下を震わす。

中には幾らか群れを成す悪い百姓がいる、邑のあちこちでは襲われることを恐れている。

村の小役人は昨日尽く暴威を奮ったが、俄に兎や鹿と化して林や土手に隠れている。

田舎者は昨日皆な小人物であったが、俄に猛禽となつて羽毛を奮っている。

この者たちは普段はどうして荒々しいことがあるか、一旦激怒すると勢いは防ぎきれない。

鎮め安んじるには固より飢寒を救えばよい、捕えるのにどうして銃や弩を厳しく用いる必要があるか。

一城全部兵馬は奔走に疲れている、隣國の声援は隊を組んで集まっている。

ああ今年の鳥合の衆は撃つて逃がせても、來年大勢が揃つて暴動を起こすと囲み捕らえることができるか。

私は恐れる追いつめられた鼠が猫を怖れないように、遂に億兆の人をして山犬や虎に化せしむることを。

〔平楚〕高処から見下ろして平地のように見える林。〔父老〕町村の住民のうち、年功を経て尊敬を受けてい

る者。〔方伯〕各地方の長。〔天宇〕天下。帝都。〔窶窶〕人を食う獸の名。暴威を奮う。人を虐げるのに喩え

る。「竄」隠れる。逃れる。「雕鶚」「雕」鷲・鷲など猛鳥類。「鶚」鳥の名、みさぎ。「銃弩」小銃と弩と。「傾城」一城全部。「屯」たむろする。「行伍」隊列。組。二十五人が「行」、五人が「伍」。「豺虎」山犬と虎。猛悪貪欲な人の喩え。

I 『草稿本』とII 『休否録』との字句は大幅に異なるので、此処では『休否録』に拠る。

遂に百姓一揆が勃発したが、幕府は民の飢寒を救おうとはせず、武力による鎮圧を行った。この度は何とかできたが、豺虎と化した民を抑えられるか。「窮鼠猫を囓む」というが、この鳥合の衆が億兆の山犬や虎に化すとを茶山は恐れるというのである。

(其の二)

寧作亂民不欲爲偷兒

寧斃矢石不欲死鞭笞

既賣瓦木又麥苗 一家數口將何逃

桃紅柳翠社翁雨 冒雨衝寒人繹騷

去年千請無一唯 賜麥僅支半日飢

積怒不霽天亦病 愁雲二月夜凄其

奪酒攫食閭巷喧 毀屋壞廬報誰怨

渠首固知夷三族 號哭唯希達九閭

寧し亂民と作るよりも偷兒と爲るを欲せず

寧ろ矢石に斃るるよりも鞭笞に死するを欲せず

既に瓦や木を賣り又麥の苗まで、一家數口將に何にか逃れんとする。

とする。

桃は紅に柳は翠 社翁の雨、雨を冒し寒を衝きて人は繹騷ぐ。

去年は千たび請ふも一唯も無く、麥を賜ふも僅か半日の飢えを支ふるのみ。

支ふるのみ。

積れる怒りは霽れず 天も亦病み、愁雲 二月 夜は凄其たり。

酒を奪ひ食を攫ひて 閭巷は喧しく、屋を毀し廬を壞し誰の

怨みをか報ずる。

渠首は固り三族を夷さるるを知るも、號哭して唯だ九閭に達

牙兵出戌里正宅 猶嘖盆孟少鷄豚

するを希ふのみ。
牙兵 出で戌る 里正の宅、猶嘖る 盆孟に 鷄豚の少なきを。

一揆の乱民となろうとも生を盗むようにして生きたくない、矢玉に斃れようとも鞭打たれて死にたくない。

既に瓦や木材を売り 更に麦の苗まで、これでは一家数口 何処へ逃げたらよいのか。

桃は紅に柳は翠 氏神様の恵みの雨が降るといふのに、雨を冒し寒さを衝いて 人は騒ぎを続けている。

去年は千度の請願に お上は一度も耳を傾けることなく、麦が配られたが僅か半日の飢を支えただけ。

積もる怒りは霽れることなく 天も亦た病んで、愁いの雲は二月も続いて 夜は寒さが身にしみる。

酒を奪ひ食を攫つて町なかは喧しく、家屋を毀し廬舎を壊して誰の怨みを報いんとするか。

一揆の頭は 罪は三族にまで及ぶことを当然知ってはいるが、号哭の聲が天に達する事を唯だ願っている。

兵を出して守りを固める役人の宅では、なおも盆の届け物に鷄豚が少ないのを嘖っている。

「兪兒」 且く生を偷むようにして（びくびくして）生きている者。「死鞭笞」 租税を滞納して鞭打たれて死ぬこと。「社翁雨」「社翁」は、土地の神様。立春の後の春祭りに降る恵みの雨。農作業が始まる時期。「釋騷」

騒ぎが続くこと。「凄其」 寒さなどが身にこたえる。「九閭」天のこと。「閭」は、宮殿の門。「里正」 村長。

町役人。「盆孟」 盆。

町役人。「盆孟」 盆。

I 『草稿本』とII 『休否録』との字句は大幅に異なるので、此処では『休否録』に拠る。

飢饉の歳にもかかわらず、お上の救済は雀の涙。しかし租税だけは取り立てる、そのために各地で米商人、富家に対する「毀屋、壞廬」が起きた。首謀者は「三族」に及ぶ嚴罰を覚悟しての行動であり、それは実情が「九閭」まで届くことを願ってのものであった。にもかかわらず「里正」は「盆孟」に「鷄豚」の届け物が無いと嘖っていると詠っている。

「無題」二首で茶山は、幕府の飢饉対策を批判し、かえって富家や米商を襲う首謀者の行動を擁護し、民の危難をよそに届け物が粗末だと腹を立てている役人の存在を指摘している。

「草稿」にはあるが『休否録』にも「板本」にも収められていない詩に次の「人事」がある。

⑯ 人事

人事紛紜乱似絲 朝昏世態暗遷移 人事紛紜 乱れて絲に似たり、朝昏世態は暗に遷移す。

邱樊閑適英雄老 藩鎮徵求鷹犬滋 邱樊に閑適して英雄は老い、藩鎮は鷹犬を徵求すること滋し。

九鼎何閑周社稷 八厨偏管漢安危 九鼎何ぞ閑せん周の社稷、八厨偏に管る漢の安危。

狂愚自信平生志 稭有腰間七首知 狂愚自ら信ず平生の志、稭腰間の七首の知る有るのみ

人の世のことはこたごとと乱れて縛れた糸のようだ、朝に晩に世の中の様子は知らぬ間に遷り変わって行く。

丘や籬の中で閑居を楽しむ英雄は年老いてしまい、守護の諸侯は鷹や犬のような連中ばかり求めている。

九鼎は周の社稷を守ってはいない、八厨がひたすら漢の存亡に関わっている。

狂愚の人は平生から抱いている自分の志を信じており、その行動はただ腰の七首だけが知っている。

「邱樊」丘とまがき。「藩鎮」王室の守護となる諸侯。「鷹犬」鷹と犬、共に猟に使うもの。「九鼎」禹の時、

九州の金を貢がせて鑄た鼎で夏・殷・周の三代を通じて伝わった天子の宝。「社稷」五穀の神。「八厨」貨財

を以て能く人を救った八人。後漢の度尚・張邈・王考(孝)・劉儒・胡母班・秦周・蕃嚮・王章(商)。一

に劉儒を劉翊に作る。

現今の世の中は、正しい政治が行われず、才能や計略が優れ偉大な事を為し遂げる力を持った人は年老いて退けられ、諸侯は自分たちの為になるような連中ばかりを求めている。狂愚の人は常々自分の志を信じているが、その志は淺間の七首だけが知っている。

まつた寛政の新政への期待であつた。それらは京都遊学期の批判詩に比べて、批判の対象が絞られており、民を苦しめている悪政の内容が具体的に描かれていて、一段と厳しさを増している。

ところがこれらの作品のほとんどは『黄葉夕陽村舎詩』前篇の板本には収められていない。その理由は茶山が弟子の頼山陽の意見を容れて「幕府の忌諱」に触れそうな政治批判詩を省いたことによる。

『休否録』所収の政治批判の詩についての、「草稿本」と「刊本」の採否状況、及びそれに附された山陽の評を示すと次のようである。

	『休否録』		(草稿本)		(板本)	
1	「古齊謳行」	○	○	×		
	・山陽の評―「諱に触れんことを恐るるも、抑も事は已に逝けり。妨げざるか」					
2	「歎晉」	○	○	×		
	・山陽の評―「恐らくは忌を干さん」					
3	「歎齊」	○	○	×		
	・山陽の評―「諱に触れん」					
4	「西城」	○	○	×		
	・山陽の評―「假に西土を立つるも、當に口詩稿を買ふべし」					
5	「古意」	○	○	×		
6	「元旦試筆」	○	○	×		
7	「無題二首」	○	○	×		
8	「又」	○	○	×		

9	「鶴隣」	○	○	○
10	「春興六首」	○	○	×
11	「詠史六首」	○	○	×
12	「後詠史六首」	○	○	×
13	「郢都篇」	○	○	×
14	「即事」	○	○	○
15	「丁屋路上」	○	○	○
16	「題畫虎」	○	○	×
17	「遙和中井竹山韻」	○	×	×

「草稿本」は『休否録』所収の十七篇を全て採り入れているが、「板本」では「幕府の忌諱」に触れないであろう三篇だけを残して其の他は省いている。山陽の評語の付されていない作も、その意を酌んで茶山が削除したものと考えられる。

なお『休否録』に収められていない茶山の政治批判詩で、山陽の評語が付いているものに次の作がある。

(草稿本) (板本)

1	「雑詩二首」(卷一)	○	×
	・ 山陽の評——「恐らくは忌諱に触れん」		
2	「偶作二首」(卷二)	○	○
	・ 山陽の評——「恐らくは忌を干 <small>ま</small> さん。抑 <small>おさ</small> も妨 <small>ま</small> げざるか」		
3	「人事」(卷二)	○	×

・山陽の評——「恐らくは忌を干さん」

ここで『黄葉夕陽村舎詩』前篇が文化九（一八一二）年、茶山六十五歳の時に刊行されるまでの経過を整理しておこう。刊行された『黄葉夕陽村舎詩』前編には、茶山が出版のために整理した「草稿本」（廣島縣立歴史博物館蔵）がある。出版の話が具体化したのは文化七（一八一〇）年であるが、茶山は念のために「草稿本」に収めた作品の内容について頼山陽に点検を依頼している。その経緯については、山陽の『黄葉夕陽村舎詩文』遺稿の序に次のように記されている。

既に壯にして其の延引を蒙り、其の塾の講論を督するに従ふ。會ま其の詩を刊するを請ふ者有り、余に屬して校理せしむ。乃ち盡く其の管籥を發きて、始めて之を縱觀するを得たり。余は其の意を領して、妄に抉擇を爲す。此の如くすること周歲、既にして余は京に入る。刻の成りて寄せ示さるるに、則ち盡く余の選ぶ所に従ひ、併せて如（六如）師及び余の評語を雕す。余は之が爲に悚慙（恐れ恥じる）するも、而も翁は遂に余を以て「與に語る可き者」と爲すなり。

「與に語る可き者」「論語」學而篇の孔子の言葉を踏まえている。孔子と子貢の『詩』についての会話の中で、孔子が子貢を誉めて「始可與言詩已矣」（始めて與に詩を言う可きなり）と言った。

山陽は三十歳の時に廉塾に来て、都講として一年余り滞在したが、その間に茶山は「前篇」の「草稿本」を山陽に渡し、所収作品の「選」と「評」を依頼したのだという。「草稿」には既に僧六如の評が記されていたが、山陽は茶山に請われるままに作業を進めた。やがて文化九（一八一二）年に「前篇」は出版され、既に京都に出た山陽の許に届けられたが、山陽の「選」と「評」は茶山によって全てそのまま採用されていたという。

山陽が師茶山の作品を評するということは、さすがの山陽も気になったのであろう。「草稿本」巻一の冒頭には、

黄吻乳臭、敢て一辭を贊するは、愛に狃れ吾を忘るればなり。其の罪云何せん。亦唯だ疑ひを質し益を求むるのみ。幸はくは末減に從はんことを。頼襄謹んで識す。

〔末減〕罪を軽くするの意。ここの罪とは、弟子でありながら師の詩を批評し添削することをいう。

という書き込みがある。茶山は山陽が「幕府の忌諱」に触れる虞れがあると指摘した作品の全てを省いている。これら幕府の「忌諱に触れ」そんな茶山の政治批判詩が作られたのは何時ごろのことなのか。拙齋の「休否録引」の内容から考えて、おそらく天明（一七八一〜一七八八）の中頃から寛政（一七八九〜一八〇〇）二年頃まで、即ち田沼父子の全盛期が過ぎて落ち目になり、松平定信が登場して寛政の改革が行われるようになった頃までに詠まれたものと推測される。その期間は茶山が神辺に落ち着いてから十年余りの間であり、従って茶山は帰郷後の十年ばかりは、それまでと同じような政治批判詩を作っていたことになる。

それらの作は西山拙齋、頼春水ら、仲間うちで遣り取りされている分には問題はなかったようだが、それを出版して世に出すとすると事は別であった。田沼政治は既に三十年余り前の出来事ではあったが、幕府の「忌諱に触れない」とも限らないので用心するに越したことはない。茶山は草稿に記された山陽の指摘を見て、幕府の「忌諱に触れ」そんな詩を省くとともに、「忌諱に触れ」そんな表現についても、できるだけ穏やかなものに変更している。このようなことに疎かった茶山は、山陽に指摘されて始めて気がついたようだ。なお語句の改変については、茶山詩研究の資料として山陽の評語と併せて今後整理しておく必要があるだろう。

三、政治批判詩から農村詩へ

安永九年（一七八〇、三十三歳）に遊学を終えて郷里の神辺に帰った茶山は、翌年の天明元年（一七八一、三

十四歳)に塾を開いて、郷土や近隣の子どもたちの教育に関わってゆく。当座十年余りは政治批判の詩を作り続けていたようであるが、その数は漸次少なくなり、具体的な政治批判詩は作らなくなっている。その理由は、幕府の政治が「寛政の改革」によって一応は落ち着いてきたことが一つの理由として挙げられるであろうが、郷里の神辺に腰を落ち着けることになることと藩政は勿論のこと、幕政批判はしにくくなったことが主な理由であったと考えられる。藩内に幕政批判をする者が居れば、藩の責任となつて藩主に迷惑をかけることは必定であるし、塾の経営も危うくなる。もし茶山が此の時期、塾を藩に移管すること(塾の移管は寛政八年、四十九歳)を已に考えていたとしたら、藩への対応は益々慎重でなければならなかつた。

茶山の政治批判の態度に変わりはないが、その表現の方法は藩との関係を考へて変更せざるを得なかつたようだ。茶山の其の後の藩との関わりを見るに、仕官はしないで付かず離れずに関わりを保っている。藩に仕えてしまうと藩のことを第一に考へて動かざるを得なくなる。彼は農民の側に立つて藩との仲を取り持ち、実質的に農民の利益を計ろうと考へていたようで、その為にも藩との関係は、仕えないまでも良好に保っておきたかつた。そのようなわけで彼の政治批判は、農村とそこに生きる農民の生活を詠う詩を通して表現されることになる。そういつた詩の例を数首挙げる。

① 偶作 (後編) 卷二)

城隍前月頻祈雨 野觀今朝更禱晴

城隍 前月頻りに雨を祈り、野觀に今朝は更に晴を禱るを。

本自農家無暇日 又聞村吏索糧征

本自農家に暇日無し、又聞く村吏糧の征を索むるを。

鎮守の社では前月頻りに雨を祈り、今朝は野の高台で更に晴を禱るのが見える。

もとより農家には暇な日は無く、村吏が又た綿の税を取り立てにくるという話だ。

「城隍」 土地神の社。鎮守の社。「糧征」 綿の税。

先月は鎮守の社で雨乞いをし、今朝は野に出て晴を祈っている。農家では年中暇なしに働いているのに、村役人が又た綿の税を取りに来るといふ話だ。

② 江良路上 (江良への路上) (「後編」卷七)

千慮耘歌四野風 夫須棋點一叢叢 千慮の耘歌 四野の風、夫須は棋點のごとく 一叢叢。
時清城市皆絲管 誰信歡聲出此中 時清くして城市は皆 絲と管、誰か信ぜん 歡聲 此の中より出づるを。

あちこちから 農作業の歌が 風につれて聞こえてくる、菅笠が碁石のように 一叢一叢。

世は穏やかで 城市ではどこも 管弦の音、歡樂の歌声はここから出ていると 誰が思つていようか。

「一叢叢」 田植えをする農夫たちが、あちらにひとかたまり、こちらにひとかたまりと、「まるで碁盤に碁石を置いたようだ」というのである。

あちこちの畑から聞こえる農作業の歌。城下の賑わいはみなこれら農民の労苦のお陰なのに。そこに思いを致す人がいるだろうか。

③ 夏日雜詩 十二首 (六) (「後編」卷八)

村翁擔水踏崖登 種稗田高山半層 村翁 水を擔ひ 崖を踏みて登る、稗を種ゑて田は高く 山の半層。
自道移來經久旱 三回灌遍例能升 自ら道ふ 移り來りて 久しき旱を經るも、三回 灌ぐこと 遍くすれば
例 ね能く升ると。

村の爺さんが 水を擔ぎ 崖を踏みしめて登る、稗を植えた田は高く 山の中腹にある。

自ら云う「ここに移つてから 長い旱があつたが、三回 万遍なく水をやれば おおむね能く稔るよ」と。

「灌遍」万遍なく水をやる。

村の爺さんの稗作りの談話。苦勞を苦勞ともせず、農事に精を出している姿を詠う。

④ 夏日雜詩 十二首（八）（「後編」卷八）

旱田爭水四郊喧 處處松明路不昏 旱田 水を争ひて 四郊 喧し、處處に松明ありて 路昏からず。

村婦夜深來慰勞 左懷孩乳右盤殮 村婦 夜深く 來りて 勞を慰め、左に孩乳を懷き 右に盤殮。

旱 続きで水を争い、どこも騒がしい、路のあちこちに松明があり 路は暗くない。

村婦が この夜更けに 慰勞にやってくる、左手に乳飲み子を抱き右手には弁当をさげて。

「旱田」旱のため干上がった田圃。「孩乳」乳飲み子。

旱で水争いが起きて騒がしく、夜も水の見張り。女房どのも、乳飲み子を抱えて弁当運び。夫婦で夜遅くまで精を出して働く農夫の姿に対する感慨を詠う。

⑤ 江村秋事（「遺稿」卷四）

柳葉無風帶露飛 隔江村落晚依微 柳葉 風無きに 露を帯びて飛び、江を隔てて村落 晩れて依微たり。

扁舟載稻誰家婦 襁負孩兒自棹歸 扁舟 稻を載すは 誰が家の婦ぞ、孩兒を襁負ひて 自ら棹さして歸る。

柳の葉が 風も無いのに 露を帯びて散り、川向こうの村は 日暮れに霞んで見える。

小舟に稻を載せて行くのは どの家の婦か、乳飲み子を背負い 自ら棹さして帰ってゆく。

「依微」ぼんやりとして、はつきりしないさま。「孩兒」赤子。「孩乳」に同じ。

夕露の中、刈り取った稲束を載せて帰って行く小舟。よく見ると棹を握っているのは乳飲み子を背負った農婦。村では皆忙しく働いている。健気に働く農婦の姿に心が動かされる。

これらの詩には、一生懸命に働く農夫の姿が詠われている。並大抵ではない仕事に、懸命に健気に取り組んでいる農夫の姿である。同じ農民としての立場から、茶山にはその大変さが身に染みて分かる。だから、茶山は、

農民の側に立って藩との仲を取り持ち、実質的に農民の利益を計ろうと考えていたように思われる。では、実際に農民の為にどのようなことをしたのか。山陽の「茶山先生行状」〔『黄葉夕陽村舎文』巻四〕には、飢饉や一揆に際しての茶山の働きの例が次のように記されている。

邑民 昔て饑荒きくわうを以て、聚あつまりて事を擧げんと謀る。先生は夙とに其の機を察し、一有力者に就きて、禍福を論まじしめ、事寝やむを得たり。邑健訟けんそう（訴訟好き）を習とするも、亦また先生に因りて、沮止こどする者多し。而れども先生せいの口より、未だ嘗て之を言はざるなり。

また、廉塾を藩の管轄にしてほしいことを上願した「郷塾取立に関する書簡」の草稿（寛政八年 一七九六。四十歳）には、饑饉の際に二十年間に亘って行ってきた貧民救済の行爲について自ら次のように述べる。

二十年間、社倉かたちのこと思ひつき候ひて麥少々出し、人にもいたさせ蓄へて三四十石にもなり候。折悪しく凶年にて直すに分與いたし候。かくの如きこと三度、一度は米なり。今年もまたいたしかけ候。さてその分與いたする時は、一度は粥にいたしたることもあり、いづれとも朝へ願出候例なり。いつもわたくし首倡しゅしやうなれども皆庄屋おもひつきにいたさせ候ひて、わたくしどもことは隣人も知り申さざる位にて候。これらもまた名聞めいぶんすきとも人に思はれず候一端なり。

「二十年間」といえば、京都遊学の後半もその中に入るので、神辺に帰っている時には飢民救済の活動を続けていたことになる。茶山がこのような事を言うのは、世に名を揚げんためではないことを説明するためであつて、（わたしは、世に媚びることの出来ない性分だから郷隣の博徒や、まやかし坊主の類が、わたしを憎むことはまるで仇や敵のようだから、これらの類が強て山の慾のと申たてるかも知れないので——「郷塾取立に関する書簡」——）自分の善行を誇ろうとしてでは勿論なかつた。

茶山の詩には、飢民救済に触れた律詩「9 窮隣」（前編）巻三）があり、その起聯と尾聯に次のようにある。

擬頌斗米賑窮隣 斗米を頌ちて窮隣を賑さんと擬し

自笑山厨未太貧 自ら笑ふ山厨未だ太だしくは貧ならざるを

少しばかり米を窮隣に分けてあげようかという気になって、我が家の台所もこれでまだそれほど貧しくはないのだなど自笑する。

慚我救荒無異術 慚づらくは我荒を救ふに異術の無きを

半生辜負読書身 半生辜負す読書の身

慚ずかしいのは窮状を救う方策を持ち合わせていない事、これまでの半生何の為に書物を読んできたのか。飢民救済に関わりのある詩がまだ存在していると思われるので、このことについては今後の課題としておく。

まとめ

茶山は朝廷が無視され横暴な為政者が私腹を肥やし、賄賂が横行する幕府の政治に対して憤慨を禁じ得なかつた。しかし、初めの頃の作は為政者を「鳥」に擬したり、石に語りかけたり、「不識自誰家」(「偶作」二首、前巻一)とぼかした表現をしたり、婉曲な言い方にしたりして、核心を衝いた感じの詩ではなかった。

安永九年(一七八〇)三十三歳で最後の遊学を終えて神辺に帰った茶山は、塾を経営して郷土に定住した。ちよどその頃、つまり天明二年(一七八二)春から夏にかけて全国的に長雨が続き、冷害で作物が実らず、翌天明三年には、多数の死者が出るほどの大洪水と冷害に見舞われ、以後ざっと七年間は全国的に水害・冷害・虫害・旱魃等の災害が続いた。食べる物が無くて餓死する者が多く、道端には行き倒れの死骸が数知れず転がっていた。これらの天災は人の力では如何とも為し難いが、飢饉に対する措置は、政治の力によって善処出来る筈だと

茶山は考える。しかるに幕府や藩府は、事態に対する適切な措置を執らず、むしろ農民からの税収を厳しくし、「不違農事」の鉄則を破つて苛酷な出役を課す。江戸に於ては絶対的権力を握っていた田沼意次・意知親子による賄賂政治が行われ、福山藩に於ては藩主の威光を笠に着た奸臣による悪政の為、特に農民には莫大な負担が掛けられた。江戸詰め藩主は領地の窮状に疎く、領民の為の政治が為されぬ。人々の憤激は頂点に達した。

茶山もその怒りを露わにした詩を作っている。それは、遊学期の頃のものとは比較にならないほど厳しいものであった為に、板本には載せられていない。「草稿本」（広島県立歴史博物館蔵）の『黄葉夕陽村舎詩』巻一・二・三には板本には載せられなかった政治批判の詩が三十首余りも見える。そこに載せられている詩は全て頼山陽が目を通し、「恐らくは忌を干さん」とか「諱に触れん」等の評を付している。中国の史実に準えた形式のものが多く、当時の幕政を非難した内容であることは、一読して明瞭である。「諱に触れんことを恐るるも、抑も事は已に逝けり。妨げざるか」（幕府の忌諱に触れるかも知れないが、まあ年月も大分経っているから大丈夫だろう）と山陽が評した詩も、茶山は板本からは省いている。このような過激とも思える政治批判詩を作っていた頃の茶山は、田沼政治を徹底的に糾弾する西山拙齋や、意次の政治を批判した姫井桃源、同じ朱子学を遵奉する頼春水・杏坪兄弟等と親密な交友を重ねていたので、この人たちの影響も大いにあったであろうし、青・壮年期特有の「悪」を許せない純粹な精神の現れでもあったであろう。

しかし、茶山の厳しい政治批判詩は次第に影を潜めてゆく。郷土に根を下ろして塾を経営し、その塾をやがては郷塾として藩に移管する決意をした（寛政八年、一七九六。四十九歳）茶山は、表立って政治批判をしてはおれない。政治批判詩は農村詩の中に形を変えて詠まれてゆくようになった。茶山の「農村詩」から感じられるのは、郷里の仲間である農民に注ぐ茶山の温かい眼差しと、労りの思いであるが、その裏には重い負担を農民に強いている政治への批判が存在している。「現今、世が泰平であるのは農夫たちの労働の賜である」（「江良路上」後

編卷七)と詠じているように、この国を支えているのは農民であるという思いが茶山には常にあった。茶山は農村の實事を有りのままに述べ、その實際の様子を写して、農民たちの声にならない声を、詩を通して表現しようとしている。しかしその表現と内容は深刻ぶることなく、どこか長閑で穏やかだ。同じ土地に生まれ育ってきた者同士（茶山）の繋がり、農民の一人一人に寄せる茶山の心の温かさによるものであろう。農民への応援歌であるから生活の苦しさは詠われない。しかしその「勞り」と「励まし」の奥に、以前と変わらない政治批判の心が流れているようだ。茶山の農村詩の持ち味はそのあたりにあると言えよう。

【注】

①『休否錄』が編まれたのは、序の「休否錄引」に寛政二年（一七九〇）を「今歳」としていること、また「休否錄引」の記事で最も新しいのが寛政二年五月のものであることから、寛政二年頃と推測される。「休否」の意味は、『易経』から出ている言葉で、「全てが行き詰まってしまふ」ということである。

拙齋の「休否錄引」には次のようにある。

故大將軍浚明公之立也、田沼意次自官僚承寵、累遷爲執政、委任日渥。長子意知爲參政、父子握權顯政。刑賞予奪、一出其門、閣老大臣、充位受成而已。列卿羣僚、皆趨下風、或昏姻相結、或依違取容。中外居顯要者、槩其姻婭子弟、蟻附蠅趨之徒、羣小充斥、佞幸盈班。家奴井上某、三浦某、亦張威福弄政柄、朝士列侯、莫不與之締交爭迎焉。由是苞苴公行、綱紀大紊。僭奢成俗、廉恥掃地。郡國承風、姦猾乘時、皆以阿諛爲賢、掎克爲能。征課益急、訟獄愈繁、竟至私室富而國用乏、批政行而民力窮。人怨神怒、不可勝紀。天變地妖、率無虛歲。識者竊慨焉。

天明甲申四月、旗下衛士佐野政言、殺參政意知于殿廷。廷議賜政言死絕世。意次執政如故、更增秩祿。恩權隆赫、侈暴滋甚。巷議洶湧、輿誦紛紜。丙午八月、公疾病、乃罷意次、就第禁朝請、削侍中稻葉正明爵秩。九月公、薨、太子嗣立。天皇賜命爲大將軍。是爲今公。初政首除閒架錢而已、其餘法制、一仍舊貫。是秋、諸州有水、年穀不登。至丁未春夏淫雨傷麥。編氓荐饑、采色載路。姦商貪利閉糴、穀價日騰、錢貨日賤、而民之塗炭極矣。有司坐視、莫之能拯也。於是窮民蜂起、毀屋破廩、日以饑貪胥、報奸商爲事。郡邑所在、繹騷相踵、廷報星馳、莫不震驚。

而東都之擾尤甚。五月廿一日、結黨數十萬人、嘯衆作亂、撞壞都下米商及富家、奪食數千戶、三日三夜弗止。官命市令衛卒、禦之反爲所敗。訛言將逼執政諸第。至宮城戒嚴、藩邸閉關。陳吳之變、殆不可測也。朝議乃發內帑金二萬兩、米六萬苞、以賑貸之、且募富豪巨室、損貲相救。有閉糴發覺者、竝皆下獄。由是羣黨稍散、都民未定。廿九日、罷市令曲淵景漸。以其不請賑糶、釀成是禍也。六月八日、特召知縣事伊奈忠尊、進爵賜稱、專行救恤。十日、舉石河政武爲市令、平反訟獄。

十九日、擢白川侯、源定信爲執政、位居列相上。三賢彙進、皆慰人望也。或云、宗藩三家、胥譏薦之。於是告喻中外。革宿弊布新政、去奢昭儉、易暴以仁。行之纒浹旬、都鄙安堵、朝野改觀。七日、泉侯本多忠禰爲參政。位亦在列相上。八田侯加納久周爲郎中令。皆有民望者。亡何、市令石河氏卒。以柳生久通代之。其他官屬稍々汰姦簡良。十月二日、治故相意次罪、幽之別莊、削其爵秩、收其城邑、令嫡孫龍助承祀、賜秩萬石、奉朝請。蓋以前朝寵臣、故從寬典也。諸附依者、闕老列侯以至府尹縣令、後先免黜數十人、聞有竄流、絕祀者。初田黨之盛也、與宮嬪贊御、聲援相結、表裏固籠。以故晨牝頗恣、動輒亂政。至是茶然屏息云。迺諭百僚諸司、舉賢薦能、修文事講武備、而聘耆儒、旌孝義。請謁不行、言路漸開。於是中外肅清、藩鎮欽服。是秋、諸州大有年。明年戊申夏、來牟皆熟、秋禾亦穰。天下兆庶益安。而荒政之講不弛、權停諸侯享禮、緩外國聘期。是歲

五月、公命執政定信、朝於京師。遂巡浪華及南都、謁伊勢神廟而還。又分遣八使于七道、巡檢風俗。於是懲驕僭、省冗費、除務場、輕力征、數令郡國酒家釀本、以平穀價、勸農抑末、以防兼井。戒游惰、禁樗博、以杜奢橫之路云。

寬政改元己酉春二月、公納元妃島津氏。仍諭諸侯、免朝賀獻物。以列國疲弊、未復故也。更命諸州、各貯廩粟、豫備不虞。且訪孝義良民、及窮阨無告者與高年者、皆逐一登記上之。是歲十有一月、甘露降于東都、至今歲庚戌正月又降。列相西尾侯乘完、獻文賀之、迺徵儒臣頌章、因寓箴規焉。五月某日、命林大學頭信敬、博士柴野邦彥、岡田恕等、修學政禁異說。每一令下、知與不知、皆欽然感戴、響應景從。適值比歲豐登、物價稍平。寰宇霑化、泰運復興。輔翼之功、位育之驗、于前世有光。於戲、不亦盛矣乎。友人姬井吉仲明纂苞桑錄、冢村崇子德述剥復錄、具記其顛末。余亦有休否錄若干卷。聊充稗官之闕。又附諸騷客歌詩于其後、以爲同志勸懲之資焉爾。敢謂擬大史採覽之用、待昭代陳觀之秋乎哉。

故の大將軍浚明公の立つや、田沼意次は宮僚自り寵を承け、累遷して執政と爲り、委任日に濕し。長子意知は參政と爲り、父子權を握り政を顛にす。刑賞予奪、一に其の門より出で、閹老の大臣、位に充てられ成るを受くるのみ。列卿羣僚、皆下風に趨き、或いは昏姻相結び、或いは依違容を取る。中外の顯要に居る者は、繫ね其の姻婭の子弟にして、蟻附蠅趨の徒、羣小充斥し、佞幸班に盈つ。家奴の井上某、三浦某は、亦威福を張り政柄を弄し、朝士列侯は、之と締交し争ひ迎へざる莫し。是れに由りて苞苴は公行し、綱紀大いに紊る。僭奢俗を成し、廉恥地を掃ふ。郡國風を承け、姦猾時に乘じ、皆阿諛を以て賢と爲し、拮据を能と爲す。征課益す急にして、訟獄愈よ繁く、竟に私室富みて國用乏しく、批政行はれて民力窮するに至る。人の怨み神の怒りは、勝て紀すべからず。天變地妖、率ね虚歲無く、識者竊かに焉を慨く。

天明甲申四月、旗下の衛士 佐野政言は、参政 意知を殿廷にて殺す。廷議 政言に死を賜ひ世を絶つ。意次の政を執ることは故の如くにして、更に秩祿を増す。恩權 隆赫、侈暴滋す甚し。巷議 洶湧し、輿誦 紛紜たり。丙午八月、公 疾 病くして、乃ち意次を罷め、第に就きて朝請を禁じ、侍中稻葉正明の爵秩を削る。九月 公、薨じ、太子嗣ぎて立つ。天皇 命を賜ひて大將軍と爲す。是れ今の公爲り。初め 政首 間架錢を除くのみにして、其餘の法制は、一に舊貫に仍る。是の秋、諸州に水有りて、年穀 登らず。丁未に至り、春夏淫雨有りて麥を傷つく。編氓、荐りに饑乏、采色 路に載つ。姦商 利を貪り 糶を閉ざして、穀價 日に騰がり、錢貨 日に賤く、民の塗炭 極まれり。有司 坐視して、之を能く拯ぐる莫し。是に於て 窮民 蜂起し、屋を毀し 康を破り、日に貪胥に讎し、奸商に報ゆるを以て事と爲す。郡邑の所在、繹駟相踵ぎ、廷報 星のごとく馳せ、震驚せざる莫し。

而して東都の擾れ尤も甚し。五月廿一日、黨を結ぶこと數十萬人、嘯衆 亂を作し、都下の米商及び富家を撞壊し、食を奪ふこと数千戸、三日三夜 止まず。官は市令衛卒に命じ、之を禦ぐも反つて敗るる所と爲る。訛言ありて將に執政の諸第に逼らんとすと。宮城 戒嚴し、藩邸 關を閉すに至る。陳吳の變、殆ど測るべからざるなり。朝議して乃ち内帑金二萬兩、米六萬石を發し、以て之を賑貸し、且つ富豪巨室を募り、貲を損じて相救はしむ。糶を閉ざして發覺する者有り、亂を唱ふとして逐捕さるる者有らば、竝びに皆獄に下す。是れに由りて羣黨稍く散ずるも、都民 未だ定まらず。廿九日、市令の曲淵景漸を罷む。其の賑糶を請はずして、是の禍を釀成するを以てなり。六月八日、特に知縣事の伊奈忠尊を召して、爵を進め稱を賜ひ、専ら救恤を行はしむ。十日、石河政武を擧げて市令と爲し、訟獄を平反せしむ。

十九日、白川侯、源定信を擢きて執政と爲し、位は列相の上に居る。三賢 彙進し、皆人望を慰む。或いは云ふ、宗藩三家、胥議し之を薦すと。是に於て中外に告諭し、宿弊を革め新政を布き、奢りを去り儉を昭

らかにし、暴に易ふるに仁を以てす。之を行ふこと纒かに洩旬にして、都鄙安堵し、朝野觀を改む。七日、泉侯本多忠壽參政と爲る。位亦列相の上に在り。八田侯加納久周を郎中令と爲す。皆民望有る者なり。何も亡くして、市令石河氏卒す。柳生久通を以て之に代ふ。其の他官屬稍々姦を汰し良を簡ぶ。

十月二日、故の相意次の罪を治め、之を別荘に幽へ、其の爵秩を削り、其の城邑を收め、嫡孫龍助をして祀を承けしめ、秩萬石を賜ひ、奉朝請とす。蓋し前朝の寵臣なるを以て、故に寛典に従ふなり。諸々の附依する者、閥老列侯より以て府尹縣令に至るまで、後先免黜數十人、間竄流され、祀を絶つる者有り。

初め田黨の盛んなるや、宮嬪贊御と、聲援相結び、表裏寵を固くす。故を以て農牝頗る恣にして、動もすれば輒ち政を亂す。是に至りて茶然として屏息すと云ふ。迺ち百僚諸司に諭し、賢を擧げ能を薦め、文事を修め武備を講じて、耆儒を聘し、孝義を旌す。請謁行はれず、言路漸く開く。是に於て中外肅清、藩鎮欽服す。是の秋、諸州大いに年有り。明年戊申の夏、來牟皆熟し、秋禾亦穰る。天下兆庶益す安んず。而れども荒政の講弛めず、權に諸侯の享禮を停め、外國の聘期を緩む。是の歳五月、公は執政定信に命じて、京師に朝せしむ。遂に浪華及び南都を巡り、伊勢神廟に謁して還る。又八使を七道に分ち遣はし、風俗を巡檢せしむ。是に於て驕僭を懲らし、冗費を省き、務場を除き、力征を輕くし、數ば郡國の酒家釀本に令し、以て穀價を平かにし、農を勸め末を抑へ、以て兼井を防ぐ。游惰を戒め、博博を禁じ、以て奢横の路を杜ぐと云ふ。

寛政改元の己酉春二月、公元妃島津氏を納る。仍りて諸侯を諭し、朝賀獻物を免す。列國疫弊し、未だ復せざるの故を以てなり。更に諸州に命じ、各々粟粟を貯へしめ、豫め不虞に備ふ。且つ孝義良民、及び窮阨無告の者と高年の者とを訪ね、皆逐一登記して之を上げしむ。是の歳十有一月、甘露東都に降り、今歳庚戌正月に至りて又降る。列相西尾侯乘完、文を獻じ之を賀し、迺ち儒臣を徵し頌章し、因りて箴規を寓

せり。五月某日、林大學頭信敬、博士柴野邦彦、岡田惣等に命じ、學政を修め異説を禁ぜしむ。一令の下る毎に、知ると知らざると、皆欽然として感戴し、響應景從す。適に比歲豊登に値りて、物價は稍く平らかなり。寰宇霑化し、秦運復興す。輔翼の功、位育の驗、前世よりも光有り。於戲、亦盛んならずや。友人姫井吉仲明は『苞桑録』を編纂し、冢村崇子徳は『剝復録』を述べ、具さに其の顛末を記す。余は亦『休否録』若干卷有り、聊か稗官の闕に充つ。又諸騷客の歌詩を其の後に附し、以て同志勸懲の資と爲すのみ。敢て大史採覽の用に擬し、昭代陳觀の秋を待たんか。

②小財陽平『黄葉夕陽村舎詩』前篇卷一の編纂事情——「忌諱に触れる」作品をめぐって——『近世文藝』87日本近世文學會）参照。

③茶山の詩集『黄葉夕陽村舎詩』には、文化九年（一八一二、茶山六十五歳）刊の「前編」八卷。文政六年（一八二五、七十六歳）刊の「後編」八卷。天保三年（一八三二、没後）刊の「遺稿」七卷がある。今ここでは「前編」について問題にしている。

④茶山の「寄肥後藪先生 其二」（『黄葉夕陽村舎詩』前編卷二）詩に「我本農家子、生長事耦耕。一朝改舊業、追師學聖經」（我は本農家の子、生長して耦耕を事とす。一朝舊業を改め、師を追ひて聖經を學ぶ）と詠っている。

第三節 農村詩

茶山の詩集『黄葉夕陽村舎詩』の中には、郷土備後国、神辺近辺の農村風景を情緒豊かに詠い上げた詩が多い。山や川や田畑のたたずまいを詠い、そこに繰り広げられる人々の生活を詠った詩である。野良には働く農夫の姿があり、カタンコトンと回る水車の音があり、川では馬が水浴びをし、舟漕ぐ船頭の姿があり、魚捕りに興じる子どもたちがいる。山には樵夫の斧の音が銜し、楽しそうな小鳥の囀りが終日聞こえ、溪流のせせらぎの響きが心地よい。春は弁当を携えての遠出、夏は蛭狩りに興じ、秋は松茸狩りの楽しさが詠われている。しかし、単に穏やかでのんびりした楽しい農村生活を詠った詩ばかりではない。農村の生活を詠う詩の底に、政治に対する批判が流れていると感じられるものもある。それが茶山の農村詩である。

京都遊学を終えて郷里に帰った茶山は、八十年の生涯の間に数度、江戸・京坂地方に長期の旅をした以外は、備中・安芸地方など近郷を旅するくらいで、殆ど郷里から出ることはなかった。そういう理由からか茶山の詩には郷土の風物を題材にしたものが多い。ここではそういった茶山の「農村詩」の内容や表現の特色について検討する。

一、茶山「農村詩」の内容

茶山の「農村詩」の内容は「農村の風景を詠う詩」と「農村の生活を詠う詩」に纏めることができる。

1、農村の風景を詠う詩

① 農功

農功五月急如弦 牟麥纒收已挿田 農功五月急なること弦の如し、牟麥纒に收め已に田に挿す。

一夜園林濯枝雨 猫兒山下水涵天 一夜園林枝を濯ぐ雨、猫兒山下水天を涵す。

『黄葉夕陽村舍詩』前編卷二

五月の農事は弓弦のように急だ、大麥を刈り終わったと思ったらもう田植えた。

或る夜庭の雜木を梅雨の大雨が洗い流すと、猫兒山のまわりの田野は一面に水を張り空を映している。

農家にとって五月は大変忙しい。麦刈を終えたと思ったら苗代田を耕作し、直ぐさま田植えの準備にかからなければならぬ。梅雨時期の田野の風景。

② 即事

雨斷梅天鬱未晴 滿溝新漲夜庭明 雨斷みて梅天鬱として未だ晴れず、滿溝新たに漲りて夜庭明るし。

隣機無響人初定 門柳陰中姑惡鳴 隣機響き無く人初めて定まり、門柳陰中姑惡鳴く。

『黄葉夕陽村舍詩』後編卷二

梅雨続きの空は まだ晴れやらす、溝は 満々と水が漲って 夜の庭は明るく感じられる。

隣家の機織りの音も静まり 人の気配もない、門前の柳の木陰で 水鶏水いかりが鳴いている。

梅雨で水がいっぱい漲った溝のせいか、少し明るく感じられる。さっきまで聞こえていた機織りの音が止み、静まりかえった農家の庭先。門前の柳の木陰で鳴く水鶏の音が却って静寂を感じさせる。

③ 冬日雑詩（九）

寒鳥相追入亂松 隔溪孤寺靜鳴鐘 寒鳥相追ひて亂松に入り、溪たにを隔てて 孤寺 靜かに鐘の鳴る。

山風俄約晚雲去 雪在西南三四峰 山風 俄に晚雲を約して去り、雪は 西南 三四の峰に在り。

〔黄葉夕陽村舎詩〕前編卷三

寒々とした鳥は追いつ追われつして松の乱立した林に入り、溪谷を隔てて寺から靜かに鐘の音が聞こえてくる。

山風は 俄に暮れ方の雲を纏めて吹き去り、雪は 西南 三四の山の峰に降っている。

寒々とした農山村の風景。西南辺りの山には雪が降り始めたようだ。鳥も早々と時に帰って行く。夕刻の鐘の音が靜かに響いて情趣を添える。

④ 秋日雑咏（一）

蓮已摧殘菊未開 此時秋物各爭才 蓮は已に摧殘さいざんし 菊は未だ開かず、此の時 秋物 各々 才を爭ふ。

遮人敗醬堆金粟 沿路鷄腸捧玉杯 人を遮る 敗醬はいしょう 金粟きんせく 堆うづたかく、路に沿ふ 鷄腸 玉杯を捧ぐ。

〔黄葉夕陽村舎詩〕後編卷七

蓮はもう終わり 菊にはまだ早い、この頃は 秋の草花が とりどりに美しさを競うている。

人の通り道を遮って 女郎花は 金色の粟粒を盛り上げ、道端には 仏の座が 玉杯を捧げるような姿だ。

農家の庭先の黄色い女郎花に陽が射して金色に輝き、道端の仏の座は盃形の小さな花をつけている。農村の秋気

色。

⑤ 秋日雜咏（十）

村園秋色日淒清 籬下陰蟲盡亦聲

村園の秋色 日びに淒清たり、籬下の陰蟲 盡も亦聲あり。

槿絮爭開枝逾重 瓠瓜欲熟架先傾

槿絮 争ひ開きて 枝 逾よ重く、瓠瓜 熟さんと欲して 架 先づ傾く。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷七

村の田園の秋景色は 日毎に冷たく澄み渡り、垣根の辺りでは 蟋蟀が昼間も鳴いている。

綿の実 は あちこちで開いて 枝は益々重く、干瓢も熟す時期に来て 棚が先ず傾きだした。

籬の下では昼間でも陰蟲が鳴き、枝もたわわな綿の実があちこちで開き、干瓢も棚が傾くほどに熟す時期となった。秋も深まった畑の様子。

①、②は神辺あたりの田植え時分の農村風景、③も同じく神辺あたりの冬の夕暮れ時の風景が、技巧を凝らさずさらりと詠じられている。④、⑤は「秋日雜咏」と題した十二首の連作で、自宅の菜園の様子が見たまま有りのままに、平易なことばで詠じられている。「秋日雜咏」は他の十首も捨てがたい秀作である。

2、農村の生活を詠う詩

(1) 農村の人々の生活を詠う詩

① 夏日田家同士信子發子晦賦

夏日田家 士信 子發 子晦の賦に同じくす

挿田功畢洗槿秧 喜見隣閭來救忙

田を挿き 功畢りて 槿の秧を洗ふ、喜び見る 隣閭 來りて忙を救ふを。

環坐柳陰傳酒餉 南颺吹送笑聲香 柳陰に環坐し 酒餉を傳ふ、南颺 吹き送り 笑聲香し。

〔黄葉夕陽村舍詩〕前編卷二

田を挿き 仕事を終えて 槿の秧を洗う、喜ばしいのは 隣村から 手伝いに来てくれていることだ。

柳の木陰に輪になって坐り 酒や食べ物廻す、南の涼風が 吹き送ってくる 笑い声は香しい。

田も挿き終わり綿の苗を洗った。隣村からの手伝いも嬉しい限り。一段落したところで柳の木陰に打ち上げの酒盛り、南からの風は涼しく皆 談笑して和氣藹々。

② 途中 三首 (一)

小椋導人行 細艸微風路

小椋 人を導きて行く、細艸 微風の路。

飯笥酒胡蘆 村姑餉撞圃

飯笥 酒胡の蘆、村姑 撞圃に餉す。

〔黄葉夕陽村舍詩〕前編卷三

小さなむく犬が 人の前を歩いて行く、小草が 微風にそよぐ畦道。

弁当箱と飲み物の筐を持って、村娘は 綿畑に 昼餉を運ぶ。

畦道の草を踏み むく犬を伴って、村娘は綿畑で働く家族に昼の弁当を持って行く。長閑な山村の風景詩。

③ 冬日雜詩 (一六)

寒星爛爛帶林扉

杉頂孤雲凍不飛

寒星 爛爛として 林扉に帯び、杉頂 孤雲 凍りて飛ばず。

隣舍喧嘩縁底事

村人獲鹿鼎摺歸

隣舍 喧嘩 底事にか縁る、村人 鹿を獲り 鼎摺して歸る。

〔黄葉夕陽村舍詩〕前編卷三

寒々とした星は 林扉に連なり、杉の木の頂きには 一片の雲が 凍り付いたように動かない。

隣の家では がやがやと騒がしいが 何事だろう、村人たちが 鹿を獲って 担ぎ合って 帰ってきたのだ。

凍てつくような寒さの夜更け、隣家の辺りが急にざわめき出した。「何事だろう」と思ったら、仕留めた鹿を三人

で担いで帰ったところだった。田舎の夜の出来事。

④ 村居 二首（一）

檀圃泥乾人出耕 竹梢鵲語喜新晴 檀圃わたはたけの泥乾き人出でて耕す、竹梢の鵲語じやくご 新晴を喜ぶ。

山妻治餉將攜去 且倩隣童護箭蒴 山妻しやう 餉しやうを治め將に攜たづなへ去ゆかんとし、且しばらく隣童を倩せとふて箭蒴たけのこを護まもらしむ。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷二

雨も上がり綿畑の泥も乾いたので 農夫は出て耕す、竹の梢の鵲は 晴れ間を喜んで啼いている。

農婦は畑の家人の昼餉を持って行こうとして、暫く隣の童こに頼んで 生えたばかりの筍を見張らせた。

野良仕事の家人に昼の弁当を持って行こうとして ふと生え始めの筍を見つけたかみさんは、他人ひとに採られぬようにと隣の童こに見張りを頼んだ。農村らしい風物詩。

⑤ 赴鴨方途中口占 鴨方に赴く途中の口占

秣田檀圃正西成 社雨初收澹午晴 秣田いなだ 檀圃わたはたけ 正に西成、社雨初めて收まり午晴わはし。

且喜今年秋熟遍 山村時過賣魚聲 且かつつ喜ぶ今年秋熟あまねの遍あまねきを、山村時に過ぐ魚を賣る聲。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷二

稲田や綿畑は 正に実りの秋だ、祭の日の雨も収まり 午後は爽やかに晴れた。

その上 嬉しいことに 今年は全体的に豊作だ、山村を 時々 魚売りの声を通り過ぎて行く。

〔口占〕口ずさみ。心に浮かんだままを詩に詠む。

稲も綿も今年は豊作、雨も収まり晴れて爽やか。時に魚売りの声を通り過ぎて行く。平和な山村の昼のひととき。

⑥ 又

四隣笑語認年豊 新釀香飄午巷風 四隣笑語 年の豊かなるを認む、新釀香は飄ふ午巷の風。

明日林神當作會 祠前樹幟閃晴空

明日 林神 當に會を作すべし、祠前 幟のぼりを樹たてて 晴空に閃く。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷二

あちこちから笑い声が聞こえるのは豊年のせいだ、新醸造の酒の香が 昼の風に乗って 小路から匂ってくる。

明日は氏神様の祭り 神前に会し 感謝を捧げるのだらう、祠の前には 幟のぼりが立てられ 秋空にはためいている。豊年を祝う農村の人々の笑い声が、新醸造酒の香とともに風に乗って届く。社の前の幟のぼりも秋空にはためいている。豊作の秋の農村は平和だ。

①から⑥までの詩は、農村らしい長閑で穏やかな人々の生活が窺える詩である。

⑦ 偶作 二首 (一)

季秋龍未見 郊野正西成 季秋 龍未だ見れず、郊野 正に西成。

魯國爲長府 徭夫犯曉行 魯國 長府を爲り、徭夫 曉を犯して行く。

〔黄葉夕陽村舍詩〕前編卷一

晩秋だというのに、まだ蒼龍星を見ない、郊野は 正に取り入れの真つ最中。

魯国 (福山藩) では 長府を造るといふ、そのため労役に召された徭夫が 晩前から出掛けて行く。

〔長府〕魯の蔵。ここは福山藩の倉庫を建てることをいう。

十月初めの暮れに東方に蒼龍星 (龍) が現れて後、農事はやっと暇になるのだが、この星をまだ見ない。農家は収獲のため多忙の真つ最中である。

⑧ 秋半 六首 (一)

秋半還徭役 清閑付病身 秋半 還た徭役す、清閑 病身に付す。

汗邪未收獲 流峙自精神 汗邪 未だ收獲せず、流峙 自ら精神。

尋藥雲生屐 看碑雨墊巾 藥を尋ぬれば 雲は屐より生じ、碑を看れば 雨は巾を墊うすほす。

笑他憂國意 卻在釣魚人 他を笑ふ 憂國の意、卻って釣魚の人に在らん。 『黄葉夕陽村舎詩』前編卷一

秋半ばまた出役の要請があった、病身の自分は世の中のごたごたを避けて閑かにくらししているが、窪地ではまだ収穫も終わっていない、川は流れ 丘は峙つように 自然には自然の精神がある。

葉草を尋ねて 山に入れば 雲は足下から生じてくる、碑を看れば 雨は頭巾を濡らしている。

為政者のやることは全くお笑いだ 真に国を思う心を持っているのだろうか、真に憂國の意を持っているのは釣糸を垂れているあの人かも知れない。

この農繁期の忙しい時期に労役の召集をかけるとは、藩政に携わる人々は何を考えているのだろう。天地の森羅万象は自然の摂理によって推移すべきであり、農家にとって秋半ばは「猫の手も借りたい」ほど忙しい時期なにと、茶山は憤慨を詩に表現するしかないのである。

⑦・⑧は農家の最も忙しい秋の取り入れの時期に、出役の要請をする藩政の無謀に対する茶山の怒りが詠われている。

⑨ 秋半 六首（二）

題詩坐深夜 心意轉幽閑 詩を題して深夜に坐せば、心意 轉 幽閑なり。

犬吠疎簾外 風生雜樹間 犬は疎簾の外に吠え、風は雜樹の間に生ず。

孤燈明古壁 墜葉響空山 孤燈 古壁に明るく、墜葉 空山に響く。

渡口喧人語 前村輸稅還 渡口 人語 喧しく、前村 稅を輸りて還る。

詩を作つて深夜に坐っていると、心はますます静まってくる。

犬は 簾の向こうで吠え、風は 雑木の間を吹き抜ける。

孤つの燈火は 古びた壁を明るく照らして、落ち葉は 人氣のない山に響く。

『黄葉夕陽村舎詩』前編卷二

渡し場は人々の声が喧かしましい、前の村では税を送って選えらんで来たらしい。

雑木林を吹き抜ける風の音、犬の吠え声、落ち葉のかすかな音も聞こえるくらい静かな夜の静寂しじまを破やぶつて、急に渡し場辺りがざわめき出した。税の米や綿を送って帰る人々だ。農民は税の為にこんなに遅くまで働いているのだ。

⑩ 横尾途上

閒行全勝藥 忘却抱病身 閒行 全く薬に勝り、忘却す抱病の身。

飛鳥還知晚 狂花自作春 飛鳥 還た晩を知り、狂花 自ら春を作す。

霜前山已瘦 水後市偏貧 霜前山 已に瘦せ、水後市 偏へに貧し。

大路城門近 喧然輸税人 大路城門 近し、喧然たり税を輸る人。

〔黄葉夕陽村舎詩〕後編卷一

閑かな生活は全く薬に勝り、病氣持ちの体のことも忘れさせる。

鳥はまた日暮れを知って埒はへ帰り、狂い咲きの花は自然と春の風情を作す。

霜の降りる前の山は樹々が葉を落とし、川水の瘦せる晩秋は市もひっそりと静まる。

大通りや城門のあたりが急に騒々しくなったのは、税米を輸送する人達だ。

閑かな農村の生活は、病氣持ちの体には薬以上の効能がある。晩秋の日暮れ時いい気分です歩いていたが、急に大通りや城門あたりが騒々しくなった。税米を輸送する人たちの一行だった。

⑪ 偶作 備中路上

城隍前月頻折雨 野觀今朝更禱晴 城隍 前月頻りに雨を折り、野觀に今朝更に晴を禱る。

本自農家無暇日 又聞村吏索糧征 本自り農家に暇日無し、又聞く村吏糧の征を索むるを。

〔黄葉夕陽村舎詩〕後編卷一

鎮守の社では前月頻りに雨を折り、今朝は野の高台で更に晴を禱るのが見える。もとより農家には暇な日は無く、村吏が又た綿の税を取り立てにくるという話だ。

先月は鎮守の社で雨乞いをし、今朝は野に出て晴を祈っている。農家では年中暇なしに働いているのに、村役人が又た綿の税を取りに来るといふ話だ。

⑨から⑩までの詩には、朝は早くから夜は遅くまで、休む暇もなく一生懸命に働く農民の姿が詠われている。政治を願う茶山の心が籠められた詩であるといえよう。

⑩ 江良路上 (一一)

千處耘歌四野風 夫須棋點一叢叢 千處の耘歌 四野の風、夫須棋點のごとく 一叢叢。
時清城市皆絲管 誰信歡聲出此中 時清くして 城市皆 絲と管、誰か信ぜん 歡聲 此の中より出づるを。

『黄葉夕陽村舍詩』後編卷七)

風にのつてあちこちから農作業の歌、菅笠が碁石のように一叢一叢。

世は穏やかで 城市ではどこも 管弦の音、歡樂の歌声はここから出ていると誰が思っていようか。

あちこちの畑から聞こえる農作業の歌。城下の賑わいはみなこれら農民の労苦のお蔭なのに。それを思う人がいるだろうか。茶山の農夫への思いやり、感謝の気持ち。

⑪ 夏日雜詩 十二首 (八)

早田争水四郊喧 處處松明路不昏 早田 水を争ひて 四郊喧し、處處に 松明ありて 路昏からず。
村婦夜深來慰勞 左懷孩乳右盤殮 村婦 夜深く 來りて 慰勞す、左には 孩乳を懷き 右には 盤殮。

『黄葉夕陽村舍詩』後編卷八)

日照り続きで水を争い、どこも騒がしい、路のあちこちに松明があり路は暗くない。

村婦がこの夜更けに慰勞にやってくる、左手に乳飲み子を抱き、右手には弁当をさげて。早で水争いが起きて騒がしく、夜も水の見張り。女房どのも乳飲み子を抱えて弁当運び。夕飯も一家揃っては食べられない。農家の人たちへの労いと感謝の気持ち。

⑭ 江村秋事 七首 (一)

柳葉無風帶露飛 隔江村落晚依微 柳葉 風無きに露を帯びて飛び、江を隔てて村落 晩れて依微たり。

扁舟載稻誰家婦 襁負孩兒自棹歸 扁舟 稻を載すは誰が家の婦か、孩兒を襁負して自ら棹さして歸る。

〔黄葉夕陽村舍詩〕遺稿卷四)

柳の葉が風もないのに露を帯びて散り、川向こうの村は日暮れに霞んで見える。

小舟に稲を載せて行くのはどこの家の婦か、乳飲み子を背負い、自ら棹さして帰ってゆく。

夕靄の中、刈り取った稲束を載せて帰って行く小舟。よく見ると棹を握っているのは乳飲み子を背負った農婦。村では皆忙しく働いている。

⑬から⑭も働く農民の姿が詠われた詩である。⑨「前村輸税還」⑩「喧然輸税人」⑪「又聞村吏索糧征」のように強い表現ではないが、これらの詩の底を流れているものは、働く農民の報われる世の中であって欲しいという茶山の願いである。

「農村の人々の生活を詠う詩」に取りあげた①から⑥までの詩は、忙しい農家の仕事ではあるが、どこか長閑な雰囲気がある。慌ただしく大変だった取り入れも終わり、秋の収穫物を神に供えて感謝を表す祭りは、農民にとつて最も報われる満足できるひと時だ。それが豊年の年であれば尚更である。⑤「赴鴨方途中口占」の転・結句「且喜今年秋熟遍、山村時過賣魚聲」(且つ喜ぶ今年秋熟の遍きを、山村時に過ぐ魚を賣る聲)には、満

ち足りた心安らかな平和が感じられる。しかし、農民の生活はこんな穏やかな時ばかりではない。農民の生活を詠いながら、ことばの底に政道への批判が潜められている詩がある。⑦から⑩までの詩はその色合いが特に濃い。⑪から⑭の詩には、農村らしいほのぼのとした情緒があるが、詩句の底を流れる何か厳しいものが感じられる。それは、農民の大変な労働に対する為政者の労いを望む茶山の声である。

(2) 茶山の登場する詩

① 山行書所見 (二)

腥風吹霧下層巒 狼跡重重路不乾 腥風霧を吹いて層巒を下る、狼跡 重重 路 乾かず。
 近有羣兇刃新婦 輿丁遙指一莊看 近ごろ 羣兇の 新婦を 刃する有り、輿丁 遙か 一莊を 指して看す。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷七

殺伐とした風が霧を吹いて多くの山々を下ってくる、狼の足跡が重なり合って路は乾いていない。

「最近 多くの悪党がいて 若い婦人を傷つけた」と、籠かきが 遙か向こうの村里を指した。

農村における忌まわしい事件。こういう物騒なこともあるのだ。籠かきの言葉が入れられて現実感がある。

② 秋日雜咏 (十一)

隣僧乞我小園芳 蕃菊胡枝秋海棠 隣僧 我に乞ふ 小園の芳、蕃菊 胡枝 秋海棠。
 忽挈一籃來作報 帶泥松草滿厨香 忽ち 一籃を挈げ來りて 報を作す、泥を帶ぶる 松草 滿厨香し。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷七

隣の坊さんが 私の小さな庭の花を 求めて来た、蕃菊 萩 秋海棠である。

間もなく竹籠を提げて お返しにやってきました、泥をつけたままの松茸が 台所中に よい香を放っている。

隣の坊さんに庭に咲いた草花をあげたら、採れたての芳しい松茸をお返しにくれた。和やかな農村の風景詩。

③ 夏日雜詩 十二首 (六)

村翁擔水踏崖登 種稗田高山半層

村翁 水を擔ひ崖を踏みて登る、稗を種多て田は高く山の半層。

自道移來經久旱 三回灌遍例能升

自ら道へ移り來りて久しき旱を經るも、三回灌ぐこと遍くすれば

例能能く升ると

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷八)

村の爺さんが水を擔い崖を踏みしめて登る、稗を種えた田は高く山の中腹にある。

自ら道う「ここに移つてから長い旱があつたが、三回万遍なく水をやれば例能く稔るよ」と。

村の爺さんの稗作りの談話。相当に厳しい労働だが、苦勞を苦勞ともせず、農事に精を出している姿を詠う。

④ 夏日即事 (三)

郊雲四散夜澄清 頭上銀河似有聲

郊雲 四散し夜澄清、頭上の銀河聲有るに似たり。

隣稚貪涼猶未寢 逐來吟杖問星名

隣りの稚涼を貪り猶未だ寢ねず、吟杖を逐ひ來りて星の名を問ふ。

〔黄葉夕陽村舍詩〕遺稿卷六)

野を被っていた雲は四散してよく澄んだ夜、頭上の銀河は流れの音が聞こえるようだ。

隣の稚が涼み足りずにまだ寝ようとせず、散歩について来て星の名を問ねる。

空に雲は消えて銀河が音を立てて流れているような夜、付いてきた隣の家の子が星の名を尋ねる。茶山は星の名を一つ一つ教えている。茶山と子どもの会話が微笑ましい。

⑤ 即事

山童持紙道書詩 老嬾揮毫人所知

山童 紙を持ちて詩を書けと道ふ、老いて揮毫に嫻きは人の知る所。

今速應求吾有意 明朝願拗早梅來

今速やかに求めに應ずるは吾に意有ればなり、明朝願はくは早梅を

拗りて來れと。

『黄葉夕陽村舍詩』遺稿卷七

山家の子が紙を持って来て「詩を書いてほしい」と言う、老いて筆を執るのが億劫なのは人も知る所だ。早速求めに応じたのは私に魂胆があったのだ、明朝早咲きの梅を折ってきて欲しいとの頼みがあったから。

茶山の詩には茶山自身が登場する詩がかなりある。七言絶句の場合は僅か二十八字だから、会話体の形は取らないが、一方の言葉だけから相手の返した言葉が想像され、その場の雰囲気がかもし出される。

茶山の「農村詩」の内容は、単に山川草木のたたずまいが詠まれているだけでなく、その中に織りなされる人々の生活がある。自分の身近なものを題材とし、誰もが目にするような至極ありふれた風景が詠われているが、なお新鮮さを感じさせる。

農村詩に込められた茶山の思いは、自然の懐に抱かれて自然の恵みを戴きながら、ささやかでも農民が幸せに暮らせることである。「農村の人々の生活を詠う詩」ほどの詩にも、一生懸命に働く農夫（婦）を見つめる茶山の温かい眼差しが感じられる。②「途中」の村姑（村娘）は綿畑で働く家人の為に弁当を提げて行く。「小尫導人行、細艸微風路」（小尫人を導きて行く、細艸微風路）「小尫」は小さなむく犬のことであるが飼い犬であろう。畦道を行くその犬の後ろから村娘が行く。長閑な平和な農村の風景詩である。それは、茶山の願いとする平和な生活の一場面であろう。④「村居」の山家のかみさんも綿畑で働く家人の為に弁当を提げて行く。出がけに、ふと芽を出したばかりの筍を見つけて、他人に盗られぬよう隣の子どもに見張りを頼んだというのである。実に細かい。しかし、そんな些細なところに農村ならではの暮らしぶりが表現されていて微笑ましい。⑩「夏日雜詩」は、日照りが続き田圃の水が無くなるので、夜こっそりと我が田に水を引く水泥棒が横行する。その監視をする夫に、夕飯を届ける農婦の健気な様子を詠っている。⑫「江村秋事」も、乳飲み子を背負って、稲束を積んだ舟を自ら

漕いで帰って行く農婦が詠われている。どの詩にも大変な労働が詠われているのに、ほのぼのとしたあたたかさを感じさせる。

茶山の「農村詩」から感じられるのは、郷里の仲間である農民に注ぐ茶山の温かい眼差しと、いたち「労りの思いであるが、その裏には重い負担を農民に強いている政治への批判が存在している（⑦⑧の詩など）。茶山は農村の实事を有りのままに述べ、その実際の様子を写して、農民たちの声にならない声を詩を通して表現しようとしている。しかしその表現と内容は深刻ぶることなく、どこか長閑で穏やかだ。同じ土地に生まれ育ってきた者同士の繋がりが、農民の一人一人に寄せる茶山の心の温かさによるものである。」「農村詩」は農民への応援歌であるから生活の苦しさは詠われない。しかしその「ちか「辛い」と「む「励まし」の奥に、以前と変わらない政治批判の心が流れているようだ。茶山の農村詩の持ち味はそのあたりにあると言えよう。

二、茶山「農村詩」の表現

茶山の「農村詩」の特徴を「構図・色彩」、「音声・動き」の表現により考察する。

1、構図・色彩

茶山の農村風景詩は画のようにしつかりした構図があり色彩がある。作品例を挙げながら考察する。

① 冬日雑詩十首（一）

晩稻登場四野清 徒杠新架好吟行

晩稻場に登せて 四野清く、徒杠 新たに架けて 吟行に好し。

雨過午塢狂花濕 竹蘸寒漪立鷺明
雨は午塢を過ぎて 狂花濕ひ、竹は寒漪に蘸されて 立鷺 明らかかなり。

〔場〕穀物を脱穀する広場。

〔黄葉夕陽村舍詩〕前編卷三)

晚稻の稲穂も取り入れ場に積んで、見渡す限りさっぱりした(全景)。徒歩で渡る小橋も新しく架けられ 吟行には好都合。通り雨が昼の岡の辺の季節外れの花を湿らすと(近景・色彩)、竹は撓り川の水面に頭を浸けて寒々と小波に浸され、その前に降り立った白鷺の立ち姿がきりつと鮮やかだ(中間の景・色彩)。

構図的にも「画」になり、竹の緑・水面の水色・鷺の白との色彩が晩秋の景色らしい感覚の水墨画の世界。

② 高屋途中

山雲半駁漏斜陽

塚樹蕭條十月霜

山雲 半駁 斜陽を漏らす、塚樹 蕭條として 十月の霜。

野店留人勸蕎麵

一籃銀縷出甌香

野店 人を留めて 蕎麵を勸む、一籃の銀縷 甌を出でて 香し。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷二)

雲が、途切れ途切れにかかった山に夕陽が傾いて、山にかかった雲の半まだらなところから夕陽が洩れ 山にまだらの模様ができている(色彩)。神辺宿から次の宿場、矢掛に向かう途中「御領の一里塚」と言われた辺りの晩秋の風景である。一里塚の樹は十月の霜に枯れて、もの寂しい風情(色彩)。道端の野店では人を呼び止めて蕎麵を勧めている。視線は夕方の空から西の山に移り、更に近くの野店に移り、蒸籠から出された一籠の蕎麵へと移動する。蕎麵が一瞬 銀色に光った(最近景・色彩)。奥行きのある風景画のような詩。

③ 山行書所見(一)

怒隼盤風嶺日高

崩岨約澗石湍號

怒隼 風に盤りて 嶺日 高し、崩岨 澗を約めて 石湍 號く。

山陽隨在皆人處

老柏梢頭出枯樟

山陽 隨ひて在るは皆 人處、老柏 梢頭に 枯樟を出す。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷七)

大空を怒り狂ったように猛々しく飛ぶ隼、嶺に日はまだ高い。その下は荒々しく崩れた崖、流れを集めてごうごうと叫ぶように流れる溪川（遠景）、この起句・承句は水墨画で言えば、渴筆でごつごつと描かれた構図である。転句・結句では山の南側に沿うて点在する人家。柏の古木の梢の先には井戸のはねつるべが見える（中間から近景）、と潤筆で描かれるような山村の閑かな暮らしのたたずまいが窺え、起句・承句とは全く対照的な構図。

④ 秋日雑咏（二）

矮松疎篠兩三家 芋圃蕃畦路幾叉

矮松 疎篠 兩三家、芋圃 蕃畦 路は幾又ぞ。

稚子歸來有矜色 數莖紫葺貫茅花

稚子 歸り來りて 矜る色有り、數莖の紫葺 茅花に貫く。

『黄葉夕陽村舍詩』後編卷七

小さな松や、篠竹の生えた野原の中に二・三軒の農家が有る（遠景）。芋畑の濃い緑色の葉、薄紅の茎の先に白い花をつけた蕎麦畠（新鮮な色彩）。その中を通る幾筋もの畦道（中間の景）。その一本の畦道を通って子どもが帰って来た。なんだか誇らしそうに鼻高々と（近景）。よく見ると、茅の穂に数本の初芽を挿したものをぶら下げた。動きもあつて、農村の風景映画の一齣ひとこまを見るように場面が展開する。

⑤ 秋日雜咏（五）

午暖叢間尚露華 殘黄耄紫相交加

午 暖かく 叢間 尚 露の華あり、殘黄 耄紫 相交はる。

螳螂熟視人來立 徐自蘆花移蓼花

螳螂 人の來りて立つを熟視し、徐に 蘆の花より 蓼の花に移る。

『黄葉夕陽村舍詩』後編卷七

秋もたけなわを少々過ぎた頃の野原全体（全景）。視線はだんだん近くに移る。萎み崩れかけた黄色（月見草か女郎花だろうか）や紫色（桔梗か竜胆か）の秋の草花の中に（色彩）、一際背の高い白い蘆の花や、桃色の蓼の花が隣り合って生えている（色彩）。蘆の花に止まっていた顔中が目玉のような螳螂がこちらの様子を窺いながら、や

がて徐にじわーっと蓼の花に移って行った。起句・承句を背景にして転句・結句の螳螂の動きが前面に大きく描かれる。茶山は螳螂の身になって、その思いを読み取り、動きを表現している。

⑥ 秋日雜咏（九）

黄雲百頃擁人家 暮澗涼生十里沙

黄雲 百頃 人家を擁し、暮澗涼は生ず 十里の沙。

疑見山郷先降雪 滿村晴照曝植花

疑ひ見る 山郷 先づ雪を降らすかと、滿村の晴照 植花を曝す。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷七）

見渡す限り黄色い雲かと疑われるほどの実りの稲田は（全景・色彩）、人家を抱き込んでいるようだ。暮れ方の溪流は涼しくなり長々と白い砂浜が続く（全景・色彩）。山里にはもう雪が降ったのかと驚いてよく見ると、村中の家々では晴れた日に白い綿の花を晒しているのだ。黄色い雲かと思われるほどの実りの稲田、降雪かと思ふほど白い綿の花、それらの上に燦々と降り注ぐ夕陽の輝き（色彩）。黄と白と金色の色彩の対照は格調高い。

⑦ 夏日雜詩 十二首（九）

涼棚待月向溪濱

恰值前峯上半輪

涼棚 月を待ちて

溪濱に向かへば、恰も前峯 半輪を上すに値ふ。

童子爲儂添勝槩

聚沙激水作金鱗

童子 儂が爲に

勝槩を添ふ、沙を聚め 水を激して 金鱗を作す。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷八）

月の出を待っていたが、そろそろ昇るだろうと溪流の方へ降りて行くと、ちょうど前峰に半月が昇って来た（上空）。下の溪流を見て茶山は美しい光景に目を見張った（地上）。昼間に子どもたちが水遊びをして、砂を集め流れを堰き止めて小さなダムのようなものを作って遊んだらしい。その一部が壊れて水が勢いよく迸り出ている。それが溪流とぶつかる所で細波が立って、そこに月の光が映り、まるで金の鱗のようだったのである（色彩）。暗い夜の世界、しかし、画になる構図があり色彩がある。

2、音声・動き

茶山の「風景詩」表現の特徴は、絵画のように整った「構成」があり、美しく調和のとれた「色彩」があることだということを確認したが、茶山は「構成・色彩」の他に、更に「音声」と「動き」を詩に加えようとしていた。「音声」と「動き」は画には表現しにくい要素であるが、詩には表現できる。次に挙げる詩はその例である。

① 即事

竹露沾衣夜欲深 隔墙石澗静無音 竹露 衣を沾して夜は深まらんと欲し、墙を隔てて石澗静かにして音も無し。
 女兒譟撲流螢去 復到門前楊柳陰 女兒 噪ぎ撲ちて 流螢は去り、復た到る 門前楊柳の陰。

〔黄葉夕陽村舍詩〕前編卷四

「音声」については、夜の静寂、その中をやってきた女兒たち。螢を追いかける女兒たちの騒ぎ声。やがて女兒たちは去って行き、静けさが還ってくる。「動き」の方は、女兒たちが螢を追って走り回る様子、逃げる螢と、女兒たちが去って柳の陰に帰って来る螢。夜の闇の中を流れる螢の青白い光（色彩）を背景に、場面は「音」と「動き」によって静から動、また動から静へと移ってゆく。

② 病中作二首（二）

雨烟纒斂野川風 細草成花一路紅 雨烟は 纒かに斂まりて 野に川風あり、細草花を成き 一路紅なり。
 沙竹堤邊水清淺 女郎掲涉夕陽中 沙竹堤邊 水は清淺、女郎 掲げ渉る 夕陽の中。

〔黄葉夕陽村舍詩〕遺稿卷三

雨上がりの野中の道に咲き乱れる「細い草」の紅い花（色彩）、堤の向こうは夕焼けに映えて流れる澄んだ川（色

彩)。女の子が裾を掲げて涉って行く。「音声」については、川の流れの音、その川を渡っていく女の子の立てる水の音が聞こえる。「動き」は、川風に揺れる「細草」の花と、川を渡ってゆく女の子。「細草」の花の「紅」と「夕陽」の輝きに溢れた野原に(色彩)、音と動きが加わってその場の様子が見事に再現されている。

③ 村居 二首 (二)

陂塘開閘水哀號 滿巷斜陽麥笏高

陂塘 閘を開き 水は哀號す、滿巷の斜陽 麥笏 高し。

底事羣童狂走去 數聲喇叭賣鬆糕

底事ぞ 羣童の 狂走して去く、數聲の喇叭 鬆糕を賣る。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷二)

堤の水門が開かれ 水は激しく流れている。ここには「音声と動き」がある。村いっぱいに斜陽が射して 麦の櫃が高い。赤い夕陽に映えて金色に輝く麦。そんな色彩も今、眼前にしているようだ。何事だろう 麦の櫃掛けを手伝っていた子どもたちが一斉に駆けていった。元氣いっぱいの子どももの「動き」。団子売りのラッパが響く(音声)。団子売りが来たのだ。「音」「動き」「色彩」、農村風景が思い描かれる「構図」全ての要素が揃った画といえる。

④ 即事

溪村無雨二旬餘 石瀨沙灘水涸初

溪村 雨無きこと 二旬餘り、石瀨 沙灘 水は涸れ初めたり。

滿巷蟬聲槐影午 山童浴戸賣香魚

滿巷の蟬の聲 槐影の午、山童 戸に浴ひて 香魚を賣る。

〔黄葉夕陽村舍詩〕前編卷三)

溪ぞいの村は、もう二旬余りも雨が降らない。石や沙の目立つ瀨や灘の水は涸れ初めてせせらぎの音はない。焼け付くような暑さ、野良で働く人影もない。溢れる「蟬の声」が一層暑さをかき立てる。槐の影も深い昼さがり、山童が戸口から戸口へと香魚を売って行く(音声と動き)。からから照りの村の昼下がり、蟬の声だけが聞こえる中を、山童が家ごとに鮎を売って歩いて行く。

⑤ 夏日雜詩 十二首 (十一)

滂沱雨勢逐人行 竢聽荷池亂點鳴
 俄頃奔雲洩殘日 稻田仍有蹈車聲

滂沱たる 雨勢 人を逐ひて行く、竢ちて聽く 荷池、亂點の鳴るを。
 俄頃に 奔る雲 殘日を洩らす、稻田 仍ほ 蹈車の聲有り。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷八)

「音」は「激しく降る俄雨」・「蓮の葉をうつ雨粒」・「蹈車」で起・承・結句の三句に用いられている。起・承句で「激しい驟雨の音」が詠われたことよって、結句の水車を踏む「ゆったり、のんびりした音」は、俄雨が通り過ぎた後の平和な農村の風情をいっそう際立たせる。「動き」は急に降り出した俄雨の雨足、「人を逐いかけるように降る」のである。「奔る雲」はいつとき激しく降った夕立が通り過ぎると、何も無かったかのように、急いで去って行く雲である「動き」。「蹈車の聲」は、水車の踏み板を踏む農夫がいることを想像させる(踏み板を踏む農夫の「動き」と「蹈車」の回る「音」と「動き」)。

⑥ 即事

垂楊交影掩前楹 下有鳴渠徹底清
 童子倦來閑洗硯 奔流觸手別成聲

垂楊 影を交へて 前楹を掩ひ、下に鳴渠の 徹底して 清める有り。
 童子 倦み來りて 閑かに硯を洗へば、奔流 手に觸れて 別に聲を成す。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷四)

手習いに飽きた童子が硯を洗いに出て(動き)、底が見えるほど綺麗に澄んだ渠で閑かに硯を洗っている(動き)。すると、流れの音がちよつと変わった(音)。今まで何にも邪魔されずに流れてきた水は、子どもの手に触れて流れの調子がちよつと変わったのだ。微妙な音の変化がうまくとらえられ、硯を洗いながら水を弄んでいるであろう子どもの様子(動き)が目に見えるようだ。

3、会話

茶山の詩には会話体が用いられたものもある。「会話」も「音声」のなかに含まれるが、ここでは独立させた。次に挙げる詩は他の「子どもを詠う詩」・「農村詩」(2) 茶山の登場する詩・「政治批判詩」等のところで扱っているので、説明は簡単にする。

① 螢七首 (五)

連夜收來滿練囊 柳陰懸照納涼牀
連夜收め來りて練囊に滿つ、柳陰懸けて照らす納涼の牀。

童言螢火亦眞火 搖扇將然加手陽 童は言ふ螢火も亦眞火、扇を搖るがせば將に然えんとし手を加ふれば

陽あたたかしと。

〔『黄葉夕陽村舍詩』後編卷七〕

捕り溜めた螢を螢囊に入れ、それを柳の枝に掛けて、その下に設えた納涼台の灯りとし、大人も子どもも集まって夕涼みをする。ひとりの童が「螢の火も本当の火だよ。団扇であおぐと燃えそうになり、手を翳すとあたたか
いよ」と言った。

② 舊作

終日林蟬惱殺人 更愁喧譟及比隣 終日林蟬 人を惱殺す、更に愁ふ喧譟 比隣に及ぶを。

隣童忽出一奇計 捕得螳螂栖樹身 隣童忽ち 一奇計を出す、螳螂を捕らへ得て 樹身に栖ましめんと。

〔『黄葉夕陽村舍詩』後編卷八〕

林の蟬の鳴き声が終日喧しくて悩みの種だ。隣の童が一つの奇抜な案を出した。「螳螂を捕まえて樹の幹に栖ませよう」と。螳螂があのだ鈍だのような前足で蟬をやっつけてくれるに違いないと思ったのだ。

③ 夏日雜詩 十二首 (六)

村翁擔水踏畦登 種稗田高山半層
自道移來經久旱 三回灌遍例能升

村翁 水を擔になふて畦がけを踏みて登る、稗ひらを種ううる 田は高く 山の半層。
自道みち移うつり來きて久ひさしき旱ひでりを經へるも、三回灌そそぐこと遍あまくすれば

例おおもね能よく升みると。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷八)

村の爺さんが水桶を担いで、山の中腹の稗田まで水運ぶ。爺さんは「長く日照りが続いても、まあ三回も万遍なく灌水すれば だいたいよく稔るよ」と淡々と話す。

④ 夏日雜詩 十二首 (十)

村童日日挾書來 講席偏愁暑若煨
歸路逢牛臥涼處 直將牧豎疊騎歸

村童 日日 書を挾ひんで來る、講席 偏ひとへに愁なふ 暑あつくして煨わするが若し。
歸路 牛の涼處ひやに臥ふするに逢あひて、直ただちに牧豎ぼくじやうと疊たり騎まして歸る。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷八)

夏の廉塾の講席は火で炙あぶるような暑さだ。講義が終わるや否や、教室から一目散に飛び出して帰途に着く。途中、涼しい処に牛が臥ふせていた。傍に牛飼いの子がいる。村の童こと牛飼いの子は、牛に二人乗りして帰っていった。やり取りの言葉は無いが、子どもらしい駆け引きをした会話が想像できる。

⑤ 夏日即事 (三)

郊雲四散夜澄清 頭上銀河似有聲
隣稚貪涼猶未寝 逐來吟杖問星名

郊雲 四散し 夜 澄清、頭上の銀河 聲こゑ有るに似たり。
隣となの稚こ 涼ひやを貪ねみ 猶なほ未まだ寝ねねず、吟杖ぎんぢやうを逐おひ來きり 星ほしの名を問とふ。

〔黄葉夕陽村舍詩〕遺稿卷六)

夜空はよく澄んで、頭上の銀河は流れの音が聞こえるようだ。隣の稚こはまだ寝ようとせず、散步について来て星の名を問とねる。具体的な会話そのものは出ていないが、隣の稚こに星の名を一つ一つ教えている茶山の姿が窺うかがえる。

⑥ 即事

走雨過山彩霞生

殘雲洩日翠秧明

走雨 山を過ぎて

彩霞さいが生じ、

殘雲 日を洩らして

翠秧さいやう明らかなり。

欲知詩畫無佗趣

出戸呼童看夕晴

詩畫に佗たし趣しゆ無きを知らしめんと欲、戸こを出でて

童を呼び夕晴れを看る。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷七)

俄雨が通り過ぎて美しい虹が立ち、若い草木の翠が鮮明だ。こんな景色は詩や画にも表現できないほどの美しさだ、戸外に出て子どもを呼び、一緒に夕晴れを看た。「呼童看夕晴」で雨上がりの美しい景色の感動を話し合いながら、夕晴れを看ている茶山と塾童の姿が目に見えぬ。

③ 三月盡與森渡二童閑行分得晴字

三月盡き森渡二童と閑行す。分かちて晴字を得たり

此日風光棄我行

百花無跡鳥空鳴

此の日風光 我を棄てて行き、百花跡無く鳥空しく鳴く。

暄沙芳草村橋路

攜歩詩童看晚晴

暄沙 芳草 村橋の路、詩童と攜歩して 晚晴を看る。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷八)

春三月も終わろうとしているある一日、花は散り鳥は空しく鳴いている。過ぎゆく春を惜しもうと塾童の森岡綱太と渡邊鐵藏の二人を連れて散策し、夕晴れの景色を眺めた。⑥の詩と同じく会話が直接描かれてはいないが「攜歩詩童」で、「惜春の気持ち」等話をしながら散策していることが窺われる。

①から③までは、詩句に実際の言葉が用いられているが、④から⑦の詩には直接の言葉はない。しかし、「会話」がなされていることは容易に想像できる。

茶山「農村詩」の表現には、「画」のような「構図」があり「色彩」がある。又「画」には表せない「音」や「動き」があるのが特徴である。一首の詩にそれら全てが備わったものもある。例えば、1「構図・色彩」の①「村居」は色彩も印象的である。高々と櫓に架けられた表の束が、真っ赤な夕陽を浴びて金色に輝いている。畑では

夕陽を全身に浴びて、茜色に染まった子どもたちが狂ったように走る。「構図」としても「画」になる。又、水門から迸り出る「哀號」にも似た「水の音」、団子売りの「喇叭の音」があり、「羣童狂走去」（羣童狂走し去る）には、元氣いっぱいの子どもたちの「動き」がある。

⑤「秋日雜詠」（五）は、秋もたげなわ關を過ぎた頃の野原を「全景」として、色彩的にはすが關れた黄色や紫色の秋の草花や、蘆の白い花・蓼の桃色の花を配して、「近景」に枯れ色の一匹の螻螂を登場させる。構図としても整つており、色彩も豊富で絵画としては完成品である。その上に「動き」と「音」が加わる。顔中が目玉のような螻螂が、こちらの様子を窺いながらやがて「徐にじわーつと蘆の花から蓼の花に移って行く」静かな「動き」、「じわーつと」だからほとんど「音」にならない、しかし確かに「音」がある。徹底的に確實に對象を把握して詠まれた詩だといえる。

2、「音・動き」の①「即事」は「構図」としては、えだむ槐の樹木の真下だけに黒い陰が出来ているような暑い真夏の午下がりに、この暑さでは働く氣力も失せて村人は昼寝でもしているのだろう。死んだように静まりかえった山村に、家が何軒かぼつりぼつりとあるような風景が思い描かれる。素朴な水墨画か水彩画のような鄙びた風情。動くものは香魚を売って行く山家の子の姿。又、「画」には表せない「滿巷の蟬の聲」（村中に響き渡るような蟬の鳴き声）と「香魚を賣る」山童の聲が強く印象付けられる。

茶山の「画」の「構図・色彩」の技法を詩に応用し、更に「画」には表せない「音」や「動き」を加えて、「詩」と「画」を合わせたような作品に仕上げようとしたのかも知れない。

茶山の「農村詩」には「農村の風景」を詠うものと、「農村の生活」を詠うものがある。どちらにも実景や実態に対する茶山の思いや感情が、自分の言葉で伸びやかに詠われている。それらの詩は人々をして「画まのようだ」

と言わしめた。それは茶山の詩から画のような確かな「構図」や「色彩」が思い描かれるからであろう。しかし、茶山の「農村詩」は単なる静止した画ではない。更に「音声」（会話も含む）と「動き」も加わって詩に奥行きができ、句と句の間を流れる情緒が感じられる。それが今、自分の眼前にあるかのような臨場感を読者に抱かせるのである。

また、茶山の「農村詩」には、一生懸命に健気に働く農民の姿が詠われた詩もある。

そういった「農民の暮らしを詠う詩」には茶山の思いが籠められている。その「思い」は単なる感想ではなく、一生懸命に働く農民の苦勞が報われる政治を願う、茶山の心からの訴えである。それを訴えずにはおれない当時の政治に対する思いである。

茶山は農村に生まれ、農家に育ち、京都に遊学した時期以外は、生まれ故郷で一生を送った。いわば農民は茶山の仲間なのである。だから農民の喜びも、楽しみも、苦しみも、悩みも他人事ではない、自分のこととして分かるのである。

『黄葉夕陽村舍詩』前編卷一の「寄肥後敷先生」（其二）で、茶山は次のように詠っている。

我本農家子

生長事耦耕

我は本もと農家の子、生長して耦耕ぐうかうを事とす。

〔耦耕〕ふたりが並んで耕す。

一朝改舊業

追師學聖經

一朝舊業を改め、師を追ひて聖經せいけいを學ぶ。

「自分は今もともと農家の出身である。生長して耕作を仕事としていたが、一朝旧業を改め、師について聖經を学ぶことにした」と。それは、農民のためになる学問をしたいと志したからであった。

茶山の「農村詩」は、農村の風景を見たまま、ありのままに詠っており、農民の立場に立って、農民の側から世の中を見て詠ったものであるから「田園詩」と言わないで、敢えて「農村詩」と称することとした。同じく農村にあって、農村風景を詠った中国の陶淵明や、范成大の所謂「田園詩」とは、大分趣を異にしていると考える

からである。

【注】

茶山には絵心があつた。茶山が京都遊学をした早い時期に、当時すでに日本画家として広く知られていた池大雅を知り、屢々大雅を訪ねて「天門山」「石竹図」「蘭石図」などの画を描いて貰つてゐる。茶山自身が描いた水墨画も僅かではあるが残されている。茶山の交友範囲は広いが、当時を代表する多くの画人たちとも親しく交わり、画賛を依頼されることも屢々であつた。『黄葉夕陽村舎詩』二四—三首のうち、画に題した詩は六分の一を占めるほどである。茶山の交わつた主だつた画家を挙げると、田能村竹田・大原呑響・蠣崎波響・白雲上人・大野文泉・谷文晁・木芙蓉・平田玉蘊・篠崎小竹・浦上玉堂・浦上春琴・黒田綾山・岡本豊彦・岸駒・木村兼霞堂・梁川星巖等である。これほど多くの画家と、しかも親しく交友を結んでゐると、自ら画に対する鑑識眼も養われるであらう。結局は画の真髓も詩の真髓も同じなのである。眼の付けどころ、表現の仕方は、詩も画も同じである。「茶山の詩は画になる」というのは以上のような理由に因るものであらう。

三、附論

茶山の「農村詩」の特色はどういうものであらうか。日本には、また江戸時代には、農村に在つて其の自然と其の中で生活する農民の姿を詠つた作品はないようなので比較のしようもない。中国には晋の陶淵明や、宋の范成大はんせいだいに農村での生活を詠つた「田園詩」があるが、茶山の「農村詩」とは趣が異なつてゐる。

ここで、陶淵明と范成大的「田園詩」の例を挙げ、茶山の「農村詩」と比較する。

東晉末から宋の初めにかけての人である陶淵明は、窮屈な官吏生活が身に染まず、四十一歳の時に彭澤縣の令を辞めて郷里である尋陽の柴桑に帰り、自然の中で暮らした。そこで詠まれる詩は自ら田園詩が多くなる。その詩は人々から高く評価され田園詩人といえ、陶淵明が第一人者として挙げられるほどである。

先ず陶淵明の「飲酒」（其五）、「歸園田居」（其三）、「歸園田居」（其四）について考察する。

飲酒（其五）

結廬在人境 而無車馬喧 廬を結びて人境に在り、而も車馬の喧しき無し。

問君何能爾 心遠地自偏 君に問ふ何ぞ能く爾るや、心遠ければ地は自ら偏る。

採菊東籬下 悠然見南山 菊を採る 東籬の下、悠然 南山 見ゆ。

山氣日夕佳 飛鳥相與還 山氣 日の夕べに佳く、飛鳥 相與に還る。

此中有眞意 欲辦已忘言 此の中に眞の意有り、辦せんと欲すれば已に言を忘る。

人里の中に廬を結んでいるが、訪れてくる車馬の喧しきはない。

どうしてそんなことができるのかね、心に俗念が無ければどこにいても同じだよ。

東の籬で菊を採っていると、悠然と南山が目に入る。

山の気配は夕方にひときわ佳く、鳥たちが連れだつて畦に還っていく。

この中にこそ自然の道理が感じられるが、それを言おうとすれば説明の言葉が出てこない。

陶淵明は官吏生活をやめて田園に庵を結び、何ものにも束縛されない自由な生活に入った。そこは人里ではあるが、訪れてくる車馬の喧しきはなく、心の安らぐ地である。秋になれば垣根の下には菊が咲き、夕方になれば鳥は畦に帰って行く。官吏生活のような束縛はなく、ここには自然の道理に適った生活がある。陶淵明は「田園」にあつて、今自分が目の前にしている「田舎の風景」を詠おうとしているのではない。淵明が詠うのは、「このよ

うな田園の中に於てこそ自然の道理が感じられる。しかし、それを説明しようとすれば、その言葉が出てこない」といった、時に触れ、折りに感じた田園生活における自分の思いである。

歸園田居（其三）

種豆南山下 草盛豆苗稀 豆を種う 南山の下、草は盛んにして 豆の苗は稀なり。

晨興理荒穢 帶月荷鋤歸 晨に興きて 荒穢を理め、月を帯び 鋤を荷ひて歸る。

道狹草木長 夕露霑我衣 道狭くして 草木は長び、夕露 我が衣を霑らす。

衣露不足惜 但使願無違 衣の霑るるは 惜しむに足らず、但だ 願ひをして違ふこと無からしめよ。

南山の麓に 豆を植えたが、草が盛んに茂つて 豆の苗はほんのちよつぱり。

早朝に起きて 雑草を片づけ、月の光を浴びながら 鋤を担いで帰る。

道は狭くて 草木は伸び放題、夜露は 着物を濡らす。

着物が 濡れるのは惜しくはない、ただ 願ひだけは 違えてくれるなよ。

田園に隠棲した淵明は、農耕生活に入った。「朝は早くから夕方は月をいただくまで働いて、鋤を担いで帰る」という生活であるが、「こんな努力をしなければ暮らしていけない」といった深刻な必死の思いは伝わってこない。

淵明が田園に親しむのは、自分の意に染まない窮屈な官吏生活に嫌気がさして、自然の中に身を置くことに安らぎを求めていることであり、この自然の中にこそ、人間としての真の生き方があるという思いがあるからだ。

歸園田居（其四）

久去山澤游 浪莽林野娛 久去りし 山澤の遊び、浪莽たり 林野の娛しみ。

試攜子姪輩 披榛步荒墟 試みに 子姪の輩を攜へ、榛を披きて 荒墟を歩む。

徘徊丘隴間 依依昔人居 徘徊す 丘隴の間、依依たり 昔人の居。

井竈有遺處 桑竹殘朽株

井竈遺れる處有り、桑竹朽ちたる株を残す。

借問採薪者 此人皆焉如

借問す薪を採る者に、此の人皆焉くに如ける。

薪者向我言 死没無復餘

薪者我に向かひて言ふ、死没して復た餘れるもの無しと。

一世異朝市 此語真不虛

一世朝市を異にす、此の語真に虚りならず。

人生似幻化 終當歸空無

人生幻化に似て、終には當に空無に歸すべし。

久しぶりの山や沢の散策、果てしなく広がった林や野は新鮮で限りないよろこび。

試みに子どもや甥たちを引き連れ、榛などの灌木を押し分け雑草の生い茂る古い村里を歩く。

ぶらぶらと小高い墓地の間などを歩き回る、昔の人の住まいの跡らしい処に出くわす。

井戸とへつついの名残の処がある、桑畑や竹藪は朽ちていたが根株は残っている。

通りがかりの樵にちよつと尋ねてみた、「此処の人は皆何処へ行ったのですか」と。

樵は私に向かって言った、「死んでしまつて残っている人はない」と。

朝と呼ばれ市と呼ばれて賑やかだった所も一代で替わつてしまふと言うが、このことばは真に偽りではない。

人生は幻に似て、終には真に一切空無に帰してしまうのだ。

田園生活の一日を野山の散策に過ごした淵明は、歩き回っているうちに、とある廃墟に出た。嘗ては、人が平和な営みをしていたであろうと感じさせる痕跡が残っていた。果てしなく広がった新鮮な林や野、その中で繰り広げられる人の世の無常に、思いを致した一日であった。この詩は野や林や沢のたたずまいを詠うのではない。そこにおいて感じた淵明の思い「人生似幻化、終當歸空無」（人生幻化に似て、終には當に空無に歸すべし）を詠うことが中心である。

このように見てくると、陶淵明の田園詩は、ただ単に田園風景のみを詠ったものではない。その風景にこと寄

せて、必ず自分の思いが詠い込まれている。そこに働く農夫や風景が主となるのではなく、自分を詠っているのである。真理に沿った生き方、道理に適った生き方、それは農耕生活の中にこそあると淵明は言う。淵明は朝は早くから起きて野良に出る。畑を耕し、雑草を抜き、それでも植えた豆の苗より草の方がよく育つ。愚痴をこぼしながらも淵明は、そこにこそ人間としての自然の暮らしがあるという。

次に南宋呉興の范成大の「田園詩」を取り上げる。

范成大は家は貧しかったが進士に及第する。国信使に充てられ金国に使いして、国書を進め節を全うして帰り、中書舎人となり、参知政事に抜擢された。晩年は石湖に隠居して石湖居士と号した。次に挙げる「四時田園雜興」は、石湖に隠棲中の作で、春日・晩春・夏日・秋日・冬日の五つの季節を、それぞれ十二首ずつ詠った合計六十首の大作である。その中から次の四首についてみる。

①「春日田園雜興」より

土膏欲動雨頻催 萬草千花一餉開 土膏 動かんと欲して 雨頻りに催す、萬草千花一餉に開く。

舍後荒畦猶綠秀 隣家鞭筍過牆來 舍後の荒畦猶綠秀づ、隣家の鞭筍牆を過えて來る。

土膏が動こうとしており 春雨がしきりに降る、やがて萬もの草千もの花が開いた。

邸の裏の荒れた畑でも 緑の草が伸びており、隣家の筍の根が垣根を越えて延びてきた。

「一雨毎に春らしさを増す頃、沢山の草が芽吹き、多くの花が一気に開いた。隣の家の筍が垣根を越して我が家の庭に生えてきた。」といった春の田園の風景詩である。

②「夏日田園雜興」より

晝出耘田夜績麻 村莊兒女各當家 晝は出でて田に耘り 夜は麻を績ぐ、村莊の兒女は 各の家に當る。

童孫未解供耕織 也傍桑陰學種瓜 童孫 未だ解せず 耕織に供するを、也 桑陰に傍ひて 瓜を種うるを學ぶ。
 昼は田に出て草取り 夜は麻を績ぐ、農村の兒女は それぞれ家事を助ける。

童孫は未だ耕作や機織の仕事はできないが、それでも桑畑に傍つて 瓜の種蒔を真似ている。

〔富家〕家の仕事を責任をもつてする。

「農村の兒女たちは、昼間は田圃の草取り、夜は機織りの手伝い。孫たちはしつかりした手伝いは出来ないが、それでも瓜の種まきなど真似ている」長閑な田圃の生活が詠われている。

③ 「夏日田園雜興」より

采菱辛苦廢犁鋤 血指流丹鬼質枯 菱を采るは辛苦なるも 犁鋤を廢す、血指 丹を流して 鬼質は枯る。

無力買田聊種水 近來湖面亦收租 田を買ふに力無く 聊か水に種う、近來 湖面も 亦租を收む。

菱を采るのは辛苦だが 犁や鋤は廢めた、指からは血が流れ 身体は幽鬼のように瘦せさらばえた。

畑を買うだけの力が無いので 水に菱を種えている、近頃は湖面からも 税金を取るようになった。

〔鬼質〕 幽霊のような体。

「畑を買うだけの力が無いので改業して、湖に水栽培の出来る菱を植えたが、指先は血まみれ、体は瘦せた。近頃は水面からも税を取るようになった。」内容は深刻であるが、それが切実感をもって伝わって来ないのは、作者が根っからの農夫でないからであろうか。

④ 「冬日田園雜興」より

樽柶無煙雪夜長 地爐煨酒煖如湯 樽柶 煙無くして 雪の夜は長し、地爐 酒を煨め 煖きこと湯の如し。

莫嗔老婦無盤飴 笑指灰中芋栗香 嗔ること莫れ 老婦 盤飴無きを、笑ひて 指す 灰中 芋栗の香し。

樽柶は煙も無く燃えて 雪の夜は長い、地爐で酒を温めて ちようどよい加減。

酒の肴が無いと老婦に腹を立てることはない、笑いながら指す灰の中そこには香しい芋と栗。

「盤釘」 皿に盛り合わせた食べ物。酒の肴。

「冬の夜、囲炉裏で酒を温め、灰の中で焼いた芋と栗を肴にちびりちびり。」豪勢な晩餐ではないが、ささやかな暮らしの中の心温まるひとときが詠われている。

范成大は老年になって中央の官僚を退職し、郷里の田園に帰って暮らした。詩の内容は田園における我が家の日常が多い。農夫たちの苦勞も詠ってはいるが、どこか距離があるようで其の生活を傍から眺めている感じがする。年老いるまでの長い年月、中央に於て高位高官の職にあった人だから、農夫との関わりが薄い為かも知れない。

陶淵明も范成大も、官吏としての生活を経験したのち農村生活に入った。人生の経歴の上で、陶淵明と范成大はこういう点が似通っている。淵明の詩は、田園に於る自分の生活と、時々自分の思いを詠うのが主であり、農村風景そのものを詠ったり、農民の立場に立つて農夫たちの喜怒哀楽を詠ってはいない。いわゆる「農村」を詠う詩ではなく、「田園」における自分を詠った詩なのである。

范成大についても同じことが言える。田園に於る我が家の日常生活や、折りに触れて心に留まった田園の風景を詠うが、長いこと高位高官の生活にあった人であるからか、農民の眞の苦勞を深刻には受け止めていない。農民の苦勞を詠ってはいるが、農民の側に立った深刻な「農村詩」とは言えない。

一方、茶山は農家の出身であり、役人としての経験は持たず、京都に遊学した以外は生活基盤を郷土に置き、神辺の農村に根を下ろして一生を終えている。茶山の詠う「農村の風景詩」は、その風景の實際を純粹に、見たまま有りのままに詠った「農村の詩」である。又、農村に生まれ育ち、一生を農村で終えた茶山と農民は仲間なのである。だから茶山にとって、農民の苦勞や悩みは他人事ではない。自分のこととして深刻に考えざるを得な

かったのである。そこに詠われる詩は、農民の喜びであり楽しみであり、又、苦勞であり悩みである。いわば、農村に暮らす農民の明け暮れを詠った詩なのである。

陶淵明と范成大、このふたりと茶山の農村を詠った詩の違いは、そのあたりにあるのではなからうか。以上の理由から陶淵明と范成大の詩は「田園詩」、茶山の詩は「農村詩」と区別をした。

第四節 子どもを詠う詩

「子どもを詠う詩」といっても、それは農村詩の一部であり、農村の暮らしの中から特に子どもたちを取りあげて詠った作をいう。それまで日本の漢詩で特に子どものことを詠った詩人はあまりいない。終生、親密な交友をもった頼春水、西山拙齋にも「子どもを詠う詩」といえるものはない。茶山とは縁も深く、親しいつき合いをした同時代の詩人である六如上人、道光上人、北條霞亭に「子どもが詠み込まれた詩」が二・三見られる程度である。『黄葉夕陽村舎詩』の中には「子どもを詠う詩」が八十八首収められている。それらの詩は年を重ねるに連れて数が多くなり、子どもに注ぐ思いも次第に深くなっているようである。それは何故なのであろうか。その理由を考察する。

なお、「子どもを詠う詩」八十八首の詩題・作詩年令・作詩年代・詩体等を表に纏めて最後に載せた。取りあげる詩題の上の数字はその番号による。

一、子どもがいる風景詩

(1) 三十歳代の詩

① 春日雑詩 其一

臙臙山氣曙 靄靄野烟滋

臙臙ろうろうとして 山氣あか曙け、靄靄わいわいとして 野烟やえん滋しし。

濯濯門前柳 郁郁園中梅

濯濯たくたくたり 門前かどの柳、郁郁いくいくたり 園中うゑの梅。

林鳥求其友 啾啾在高枝

林鳥 其の友を求め、啾啾しゅうしゅうとして 高枝かうしに在り。

兒童喚其侶 欣欣戲路岐

兒童 其の侶ともを喚よび、欣欣きんきんとして 路岐ろきに戯る。

傷此單居客 幽懷將訴誰

傷いたむ 此の單居たんこの客、幽懷ゆうわい 將に誰にか訴なげへんとする。

「臙おぼろに霞かすみんだ山氣やまけが漂い、夜が明けて来た。朝靄あさぐれが野にいっぱい立ち込めている。門前の柳は艶々と美しく、園中の梅は芳しい香を放っている。」野も山もすっかり春の気に覆われた。その静止した風景の中に動的な囁ささやる小鳥、遊び興じる子どもたちを配して、長閑のびやかな春の日は一層、心浮き立つものとして表現される。茶山がこの詩で詠いたのは、最後の二句の「傷此單居客、幽懷將訴誰」(心浮き立つ筈の長閑な春の日なのに、この胸深く抱く思いを誰に訴えようか)という部分であって、初めから八句までは、その胸中深く抱く愁いと全く対照的な、楽しく浮き浮きする風景描写である。その風景描写の中でも特に、五句から八句までの、無心な小鳥や兒童の様子を詠んだ「林鳥求其友、啾啾在高枝。兒童喚其侶、欣欣戲路岐」(林の中の鳥は友を求めて高い枝で囀り、子どもたちは侶ともを喚よんで、にこにここと楽しそうに道端で戯れている)と云う四句は一層「單居客」の「幽懷」を際立たせる効果を挙げている。

其二

郊村一夜雨 更添柳梢緑 郊村一夜の雨、更に添ふ柳梢の緑。

春色日以深 和風日以煖 春色日に以て深く、和風日に以て煖かなり。

將欲賞芳辰 使兒輟誦説 將に芳辰を賞せんと欲し、兒をして誦説を輟めしむ。

東舍持嘉魚 西隣携芳醪 東舍は嘉魚を持ち、西隣は芳醪を携ふ。

相將上高原 聊以縱遠目 相將て高原に上り、聊か以て遠目を縦にす。 『黄葉夕陽村舍詩』前編卷一

「村里は一夜の雨で、柳の梢は一段と緑が艶やかになった。春の色は日まじに深まり、和やかな風は日に日に煖くなる。」と、初め四句は雨上がりの長閑な春景色を詠い、そんな春景色を楽しもうと、五・六句で「子どもたち誦説をやめさせ、塾童を連れて野に遊んだ」と続ける。子どもが表面には出て来ないが、「東舍持嘉魚、西隣携芳醪」——東の家からは美味しい魚を持参し、西の家からは芳しい酒を携えて来たあたりからは、嬉々として野辺の遊びを楽しんでいる塾童の生活の一端を窺うことができる。

③ 夏日田家同士信子發子晦賦 夏日田家 士信 子發 子晦の賦に同じくす

十里晴輝落碧溪 家家曬麥圪橋西 十里の晴輝 碧溪に落ち、家家 麥を曬す 圪橋の西。

桑陰半轉蕃薇徑 穉子朱朱喚母鷄 桑陰 半は轉ず 蕃薇の徑、穉子 朱朱と 母鷄を喚ぶ。

『黄葉夕陽村舍詩』前編卷二

「見渡す限り晴れ渡った太陽の輝きは、碧の溪間に降り注ぎ、家々では土橋の西に麥を曝している。桑の木陰は半ば野蕃薇の小径の方に転じ、子どもがコッコ、コッコと母鷄を喚んでいる。」神辺あたりの夏の生活情景描写であろう。子どもの姿は表面に出て来ないが、「朱朱喚母鷄」という句によって起・承・転句までの静かな風景に動きが出て、詩に生氣と微笑まじさが加わった。

⑤ 即事

溪村無雨二旬餘 石瀨沙灘水涸初 溪村 雨無く二旬餘り、石瀨沙灘 水は涸れ初めたり。
 滿巷蟬聲槐影午 山童沿戸賣香魚 滿巷の蟬の聲 槐影の午、山童 戸に沿ひて 香魚を賣る。

〔黄葉夕陽村舍詩〕前編卷三二

「溪ぞいの村は 雨の無いこと二旬余り、石や沙の目立つ瀨や灘れ 水は涸れ始めている。村に溢れる蟬の声 槐の影も深い昼下がり、山童が戸口から戸口へと香魚を売って行く。」日照り続きで溪川の水も涸れ始めた真夏の昼下がり、蟬の声だけが村中に喧しく響き渡っているこの炎天下、村人たちは働く気力もなく昼寝でもしているのだらう。蟬の声以外には、物音も人影もないこの溪ぞいの村に、「山家の子」の「鮎を売る声」だけが元氣よく響く。その声と「戸に沿いて行く山童の姿」が聴覚と視覚に訴えかけて、読者の心に強く印象づけられる。

⑧ 孤吟

孤吟未全就 倦憩野川阿 孤吟 未だ全くは就らず、倦みて憩ふ野川の阿。

亂石聽流激 遙峰靚雨過 亂石 流れの激するを聴き、遙かなる峰 雨の過ぐるを観る。

竹梢秋露重 松下晚涼多 竹梢 秋露 重く、松下 晚涼多し。

飲馬誰家子 驕騎走小坡 馬に飲ふは誰が家の子ぞ、驕騎して 小坡を走る。

〔黄葉夕陽村舍詩〕前編卷三二

詩作も納得行くようには纏まらない。飽きてきたので小川の曲がり角で一休みする。「亂石に当たる激しい流れの音」(聴覚)、「峰を通り過ぎる雨」(視覚)、「竹の梢の重そうな露」(視覚)、「松の下の涼感」(触覚)の自然描写は爽やかな感じを与え、茶山の鬱屈した気持ちにはさぞかし癒されたことであろうと推察できる。尾驛で「馬に飲もう子」が茶山の目に止まった。「おや何処の子だらう。馬に水を飲ませて、裸馬に乗り土手を走って行ったあの子は。」きびきびと馬の世話をして、その馬に跨り颯爽と帰って行った子どもの姿は、更に茶山の心を爽やかにし

てくれたことであろう。この尾聯によって清涼感の漂う風景詩となった。

(2) 四十歳代の詩

⑨ 赴鴨方途中 (一)

女兒傾筐采新糧 雨後寒生迥野風 女兒筐を傾けて新糧を采る、雨後寒生ず迥野の風。
知是授衣期已近 村家竹裡響棉弓 知りぬ是れ授衣の期已に近きを、村家の竹裡棉弓響く。

〔黄葉夕陽村舍詩〕前編卷三

「女の子たちが筐を傾けて綿を摘んでいる。」と女の子の様子を視覚的に捉えて詠い起こし、秋雨の後「寒生ず」と触觉で捉えて具体感を出す。寒さを覚える風は遙か彼方の野原から吹き寄せて来るのだと、距離的な広がりを持たせ、何処も彼処も寒い季節を迎えようとしていることを感じさせる。竹藪を通して聞こえてくる綿繰り車の音と、綿摘みをする女兒とを関連させることによって、そろそろ冬着の準備に忙しい時期となったのだという思いを強める。綿摘みの女兒は風景の一部として詠われているが、この一句によって季節感のより印象深い農村風景詩となった。

⑩ 赴鴨方途中 (二)

鳴榔聲斷水煙虛 葭露蘋風繞故墟 鳴榔の聲断えて水煙虚し、葭露蘋風故墟を繞る。
潮退晚汀沙磧潤 女兒相喚捕草魚 潮退きて晚汀沙磧潤し、女兒相喚びて草魚を捕ふ。

〔蘋〕草の名。たのじも。かたばみも。食用となる水草。

〔黄葉夕陽村舍詩〕前編卷三

この詩は(一)と同じ時の湾の辺りの風景を詠んだものである。「漁師が船をこぐ音も途絶えて水面は煙っており」(聴覚)。「蘆に置く露、水草を吹く風が漁村をめぐるっている。」(視・触觉)。「潮が引いて暮れ方の渚は広々と

している」(視覚)と、起・承・転句までは、もの寂しくなった夕暮れ時の漁村の風景を描き、結句では「干潮になつた渚で女の児たちが喚声をあげながら、嬉々として蛸捕りに興じている」様が視・聴覚に訴えかけられて、少々滑稽味のある風景詩となつている。

⑩ 途中 三首 (三)

晴林松滴露 夕野水鳴溝 晴林 松は露を滴らせ、夕野 水は溝に鳴る。

沙堤十餘里 童子尾風牛 沙堤は 十餘里、童子 風牛に尾く。

〔黄葉夕陽村舎詩〕前編卷三

「雨も上がり天気は晴れて、林の松は露を滴らせており、夕暮れ時の野では嵩を増した水が、音高く溝を流れて行く。沙堤は十里余りも続いており、子どもが当てもなく歩く牛の後に尾いて行く。」といった農村の夕暮れ時の風景である。牛の世話を任せられた子どもであるうが、牛を世話するというより、ただ牛の歩みに委せて林を抜け小川の傍らを通り、ぶらぶらと牛を連れて帰って行く。その子どもらしい様子が、彷彿として眼前にあるかのように詠われ、閑かで爽やかな風景に、無邪気で愛嬌ある子どもの描写が添えられ、あたたかみのある農村の風景詩となつている。

⑪ 路上 二首 (一)

晴川綵舫影 午市晝橋聲 晴川 綵舫の影、午市 晝橋の聲。

垂髪誰家子 累騎老豕行 垂髪 誰が家の子ぞ、老豕に累騎して行く。

〔黄葉夕陽村舎詩〕前編卷三

天明八年六月十七日、茶山は厳島の管弦祭を見物するために広島市の街地を通つた。「晴れた川には管弦祭に行かため舟が美しく彩色を施して(綵舫)浮かび、広島繁華街(午市)の橋の上は人馬が賑やかに往來している。」その中に茶山の目を惹いたものがあつた。お下げ髪の子どもが、年寄り豚にふたり乗りして行く姿である。その愛嬌ある様に茶山の目は細くなり、思わず頬が弛んだであろう。そんな想像をさせられるような光景である。

当時、広島街頭には多くの豚が見られたようだ。

⑩ 環碧樓

嫩涼何處使人留 閣俯長川一帶流 嫩涼 何れの處か 人をして留めしむ、閣は俯す 長川 一帶の流れ。
楊柳陰中童浴水 兼葭風外馬乘舟 楊柳 陰中 童 水を浴び、兼葭 風外馬 舟に乗る。

『黄葉夕陽村舍詩』前編卷三

〔環碧樓〕小野世篤（一七六四～一八一三）が営んだ書樓。世篤は号を孤州、通称小十郎。西山拙齋の門人、茶山とも交遊が深かった。備中国浅口郡玉島上成村の人。

「若緑の涼しさ 足を留めさせるのはどこだろう。環碧樓からは 長々と流れる川 一帯が見下ろされる。」と起・承句で辺りの状景を描写し、転句で水浴びをしている子どもたちが描かれ、活気と精彩が加わる。結句で「葦や蘆が風にそよぐ辺りでは馬が舟に乗っている。」と詠じ、長閑な農山村の爽やかな風景詩となっている。環碧樓から見下ろした風景詩であるが、転句に子どもたちの水浴びの様を配することで、言外にある嬉々とした子どもたちの様子も想像させられ、視覚の他に聴覚も加わって現実感の感じられる詩となっている。

⑪ 即事

竹露沾衣夜欲深 隔牆石澗靜無音 竹露 衣を沾して夜は深まらんと欲、牆を隔てて石澗は靜かにして音も無し。
女兒謾撲流螢去 復到門前楊柳陰 女兒 謾ぎ撲ちて 流螢は去り、復た到る 門前 楊柳の陰。

『黄葉夕陽村舍詩』前編卷四

「夜露が着物を湿らせ、夜はだんだんと更けて行く。牆を隔てた樋の口辺りは静かで音もない。」昼間の暑さも収まり、物音一つしない全く静寂の境地を起・承句で詠み、転句で急に賑やかな螢狩りの女の児が登場する。女の児たちは、無邪気にはしゃぎながら、一頻り螢を追いかけていたが、やがて去って行った。暫くすると螢は再

び戻ってきて門前の柳の陰で光っている。転句に女兒の蛍狩りの「動き」を詠み込んだことで、結句の情景は一層深い「静寂」として感じられ、物音一つしない暗やみの農村風景に、乱舞したり点滅したりする蛍の光が加わって彩りが添えられ、一際印象深い夏の夜の農村風景となっている。

三十・四十歳代のまとめ

三十歳代、四十歳代の風景詩の中に子どもが詠み込まれているのは、それぞれの詩の一句又は二句であるが、その一句乃至は二句があることよって、単に静止した風景詩ではなく、詩に動き・活気・彩り・感情が加わる。つまり静止した風景詩に息吹が吹き込まれ、躍動感や立体感が生じ、余情の漂う詩となっていると云える。この時期の、子どもが詠み込まれた風景詩二十一首の中から取り上げたのは約半数であるが、他の詩についても同じようなことが言える。纏めると次のようになる。

① 子どもは風景の一部として描かれているが、その描写があることで詩にいつそう精彩が増す。子どもの言動には邪念がなく、純真で天真爛漫、子どもそのものの属性が既に精彩を備えているが、それがありのままに表現されているからである。

② 茶山は子どもを客観的に見ており、両者の間には物理的にも心情的にも少し距離がある。このことは六十、七十歳代の詩と比較すると違いがよく分かるので、六十、七十歳代の詩の纏めのところで述べることとする。

(3) 五十歳代の詩

② 題畫

深松鐘響近禪房 夾路幽花迎客香 深松鐘響きて禪房近く、夾路幽花客を迎へて香し。

かんは

稚子倦行行且戲 山程十里已斜陽 稚子 行くに倦み 行き 且つ戯る、山程 十里 已に斜陽。

『黄葉夕陽村舍詩』前編卷四)

「深い松林の方から鐘の音が響き 禅寺に近づいたようだ、路を夾んで両側には風情のある草花が咲き 客を迎えて芳しく香っている。子どもは歩き草臥れて、少し歩いては暫く戯れている。山の道のりは十里も続き もう日暮れだ。」画に題した詩で実景ではない。幼い子どもが野辺の草花か蝶々にでも戯れている風景が描かれているのであろうか。想像の域を出ない。五十歳代の詩には題画の詩が多い。

㊦ 即事

晏起家童未掃門 繞簷梨雪午風暄 晏起の家童 未だ門を掃かず、簷を繞る梨雪 午風 暄かなり。

一雙狂蝶相追去 直自南軒出北軒 一雙の狂蝶 相追ひて去き、直ちに南軒より北軒に出づ。

『黄葉夕陽村舍詩』前編卷四)

「朝寝坊をした家童はまだ門の掃除もしていない。軒を繞って散る雪のような梨の花 午の風は暄かだ。一番の蝶が狂ったように追いかけて、すぐに南の軒から北の軒に出て行った。」「春眠不覺曉」といったような、長閑な春の朝の情景を詠んでいる。廉塾は原則として全寮制だったので、掃除の当番なども決められていた。今朝は当番の子どもが朝寝をして、まだ門の辺りの掃除もしていないのである。子どもは表面に出て来ないが、「晏起家童未掃門」（朝寝坊の塾童はまだ門の掃除もしていない）という起句で想像は膨らむ。

㊦ 題畫

溪流曲曲水澄澄 夾岸村家互喚磨 溪流 曲曲 水澄澄たり、岸を夾んで 村家 互に喚び磨ふ。
沙背老槐陰幾畝 女兒環坐補漁罾 沙背 老槐 陰幾畝ぞ、女兒 環坐して 漁罾を補ふ。

『黄葉夕陽村舍詩』前編卷四)

「谷川は曲がりくねり水はよく澄んでいる。岸を挟んで村の家は互いに喚び合い応え合っているようだ。岬の槐の古木は僅かばかりの蔭を作り、女の子たちはそこに輪になって坐り、漁の網を補っている。」といった題画の詩である。

㊦ 漁村

舍南晒漁網 舍北繫漁舟 舍南 漁網を晒し、舍北 漁舟を繫ぐ。

漁叟蔭楊柳 呼童敲釣鈎 漁叟まよそ 楊柳の蔭、童を呼びて 釣鈎を敲く。

「家の南側には漁の網を干し、家の北側には漁の舟を繫いでいる。漁師のおやじは柳の蔭で、子どもを呼んで釣り針を敲かせている。」漁村の父子の長閑な情景描写。

㊧ 常遊雜詩 十九首（十四）

郊行數日始山嵐 邑里高伍梧竹參 郊行 數日 始めて山嵐さんらん、邑里いふり 高伍かうご 梧竹まじ參る。

五月久慈川上路 女兒相喚采紅藍 五月 久慈川上の路、女兒 相喚よびて 紅藍べにばなを采る。

〔黄葉夕陽村舍詩〕前編卷七

「郊外を歩くこと数日にして始めて山の気に接した。村里は高く低くつづき青桐や竹藪が混じり合っている。五月 久慈川のほとりの路で、女の子たちが呼び交わしながら紅花を摘んでいる。」文化元年一月、福山藩主阿部正精侯に江戸出府を命ぜられた茶山は、一月二十一日に神辺を出立して、その年の十一月五日に帰郷した。江戸滞在中の五月に約十日間、常陸国に遊ぶ。これはその時の作である。「紅藍」は「紅花」で当時、常州北部から東北地方にかけて多く栽培されていた。この詩は女の兒たちが、声を掛け合って賑やかに紅花を摘んでいる光景で、「女兒相喚采紅藍」は四十歳代の㊦「赴鴨方途中」（二）の「女兒相喚捕章魚」と同じような場面である。

㊨ 常遊雜詩 十九首（十五）

籠淘黄汁托奔湍 人説紅花製法難

籠は黄汁を淘ぎ 奔湍に托す、人は説く紅花製法の難きを。

別有候晴忙出晒 老婆踏餅小姑娘

別に晴れを候ひて忙しく出して晒す有り、老婆は踏餅し小姑娘は丸す。

〔黄葉夕陽村舎詩〕前編卷七

「籠に入れた紅花を早瀬に浸して黄色の汁を取り除いている。見ている人が紅花の製法の難しさを説明してくられた。別の日に晴天を見定めて忙しく戸外に出て晒すということだ。老婆は踏んで餅のようにし娘は丸めている。」と云う景であり、摘んだ紅花を漉す製法を村人から聞いたことを起・承句で述べ、転・結句で曝した紅花を老婆が踏み固め、少女がそれを千切つて丸めているというので、その光景に興味を感じて詠んだ風景詩である。前の◎と同じ時の作。

五十歳代のまとめ

五十歳代の詩に「子ども」が詠み込まれたものは、十四首である。「題畫」や、「紀行詩」などが多く、傾向としては三十・四十歳代の詩とあまり変わりはない。

(4) 六十歳代の詩

㊦ 村居 二首 (二)

陂塘開闢水哀號 滿巷斜陽麥笕高

陂塘 開を聞き 水は哀號す、滿巷の斜陽 麥笕 高し。

底事羣童狂走去 數聲喇叭賣鬆糕

底事ぞ 羣童の狂走して去く、數聲の喇叭 鬆糕を賣る。

〔黄葉夕陽村舎詩〕後編卷二

「堤の水門が開かれ 水は激しく流れてゆく。村いっばいに夕陽が射して麦の櫓が高い。何事だろう 子どもた

ちが狂ったように走り出した。数声の喇叭ラッパの音、団子売りが来たのだ。」麦の束を櫃に掛ける手伝いをしていた子どもたちが、一斉に駆けだして行った。事態が呑み込めない大人たちは「何事だろう」と呆氣にとられている。大人たちのそんな様子も想像させられる。「村を赤く染めた夕陽に、高々と掲げられた麦架むぎかけの櫃が金色に輝いている。」という、起・承句の農村の風景描写が、麦畑の中を満身に夕陽を浴びて、狂ったように走って行く「羣童」の様子を一際引き立て、無邪気な子どもの本領が見事に捕らえられた農村の風景詩である。

④ 元日呈諸君子乞和 元日 諸君子に呈し 和を乞ふ

雲裏何れの邊に斗柄とへい移り、春閭巷りよがに回るのは語聲にて知る。

衰翁擁被猶貪煖 遙聽羣童掬雪嬉 衰翁 被を擁して 猶 煖を貪り、遙かに聽く 羣童 雪を掬して嬉ぶを。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷三

「天空のどの辺りに北斗星は移ったのだろうか。春が巡ってきたことは村人の話し声で分かる。年寄りの私は布団を被って暖を貪っているが、向こうの方では子どもたちが雪合戦に興じ嬉々としている。」正月とはいえ年を取ると布団から出るのも億劫だ。元氣よく雪合戦に興じる子どもたちの声が、遥かな辺りから聞こえてくる。廉塾の塾童か近隣の元氣な子どもたちであろう。寒さなどものもしない、むしろ雪が降れば却って元氣が出て、嬉々として戸外で雪合戦などに興じる子どもたちを、茶山は心から嬉しく思い、その元氣いっばいの声に満足している。

⑤ 病中暑甚憶舊事而作六首(二) 病中暑甚し 舊事を憶ひて作る六首(二)

沙村栽柳緑陰多 坐待江天午熱過 沙村 柳を栽ゑて 緑陰多く、坐して待つ 江天 午熱の過ぐるを。

晩伴漁童看撒網 半灣蒲葉戰輕波 晩れに漁童を伴ひて 撒網を看れば、半灣の蒲葉 輕波に戦ぐ。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷三

「砂州の村は柳を植えて緑の陰が多い。その陰に坐つて昼の暑さが収まるのを待つ。日暮れになり漁村の子どもたちを連れ出して投げ網を看ていると、半湾の蒲の葉が涼風にそよぎ始めた。」というのである。昼間は暑くて動く気にもならない。柳の木陰で昼間の暑さの収まるのを待つ。日暮れになり暑さも収まったので、湾の辺りでもぶらぶらして見ようかと、漁村の子どもたちを連れて撒き網を見る。折からの風に軽く波が立ち、半湾の蒲の葉がさやさやと戦いでいる。漁村の入り江辺りの風景詩である。そこらにいた漁村の子どもを誘つたのであろうか、「伴漁童」の部分にか子どもは出て来ないが、茶山が子ども目線にまで降りて童心に返り、何やかや話しながら漁の様子を見ているであろう場面が想像されて、心和む詩である。

④⑨ 病中暑甚憶舊事而作 六首 (五)

暑路 迂來過谷中 欣看反照早收紅 暑路 迂來して 谷中を過ぐ、欣び看る 反照の 早に紅を收むるを。

村童飲馬驕騎去 馬尾驂驂搖夕風 村童 馬に飲ふて 驕騎して去く、馬尾 驂驂として 夕風に揺らぐ。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷三

前の④⑨と同じ時の作。「病中暑甚憶舊事而作」という詩題から、茶山は今病の床にある。「暑甚」というのだから暑くてやりきれないのだろう。「前にこんなことがあったなあ」と、以前に経験したことのある一場面を思い浮かべている。「暑い路を迂廻して谷の中を通つた。照り返しが早くも収まつていたことを嬉しく思った。村の子どもが馬に水を飲ませて裸馬に乗り帰つて行つた。馬の尾は垂れて夕風に揺らいでいた。」④⑨・④⑩と共に爽やかさの感じられる詩である。

④⑩ 即事

垂楊交影掩前楹 下有鳴渠徹底清 垂楊 影を交へて 前楹を掩ひ、下に 鳴渠の 徹底して 清める有り。

童子倦來閑洗硯 奔流觸手別成聲 童子 倦み來りて 閑かに硯を洗へば、奔流 手に觸れて 別に聲を成す。

『黄葉夕陽村舎詩』後編卷四)

「柳の枝が交錯して門の柱を覆い、その下を渠がさらさらと音を立てて流れている。水は底が見えるほど澄んで綺麗だ。」廉塾の中には裏を流れる高屋川から引き込んだ溝が流れている。起・承句はその情景を視覚的に詠んでいる。手習いに飽きた児童が出て来て、硯を洗おうと水に手を浸すと流れの音が変わった。順調に流れて来た水が、子どもの手に邪魔されて、流れの音がちよつと変わったのである。転・結の二句はその微妙な変化を触觉「奔流觸手」、聴覚「別成聲」で捉えて、手習いに草臥れた子どもが綺麗な流れに手を浸して、暫く水を弄んでいたのだらうと、子どもの心情やその場面を、今目の前にしているかのように思い描かせる風景詩である。

⑤ 螢七首(五)

連夜收來滿練囊 柳陰懸照納涼牀 連夜收め來りて練囊に滿つ、柳陰懸けて照らす納涼の牀。

童言螢火亦眞火 搖扇將然加手陽 童は言ふ螢火も亦眞火、扇を搖るがせば將に然えんとし手を加ふれば

陽あたたかしと。

『黄葉夕陽村舎詩』後編卷七)

「練り絹の袋に毎夜、螢を捕っては入れ、捕っては入れしているので、螢袋がいっぱいになった。その袋を柳の枝にぶら下げて、涼み台の灯りにする。」廉塾には中国から貰い受けたという柳の木があった。暑い夏の夜はその下に納涼台を置いて、大人も子どももその周りに集まり、将棋をさしたり、星の話をしたり、怪談などをしてりして楽しい一時を過ごしたことであろう。ひとりの童が言った。「螢の火も本当の火だよ。ほら団扇であおぐと明るくなるし、手を添えると暖かいよ」と。ここの「童」は廉塾の学童だろう。「螢火も亦眞火」と言う子どもの発想は大人の意表を衝く言葉である。この子どもらしい表現によって、茶山も子どもたちと一緒にあって、童話の世界に遊んでいる、そんな雰囲気の漂う夏の夜の風物詩である。

⑥ 秋日雜詠(一六)

矮松疎篠兩三家 芋圃蕃畦路幾叉 矮松疎篠兩三家 芋圃蕃畦路は幾叉。

稚子歸來有矜色 數莖紫葺貫茅花 稚子歸り來りて矜る色有り、數莖の紫葺 茅花に貫く。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷七

「背の低い松 疎まばらな篠ささの中に二、三軒の農家、芋畑 蕃うぶ麦畠の中に幾筋かの畦道が通っている。」と起・承句で閑かな山里の風景描写がされる。その中の「一本の道を、子どもがなんだか誇らしそうに鼻高々と帰って来た。」と転句で動きが加わる。「稚子」というのだから十歳そこそこの子ともだろう。「何がそんなに自慢なのだろう」と興味をそそられる。結句で「數莖紫葺貫茅花」つまり「五、六本の初茸を茅の穂に貫き通したものをぶら下げているのだった」と茶山の視点は子どもに絞られている。本当に自慢したい時は言葉に表すのではなく、むしろ素振りに物言わせる子ども特有の心情が「有矜色」という言葉にうまく表現されている。田舎ならどこでも見られるような至極ありふれた風景であるが、それが平凡でなく読者を魅了してしまうのは、茶山が子どもの真骨頂を確実に掴んでいるからだと言える。

(5) 七十歳代の詩

㊦ 即事

走雨過山彩霓生 殘雲洩日翠秧明 走雨 山を過ぎて 彩霓さいげい生じ、殘雲 日を洩らして 翠秧すいあや明らかなり。

欲知詩畫無佗趣 出戸呼童看夕晴 詩畫に佗趣無きを知らしめんと。戸を出でて 童を呼び 夕晴れを看る。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷七

「にわか雨が山を通り過ぎて美しい虹が立ち、残りの雲が途切れて日の光が射し 若い草木の翠が鮮明だ。この景は、詩や画にも現せないほどの美しさであることを知らせようと、戸外に出て子どもを呼び、一緒に夕晴れを

見た。」雨上がりの空に出た虹、雨に洗われた新緑の美しさ、余りの美しさに感動した茶山は、この美しい風景を子どもに見せてやりたかった。そこで子どもたちを呼んで一緒に夕晴れを眺めたというのである。六十歳代の④「病中暑甚憶舊事而作」の「晚伴漁童看撒網」と似た詩の趣である。塵や埃がすっかり洗い流されて清々しい景色と、純真無垢な子どもの中には一脈通じるものがある。茶山はそれを感じたのではあるまいか。

⑤ 舊作

終日林蟬惱殺人 更愁喧譟及比隣

終日林の蟬は人を惱殺す、更に愁ふ喧譟比隣に及ぶを。

隣童忽出一奇計 捕得螳螂栖樹身

隣の童は忽ち出す一奇計、螳螂を捕らへ得て樹身に栖ましめんと。

〔黄葉夕陽村舎詩〕後編卷八)

「一日中林の蟬は人を大変悩ませる。更に心配なのは喧しさが隣に及ぶことだ。隣の子どもが即座に一つの奇抜な案を出して来た。螳螂を捕まえて樹木の幹に栖ませよう。」という内容であり、螳螂を樹木に栖ませると螳螂が蟬をやっつけてくれるであろう、というのが子ども達の発想なのである。子ども達の奇抜な発想は「螢七首(五)」
「童言螢火亦眞火、搖扇將然加手陽」と相通ずるところがある。茶山は子ども達の奇抜な発想を決して見過ごさない。いつも子ども達の目線にいたのである。

⑥ 夏日雜詩 十二首(四)

六月溪村水涸初 竹灣松岸盡沙淤

六月の溪村水の涸るる初め、竹灣松岸盡く沙淤なり。

泉流不絶眞如綫 稗子相羣手捕魚

泉流絶えざるも眞に綫の如し、稗子相羣れて手づから魚を捕ふ。

〔黄葉夕陽村舎詩〕後編卷八)

「六月の溪間の村は溪流の水が涸れ始め、竹藪沿いの湾や松林の岸辺りは全て砂や泥がむき出しになった。水の流れは絶えてはいないが、本当に川の真ん中辺りを糸筋ほどだ。」と、起・承・転句までは夏六月、日照り続き

の溪村の風景描写である。結句で「子どもたちはあちらに三人、こちらに五人と群れを作り、泥んこになつてきやつきやつ、わあわあ騒ぎながら手掴みの魚捕りに夢中になつてゐる。」と、閑かな溪村の風景の中に、元氣滲刺とした子どもの賑やかな声（聴覚）や動き（視覚）が詠み込まれて、明るく躍動感のある夏の風物詩となつてゐる。子どもの描写は結句の一句だけであるが、起・承・転句は結句の背景としての役割を果たしているのであつて、茶山の視線は三三、五五群がつて魚捕りに興じる無心な子どもたちの姿に注がれている。

㊦ 夏日雜詩 十二首（九）

涼棚待月向溪濱 恰值前峯上半輪 涼棚 月を待ちて 溪濱に向かへば、恰も 前峯半輪を上すに値ふ。
童子爲儂添勝槩 聚沙激水作金鱗 童子は 儂が爲に勝槩を添ふ、沙を聚め 水を激して 金鱗を作す。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷八）

「涼み台で月の出を待っていたが、そろそろ月も出て来るだろうと谷の方に降りて行くと、案の定、前方の峰から半月が昇り始めた。」視線を前方、上に向けて月の出を認め、次に視線を下に転じて溪川に移すと、囂らずも素晴らしい眺めに遭遇した。それは「砂を集めて水を堰き止めた一部が少し壊れて、狭い隙間から水が迸り出ている。それが溪流と一緒になる所で小波が立って、月の光の陰影が出来、金の鱗のように見えた」というのである。この素晴らしい眺めを作ったのは子どもたちだと茶山は咄嗟に察した。子どもたちは昼間に水遊びをした。砂を集め水を堰き止め、云つてみれば小さなダムを作り、それを解体しないまま放りっぱなしで帰ってしまった。その結果このような勝槩に出会ふ事が出来たのだと察して、茶山は喜んでいるのである。この詩は単に溪川に映つた月光の美しい風景を詠うだけではなく、無心に生き生きと水遊びをしている、昼間の子ども情景まで想像させる、そんな溪村の夏の風景詩である。

㊧ 夏日雜詩 十二首（十）

村童日日挾書來 講席偏愁暑若燬 村童 日日 書を挾みて來る、講席 偏へに愁ふ 暑燬るが若くなるを。
 歸路逢牛臥涼處 直將牧豎疊騎歸 歸路 牛の涼處に臥するに逢ひて、直ちに 牧豎と疊騎して歸る。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷八)

「村の子どもたちは毎日書物を小脇に抱えてやつて来る。廉塾の講席は夏はあぶるほど暑くて嫌になる。」「燬」というのは、「盆中の火」つまり、うずみ火のこと。講義も『論語』であったり、『唐詩選』であったり、「四書五經」であったりと、小難しい勉強はこんなに暑いと頭に入らない。「今日は終わり」の声に、涼しいところを目指して、一目散に帰って行く村童の姿が目につかぶようだ。「涼処で牛が臥せているのに出会った。傍には友達の子がいた。直ぐさま牛に二人乗りして帰って行った」暑い、暑い。こんな暑さの中を歩いて帰るのは億劫だ。丁度いい具合に牛を休ませている牛飼いの子がいた。おそらく子どもらしい駆け引きをして、それが上手く纏まったのだらうと、そんなことまで想像させられる。そんな子どもの生活の一齣を思い描かせるような、微笑ましい風景詩である。

㊦ 三月盡與森渡二童閑行分得晴字 三月盡き 森 渡二童と閑行す 分かちて晴字を得たり

此日風光棄我行 百花無跡鳥空鳴 此の日 風光 我を棄てて行き、百花 跡無く鳥空しく鳴く。

暄沙芳草村橋路 攜歩詩童看晚晴 暄あたたかき沙か 芳かしき草 村橋の路、詩童と攜歩けいほして 晚晴を看る。

〔黄葉夕陽村舍詩〕後編卷八)

「春三月も終わろうとしているこの日 風や光は私を置いてけぼりにして行き、多くの花は散って跡もなく鳥は空しく鳴いている。あたたかい砂や芳しい草は村の橋の路辺り。」起・承・転の三句は、過ぎゆく春を「風光・暄沙」(触覚)「鳥空鳴」(聴覚)「百花無跡・晚晴」(視覚)「芳草」(嗅覚)と五感の内、四つの感覚を用いて描写し、惜春の情を詩に詠おうと「二人の塾童を連れて散策し、夕晴れの景色を眺めた」と云うのである。㊦「病中

暑甚憶舊事而作」の「晚伴漁童看撒網」⑤③「即事」の「出戸呼童看夕晴」等、同じような趣の風景詩である。

⑦ 偶成

隄防暴漲已三回 又見黃泥沒徑苦 隄防暴漲すること已に三回、又見る 黃泥 徑苦を沒するを。

童子廢書忙出戸 直從草際捕魚來 童子 書を廢し 忙しく戸を出で、直ちに 草際に從ひ 魚を捕らへ來る。

〔黃葉夕陽村舍詩〕遺稿卷五

「隄防が溢れること今年はもう三回もあった。又しても黄泥で苔の小径は隠されてしまった。」という起・承句は洪水の時の情景で、この二句は転・結句の「子どもたちは手習いを放り出して戸外に飛び出し、すぐに水を被った草際に沿って魚を捕らえて来た。」を引き出すためのものである。塾の裏手の高屋川が氾濫すること今年はもう三度もあった。だから子どもたちには「黄泥が径苔を没する」という状態になると、川の魚が道まであふれ出して、岸辺でちよろちよろし出すことを知っているのだ。こうなったら子どもたちはもう手習いどころではない。書物も何もかも放っぽり出して、一目散に土手へ向かうのである。間もなく魚を捕まえて戻ってきた。子どもらしい本領が遺憾なく表現された、梅雨時の廉塾の一風物詩である。茶山はそういった子どもの本質を把握して、それを存分に發揮させてやっている。

⑧ 夏日即事（三）

郊雲四散夜澄清 頭上銀河似有聲 郊雲 四散し 夜 澄清、頭上の銀河 聲有るに似たり。

隣稚貪涼猶未寢 逐來吟杖問星名 隣の稚 涼を貪りて 猶 未だ寝ねず、吟杖を逐ひ來りて 星の名を問ふ。

〔黃葉夕陽村舍詩〕遺稿卷六

「郊外の雲は散り、夜空は澄んで清々しい。頭上の銀河の瞬きの音が聞こえて来そうに思える。」田舎の晴れた夜空は、手を伸ばせば星が掴めるのではないかと思えるほど近く感じられる。銀河の流れる音が聞こえて来るの

歳代の詩には見られなかったものである。ということば、茶山の子どもへの思いが、歳を重ねるにつれて深まっていますと考えられる。

(6) 八十歳代の詩

㊦ 獨讀閑窗 獨り閑窓に讀む

溪雲擁屋翳難開 數尺芸窗雜樹隈

溪雲 屋を擁して黯くろ開き難し、數尺の芸窗うんきう 雜樹の隈さへ。

讀到奇文會心處

不知童子點燈來

讀みて 奇文の 心に會する處に到り、知らず 童子の 燈を點きたじ來るを。

〔黄葉夕陽村舍詩〕遺稿卷七)

「谷間からの雲が家屋を包んで暗さを払うことができない。狭い書齋は雜木林の隅にある。読書をしていて思いがけない文に出会い、それに没頭して、子どもが灯火を持って来てくれたのにも気付かなかった。」というのである。今日は、雲が低く垂れ込めていて薄暗いのに、書齋は雜木林の隅にあるので室内は余計に暗い。そんなことなど気にもならないくらい考え込まれるような文に出会って、茶山は思わずそれに熱中していたであろう。ほっと一息ついた時、燈火かまどが灯ともされているのに気づいた。「おやおや、子どもが氣を利かせて灯りを持って来てくれたのだな。気がつかなかった。」茶山の心の中にもぽっと明るい灯火がともった。先生を氣遣う子どもの優しさ、子どもの純真な優しさに感動する先生。辺りは薄暗く、薄ら寒ささえ感じられるような時であるが、ほのぼのと温かさの感じられる詩である。

㊧ 即事

山童持紙道書詩

老嫻揮毫人所知

山童 紙を持ちて詩を書かんことを道いふ、老いて揮毫もつに嫻うまきは人の知る所。

今速應求吾有意

明朝願掬早梅來

今速やかに 求めに應ずるは 吾に意有ればなり、明朝願もつはくは 早梅を

拗おりて來きたれと。

〔黄葉夕陽村舎詩〕遺稿卷七)

「山家の子が紙を持つてきて詩を書いてほしいと言う。自分は年取つて筆を執るのも億劫なことは人にもよく知つてゐる。ところが今日はすぐ求めに応じた。それは、私に魂胆があつたのだ。明朝 早咲きの梅を折つてきて欲しいという交換条件があつたからだ。」といった内容である。ここの「山童」は青年に近い子どもであらう。茶山が求める交換条件の梅の枝を、見繕う才覚がある程の年齢に達している子どもだと思われる。年老いてなお、童心を失わない茶山の人間性の温かさに触れる思いのする詩である。

㊦ 春詞十一首 (五)

春晴何處好 四野笑歡傳 春晴 何れの處よか好き、四野笑歡傳はる。

聯騎遙調馬 羣童競放鳶 聯騎して遙かに馬を調ととのへ、羣童競ひて鳶を放つ。

餉耕依草徑 浸種堰沙川 餉耕 草徑に依り、浸種 沙川に堰せきす。

何處春晴好 林間有綺筵 何れの處か 春晴の好よき、林間 綺筵有り。 (『黄葉夕陽村舎詩』遺稿卷七)

「春の晴れた日は何処が好いだろうか。辺りの野原から喜び笑う声が伝わってくる。馬を連ねて遙か遠く馬を乗り馴らす。沢山の子どもたちが競つて風揚げをしている。畑仕事をして畦で昼飯、種を浸して川に堰き止めをする。春の晴れた日は何処が好いだろうか。林の中には綺麗な筵が敷いてある。」この詩は、六如の「春詞十首」に併せたもので実景ではないし、子どもは詠み込まれてはいるが、それが主ではない。しかし、風景の一部に「羣童競放鳶」(羣童 競ひて鳶を放つ)、沢山の子どもたちが賑やかに風揚げを競っている情景は、春の長閑さを一層引き立てている。

㊧ 病中即事 二首 (又)

家童知我愛奇葩 時換盆栽慰病痾 家童 我の奇葩きを愛するを知り、時に盆栽を換へて 病痾びやうあを慰む。

數日牽牛委衰颯 朝來忽出鳳仙花
數日 牽牛 衰颯すいさつに委まかせ、朝あしたに來りて 忽いち出いです 鳳仙花。

〔奇葩〕珍しい花。「牽牛」朝顔の花。

〔黄葉夕陽村舍詩〕遺稿卷七

「家塾の童は私が珍しい花を好きなことを知っており、時々盆栽を交換して病氣見舞いをしてくれる。數日にして朝顔が衰え萎れると、今朝やつてきて鳳仙花と取り替えてくれた。」この詩は『黄葉夕陽村舍詩』の終わりから四首目に収められている茶山の「子どもを詠う詩」の一番最後のものである。茶山の亡くなったのが文政十年八月十三日であったことと考え合わせて、死の間近に作られたものと思われる。淡々と詠じている中に子どもに寄せる茶山の優しい眼差しが感じられる。

八十歳代のまとめ

八月十三日に茶山は亡くなるので八十歳代の作詩数は少ない。一月十一日に藩主安部正寧まさやすから傘寿の祝いに招かれて福山城へ赴き、手熨斗等祝いの品を頂戴したが体調が悪く、お目通りは辞退した。五月二十二日に病の床に就き、再び起つことはなかった。そういう状態であったから作詩も思うにまかせなかったであろう。それでも「子どもを詠う詩」は四首あった。㊦「獨讀閑窗」と㊧「病中即事」は、どちらも子どもの茶山に対する優しい心遣いが詠われており、その優しさを十分に受け止めて、子どもの純真さに心温まる思いを抱いている茶山の姿を窺うことのできる詩である。㊨「即事」は子どもっぽいとでも表現したくなるような、茶山の罪のない駆け引きに思わず笑みがこぼれる。年老いて尚、童心を失わない茶山の温かさの感じられる、いささか茶目つ気のある詩だと言えるであろう。

二、他の詩人の「子どもを詠う詩」

日本の漢詩で「子どもを詠った詩」はあまりない。茶山とは終生親密なる交友をもった頼春水や西山拙齋にも「子どもを詠った詩」は見当たらない。茶山とは縁が深く親交のあつた六如上人、道光上人、北條霞亭の詩集に「子どもを詠う詩」はないかと探した。

六如（一七三四〜一八〇二）は、天台宗の詩僧である。昌平饗儒官の友野霞舟（一七九一〜一八四九）は『詞華集 日本漢詩』に「熙朝詩薈」を編集して、（六如詩を卷百七・百八の二卷に亘り三二三首を選び、次いで石川丈山を卷一一に二六六首、三番目に卷八八・八九の二卷に亘り茶山詩を二五四首選んでいる）自らの「錦天山房詩話」で「六如師より宋詩を唱へ、茶山繼ぎて起こり、詩風一變す。其の詩もまた伯仲の間に在り」という評語を載せている。即ち、「新しい日本漢詩の魁を為したのが六如であり、茶山によつて完成された」といわれている。六如はこういった関係から選んだ。

道光上人（一七四六〜一八二九）は、大坂に生まれたが、京都の本国寺で日蓮宗の修業を積む。後に出雲国平田で報恩寺の住職を数年間勤め、住職を退いた後も寺の側に庵を結んで、「聽松庵」と名付けそこに住んだ。京坂地方・山陽道・出雲国を屢々往復し京都では六如、村瀬栲亭らと親交をもち、芸備方面にもたびたび訪れ、廉塾には長逗留することも多かった。西山拙齋・勝島敬仲（一七六〇〜一八〇八・尾道の人）等とも親密なる交遊をもつた人である。『聽松庵詩鈔』の上欄に茶山が批評を書き、巻頭には茶山が序文を書いている。親密なる友人の關係で選んだ。

北條霞亭（一七八〇〜一八二三）は文化十年（一八一三）八月に都講として廉塾に來た。文化十二年（一八一

五、霞亭三十五歳）に茶山の姪、敬三十二歳（享和三年、二十歳の時に茶山の甥の萬年三十一歳と結婚をしたが文化八年に死別した）と結婚をする。茶山の江戸への長期出府の時は、留守のことを全て委せられた。文政二年（一一八九）、藩主安部正精に召し抱えられて儒官となり、文政四年（一一二二）江戸詰めとなるが、二年後の文政六年（一一二三）八月、茶山七十六歳の時、江戸にて四十四歳で歿した。茶山と霞亭とは深い縁で結ばれた間柄であることをもって選んだ。

この人たちが詩集を刊行するにあたっては、茶山が評を書き、序文を認めているので、茶山の影響を受けて「子どもを詠う詩」があるのではないかと考えたことも、三人を選んだ理由である。

1、六如

「詩集 日本漢詩」巻八（汲古書院刊）に収められている一六八二首を全て見たが、「子どもを詠った詩」は一首も見当たらなかった。但し、風景の一部に子どもが描写されているものに、次のような詩が幾首もある。

① 秋夜

涼夜初長露氣清 無時無處不蟲聲 涼夜初めて長くして 露氣清し、時と無く 處と無く 蟲聲ならざるはなし。
燈前童子拋書睡 獨向廻廊踏月行 燈前の童子 書を抛ちて睡る、獨り廻廊に向かひて 月を踏みて行く。

〔六如庵詩鈔〕前編卷五

涼しい夜が長くなって 露もしつとりと清々しい、何時となく何処ということもなく 虫の音が絶えない。

灯火の前の子どもは 書物を放って睡りこけている、私はひとり廻廊に向かつて 月光を踏みながら行く。

閑かな秋の夜長の情景を詠った詩である。転句の子どもの様子は「書物を放りだして眠っている」だけで、特に

子ども特有の動きがあるわけではなく、秋の夜の静寂に興を添えている程度である。

② 柏原山寺冬日雜題 十六首 (五)

漫漫遙夜薄窮冬 抱膝孤吟苦鮮涼 漫漫たる 遙夜 窮冬に薄る、膝を抱へて 孤吟 鮮きに苦しむ。
 偃火童眠驚爆炭 跌蒲僧嬾失鳴鐘 火に偃りて 童は眠り 爆炭に驚き、蒲に跌す 僧は嬾り 鳴鐘を失す。
 疎松月送窓紗影 遠杵風傳村塙春 疎松 月は送る 窓紗の影、遠杵 風は傳ふ 村塙の春。
 頼有往賢長不死 卷中時遇且從容 頼にも 往賢の長く 死せざる有り、卷中 時に遇ひて 且つ從容。

〔六如庵詩鈔〕二編卷二

夜は長く十二月も迫ってきた、膝を抱えてひとり詩を作りながら楽しみの方に苦しんでいる。

火に近寄って眠っていた子どもは炭火の弾ける音に眠気を覚まし、蒲の座布団に胡座をかいていた僧は横着をして鐘を鳴らすのを忘れている。

疎らな松の葉から洩れる月光は窓の薄ぎぬを透かして光を投げかけ、遠くの村落からは白をつく杵の音が風に乗って聞こえてくる。

幸いにも昔の賢人たちは永遠の生命を持っており、書物の中で時々出逢うと暫くゆったりと落ち着いた気持ちになる。

〔窮冬〕冬の末。陰曆十二月。〔偃火〕火に近寄る。〔爆炭〕ぱちぱちと弾ける炭火。〔跌蒲〕蒲の座布団の上にあぐらをかいて坐る。〔村塙〕村を取り囲んだ砦。転じて村のこと。〔春〕白で粟などの穀類をつく。

子どもは第三句に詠われているが、特に子どもらしい情趣が詠われているのではなく、その場の情景描写の一部に過ぎない。この詩も「子どもを詠う詩」とは言えない。

③ 嵯峨別業四時雜興 三十首 (八)

深巷風柔草已生 日長無客叩柴荆 深巷 風柔かにして 草は已に生じ、日は長くして 客の柴荆さいけいを叩く無し。
 牀頭白氏文雙帙 竹外黃鸝歌一聲 牀頭の白氏 文は雙帙、竹外の黃鸝くわうり 歌は一聲。
 童稚噉茶慵乍睡 獨兒臥褥倦還驚 童稚 茶を噉ひき 慵ろうくし 乍たちまち睡り、獨兒わじ 褥じよくに臥して 倦み 還また驚く。
 明朝山寺看花約 欲勒隣僧相伴行 明朝 山寺 花を看る約あり、隣僧を勒し 相伴ひて 行かんと欲す。

〔六如庵詩鈔〕二編卷二

村里の奥 風が優しく吹いてきて草が已に生えだし、日は長くなったが我があばら屋の柴の扉を叩く客はない。枕元には『白氏文集』が二つの帙に収まっており、竹林の外では鶯が一声鳴いた。

子供が茶をひいていたが大儀くなり睡ってしまい、犬のちんは布団に臥せていたが飽きてまた起き吠え出す。明日の朝は山寺で花看をする約束があり、隣の坊さんを引つ張り出して一緒に行こうと思う。

「深巷」村里の奥。「柴荆」柴といばら。あばら屋のこと。「雙帙」二つの文筒。「黃鸝」高麗鶯。「獨兒」犬の名、ちん。「臥褥」敷物に寝そべる。「勒」引つ張って行く。

この詩の五句も前二首の詩と全く同じような情景の一部で、子ども特有の描写ではない。茶臼を噉ひきかけて、その仕事をやり果おぼせないで眠り込んでいるというのが、子どもらしいといえはそうだが、ただそれだけのことで、長閑な春の夜の情景描写に一役買っているところである。

2、道光上人

六一八首のうち、「子ども」が詠み込まれた詩は次の二首だけである。

① 題畫

長松樹下結茅庵 門外紅楓映碧潭

長松樹下茅庵を結ぶ、門外紅楓碧潭に映ず。

應是秋山行採栗 一雙童子手提籃

應まさに是れ秋山行きて栗を採るなるべし、一雙の童子手に籃かごを提ぐ。

〔聽松庵詩鈔〕卷五

背の高い松の樹の下に茅庵を結ぶ、門の外の紅く色づいた楓が碧い淵に映っている。

山は今秋真つ盛り行つて栗を拾おうとしているのだから、二人の子どもは手に籠を提げている。

② 題畫

白雲橋下水淙淙 有客攀林翠幾重

白雲橋下水淙淙たり、客有りて林に攀よづ翠幾重ぞ。

應赴謫仙前日約 髻髻童子抱琴從

應まさに謫た仙くせん前日の約に赴かんとするなるべし、髻てうげ髻げうの童子琴を抱きて從ふ。

〔聽松庵詩鈔〕卷五

空には白雲橋の下は水がさらさらと流れている、客が来たので林に攀のぼれば翠が幾重にも重なっている。

謫仙の人との前日の約束に赴こうとしているのだから、お下げ髪の子どもが琴を抱いてついで行く。

〔謫仙〕天上から罪せられて此の世に来た仙人。人間界に珍しい詞才のある人のたとえ。唐の李白を讀めた。

「画に題す」であつて実景ではない。二首とも子どもは結句に描かれているが、実景ではないからか単なる説明であつて情趣は感じられない。

3、北條霞亭

四十四歳の若さで亡くなつたので、詩の数も二四一首しかない。総詩数が少ないこともあるが「子どもを詠う詩」は次の二首だけである。

① 雨夜即事

寂寂深霄坐 倦看書懶披 寂寂たり 深霄しんせうの坐、看るに倦みて書披ひらくに懶ものうし。

山童凭几睡 厨鼠避燈窺 山童 几に凭よれて睡り、厨鼠 燈を避けて窺ふ。

衾底思花處 枕頭聽雨時 衾底 花を思ふ處、枕頭 雨を聽く時。

向來幽意熟 夢亦入吟詩 向來きやうらい 幽意熟し、夢も亦吟詩に入る。

ひっそりとして雨の夜も更けた座敷、読書に飽きて書物を披くのも億劫だ。

〔嵯峨樵歌〕

山家の子は机に凭れて居眠りを始め、厨では鼠が暗がりでもどりを窺っている。

夜着にもぐつて 雨に撲たれる花を思い、枕元に雨の音を聴く時。

夜々から抱いていた幽かな情趣が熟し、夢の中でも亦た詩の世界に入る。

〔深霄〕夜が深まった頃。「向來」從來。前々から。

頸聯に「山童凭几睡」と子どもが詠われているが、これは辺りの情景の一部に過ぎないのであって、子どもを詠っているとは言えない。むしろ四句の「厨鼠避燈窺」——厨の鼠は灯火を避けてどりをじっと窺っている——という鼠の描写に情趣が感じられる。

② 竹田觀螢詩

觀螢諸伴半兒童 踊躍嬉嬉趁午風 觀螢の諸伴 半ばは兒童、踊躍やうやく 嬉嬉として午風を趁おふ。

廿輩一行何所帶 紗囊苕帚或魚籠 廿輩の一行 何の帶ぶる所ぞ、紗囊せうさう 苕帚てうしゆう 或いは魚籠ぎよろう。

〔霞亭二稿〕薇山三觀觀螢

觀螢の連れの半分は子どもだ、小躍りし嬉嬉として昼過ぎの風を追いかけるように走って行く。

二十人ばかりの一行は何を持っていかかと思つたら、練り絹の袋草箒中には魚を入れる籠など。

「若帚」柄の長い草ほうぎ。

螢狩りに行く子どもたちの嬉しそうな様子を詠った詩であるが、承句の「踊躍嬉嬉趁午風」は、単に語句の上での子どもの様子を説明したものであつて、情趣が膨らまない。子どもの動く状態を描くことで、「踊躍嬉嬉」とした状態が伝わってくるような表現であることが望まれる。

六如・道光上人・北條霞亭の「子どもの詠われた詩」は茶山とは比較にならないほど少ない。六如は僧侶であるから詠み込まれた「子ども」は難僧で茶山が取りあげるその辺りの子どもとは性質が違ふ。なお、面白いのは取りあげた三首とも「眠りこけた子ども」が詠われていることである。「眠りこけた子ども」そのものが、既に子どもらしいと言えるであろう。これらの詩は「子ども」を詠うのではなく、その場の情趣を現すための素材であつて、一首目は「秋夜」の情緒、二首目は「冬夜」の赴き、三首目は「春日」の気だるいような長閑さを詠っているのである。この「眠りこけた子ども」はそれぞれの詩情を現すには最適の素材である。

道光上人も僧侶ではあるが、殆ど旅をしている人で交遊詩が多く、取りあげた二首だけが「子どもを詠った」詩であつた。しかし、この二首は「題畫」であつて実景ではない。茶山が詠ったように、実際に遊びに熱中している子どもの姿、仕事の手伝いをしてる子どもの姿、ふと目に止まったそこら辺りの子どもの姿を詠った詩ではない。そこが茶山の「子どもを詠う詩」と大きく違ふところである。

北條霞亭は茶山に最も近い存在だからか、幾分茶山に近い雰囲気を感じられる。例えば、「竹田観螢詩」は、塾童を連れて竹田の螢を観に行く時の、塾童の嬉々とした様子を詠ったもので、現に目の前にいる楽しそうな子どもの様子を詠じている。ただその表現が詞の上の説明に終わって、詩に深まりが感じられず、叙情に乏しいという感じを抱かせる。

茶山の詩は、句と句の間に流れる情趣がある。読者に想像を膨らませる何かがある。それは、一言で言えば詩の深みとでもいうものであろうか。読者も今その場において、作者と同じ情景を目の当たりにしているような感覚を抱くのである。同じように女の児たちが嬉々として螢狩りをする様子を詠じた「即事」を例にとると、「夜は更けて樋の口も閉じられ、辺りは物音一つしない静寂」と起句・承句で農村の夜の静まり返った情景を詠い、その静寂を破って螢狩りの女の児たちがあらわれた。転句・結句で「女兒諷撲流螢去、復た門前楊柳陰」（女兒諷撲まきて流螢は去り、復た到る門前楊柳の陰かげ）と表現する。螢狩りの女の児たちの描写は「女兒諷撲」だけである。「流螢去」つまり、「流れるように飛んでいた螢はどこかに散っていつてしまった」というので、女の児たちがどんなに賑々しく、嬉々として螢狩りを楽しんだか想像できる。更に結句で、「暫くすると螢は再び戻ってきて門前の柳の陰で光っている」と結んで、転句と結句の間に流れる暫しの時間の経過、転句の「動」の場面と結句の「静」の場面の描写によって、女の児たちの嬉々とした喧しさが際立ち、その「動」の後にくる「静」は一層引き立つのである。このように茶山の詩には、詞の上の説明だけで終わらない余情がある。

まとめ

茶山は三十四歳で塾「黄葉夕陽村舎」を開いて子どもたちの教育に携わった。その塾を堅実なものとするべく、寛政八年（一七九六）四十九歳の時、藩の郷塾として取り立てて貰うよう、陳弁書をもって願ひ出て認可され、塾名も「廉塾」と改めて発足した。「廉塾」は茶山が創設し、経営、講書、塾生の教育には、実質的に茶山自らが当たった。茶山の目は早くから子どもに向けられていたのである。子どもの善ない成長が茶山の願ひであった。十八年の生涯を、塾童の教育に費やした茶山だから、子どもに対する愛情は一入のものであったと想像されるし、教

育者の立場から、常に天真爛漫な子どもを目の前にして、その純真で真つ直ぐな心をいつまでも持つていて欲しい、又、大事にしてやりたいと願う気持ちも強くなつていったものと考えられる。

ここに詠われた子どもたちの言動は心の純粹な発露である。そうした子どもたちの言動が遺憾なく詩に表現されて、人々の心に共感を喚ぶのは、茶山の作詩の姿勢にあると思われる。「茶山の作詩の姿勢」は、次に掲げる『黄葉夕陽村舎詩』前編卷三に収められている「途上」と題する七言律詩の尾聯によつて窺うことができる。

途上

笨車嘔軋繞林行 草徑沙堤十里程 笨車嘔軋し林を繞りて行く、草徑沙堤 十里の程。

半澗風漪人馬影 一村烟竹鳥鳥聲 半澗風漪、人馬の影、一村烟竹鳥鳥の聲。

秋來栗社毳初結 水後檀田殼未成 秋來栗社毳初めて結び、水後檀田殼未だ成らず。

聽取童謠愛眞率 愧吾詩語事經營 童謠を聽き取りて眞率を愛し、吾が詩語の經營を事とするを愧づ。

『黄葉夕陽村舎詩』前編卷三

ぼる車で林を繞つて行く、草の小径と堤の十里の程。

谷川のさざ波に人馬の影が映り、村につけば霧に霞む竹藪に鳥たちの声

秋が来て栗林には、毳が初めて実を結び、水の出た後の稲田ではまだ殻ができていない。

童の謡に耳を傾けてその純真さに聴き惚れ、詩句の巧みさに拘つている自分を愧じている。

〔笨車〕粗末な車。〔嘔軋〕車がガタガタ軋りながら行く。〔草徑〕草の茂る小径。〔沙堤〕土手。砂の堤。

〔半澗〕狭い谷川。〔風漪〕風が吹いて起こる細波。〔水後檀田〕水が出た後の稲田。〔眞率〕純真そのものである。〔事經營〕巧みな表現に拘る。

子どもの「純真さ」に寄せる茶山の思いは歳を重ねるにつれて更に強くなり、子どもの姿、言動を詩に詠うよ

うになったのであろう。それは将来を託す子どもたちの健やかな成長を願う、老人茶山の切なる思いの込められたものであったであろうし、或いは本来 人間の性は「善」であることを、子どもの純粹さを通して証明しようとしたのかもしれない。儒学を学ぶ茶山の心の中には、いつも「仁とは、人を愛することなり」（『論語』顔淵篇）、
「人の性は善なり」（『孟子』告子上篇）という教えが在ったはずである。

更に付け加えるならば、頼山陽に関わる一件が関係しているとも考えられる。文化六年、茶山六十二歳の暮れに、三十歳の頼山陽を「廉塾」の都講として迎え、茶山は心強い後継者が出来たと喜んだ。しかしそれも束の間、山陽は一年余りで京都に行ってしまった。茶山は山陽が去ることになる二か月ばかり前の大晦日に、「除日」と題して次のような詩を詠んでいる。

除日

六十三載夢中移 前路囪囪亦可知 六十三載 夢中に移る、前路 囪囪 亦知るべけんや。
明日村閭又春色 閒遊仍舊作兒嬉 明日 村閭 又春色、閒遊 舊に仍りて 兒嬉を作さん。

六十三歳を振り返ると夢のように過ぎた、これからの見通しは一体どうなることだろう。
〔『黄葉夕陽村舎詩』後編卷三〕

明日の村里にはまた春が訪れるが、のんびりとこれまで通り子どもと共に遊ぶとしよう。

頼みにしていた山陽は去って行ったが、茶山の前には多くの子どもがいる。この子どもたちの為に新しい年も「舊に仍りて兒嬉を作さん」と心を新たに作る茶山の姿がこの詩から窺える。この頃から茶山の「子ども」を詠う詩の数は多くなり、子どもの心情に一段と踏み込んだもの、自分自身が作中に登場する詩が多くなっている。山陽を失った心の空洞を埋めてくれたのは、純粹で天真爛漫な子どもたちの姿だったのであろう。

三、子どものいる風景詩【表】

代		13 首		30 歳 代		8 首		35 歳		年代歳					
		41	40			39	38	37	以前	番					
15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	番
頼千秋餞余本安橋水樓分得飛字		宮島	路上二首 (一)	赤阪	途中三首 (三)	赴鴨方途中 (二)	赴鴨方途中 (一)	孤吟	同海道士及祥三惟文夜至自唐尾山集		途上	即事	田家	夏日田家同土信子發子晦賦	
													春日雜詩 其の一	春日雜詩 其の二	詩 題
七律	七律	五絶	五律	五絶	七絶	七絶	五律	五古	七律	七絶	七古	七絶	五古	五古	形式
天明 8 6 20	天明 8 6 18	天明 8 6 17	天明 8 6 6	天明 8 (1788)	天明 7	天明 7	天明 7	天明 7 (1787)	天明 6	天明 6 (1786)	天明 5 (1785)	天明 4 (1784)	天明 2 年以前	天明 2 年以前	時代年月日
〃	〃	〃	〃	〃	〃	前 3	〃	〃	〃	前 3	〃	前 2	〃	前 1	巻

	60 歲 代										17 首							
70	69 68			67 65				64 63			62			59				
53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35
即事	秋日雜詠 (六)	螢七首 (五)	八月朔日	大森	大野	尼崎舟中即事三首(二)	岡山道上	即事	病中暑甚憶舊事而作六首(五)	病中暑甚憶舊事而作六首(一)	元日呈諸君子乞和	午日	松島路上所見	釣月樓書所見	即事	村居 二首(二)	村居 二首(一)	桃島詩會途中記事十首
七絕	七絕	七絕	七絕	七絕	七絕	五絕	七絕	七絕	七絕	七絕	七絕	七律	七絕	七絕	七絕	七絕	七絕	七絕
文化14 (1817)	文化13	文化13 (1816)	文化12 8	文化11 6	文化11 5	文化11 5	文化11 5	文化9 (1812)	文化8	文化8 (1811)	文化8 1	文化7 5	文化6	文化6	文化6	文化6	文化6 (1809)	文化3 (1806)
後7	後7	後6	後6	後6	後6	後5	後5	後4	後4	後4	後3	後3	後3	後3	後3	後2	後2	前8

70 歳 代										29 首								
78 77					76 73					72 71								
72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54
偶成	畫	晚翠萼即事	即事	子成隨母而來有詩依韻以呈日值中亥	題畫二首	病中作二首(二)	病中作二首(一)	元日	畫	三月盡與森渡二童閑行分得晴字	夏日雜詩十二首(十)	夏日雜詩十二首(九)	夏日雜詩十二首(四)	舊作	七夕同諸子賦	村居秋來	寄題森岡氏觀泉亭	路上
七絶	五絶	七絶	五律	七絶	五絶	七絶	七絶	七絶	五絶	七絶	七絶	七絶	七絶	七絶	五律	七絶	五律	七絶
文政8	文政8	文政8(1825)	文政7(1824)	文政7	文政6	文政6	文政6	文政6	文政5	文政3	文政2	文政2	文政2	文政2(1819)	文政元	文政元(1818)	文化14	文化14
6			10	7	3	3	6	1	春	3	14							
〃	〃	遺5	〃	遺4	〃	〃	〃	遺3	遺2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	後8	〃	〃

詳	未	80 代 4 首															
		80				79											
88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73		
雨中看蓮		夏日同諸兄友分字賦此 祥三宅集分得遙字	病中即事二首 (又)		春詞十一首 (一)	即事	獨讀閑窗	除日三首	書狡童調醉人詩後	醉人圖	童子調醉人圖	藤江	夏日即事	苦寒二首 (一)	三原路上	牧牛	
七絕	五律	五律	七絕	五律	七絕	七絕	七絕	七絕	七絕	七絕	五絕	七絕	五絕	七絕	七絕		
不明	不明	不明	文政10 秋	文政10	文政10 (1827)	文政10 春	文政9 12 22	文政9	文政9	文政9	文政9	文政9 (1826)	文政8	文政8	文政8		
後2	"	後1	"	"	"	遺7	"	"	"	"	"	遺6	"	"	"		

七言絕句 六十首
 五言律詩 九首
 七言古詩 一首
 五言絕句 十首
 七言律詩 六首
 五言古詩 二首

第五節 茶山の詩論

茶山には纏まつた詩論はないが、『黄葉夕陽村舎文』（卷三）に載せられている、「六如庵詩第二抄序」、「復古賀太郎右衛門書」、「霞亭詩集序」、「竹田器甫序」、「刻聽松庵詩序」などから、その一端を窺うことができる。

（1）六如庵詩第二抄の序

『六如庵詩第二抄』は寛政八年（一七九六）の九月に出来上がり、寛政九年（一七九七）五月に刊行されている。

六如庵詩第二抄序

六如上人之詩、才具既贖、運用亦敏。又善録微事、而不流纖弱、翹翹然爲一代宗匠云。蓋以近日之詩、劉秀典麗、關於白石鳩巢、闊大關於徂徠、奇峭關於蛻岳南海、雄拔飄舉、關於秋玉山。而未曾有爲上人之體者。耳食之徒、或疑焉。

夫學詩者、誰不規於唐哉。然大抵求惟肖於形迹之間、拘拘乎、唯語句是視。夫李既不爲杜。杜何嘗爲李。王孟高岑、自爲王孟高岑。大非如後人句模語擬、千篇一律翕然雷同也。何者、詩本於情、而情轉於所遇。李之所喜、杜亦喜之。而賊中辛苦、同谷短衣、固異酒間笑傲、郎官錦袍。王孟所好、高岑亦好之。而輞川松筠、鹿門烟月、亦異軍營冰雪、郡省風塵。則其吟詠之發、亦不得不異也。唐人之哀樂悲歡、不異我之哀樂悲歡。而我邦今時治平優

游、與開元天寶奢侈喪亂不同。況人心如面、吹萬不同。所遇雖同、所發有異。

今若牽而合之、襲而取之、則與興境乖、名與實離。譬如画家寫生。生物在前、舍而求之古圖、形貌綠色、一依原本。而眼前所見、邈然不顧。此豈眞照也。此豈眞詩也哉。

上人初非有意於立異。隨其所遇、由其所觸、發爲上人之體。則其於唐人、自有不同而同、不異而異者。謂之神合、或不誣矣。

客曰、劉秀典麗、雄拔飄舉、於詩已足。何必孳孳焉、求其他之爲。余應之曰、數家所長、上人未必不兼有。而餘勇所及、闢其所未闢也。上人詩、前編既行。今又、有斯刻。子其就而觀焉。間有與前編異者。亦、以其境不同也。此上人體也。

六如上人の詩は、才の具ること既に贖あがなにして、運用も亦敏なり。又善く微事を録すれども、纖弱に流れず。翹翹せうせう然として一代の宗匠爲りと云ふ。蓋し、近日の詩を以もつみるに、劉秀典麗は、白石・鳩巢ひやくしやく・きゅうさうに闢ひらけ、闊大は徂徠そらいに闢ひらけ、奇峭きせうは蛻岳ていごく・南海なんかいに闢ひらけ、雄拔飄舉は、秋玉山あきぎやまに闢ひらく。而れども未だ曾て上人の體を爲す者有らず。耳食の徒、或いは焉こゝを疑はん。

夫れ詩を學ぶ者、誰か唐を規とせざらんや。然れども大抵は惟おもひるに肖かたを形迹の間に求め、拘拘こうこう乎として、唯だ語句を是れ視るのみ。夫れ李は既に杜と爲らば、杜何ぞ皆て李と爲らん。王孟高岑、自ら王孟高岑爲り。大いに後人の句模し語擬し、千篇一律、翕然あつぜんとして雷同するが如きに非ざるなり。何となれば、詩は情に本づき、情は遇ふ所に轉ずればなり。李の喜ぶ所、杜も亦之を喜ぶ。而れども賊中の辛苦、同谷の短衣は、固より酒間笑傲、郎官錦袍に異なる。王孟の好む所、高岑も亦之を好む。而れども輞川しやうけんの松筠、鹿門の烟月は、亦軍營の冰雪、郡省の風塵に異なる。則ち其の吟詠の發するや、亦異ならざるを得ざるなり。唐人の哀樂悲歡は、我の哀樂悲歡に異ならず。而るに我邦わがくに今時の治平優游は、開元天寶の奢侈喪亂と同じからず。況んや人心は面

の如きも、吹萬すばんは同じからず。遇する所同じきと雖も、發する所異なる有り。

今若し牽きて之に合し、襲ひて之を取らば、則ち興は境と乖そむき、名は實と離る。譬へば画家の生を寫すが如し。生物前に在るに、捨てて之を古圖に求め、形貌綵色しつゝ一に原本に依る。而して眼前に見る所、邈然ばくぜんとして顧みず。此れ豈に眞の照ならんや。此れ豈に眞の詩ならんや。

上人初より異を立つるに意有るに非ず。其の遇する所に隨ひ、其の觸るる所に由り、發して上人の體と爲る。

則ち其の唐人に於けるや、自ら同じからずして同じく、異ならずして異なる者有り。之を神合と謂ふも、或いは誣しひざるなり。

客曰く、劉秀典麗、雄拔飄舉は、詩に於て已に足れり。何ぞ必ず拏じ拏として、其の他に求むることを之爲なさんと。余之に應へて曰く、數家の長する所、上人未だ必ずしも兼ね有せずんばあらず。而れども餘勇の及ぶ所、其の未だ闕ひらかざる所を闕くなり。上人の詩、前編既に行はる。今又斯の刻有り。子其れ就きてこれを觀よ。前編と異なる者有らん。亦其の境の同じからざるを以てなり。此れ上人の體なり。

〔六如上人〕(一七三四〜一八〇一) 天台宗の詩僧。我が國に宋詩の影響を受けた写實的・叙事的な詩があらわれたとき、先驅者として新しい詩風を開拓した詩人である。

ここで茶山が主張しているのは、

① 六如上人の詩は才能が既に十分に具わっており、才能の活用も氣が利いている。細かいことも巧みによく表すが、繊細で弱々しくはない。高く抜きん出て一代の宗匠の風格を備えている。

② 詩を学ぶ者は、誰もが唐詩を手本とするが、大抵は形ばかり似せることに拘り、ただ語句を見るだけで情が伴わない。ある人が喜び好むところは、大抵の人が喜び好むものであるが、それを發する心は各人各様であるのだから、千篇一律の詩が出来るわけがない。それぞれが抱いた興趣が、それぞれの境地から發せられてこそ、

真の詩であると言えるのだ。

③ 上人の「前編」は既に刊行されているが、この度の「第二抄」は「前編」と異なるところがある。それは、境地が同じでないからであり、それが上人の体なのである。

と云うことである。

(2) 古賀太郎右衛門(穀堂)への復書

「復古賀太郎右衛門書」は次に掲げる事柄から、文化六年(一八〇九、穀堂三十二歳)に書かれたものである。

「古賀太郎右衛門」(一七七八〜一八三六)肥前国佐賀の人。名は巒(たね)、字は溥卿(ふけい)、通称は太郎右(左)衛門で穀堂と号した。寛政の三博士のひとりと言われた古賀精里の長子。江戸で父の塾(昌平塾)に学び、のち佐賀に帰藩して藩校弘道館の教授となった。

穀堂は文化六年(一八〇九、穀堂三十二歳)十月四日、藩主鍋島侯に扈從(こじょう)して江戸への途中、神辺に立ち寄り一泊している。『菅家往問録』(『広島県史』近世資料編VI)に穀堂は次のように認めている。

文化六年冬十月四日、從藩君東觀、宿于神邊驛、謁茶山先生。先生款留命酌、叙舊話新。不勝感戢。自覺病累多年、廢書不講、面目可憎、語言無味。對先生僊標道骨、卓犖塵表者、不覺爽然自失。

西肥古賀巒謹録

文化六己巳冬十月來謁

文化六年冬十月四日、藩君の東觀に従ひて、神邊驛に宿し、茶山先生に謁す。先生款留(くわうりゅう)して酌を命じ、舊を叙し新を話す。感戢(かんしふ)に勝(た)へず。自ら覺ゆ病累多年、書を廢して講ぜず、面目憎むべく、語言味(あじ)はひ無しと。先生の僊標道骨、塵表(ちんたう)に卓犖(たつりやく)たる者に對して、覺えず爽然自失す。

『菅家住間録』は「廉塾」を訪れた者に、一筆何かを書き留めて貰う為の「記録帳」とでもいうべきものである。茶山の発案により、文化二年（一七〇五）四月二十日から書き始められ、茶山が歿してからも書き継がれて、万延元年（一八六〇）七月をもって終わっている。「款留」欲び留める。「感戢」感激に堪えない。「戢」おさめる。「僊標」仙人の風格。脱俗の風。「塵表」浮き世の外。「卓犖」高く抜き出る。非常に優れ抜き出る。「爽然自失」失意の様子。

この時の茶山日記に、

（十月）四日、晴 ……夜、古賀 溥卿（穀堂の字） 來り、二物を惠む。侯の駕に従ひて東行するなり。

と認められている。

後日、穀堂は「黄葉夕陽村舎」を訪ねて一泊したときのお礼や、感想を認めた手紙を茶山に送った。その書簡に対する茶山の復書「復古賀太郎右衛門書」の書き出しには次のようにある。

辱賜書。足下既侍尊大人於大學。又曰、與宿儒才人、周旋切磋之益、過從之歡。想當極人間快樂、而猶能顧鄙夫於二千里之外。雖君子汎愛、抑亦羊棗瘡痂之嗜、愧感曷勝。拙詩蒙推獎、自省赧然。瑤篇一軸、摘評一二。以寓盡各之意、非自是以非人。亦不敢辭尊大人之命爾。去年既附便鴻。不知達否。筆資之高、點染之雅、足下既能自辦。有不待他人指揮者。請、更訴鄙懷、以質之左右。

賜書を辱うす。足下 既に尊大人に大學に侍す。又曰く、宿儒才人と、周旋切磋の益、過從の歡ありと。想ふに當に人間の快樂を極むべくして、猶能く鄙夫を二千里の外に顧る。君子 汎愛すと雖も、抑も亦 羊棗瘡痂の嗜、愧感 曷ぞ勝へん。拙詩 推獎を蒙り、自省 赧然たり。瑤篇一軸、一二を摘評せん。以て盡各の意を寓するも、自らはれ以て人を非とするに非ず。亦敢て尊大人の命を辭せざるのみ。去年 既に便鴻に附す。知らず 達するや否や。筆資の高、點染の雅、足下 既に能く自ら辦ず。他人の指揮を待たざる者有り。請ふ、

更に鄙懐を訴へ、以て之を左右に質さん。

「尊大人」他人の父。「宿儒」経験の深い学者。「切磋」学問や道徳を修める。「過從」訪問すること。「鄙夫」頑固者。田舎者。此処は茶山自身を謙遜していった語。「汎愛」広く愛を及ぼす。「汎」は広く全体にわたる。「羊棗瘡痂」「羊棗」は「棗」のことで、『孟子』盡心下に「曾皙羊棗、而曾子不忍食羊棗」（曾皙羊棗を嗜む。而して曾羊棗を食ふに忍びず）と有る。「曾子の父、曾皙は棗が好きであつた。曾子は父亡き後、棗を食べると父のことが思い出されて悲しいので食べなかつた」という。孝心を表す譬え。「瘡痂」はかさぶた。『琅琊代醉編』「瘡痂」を食べる劉邕の話がある。「嗜」心がけ。「愧疚」恥じ感じる。「瑤篇」「瑤」は物事の美称。立派な書物。「盍」なんぞせざる。「何不」と通じ用いられる。『論語』公治長篇「盍各言爾志」（盍ぞ各の爾の志を言はざる）に本づく。「萬」他のものに寄託する。頼む。「便鴻」ついでに書を寄せる。「鴻」は漢の蘇武が雁の足に帛書（絹に書かれた手紙）を繫つた故事による語。

「筆資」原稿料。「點染」絵を描く。景物を書き添える。「自辨」自分で処理する。「復古賀太郎右衛門書」は更に次のように続けられている。

夫詩言志、情生文。無待於外者也。唐人之詩、家家異體。譬如婦女容顏。飛燕楊妃、豐儉不同、而各能悅人、無待於外也。今時之詩、人人同調。譬如婦女粧飾。烏唇蟬鬢、爭求入時、而愈喪其真、徇於外。喜怒哀樂、人人有異。山川原隰、在在相同。以人人有異之情、寫在在相同之境。其言豈可齊乎。故詩宜家家異體、不宜人人同調。此自不待論辨矣。

後世之詩、大抵不過爲取娛樂之具。徇於外者、以人之譽己爲悅。比之逍遙自適、無待於外者、其爲娛樂何如也。亦自不待論辨矣。

徇於外者、遺内不省。必也將有不喜而笑、不怒而罵、不哀而哭、不樂而歌。以學言之、欺慊之路、既已岐於此矣。

古人佩玉之微、猶有以養其德。況詩之言志、其可不有擇乎。述實事寫實際、不做前人輩、不學時世粧、乃始爲非僞詩也。佳山勝水之難忘、良辰美景之可樂、戀友於天末、惜別于酒間。情之生文、有時沛然不能自己、在徇於外乎。興到而作、不務多、意盡而止、不必成篇。不拘拘乎妍媸、不屑屑乎毀譽。所謂轉法華、不法華轉者、而我所以取娛樂、自在於其中。夫豈待人之譽己乎。若夫課題諷諭、樂府画景、多出於想像寄托。有癡人前不可說夢者、亦期於問心無愧而已。招拾幫湊、違心飾情、假饒飄逸似李、沈鬱似杜、高古冲澹似王孟韋柳。只是粧飾粉黛假、非眉目姿態之美。謂之眞詩可乎。

故能不學唐人者、乃爲能學唐人也。何必規模唐人之爲。此僕之所聞於師友、以爲信然。今敢爲左右述之。雖然學殖不富、則作料不副急。才力不優、則運用不隨心。要之在讀破萬卷而已。：

夫れ詩は志を言ひ、情は文を生ず。外に待つ者無きなり。唐人の詩は、家家體を異にす。譬へば婦女の容顏の如し。飛燕・楊妃は、豐俏ほうせう同じからざるも、而れども各の能く人を悦ばすは、外に待つ無ければなり。今時の詩、人人調べを同じくす。譬へば婦女の粧飾の如し。烏唇蟬鬢せみびん、争ひて時に入るを求めて、而も愈いよよ其の眞を喪うしなふは、外に徇たづへばなり。喜怒哀樂、人人異なる有り。山川原隰、在在同じからず。人人異なる有るの情を以て、在在同じからざるの境を寫す。其の言豈ひとに齊ひとしかるべけんや。故に詩は宜しく家家體を異にすべく、宜しく人人調べを同じくすべからず。此れ自ら論辨を待たず。

後世の詩は、大抵娛樂を取るの具と爲すに過ぎず。外に徇たづふ者は、人の己を譽むるを以て悦びと爲す。之を逍遙自適、外に待つ者無きに比すれば、其れ娛樂と爲すは何如。亦自ら論辨を待たず。

外に徇たづふ者は、内を遺わすれて省みず。必ずや將に喜ばずして笑ひ、怒らずして罵り、哀しまずして哭なき、樂しまずして歌ふこと有らんとす。學を以て之を言へば、欺慊ぎけんの路、既すで己こに此に岐わかる。古人佩玉の微、猶以て其の徳を養ふ有り。況んや詩の志を言ふは、其れ擇たく有らざるべけんや。實事を述べて實際を寫し、前人の輩ひともに倣ならは

ず、時世の粧を學ばざれば、乃ち始めて僞詩に非ずと爲すなり。佳山勝水の忘れ難き、良辰美景の樂しむべき、友を天末に戀ひ、別れを酒間に惜しむ。情の文を生ずるや、時有りて沛然として自ら已む能はざるは、外に徇ふに在らんや。興到りて作り、多きを務めず、意盡きて止む、必ずしも篇を成さず。妍媸に拘拘たらず、毀譽に屑屑たらず。所謂法華を轉じ、法華に轉ぜられざる者にして、我の娛樂を取る所以は、自ら其の中に在り。夫れ豈に人の己を譽むるを待たんや。夫の課題の諷諭、樂府の画景の若き、多くは想像寄托より出づ。癡人の前に夢を説くべからざる者有り。亦心に問ひて愧無からんことを期するのみ。拈拾、幫湊、心に違ひて情を飾り、假饒飄逸李に似、沈鬱杜に似、高古冲澹王孟韋柳に似る。只是れ粧飾粉黛の假にして、眉目姿態の美に非ず。之を眞詩と謂ふは可ならんや。

故に能く唐人に學ばざる者は、乃ち能く唐人に學ぶことを爲すなり。何ぞ必ずしも唐人の爲すを規模せんや。此れ僕の師友に聞く所、以て信に然りと爲す。今敢て左右の爲に之を述ぶ。然りと雖も學殖富まざれば、則ち作料急には副はず。才力優れざれば、則ち運用心に隨はず。之を要するに萬巻を讀破するに在るのみ。：

「無待於外者也」外からのものに期待すべきではない。「飛燕」前漢の孝成帝の趙皇后の号。体が軽く歌舞に妙であつた。「豐僧」豊かで見め良い。「蟬鬢」蟬の羽のように透き通つた髪。美人の髪のとえ。「徇於外」外にならう。「論辨」筋道を立てて意見を述べたり書いたりすること。「逍遙自適」思いのままに生活すること。「欺慊」だますことと心に満足すること。「佩玉之微」僅かな違い。「佩玉」は大帯にかけて飾りとした玉。

「可无有擇乎」多くの中から良いものを選ばなくてよからうか。否。「良辰美景」良い時節の美しい景色。「沛然」大雨の降る形容。恵みの厚いこと。「妍媸」「妍」は美しい。「媸」は醜い。「拘拘」こたわる。稽まつて自由にのびないさま。「毀譽」そしりと誉れと。悪口と賞賛と。「屑屑」務め励むさま。こせこせするさま。「痴人説夢」愚か者に夢の話をする。ばかげたことのとえ。「寄託」頼み寄せる。身を寄せる。「拈拾」拾い集

める。「斟湊」「斟」はたすける。「湊」は集める。「假饒」一時的な豊かさ。「飄逸」俗事に拘らず気の向くままに振る舞うこと。「冲澹」冲淡。心が空しくあつさりしている。「王孟」王維と孟浩然。「韋柳」韋応物と柳宗元。「吟哦」詩歌を歌う。「鄙意」自分の謙称。「痼疾」長患い。「攝養」養生する。「嚙嚙」言おうと言えないさま。「趨趨」進もうとして進まないさま。「偏師」一部の軍隊。「刺刺」くどくどと口数の多い形容。「拙」おしはかる。考える。「固陋」見聞が狭くて古くさく頑固なこと。「神殫」心を尽くす。「攀和」「攀」は物に掴まってよじのぼる。「寵錫」寵賜。天子の恩寵によつて授けられた物。「芹敬」粗品。寸志。書翰文に用いる語。「勿鄙」つまらない物だと言わないでください。

ここで茶山の主張をまとめると、

- ① 実事、実際の有るがままを写し、前人の聲みに倣わず、時流に合わせるようなことをしないで、自分の表現で述べ写すのが「真の詩」である。
- ② 詩は心の中に湧いてくる情で、時期に遭い自然に已むに已まれぬ気持ちになって、それが抑えきれなくなったとき、言葉となつて出てくるものである。
- ③ 詩は自分の志を詠うものであつて、外からのものに期待すべきではない。唐の詩人の詩がよく人を満足させの外に期待しないからである。現今の詩は、時流に受け入れられることを求めて、益々その真実を失つてしまひ、皆同じ調子である。それは外に徇うからである。外に徇うものは、人が自分を誉めてくれることを悦びと爲し、自分の内を忘れて省みない。こうしてできた詩を「真の詩」と言うことはできない。
- ④ 世間の評価は気にせず、自分の感じた思いを、詠いたいように詠う。それが詩作の楽しみなのだ。と「い」ことになる。

(3) 霞亭詩集の序

『霞亭詩集』は正式な書名は『嵯峨樵歌』となつてゐる。内容は、『嵯峨樵歌』と『霞亭二稿』（薇山三觀）「歸省詩囊」の二部から成つてゐる）が収められてゐる。『嵯峨樵歌』は文化九年（一八一二）四月に出来上がり七月に出版された。茶山が序文を書いてゐる。霞亭は文化九年六月十四日付け書簡で、その時の歎びを次のように父に報じてゐる。

…『嵯峨樵歌』も近々出来上がり申候。大方來月（七月）初旬迄には仕立候積りに御座候。此節雲州の道光上人御上京兼而頼かゝつてたのみつかはしおき遣置候備後福山神邊の老儒菅太仲先生の序文出来参り申候。御聞及も有之候哉、この太仲と被申候人那波魯堂先生（原註、播州の人、寶曆の頃の大儒、京住）門人に而當時は三都にも肩をならべ候人なき程の詩人にて候。尤甚名高き人に御座候。樵歌序文甚おもしろく出来参り辱奉存候。右の道光上人と申は法華の高徳に而、詩も余程出来候人に候、これも菅太仲など懇意の人に候。世間に而甚人の信用いたし僧に御座候。

〔『鷗外歴史文學集』第十卷「北條霞亭」上〕

霞亭詩集序

上國之詩、村上友佐諸賢、唱明季七子於正保慶安之間、而人稍悦大聲壯語。安永、天明之際、子琴、六如始改故轍、而人亦赴新奇巧緻。蓋以厭其舊也。故今之詩、非正保慶安之餘響、則子琴、六如之接武爾。未嘗見挺然特出者云。

頃北條子讓、寄其集、索之序。其詩力寫實境、而不逐時尚。余之所嫌於衆作者、子讓或能言之。夫詩之隨時運、古人所論、固不誣也。我自爲我。而不省其體之入時。唐宋諸公爲然。我不能爲我、從人浮沈。安在其爲詩。子讓、蓋有見於斯矣。

余、嘗有詩曰、桃如紅錦李冰綃、二月仙粧各自驕。若使羣菲同一色、春光不必許嬌嬌。因併書以贈之。

上國の詩、村上友佐の諸賢は、明季七子を正保慶安の間に唱へて、人は稍く大聲壯語を悦ぶ。安永、天明の際、子琴、六如始めて故轍を改めて、而して人亦た新奇巧緻に赴く。蓋し以て其の舊を厭ふなり。故に今の詩は、正保慶安の餘響に非ざれば、則ち子琴、六如の接武なるのみ。未だ嘗て挺然特出の者を見ずと云ふ。

頃 北條子讓 其の集を寄せ、之が序を索む。其の詩は力めて實境を寫して、時尚を逐はず。余の衆作に嚙らざる所の者、子讓或いは能く之を言ふ。夫れ詩の時運に隨ふは、古人の論する所にして、固より誣せざるなり。我は自ら我爲り。而して其の體の時に入るを省みず。唐宋の諸公然りと爲す。我は我を爲す能はず、人に從ひ浮沈す。安んぞ其の詩と爲す不在らんや。子讓、蓋し斯に見る有り。

余、嘗て詩有りて曰く、「桃は紅錦の如く李は氷綯、二月仙粧 各の自ら驕る。若し羣菲をして同一色ならしめば、春光必ずしも嬌嬈を許さざらん」と。因りて併せ書し以て之を贈る。

〔上國〕上方。「明季七子」明代終わり頃の文学者。李攀龍・謝榛・梁有譽・宗臣・王世貞・徐中行・吳國倫の後七子。「安永」一七七二〜一七八〇年。「天明」一七八一〜一七八八年。「正保」一六四四〜一六四七年。「慶安」一六四八〜一六五一年。「餘響」後に残っている響き。余韻。「接武」後からついて行く人の足が、前者の足跡の半ばを踏む。「挺然」高く抜きん出る。「固不誣也」事実を曲げて偽る。「氷綯」氷のように透き通った薄い絹織物。白絹。「仙粧」装うこと。「嬌嬈」艶っぽい。

以上茶山が言わんとするのは、

① 従来の上方の詩は「大聲壯語を悦ぶ」古いしきたりのものであったが、安永、天明の時代に、その古くささから抜け出して、新しく新奇で巧緻な方向に向かったのが、葛子琴、六如上人である。

② 霞亭の詩は極力実境を写して、時流を追わない。自分の体が時流に合うかどうかを考える必要はない。人に從つて浮沈してどうして自分の詩と爲すことができようか。子讓(霞亭の字)はここに於て見るところがあ

る。

③ 桃は紅の錦の如く李は氷のように透き通った薄い絹織物、二月の糝いは各々自ら驕り誇っている。若し多くの芳しい花を同じ一色にならしめば、春光は必ずしも艶っぽい美しさを許さないだろう。

つまり「詩は極力実境を写すこと。時流に迎合したり、人の思惑を考えて作るべきではない」ということである。

(4) 竹田器甫に送る序

文末に「歳餘一日、問以詩變」(歳餘の一日、詩の變を以て問ふ)とあるのは、文化十二年(一一一五)十二月三十日に茶山を訪ねているのでその時のことであろう。文化十三年(一一一六)二月二十六日に故郷の筑前福岡へ帰っているので、この「序」はその時に与えたものと考えられる。

送竹田器甫序

詩無變也。勢而已矣。初唐主詞、承六朝駢儷也。而世當新造、格高氣熾。盛唐主情、情生文而不必句。縱橫變化、於是乎出。中唐主意而易。晚唐復主詞而拘。時當衰運、漸就萎靡。宋復主意、自工入險。元復主情、自穩入淺。明則鑿數朝、儀刑初唐。然優孟而已。要之、厭此思彼、舍彼趨此。有不期然而然者矣。

夫詩源乎性、性不以古今變。則詩豈有變乎。其有變者勢也。然中晚有昌黎義山焉。蘇陸于宋、遺山于元、李何于明。特立翹然、不爲勢所移。此可以見有不變者存焉。

器甫寓余塾、歳餘一日、問以詩變。余爲畧言、臨其將歸也、更筆以爲贈。今時、詩道冗雜、詩說深險。冀器甫之詩不爲其所移也。丈夫處世、自有其道。豈獨詩而已。

詩は變無きなり。勢のみ。初唐は詞を主とし、六朝の駢儷を承くるなり。而れども世は新造に当たり、格は高く氣は熾さかんなり。盛唐は情を主とし、情は文を生みて句を必とせず。縱橫變化、是こゝに於て出づ。中唐は意を主

として易し。晩唐は復た詞を主として拘る。時、衰運に當たりて、漸く萎靡に就く。宋は復た意を主とし、工自り陰に入る。元は復た情を主とし、穩より淺に入る。明は則ち數朝を鑒とし、初唐に儀刑す。然れども優孟なるのみ。之を要するに、此れを厭ひ彼を思ひ、彼を捨てて此れに趨く。然るを期せずして然る者有り。

夫れ詩は性を源とし、性は古今を以て變ぜず。則ち詩豈に變有らんや。其の變有る者は勢なり。然るに中晩は昌黎・義山有り。宋に蘇・陸、元に遺山、明に李・何有り。特立翹然として、勢の移す所と爲らず。此れ以て變ぜざる者の存する有るを見るべし。

器甫、余の塾に寓し、歳餘の一日、問ふに詩の變を以てす。余爲に略言し、其の將に歸せんとするに臨むや、更に筆して以て贈と爲す。今時、詩道は冗雜にして、詩説は漂煦なり。冀はくは器甫の詩其の移す所と爲らざらんことを。丈夫世に處するや、自ら其の道有り。豈獨り詩のみならんや。

〔竹田器甫〕(一七九一—一八二八)筑前福岡の人。名は琮、定琮。通称は定之進・定之允、定之丞、號は榛齋、字を器甫といつた。叔父定夫の嗣子となる。北條霞亭の林崎書院時代の門人で、のち菅茶山に師事。文化十三年、廉塾を辞し帰郷。後に福岡藩儒となつた。〔詩無變也。勢而已矣〕詩の性情は時代が変わつても変化はしない。変わるのは勢いだけである。〔世當新造〕唐が新しく建国するに当たり。〔主意而易〕思いを主として解りやすい。〔主詞而拘〕詞を主として詞に拘る。〔時當衰運、漸就萎靡〕時代が衰運に向かつて勢いがないなつた。〔自工入險〕技巧から、むずかしさに入る。〔自穩入淺〕穩やかから、淺い内容に入る。〔鑒〕手本。〔儀刑〕真似る。〔優孟而已〕楚の役者のように物真似だ。〔優孟〕楚の役者。〔中晩〕中唐・晩唐。〔昌黎〕韓愈。〔義山〕李商隱。〔蘇〕蘇軾。〔陸〕陸游。〔遺山〕元好問。〔李・何〕李夢陽・何景明。〔翹然〕高く抜きんでている。ずば抜けている。〔漂煦〕ふらふらしている。

以上、茶山の主張は、

① 詩は性情（心、感情）を源とし、性情は昔も今も変わらない。変化が有るのは勢である。

② 中唐、晚唐、宋、元、明、それぞれの時代に特別拔き出した詩人がいる。彼らは時勢の推移に影響されなかった。これを以てしても、変化しないものがあつて存在することが分かる。

③ 今の世、詩道は冗雑にして詩説はふらふらしている。器甫の詩が時勢につられて変化しないようにと願うばかりだ。
 ということである。

(5) 道光上人『聽松庵詩』の序

「刻聽松庵詩序」は、この序文の終わりの方に「時に文政壬午秋九月なり。」とあるところから、文政五年の秋に書かれたものと考えられる。

刻聽松庵詩序

初道光上人、介吸海道人、尋余草堂。爾後、北遊南詢、蹤跡飄然。會離雖無常、音耗則不絕、五十年一日也。今茲上人、以諸友人之乞刊其詩、而詢於予與道人。

予曰、上人之詩、與今時詩人之詩、隨鑿隨鑿、但如恐後者不同。何必刊之。近日名家、藝園一派、雄偉闊大、其弊也粗豪。南海諸子、變幻流麗、其弊也纖媚。今之學者、不歸於此、則入于彼、莫非汲汲干譽、孜孜求售焉。

上人津梁之餘、出則尋山弄水、入則涉園接客、其胸中清致、隨遇發露。口之則成佳話、筆之則成好句。冲澹脩遠、自有獨造處。不墮粗豪、不流纖媚、所謂調與時人背者。蓋無意於不朽、而自可以不朽矣。

王敬美、評徐昌穀高叔嗣詩曰、李何有時廢興、而二公則無絕響。余於上人亦云然。其友人所以乞、欲上人百歲之後、時時披玩、以慰思慕之情耳。余與道人、亦同此意。且恐其散逸。則不得不縱臆之。上人一片慈悲心、亦有不

可漠然弗顧者、遂以命梓。

時文政壬午秋九月也。上人齡七十七、長余二年、道人則與余同庚矣。嗚呼多年往還唱酬。而拱木宿草者、何限。幸三人猶在。與謀此舉、似非偶然。乃綴以爲叙、煩道人書之。上人名日謙、字道光。浪華人。其庵號聽松。現在雲州。道人名泰亮、字吸海、福山人。現住尾道。

初め道光上人、吸海道人を介して、余が草堂を尋ぬ。爾後、北遊南詢、蹤跡飄然たり。會離常無しと雖も、音耗則ち絶えざること、五十年一日なり。今茲に上人、諸友人の其の詩を刊するを乞ふを以て、予と道人とを詢ぬ。予曰く、上人の詩は、今時の詩人の詩、隨ひて鏤り隨ひて鬻ひ、但だ後を恐るるが如き者と同じからず。何ぞ必ずしも之を刊せん。近日の名家、護園一派、雄偉闊大にして、其の弊や粗豪。南海の諸子は、變幻流麗にして、其の弊や纖媚。今の学者は、此に歸せざれば、則ち彼に入り、汲汲として譽を干め、孜孜として售を求むるに非ざる莫し。

上人は津梁の餘、出づれば則ち山を尋ね水を弄び、入りては則ち園を涉り客に接し、其の胸中の清致、遇ふに隨ひて發露す。之を口にすれば則ち佳話と成り、之を筆にすれば則ち好句を成す。冲澹脩遠、自ら獨り造る處有り。粗豪に墮ちず、纖媚に流れず、所謂る調べ、時人と背く者あり。蓋し不朽に意無くして、自ら以て不朽なるべし。

王敬美は、徐昌穀、高叔嗣の詩を評して曰く、「李・何時有りて廢興するも、而も二公則ち響を絶やす無し」と。余が上人に於るや亦然りと云はん。其の友人の乞ふ所以は、上人百歳の後、時時披玩し、以て思慕の情を慰めんと欲するのみ。余と道人と、亦此の意を同じくす。且つ其の散逸を恐る。則ち之を縦與せざるを得ず。上人一片の慈悲心、亦漠然として顧みざるべからざる者有り。遂に以て梓を命ず。

時に文政壬午秋九月なり。上人齡七十七、余に長すること二年、道人は則ち余と同庚。嗚呼多年往還唱酬す。

而して拱木宿草の者、何ぞ限りあらん。幸さいはひに三人猶なほ在り。與ともに此の擧を謀るは、偶然に非たがざるが似し。乃ち綴りて以て叙と爲し、道人を煩はせて之を書かしむ。上人の名は日謙、字は道光。浪華の人。其の庵を聽松と號す。現に雲州に在り。道人名は泰亮、字は吸海、福山の人。現に尾道に住む。

〔道光上人〕(一七四六—一八二九)。諱を日謙と言ひ、字は道光、大坂に生まれた。出雲の日蓮宗報恩寺の住職となる。数年間住職を務め、後にその職を他に譲り、寺の側に庵を結んで、聽松庵と名付けて住んだ。詩文についても嗜みが深く、京都の六如上人らと交わり、晩年に至るまで、京阪地方、山陽道、出雲の國の間を往来し、芸備にも度々遊んで、西山拙齋・菅茶山・勝島敬中らと親交を結んだ。〔吸海道人〕牛海道人。尾道の人。寛永元年の生まれ。菅茶山とは同年で、早くから親交があつた。文政八年十月九日、七十八歳にて没す。茶山より二年早い死であつた。〔詢〕たずねる。〔蹤跡漂然〕ふらりと来て、ふらりと去る。〔蹤跡〕は行方。〔鑿〕ちりばめる。〔鬻〕売る。〔雄偉闊大〕優れて立派で大きくて広い。〔弊〕弊害。〔變幻流麗〕變化が激しく、字や文がのびのびしていて美しい。〔纖媚〕細くてか弱い。〔汲汲〕焦る様子。〔干譽〕名譽を求めめる。〔孜孜〕務め励む。一心に努力する。〔售〕用いられる。〔津梁〕渡し場と橋と。水を渡つたり陸を入つたりすること。転じて東奔西走の意。〔清致〕清らかなおもむき。〔佳話〕美しい話。立派な話。〔冲澹〕心が空しくあつさりしている。「澹」はあつさりした様。〔脩遠〕遼遠。道のりが遥かに遠い。〔披玩〕愛で慰める。〔従臾〕従ひひろめる。すすめる。〔文政壬午〕文政五年。〔道人〕吸海道人。〔同庚〕同い年。同年。〔唱酬〕詩文をやり取りすること。〔拱木宿草〕「拱木」は墓に植えた木をいう。ひとかかえもある大木。「宿草」は古い根から生えた草。朋友の墓、宿草あり。「江淹、雜體詩、陸平原機羈官」に「徂役多拱木、宿草凌寒煙」(徂役 拱木多く、宿草 寒煙を凌ぐ)とある。

以上、茶山が主張するところは、

① 上人は今時の学者のように、努めて誉れを求め、一心に努めて人に媚びるような詩を作ろうとはしない。山水に遊び、園を涉り、客に接して、其れが胸中の清らかな趣に遭遇したとき、表にあふれ出る。これを書き写したとき好句となる。こういう点で時人と異なる。

② 虚心であつさりとして遼遠であり、粗豪に墮ちず、纖媚に流れず、不朽たらんとする意はないが、自然と不朽となつてゐる。これは上人独自のものである。

③ 王敬美は、徐昌穀、高叔嗣の詩を評して「李・何は時により、貶されたり持ち上げられたりするが、二公は調べを絶やすことはない」と言つてゐるが、上人の詩がまさにその通りだ。

つまり、「努めて誉れを求め、人に媚びるような詩を作るべきではない。不朽であろうと意図せずして、自ら不朽となる、そういう詩を作るべきだ。上人の詩は、時流に流されず、冲澹脩遠、自ら一家を成してゐる。それでいいのだ。」というのである。

以上「六如」・「古賀穀堂」・「竹田器甫」・「北條霞亭」・「道光上人」に宛てたことばから、茶山の詩論を纏めると次のようになる。

1 詩は極力、実境を写すこと。実際に自分が出逢つた実事に対し、胸中に湧き上がつてきた思いを自分の表現で述べ写すのが「真の詩」である。

2 ある人が喜び好むところは、大抵の人が喜び好むものであるが、それを発する心は各人各様であるのだから、千篇一律の詩が出来る訳がない。詩は心の中に湧いてくる情で、それが抑えきれなくなつて言葉として詠われるものだ。それぞれが抱いた興趣が、それぞれの境地から発せられてこそ、「真の詩」であると言えるのである。

3 詩は自分の体が時流に合うかどうかを考えたり、人の物真似で作つたりすべきではない。また、人の思惑を考え、誉れを求めて人に媚びるような詩を作るべきではない。世間の評価は気にせず、自分の感じた思いを、詠

いたいように詠う、それが詩作の楽しみなのだ。

4 不朽であろうと意図せずして、自ら不朽となる、そういう詩を作るべきだ。

まとめ

茶山の「作詩」に対する基本的な考え方は、中国の『毛詩』に基づくものと思われる。『論語』爲政第二には、子曰、詩三百、一言以蔽之、曰、思無邪。(子曰く、詩三百、一言以て之を蔽へば、曰く、思ひ邪無しと。)とある。つまり「詩経には三百篇の詩があるが、どの詩も作者に邪念がなく、純真な真情の発露である」というのである。孔子はこの詩をもつて門人を教え、人情の自然を味わつて情操の陶冶に資したようだ。孔子も真詩とは「作為や技巧や、虚飾を排した、純真で誠の心の吐露されたものであつて、そういう詩こそ人の心をうち、人を育てていくものだ」と考えていたことが分かる。

孔子の弟子の子夏の作とされている『詩経』大序には次のように述べられている。

詩者志之所之也。在心爲志、發言爲詩。情動於中而形於言。言之不足、故嗟歎之、嗟歎之不足、故永歌之、永歌之不足、不知手之舞之、足之踏之也。(『文選』卷四十五「毛詩序」)

詩なる者は志の之く所なり。心に在るを志と爲し、言に發するを詩と爲す。情中に動きて言に形る。之を言ひて足らず、故に之を嗟歎す、之を嗟歎して足らず、故に之を永歌す、之を永歌して足らず、手の之を舞ひ、足の之を踏むを知らざるなり。

つまり、「詩とは、人の思いの行き着いたもので、心の中に存在する場合を、「志」と言い、言葉に現れた場合を「詩」という。心が強く感動すると、言葉となつてあらわれる。言葉で足りなければ深い嗟歎となる。嗟歎し

て足りない、長く引いて歌にする。歌にして足りない、自然に手が舞い、足が大地を踏みならしているのにも気が付かないものだ」というのである。

すなわち、詩は性情の表現であり、人それぞれに思いは異なり感じ方は違う。そのため表現も同じではない。したがって他人の模倣、時流に阿るような作は「眞の詩」とは言えないとする。

「古賀穀堂に復する書」〔黄葉夕陽村舎文〕卷三三には次のようにある。

・実事を述べ、實際を寫し、前人の響みに倣はず、時世の粧を學ずして、乃ち始めて偽りの詩に非ずと爲す。
 ・佳山 勝水の忘れ難き、良辰 美景の樂しむべき、友を天末に戀ひ、別れを酒間に惜しむ。情の文を生ずるや、時有りて沛然として自ら已む能はざるは、外に徇ふに在らんや。
 ・興到りて作り、多きを務めず。意盡きて止め、必ずしも篇を成さず。妍媸（美しさ）に拘拘たらず、毀誉（世の評判）に屑屑たらず。我の娛樂を取る所以は、自ら其の中に在り。

要するにその主張は、次のようにまとめられる。
 「眞の詩」とは、実事、實際を自分の表現で述べ写すものであり、心の中に湧いてくる情が抑えきれなくなつたとき、言葉として詠われたものである。世間の評価などは気にせず、自分の感じた思いを自分が詠いたように詠うものなのだ。

確かに茶山の詩、取り分け「農村詩」「子どもを詠う詩」は此の詩論に主張されている通りの作品になっている。どの詩も、茶山のその時の思い、感情が自分の言葉で伸びやかに詠われている。ただ注意しなければならないのは、「實事を述べ、實際を寫す」と言つても、「述べ、寫す」対象である「実事、實際」が確かに把握され、捉えられていなければならない。その農村詩、子どもの詩から知られるように、茶山は対象を確実に捉える観察眼と、それをあらわす優れた表現力を兼ね備えていた。また「述べ、寫す」についても「前人の響みに倣はず、時世の粧

を學ばざる」自分の表現でなければならぬ。茶山は中国の古典を博く読むことよって習得した表現技法と、「構図と色彩」、更に「音声と動き」を表現に取り入れようとする独自の手法によつて、対象を「述べ、寫し」ている。例として次の詩を挙げる。

秋日雜詠 (後編卷七)

午暖叢間尚露華 殘黃耆紫相交加
ひる 暖かく 叢間 尚露の華あり、 殘黃 耆紫 相交加。

蠅螂熟視人來立 徐自蘆花移蓼花
蠅螂 人の來りて立つを熟視し、 徐ろに蘆の花より蓼の花に移る。

昼になつても草叢には、まだ露の華、黄や紫の残りの花。ふと目の前の蠅螂に気がついた。大きな目玉でこちらの様子を窺いながら、そろりそろりと徐ろに蘆の花から蓼の花に移つて行つた。

茶山は蠅螂の身になつて、その思いを読み取り、動きを表現している。

茶山の詩は絵になると言われる。確かにその詩は、場面の構成は整つており、色彩の面でも美しく調和がとれていて、京都遊學時に池大雅を屢々訪ね、親密なる交友を結んでいた茶山らしい詩といえる。しかし茶山は「構成」や「色彩」の他に、更に「動き」と「音声」を加えようとしていた。

「動き」と「音声」は絵には表現しにくい要素であるが詩には表現できる。次の詩などがその適切な例として挙げられる。

即事 (前編卷四)

竹露沾衣夜欲深 隔墻石澗靜無音
竹露 衣を沾して夜は深まらんと欲、 墻を隔てて石澗 靜かにして音も無し。

女兒譟撲流螢去 復到門前楊柳陰
女兒 喚ぎ撲ちて 流螢は去り、 復た到る 門前 楊柳の陰。

「音声」については、夜の靜寂、その中をやってきた女の兒たち。螢を追いかける女の兒の騒ぎ声。やがて女兒たちは去つて行き静けさが還つてくる。「動き」の方は、女兒たちが螢を追つて走り回る様子、逃げる螢と、女の

児たちが去つて柳の陰かげに帰つて来る螢。夜の闇の中を流れる螢の青白い光を背景に、場面は「音」と「動き」によつて「静」から「動」、また「動」から「静」へと移つてゆく。

また、次の詩なども「音声」「動き」「色彩」の加わつた例として挙げるに相応しい。

病中作二首（其二）（遺稿卷三）、

雨烟纒むら野川風

細草成花一路紅

雨烟は纒むらかに斂きままりて野に川風あり、細草花を成なき一路紅くれななり。

沙竹堤邊水清淺

女郎掲か涉夕陽中

沙竹堤邊水は清淺、女郎掲かけわたる夕陽の中。

雨上がりの野中の道に咲き乱れる「細かほ草」の紅あかい花、堤の向こうは夕焼けに映えて流れる澄んだ川。女の子が裾を掲げて涉つて行く。「音声」については、川の流れの音、その川を渡つていく女の子の立てる水の音が聞こえる。「動き」は、川風に揺れる「細草」の花と、川を渡つてゆく女の子。「細草」の花の「紅」と「夕陽」の輝きに溢れた野原に、音と動きが加わつて、その場の様子が見事に再現されている。

茶山は、「実事、実態を述べ、写す」詩作を徹底するために、写生画のような確かな「構図」、適切な「色彩」の上に、更に「音声」と「動き」を加えようとしたのではなからうかと考えられるのである。

第六節 江戸時代後期の漢詩界に於ける茶山

一、江戸期に於ける漢詩の流れ

【第一期】

江戸幕府の初め（一六〇三）から貞享四年（二六八七）までの約九十年間。蘇軾・黄庭堅の宋詩や『三体詩』が喜ばれていた。

石川丈山（一五八三〜一六七二）江戸期に於ける最初の詩の専家である。江村北海は「拙累多くして、往々俗習を免れず」（江村北海『日本詩史』三）と評し、清の愈樾は『東瀛詩選』（二）の中で「推敲を事とせざるを以て、警句多くして、佳章少なし」と評している。

林羅山（一五八三〜一六五七）「和臭が多い。詩趣が乏しい」と後代の人から評されている。近体詩だけでなく、長編古体詩も多く、『羅山林先生集』には、詩集だけでも七十五卷、総計四六九三首が収められている。愈樾は「善く險韻（用いるのが難しい韻字）を押して、気力雄厚」（『東瀛詩選』一）と賞している。

松永尺五（一五九二〜一六四八）古体詩は少ないが、絶句・律詩は多い。草創期に於ける多作家で『尺五堂全集』に収められている。人柄が穏健で、日常生活も安定していたので京洛の名勝を詠うなど、穏やかな自然を樂しむ詩が多い。

那波活所(一五九五〜一六五七) 漢詩文に新思潮を興そうとした。眼疾のため、世を避けて屏居しようとする心境を詠じた「自處」と題する長編五言古詩は、雅馴(がじゆん)(文章が上品で字句が練れている)である。世を避けて屏居しようとする心境を詠じたところは、平易な語を用いて、白居易の述懐を思わせる。

伊藤仁齋(一六二七〜一七〇五) 実感を虚飾のない語を用いて詠ずることを旨とし、声律に拘ることを潔しとしなかった。「詩は懐を遣る為に作る。又必ずしも篇を連ねず」というのが作詩の態度であった。

この時期は多作が力量に直結すると考えられていた。林羅山の三男である鷲峰は、近世最大の多作家で、七七六〇余首の詩を成している。昌平賢の友野霞舟は『熙朝詩薈』(六)において、その推敲不足を指摘している。

京都に於いては伊藤担庵・村上冬嶺・伊藤仁齋・那波古峯・伊藤東涯らが作詩や読史の会などを頻りに設けて活躍している。しかし、宋学には反旗を翻したと言われている。

【三体式】唐賢三体式詩法。書名。宋の周弼(しゅうひつ)が唐人の五言律詩・七言律詩・七言絶句の三体の名作を集めた詩集。室町時代に流行した。

【第二期】

元禄初頭(一六八八)から安永の終わり(一七八〇)までとされる。この時期は、日常的・説理的な宋詩を卑俗として排し、高華で浪漫的な唐詩とその亜流である明詩を模倣し範とした。

新井白石(一六五七〜一七二五)・室鳩巢(一六五八〜一七三四)・梁田蛻巖(一六七二〜一七五七) 祇園南海(一六七六〜一七五一)らによって推進された。彼らの特徴は、長編の排律(冒頭の二句と結末の二句を除いて中間は全て対句とする)を多く作ることであった。多いものでは、百韻二百句以上に及ぶものもあった。初唐の王勃・楊炯・盧照鄰・駱賓王・杜審言・宋之間などに倣ったものようである。

荻生徂徠(一六六六〜一七二八)が現れるのは、これらから十年遅れるが、やがて護園一門の活躍する時期と

なる。大潮元皓（一六七八〜一七六八）・太宰春台（一六八〇〜一七五七）・安藤東野（一六八三〜一七一九）・山
 県周南（一六八七〜一七五二）・本多騎蘭（一六九一〜一七五二）らは徂徠の高弟乃至は親交のある人々である。

徂徠は明の李攀竜・王世貞らの古文辞派の主張「文は必ず秦漢、詩は必ず盛唐」に従い、盛唐詩を模倣すること
 によつて盛唐の作者の心情になりきり、そうすることによつて我が国の詩を盛唐の詩の水準にまで引き上げるこ
 とを目指した。新井白石・梁田蛻巖・服部南郭（一六八三〜一七五九。李攀竜撰の『唐詩選』を校訂刊行した）・
 秋山玉山（一七〇二〜一六三）は正徳の四家と言われた。

やがて、清田儂叟（一七一九〜八五。伊藤龍州の三男。江村北海は次兄。）は、古文辞派の詩風に疑義を抱き始
 め、日本の歴史に目を向け、詠史を詠うようになった。

【第三期】

天明初頭（一七八一）から幕末まで。この時期は、従来の擬唐・擬明詩の空疎誇大な措辞を排して新しい表現
 を求め、宋詩を範とすべきであると唱える写真主義的な詩が台頭して、陸游・范成大・楊誠齋らの詩が好まれた。

江戸に於ては、山本北山（奚疑塾）がそれを唱え、実作の上では市河寛齋を中心とする江湖社の詩人たち、大窪
 詩佛・菊池五山・柏木如亭などが活躍した。関西では浪華の地に於て、片山北海（越後出身）を盟主とする混沌
 社が結成され、頼春水・葛子琴・篠崎三島・詩僧居敬・曾之唯・細合張庵・田中鳴門らが菴園派の唐詩模倣の
 行き方を排して、日常の実生活に根ざした実情・実景を真率に写すべきだと主張して活躍した。江馬細香・原采頻
 ・亀井小琴・張紅蘭らの女流詩人も輩出し、詩人の数は飛躍的に増大していった。中でも六如は新奇な表現を求
 めて、斬新で奇抜な詩を作っている。その詩があまりにも斬新過ぎて、兎角の評もあるが、日本の漢詩は六如が
 魁を成し、菅茶山に於て完成したというのが大方の見方である。

二、江戸時代後期の漢詩界に於ける茶山

ここで、詩に対する茶山の考え方や、茶山詩に対する人々の評を掲げて「江戸時代後期の漢詩界に於ける茶山」について述べる。

茶山は寛政九年（一七九七）刊、「六如庵詩第二抄序」で次のように述べている。

夫學詩者、誰不規於唐哉。然大抵求惟肖於形迹之間、拘拘乎、唯語句是視。…唐人之哀樂悲歡、不異我之哀樂悲歡。而我邦今時治平優游、與開元天寶奢侈喪亂不同。況人心如面、吹萬不同。所遇雖同、所發有異。今若牽而合之、襲而取之、則興與境乖、名與實離。譬如画家寫生。生物在前、舍而求之古圖、形貌綵色、一依原本、而眼前所見、邈然不顧。此豈眞照也。此豈眞詩也哉。

夫れ詩を學ぶ者、誰か唐を規とせざらんや。然れども大抵は惟れ形迹の間に肖るを求め、拘拘乎として、唯だ語句を是れ視るのみ。…唐人の哀樂悲歡は、我の哀樂悲歡に異ならず。而るに我が邦今時の治平優游は、開元天寶の奢侈喪亂と同じからず。況んや人の心面の如く、吹萬同じからざるをや。遇ふ所同じきと雖も、發する所異なる有り。今若し牽きて之を合はせ、襲ひて之を取れば、則ち興は境と乖き、名は實と離る。譬へば画家の生を寫すが如し。生物前に在るに、舍てて之を古圖に求む。形貌綵色、一に原本に依りて、眼前に見る所、邈然として顧みず。此豈眞の照ならんや。此れ豈眞の詩ならんや。

〔黄葉夕陽村舎文〕卷三

即ち、茶山は詩を學ぶ者は、大抵、唐詩を手本としている。しかし、そのほとんどは、唯だ語句を模倣することに拘っているだけである。中国の詩は、中国の氣候風土や、そこに生活する人の感情から生まれ出たものであ

つて、氣候風土や風俗、習慣、生活様式の異なる日本の詩と、その趣を異にするのは当然である。見るものが異なり、感じ方が違うのだから、日本の詩人が、中国の詩人の語句を真似たのでは、「興」は「境」に背き、「名」と「實」とがかけ離れてしまう。そんな詩は真の詩ではない、と言うのである。茶山は更に続けて、

上人初非有意於立異。隨其所遇、由其所觸、發爲上人之體。

上人初めより異を立つるに意有るに非ず。其の遇ふ所に隨ひ、其の觸るる所に由り、發して上人の體と爲る。と述べている。即ち「上人は初めから他と異なつた風を立てる意図があつたのではなく、目に触れたそのままを、そこから湧き上がってくる興を、そのまま詩に表したのであって、自己の性情から發したものである。そこに自己一家の詩風が出来あがつたのだという。茶山は六如を先輩として学び、更に六如とはまた趣を異にする詩風を築いた。

『黄葉夕陽村舍詩』卷頭の書牘しよかくに六如上人は次のような文を掲げている。

他人吟卷、讀之未過兩三號、已倦而睡。若茲集、似啖甘蔗。只恨其易了。又如石蜜中邊皆甜、每奇瑰橫陳、往往使人自視缺然。禮卿足下、深自保重。天下後世、必者公論矣。周白。

他人の吟卷は、之を讀むに未だ兩三號を過ぎずして、已に倦みて睡る。茲こゝの集の若ごときは、甘蔗を啖くふに似たり。只其の了たへ易きを恨むのみ。又、石蜜の中邊皆甜かまきも、毎つねに奇瑰きくわい橫陳し、往往人をして自ら視みて缺然けつぜんたらしむるが如し。禮卿足下、深く自ら保重せよ。天下後世、必ず公論あらん。周（六如）僧名を慈周けつぜんといふ。白ちす。

また、豊後日田の広瀬淡窓は「儒林評」の中で、

茶山ノ詩ノ体ハ六如二本ツケルモノナリ。六如ガ詩ハ、景多クシテ情少ナク、濃密ニ過ギタリ。始メ喜ブベシト雖モ、後ニ厭ヒ易シ。茶山ハ情景相半シ、濃淡中ヲ得タリ。故ニ久シクシテ厭ハザルコトヲ覺ユ。

と述べている。

昌平覺儒官の友野霞舟（一七九一〜一八四九）は近世漢詩総集『熙朝詩薈』を編集し、百十卷所収詩数四千六百七首中、茶山の詩を卷八十八、八十九の二卷に充て、第三位の二百五十四首を『黄葉夕陽村舍詩』から採っている。『熙朝詩薈』卷八十八の巻頭で茶山を紹介した中の『錦天山房詩話』の評に、

自六如師唱宋詩、茶山繼起、詩風一變。其詩亦在伯仲之間。…蓋六如專宗劍南、上溯樊川、茶山則間出入韓蘇。故縱橫勝此、而穩秀不及焉。其精鍊蒼老、善道人所難狀。固屬獨歩。…涉乎卑俚者、亦復不尠。如夫芟蕪擷英、實可謂一代鉅匠矣。

六如師宋詩を唱へて自り、茶山繼いで起こり、詩風一變す。其の詩も亦伯仲の間に在り。…蓋し六如は専ら劍南を宗とし、上は樊川に溯るも、茶山は則ち間韓蘇に出入す。故に縱横は此に勝るも、穩秀は及ばず。其の精鍊蒼老にして、善く人の狀し難き所を道ふは、固より獨歩に屬す。然れども、…卑俚に涉る者も、亦復た尠ならず。如し夫れ蕪を芟り英を擷まば、實に一代の鉅匠と謂ふべし。

と記している。六如が宋を起こしたが、それを繼いで起こつた茶山に於て、詩風が一変したという。

清の俞樾（一八二二〜一九〇六）は、日本の岸田吟香から依頼を受けて、『東瀛詩選』四十四卷を選定した。その内の卷十一の一巻を茶山に充て、百二十首を選んでゐる。その巻頭、「茶山略傳」に続けて、
禮卿詩、各體皆工。而憂時感事、忱往往流露行間。亦彼中有心人也。

禮卿の詩は、各體皆工なり。而して時を憂へ事に感じ、忱は往往にして行間に流露す。亦彼は中に心ある人なり。

と評している。

頼山陽は「茶山先生行状」で次のように述べている。

…福山侯、與林祭酒論詩。祭酒曰、當今詩家、當以菅太中爲魁。侯命吏、廉問、更悉得其學行兼茂狀、始賜俸五口。時寛政四年壬子八月也。…

…自享保正徳諸大家輩出、大抵本嘉萬七子、而模擬唐賢、大而未化。葛蝨菴一變之、六如師二變之。而江湖社諸子、更相標榜、海内喁然、非復舊習。然論其剛柔互用、洪纖悉有、而風格高逸、有一唱三嘆之意者、識者獨推先生焉。

…福山侯、林祭酒と詩を論ず。祭酒曰く、當今の詩家、當に菅太中を以て魁と爲すべしと。侯（阿部正倫）は吏に命じて廉問せしめ、更に悉に其の學行と兼ねて茂狀を得、始めて俸五口を賜ふ。時に寛政四年壬子八月なり。…

「茂狀」才能のすぐれていること。
 …享保正徳の諸大家輩出して自り、大抵嘉萬七子に本づきて、唐賢を模擬し、大にして未だ化せず。葛蝨菴一たび之を變じ、六如師二たび之を變ず。而して江湖社の諸子、更に相標榜し、海内喁然、復た舊習を非とす。然れども其の剛柔互ひに用ひ、洪纖悉く有りて、而も風格高逸、一唱三嘆の意有る者を論ずれば、識者獨り先生を推さん。…

寛政四年（一七九二）八月に昌平學大學頭林祭酒が「當今詩家、當以菅太中爲魁」と言ったというのであるから、詩人としての茶山は当時、江戸に於ても高名であつたことが知られる。

江戸期の日本漢詩は主として盛唐詩の模倣の域を出なかつたが、六如、茶山に至つて始めて日本の漢詩がその形を成したと言えよう。やがてその風は頼山陽、広瀬淡窓・旭莊兄弟、梁川星巖らに受け継がれ一世を風靡していくこととなる。茶山は江戸前期を受けて後期を開く橋渡しをする位置を占めていたといえる。

終章

「第一章 菅茶山の行跡」

「第一節 京都遊学の時期」、第二節 郷里神辺の時期」の二つの時期に纏めて茶山の行跡を考察した。

第一節、初めは医学と古文辞学を学ぶことを目的としての京都遊学であった。しかし、病弱であったこと、家庭の都合（経済的事情など）から、往ったり帰ったりを六度繰り返し、四回目の上落から朱子学に転向し、師も市川某から那波魯堂に変わった。これは西山拙齋の勧誘に因るもので、この頃から拙齋との交友が密になる。五回目の遊学の時期については未詳とされており、「茶山年表」にも載せられていない。しかし、土生玄碩の『師談録』と「河邊驛途中」と題する詩によつて、茶山五回目の遊学は安永六年（一七七七・三十歳）ではないかと推測した。

七言絶句「河邊驛途中」は版本『黄葉夕陽村舎詩』には載せられていない。草稿本『黄葉夕陽村舎詩』——（広島県立歴史博物館所蔵）——の62番目に収められている。この詩によつて安永六年の早春ではないかと考えられる。これは新しい発見である。（第一章 菅茶山の行跡第一節の5京都遊学五回目参照。）

茶山の遊学は六度で終わるが、遊学後の進路について儒官の道を選ぶべきか、郷里に帰って親孝行をし、子弟の教育に尽くすべきかと悩んだ時期があった。このことはこの時期の漢詩により知ることができる。（第三章で述べた）六度目の遊学では、多くの人々との交遊が際立つ。

第二節、塾「黄葉夕陽村舎」設立の動機、その塾を福山藩の郷塾とした経緯、塾生の生活、交友関係、福山藩との関わりなどを整理した。「塾生の生活」について、従来断片的に触れたものはあるが纏められたものはない。

「第二章 茶山周辺の人たち」

終生 茶山が信奉し、畏敬してやまなかった「頼春水」と「西山拙齋」との交友を通して、又、子弟関係としては「頼山陽」と「門田朴齋」との関わりを通して、茶山の「人と為り」を究めることを目的とした。

「頼春水」については、一時行き違いから意志の疎通を欠いた事があつたが、これは、春水を身内同然に思っている茶山の気持ちの現れである。山陽に関わる諸事についても、同一の気持ちであると考える。

「西山拙齋」の学問、政治思想、及び出仕についての考え方は、茶山に強い影響を与えた。特に茶山の「政治批判詩」に及ぼした影響は著しい。

「頼山陽」との関わりは親友春水とも絡んで、茶山の骨折り、心労は一方ならぬものがあつた。都講として廉塾に招いた時の期待が大きかっただけに、裏切られた時の失望は一通りではなかつた。数年間、茶山の不興が解消しなかつたことを以てしても、察して余りある。そのわだかまりを解いた過程と理由を追及した。

「門田朴齋」は、茶山の後室の甥に当たるので親戚関係である。子どもの無かつた茶山は、養子縁組をするが、死を前にし縁組を解消している。養子縁組解消の理由や、朴齋と山陽の関わりの詳細について述べた。

「第三章 茶山の文学（漢詩）」

「花月吟」について茶山は「花月吟二十首は、余が少年の時、唐伯虎に倣ひて作る所、纖靡にして時様に似た

るを以て、棄てて録さず。」と述べている。その「花月吟」作詩の「発想」と「表現」について、唐伯虎の『花月吟』十一首と比較検討をしてその特色を明らかにした。

「政治批判詩」には、前期「政治批判詩」と後期「政治批判詩」がある。その内容の違い、その違いの生じた理由について考察した。特に後期「政治批判詩」は、現在福山県立歴史博物館に蔵されている『黄葉夕陽村舎詩』にのみ収められており、新しい資料によって茶山の政治批判の厳しさを知ることができた。

「農村詩」については、所謂「田園詩」とは異なる茶山「農村詩」の内容と表現についての特色を明らかにした。また「政治批判詩」は作らなくなったが、その政治に対する思いは「農村詩」に籠めて詠われるようになったこと、その籠め方と理由について考察した。

「子どもを詠う詩」では、歳を重ねるにつれてその数が多くなること、「子どもを詠う詩」を作り始めた理由や、その詩に籠められた茶山の願いについて述べた。

「茶山の詩論」では、六如上人、古賀穀堂、北條霞亭、送竹田器、道光上人に与えた書簡や、序文の中の「詩論」の窺える文章によって、「真詩」と茶山が考える詩とはどういう詩なのか、詩作の楽しみはどういう所にあるのか、ということについて纏めた。

「江戸時代の漢詩界に於ける茶山」については、「六如庵詩第二抄序」で六如の詩について茶山の述べていることと、六如の『黄葉夕陽村舎詩』巻頭の書牘しよくに掲げた文、広瀬淡窓「儒林評」の中の文、昌平齋儒官の友野霞舟の文、兪樾ゆえつが『東瀛詩選』四十四巻を選定した時、その内の巻十一の一卷を茶山に充てて百二十首を選び、その巻頭の「茶山略傳」に続けて評したことが、頼山陽撰「茶山先生行状」等によって、江戸時代の漢詩界に於ける茶山の評価を知ることができた。これらのことから、盛唐詩の模倣の域を出なかつた従来の日本漢詩は、六如、茶山に至って初めてその形を成しと言えよう。

茶山の「人と為り」と「文学（漢詩）」について、明らかにし得たことを纏めると次のようになる。

茶山の「人と為り」について

頼春水との交わりを通して「真の親友の鑑」を見る思いがする。脱藩騒動が一区切り付いても春水の苦悩は尽きなかった。山陽のこれからの長い将来を思うとき、春水の胸中には更に深い悩みが渦巻いていた。出石藩儒櫻井東門へ、「貴邦へ遊學仕らせ、御教育被下候様、奉希度奉存候。」と依頼の書状を差し出したが、東門の返書は、「遊学のこととは断る」ということであつた。藩儒の仲間として心の許し合える人からも断られて、途方に暮れている春水を救つたのは茶山であつた。茶山としてもこれまでの山陽の行状を思うと、厄介を背負い込むことは明らかである。しかし、親友の胸中を我が事のように思い、放り出すことが出来ない。茶山はそういった人であつた。

性格的には自己中心的で気まま勝手な山陽ではあつたが、茶山はその才能を高く評価していた。期待や好意を踏みにじつて廉塾を飛び出して行つた山陽に対して、茶山は音信を断つた一時期もあつたが、ついには全てを水に流し、三十七歳で父春水に死別した山陽に、終生父親代わりともいえるほど親身に関わつた。茶山は大きな度量と人を見る目の確かさを備え持つた人であつたといえよう。

又、茶山の人と為りを言うとき、一般的に言われるように「温厚寛大」では済まされぬものがある。例えば西山拙齋の影響によって、強烈とも言える「政治批判詩」を数多く詠んでいること、山陽との関わりに於て、一時期は数年間も不興が続いたこと、門田朴齋の養子離縁の件に関するような大事を前にしたときは、梶子でも動かない頑固さを持つ人でもあつたということなどである。

茶山は「窮隣」と題する詩に詠まれているように、飢饉の時の働きや、窮民救済の為に社倉を整える等、人に

対しても、世情に対しても細々と神経の行き届くそういう人柄でもあった。「農村詩」や「子どもを詠う詩」からは、真摯に働く人、純真な子どもにも惜しみなく温かい愛情を注ぐ「好好爺」でもあった。

茶山の人と為りをいうとき、一束では括れないものがある。茶山は臨機応変にいろいろな才能を發揮できる魅力的な人であったと言えるであろう。

茶山の「文学（漢詩）」について

茶山の文学、——ここでは「漢詩」に限るが——その変遷を見ると、先ず、茶山自身が「少年のときに作ったもの」と言っている「花月吟」は、茶山という詩論——「真詩」とは実事を述べ、實際を写すものである——からかけ離れている。「唐伯虎」に倣って作ったものだから、この詩に詠われたものは「実事」でも「實際」でもない。美しい「月と花」を綺麗な「詞」を列ねて詠んだ詩である。勿論単なる架空の景色ではないであろう。嘗て見たことのある実際の風景を思い出して、或いはそんな画を頭に浮かべて詠んだ二十首であろう。「繊微にして時様に似たるを以て、棄てて録さず」と述べているように、後年の茶山からみれば取るに足りない詩である。同じ頃に作られた詩は散佚してしまったり、火事で焼けてしまったりしたらしく、二十歳代の詩としては初春の江州を旅したときの、「江州」と題する七言律詩（「前編」巻一・二十五歳頃の作）、京遊四回目を終えて神辺に帰っていた時の、七言律詩「寄紀州西山子綱」（「前編」巻一・二十八歳頃の作）を見る程度であって、この二、三の作を以て茶山の若い頃の詩を云々することはできないが、茶山も言うようにどれも「若き日の憂愁を感じさせる」といった雰囲気の詩である。

三十歳半ば、拙齋との交友が密になった頃から、政治批判の詩が目立つようになる。それも六十句、七十句という長詩が多い。郷里に落ち着いてからも十年ばかりは、同志の内々で政治批判の詩を作って廻し読みをしてい

たようで、この頃の詩は幕政・藩政に対する批判が初めの頃より激しい。

しかし、郷土に落ち着いて塾を経営し、子弟の教育に本腰を入れるようになると、表立って藩政の批判はできなくなる。まして四十九歳のとき、家塾を郷塾として藩の管轄にすることは政治批判など以上の外である。茶山五十一歳のとき拙齋は亡くなった（六十四歳であった）。その頃から茶山の激しい内容の政治批判詩は姿を消した。

茶山は農民に対する温かみのある政治を常に願っていた。その気持ちは「農村詩」の中に形を変えて詠われるようになってゆく。茶山自身が「自分はもともと農家の子」（寄肥後藪先生「其二前編卷一」）と詠んだ詩があるが、農事に従事したことのある茶山には、農民の苦勞は他人事ではなかった。その努力や辛さは身を以て分かるのである。懸命に働く農民、しかし、その收穫物のほとんどは税として藩にもって行かれてしまう。どうか農民の労苦が報いられる政治であつて欲しいと願わずにおれない、それが茶山の「農村詩」なのである。勿論、農村の穏やかで美しい、また、閑かで鄙びたそんな風景が詠まれた農村詩も多い。ここでは、過激だった「政治批判詩」が形を変えて農村詩の中に組み込まれていったことを述べた。

「子どもを詠う詩」は「農村詩」の一部であるが、「農村詩」とは別に扱ったのは、茶山ほど多く「子どもを詠う詩」を詠んでいる詩人が見当たらなかったからである。これは茶山独自のものであると感じた。なぜ茶山はこれほど多くの「子どもを詠う詩」を詠んだのであろうかという疑問を抱いた。茶山の純粹で一途な人間性と、純真で飾り気のない子ども心に通じるものがあるということ、茶山の「子どもを詠う詩」から読み取った。それは、茶山のいう「真詩」に通じる精神でもある。人に銜わず時流に合わせず、見たまま心に感じたままを、有りのままに素直に表現する。この詩作の精神と天真爛漫、純真無垢な子ども心は共通しているのである。

「三都に出て名を挙げたい」と言つて、これまでの茶山の骨折りや、心労など足蹴にして京都に出て行つた山陽。しかも、後で茶山が困ることなど斟酌もせず、優秀な塾生を連れて出て行つてしまった。塾の後継者にと

つて育てた朴齋は「傲慢すぎて塾に相応しない」こういう困ったふたりに関わった茶山は、純真なこともたちにとれだけ心慰められたことであろう。歳を重ねるにつれて茶山に「子どもを詠う」詩が多くなっていたのは、このような苦い経験を重ねたからではなからうか。

以上は、詩の内容について見たのであるが、詩の「表現」について言えば、茶山の詩には色彩があり、画のよくなる確かな構図があるのが特徴であろう。一般に「茶山の詩には絵がある」と言われる所以である。しかし、単なる静止した画ではなく、茶山の詩には動きがあり、音（響きや、会話を含む）がある。どこまでも「実事、実際」を表現せんとする茶山の思いを示すものであろう。

この度は、茶山詩の本質ともいえる「政治批判詩」「農村詩」「子どもを詠う詩」を扱ったので、「交遊詩」「紀行詩」「題画詩」などの扱いは不十分であった。今後はこれらの詩を読み、その作業を通して茶山研究を更に深めたいと考えている。

【使用文献】

- 『黄葉夕陽村舍詩（全）』復刻 菅茶山 児島書店 昭和五十六年十二月
 『詩集 日本漢詩』第九卷 富士川英郎・松下忠・佐野正巳編 汲古書院 昭和六十年
 『大和行日記』菅茶山 『日本藝林叢書』第四卷 鳳出版 昭和三年
 『広島県史』近世資料編VI 広島県編集発行 昭和五十一年
 「北上日記」「遊芸日記」「郷塾取立に関する書簡」「廉塾規約」「菅太中存寄書」「塾生預り銀差引算用帳」
 「廉塾附田畑并年貢記」「菅家往問録」「師談録」「冬の日かげ」「政治についての意見書」
 『福山志料』菅茶山 「福山志料」刊行会 昭和十三年十月

『備後史談』備後郷土史會 第一巻から第十八巻

『筆のすさび』「日本隨筆大成1」菅茶山 吉川弘文館 昭和五十年三月

【評伝】

1 『芸備の学者』 和田英松 明治書院 昭和四年十一月

2 『菅茶山と頼山陽』 富士川英郎 平凡社東洋文庫 昭和四十六年

3 『菅茶山』日本詩人選30 富士川英郎 筑摩書房 昭和五十六年四月

4 『江戸後期の詩人たち』 富士川英郎 麦書房 昭和四十一年

評伝の内容

1 『芸備の学者』は大正十五年十月、「茶山先生百年祭講演草稿」に茶山手簡・春水・山陽の手簡、その他を以て増訂した論文。

富士川英郎は独文学者であるが、漢学にも長けていて特に「菅茶山」の伝記的研究著書は多い。

2 『菅茶山と頼山陽』は、丸善の「学鏡」に昭和四十三年八月から二十八回に亘って連載されたものを、昭和四十六年に平凡社の「東洋文庫」の一冊として出版された。

3 『菅茶山』日本詩人選30は昭和五十六年、筑摩書房出版から出版された。内容はⅠ「菅茶山」、Ⅱ「菅茶山と混沌社の人々」、「菅茶山と大原呑響」、「菅茶山の東遊」、Ⅲ「菅茶山と華岡青洲」、「廉塾」、「黄葉夕陽村舎」の三部から成り、Ⅱは雑誌「歴史と人物」に掲載されたもの。Ⅲの「菅茶山と華岡青洲」は雑誌「新医療」(昭和五十五年三月)「廉塾」『玉川学園創立五十周年記念論文集Ⅰ』(昭和五十五年七月)「黄葉夕陽村舎」『江戸時代図誌・山陽道』(昭和五十一年)にそれぞれ掲載されたものである。

4 『江戸後期の詩人たち』は六如上人・混沌社の詩人たち(葛子琴・頼春水)・菅茶山・頼春風と頼杏坪・江湖者

の詩人たち（市河寛齋・柏木如亭・小島梅外・大窪詩佛・菊池五山）化政期の江戸詩壇・龜田鵬齋・岡本花亭・館柳灣・廣瀬淡窓・草場佩川・田能村竹田・梅辻春樵・貫名海屋・中島綜隱・篠崎小竹・頼山陽・齋藤拙堂・藤井竹外と森田節齋・佐藤一齋と安積良齋・柳川星巖・閨秀詩人たち（細桃女史・文姫・蘭香女史・少琴女史・原采蘋・江馬細香・紅蘭女史）・廣瀬旭狂・村上佛山・菊池溪琴・大槻盤溪・齋藤竹堂・玉池吟社の詩人たち（梅癡上人・南園上人・竹内雲濤・遠山雲如・寺門靜軒・大沼枕山・小野湖山・鈴木小塘・森春濤）等四十九名を取り上げ、江戸後期（安永・天明から幕末に至る約百年に亘る間）の漢詩文のあらましを述べた著書。富士川英郎が昭和三十九年三月から麦書房発行の雑誌『本』に「鴟鵂庵詩話」と題して二十一回に亘って連載したものに手を加えて、一冊の書物に纏め、表題も『江戸後期の詩人たち』と改めて出版した書物。

【参考文献】

〔詩〕

- 『菅茶山 頼山陽詩集』新日本古典文学大系 66 岩波書店刊行 平成八年七月
- 『菅茶山・六如』黒川洋一注 江戸詩人選集 第四卷 岩波書店 平成二年五月
- 『茶山詩 五百首』島谷眞三・北川勇 児島書店 昭和五十年
- 『江戸漢詩』中村真一郎 岩波書店 昭和六十年三月
- 『菅茶山の 大和遊歴と詩』石岡久夫 國學院雜誌 第三十七号 昭和六年十一月・十二月号
- 『詞華集 日本漢詩』『熙朝詩薈』3 友野霞舟 汲古書院
- 『東瀛詩選』清兪樹撰 佐野正巳編 汲古書院 昭和五十六年六月
- 『詩人の庭』（六如）中村真一郎 集英社 昭和五十一年八月
- 『茶山詩論』螢詠を中心として 朱秋而 『国語国文』京都大学国文学会編 卷号 64（11） 平成七年十一月

- 『菅茶山の「開元の琴」について』黒川洋一 『懷徳』58 平成元年十二月
- 菅茶山『白沙翠竹村舎集』校勘記稿上 谷本圭司 『中国学論集』九卷 平成五年十一月
- 菅茶山『白沙翠竹村舎集』校勘記稿下 谷本圭司 『中国学論集』十卷 平成六年三月
- 『菅茶山の漢詩と俳諧』「綿弓」「栗毬」「菜花」を手がかりとして 朱秋而
- 『国語国文』京都大学国文学会編 卷号66(11) 平成九年十一月
- 『菅茶山の漢詩と和歌』梅雨詩に描かれる水鶏を中心に 朱秋而
- 『国語国文』京都大学国文学会編 卷号68(3) 平成十一年三月
- 〔菅茶山伝〕
- 『菅茶山』上下 富士川英郎 福武書店 平成二年五月
- 『菅茶山』日本詩人選30 富士川英郎 筑摩書房 昭和五十六年四月十日
- 『菅茶山と頼山陽』 富士川英郎 平凡社東洋文庫 昭和四十六年
- 『芸備の漢学』上・中 頼祺一 東京書籍高校通信『国語』 昭和五十四年十月
- 『茶山片影』西田直二郎 『史林』第五卷第二号 大正九年四月
- 『富士川游著作集』第八卷 思文閣出版 昭和五十六年十二月
- 『江戸後期の詩人たち』富士川英郎 麦書房 昭和四十一年
- 『驥嶽日記』河崎敬軒 京都 風月荘左衛門 大坂河内屋儀助 文政三年四月
- 『牧野黙庵東都行続記』市川任三 立正大学教養部紀要 昭和六十二年三月
- 『牧野黙庵 陪従菅茶山文化甲戌乙亥東都行』市川任三 國學院雜誌第八十六卷第十一号
- 『福山藩の文人誌』濱本鶴賓 葦陽文化研究会 児島書店 昭和六十三年七月

『有方録』廣瀬蒙齋 寄贈 秋山文庫（伊勢湾台風水入本） 昭36修理製本

『伊澤蘭軒』森鷗外 昭和十一年

『北條霞亭』森鷗外 昭和十二年

『福山市史』中巻 福山市史編纂会 昭和四十三年三月

『菅茶山略年表』菅茶山記念館・神辺町教育委員会 平成十一年十月

『筆のすさび』『日本随筆大成1』菅茶山 吉川弘文館 昭和五十年三月

『鴟鵂庵閑話』富士川英郎 筑摩書房 昭和五十二年七月

『漢学者伝記集成』竹林貫一編 東出版 平成九年九月

〔その他〕

『吉川幸次郎全集』第十七巻 筑摩書房 昭和四十四年三月

『日本思想大系』37 「徂徠學派」頼惟勤・日野龍夫 岩波書店 昭和四十七年四月

『菅茶山の荒木商山宅訪問』頼祺一 近世文芸稿 十九号 昭和四十九年八月

『神田喜一郎全集』vi 日本における中国文学Ⅰ 同朋舎出版 昭和六十年四月

『福山藩の文人誌』濱本鶴寶 葦陽文化研究会 昭和六十三年

『菅茶山が交わった画人たち』菅茶山記念館 平成五年九月

〔頼春水・頼山陽〕

『詩集 日本漢詩』第十巻 富士川英郎 汲古書院 昭和六十一年

『当代江戸百化物』『在津紀事』上・下 頼惟完千秋著（男裏校）新日本古典文学大系 97

- 『頼山陽とその時代』中村真一郎 中央公論社 昭和四十六年六月二十五日初版
- 『頼山陽全書』全傳上巻 木崎愛吉・頼成一著 国書刊行会 昭和六年十月
- 『頼山陽全書』詩集 木崎愛吉・頼成一著 国書刊行会 昭和七年三月
- 『頼山陽全書』附録『春水日記』『梅颯日記』木崎愛吉・頼成一 国書刊行会 昭和六年
- 『頼山陽書翰集』上巻 徳富猪一郎・木崎愛吉・光吉元次郎 名著普及會 昭和二年七月
- 『日本漢學論集』嶺松廬叢録 頼惟勤著作集Ⅲ 汲古書院 平成十五年七月
- 『菅茶山 頼山陽詩集』新日本古典文学大系66 岩波書店 平成八年七月
- 『菅茶山と頼山陽』富士川英郎 平凡社東洋文庫 昭和四十六年
- 『詩人の手紙』頼桃三郎 文化評論出版 昭和四十九年
- 『隨筆百花苑』第四巻 中央公論社 昭和五十六年四月
- 『交遊考證初編』寶曆・明和以降浪華混沌詩社 頼惟勤
- 『藝備の學者』『菅茶山』和田英松 明治書院 昭和四年
- 『竹原市史』第五巻 史料編 竹原市
- 『菅茶山略年表』菅茶山記念館・神辺町教育委員会 平成十一年十月
- 『備後史談』第八巻第一号から第十二号 備後郷土史會 昭和七年
- 〔門田朴齋〕
- 〔門田朴齋堯佐傳〕『備後史談』第八巻第一号、第九巻第二号 昭和七、八年
- 『朴齋先生詩鈔』初編上・下 書肆 大坂心斎橋通博勞町 河内屋茂兵衛 備後福山今町 笹屋喜兵衛
- 『茶山・朴齋・鱒水』福山藩の儒者たち 福山城博物館 平成五年十月

『品治郡西法成寺村 大庄屋門田家の資料』 園尾蔵書

『門田朴齋詩文併日記抄』 鶴資文庫

『事實文編』六十六『朴齋門田先生墓碣銘』小野湖山撰 ゆまに書房 昭和五十三年三月

『門田朴齋先生略傳』 大正六年二月寫

『備後史談』第八卷第五号

〔西山拙齋〕

『西山拙齋傳』『西山拙齋年譜』花田一重 淺口郡教育委員会 大正九年十一月

『西山拙齋全集』第一卷・第二卷 淺口市 淺口市教育委員会 平成十八年三月

『日本庶民生活史料集成』『阿部野童子問』第六卷 三一書房

『備後史談』第十二卷九・十号、第十五卷一・二・三号

『事實文編』四十五 『拙齋先生行狀』『故備中徴士西山拙齋翁碑』

『鴨方町史』 『西山処士之碑』

『黄葉夕陽村舎文』 祭西山先生文

『拙齋西山先生詩鈔』上・中・下 江戸 湊原茂兵衛 文政十一戊子年 大坂 岡田茂兵衛 京都 吉田治兵衛

『師と友』『欽塾の教育』――西山拙齋―― 原田滿左右 三〇五号 昭和五十年六月

『師と友』『欽塾の教育』――西山拙齋―― 下 原田滿左右 三〇六号 昭和五十年七月

『師と友』『欽塾餘滴』 原田滿左右 三一一号 昭和五十年十二月

『師と友』『欽塾の成長』知敬録 西山拙齋 原田滿左右 三二四号 昭和五十一年三月

『師と友』『西山拙齋』郷学入門その二 原田滿左右 二六三号 昭和四十六年十二月

『師と友』「西山拙齋と出处」 原田満左右 二六八号 昭和五十二年五月
『拙齋西山先生遺文集』 浅口市教育委員会 平成十八年三月

附
錄

一、「茶山先生行狀」賴山陽撰

先生、姓菅氏、名晉帥、字禮卿、通稱太中、號茶山。備後神邊人、父曰樗平翁。諱扶好、稱久助。本高橋氏、爲州鴨村城主。後仕水野氏。水野氏、國除。阿部氏代封、乃隱居本邑。及翁來嗣普波氏。普波本畠山。從足利公義昭、寓備後。後世爲本邑亭長。至曰要助者、始分產。乃養翁爲嗣。配佐藤氏。生三男三女。先生其長也。

以寬延元年戊辰二月二日生。幼字喜太郎、元服改百助。翁雖業農商、頗涉書傳。佐藤氏又喜、誦國史、能訓導其子。先生少小善病。而喜讀書作詩。

年十九遊京師、從市川某、學所謂古文辭者。後自悟其非也、從那波魯堂先生、受濂洛之學。與京師佐佐木良齋、中山子幹、及浪華中井竹山、葛蝨菴、篠安道等交遊。

既歸委家事於其弟、而益讀書、教授村童。後就其家東北、河堤竹林下、築村塾、帶流種樹。對面之山名黃葉。因曰黃葉夕陽村舍。舍背隔野望連阜。有茶白山因自號茶山。

備中西山拙齋翁、以同門故、往來最密、聲氣相輔。拙齋以嚴、先生以和、而其意歸於一已。而村塾花木成陰而、伊唔之聲鬱起。拙齋既逝。凡山陽南海諸州人、欲誨其子者、皆使就學焉。素嗜詩。詩名尤高。

福山侯、與林祭酒論詩。祭酒曰、當今詩家、當以菅太中爲魁。侯命吏、廉問、更悉得其學行兼茂狀、始賜俸五口。

時寬政四年壬子八月也。

五年癸丑、東遊芳野尾濃間、還留京師。享和元年辛酉七月、藩命準儒官。十二月賜章服。文化元年甲子、公襲封。正月召之東。遂告暇遊常州。命脩福山地志。十一月扈駕歸國。二年乙丑五月增俸五口。六年地志成、上進。聽著肩衣。九年藩脩烈祖勇鷹公廟。命與督役之列。十年十二月又聽著上下服。十一年甲戌五月又召赴東邸。十二年乙亥在東邸。增俸十口。二月歸國。十四年丁丑、先生年七十、賜金壽之。

文政元年戊寅春、命錄上本藩風土民俗於大府。大府有要覽之著也。是歲遊大和、又入京師。六年癸未增俸十口。凡三十口、準大目附。十年先生年八十、賜章服及魚、壽之。是歲病喞、自春及秋、漸篤終不起。實八月十三日也。葬于網付谷。門人朋友胥議、葬儀畢循古禮。私諡曰文恭先生。

所著、黃葉夕陽村舍詩三編、凡二十三卷、文稿二卷、遊藝記一卷、室町志四卷、國字成冊者、福山志料三十五卷、冬日影二卷、隨筆三卷、常游記一卷、大和行日記一卷、荅問福山管内風俗五卷、歌集一卷。

配內海氏早亡。繼室門田氏、有內助之才。先沒。年七十、無子。二弟、曰汝榎。稱猶右衛門。曰晉葆。稱圭二。字信卿、信卿才敏、善詩。嘗入京、授徒。年三十三而死。無後。汝榎亦夭。有子曰万年。字公壽、稱要助、後改長作。性羸弱。然能讀書作詩。通天文推步。亦夭。有子。曰惟繩、稱三郎。於先生爲姪孫。今嗣菅氏。

又養妻姪門田堯佐、冒菅氏。後返之復其姓。又延志摩人北條讓、爲廉塾都講、以妹女井上氏妻焉。藩召爲文學。賜俸攜家、赴東邸、亦先先生沒。養藩士河村氏之子。曰退。通稱退藏、嗣北條氏。藩命堯佐、爲藩邸教官。

初藩旨數欲舉用先生。先生每以病遜辭。藩亦不敢強。特數進其爵秩、以俸祿優之。生徒晚益進。其所築塾至不能納焉。先生請藩、登爲鄉校、名曰廉塾。柴博士書其扁。後藩侯親筆不如學也四字揭之。歲給金焉。先生不敢私也。并與四方束脩、盡以買塾田、納於藩。藩吏以時、監其租入、以爲斥堂宇、置書籍、延諸塾師之資。

又以其所息、脩葺破敗、備器什衾被、業四方貧生有志之士而、自奉儉朴。又戒子孫、不得侵蝕塾資。蓋先生初意、

自隱於廉塾，而菅波氏舊業則、付之信卿。信卿又讓之公，以及於惟繩。及垂死、見主塾無人、欲舉塾歸之藩府、儒官之籍特止己身、不復置詞。故舊交言諫止。不得已、以惟繩掌之、以蒞其人云。

先生爲人、偉軀幹、方面高顙。及老、朱顏白髮、望之有威。而接物謙和、恂恂如田舍翁。善談諱、不欲以名高自尊大。以故自藩府吏士、至鄉閭朋友、無新舊雅俗、皆不失其驩心、如合同無分別者。然天質聰明、洞曉世故物情、暗辨淑惡人、不能欺也。

邑民嘗以饑荒、聚謀舉事。先生夙察其機、就一有力者、使喻禍福、事得寢。邑習健訟、亦多因先生而沮止者。而先生口未嘗言之也。

其說經、一循傳註、不自立異。教生徒有常課、如法而止。不必督促。主於謹言行、敦倫理而已。而務率以躬行。雖跣弛狡悍者、往往自悔艾、爲善士。至環塾百里以內田夫牧豎、皆知尊敬之、呼曰先生先生。而遠方俊異之士、因其長育、以成才器者亦不尠矣。

其著述文章歸於適用。詩尤其所長。然不欲以名家。觸興吟哦、務敘實際、不事虛設假構。而不肯苟作。切琢數四。篇成。又諮詢於人、不憚改竄。然後始傳於世。而淡雋樸秀、不見艱苦之態。以其緒餘作國詩、亦能超人意表。

自享保正德諸大家輩出、大抵本嘉萬七子、而模擬唐賢、大而未化。葛蘼菴一變之、六如師二變之。而江湖社諸子、更相標榜、海內喁然、非復舊習。然論其剛柔互用、洪纖悉有、而風格高逸、有一唱三嘆之意者、識者獨推先生焉。而丁內外艱、皆居喪三年不作詩。其詩之本、蓋即在於此。平素無他所好。有所好而不必於獲、種花竹、置書畫器什。皆苟有乃止。

嗜酒不多飲。對客如久耐杯杓、而自飲有量。及老益嚴。餐飯極少、飯後乃逍遙園圃。既歸讀書。亦未嘗久坐。其雖善病、終以得壽者以此。其所穿短掛、素布不染、有衣白山人之風。

先生雖在鄙僻、名重於海內。毛利、讚州侯、數過問村居。其兩東、東府公侯士夫、爭欲識其面。樂翁老侯眷遇尤

隆。嘗折梅花一枝、副以國詩賜焉。歸在備後、亦數有寄賜。及病遙賜藥、柴尾古三博士以下、四方儒雅、寄贈慰勲。先生亦酬答不倦。雖後生小子、手往復之。書柬風流、雜以諧語。得之者、雖隔千里、如接言笑。

襄之父及叔父、自在浪華、與先生交。及歸仕國、祖距不甚遠、交如兄弟。襄於先生、既爲不執。嘗辱援引、督其塾生周歲、已而入京師、郵筒往來、未嘗斷絕。過見毀訐、號爲知音、每作一詩、未嘗不示及。忘年亡義、視如朋友。於是詞人門生、皆欲得襄敘其行實、然後請耆舊筆削、勒爲碑名。襄誼不可辭 謹狀。

文政十二年歲次己丑夏六月藝國賴襄狀

先生、姓は菅氏、名は晉帥、字は禮卿、通稱は太中、茶山と號す。備後神邊の人、父は樗平翁と曰ふ。諱は扶好、久助と稱す。本高橋氏、州の鴨村の城主爲り。後水野氏に仕ふ。水野氏、國除かる。阿部氏代はりて封ぜらるるや、乃ち本邑に隱居す。翁に及び來りて菅波氏を嗣ぐ。菅波は本島山。足利公義昭に従ひて、備後に寓す。後世本邑の亭長と爲る。要助と曰ふ者に至りて、始めて産を分かつ。乃ち翁を養ひて嗣と爲し、佐藤氏を配す。三男三女を生む。先生は其の長なり。

寬延元年戊辰二月二日を以て生まる。幼字は喜太郎、元服して百助と改む。翁は農商を業とすと雖も、頗る書傳を渉す。佐藤氏は又喜びて、國史を誦じて、能く其の子を訓導す。先生は少小にして善く病む。而れども喜びて書を読み詩を作る。

年十九にして京師に遊び、市川某に従ひて、謂ふ所の古文辭なる者を學ぶ。後自ら其の非を悟るや、那波魯堂先生に従ひて、濂洛の學を受く。京師では佐佐木良齋、中山子幹、及び浪華の中井竹山、葛藟菴、篠安道等と交遊す。

既にして歸りて家事を其の弟に委ねて、益す書を読み、村童を教授す。後其の家の東北、河堤竹林に就き、

村塾を築き、流れを帯び樹を種う。對面の山を黄葉と名づく。因りて黄葉夕陽村舎と曰ふ。舎背は野を隔てて連阜を望む。茶白山有り。因りて自ら茶山と號す。

備中の西山拙齋翁は、同門の故を以て、往來最も密にして、聲氣相輔く。拙齋は嚴を以てし、先生は和を以てす。其の意一に歸するのみ。而して村塾の花木陰を成して、吟唔の聲鬱として起こる。拙齋既に逝く。凡そ山陽南海諸州の人、其の子を誨へんと欲する者、皆就きて學ばしむ。素より詩を嗜む。詩名尤も高し。

福山侯（阿部正倫）、林祭酒と詩を論ず。祭酒曰く、當今の詩家、當に菅太中を以て魁と爲すべしと。侯は吏に命じて、廉問せしめ、悉に其の學行と兼ねて茂狀を得、始めて俸五口を賜ふ。時に寛政四年壬子八月なり。

五年癸丑、芳野・尾濃の間に東遊し、還りて京師に留まる。享和元年辛酉七月、藩は命じて儒官に準ず。十二月章服を賜ふ。文化元年甲子、公（安部正精）襲封す。

正月召されて東に之く。遂に暇を告げて常州に遊ぶ。命ぜられて福山地志を脩む。十一月駕に扈して歸國す。二年乙丑五月俸五口を増す。六年地志成り、上進す。肩衣を着るを聽さる。九年藩烈祖勇鷹公の廟を脩む。命ぜられて督役の列に與る。十年十二月又上下服を着るを聽さる。十一年甲戌五月又召されて東邸に赴く。十二年乙亥東邸に在り。俸十口を増す。十四年丁丑、先生年七十、金を賜ひて之を壽す。

文政元年戊寅の春、命ぜられて本藩風土民俗を大府に録上す。大府要覽の著有るなり。是の歳大和に遊び、又京師に入る。六年癸未俸十口を増す。凡そ三十口、大目附に準ず。十年先生年八十、章服及び魚を賜ひ、之を壽す。是の歳嘔噎を病み、春自り秋に及び、漸く篤く終に起たず。實に八月十三日なり。網付谷に葬る。門人朋友胥議り、葬儀畢く古禮に循ふ。私かに謚して文恭先生と曰ふ。

著す所、黄葉夕陽村舎詩三編、凡そ二十三卷、文稿二卷、遊藝記一卷、室町志四卷、國字冊を成す者、福山志料三十五卷、冬日影二卷、隨筆三卷、常游記一卷、大和行日記一卷、荅問福山管内風俗五卷、歌集一卷。

配内海氏早く亡す。繼室門田氏、内助の才有り。先に没す。年七十、子無し。二弟、汝榎と曰ふ。猶右衛門と稱す。晉葆と曰ふ。圭二と稱す。字は信卿、信卿は才敏にして、詩を善くす。嘗て京に入りて、徒に授く。年三十三にして死す。後無し。汝榎も亦夭す。子有りて万年と曰ふ。字は公壽、要助と稱し、後長作に改む。性羸弱なり。然れども能く書を讀み詩を作る。天文推歩に通ず。亦夭す。子有り。惟繩と曰ひ、三郎と稱す。先生に於て姪孫爲り。今晉氏を嗣ぐ。

又妻の姪門田堯佐を養ひて、晉氏を冒す。後之を返して其の姓に復す。又志摩の人北條讓を延きて、廉塾の都講と爲し、妹の女井上氏を以て妻す。藩召して文學と爲す。俸を賜ひ家を攜へて、東邸に赴く。亦先生に先だちて没す。藩土河村氏の子を養ふ。退と曰ふ。通稱は退藏、北條氏を嗣ぐ。藩は堯佐に命じて、藩邸の教官と爲す。

初め藩旨數ば先生を舉用せんと欲す。先生は毎に病を以て遜辭す。藩も亦敢て強ひず。特に數ば其の爵秩を進め、俸禄を以て之を優す。生徒晩に益す進む。其の築く所の塾に納るる能はざるに至る。先生藩に請ひて、登せて郷校と爲し、名づけて廉塾と曰ふ。柴博士其の扁を書す。後藩侯親ら「不如學也」の四字を筆して之を掲ぐ。歳々に金を給す。先生は敢て私せざるなり。四方の束脩と并せて、盡く以て塾田を買ひ、藩に納む。藩吏時を以て、其の租入を監し、以て堂宇を斥げ、書籍を置き、諸塾師を延くの資と爲す。

又其の息する所を以て、破敗を脩葺し、器什衾被を備へ、四方の貧生有志の士を業け、自ら奉ずるに儉朴なり。又子孫を戒め、塾資を侵蝕するを得ざらしむ。蓋し先生の初意、自ら廉塾に隠れて、而して菅波氏の舊業は則ち、之を信卿に付す。信卿又之を公壽に譲り、以て惟繩に及ぼす。死に垂とするに及び、塾を主るに人無きを見て、塾を擧げて之を藩府に歸し、儒官の籍特り己の身に止め、復た詞を置かざらんと欲す。故舊交も言ひて諫め止む。已むを得ずして、惟繩を以て之を掌らしめ、以て其の人を俟つと云ふ。

先生の人と爲り、軀幹偉にして、方面高顯。老ゆるに及び、朱顏白髮、之を望めば威有り。而れども物に接すること謙和にして、恂恂として田舎翁の如し。善く談諱して、名の高きを以て自ら尊大にするを欲せず。故を以て藩府の吏士自り、郷閭朋友に至るまで、新舊雅俗と無く、皆其の驕心を失はず、合同分別無き者の如し。然れども天質聰明、世故物情に洞曉し、暗に淑慝を辨じて、人欺く能はざるなり。

邑民嘗て饑荒を以て、聚まりて事を擧げんと謀る。先生は夙に其の機を察して、一有力者に就きて、禍福を喻さしめ、事寢むを得たり。邑健訟に習ふも、亦先生に因りて沮止する者多し。而して先生口未だ嘗て之を言はざるなり。

其の經を説くに、一に傳註に循ひ、自ら異を立てず。生徒を教ふるに常課有り、法の如くにして止む。必ずしも督促せず。言行を謹み、倫理を教くするを主とするのみ。而して務めて率あるに躬行を以てす。跣弛狡猾の者と雖も、往往自ら悔艾して、善士と爲る。塾を環りて、百里以内の田夫牧豎も、皆之を尊敬するを知り、呼びて先生先生と曰ふに至る。而して遠方俊異の士、其の長育に因りて、以て才器を成す者も亦尠ならず。其の著述文章は適用に歸す。詩は尤も其の長ずる所。然れども以て家に名づくるを欲せず。興に觸れて吟哦し、務めて實際を敘べ、虚設假構を事とせず。而して肯て苟に作らず、切琢數四す。篇の成るや、又人に諮詢し、改竄を憚らず。然る後に、始めて世に傳ふ。而して淡雋穆秀にして、艱苦の態を見ず。其の緒餘を以て國詩を作るや、亦能く人の意表に超ゆ。

享保正徳の諸大家輩出して自り、大抵嘉萬七子に本づきて、唐賢を模擬し、大にして未だ化せず。葛蝨菴一たび之を變じ、六如師二たび之を變ず。而して江湖社の諸子、更も相標榜し、海内喁然、復た舊習に非ず。然れども其の剛柔互ひに用ひ、洪纖悉く有りて、而も風格高逸、一唱三嘆の意有る者を論ずれば、識者獨り先生を推さん。

而して内外の艱あたに下り、皆喪に居ること三年、詩を作らず。其の詩の本、蓋し即ち此に在り。平素他の好む所無し。好む所有るも而も獲るを必とせず。花竹を種はやしやくゑ、書畫器什を置く。皆苟くも有れば乃ち止む。

酒を嗜むも多くは飲まず。客に對して久しく栝はやしやく杓しやくに耐ゆるが如きも、而も自ら飲む量有り。老ゆるに及びて益ますす嚴なり。餐飯極めて少なく、飯後乃ち園圃を逍遙す。既にして歸りて書を讀む。亦未だ嘗て久しくは坐せず。其の善く病むと雖も、終つひに以て壽を得る者此を以てなり。其の穿つ所の短掛たんか、素布染めず、衣白山人の風有り。

先生は鄙僻に在りと雖も、名は海内に重し。毛利、讃州侯、數しばば村居に過ぎり問ふ。其の兩ふたび東するや、東府の公侯士夫、争ひて其の面を識らんと欲す。樂翁老侯けんぐう眷遇尤も隆し。嘗て梅花一枝を折りて、副そふるに國詩を以て賜ふ。歸りて備後に在るや、亦數しばば寄賜有り。病むに及びて遙かに藥を賜ふ。柴、尾、古三博士以下、四方の儒雅、寄贈慇懃なり。先生も亦酬また答して倦まず。後生小子と雖も、手づから之に往復す。書柬風流、雜またふるに諧語を以てす。之を得る者、千里を隔つると雖も、言笑に接するが如し。

襄の父及び叔父、浪華に在りし自り、先生と交はる。歸りて國に仕ふるに及び、祖距甚だしくは遠からず、交はり兄弟の如し。襄の先生に於けるや、既に不執た爲り。嘗て援引を辱うし、其の塾生を督すること周歲、已にして京師に入り、郵筒往來、未だ嘗て斷絶せず。過あやりて奨許せられ、號して知音と爲し、一詩を作る毎に、未だ嘗て示し及ばずんばあらず。忘年忘義、視ること朋友の如し。是に於て嗣人しじん門生、皆襄の其の行實を敘ぶるを得て、然る後に著きま舊きうの筆削を請ひ、勒くわして碑名と爲さんと欲す。襄誼辭すべからず。謹みて狀す。

文政十二年歲次己丑夏六月藝國頼襄狀

〔晉帥〕ときのり 〔普茶山 頼山陽詩集〕新日本古典文学大系。しんする 〔茶山詩五百首〕兒島書店。〔寛延元年戊辰二月二日〕寛延元年（一七四八）は七月に改曆されているので、正確には延享五年二月二日であ

る。「古文辭」明の嘉靖年間に李攀龍、王世貞等が主張した修辭的文学。我が国では荻生徂徠一派がこれに和し尚んだ。「濂洛之學」濂溪の周敦頤、洛陽の程顥、その弟の程頤の唱えた宋学。「呬唔聲」讀書する声。「廉問」問いただす。「林祭酒」昌平賢の林大學頭。「學行兼茂」學問・行い共に優れて立派。「章服」紋付きの着物。「裏封」先代の領分をそのまま受け継ぐ。「嗚噎」喉咽のつまる病。「胥」互いに。皆。「推歩」天体の運行を推算すること。「遜辭」へりくだって辞退する。「爵秩」位と扶持。「扁」扁額。「束脩」入学金。「脩葺」整え修理する。「衾被」布団や寝間着。「方面高類」四角張った顔で頬骨が高い。「謙和」人に譲って穏やか。「恂恂」穏やかでうやうやしい。誠実な様子。「談謔」おどけ。戯れ。冗談。「驩心」喜び嬉しく思う心。「淑慝」善悪。「饑荒」飢える。穀物の熟さないのを饑、果物の不熟なのを荒という。「健訟」妄りに訴訟する。「傳註」書籍の注釈。「躬行」自分が実際に行う。実践。「厩弛」締まりが無く礼儀にかかわらない。恣に振る舞う。「悔艾」悔い改める。「切磋」切磋琢磨の略。「諮詢」意見を尋ねる。「改竄」文章の語句等を改め直す。「緒餘」本業と他の余技。「嘉萬」明の年号である嘉靖と萬曆。「標榜」主義主張などを公然と掲げて示す。「緒善行などを褒め讃えて公衆に掲げ示す。「囁然」人が集まって仰ぎ慕う。「洪纖」大きい者と小さいもの。「艱」憂い。辛いこと。「栝杓」盃を酌み交わすこと。「短掛」短く粗末な上着。「眷遇」手厚くもてなす。「柴尾古」柴野栗山、尾藤二州、古賀精里寛政の三博士。「祖距」道の隔たり。「不執」父の親友。「周歲」満一年。「獎許」勧め励ます。「忘年」年令の差を忘れる。「忘年交」年令の上下を忘れて、互いの才徳を尊敬し合って交わる間柄。「耆舊」年寄りと昔なじみ。「勒碑」石碑に文章を刻みつける。「誼」したしみ。情誼。

二、茶山・春水・山陽関係の書簡

① 文化七年七月廿六日附 築山捧盈宛山陽書簡〔『頼山陽書簡集』上・二四〕

都講として「廉塾」で勤めるようになって半年を経た山陽は、神辺の田舎暮らしに我慢がでず、塾生の指導にも張り合いがなくなり、三都に出たいという宿志は募る一方であつた。茶山は、福山藩に仕えること、妻帯することを勧めるが、山陽にはどちらもその気持ちはない等の思いを築山捧盈に訴える。築山捧盈は、山陽が幼少の頃から何かにつけて目を懸けてくれた人である。

…經書講釋等も不得手之義、得手と申候ては、史學と文章に御座候。是にて少々にても御國之御用に相立候義仕度、即籠居以來、日本外史と申、武家の記録二十卷、著述成就仕居候へども、是は區々たる事にて、引用の書なども不自由、私心に滿不申、愚父壯年之頃より、本朝編年之史、輯申度志御座候處、官事繁多に而、十枚計致かけ候儘にて、相止申候。私義、幸隙人に御座候故、父の志を繼、此業を成就仕、日本にて必要之大典とは、藝州之書物と、人に呼せ申度念願に御座候。此義、三都に居申候而、書物を廣く取集め、多聞の友を多く取不申候而は、出來仕らぬ事に御座候。水戸日本史なども、江戸に史館御建被遊候は、此譯に御座候。右史館などは、大造之義に候故、私一分にて朋友門人など相聚、仕上の義は、手覺御座候。少しも^①御上の御物入等、累し申義は無之候。其上、凡そ古より學者之業を成申地は、三都之外は無之候。如何なる達人にても、田舎藝は用に立不申候。闇齋・仁齋・徂來など之様の業は、都會ならでは出來不申候。如此人にては左様に候へば、まして凡人は猶更之事に候。不肖の私に御座候へども、何卒右之場所へ出、名儒俊才に附合申候而、學業成就、名を天下に擧、末代までも藝州の何某と被呼候はゞ、螢火にて月光を増候譬にて、少は^②御國の光とも可申候

哉。何分學者と生れ、三都に居不申は、暗闇に居申も同前に御座候故、幸ケ様之不用の一人に相成候故、今生之思出に、大場へ罷出、正學を以四方(を)靡せ申度事、生前之念願不過之奉存候。…去冬此方(茶山塾)へ參候一件、家長共、私へ一向知らせ不申、間際に相成、漸發言仕候。私好み不申事に御座候へども、已に願出の義、今更辭退も難仕、急に追立られ罷越候。其以來、書生の世話無怠仕候へども、何分不納得之義に御座候へば、つまらぬまゝに御座候。誠に草原にて、馬子牛飼の外は、談話仕候人も無之、扱又、福山之家中應接仕候節も、不面白事のみを御座候。それはともあれ、廣嶋に居候節は、また時節も有之候はゞ、都會へ出候事も出來可申と、空頼みに存居申候處、爰元へ參候ては、其頼も絶果申候故、日夜悲歎仕候事に御座候。然處、福山之公邊にては、私を取放し不申様に、役人共寄合、彼是と談合仕、私に知行取らせ、士儒に取立申度旨、内意菅先生より被申聞候。先生には私所存を御承知無之、不仕合の私故、是は宜敷事に有付申候事故、承引可仕被勸候。私對申は、是は案外之事を承申候、私奉公出來之身に候へば、本國にて仕可申筈之義に御座候、本國にても奉公不仕以上は、如何様之御勸にて而も、結而此義、可仕様無御座候旨、答申候へば、夫は小國故嫌申候哉、小國にても俸祿は随分宜敷旨被申候故、私は義之字を申候、義に協不申義に候へば、譬如賀・薩摩より所望に預り候ても、見向も不仕了簡に御座候。大恩の本國に、尺寸之勞を盡し不申、他國におめくくと出仕候事、私畜生に御座候はゞ可仕、苟も人に而御座候へば、何の面目に而、天下之人に對し可申と申切候。扱又、私に妻を迎へ申候様被勸候。此義も辭退候譯は、私義長子と生れ、父之家を繼、父を安隱ならしめ候筈之處、簡様之身分に相成、他所へ參り申考に候へば、常並の人間の暮しを仕候ては、天罰可畏候。生涯妻縁不仕、不自由にて自罰之積り、せめて之申譯に仕度奉存候故、此義も相斷置申候。扱又、私義福山家老の方へ詩會に罷越候節、客方のあしらひと存居申候處、菅太中養子と申様のあしらひにて、呼棄に致申候。是さへ口惜存居申候處、役人の方にては、私に本姓を捨、菅氏を名乗せ申様の積に相聞え申候。全體、學統相續と申て、寺の後

住のものを申事故、可然義と存居申候處、右之通にては、一儒者の身に大に恥と仕候事、父に對し申譯無之候。右様之儀は、幾重にも相斷、此方申分相立申事も可有之義に候へ共、私多年の願望遂候期は無之様に相見申候。叔父萬四郎（杏坪）、別の節、何分神邊を根城と存じ、随分都會へ出遊候事、出來可申旨、私に納得させん爲に申候へども、此方へ參見候へば、中々左様の事出來申候ても、私本志は成就不仕、何分年少氣壯の内に一度大所へ出、當世才俊と被呼候者と、勝負を決申度奉存候、…此地に居候へば、卅人ほどの學生よりは先生（と）被仰、田地等の家督も御座候へども、何分人の跡を囓ひ、機嫌を取り候事、不面白奉存候。…此事、菅先生へ打明可申とも存候へども、難申出、愚父・叔父などへ申出候ても、中々差許不申候て、出來候事も出來ぬ様に相成可申、左候ては、生涯の懟^{つゝえん}怨に相成、恩を傷候事（に）御座候。…乍去、私事先年より御領分内にて、出行難相成に候處、格別の御取成を以て當所迄罷越、又々高飛を仕候事、如何可有之哉々世々。何分、尊公様御了簡にて、宜敷御取計ひ被遣、私生涯の大望、御遂げさせ被遣候はゞ、此恩、生忘却仕間敷候。…

② 頼山陽「上菅茶山先生」（文化七年九月）

文化七年七月廿六日附 築山捧盈に宛てた山陽書簡で、「…此事、菅先生へ打明可申とも存候へども、難申出、」と言つていた山陽は、ついに文化七年九月「上菅茶山先生」という次の文章で茶山に申し入れをした。

頼襄謹再拜、白菅先生座下。日承尊諭、藩議欲襄就官、待以好爵重俸。襄朽廢人也。而蒙收録焉。不可不謂之知己者也。覆而考之、不知襄者矣。襄唯不欲仕也。是以在此。使襄欲仕、則有父母之邦在。邦君仁恕、捐金紉故、加之推輓有人。則使襄欲仕乎。脩飾身言、顧慮毀譽、凡可以干祿者、何不爲也。夫父母之邦、義所當仕、不得謂不欲之也。而有所不能焉。襄天質多病、疎放爲習、不能整衣裳、不能久坐、不能屈伸、不能時起臥、不能從而入、從而出。至路阻囁囁、爲不情之言、以相應者、尤所不能也。饒令少忍或不異恒人、久忍之、則結畜

其氣、無所發洩、心喪心病狂、身家兩敗。而無益於國。是亦何取於仕也。天下之士、誰不被其國恩。若襄則可謂最重矣。襄之家、非有先登斬首之功也、非有積日累歲之勞也、及家翁之身、遭遇右文、起布衣、上朝班、遂至忝師範之任。撫存待遇、無所不至。襄常見其感激思報、蹇蹇不解。爲襄者、安可不竭力致身、以繼其志哉。抑人各有能、有不能。自量所能、要之於終、雖身之不列於朝、或足以圖尺寸之報。是襄所以燕息度年也。今乃顧通籍委贄於他邦、是胡爲哉。使襄禽獸則可、苟亦人也、則何心處之、亦何面目以見天下之人乎。襄之出國、已誓於心、雖百喙交說、斷斷乎不遷矣。不知襄者、亦曰、彼不欲事於小也。襄特以其義耳。義已不可爲、使有賀薩來聘、不就也。況其有所不能乎。有養鶴者於此、憐其病而不能踰籬也。開籠放之、羽翮摧殘、飲於潦、啄於藻。或者欲收諸彩籠、飼以稻粱、而鶴不願也。出籠入籠、彼鳥願乎。使雀甘於籠、則何必辭故主。辭故主以往、凌雲翺霄、皆其賜也。今襄亦將全其賜焉。至議使襄姑捨其姓、則不獨不知襄、乃不知先生所以畜襄之意也。果然、何以自稱於士林哉。夫人以好來、襄不以好報。必大傷其意。先生愛人憐才、量如江海、必不怒於盡言。是以冒昧至此、唯先生恕亮之。

襄謹白、

賴襄謹み再拜し、昔先生座下に白す。日に尊論を承り、藩議襄を官に就かしめんと欲し、待するに好爵重俸を以てす。襄は朽廢の人なり。而るに收録を蒙る。之を知己者と謂わざるべからざるなり。覆かつて之を考ふるに、襄を知らざる者なり。襄は唯だ仕ふるを欲せざるなり。是を以て此に在り。襄をして仕へしめんと欲すれば、則ち父母の邦の在る有り。邦君の仁恕、細故を捐舍し、之に加へて推輓人有り。則ち襄をして仕へんと欲せしむるか。身言を脩飾し、毀譽を顧慮し、凡そ以て禄をも干もとむべき者は、何ぞ爲さざらんや。夫れ父母の邦、義として當に仕ふべき所、之を欲せざると謂ふを得ざるなり。而れども能はざる所有り。襄は天質多病、疎放習ひと爲り、衣裳を整ふる能はず、久しく坐する能はず、屈伸する能はず、時に起臥する能はず、從ひて入り、從ひて出づる能はず。路阻囁囁、不情の言を爲し、以て相應答するに至りては、尤も能

はざるところなり。饒たごひ少し忍びて或いは恒人に異ならざらしむるも、久ひさ（ついで）之を忍べば、則ち其の氣結畜し、發洩する所無く、心心を喪ひ狂を病み、身家兩ふたつながら敗る。而して國に益無し。是れ亦何ぞ仕を取らんや。天下の士、誰か其の國恩を被らざらんや。襄の若きは則ち最も重しと謂ふべきなり。襄の家、先登斬首の功有るに非ざるなり、積日累歳の勞有るに非ざるなり、家翁の身に及び、右文に遭遇し、布衣より起り、朝班に上り、遂に師範の任を忝かたじけなくにするに至る。撫存待遇、至らざる所無し。襄常に其の感激して報いんことを思ひ、蹇蹇けんけんとして解かざるを見る。襄爲る者、安んぞ力を竭つくくし身を致し、以て其の志を繼がざるべけんや。抑おし人各の能有り、不能有り。自ら能くする所を量り、之を終はりに要せんには、身の朝に列せずと雖も、或いは以て尺寸の報を圖るに足らん。是れ襄の燕息して年を度る所以なり。今乃ち顧みて他邦に籍を通じ贄を委ぬるは、是れ胡爲なにするものぞや。襄をして禽獸たらしめば則ち可、苟いやしくも亦人なれば、則ち何の心もて之に處し、亦何の面目以て天下の人に見えんや。襄の國を出づるや、已に心に誓ひ、百喙ひくかい交まじも説くと雖も、斷斷乎として遷らじ。襄を知らざる者は、亦曰く、彼は小に事ふるを欲せざるなりと。襄た特に其の義を以てするのみ。義は已に爲すべからず、賀薩の來聘有らしむるも、就かざるなり。況んや其の能はざる所有るをや。此に養鶴者有り、其の病みて蹠蹠へん蹠する能はざるを憐れむなり。籠を開きて之を放ち、羽翮摧殘うかくさいざん、潦はたみに飲み、藻に啄む。或いは諸を彩籠に收め、飼ふに稲梁を以てせんと欲するも、鶴は願はざるなり。籠より出で籠に入る、彼鳥いづくんぞ願はんや。雀をして籠に甘んぜしむれば、則ち何ぞ必ずしも故主を辞さん。故主を辞し以て往き、雲を凌ぎ霄に拊のぶる、皆其の賜なり。今襄亦將に其の賜を全うせんとす。議して襄をして其の姓を始捨せしむるは、則ち獨に襄を知らざるのみならず、乃ち先生以て襄を畜やしなふ所の意を知らざるなり。果然、何を以て自ら士林を稱よまへんや。夫れ人好を以て來るも、襄好を以て報いず、必ず大いに其の意を傷けん。先生人を愛し才を憐れみ、量江海の如く、必ず盡言に怒らず。是を

以て冒昧 此に至る。唯だ先生 之を恕亮せられんことを。

「屈伸」礼容。「朝」藩。「燕息」仕えず。「他邦」福山藩。「編籥」ひらひらと舞う。「潦」庭のたまり水。

③ 文化七年九月六日附 頼春水宛 菅茶山書簡 (『雲か山か』第五八号)

茶山から春水に宛てて近況を知らせた書簡である。山陽の「日本外史」の文章を褒め、春水が未だ読んでいないとは「いかなる事ニ御坐候哉」と窘め、文才が優れていることを褒めている。

杏坪へおくりたる詩ハ、令郎より申参候よし、略す

令弟令嗣御便、また順迪国手 便御左右承、大慶御坐候、此方令郎始皆々無事ニ御坐候、御安意可被下候、田野閑散御羨敷被仰下候へ共、此方も忙敷ことハ甚候、何と申こともなく候へ共、寸隙もなく候様ニ候、令郎見え候而より、每日一講と詩の点刪ほと免れ候へハ、半肩ハゆるミ候様の物也、然とも客と藝事と二日々草臥候、藝事と申すも、米をかひ薪をかひ候外ハなし、あとハ兒輩か喧嘩をするの、近所の者か誰に何といふてくれのと申こと計ニ候へ共、扱々うき世と申物と存候、これも天下一統之事也、奈何ニ附し候外いたしかたなく候、駕籠人足か駕籠をやめれハ煩ふと申ことも御坐候へハ、これもよきかとも奉存候、新令郎も眼中不凡悦申候、まめそうにて第一之ことニ御坐候、令郎外史全篇甘巻一覽いたし候、扱々高妙なる物ニ候、記事之文は徂來などよりハ宜候様ニ見え候、精細之處ハしらす候、いまた御覽不被成候よし、いかなる事ニ御坐候哉、築山へ参候文之こと、闕字等之こと、相談も御坐候、人ニみせるためにかゝぬもの故、結句闕字などなきもよかるへしと、私も申し候やうにも覚申候、何分文才ハ勝レ候様ニ見え候事ニ御坐候、此便いそき草々申上残候、

恐惶謹言

九月六日

菅太中 晉帥

頼弥太郎様

杏坪へ送りました詩は、ご子息より申し参つたとの事で略します

弟様お世継ぎ様のお便り、また順迪 広島藩儒医の手紙ご近辺のあれこれ承り、大慶に存じます。此の方ご子息始め皆々無事でおられます。ご安心下さいますように。田野閑散として御羨敷くと仰つて下さいますが、此の方も忙しいことは甚だしいございます。何と申すこともないようにございますが、寸暇もないようでございます。ご子息見えましてから、毎日一つの講義と詩の点刪どもは免れましたので、肩の半分はゆるんだようなものです。しかしながら客と仕事とに日々草臥れます。仕事と申すのも、米を買い薪を買います外はありません。あとは子どもなどが喧嘩をするの、近所の者が誰に何と云うてくれのと申す事ばかりにございますが、扱々浮世と申すものと存じます。これも天下皆おなじような事です。奈何に附して行くか以外には致し方ない事でございませぬ。駕籠人足が駕籠をやめれば煩うと申すこともありませぬので、これもよいかとも思っております。新しく来られたご子息も知己をおしなべて悦ばれないようです。元氣そうでそれが第一の事に思われます。ご子息の外史全篇廿巻を一覧いたしました。扱々立派なものでございます。記事の文は徂來などよりは宜しいように思われます。精細のところは分かりませぬが、まだ御覧になつておられないとの事、どうなさつたのでしょうか。築山へ差し上げた文の事、闕字等の事、相談もございました。人に見せるために書いたわけではないので、結句闕字などはない方がよいだろうと、私も申したようにも覚えております。何分文才は勝れておられるように見えます。此の便急ぎ草々申し上げました。かしこみ申し上げませぬ。

恐惶謹言

「順迪国手」「順迪」広島藩の儒医。「国手」は名医。「眼中」知り合い。知己。

④ 文化七年十月八日附 頼春水宛 菅茶山書簡 (『雲か山か』第五九号)

山陽が、「二広島藩に不忠をしたので、他藩には仕えない、父に不幸をしたので妻は娶らない」と言う。私どもが勧めたものでは理想の高いことばかり言つて聞かない。そろそろご夫婦で説得されたらどうだろうか、といった書簡である。

状小き物かね可申やと、有合の筆をいれ候、御書試可被下候、價もしれ候筆也

鈴木内蔵へ托候書、餘息迫二而率爾申上殘候、昨日之事也、寒冷日増候、愈御安祥御坐候哉、承度奉存候、私ハ夜前などハ餘程窘候、いつも冬ハあしけれとも、今歳ハまた甚候、門松之態と奉存候、扱令郎いつそや一件、君に不忠をいたし候へハ奉公ハせず、父へ不孝をしたれハ妻ハむかへすといふ尺牘也、永き尺牘也、文ハ妙なり、つまらぬものニ候、あの通なれハ、一生ニ事ハやめといふ物也、是か始終とゞき可申哉、左なくハ早く奉公をもし、女房をももつといふニならねハつまらぬ者也、然ともあの様ニいふてハ、人かすゝめる位でつゝ直されるものニも非ス、これハ君か父かど命するの外よき手なし、左候へハ御夫婦してそろく御説被成てはいかゝ、此事御すゝめ申候、私等か申てハ高き事計承候而、中々承知ハ出來申さず候、何分仁兄より被命候外手なく候、私も十人扶持、すて扶持の様ニもらひ候而、月ニ三度ハ学館へも出る筈なれとも、これは府誌にて今迄ハやめ居申候、さすれハ其後住といへは、これもせねはならぬこと也、此比ハ頻ニ士人ニ鮑果候などの詞出候、尺牘之ニ事と平居之詞此頃にて見れハ、惣髮ニなり十徳など着し、小わきさしに頭陀袋といふ身にならねはうつらす、これらの處御勘弁、何分御説破可被下候、右申上度如此御坐候、尊嫂様へ御次宜奉願上候、其内またく可申上候、

恐惶謹言

十月八日 菅太中 晉帥

頼弥太郎様侍史

文書の小さき物を兼ねるであろうかと、有り合わせの筆を入れました。御書き試してください。値もたいしたことのない筆でございます。

鈴木内蔵へ托されました書は、余り急ぎまして慌ただしく申し上げ残しました。昨日の事です。寒冷日に増します。愈々御安祥でいらつしやいますか。お伺い申し上げます。私は夜前などは大層苦しうございました。いつも冬は悪いのですけれども、今年は又、甚しく存じます。門松の態と思つております、扱てご子息のいつぞやの一件、「君に不忠を致したので奉公はしない。父へ不孝をしたので妻は迎えない」と云う手紙です。永い手紙です。文は巧いものです。(内容は)つまらぬものです。あの通りであれば一生二つの事(君に仕えない、妻は娶らない)は止めたと云うものです。是れが一貫しているでしょうか。そうでなければ早く奉公をもし、女房をも持つと云うことにならなければつまらぬものです。しかしながらあの様に云うては、人がすゝめる位ですぐに直されるものでもなし、これは君主か父親かが命ずる外によい手はありません。そうであればご夫婦でそろくお説きなされてはいかがかと、此の事をおすゝめ申します。私等が申しては理想の高い計りごとを承つて、中々承知はされません。何分あなた様より命じられなさる外に方法がないと思われます。私も十人扶持、すて扶持の様に貰いまして、月に二三度は学館へも出る筈ですが、これは府誌にて今迄はやめておりました。そうすれば其の後住といえは、これもしなければならぬ事です。此の頃は頻りに士人に飽き果てた等との詞が出ます。手紙の二つの事と普段の詞とで見ますと、惣髪になり十徳などを着て、小脇差しに頭陀袋と云う身にならねば似合わず、これらのところは見逃しなされて、何分しつかりと説き聞かせて下さる様に願います。右申し上げ度く此のようなことを認めました。尊嫂様へ宜しくお伝え下さいますように願ひ上げます。其の内またく申し上げます。

恐惶謹言

「嫂」兄として尊敬する人の妻。兄嫁。

⑤ 文化八年閏二月廿九日附 頼春水宛 菅茶山書簡 (『雲か山か』第五九号)

春水の頼みを適えることができず、山陽を京都に出してしまつたことを詫び、茶山がそのような措置をとつた訳を伝える書簡。

壬二月望之御書、七日之書之御返事とて被遣拜見仕候、竹原翁とゞもに御覽之由、其事被仰下御書ハ先達而相達候、令郎御事先々一周年御無難ニ御滞留悦申候、出立之後ハ岡山ニ而之詩見うけ候、其後ハ不承候、今日又問ニ遣し候、しれ候はゞ可申上候、段々御礼謝之御言とも被仰下、恥愧仕候、私も初一念とハ違候而、貴意ニ幅し候程ニ出来不申候處、かへすくも愧汗仕候、扱御書に尊慮次第など被仰下候ことは一分解御坐候、其譯ハいかにしても鄙慮之ことくなる人ニ而ハ無御坐候、内々同居時さへ、一向ニ自由ニなる人ニ而ハ無御坐候、晉帥時々諷規セラレシ事ハ多し大抵私を彼方の流義ニせんとせられ候ことハ多く候、況や今千里をへたて鄙意次第と被仰ても一向ニ左様ニなる事にてハ無御坐候、此趣御推察左様思召被置可被下候、元來此方之家風ニ合不申候へハ、御返し申候か当然之事ニ候へ共、去々年無餘義被仰下候わけも有之、又去年帰省と申時ニ被仰下候事も有之、此二ツを以て廣へかへし候事ハ私も思惟いたし候、且又其身も頗ニ上京之望有之、中々とまるへき勢も見えず、又とゞまる様ニならぬ様ニ仕かけられ候ことゞも有之候、然とも御存寄を不承、一存ニ可仕ニもあらず、其身も一旦御思召をも承度、私ニ取計ひくれよと申ことニ而御尋申上候處、左候ハ、先太中用事にて上京などゞ人ニハ申居るへき御返書有之、夫故私も不苦とも存、其身も廣をハ私ニ取なしくれよと申ことニ而被出候、其出られ候時分、出立之日限しれす、十日計前私尋候へハ、六七八日の比と被申候、私もうかゞと其様ニいそかしき事ニ而ハあるましく存居申候内、これハやくそくのたのまれ詩文認物、又私か頼ミし物もあり五日比俄ニ取認められ候故、与兵衛ニとはせ候慮しかとしれす、前夜ニなりて、六日といふことハ、よそより暇乞ニ参る人ニ承候くらひ也、其前もこゝかしこふそくと内相談とも段々有之、私かしらぬ約束等之

事も有之候趣ニ御坐候へハ、中々私かとめるととめられず、いなすとていなされず、悉皆私ハ御宿の亭主といふふりありあひニ見え候、左候へハ私へ御渡し被成たとして、其人わたされ候心にてもなく、勿論不羈之人也、つなかれもいたさず候、懸越^{カケコシ}ニ御聞被成候てハ、今すこし致方もあらんと可被思召候へとも、中々左様の事二而ハなく候、御推察可被下候、去年正月元日之詩ニ藝圃之臣頼氏子と申結之絶句御坐候、これらも御考合可被下候、これらの心可憎亦可壯亦可崇候、委曲ハ万四郎兄御掃藩之節可申上候、

恐惶謹言

壬二月廿九日

菅太中 晉帥

頼弥太郎様侍史

陪従上京いたし候人ハ、ミな塾ニ而之よりぬき人物也、先三四人跡より追々参候物も可有之、いつれも大塔宮へしたかひし輩のごとし、可頼候、左候へハ末の仕揚ニ而御覽可被成、大かたハよかるへし、又外ニ力をそへ世話いたし候人も有之、これハ力ある人々也、出立之期ハこれらより促候様ニ見え候、五日之夜迄しれさりしも、態と私ニかくし候ニ而もなし、実ハ合図を待候而其時定期候ことゝ見え候、出る時ハ諛ニとる物もとりあへすいふこともいはず、第一之京ニ而家かり候世話人のことも打すて出られ候、其光景それよりよき事出来し様也何さま懸越ニ而御氣遣候處、私も推察仕候、あはれわたくし今すこしわかかく候ハ、同道上京あな^{ラニ}りをも見申度アチラニハキラヒ也候へ共、それも不叶不取計にて御心遣をかけ候事、重畳申譯無御坐候事ニ御坐候、しかし此不取計ハ私一人之不徳ニもあらず、御憐察可被下候

壬二月十五日の御書状、七日の書状のご返事として遣わされ拝見致しました。竹原翁とゞもにご覧になりました由、其の事おっしゃって下さるご書状は先達て届きました。ご子息の御事、先ず々々一周年ご無難にご

滞留お悦び申し上げます。出立の後は岡山にての詩見うけました。其の後は承っておりません。今日又問いに遣っておりませす。知れましたならば申し上げます。いろいろ御礼を謝すのお言葉ども仰せ下さり、はずかしく存じます。私も初めの一念とは違ひまして、貴意に幅うた程に出来ませんでしたところ、かへすくも愧じて汗が出る思ひです。扱て御書状に「お考え次第」等とおっしゃつて下さいました事は一身の面目わかります。その訳はいかにしてもつまらない考えのような人ではございません。内々同居の時でさえ、一向に自由になる人ではございませんでした。(私時々それとなく戒められる事は多い)大抵私をあちらの流義にしようとする事が多くございました。ましてや今、千里を隔てて田舎者の気持ち次第と仰せられても、一向にそのようになる事ではございません。この趣ご推察され、その様に思つて置いて下さい。元來此の方の家風に合ひ申さないのをごいいますから、お返し申すのが当然の事でございますが一昨年、他に取る方法も無いと仰つた訳も有り、又去年帰省と申す時に仰つて下さつた事も有り、此の二つを以て広島へ帰します事は私も考えはかりました。且つ又、其の身も頻りに上京の望みが有り、中々とまるような勢も見えず、又止まる様にならぬ様に仕かけられました事ども有りました。しかしながらご存じ寄りを承らず、一存にすべきにもあらず、其の身も一旦お思召しをも承り度く、私に「取り計らつてくれよ」と申す事でお尋ね申し上げましたところ「それならば先ず太中の用事で上京する等と人には申して居る」というご返書が有り、それ故私も苦しからずとも存じ、其の身も「広島のことには私に取りなしてくれよ」と申すことで出られました。其の出られました時分、出立の日限が分からず、十日ばかり前に私が尋ねますと、六七八日の頃とおっしゃいました。私もうかうかと其の様に忙しい事はあるまいと思つております内、これは約束の頼まれた詩文認め物、又、私が頼んだ物もあり五日頃俄に取り認められましたので、与兵衛にと馳せましたところはつきりと分ならず、前夜になつて、六日と云うことは、よそから暇乞いに参る人に承つたくらいのことです。其の

前もこゝかしこひそくと内緒の相談どもいろいろと有り、私の知らない約束等の事も有るような趣でございましたので、中々私がとめるととめられず、いなすといなされず、悉く皆私はお宿の亭主と云う塩梅に見えます。そうですから私へお渡し成されたとしても、其の人はわたされた心でもなく、勿論何物にも束縛されない人です。繋がれも致されません。隔ててお聞きなさいましては、今少し致し方もあるだろうと思われるかも知りませんが、中々そのような事ではございません。ご推察下さいますように。去年の正月元日の詩に芸國の臣頼氏の子と申す結びの絶句がございます。これらもお考え合わせ下さいますように。これらの心は憎むべきであり、亦、立派と云うべきであり、尊敬すべきであります。詳しいことは万四郎兄がお帰藩になりました節に申し上げます。

恐惶謹言

壬二月廿九日

菅太中 晋帥

頼弥太郎様侍史

供人として上京いたします人は、皆塾でのより抜き的人物です。先ず三四人、跡より追々参りました者も有るようです。いずれも大塔宮へ従った者のようです。頼りになります。そうですから末の仕げにご覧なさるべく、大かたはよいでしょう。又外に力をそえ、世話いたす人も有り、これは力のある人々です。出立の時はこれらから促しましたように見えます。五日の夜迄知れませんが、わざと私に隠しましたようでもなく、実は合図を待ちまして其の時、定りました事と見えます。出る時は誠に取る物も取り敢えず、云う事もなく、第一の京にて家を借ります世話人のことも打ち捨てて出られました。其の光景（それよりよい事が出た様）は何さま間を隔ててのこと（直接に見聞したのではないこと）でお気遣いのところ、私も推察致します。残念なことに私、今少し若ければ同道して上京するなどしてあちらのことをも見申し度く（あちら

は嫌うでしようが) ございしますが、それも叶わず取計らいもせずと云うことでお心遣いをかけます事、重ね々々申し訳無いこととございます。しかし此の取り計らい出来ざることとは私一人の不徳でもございませぬ。ご同情下さりお察し下さいますように。

「尊慮」お心持ち。お考え。「二分」一身の面目。「不羈」才気が並々優れ何物にも束縛されない。「委曲」詳しいこと。

⑥ 文化八年五月十五日附 頼杏坪宛 菅茶山書簡(頼桃三郎『詩人の手紙』)

「廉塾」に来て一年余りの山陽が、どのような生活を送ったか、その主だった様子を茶山から頼杏坪に宛てて知らせたのが次の書簡である。

覚

初三四年前令姪久太郎殿より身の上のつまらぬこと行末のいかゞなるべきなど兩三被仰越候事御座候より、私も尤と思候事も有之、令兄弥太郎様へも申上候こと有之候、これも御心落無之こと候、其故はかゝしき御返事も無之経年月候内去々々か被仰下候旨あり、様子により官譴も可有之よし事急にきこえ候より私存寄を申上候処、早速御許容引受候に相成候、私了簡には此人とても里間之間に寂寞牢騒久しく候人とも不存、又彼才子在郷に埋み候もほいなきこと、都会の地へ出し候はゞ徳はともあれ才名は十分に售れ候半と存候、其内私塾に而足をとめ後住ゴホウにもなり被與候へば此上之大慶は無之、此二つを打明かし存寄にまかせ、都下へ出られ候はゞ其辺也、塾に居られ候はゞ簡条を以身持塾法など申聞せ其事得心之上に而妻縁ども、取結候半と、了茶上人を煩取次事を決しもらひ申さんと、令姪見え候時呼寄せ置候処、折節大晦日に候へば老師に越年の事伺不申來候故一先帰り正月早々可參申帰られ候、正月にまでも、見え不申、病氣之由也、幸に吉和伝蔵見え候故

此事を談じ候へば、それは暫くまち候へよ、私近日広島へ参候へば竹原へも立寄り相談の上可申上と申て帰候故、いつかくと待候へ共奮然うせきこえ不申候、其内

広島にては日々ありき候に一里二里は往還いたし候へば腹もこなれ候、塾に而内に計る候而は病を長じ可申とて日々諸生を誘引遊行有之候故、私も三度に一度は酒肴ども調へ同行いたし候、或日市村といふ処に紅梅大樹有之とて見に参候路千田といふ所に前に池あり藁屋三四家白梅さかりにひらき候、扱々幽雅なるよき所と私ほめて過候へば、令姪幽雅にはこまり入申候、此上之幽雅は御免可被下と申され候、私も驚きふりかへり見申候へば顔色も不宜候、むめの盛なれば正月の末か、龍泉寺と申に桜ひらき候とて同伴参候に、いまだ花もひらかず、其地大工など取乱しる申候へば酒肴は八幡社に而開き候、其山近村を一覽いたし候、諸生中に一人村家を指さし山水の画の事を申候、其時令姪元來ありて益なき家は一軒もなきがよしと被申候、やがて私を見て此村は塾計なればよしと被申候は私へすこし挨拶と見えたり、

右之時之容貌顔色を見て塾に留まる人とは見えすと候へども、妻縁どもいたし候はゞ留まることゝ人も申候故少々きゝあはせ候、

町家によきこと有之不苦やと存候所、あまり取持候人いそぎヤレソリヤと申候故、これは娘に申分もあらんか何分はやくやりて仕廻たしと申様に候は内乱にても有之哉とこゝかしこよりきゝ合せ候うち隙とり候、御家中に一家これはずにすゝみ來り候所、これもちと遅く令姪すでに匡章風に主どりもせず妻縁もせずなどゝ文章にて書いだされ候事に候へば、これをねち直すこと急には出来不申候、令姪も二年三年之内に然らば主どりもせふ妻もたんとはいはれぬ時宜ゆへ先ことはり候、はやく出来候をことはり町家のを相談も出来がたく、勿論匡章が見も有之候へばこれも急なることならずと先方へ申候、此時すでに上方之議おこり候時になり候、

白岩三省と申諸生、これ令姪大氣に入にて彼方へ茸狩と申て招きし事あり、内々きけば令姪より頼みの由也、其夜尾道に花柳の遊はなぐしき事のよし也、また中秋後松永詩會に被參候、この時も大さはぎのよし

三月比か下女某あまりやくに不立候故出し申候事有之、其時川南あたりへゆき、彼下女は拙者手をかけ候を追出し候、かゝることにて中々居られる物にてはなしなど被申候よし、其いひ様いかふ上手なれば、近村ふく山あたり迄こぞりて、それは太中があしゝなど一等之沙汰になり候よし、そのいひかたはしらず、その口才可畏に、又五六月か其次の女が氣に入候、これはもとの女の時の事にこりはて、みぬふりにて居申候処、子をはらみ候よし申たて、ゆすり候て錢をとり候、其次の女これは令姪きびしくしかりつけ候ことたびくにて、或は長屋へ這入り泣候ことも有之よし、晉帥謹而按ずるにこれはいふことをきかざりしなるべし、とふく某女かけおちをしていに候、私塾は私三十年の志にてわづかに緒をなし、近村の人も学問はすかねど子供はやりておくがよしなど申様に候所、令姪いかなれば私をばむごきあしらいといふべし

右様之こと神辺に久しく居ぬ心にてこちらより出し候を待被申候にや、其後上方之願書出來候事になり候、其願書等うつし懸御目申候、福山一大夫へ被召同道にて參候こと有之、其時上大夫之子など出会候之候、帰後令姪悪口のゝしり候よし聞候人申候は、あれはあしきこと也、こゝにゐる氣ならば重而慎まるべしと私へいへと申候こと有之、これらも久しく居不申候心としられ申候、

慈仙上人一件之事、当春発足前閏二月朔日か、右三省といふもの聘使として尾道へ參事を極め候よし、夫より発足用意せまり取物も取あえず残置候こともそこゝに立有之候、私方へ被參候初よりはなしに女画史のこゝと申出候へば、令姪かもの妾に參れば宜候、妻といふてもおかしく候など両度被申候、私はなんの氣もつかず、只アンナ器用なる妾あらばよからんと申雑談の様に思候、其後思出候へば、福山一大夫家に切島つゝじ盛なるとき被召候、其婦にたばこやといふ家へ一宿いたし候、其翼みなとやといふ家へ慈仙が來るとて令姪被參

候、饜応などいたし候とて程へてたばこやへ被帰候而同道神辺へ帰候こと有之、今を以おもへば慈仙媒人約束の取きまりなどのことも有之候哉、其故は唐画などいたし候人大抵私宅へ立よらぬは稀也、ことに慈仙は下地竹原よりも被仰越候而来る管之僧也、其上私へ跋を書いてくれなどいふ頼ごとも有之候へば、みなどやとたばこやは一町にたらぬ近所也、大抵來ぬことは有之まじきに、跋も令姪の取次にてすみし也、これらをおもひ出候へば、かの約束は神辺などへ來らぬうちよりありしことにや、みなどやは女画史が伯父也、芝居の粹といふおとこ也、平生おとよ（女画史）には相応のおともたせんと志のよし也、一説には慈僧もまた玉匣の底あるものにて、かれも一望ありと申候由、これは人さたあてにならねど、女画史が母は若後家にて女画史姉妹より大に美也、上方人にいたしたきよしと申ことに候、人言あてにならねど御考合せに申上候、人言のごとくなれば神辺はかりのやどりにて宿志は有之こといふも被思候、備前那須が一条もあれのみならず外に段々有之哉令姪発足之あと隣人來りて申候は、若旦那様は金につまりて御出に候哉、只今迄はかくし候へ共処々より債客参り近所に一宿いたし呼出しかけ合候処、何分やがて広島へ帰り候、其時に払可申などいふ御断被成候、一人二人に非ずと申候、元來吾兄自身の子なれば手打にもすると被仰候こと有之候由、前度之出奔表向きは他所持といふにて内々は大笑有之よし、去々年之実事も処々よりつたへ承候、これまた大それた事也、かゝること私存せぬにてはなし、然ども三十も過候へば才子也利口也そろ／＼なをり可申とも存候所、去々年私宅へ御出之時、三原風呂屋に而大喧嘩、切るのつくの刀よ脇指よと申こと、亭主段々断にてすみ候よし、これは前度江戸にて兩國橋上辻切など出來候などいふ噂も承これ英雄などいふほめてのはなし也候へば、それは二十前後のこと、只今は夢のごとくならんと存候所、三原之一件にては只今も無覺束候やとも奉存候、かゝる傑驚けつおどろ之氣田舎間に鬱々としてゐ可申哉、田舎に而は昨日之こと今日は国中にしれ候、隣之事もしれず候京大坂に住居候而年よるを待候も上策なるべし、幸に上京之願も出候へば私はみきりにもいたしがたく候へ共、広島へはいなれぬおの

こ也よき事ならんと竹原へも上京を御許容被成よと申遣候こと也、私は去々年令兄様より火急なること有之よし被仰越候ゆへ、何がさておき右之趣向を出し候、其わけは元來承及候には頼家はことの外嚴敷、親子も君臣のごとく一間へも入がたき勢、且又家内相談ごとありても久太郎をばのけ物にして家内に止まらせられず、それゆへすねて時々あばれもするなど、申事、又はあの才子をあの様にしてちゞめ置はむごき事あれにては才ものびぬ道理也云々

右は広島の評判のよし

右之通ゆへ私方に而少々もゆるめ候はゞ言ことをきかれ候半などおもひ付候、

扱見え候而より先かみゆひのゆふた髪がきらひにていはせて引ほゞこと御坐候故、髪は妻にいはせ候、扱出遊せねば足がわるくなるといふことにて三日にあげず出られ候故、私も寒を忍びてつきありき候、砂糖もちがすきゆへ不断出し、ならづけがすきゆへ与兵衛方よりつゞけ候、魚鳥の肉あるときは酒の間せよと命ぜられ必下女にのませるなど、私方に元來なき事なれどこれも御意にまかせ候類、一年も家内それにかゝりみ申候様に被思候、これは私が不調法也、吾兄伯叔三人は智者也分別者也、それでいけぬ代物モノが私がやうな迂濶なる者に手にあひ可申か、そこを得しらぬ処が晉帥也、令姪は一趣向あることゝ見え、晉帥があしらひあしくあれではいらぬなどゝいひありき、内に而はいよく傲然諸生をあつめて足をうたせ按摩とらせ悉皆若殿などゝいふやうに見え候、始見え候より私が姪に土五郎妻が姪庄三郎二人を御そばやくにつけ置、手水湯烟草之火等よりせなをたゞき候ことまで申付をき候へ共、のちには諸生に寵幸之者出來二人は氣に入らず候ひき、晉帥按るにとかくあかれて出たひと申様に見え候、これは慈仙が趣向など有之ことゝ見え候、此事前にあり、ふく山に而出会はきりしまの盛の時節也、搦講釈会説など出來候に、始は丁寧に見え候が、三四月比より段々減少になりいかゞと見え候処六月比よりふと精出候而史記三四十枚ほどよまされ候、不思議とおもひ見申候内諸生の氣に

いらぬにはきかせもせず、六七人をのみ相手にいたされ候、外の書生にはとかく素読をせい出せなど、申ことのよし、私もきのどくさに笛の師をたのみひまなる物へは学ばせまぎらかし候、これはよほどのちの思付也、扱其氣に入たる輩には折ふしあんまなどさせ火燧へあたりせ夏は裏門より川堤へ火入をもたせ出、ふそくと咄有之候、これは女色のはなしにて右之輩をしたしみひそかに上京同道のことどもたのまれ候よしに候、左候へば上京も久しき工面と見え候事に候、口才はよほど上手と見え其輩はしんせつなる人たのもしき人など申外書生をもよりくすゝめ候よし、同心せぬ輩いろくとはなし候、外に書生に非ざる物にも其口才に打こみ候人有之哉、これらも私にかくしいろくど働候ことも段々承候へば、金よほど借し候人も有之よし、此上いかなる計策有之やに候もしれ不申候、先あらく只今迄のこと申上候、令兄弥太郎様へはいふてよい事計御申可被下候、老婆のこま言申やうに候へども一応こちらのありさまなども御きかせ申度縷々申上候、以上

五月望

菅太中 音師

頼万四郎様

追

私人の子を引よせ而後住になるか京へやらふかなど、申こといかゞとも被思召候覽、これは去々年弥太郎様より急に他国へ養子にてもやりあとをくらませねばならず、いかなる貧家にてもよし上方尚よしなど、被仰越候をこゝかしこ思ひあはせての事也、勿論御国は久離勘当といふことにはならず左様の人は困ひへ入おく事のよし、これは長門も同様の由、左候へば養子といふて其地を出候より外趣向なし、これらは音師も合点のことにて外々ならば熟縁いたさず御帰し申と申処を、幸に上方之願書出候故竹原へも広しまへも申遣候、其志を送させられ可然と申上候、広へかへられぬをしりし故也、令姪は夙志しよくし之上方なれば踏所をも不覚と申様に見え候、弥太郎様よりも一生之交友中真知己と申物音師一人也と被仰越候、しかし、親子は格別之愛も有之て遠方にゐ

申候へば氣遣も有之、附ては晉帥なども仕方不行届被覚召候覽と惱々いたし候、実は晉帥容人之量なきより起り候事とも奉存候、此段宜被仰可被下候、書中に吾兄手討にするの何之彼のと申こと人沙汰に承実否は不知候、然ども人沙汰多くは実なる物也、一事なりと嘘なれば宜候、九州にては令姪を本田真卿に比し候由九州人申候、真卿が事は御存あるべし、黒木平左衛門が徒也、かゝること聞に随ひ令姪へ一々書てやらふかとも存候、またいらぬことゝも存候、然どもふと心を廻し候へば小大之善事也、しかし発足時分私をだまし候こと尻がはげ一々大坂へ申遣し候へば段々いひわけいつ迄もあやまるといふ事はなき人也、九州より恵美などへ書生よほど参候よし、令姪のことは隣国より彼方によく知るよし也、

上方に居られ候こと金山十左衛門よりむつかしく申、京には居られぬよし、弥太郎様よりもいろく御心遣ひ被仰越候、これは万一之変事出来之上のこと今いふて待候ことは有之間布候、先似た事は加川玄厚也、かれは御家中某の養子也しが出奔して江戸に医者に而居候、後には御家へ御出入と申にもなり候、されば令姪表向は神辺へやりたと申に候へば、貴家へ難かゝり候ことは有之まじく候、私方にも此方に居申候所其人願に而家出いたしたと申さばこれも夫きり之事なるべし、一説に神辺へは滞留願にて見え候よし、これは貴国御家中之話也、外にそんなざつとした事に而はずまぬことありや、これら承置申度候、何分御兄弟とも文通も不被成候よし、これは一旦はそれもよしゆくく御申なだめ可被成候、私よりも御すゝめ申候、只々弥太郎様御心つかひのこと御氣之毒と申さんや申かた無御坐候

【訳】

覚

三四年前甥の久太郎殿から、身上のつまらないことや行く末のどうなるであろうかなどのことを二三仰せになったことがありますから、私も尤もだと思ふこともあり、弥太郎様へも申し上げたことがあります。これも納得できないこともあり、はかばかしいご返事もないまま年月が経つうちに、一昨年でしたかおつしやつた心の内があり、様子によつては官のお咎めもあること、急に申し上げるよりも私の思っているところを申し上げたところ、早速許し認めお引き受けになりました。私の思いますには、この人（山陽）は不平を抱いて村里にひっそりと居られる人とはとても思われません。又、あの才子が埋もれてしまわれることも本意ではないこと、都会へ出しましたら徳は兎も角も、才名は十分に用いられることと思われます。その内、私の塾へ足を留め後住になつてくれれば、この上の慶びはない。この二つのことを打ち明け、思いに任せ都会へ出られればその辺のこと、塾に居られるならば一つ一つ塾法なども申し聞かせ、そのことを心得た上で妻縁なども取り結びたいと、了榮上人を煩わせて事を決めてもらおうと、甥御が見えた時呼び寄せて置いたところ、丁度大晦日で老師に越年のことを伺わずに来ましたので、一先ず帰り正月早々に来ようと言つて帰られました。正月に待つても待つても来られない。病氣だということでした。幸いに吉和伝蔵が見えましたので、この事を相談しましたら、「それは暫く待ちなさい。私が近日中に広島へ行くので竹原へも立ち寄り、相談の上申し上げた方が良い」と言つて帰られましたので、いつかいつかと待っていました。全く音沙汰がありません。その内

広島では毎日歩いていて一里二里は行き帰りしていたので腹も空いていたが、塾では内にばかりいては病も増すだろうと云つて、毎日諸生を引き連れて遊び歩かれるので、私も三度に一度は酒肴を調達して同行致しました。ある日、市村と云う所に紅梅の大樹があると云うので、見に参ります路筋の千田と云う所で、前に池があ

つて蕎麦屋が三四軒あり、白梅がいまを盛りと開いていました。「さても優雅な佳い処だ」と褒めて通り過ぎますと甥御が「優雅には困りいります。これ以上の優雅はごめん蒙りたい」とおっしゃったので、私も驚いて振り返って見ますと、顔色も宜しくありませんでした。梅の盛りなので正月の末でしたか、竜泉寺という処に桜が開いているというので同伴（山陽）して参りましたところ、まだ花も開かず、その地は大工などが取り散らしていたので、酒肴は八幡社で開きました。その山や近くの村を一覧した諸生の一人が、村家を指さし山水の面の事を申しました。その時、甥御が「元来あつて無益な家は一軒もない方が良い」と申された。暫くして私を見て「この村は塾ばかりならばよい」と申されたのは私への挨拶でしょうか。

右の時の容貌顔色を見て、塾に留まる人とは見えなと思いましたが、妻縁等を致しましたら留まることと人も申しますので、少々聞き合いました。

町家に良いことがあり、悪くないと思われたが、余り取り持ちする人が急いでやれそれと申すので、これは娘の方に申し分があるのだろうか、何分早くやってしまったと云うことになつたら内は揉めにでもなるかと、あちこちに聞き合せていたら隙をとつてしまいました。御家中に一家これは既にすすみ来られた所、これも少し遅く甥御は既に主君も持たず、妻縁もせず等と文章に書いておられるので、これをねじ伏せることは出来ないことです。甥御も二年三年の内に「それならば主君も持とう、妻も持とう」とは云われない時期ですから、先ずことわりました。早く出来たのを断り町家のを相談も出来にくく、勿論 匡章の風体でもありますので、これも急なることではないと先方へ申しました。この時は既に上方の方がことが持ち上がっている時期になりました。

白岩三省と云う諸生、これを甥御は大変気に入っていて、その方へ茸狩りといつて招かれた事がありました。内々に聞くところによると、甥御の方から頼んだと云うことです。その夜、尾道に花柳界の遊び華々しかったとの

ことです。又、中秋後、松永の詩会に行かれましたが、この時も大騒ぎだったと云うことです。

(八月十五日 茶山は山陽を伴い家老内藤景堅の雅会に列す。夜、松永に至り月見。十六日 茶山は神邊に帰る。山陽は佐谷惠甫と共に松永の詩会へ行く。十七日 山陽、神邊に帰る。)

三月頃でしたか、下女某があまり役に立たないので暇をやりました。その時、川南辺へ行き「あの下女は茶山が手を掛けたのを追い出したのだ。こんな事だから下女がなかなか居られるものではない」など申されたとの事、その云いようが大層うまいので近村の福山辺りまでこぞつて、「それは太中が悪い」など大変な評判になりましたとのこと、その言い方は知りませんが、その口先の巧いこと畏るべきである上に、又、五六月でしたか、その次の女が気に入りました。これはもとの女ことに懲り果て、見ぬふりをして居りましたところ「志齋集孕んだ」と申し立て、ゆすつて銭を取って行きました。その次の女、これは甥御が厳しく叱りつけることが度々で、ある時は長屋へ入つて泣くこともあつたとか、これは女が云うことを聞かないからだつたのだろうと私は思っている。とうとうその女は駆け落ちをして往つてしまいました。私の塾は私三十年の志で僅かに続けており、近村の人も「学問は好きではないが、子どもは遣つておく方がよい」等と申す所で、甥御はどうして私を惨くあしらわれるのでしょうか。

右のようなことは神邊には長く居ない心で、私の方から出されるのを待つて居られるのだろうか。その後、上方の願書が出来ましたと云うことになりました。その願書を写し御目に懸け申します、福山の一大夫へ召され、同道いたします事がありました時、上大夫の子等と出逢いました。帰つてから甥御が悪口罵りなされたのを聞いた人は、「あれはよくない事だ。ここに居る気なら重々慎むべきだと私から言え」と申すこともありまして。これらの事も長くここに居まいという心だと思われます。

「官譴」官の咎め。「許容」許し認める。「牢騷」戦国楚の方言で不平なこと。「後住」寺の後任の住職。「沓

然」ぼんやりしたさま。「匡章」戦国、齊の人。孟子の弟子。

慈仙上人一件之事、当春発足閏二月朔日でしたか、右（白岩）三省が聘使として尾道へ参ることを極めましたとのこと、それより発足の用意もせまり取る物も取りあえず、残し置くこともそこへに出立なさいました。私方へ参られた初めから話に女画史の事を申し出されますと、甥御はあの者は妾に参ればよろしい。妻と云つてもおかしいだろう」と二度申されました。私は何も気もつかず、只、「あんな器用な妾があれば良からう」と雑談のように思いました。その後、思い出して見ますと、福山の一大夫の家に、霧島躑躅が盛りの時にお招き頂きました。その帰りに煙草屋という家に一宿致しました。その翌日、みなとやと云う家へ慈仙が来るからと云つて甥御は参られました。おもてなし等致しますからと云うので、暫くして煙草屋へ帰られて同道して神辺へ帰られましたことがありました。今にして思えば、慈仙媒人約束の取きまりなどのこともあつたのでしようか。その訳は唐画などする人は、大抵私宅へ立ち寄らないことは滅多にないのです。ことに慈仙は下地竹原からも仰せられて来る筈の僧です。その上私へ跋を書いて欲しいと云う頼み事もありますので、みなとやと煙草屋は一町と離れていない近所です。大抵来ないことは無いでしょうに、跋も甥御の取り次ぎで済ませたという事です。これらを思い出しますとあの約束は神辺へ来られる前にあつたことでしょうか。みなとやは女画史の伯父さんです。芝居の粹という男です。平生からおとよ（女画史）には相応の男を持たせたいという志を持っているということである。一説には慈僧もまた玉扨の底あるものでかれも一つの望みを持つていと申すことで、これは人の沙汰することであてにはなりません、女画史の母は若後家で女画史姉妹よりも大いに美人です。上方の人に致したいと申すことです。人の言うことで当てにはなりませんがお考え合せていただきたく申し上げました。人の云うことによれば神辺は飯の宿りであつて長い間抱いている志は別に有ることと思われます。備前那須のくんだりも、あれだけではなく外に段々とあります。甥御が発たれた後、隣の人が来て申しますには「若旦那様は金に詰まつて出ら

れたのですか。今までは隠していたのですが、あちこちから借金取り立ての人が参り、近所に一宿致し呼び出しをかけ合いましたところ、やがて広島へ帰りますのでその時に払いますとお断りなさいました。それも一人二人では無い」と申します。元來吾が兄自身の子であるから、手打ちにもするとおっしゃることも有ると云うことで、前の出奔も表向きは「余所の弄」と云うことで内々では大きな罪であるということ、一昨年の実事もあちこちから伝え聞いております。これ又大それた事です。こんなことを私が知らない訳はなく、そうではありますが一昨年過ぎなされば才子ではあるし、利口ではあるし、そろそろ直られるに違いないと思っております。しかし、一昨年私宅へおいでの時、三原の風呂やにて大喧嘩、切るの突くの、刀よ脇差しよと申す事、亭主が順序を追つて断り、濟んだと云うこと、これは前度、江戸両国橋上で辻切りの事件があつたと云う噂も聞きましたが、これは英雄などと褒めての話です。それは二十前後のこと、只今は夢のように思っていましたところ、三原の一件では只今も不安に思われます。このように我が儘勝手気性は田舎で鬱々として居られるでしょうか。田舎では昨日の事が今日は村中に知れ渡ります。隣の事も分からない京、大坂に居住されて年の寄るのを待たれるのも上策でしょう。幸いに上京の願ひも出ておりますので、私は見切りにも致し難くございますが、広島には帰られぬ男ですし、よい事であろうと竹原へも上京をお許しなさいよと申し遣つたことです。私は一昨年春水様より大至急のことがあると云つて来られましたので、何はさておいても右の趣向を出しました。その理由は元來承るところによりますと、頼家は格別に厳しく、親子でも君臣の如く一間へも入り難い勢い、又、家内の相談事があつても久太郎は除け者にして、家内へ止まらせられない。だから拗ねて時々暴れもすると云う事、又はあの才子をあのようにして縮めて置くのはむごい事、あれでは才能ものびない道理だ等々、

右は広島の評判だと云う事、

以上のようなことですから私方で少しでも緩めましたら、云うことを聞かれますか等と思いついたのです。

扱、こちらに見えられてから、先ず髪結いの結うた髪が嫌いだと、結わせて引きほくことがありましたので、髪は妻に結わせました。扱、出遊びをしないと足が悪くなるということで、三日にあげず出られますので、わたしも寒さを忍んで付き歩きました。砂糖餅が好きだというので絶えず出し、奈良漬が好きなので与兵衛方から続けました。魚鳥の肉がある時は酒の爛をせよと命ぜられ、必ず下女に飲ませる等、私方には元来無いことです。これも意のままに任せるという類、一年も家内はそれにかかつていたように思います。これは私の行き届かないことでした。私の兄伯叔三人は智者でもあり、分別もある者です。それでつまらない奴の私のようなうっかり者の手に合うかどうか、そこをよう弁えなかつたのが晉帥とんがりです。甥御は一考えある事と見え「晉帥の待遇が悪く、あれでは居られない」等と云い歩き、内では益々威張って諸生を集めて足を打たせたり、按摩をさせたり悉くすべて若殿などというように見えます。初め見えました時から私の甥の土五郎、妻の甥の庄三郎の二人をお側役に付けて置き、手水湯、煙草の火等から背を叩くことまで申し付けて置いたのですが、後には諸生に特別に目を懸けて可愛がる者が出来て、二人は氣に入らないことになりました。私が考えますのに、兎に角、此処の生活に飽かれて出たいと云う風に見えます。これは慈仙の考えなどもあること、思われます。こんな事は前にもありました。福山にての出会い、霧島の盛りの時節でした。扱、講釈会読等がしゅたい出来しました時に、初めは丁寧に見えましたが、三四月頃から段々に少なくなり、どうしたのかと思つていた処、六月ころから精出して史記三四十枚ほども読まれました。不思議だと思つて見ておりますと、諸生の氣に入らないのには聞かせもせず、六七人だけを相手にしておられました。外の諸生には兎に角「素説を精出せ」と云うことで、私も氣の毒で笛の師を頼み暇な者へは学ばせて紛らしていました。これは大分後になつてからの思ひつきです。扱、その氣に入つた者には時々按摩などさせたり、炬燵に当たらせたり。夏は裏門から川土手へ煙草の火種を持たせて出し、ひそひそ話をしていたようですが、これは色事の話で右の者どもを親しくし、上京の時同道の事などを頼まれていたのだと思われま

す。そうですから上京のことも随分以前からの算段だと思われることでございます。弁舌の才能は余程上手と見え、その者たちは親切な人、頼もしい人等と申し、外の諸生をも勧めました由、同調しない者がいろいろと話してくれました。外に諸生ではない者にもその口車に打ち込んだ人もあるとか云う事です。これらの事も私に隠していろいろと働きかけたことも段々聞こえてきますので、金を大分貸した人も有るとか、この上どの様な計画策略が有るやもしれません。先ずざっと今までの事を申し上げました。兄上の春水様へは云つて良いことだけをおつしやつて下さい。老婆が細かい事を申し述べるような事ですが、一応こちらの有様などもお聞かせ申したく細々長々と申し上げました。以上。

五月望

菅太中 晉帥

頼万四郎様

追

私が人の子を引き寄せて、後住になるか京へ遣ろうか等と申すことは、どんなものかとお思になる事でしょう。これは一昨年弥太郎様より「急に他国へ養子にでも遣り後をくらまさねばならず、どんな貧家でもよい、上方なら尚よい」等とおつしやつて来られましたのを、ここかあそこかと思ひ合せてのことです。勿論お国は久しく離れて勘当と云うことにはならず、そのような人は囲いへ入れておくとの事、これは長門もおなじような事の由、それならば養子と云つてその地を出なさいますより外に考えはない、これらは晉帥も承知の事で外のことならば熟縁致さず「お返し申す」と云うところを幸いに上方の願書を出しなされたので、竹原へも広島へも申し遣りました。その志を遂げさせられ宜しくと申し上げました。広島へ帰られないのを知っておりましたからです。甥御には前々から持つておられた志の上方だから踏む所も覚えずと云つた様子に見えました。弥太郎様からも「一生の交友中の真の知己と云う者は晉帥一人だ」と云つて来られました。しかし、親子は格別の愛もあつて遠方に居

られたら氣遣いも有り、ついでに晉帥なども仕方不行き届きだと思われるであらうと悩んでおりました。実は晉帥に容人の量がないことから起こったこととも存じております。このことは宜敷仰つて下さい。書中に吾が兄、手討ちにするの何の彼のと申す事 人沙汰に承り実否は知りません。しかし、人沙汰多くは実なるものです。一事でも嘘であれば宜しゅうございます。九州では甥御を本田真卿に比べると云うことだと九州の人は申しております。真卿の事はご存じでしょう。黒木平左衛門の弟子です。このような事を聞くにつけても甥御へ一々書いてやろうかとも思います。又、いらぬことだとも思います。しかし、ふと心を廻しますと小事と大事の善事です。しかし、発足時分、私を騙しなされたことは尻がはげ一々大坂へ申し遣りますと、順序を追って言い訳し、いつまでも謝ると云うことはない人です。九州より恵美などへ書生が余程参るといふことです。甥御のことは隣国よりあちらによく知られているといふことです。

上方に居られると云うこと金山十左衛門からむつかしく申し、京には居られないと云う事、弥太郎様からもいろいろお心遣いを云つて寄越されました。これは万一の変事が出来た上の事で、今云うて待つこととはあるまいと思ひます。先ず似たようなことは加川玄厚です。彼は御家中某の養子ですが、出奔して江戸で医者になつて居りました。後には御家へ御出入するようにもなりました。ですから甥御も表向きは神辺へやつたと云えば、貴家へ難がかゝると云う事は有りますまい。私方でも此方に居られました。其人の願望で家出いたしたと申せばこれも夫れきりの事でしょう。一説に神辺へは滞留願で見えましたが、これは貴国御家中の話です。外にそんなざつとした事ではすまぬ事があるかも知りません。これらを承り置いて申し度く思います。何分御兄弟とも文通もなさらないとの事、これは一旦はそれもよいでしょうがゆくゆく申しなだめなさるようになされたがよいでしょう。私よりも御すゝめ申しませう。只々弥太郎様の御心遣いの事、お氣の毒と申すにも申す方法がございませぬ。

三、西山拙齋『休否録』所収 茶山詩詠注

ここに取り上げる詩は、本論で取り扱わなかった『休否録』所収の茶山詩である。詩題の上の番号は『休否録』記載の順序による。

3 歎齊

東秦有義士 東秦に義士有り

殿上刺姦臣 殿上に姦臣を刺す

曰汝多罪戾 曰く汝 罪戾多く

不知聽吾言 吾が言を聽くを知らず

汝本烏鳶匹 汝 本 烏鳶の匹

詭遇列鷲鸞 詭遇せられて 鷲鸞に列なる

爲官求小利 官と爲りては 小利を求め

日日買新恩 日日 新恩を買ふ

上以掩君目 上は以て 君目を掩ひ

下以厲黎民 下は以て 黎民を厲ます

珍寶盈汝庫 珍寶 汝が庫に盈ち

輪蹄簇汝門 輪蹄 汝が門に簇る

東秦に 忠義の士が有った

殿上で 邪な臣を刺した

曰うことには「お前は罪が多く

私の云うことを 聞こうともしなかった

お前は 本は身分の低い類だった

正道によらない待遇で百官に列なった

官吏となつてからは 小利を求め

毎日 新たな恩恵に浴している

上に対しては 主君を 誤魔化し

下に対しては 一般庶民を虐げる

珍しい宝物は お前の倉に満ち

車や馬は お前の門に群がる

佞者繁有徒

佞者ないじや 繁あつく徒た有り

口先のうまい 多くの仲間がいる

正人自罕倫

正人せいじん 自らみづから倫りん罕あまなり

真面目な人の 仲間が少ない

苞苴來往密

苞苴ほうしよ 來往らいわう 密みつに

賄賂が往つたり來たりすることは繁く

政事早昏新

政事せいじ 早昏そうこんに新あらたなり

政治は朝に晩にくるくる変わる

看他朝野風

看みよ 他ほかの朝野あさのの風かぜ

看よ世の中の 様子を

不似舊事淳

舊事きゅうじの 淳ちんきに似にあざるを

昔の淳厚さが 失われている様を

街上談何事

街まち上じやう 何事なにことをか談かたずる

街のそこ此処では 何事か話している

低聲互訴冤

低聲ていせい 互たがひひに訴そ冤えんす

ひそひそと 互いに 悪政を非難して

十目所共視

十目じゅうもくの 共ともに視みる所

十人が十人 共に視る所は

怨尤叢汝身

怨うらと尤とがは汝なんぢが身みに叢あつまる

怨と尤は お前の身に集まっている

君民勢相依

君きみと民たみと 勢いきほ相依よる

官と民との勢力が 互いに相寄ること

辟如齒與唇

辟なまへば 齒はと唇くちべとの如ごとし

例えば 齒と唇のように

民心苟一離

民心みんしん 苟いやくしも一ひとたび離はなるれば

民心がかりにも 一度離れたならば

君門忽生塵

君門きんもん 忽いやくち塵ちんを生おこす

君門は 忽ち 信頼を失うだろう

支体如同冷

支体しだい 如ごとく同どもに冷ひやせば

頭と体をもし一緒に冷やしたならば

首領豈獨温

首領しゆりやう 豈いかでか獨ひとりに温ぬくかならんや

頭だけどうして 独り暖かでおれるか

利口覆邦家

利口りくわ 邦家ほうかを覆くつがへすは

口先の巧さが 国家をひっくり返すとは

先聖有明文

先聖せんせいに 明文めいぶん有り

昔の聖人が 記録に残している

事機防未然

事機じきを 未然みぜんに防まもぐとは

はずみを 未然に防ぐといふことは

昔賢有訓存

所以吾戮汝

將救天下人

言終還自刎

顔色更欣欣

事已聞隣國

相傳萬口喧

幽人喜且悲

長嘆淚滿巾

方今言路塞

屈軼阻荊榛

不然一指似

直拔惡木根

惜使忠良鬼

徒伴姦邪鬼

昔賢に訓むねへの存する有り

所以に吾汝を戮ころし

將に天下の人を救はんとすと

言ひ終はりて還また自ら刎みするも

顔色 更に欣欣たり

事 已に隣國に聞こえ

相傳へて萬口喧し

幽人喜び且つ悲しみ

長嘆して涙 巾に滿つ

方今 言路 塞がり

屈軼 荊榛に阻まる

然らずんば 一たび指似すれば

直ちに抜かん 惡木の根

惜しむらくは 忠良の鬼をして

徒らに姦邪の鬼に伴はしむるを

昔の賢人が 教訓として残している

だから 私はお前を殺して

まさに 世の人を救おうとするのだ」と

言い終わり 直ぐに自ら首を刎ねたが

顔色は 更に 満足そうだった

この事は 已に 隣國に聞こえ

相伝えて 口から口へと喧伝された

隱者は 喜び 又悲しみ

長い溜息をつき 涙で巾を濡らした

只今 言論の自由は閉ざされ

行動は 雜木の繁みに妨げられている

もしそうでなかったら 一たび指示すれば

直ちに 悪い木の根は 抜かれただろう

惜しまれるのは 義士の魂を

空しく 心の拗けた魂に伴わせた事だ

「姦臣」よこしまな家来。「罪戾」罪。「戾」も罪。「匹」たぐい。「詭遇」正道によらないで目的を達する。「鷲」朝廷に並ぶ百官の譬え。鷲と鳩とは飛ぶ姿と順序が整然としているからいう。「厲黎民」一般民衆を虐げる。

「厲」は悩ます。虐げる。「佞者」口先がうまく人に媚びへつらう人。心のねじけた人。「罕」めつたにない。珍しい。「苞苴」包み。贈り物。賄賂。「朝野」朝廷と民間と。世の中。「訴冤」無実を訴える。「支体」体。肢

体。「利口」口先がうまい。「邦家」国。国家。「事機」事の機会。はずみ。「隠者」茶山のこと。「屈軼」動き。

「荊榛」雑木の繁み。「指似」指点。

①『草稿本』と②『西山拙齋全集』との異同

①東秦↓②東晉

①厲黎民↓②病黎民

①辟如齒與唇↓②譬如齒與唇

①惜使忠良鬼、徒伴姦邪鬼↓②惜使惜使、徒伴忠良鬼

5 古意

陰霾三日天模糊

殿門晝叫兩脚狐

陰霾三日天模糊たり、殿門晝に叫ぶ兩脚の狐。

郡國餓葦滿閭巷

霸府苞苴填通衢

郡國の餓葦は閭巷に滿ち、霸府の苞苴は通衢を填む。

一命之士封微侯

子弟貂蟬奴錦裘

一命の士微侯に封ぜらる、子弟は貂蟬奴は錦裘。

囹圄寒生秋夜雨

冤鬼聚哭聲啾啾

囹圄寒生ず秋夜の雨、冤鬼聚まり哭く聲啾啾。

陰気な雨が三日も降り続いて空はぼんやりと暗い、御殿の門では二本足の狐が昼間でも叫んでいる。

郡國の行き倒れは巷に溢れ、霸府の賄賂は通りを埋めている。

初任の仕官は微侯に封ぜられ、一族は貂の尾と蟬の羽のついた冠を被り家来は錦と皮衣を着て贅沢三昧。

牢屋は秋夜の雨がしとしとと降って寒さが生じてきた、冤鬼が集まって哭く声がもの寂しい。

「古意」昔を思う心。「陰霾」巻き上げられた土砂で空がくもること。「兩脚狐」二本足の狐。悪い人間を喻

える。田沼親子か。「餓葦」行き倒れ。「霸府」覇者が政治を執る役所。「填通衢」「填」は埋める。埋まる。「衢」

は四方に通じる路。「一命之士」仕官して初めて就く位。「微侯」諸侯。「子弟」田沼意次の一族を指す。「奴」

田沼意次の家来。「貂蟬」貂の尾と蟬の羽。共に位の高い冠の飾り。高官。「錦裘」錦と皮衣。「囹圄」牢屋。

「冤鬼」無実の罪で死んだ人の亡霊。「啾啾」寂しげな鳴き声。

①『草稿本』と②『休否録』との異同 ①下國 ↓ ②郡國

6 元旦試筆

六年丙午春 王正月、丙午朔午時、日有食之既。草莽之臣菅晉帥、伏惟方今號稱文明之世。

六年丙午 春 王の正月、丙午 朔午の時、日に之を食ふこと既なる有り。草莽の臣 菅晉帥、伏して惟みるに方今 號して文明の世と稱す。

天王聖明冢宰良 卿士大夫無尸位

天王聖明 冢宰は良く、卿士大夫尸位無し。

四夸來庭九服寧 何有乖氣生怪異

四夸來庭九服 寧かなり、何ぞ乖氣有りて怪異を生ずるや。

侯伯三百有餘國 政雖不齊各自治

侯伯三百 有餘の國、政齊しからずと雖も 各の治まる。

南有杞國西肥兒 神人協和棗盛備

南に杞國有り 西に肥兒、神人協和 棗盛備はる。

山陽三大藩 亦皆崇儒教

山陽の三大藩、亦皆 儒教を崇び、

吏清獄理人嚮義

吏は清く 獄は理まり 人は義に嚮かふ。

小國數千介其閒 虞虢滕薛隨鄆郟

小國數千 其の間に介す、虞 虢滕薛 隨鄆郟。

不聞主驕 不聞民憔悴

主の驕りを聞かず、民の憔悴を聞かず。

不聞培克 罔射利

培克を聞かず、利を射むる罔し。

就中敝邑最能遵軌物 寵賂不章用不匱

就中 敝邑 最も能く軌物に遵ひ、寵賂 章ならざれども用匱しからず。

薄斂厚施收人心 視之隣國之政不必媿

斂を薄くし施を厚くして人心を收む、之を隣國の政に視るに必ずしも媿

あらず。

如何妖孽於此朝 使斯下民心惴惴

如何ぞ妖孽此の朝に於て、斯の下民をして心惴惴ならしむるや。

上帝或以倣將來 欲使百司無懈意

上帝或いは以て將來を倣め、百司をして懈意無からしめんと欲するか。

鳥鳥驚呼林野矇昧 通明殿高誰測其祕

鳥鳥は驚き呼び林野は矇昧、通明殿高く誰か其の祕を測らん、

齊國故人近何如 久無音息報時事

齊國の故人近ごろ何如、久しく音息の時事を報ずる無し。

天明六年（二七八六）春 王の正月一日の正午、皆既日蝕があつた。在野の民である菅晉帥が謹んで考えるに、
只今名付けて文明の世と唱えている。

天子は徳すぐれ 冢宰は良く、執政大臣や 君主を補佐する重臣は 職責を果たしている。

四夸は朝廷に来て 九服は穩やかである、どうして背き違ふ氣があつて 怪しい現象を生じようか。

大名 小名の国が三百有余もあり、政治は 同じではないとはいつても それぞれに治まつている。

南には 杞国が有り 西には肥後がある、神と人が 和み合つて 祭りの供え物を備えている。

山陽の三つの大藩も、亦た皆 儒教を崇ぶ。

吏は清く 獄は治まり 人は正義に向かつている。

小国が数千 其の間に介在し、虜虢滕薛隨郟 隨郟。

主の驕りを聞かず、民の苦しみを聞かず。

租税の厳しい取り立てを聞かず、利益を目当てにすることはない。

中でも 我が国は 最も能く法に従い、賄賂が章ではないけれども 備えは 匿しくない。

租税を軽くし 施しを厚くして 人の心を収めている、之を隣国の政治に視るに 必ずしも恥ずかしくはない。

どうして 災いの兆しが この朝に於て、このように 下々の民を びくびくさせるのか。

天帝が 或いは 將來を戒め、多くの役人に 怠惰な心をなくさせようとするのか。

鳥鳥は驚き呼び、林野は暗くぼんやりとして、通明殿は高く誰が其の祕を測ることが出来ようか。齊國の親友よ、近頃如何ですか、久しく時事を報じて来ませんが。

「草莽」草深い。「六年丙午」天明六年（一七八六）茶山三十九歳。「天王」天子。「聖明」勝れて明らかな徳。天子をたたえる語。「冢宰」周代、最高官の称と伝える。天官の長で六卿の最上位。国政を司り、百官を統括する。「卿士」執政の大臣。「大夫」君主を補佐する重臣。「戸位」その位にありながら職責をはたさず、ただ俸禄だけを取っていること。「夸」大袈裟に云う。ほらを吹く。自慢する。「九服」周代、首都千里の外五百里毎に区域を定めた地域。「服」は天子に服事する意。「乖氣」そむく。離れる。たがう。「杞國」周代の国名。「協和」睦み合う。和み合う。「桑盛」祭りの供え物。「山陽大三藩」岡山の池田・広島の浅野・山口の毛利。「獄理」獄を治める人。「嚮」向かう。「虞虢滕薛隨郟鄩」この七国は周代の国名。「培克」厳しく租税を取り立てる。「射利」利益を目当てにする。利益を得ようと狙う。「敵邑」我が領土。自分の国の謙称。「軌物」のり。掟。法度。「寵賂」恩寵を求めるための進物。賄賂。「薄斂」租税を軽くする。「妖孽」災異。災いの兆し。「惴惴」びくびくする。「百司」百官。多くの官吏。「懈意」怠惰な心。「曖昧」知識が低く道理に暗い。愚か。「通明殿」天上の玉帝の殿名。常に雲あつて之を擁す。光明通徹、照らさないとことろの無い義によって名づく。「齊國故人」岡山（備中鴨方）の西山拙齋を指す。

8 又（無題二首）

林薄人呼叫 棲鳥夜未聞 林薄人呼び叫ぶ、棲鳥夜未だ聞かならず。
 誰將一朝費 能解十家顔 誰か一朝の費を將つて、能く十家の顔を解かん。
 天曙奔忙裡 春生兵馬間 天は曙く奔忙の裡、春は生ず兵馬の間。

風塵及丘壑 無地寄松關 風塵 丘壑に及び、地は松關を寄する無し。

草木の繁みでは人が呼び叫んでいる、巢の鳥は夜になつても閑かにならない。誰か一朝の費用でもつて、十家族の顔を能く解してやれないものか。

夜は明けた 皆が騒いでいるうちにも、春は来たものものしい兵馬の間にも。一揆の騒ぎは 丘や谷にまで及び、地は隠者の住居を作る所もない。

「林薄」草木が茂つた所。「未聞」未だに閑かにならない。未だ寝ない。「天曙」明け方の空。「風塵」世の中が騒がしいこと。ここは一揆を云う。「松關」自然の松樹をそのままに門としたもの。

①『休否録』「無題二首」の一首目は『草稿』卷三では「狂風行」と題して独立させている。

②『休否録』「無題二首」の二首目は『草稿』卷三では「擬古」と題して「窮隣」の後に独立させている。

③『休否録』「無題二首」の「又」は『草稿』卷三では「狂風行」の後に「立春日即事」と題して入れている。

9 窮鄰

擬頌斗米賑窮鄰

自笑山廚未太貧

斗米を頌かちて 窮鄰を賑さんと擬し、自ら笑ふ 山廚未だ太だしくは

貧ならざるを。

時變驩虞三世澤

病深草莽五朝臣

時は變ず 驩虞三世の澤、病は深し 草莽五朝の臣。

社前竹木偏含雨

亂後村間亦入春

社前の竹木 偏に雨を含み、亂後の村間 亦春に入る。

慚我救荒無異術

半生辜負讀書身

我の荒を救ふに 異術無きを慚づ、半生 辜負す 讀書の身。

僅かな米を分け与えて 困っている隣近所を救おうと思ひ、我家の暮らしはまだそれほど貧しくはないと思つていたことがおかしな事になった。

歎娘であった三世の治世も時は変わり、在野における五朝に亘る臣民の生活は病んでいる。

村社の前の竹や木は長雨でひたすら雨を含み、一揆の乱の後村里は亦た春に入った。

凶作を救う勝れた術も持たない私を恥ずかしく思う、私の半生は世を救う為の読書三昧の生活であった筈だが。

「驢虞」喜び楽しむ。歎娘。「三世」ここは安部侯三代、正福・正右・正倫を指す。安部侯が下野国宇都宮から備後国に転封して来たのは正福の父正邦の時であるが、正邦は転封の五年後になくなっていて、正福から数えてこの時の正倫までは三代となる。「澤」恩沢。「草莽」民間。在野。「五朝臣」五代の朝廷の臣民。

茶山をいう。「五朝」は櫻町・桃園・後櫻町・後桃園・光格の五天皇を指す。茶山が生まれたのは、寛延元年だから桃園天皇の代であったので、正確には四代である。「社前」土地の社。「救荒」凶作を救う。飢饉で人々が困っているのを救う。「異術」勝れたすべ。「半生専負讀書身」世の為になるようにと、学問を半生も続けて来たのに、世の為・人の為に何ら役に立っていないことを恥じる。「専負」はそむく。違背する。

「板本」では「窮鄰」の右下に「丁未」（天明七年）とある。（天明七年は一揆のあった年）。「三世澤」が「三世治」、「竹木」が「林麓」、「亂後」が「蝗後」となっている。（蝗後）天明六・七年は淫雨のため害虫の被害が多かった。）

10 春興六首

幾日繁陰鬱未開

山城春色滿蒿萊

幾日繁陰鬱として未だ開かず、山城春色蒿萊に滿つ。

晉飢無復鄰邦救

魯亂空期方伯來

晉飢うるも復た鄰邦の救ふ無く、魯亂れて空しく方伯の來るを期す。

兵馬隊邊花折遍

塵沙埋裡燕飛回

兵馬隊邊花の折るること遍く、塵沙埋裡燕飛び回る。

潛濶濁酒招村父

老矣尊前宰肉才

潛かに濁酒を濶めて村父を招くも、老いたり尊前宰肉の才。

繁った木陰は幾日も鬱陶しさが晴れない、山城は春の気色が草の繁みにいっぱいだ。

吾は飢えても復た鄰の邦は救つてはくれない、魯は乱れて方伯の来るのをあてもなく待つてゐる。

一揆の兵馬のために辺り一帯は花が折られ、砂埃で埋まった辺りを燕が飛び回っている。

ひっそりと濁酒を温めて村の爺さんを招くが、年取つたものだ酒樽の前に肉を準備する才もなくなつた。

「繁陰」繁つた木のかげ。「蒿萊」草の茂つた所。荒れ草。「方伯」各地方の長。又諸侯の長。「塵沙」砂ほこり。「宰肉」肉を料理する。「宰」は肉を料理する。料理人。

何處鶯花興更饒 彩舟瑤馬木綿橋 何處の鶯花か 興更に饒かならん、彩舟 瑤馬 木綿橋。

一朝侯服見兵氣 連夜郊垌聞鼓妖 一朝 侯服 兵氣を見る、連夜 郊垌 鼓妖を聞く。

山雨霏霏昏晚樹 江煙漠漠長春潮 山雨 霏霏として 晚樹昏く、江煙 漠漠として 春潮長し。

憂愉來去頭將白 敖骨崢嶸磨未消 憂愉 來去して 頭將に白からんとす、敖骨 崢嶸 磨するに 未だ消えず。

鶯花の興がここより饒かなところが何處にあらうか、彩色を施した舟 立派な馬車が木綿橋辺りに見える。

ある時 侯服の辺りに 戦乱の気配を見る、每晚 郊外では 太鼓の妖しい音を聞く。

山の雨は 頻りに降つて 夜の樹木は 暗く、川の霧は ひっそりと果てしなく 春の潮はどこまでも続く。

憂いと 楽しみは 往き來して 頭は 全く白髪になりそうだが、自分の骨太は 磨られても まだ消えはしない。

「鶯花」鶯と花。春の好風景。「瑤馬」立派な馬。「一朝」或る朝。「侯服」都の四方五百里から一千里までの地。「兵氣」戦乱の氣。いくさ。「郊垌」郊外。町はずれの地。「憂愉」心配と楽しみと。「敖骨」自ら高くして下らない意氣。李白の腰には傲骨があるから、人に身を屈する事が出来ないと世人が評した故事。「崢嶸」

高く険しい。才能が勝れ抜き出る。「磨未消」磨いてもまだ消えない。『論語』陽貨に、「不日堅乎、磨而不磷。不日白乎、涅而不緇」（堅きと曰はずや、磨すれども磷るがず。白きと曰はずや、涅すれども緇せず。）「至

つて堅いものは、磨いても薄くならない。至って白いものは水中の黒土で染めても黒く染まらない。」君子は濁乱の中にあつても其の身を汚すことがないことの譬え。

羣偷白晝冠郷鄰 多是平生識面人 羣偷白晝郷鄰に冠す、多くは是れ平生識面の人。

輻重幾家爭避地 琴尊何日共遊春 輻重幾家か争ひて地を避く、琴尊何れの日にか共に春に遊ばん。

世漸薄俗傷和氣 我恐殘年見戰塵 世は漸く薄俗和氣を傷つく、我は恐る殘年戰塵を見るを。

布谷相呼連雨霽 滿軒花影正芳春 布谷相呼び連雨霽る、滿軒の花影正に芳春なるに。

多くの盗人が 白晝 隣近所に押し入って かすめ取る、それらの多くは平生 顔見知りの人だ。

あちこちの家から争つて 家財道具を纏め 避難して行く、琴を弾じ 酒樽を傾けて 何時になつたら 春を楽しむことができるだろうか。

世の中はだんだん 軽薄な風俗になり 長閑な雰囲気が損なわれてゆく、私は心配する 残り少ない人生を戦塵を見て暮らすのかと。

杜鵑は鳴き交わし 降り続いた雨も霽れた、軒端を覆う花影は まさに咲きにおう春なのに。

〔寇〕大勢で攻め寄せる賊。〔輻重〕荷車で運ぶ荷物。〔琴尊〕琴樽。琴を弾じ、酒を酌み交わす。〔漸〕だんだん。次第に。〔薄俗〕軽薄な風俗。〔和氣〕長閑な雰囲気。〔殘年〕残り少ない年。余命。〔戰塵〕戦争の騒ぎ。〔布谷〕杜鵑。

松港蘆川本樂郷 吏人何事日倉皇 松港蘆川本樂郷、吏人何事ぞ日に倉皇たる。

漫傳馮客將之辭 誰勸齊侯爲發棠 漫りに傳ふ馮客將に辭に之かんとすと、誰か齊侯に勸めん爲に棠を發するを。

翠柳村橋春將暮 紅魚市暨晝初長 翠柳村橋春將に暮れんとし、紅魚市暨晝初めて長し。

如教四境無騷擾 不使孤筇負艷陽 如し四境をして 騷擾無からしめば、孤筇をして 艷陽に負かしめざらんに。

松永港や蘆田川はもともと愉しい村里なのに、何事だろう 役人が 毎日あたふたしている。やたらに伝えてゐる 馮客が 薛に行こうとしてゐると、誰か 齊侯に棠を開くことを 勧めてくれないか。

村橋の柳は翠濃く 春はまさに終わろうとしてゐる、紅魚は 市場に並べられ 昼間が長くなった。もし 四境を 騷ぎで乱されないようにしてくれば、私は 独り杖をついて 春の気色を楽しみに行けるのに。

「松港蘆川」「松港」松永湾のことか。「蘆川」蘆田川。「倉皇」慌てる様子。あたふたする。「馮客」馮驩。

戦国齊の人。孟嘗君の客となり、飲食や礼遇の薄いのを嘆じ、長鋏の劔を弾じて「長鋏帰來の歌」を歌うことと三度に及ぶ。孟嘗君は厚く礼してその欲するようにした。後、孟嘗君の為に薛に至つて債主を召集し、債券を回収して悉くその券を焼き捨てたので、民は万歳を唱えて喜んだ。後、孟嘗君が齊の命によつて薛に至るに及び、人民これを迎えること百里。後、遂に馮驩の力に依つて其の位に復することを得た。『史記』七十五) 「薛」山東省滕県の東南。「紅魚」鯛。「市暨」市井の処をいう。「棠」地名。「四境」四方の国境。「騷擾」騒いで秩序を乱す。「艷陽」華やかな春。風景の麗しい春。

畢竟吾生誰共親 歲飢巖洞亦風塵 畢竟 吾が生 誰と共に 親しまん、歲飢 巖洞 亦風塵。

煙花不作今時態 情況全非舊日春 煙花 作さず 今時の態、情況 全く 舊日の春に 非ず。

無那嬖人能誤國 從來貴仕善謀身 無 那 嬖人能く 國を 誤り、從來 貴仕 善く 身を 謀る。

焚香拂地披青史 溪月依依烏角巾 香を 焚き 地を 拂ひ 青史を 披く、溪月 依依 たり 烏角巾。

結局 私の人生は誰と一緒に楽しんだらよかろうか、今年の穀物は実らず私の住居辺りは亦た騷ぎが起ころ。春霞のかかった美しい気色は今の時期の状態をなさず、様子は全く昔の春ではない。

どうしようもない嬖人は 国政を誤り、従来 高い位にあった者は 自分の身を守ることに汲々としてゐる。

香を焚き庭を掃き歴史書を開くと、谷間の月は離れるに忍びない様で隠居者の私を照らしている。

「歳飢」その年の穀物が実らない。「巖洞」岩穴。自分の住まいをいう。「風塵」騒ぎがおこること。「嬖人」主君のお気に入りのお家来。「貴仕」高い位。尊い位。「依依」離れるに忍びない様子。「烏角巾」隠者のかぶる黒い頭巾。烏巾。

斜陽滿岸澗魚躍 物自欣欣人自讙 斜陽岸に満ちて澗魚躍り、物自ら欣欣たるも人自ら讙し。

久矣吾州疲白著 幸然諸鎮罷青苗 久し吾が州白著に疲る、幸然ふ諸鎮青苗を罷むを。

遊絲飛絮春三月 寒食清明霽幾朝 遊絲 飛絮 春三月、寒食 清明 霽れ幾朝ぞ。

如就胸中覓箕穎 厭喧何必解風瓢 如し胸中に就きて箕穎を覓むれば、喧を厭ふに何ぞ必ずしも風瓢を解かん。

夕陽が岸にいつばいに射して谷川の魚は跳ね、物皆な生き生きとしているが人は自ら騒がしい。

長い間我が地方では勝手に取られる税に疲れている、願うことは諸々の行政が青田刈りを罷めること。

空中を漂う蜘蛛の糸風に飛ぶ柳の花春も半ばを過ぎ、寒食から清明まで霽れが幾朝あつたらう。

もし心の中の思いに就いて許由のような高潔な生き方を求めるならば、喧しさを厭うのにどうして必ずしも風に鳴る瓢箪を解くことがあるうか。

「蠶」騒がしい。やかましい。「白著」定まった以外に勝手に取る税。「青苗」国の費用が急迫した為に秋の收穫を待つことが出来ないで、苗がまだ青い時に税をかける。毎年春に政府が農民に資金を貸し、秋熟の時に二分の利息を加えて返納させた。「遊絲」空中に漂う飛行蜘蛛の糸。「飛絮」飛び散る綿。風で飛ぶ柳の花。「寒食」冬至から百五日目に行く中国の旧習。火を禁じて煮炊きをしない日。「清明」春分後十五日目四月五・六日頃。墓参りをする日。「箕穎」高節を全うして隠遁すること。堯の時、高士許由が箕山に隠れ穎水に耳を洗ったという故事。「風瓢」『蒙求』標題「許由一瓢」。「逸士傳」に、許由、箕山に隠れ、盃器無し。

手を以て水を捧げて之を飲む。人一瓢を遺り、以て操りて飲むことを得たり。飲み訖はりて木の上に掛くるに、風吹き漚瀝として聲有り。由以て煩はしと爲し、遂に外し去る。「〔漚瀝〕風の吹く音。」

『休否録』は第六句の五字目が欠字「寒食清明□幾朝」となっている。「齊」は『草稿』卷三に依る。

11 詠史六首

侯伯事諂媚 侯伯 諂媚を事とし

諸大名は媚びへつらうことに専念し

奴婢弄威福 奴婢 威福を弄ぶ

奴婢は侯伯の威福を弄ぶ

更聞外國獻 更に聞く 外國の獻

その上に聞く 外國の献上品を

半輸買相僕 半輸買して 相僕す

取引をして商い 徭役を免ぜられると

〔半輸〕令制で調（税金として納める織物）を輸（送り届ける）して徭役を免ぜられること。〔買〕商い。

誰填梁山泊 誰か填む 梁山泊

誰が梁山泊を埋めたのか

強半已墾闢 強半已に墾闢

そのほとんどは開墾して耕作地になっている

一霄暴漲至 一霄暴漲至れば

一たび 天が暴漲すると

漂没數年積 漂没 數年積む

漂つたり没したりは 數年間も続く

〔梁山泊〕山東省寿張県東南の梁山の麓。北宋の末年に大盜、宋江らがここに立てこもつたと云い、水滸伝の故事として有名な所。〔墾闢〕荒地を切り開いて耕地とする。〔暴漲〕乱れることをいう。

去樂令何嚴

樂を去り 令何ぞ嚴しき

樂を去り 法令は何と嚴しいことよ

吏胥走村落 吏胥 村落を走る

只聞老相公 只聞ただく老相公

近進李訓樂 近たころ進む李訓の樂

下級官吏が村落を走り回っている
只だ聞く年取った大臣が

近頃李訓の政策を進めたからだと

〔李訓樂〕『草稿本』卷三は「王樂藥」に作る。〔令〕法令。仰せ。〔吏胥〕下級官吏。〔李訓〕唐の人。謀を善くし宰相となる。宦豎かんじゆ（小役人）を誅せんとし、謀が洩れ殺される。

一朝逐安石 一朝 安石を逐ひ

或る朝 安石を退けた

路人相喧傳 路人相 喧傳す

往來の人々は互いに盛んに言いふらす

諸公隨誰議 諸公 誰の議に随ひ

政府の大臣たちは誰の意見に随ひ

首罷青苗錢 首はめに青苗錢を罷やむ

先ず 青苗錢を罷めたのか

〔王安石〕宋、臨川の人。益の子。進士に引き上げられた。神宗の時、宰相となり、政治を改革しようとして、青苗・水利・均輸（漢代に、多く産する貨物を官が定めた時価によつて上納させ、都に輸送して国用に供したり、他地に転送して払い下げたりして、物価を平定させた方法）・保甲（地方の治安維持を目的とする義勇兵）・募役（徭役に携わる者を募る）・市易・保馬・方田・均稅等の諸新法を興したが、物議沸騰して効無し。罷めて鎮南軍節度使となる。元豐中、左僕射を拜し、哲宗の時、司空を加えられた。封は荊国公。〔首〕最初。〔青苗錢〕毎年の春に、政府が農民に資金を貸し、秋熟の時に二分の利息を加えて返納させた。宋の王安石の新法。

内官垂淚說 内官 涙を垂れて説く

内官は 涙を垂れて諫め

賢儲暴捐館 賢儲 暴はかに館を捐すつ

後継ぎは 俄に死んだ

新政何太寛 新政何ぞ太だ寛なる

新政は何と寛大であることよ

不討史彌遠 史を討めざること彌よ遠し

従来のやり方は益々遠くなった

〔内官〕奥殿に仕える官吏。「賢儲」「儲」太子。田沼意知か。「暴」俄に。「捐館」館を捨てる。死亡の敬称。

〔討〕尋ねる。詳しく調べる。求める。「不討史彌遠」従来通りのやり方はなくなつたということ。

人刺斃其子 人刺して其の子斃る

人が刺して其の子は死んだ

馬蹴殺其孫 馬蹴りて其の孫を殺す

馬が蹴つて其の孫を殺した

父子曾共政 父子曾て政を共にす

父子は曾て共に政治に関わつた

慶者日填門 慶者日門を填む

慶ぶ者は毎日門を埋めている

〔父子〕田沼意次と息子の意知。

12 後詠史六首

分宜作宰相 分宜しく宰相と作るべく

身分は宜しく宰相の位に就くべく

威權倒乾坤 威權 乾坤を倒す

権威は天地をも倒す勢い

徐階位其上 徐階 其の上に位するも

徐階は 其の上に位するが

廿年無一言 廿年 一言無し

廿年 何もしなかつた

〔分〕身分。「徐階」位。「位其上」『草稿本』卷三は「同其位」に作る。

蔡卞王氏甥

蔡卞は王氏の甥

蔡卞は王安石の甥

延賞韋家舅 延賞は韋家の舅

延賞は韋家の舅

雖則暴絶昏 暴を則し昏を絶つと雖も

道に外れたことを正し昏乱を絶やすとはいっても

能掩従前醜 能く従前の醜を掩はんや

能く是までの恥を隠す事が出来ようか

〔蔡卞〕宋の人。熙寧の進士。王安石、妻すに女を以てす。因つて之に従つて学ぶ。〔宋史〕四七二。

〔延賞〕明、侯懋功の字。呉興の人。画に巧み。〔則暴〕道に外れたことを正す。〔絶昏〕昏乱を絶やす。

歡聲滿四境 歡聲 四境に滿ち

喜びの聲は辺り一帯に滿ちあふれ

竚看善政新 竚ちて看る 善政の新たなるを

佇んで看る 善政の新たなことを

人道通明殿 人道 明殿に通じ

人道は 明殿にまで通じ

猶有護法神 猶 護法の神 有るがごとし

なお法を護つてくれる神はあるようだ

〔明殿〕天帝の宮殿のことか。〔護法〕法律を保護する。

行簡牛家黨 行簡は牛家の黨

行簡は牛家の仲間

其姦亦相同 其の姦亦相同じくす

其の悪賢いことはみな同じだ

國是不能退 國是 退くること能はず

國是は 退けることができない

恐害贊皇公 恐らくは皇公を贊ふるを害せん

ことよつたら皇公を贊えることを妨げるのではなからうか

〔行簡〕白行簡。唐の人。白居易の弟。字は知退。貞元の末の進士。官は主客員外郎。後、郎中に進む。〔唐書〕

一一九、〔舊唐書〕一六六。〔牛家〕牛僧孺。唐の人。弘の裔。字は思黯。諡は文簡。進士。官は太子少師。封は

奇章郡公。文宗の時、李宗閔と結んで朋黨（派閥）を為し、憎むところを排斥し、權、天下に震い、時に牛李と

称せられる。武宗の時、循州長史に累貶せられ、宣宗立つや遷つて太子少師となつて卒す。『唐書』一七四、『舊唐書』一七二。「國是」國家が是とする方針。万民が認める國家の大計。

諸公莫深憂 諸公深くは憂ふる莫れ

諸大名よ深く心配しなざるな

弊事漸錮削

弊事漸く錮削す

弊害のある事柄は漸く取り除かれた

縱令爾遠横

縱令ひ爾く遠横なるも

よしんば時間がかかるとも

不如仇胄虐

如かず仇胄の虐

後継ぎの惨さには及ぶまい

「弊事」弊害のある事柄。「錮削」取り除く。なくす。「仇胄」後継ぎ。誰を指すか未詳。「不如」『西山拙齋全集』は「不知」に作る。ここは『草稿本』卷三に依る。

君實疾已病

君實に疾は已に病く

君は實に病が重くなつて

中外一鼠憂

中外一に鼠憂す

国の内も外も心配している

不知呂公著

知らず呂公著はるるも

呂公が地位に著いても

堪委天下不

天下を委ぬるに堪ふるや不やを

天下を委せられるか否か分からない

「鼠憂」憂え思う。「呂公」誰を指すか未詳。

13 鄂都篇

三年巨靈劈衡嶽

三年巨靈 衡嶽を劈き

三年巨靈は衡山を裂いて

數州桑麻沒沙淤

數州の桑麻 沙淤に沒す

數州の桑や麻畑は砂や泥に沒した

六年漢水冒城郭
 都人百萬半爲魚
 子元當國廿歲強
 父子共政紊紀綱
 構木心蕩時變事
 餘殃未弭更旱蝗
 今年繹騷遍海內
 斗米十千市莫賣
 都下連日人蟻結
 廬舍到處爭撞壞
 古來謀身是肉食
 滿朝坐嘯無寸策
 大鳥不飛亦不鳴
 鵬風激怒勢飛石
 咸謂亂本既已成
 庸材難支大廈傾
 豈料國氣隕矇裡
 忽視卿雲五色明
 首擢循良事救賑

六年漢水城郭を冒し
 都人百萬半ば魚と爲る
 子元國に當たること廿歲強
 父子政を共にし紀綱を紊す
 構木心蕩きて時に變事あり
 餘殃未だ弭まず更に旱蝗
 今年繹騷海内に遍く
 斗米十千市賣る莫し
 都下連日人蟻結し
 廬舍到處争ひて撞ち壞す
 古來身を謀る是れ肉食
 滿朝坐嘯すれども寸策無し
 大鳥飛ばず亦鳴かず
 鵬風激怒して勢石を飛ばす
 咸く謂ふ亂本既已に成り
 庸材支へ難く大廈傾くと
 豈に料らんや國氣隕矇の裡
 忽ち觀る卿雲五色の明
 首循良を擢じ救賑を事とす

六年漢江は城郭をおおい
 都人百万の半分は溺れて魚になった
 子元は二十年余り国政に就き
 父子政を共にし紀綱を紊した
 楚王の心が動いて時に変事が起こった
 餘殃は治まらず更に旱蝗の害
 今年国内全体に騷ぎが続き
 少しの米一万錢でも市は売らない
 町中は連日人が蟻のように集まり
 庄屋を何処も争つて壊している
 従来ご馳走ばかり食べていた者は
 滿廷嘯くばかりで役に立たず
 主だつた者は何もしない
 鳳は激怒して羽ばたき出した
 皆言う亂の本は出来上がった
 並の人材では支え難く国は傾くと
 思いもしなかつた乱れた世の中に
 忽ちめでたい雲が五色の光を發するのを觀た
 頭は有能な人を抜擢し民を救う

西成計日民忘念

西成 日を計り 民 念りを忘る

收穫は日を数え 民は念りを治む

借問何人能紓難

借問す 何人能く難を紓むるや

尋ねるが誰が巧く難事を納めたか

鬪穀於菟爲令尹

鬪穀於菟 令尹と爲る

鬪穀於菟が宰相となつたからだ

〔郢都〕春秋楚の都。〔巨靈〕河神の名。〔劈〕裂く。破る。〔衡嶽〕山の名。衡山。安徽省當塗県の北。〔沙淤〕砂や泥。〔紊〕乱れる。〔紀綱〕国家の制度。紀律。〔構木〕木の名。あきにれ。〔心蕩〕こころが動いて定まらぬ。〔餘殃〕後に残る災い。祖先の悪事の報いで子孫が受ける災難。〔旱蝗〕旱と蝗の害。〔釋騷〕ひっきりなしに騒ぐ。引き続き騒がしい。〔十千〕一万錢。〔謀身〕自分の身をはかる。〔坐嘯〕のんびりと坐つて詩歌をうたう。〔鴈〕おとり。鯤という魚が化したと云われる想像上の鳥。〔庸材〕並の器量。平凡の人。〔廈〕大きな家。〔氛〕事に先立つて吉凶を示す気。悪い気。〔卿雲〕太平の世に現れるというめでたい雲。〔循良〕法律を守り、うまく民を治める。〔救賑〕物や金を与えて人を救う。〔西成〕秋に穀物が実ること。五行説で秋は西に当たる。〔令尹〕春秋時代の楚の官名。宰相に当たる。〔鬪穀於菟〕春秋楚の人。伯比の子。字は子文。伯比は母に従つて郎（春秋時代、楚の国名）に畜われ、郎子の女に淫し、子文を生む。郎夫人に夢澤に棄てられたが、虎に乳を授けられる。時に郎子田し、之を見て懼れ帰り、夫人に告げて之を収めさせた。楚人、乳を穀と言ひ、虎を於菟という。故に穀於菟と称せられる。成王に事えて令尹となる。自ら其の家を毀し、以て楚国の難を救う。未明にして朝に立ち、日晡にして帰食する。朝に夕べを謀らずして家に盈積なく、三度仕えて喜ばず、三度官を去つて慍らず。爵の為に勉めず。又、禄の為に勉めず。孔子に忠と称せらる。〔春秋左氏伝〕莊公三〇年、僖公五年・二〇年、宣公四年

14 即事

令下諸州問俊英

預忻身老見文明

令諸州に下りて俊英を問ふ、

忻よろこびに預り身老いて文明を見る。

欲攜所業趨東閣

十五年來既避名

所業たづねを攜へ東閣に趨はらんと欲す、十五年來既に名を避く。

お上の令が各地方に下り有能な人物が集められた、年老いて文明に逢う機会に恵まれる忻よろこびに預ったものだ。学んできた成果を携え東閣に行きたいと思つた、十五年この方悪政のため名が出るようなことはしなかつた。

〔東閣〕東方の小門。前漢の公孫弘（漢、薛の人。武帝の時の博士。官は丞相。封は平津侯。）が東閣を開いて、賓客を招いた故事。

15 丁屋路上

柳陽梅墩好意行

江郷春色入嘉平

柳陽梅墩りゅうや意を好くして行く、江郷春色嘉平に入る。

風收木末鳥將語

暖到陂心氷有聲

風木末に収まり鳥將に語らんとす、暖陂心に到り氷聲有り。

仍見諸曹除舊弊

近傳三府擢時英

仍なほ見る諸曹舊弊を除くを、近傳ちかづふ三府時英を擢ひくを。

去年今日山陽道

幾國塵沙正義兵

去年の今日山陽道、幾國の塵沙正義の兵。

柳の堤梅の土手心地よくして出かけて行く、川辺の郷さとは春の気色のよい時節となつた。

風は木末に収まり今しも鳥が囀りそう、暖かさは堤の中程に到り氷も解け始めた。

役所が古いしきたりを取り除いているのを頻りに見る、

近頃伝えられたことは三府が時の賢俊を抜擢したということ。

去年の今頃山陽道は、幾つもの郷くにで一揆の兵の砂埃が挙がつていた。

〔陽〕土手。〔墩〕丘。土手。〔陂心〕〔陂〕は土手。堤。〔諸曹〕役所。〔三府〕三公の府。周代の官名は大師

・大傳・大保。前漢は丞相・大司馬・御史。後漢は大尉・司徒・司空。「時英」当時の賢俊。

『黄葉夕陽村舍詩』卷三は「鴈」作「鳩」、「好意行」作「入午晴」、「幾國塵沙正義兵」作「羣盜如毛白晝行」。

16 題畫虎

虞廷來瑞獸

虞廷 瑞獸來り

此輩遠竄奔

此の輩 遠く竄奔す

利爪空搔痒

利爪 空しく搔痒し

餓吻枉垂涎

餓吻 枉しく涎を垂らす

咲他綏綏者

他の 綏綏たる者を咲ふ

誰向假威權

誰に向かひてか 威權を假る

喜此呦呦徒

喜ぶ 此の呦呦の徒

同得飽安眠

同に安眠に飽くを得たり

願勿再出穴

願ふ 再び穴を出でて

横行恣噬吞

横行 恣に噬吞を 横行 恣にする勿らんことを

虞廷に 瑞獸が来た

此の輩は 遠くへ逃げ去った

鋭い爪は 空しく痒いところを搔くだけ

飢えた口は 無駄に 涎を垂らすだけ

お笑いだ そろそろと逃げる者

誰について 威光と権力を假りていたのか

喜ぶのは この悲しみの声をあげていた仲間

みんな 安眠が出来るようになった

願うのは 二度と穴を出て

我が物顔に振る舞い 気儘に嗜みつかないで欲しいこと

〔草稿本〕卷三

〔瑞獸〕めでたい獸。ここは松平定信を指す。〔竄奔〕逃げ去る。〔利爪〕鋭い爪。〔餓吻〕「吻」口先。口端。〔枉〕空しく。いたずらに。〔垂涎〕よだれを垂らす。〔綏綏〕ゆるやかに水などが落ちる形容。〔呦呦〕悲しい声。微かな声。〔噬吞〕嗜みつき食らう。他国を侵略すること。

この詩は、『草稿本』では「題」も「詩文」も次のようになっている。

西山孝恂出畫帟扇需題 時古川文人在坐盛談東事

(西山孝恂 畫帟扇を出だし題するを需む。時に古川文人坐に在りて盛んに東事を談ず)

虞廷來惴獸 虞廷に惴獸來り

虞廷に 瑞獸が來た

毛彩自燦然 毛彩自ら燦然たり

毛の艶は 自然にきらきらと輝いている

此輩被嚴譴 此の輩 嚴譴され

此の輩は 厳しく処罰されて

膽落遠竄奔 膽落 遠く竄奔す

氣力を落として 遠くへ逃げ去った

利爪空搔痒 利爪 空しく搔痒し

鋭い爪は 空しく痒いところを搔くだけ

餓吻枉垂涎 餓吻 枉しく涎を垂らす

飢えた口は 徒に涎を垂らすだけ

笑他綏綏者 他の 綏綏たる者を笑ふ

お笑いだ そろそろと逃げる者

馮誰假威權 誰に馮りて 威權を假る

誰を頼りとして 威權を借りていたのか

喜此呦呦伴 喜ぶ 此の呦呦の伴

喜ぶのは この悲しみの声をあげていた仲間

得意臥林泉 意を得て 林泉に臥す

満足して 林泉に臥している

願勿再出穴 願はくは 再び穴より出でて

願うのは 二度と穴を出て

横行恣噬吞 横行 恣吞を恣にする勿らんこと

我が物顔に振る舞い 氣儘に噛みつかないで欲しいことだ

〔嚴譴〕 厳しい処分。〔膽落〕 氣力が落ちる。〔馮〕 依る。頼みにする。〔林泉〕 木立や泉水のある立派な庭園。

〔草稿本〕 卷三

四、菅茶山と福山藩関係年表

年号	西曆	齡	月日	摘 要
天明 六	一七八六	39	2・23	福山藩校弘道館開校にあたり教授にというお召しをいただくが断る。
寛政 四	一七九二	45	8・26	福山藩より五人扶持を給せられ、福山藩儒医を命じられる
五	一七九三	46		藩命により福山米屋町で月二回 漢籍の講釈をする。
七	一七九五	48		福山藩より御家人にという要請があるが病弱を理由に断る。
八	一七九六	49		「郷塾取立に關する書簡」を藩に提出し、認可される。
享和 二	一八〇二	55	元日	「御紋付御上下」を拝領した感慨を七言律詩に作り藩に献上する。
三	一八〇三	56	10・17	阿部正倫が致仕し、阿部正精が襲封す。茶山はその即位を賀す。
文化 元	一八〇四	57	1・8	藩より江戸出府を命ぜられる。一月二十一日に出発し十一月五日帰郷。
二	一八〇五	58	5・6	藩より御紋付き麻袴・金二百疋を拝領する。
六	一八〇九	62	4・7 4・5 2・13	藩より御供相勤付御紋付御小袖・銀三枚を拝領する。 府志（領内地誌）の編纂を命ぜられる。 『福山志料』稿本を福山藩に献納する。 阿部氏福山藩入封百年の祝典に列席し賀詩を献上する。（前編巻八） 福山志料』編纂の賞与として「着肩衣及び金十五兩」を賜る。

	七	九	十	十一	十二
	一八一〇	一八二二	一八二三	一八一四	一八一五
	63	65	66	67	68
	4・13	7・23	12・15	3	元日
	頼山陽と福山藩家老内藤景堅の詩會に出席。七絶一首。(後編卷三)	阿部正精侯から鷹神社造作を命ぜられる。	福山城に招かれ上下格を賜る。	藩主阿部正精に江戸出府を命ぜられる。	藩主阿部正精に謁する。
	7・30	9・13	7・23	5・6	1・9
	福山藩家老中山光繁歿す。五言律詩一首(後編卷三)「墓誌銘」有り。	福山藩家老内藤景堅の招きで深津長尾寺で賞月。(頼山陽を伴う)	福山藩家老内藤景堅の招きで深津長尾寺で賞月。(頼山陽を伴う)	江戸へ出発し翌文化十二年三月二十九日帰郷する。	福山丸山藩邸に年礼する。
	6・7	6・7	6・7	6・7	1・23
	藩主阿部正精に謁見する。『福山志料』の増補訂正を命ぜられる。	藩主阿部正精に謁見する。『福山志料』の増補訂正を命ぜられる。	藩主阿部正精に謁見する。『福山志料』の増補訂正を命ぜられる。	藩主阿部正精に謁見する。『福山志料』の増補訂正を命ぜられる。	藩主阿部正精が林述齋の「雪の詩」を評するように命じる。
	12・6	12・6	12・6	12・6	2・5
	福山藩有司を歴訪する。	福山藩有司を歴訪する。	福山藩有司を歴訪する。	福山藩有司を歴訪する。	松平定信の招きに浴恩園に行く。七言絶句二首有り。(後編卷六)
					2・7
					藩主阿部正精から十人扶持加増される。
					2・11
					阿部正精の丸山招宴に行き、屋代弘賢・鈴木芙蓉と交わり弘賢が墨本を恵む。「公謙木芙蓉坐上揮写 公命余詩」(五言絶句・後編卷六)
					2・19
					福山藩諸子を訪ねる。
					3・18
					福山藩大坂蔵屋敷に着く。
					4・2
					福山城に登城する。「歸後入城途上」(七言絶句・後編卷六)

五、菅茶山年譜

年号	西曆	年齢	摘 要
寛延 元	一七四八	1	二月二日、備後国神辺宿に生まれる。父二十一歳、母十六歳。
寶曆 元	一七五一	4	妹瀧が生まれる。明和三年（一七六六）十六歳で歿す。
寶曆 二	一七五二	5	弟汝梗が生まれる。天明元年（一七八一）三十歳で歿す。
寶曆 三	一七五三	6	妹チヨが生まれる。
寶曆 四	一七五四	7	妹マツ（後にミツ・好と改名）が生まれる。
明和 三	一七六六	19	京都遊学（一回目）。市川某に師事し古文辞学を学ぶ。
明和 四	一七六七	20	藤井暮庵 神辺十日市に生まれる。
明和 五	一七六八	21	京都遊学（二回目）。中秋に上京する。和田泰純に医学を学ぶ。
明和 七	一七七〇	23	弟圭一（号は恥庵）が生まれる。
明和 八	一七七一	24	京都遊学（三回目）。医学の友、飯田玄泉の紹介で池大雅を知り屢々交友を持つ。年末に帰郷する。
安永 元	一七七二	25	西山拙齋が神辺に茶山を訪ねる。初対面である。一緒に三原へ梅見に行く。京都遊学（四回目）。那波魯堂に師事して朱子学を学ぶ。
安永 二	一七七三	26	春、大坂南軒江戸堀に頼春水を訪問する。初対面であった。八月、那波魯堂・拙齋と共に洛西の西岡に遊ぶ。

安永	三	一七七四	27	京都より帰郷する。
安永	五	一七七六	29	二月二十九日、頼春水が父七十歳の寿宴に臨むため帰郷する途中、初めて茶山を訪ねる。四月二十二日、帰坂の途について春水は茶山を訪ね一泊し、翌二十三日茶山の同道で鴨方に西山拙齋を訪ねる。春水と拙齋はこの時か初対面。二十七日茶山・春水・拙齋の三人は備中宮内の有木山に登り、二十八日、岡山の姫井桃源宅に泊す。二十九日、関谷巒を見学して分かれる。八月十三日、西山拙齋と姫井桃源が来訪。冬、拙齋の病氣見舞いに鴨方へ。
安永	六	一七七七	30	京都遊学（五回目）。早春に上洛したものと考えられる。
安永	七	一七七八	31	二月、拙齋・内田子明が神辺に来訪。五月、拙齋に案内されて、その塾生らと共に上成村に行く。内田子明、岡鶴汀を訪ね詩の唱酬をする。
安永	八	一七七九	32	五月十七日、大空上人と拙齋を訪ね、玉島、長尾に遊ぶ。
安永	九	一七八〇	33	京都遊学最後（六回目）。葛子琴ら混沌社の同人達と交遊。
天明	元	一七八一	34	十一月廿七日、叔父の高橋慎庵歿す。暮れに内海氏爲と結婚する。
天明	二	一七八二	35	塾「黄葉夕陽村舎」を開設する。八月廿五日、弟汝梗歿す。 二月十七日、妻爲が歿す（二十三歳）。四月九日、春水が来訪し一泊する。十日、春水と共に拙齋を訪う。十一日、春水を送って玉島港へ。十二日春水と別れる。六月四日、春水が西帰の途上、来訪し一泊する。五日、弟恥庵と春水を送り尾道へ。勝島家主催賀島遊覧。六日、松永で分かれる。 十月十四日、弟恥庵、拙齋の「欽塾」に入門する。

天明 三	一七八三	36	<p>*この年までの作品『黄葉夕陽村舎詩』前編卷一。</p> <p>七月十六日、道光上人と神辺町中条の遍照寺に登る。</p> <p>閏正月十六日、小寺清先（笠岡稲荷山の祠官）の母の傘寿の宴で拙齋と会う。</p> <p>三月十七日、拙齋来訪し、廿四日に鴨方へ帰る。五月七日、葛子琴歿す。</p> <p>（七古「寄弔葛子琴」）有り。十月五日、頼杏坪が江戸よりの帰途、神辺を来訪し二泊する。</p>
天明 四	一七八四	37	<p>*この年、門田宣（二十八歳）と結婚する。</p> <p>二月廿八日、拙齋・杏坪・恥庵等と玉島・笠岡に遊ぶ。三月十日、諸子を伴ってい神辺に帰る。三月廿三日、拙齋帰る。七月五日、拙齋を鴨方に訪ね数日滞在する。</p>
天明 五	一七八五	38	<p>*この年までの作品『黄葉夕陽村舎詩』前編卷二。</p> <p>三月廿三日、拙齋・孝恂（拙齋の息子）志村東洲（奥州の人）が来訪する。</p> <p>七月、藩校弘道館設立。教授に迎えられるが病弱を理由に断る。</p> <p>十二月七日、拙齋を鴨方に訪ね、九日まで滞在する。</p>
天明 六	一七八六	39	<p>八月十日、志村東洲来訪。十四日、東洲と共に拙齋を訪ねる。</p>
天明 七	一七八七	40	<p>二月七日、道光上人・拙齋らと尾道・賀島・三原・西野・仏通寺・千光寺に遊び、廿二日に三人は一緒に神辺に帰る。六月五日、藤井暮庵を伴って宮島管弦祭見物が目的の「遊芸日記」の旅に出る。十日に春水宅に着く。</p>
天明 八	一七八八	41	<p>山陽と初対面。</p>

寛政 元	一七八九	42	<p>*年末『冬日影』二巻刊行される。</p> <p>五月下旬、赤崎海門（薩摩藩儒）が来訪する。七月か八月、茶山と拙齋は殆ど時を同じくして<small>おこが</small>瘡を患う。九月十一日、那波魯堂歿す。秋、大原吞響（奥州東山の人）が来訪する。</p>
寛政 二	一七九〇	43	<p>二月廿一日、拙齋が来訪する。各所の歌会・詩会に招かれる。</p> <p>五月七日、春水江戸より帰郷の途中来訪する。備中に遊ぶ。</p>
寛政 三	一七九一	44	<p>二月十八日、父樗平歿す。（六十五歳）三年服喪し詩作を断つ。</p> <p>十一月十六日、春水江戸よりの帰郷の途中、黄葉夕陽村舎に茶山を訪う。</p> <p>*この年までの作品『黄葉夕陽村舎詩』前編巻三。</p>
寛政 四	一七九二	45	<p>藩主阿部正倫が、大学頭林祭酒（述齋）を通して茶山を識る。八月五日、書画展（円山双林寺）で呉春・村上東洲・岸駒を知る。八月二十六日、藩儒医として五人扶持を賜俸される。家業を弟恥庵に譲る。</p>
寛政 五	一七九三	46	<p>十月八日、頼春水が江戸より帰郷の途中来訪する。</p> <p>*福山米屋町で一月二回宛て漢籍の講釈をする。</p>
寛政 六	一七九四	47	<p>三月十五日〜十月六日、妻宣を伴い吉野・奈良・京都の旅。備前・播磨・舞子・生田・浪華・河内・吉野・鈴鹿・伊勢・志摩・鳥羽・二見・清洲・関ヶ原・近江・彦根・石山・粟津・京都。七月十五日、吞響に招かれ、橘恵風・波響を識り、月を賞する。十月十五日、巨椋池で六如上人・大原吞響・蠣崎波響らと舟遊をする。</p>

寛政 七	一七九五	48	*父樗平の句集『三月庵集』の跋を書く。 福山藩から御家人にとのお召しをいただくが断る。
寛政 八	一七九六	49	二月一日、母、佐藤氏半歿す（六十五歳）。服喪し詩作断つ。十一月廿九日、廣瀬蒙齋来訪。十二月三日、廣瀬蒙齋辞去す。西山拙齋の門下生となる。 *この年、塾「黄葉夕陽村舎」が藩の郷校に認可され、「廉塾」と改称。
寛政 九	一七九七	50	三月四日、梨木祐爲が来訪する。十七日、頼杏坪が山陽を伴い江戸への上京途中、茶山を訪ね一泊する。閏七月、菅公壽（次弟汝榎の長男）が井上源右衛門の女左保と結婚する。八月、弟、菅恥庵の娘萬喜が歿す。冬、弟恥庵が長崎に遊学する。十一月廿五日、恥庵は長崎に着いたが、腸チフスに罹る。 *この年までの作品『黄葉夕陽村舎詩』前編卷四。
寛政 十	一七九八	51	四月、弟恥庵が長崎より帰る。五月初旬、頼杏坪が山陽を伴い江戸よりの帰途廉塾に立ち寄る。秋、弟恥庵が上洛して塾を開く。十一月五日、西山拙齋が歿す。冬、恥庵、帰郷して西山拙齋を弔い、再度上洛する。
寛政 十一	一七九九	52	一月廿八日、菅公壽の妻左保が歿す（結婚生活一年半）。二月廿六日、公壽と左保の子である類が歿す。十一月四日、西山拙齋一周忌法要の為に鴨方へ行く。十一月五日、西山拙齋一周忌法要。「拙齋先生行状」を作る。
寛政 十二	一八〇〇	53	正月癘を患う。春、六如上人が「十春詩」を送って来る。三月十一日、頼春水が来訪する。五月十二日、疔 <small>おや</small> を患う。八月廿七日、弟恥庵京都で歿す。（三十三歳）。九月四日知らせが届く。九月五日、頼山陽が脱藩する。

享和 元	一八〇一	54	<p>十月廿九日、山陽は連れ戻される途中神辺に寄る。十一月三日、山陽、座敷牢に入る（一八〇三・三）。十月一日、恥庵の法要を営む。</p> <p>*この年までの作品『黄葉夕陽村舎詩』前編卷五。</p> <p>（寛政十三年は二月五日に改元されて享和元年となる）七月二十六日、福山の儒官に準じられ、辞令「御儒者格弘道館出席。目付觸流同様無足之格令」が出る。弘道館に出講することとなる。五人扶持増俸される。十二月十七日、「御紋附御上下」を拝領する。十二月、武元登登庵（備前国和气郡北方村）が廉塾を初めて訪問する。</p>
享和 二	一八〇二	55	<p>八月三十日、頼春水が江戸に行く途中来訪する。</p>
享和 三	一八〇三	56	<p>三月十六日、頼杏坪が江戸に行く途中来訪する。四月廿七日、菅公壽（茶山の二弟汝榎の子）と井上氏敬が結婚する。五月九日、頼春水が西山孝恂（拙齋の長男）を伴い来訪し、十一日迄逗留する。十月十七日、阿部正精が福山藩主に即位する。福山城に行きそれを賀す。</p> <p>*この年までの作品『黄葉夕陽村舎詩』前編卷六。</p>
文化 元	一八〇四	57	<p>（享和四年は二月十一日に改元されて文化元年となる）一月八日、江戸出府を命ぜられ、二十一日に神辺を発つ。伊澤蘭軒・柴野栗山らと知り合う。三月十九日、蠣崎波響・伊澤蘭軒・犬塚印南と隅田川を舟遊。五月、常陸に遊ぶ。鎌倉―白井―刀称―荒川―潮来―青塚―水戸―太田―西山―真鍋―牛来湖等。「常遊記」一卷、「常遊雑詩」。七月九日、蠣崎波響・伊澤蘭軒・犬塚</p>

文化 二	一八〇五	58	<p>印南等と隅田川を舟遊。七月十八日、柴野栗山の栗山堂で古賀精里・尾藤二洲・頼杏坪・文晁他詩人・画家・雅人の錚々たる人の詩筵に招待さる。九月九日、頼杏坪の招きで藝藩邸に招かれ淺野侯にお目通りする。十月二日、福山藩から御紋附麻袴・金二百疋を拝領する。十月十三日、藩主阿部正精に従い西帰する。十一月五日、福山に帰着。十二月、藩から御供相勤付御紋附御小袖・銀三枚を拝領する。</p> <p>*この年までの作品『黄葉夕陽村舎詩』前編巻七。</p> <p>四月廿日、「菅家往問録」に記載が始まる。五月六日、福山藩から五人扶持を増俸される。藩主阿部正精に領内地誌『福山志料』の編纂を命じられる。</p> <p>五月廿日、頼杏坪が西帰の途中来訪する。八月廿一日、藩主阿部正倫が歿す。</p> <p>九月十八日、西山孝恂等と共に竹原に赴き、照蓮寺の詩会に臨む。春水・春風・山陽も一緒。廿一日、春水・山陽等と共に普明閣に遊び、酒造家正木氏の奉盈楼を訪ねる。忠海―尾道―賀島―田島―瀬の浦―凧塚―桜坂―横倉―福山―早戸村らに遊び 十四日、神辺に帰着。</p>
文化 三	一八〇六	59	<p>六月十七日、伊澤蘭が来訪。尾道の門人、油屋元助宅で飲む。</p>
文化 四	一八〇七	60	<p>二月十八日、神辺大火。「廉塾」のみ残し茶山宅は全焼する。</p> <p>十二月一日、柴野栗山歿す（七十四歳）。</p>
文化 五	一八〇八	61	<p>五月十一日、公壽の妻 敬が次男を出産する。十七日、菅二郎と命名。</p> <p>八月十三日、門田朴齋（茶山後室、宣<small>の</small>妹の子）が入門する。</p>

文化	六	一八〇九	62	<p>一月九日、塾生の三谷尚玄（讃岐の人）が歿す（二十三歳）。二月十三日、『福山志料』稿本を福山藩に献納する。二月廿五日、公壽（萬年）の次男菅二郎が天然痘で歿す（二歳）。三月一日、公壽の長男、喜太郎が天然痘で歿す（六歳）。四月五日、阿部氏福山藩入封百年の祝典に出席する。</p> <p>四月七日、藩主 阿部正精から『福山志料』編纂の賞与として肩衣及び金十五両を賜る。六月廿九日、塾で合田才治が歿す。九月十六日、山陽来塾の件につき、春水に書簡を送る。十二月廿九日、山陽、「廉塾」の都講として神辺に来る。</p> <p>*この年までの作品『黄葉夕陽村舎詩』前編卷八。</p>
文化	七	一八一〇	63	<p>一月十日、山陽が「廉塾」開講に当たり、『論語』を講義する。四月十三日、山陽と福山藩家老内藤景堅の詩会に出席する。五月三十日、公壽の三男が誕生する。六月八日、菅三と名付ける。六月十九日、山陽痢を患う。</p> <p>七月廿六日、山陽が築山捧盈に不服申し立ての書簡を送る。九月、山陽が「上菅茶山先生書」を作る。十一月十四日、山陽が茶山に書簡を送り、京都行きの志を示す。</p>
文化	八	一八一二	64	<p>一月七日、山陽と公壽が病臥する。閏二月六日、山陽と三省が「廉塾」を去り京都へ行く。三月廿四日、朝鮮の通信使出迎えの為、西下した古賀精里と述祭を神辺の宿舎に訪ね、「廉塾」に招く。三月廿七日、塾生の牧棲碧山人（讃岐の人）塾を出奔する。七月廿九日、公壽（甥にして養子）が歿す（三</p>

文化 九	一八二二	65	<p>十九歳)。十二月、頼春水より綿衣を送られる。</p> <p>*この年までの作品『黄葉夕陽村舎詩』後編卷三。</p> <p>二月一日、母佐藤氏半の十七回忌法要を行う。三月、『黄葉夕陽村舎詩』前編・附録「恥庵詩草」上梓される。四月、北條霞亭の『嵯峨樵歌』序文を作る。八月、出版される。七月廿三日、藩主阿部正精から勇鷹神社造作を命ぜられる。八月廿七日、道光上人が東山第一楼で恥庵十三回忌を営む。九月九日、塾生と茶白山に登る。十二月二日、道光上人が北條霞亭の『嵯峨樵歌』を携えて京都から至る。</p>
文化 十	一八一三	66	<p>三月九日、春水が有馬温泉への途中、聿庵（山陽の子）を伴って来訪し、十五日迄逗留する。十三日、一緒に藤井暮庵邸の詩会に行く。四月廿九日、春水一行が帰国の途中、来訪し五月三日まで逗留する。五月廿日、北條霞亭を「廉塾」の都講に懇請する書簡を送る。六月六日、北條霞亭・山口凹巷連名で都講承諾の書を作る。八月十五日、北條霞亭「廉塾」の都講として来る。九月より『大学』『中庸』の講義を開始する。在塾生、竹田器甫・落合双石・門田朴齋（十七才）等三十余名。十二月十五日、城に召され上下格を賜る。</p> <p>*この年までの作品『黄葉夕陽村舎詩』後編卷四。</p>
文化 十一	一八一四	67	<p>三月、藩主阿部正精から江戸出府を命ぜられる。五月六日、甲原玄壽・白杵直卿を伴い江戸に向けて出立する。岡山―伊部―舞子―尼崎―大坂着。十三日―十七日迄滞留する。五月十六日、山陽が来訪し、廿一日迄、武元登登庵</p>

文化 十二	一八一五	68	<p>と共に茶山を接待する。(山陽は、不義理をして廉塾を出たので罪滅ぼしのつもりで、誠心誠意茶山に尽くすが茶山の機嫌はよくない)</p> <p>瀬田―石部―櫻川―大野―関―四日市―万場―油井―薩陀―箱根六郷―大森を経て、六月五日、江戸に入り、神田小川町の福山藩上屋敷に到着。</p> <p>六月七日、藩主に謁見、『福山志料』増補訂正を命ぜられる。江戸滞在中は鶉川子醇・太田孟昌・山岡大夫・伊澤蘭軒・古賀精里・岡本亭・谷文晁・竹田器甫・大田南畝・中村圃公・土屋七郎・廣瀬齋・蠣崎波響・林述祭・龜田鵬齋・田内主税・石田醒齋・菊池五山他、多数の人々と詩会・月見の会・舟遊・賀筵等身の空く時が無いほどの交友を結ぶ。竹田器甫・關十内土屋七郎等は『福山志料』の校合を助ける。</p> <p>*随筆『筆のすさび』成る。</p> <p>*この年までの作品『黄葉夕陽村舎詩』後編巻五。</p> <p>一月一日、他郷での初めての正月を江戸で迎える。藩主阿部正精に謁し年礼をする。一月九日、福山丸山藩邸に年礼をする。二月五日、松平定信の招きで浴恩園に行く。二月七日、藩主阿部正精から十人扶持加増される。二月十一日、藩主阿部正精の丸山招宴に行く。作詩有り。二月廿四日、柴野栗山・尾藤二洲の墓に詣でる。二月廿六日、宿舎を出立する。川崎―程ヶ谷―鎌倉―江ノ島藤沢―小田原―箱根―三島―岡部―懸川―舞阪―藤川―熱田―佐屋―木曾川―四日市―伊勢―京都―高瀬川―伏見―大坂―神辺帰着。(三</p>
----------	------	----	---

		文化 十三	一八一六	69	<p>月廿九日)。四月一日、福山へ。四月二日、登城。四月三日、神辺に帰る。四月十九日、北條霞亭と敬(茶山姪、萬年の未亡人)が結婚する。十二月廿四日、藩から御紋付麻上下金五百疋拝領する。</p> <p>*この年までの作品『黄葉夕陽村舎詩』後編卷六。</p> <p>一月九日、河崎敬軒の「驥^{きば}日^ひ記」に序を書く。竹田来訪。二月十九日、頼春水歿す。廿二日、山陽は父の葬儀の為 帰西の途次、神辺に立ち寄り茶山の駕籠を借りて下り廿四日、広島に到着する。廿七日、竹田器甫・甲原玄壽が茶山の弔状を持ち頼家訪問。三月廿四日、山陽京都に帰る途中神辺に寄り廿六日迄逗留する。八月廿七日、萬念寺で恥庵の十七回忌法要行う。</p>
	文化 十四	一八一七	70	<p>二月二日、七十歳の祝いに塾生・村人を招く。三月一日、福山城に呼ばれ、金五百疋を賜り古希を寿がれる。三月廿九日、松平定信から古希を賀し、寿詩・盃が届く。岡本花亭・谷文晁からは古希を祝す画が送られる。五月廿一日、山陽から古希を祝う書が届く。八月廿六日、福山城に行き、藩主阿部正精老中昇進を賀す。</p> <p>*この年までの作品『黄葉夕陽村舎詩』後編卷七。</p>	
文政 元	一八一八	71	<p>(文化十五年は四月廿二日に改元され文政元年となる) 一月三十日、山陽が父 春水三回忌の為帰省途中、門弟 後藤松陰を伴い来訪し、二月二日に出立。松陰は更に一か月滞在する。二月十四日、武元登登庵歿す(五十二歳)。三月六日、吉野・京都・奈良方面の旅に出立。岡山―三石―姫路―大久保―</p>		

文政 四	一八二二	74	<p>四月十一日、塾生 森岡綱太が歿する。茶山弔詩「悼森岡神童」有り。</p> <p>四月十三日、北條亭が福山藩より江戸勤務を命ぜられる。十四日、霞亭は福山城に赴き、江戸勤務承諾の旨を申し出る。五月十日、霞亭は神辺を出立し六月二日、江戸福山藩邸に到着。六月十三日、霞亭大目付格儒官兼奥詰めに任ぜられ、三十人扶持を給せられる。十月五日霞亭、一家を挙げて</p>
文政 三	一八二〇	73	<p>一月廿五日、門田朴齋（二十四歳）と養子縁組みをする。四月十五日、山陽から書簡と伊丹酒男山が届き「西遊稿」の添削を依頼される。八月十五日、霞亭主催の詩酒の会に臨む。九月九日、霞亭、風牀上人らと塾生三十人ばかりを伴って、御領山に登り、午後雷雨に遭い国分寺に避難する。</p> <p>*この年まで作品『黄葉夕陽村舎詩』後編巻八。*「室町志」を修める。</p>
文政 二	一八一九	72	<p>二月廿八日、山陽、母 梅颯と来訪し月末まで逗留する。四月十七日、霞亭は五人扶持を賜り、月二回弘道館に出講。四月廿三日、「答問福山風俗記」成り幕府に提出。五月廿日、山陽が京都に帰る途中来訪し、廿三日迄逗留。</p> <p>五月廿九日、神辺着。「大和行日記」執筆。</p>
			<p>西宮―大阪（十二日―十四日）―吉野（十五日―十七日）―丹波市―奈良―伏見、三月廿日、京都着。嵯峨の六如・佐々木良齋・伴蒿蹊・和田泰純・恥庵・中山子幹等の墓に詣でたり、詩会に赴いたり、遊学時代の旧友との往来頻繁。五月七日、京都を発つ。十八日、大坂着。篠崎小竹を訪ねる。福山大坂蔵屋敷を訪ねる。廿三日、大坂発―西宮―舞子―有年―御着―岡山―矢掛</p>

文政	五	一八二二	江戸に向かう。十一月十三日、霞亭一家が福山藩江戸屋敷に到着する。
文政	六	一八二三	十月廿六日、山陽より書簡・詩卷・慈姑 <small>(くわ)</small> (調理説明付き)が届く。 十一月五日、西山拙齋二十五回忌に鴨方へ赴く。
文政	七	一八二四	一月廿二日、茶山は瘧疫 <small>(おんえき)</small> (腸チフスの類)に罹り五月に入ってようやく完治する。八月十七日、霞亭が江戸で歿す(四十四歳)。九月五日に伊沢蘭軒から「霞亭が病氣である」との報せが届き、二日後の七日に訃報がもたらされた。八日、霞亭の喪を公表する。九月一日、茶山は福山藩から大目付格に命ぜられ三十人扶持を給される。十月五日、福山藩が、井上敬(霞亭の未亡人)に三人扶持を給す。十月十一日、藩主阿部正精が老中を辞す。 十一月廿四日、霞亭の遺族が神辺に帰る。 *『黄葉夕陽村舎詩』後編刊行。
文政	七	77	三月十四日、朴齋が備中成羽藩医官、岡伯庵の女と結婚する。五月、『花月吟』が発刊される。七月廿八日、霞亭の二女虎が痢病に罹り、八月三日、歿す(七歳)。八月十七日、霞亭の一周忌に当たり菅家墓地に「霞亭居士招魂碣建立。八月廿七日、茶山の弟恥庵の二十五回忌を営む。十月十五日、山陽が母梅颯と共に京都よりの帰途来訪し二泊する。この日、黄葉夕陽村舎観月詩会が開催される。道光上人他、九名の客有り。十一月三十日、山陽は京都への帰途来訪し、五日間逗留する。頼家三兄弟を評する古詩一編を作る。茶山はこの年、藩主より玉・朱唇各一を賜う。謝詩を賦す。

文政	八	一八二五	78	三月七日、道光上人が来訪する。十四日、道光上人と共に笠岡まで行き十七日まで逗留する。九月十二日、頼春風が没す。廿二日に訃報が届く。十月二日、山陽が竹原に行く途中来訪し一泊する。十月十五日、山陽京都への帰途来訪する。詩会を開くなどして数日逗留する。この時が茶山と山陽の相見た最後となった。
文政	九	一八二六	79	五月十二日、妻宣 ^{のぶ} 発熱し、十九日、歿す(七十歳)。七月七日、田能村竹田が来訪する。数日間逗留し、十五日に神辺を去る。その時、再会を約束する詩を作ったが、これが最後となり二度と会うことはなかった。六月廿日、江戸にて藩主阿部正精侯卒す。七月十三日、茶山の元へ知らせが届く。十二月廿二日、福山城に登城し、正精侯の後嗣 ^{まご} 正寧に謁し、酒食及び菓子、大盃・筆・墨・箋・煙具等を賜る。謝詩有り。
文政	十	一八二七	80	一月十一日、藩主阿部正寧に召され登城して御手熨斗料拝受。御目通りは病氣を理由に断る。二月二日、八帙の誕生日。福山藩士十一人が来訪し祝う。藩主正寧から垢付羽織、鮮魚、八丈縞二反を拝領する。二月十三日、後藤漆谷、風牀上人らが来訪。茶山は丁谷 ^{ようたに} の梅を尋ねる。十四日、栄谷の梅林に梅見をする。二月廿三日、頼杏坪・梅颯・頼達藏・頼立齋・官原節庵らが上洛の途中に来訪し、廿五日まで逗留する。四月七日、八十の寿筵が開かれ賓客は三十余人に及ぶ。五月十四日、豊後の廣瀬旭莊来訪。翌十五日、尾道に赴き、備中・備前に遊んだ後、再び神辺に立ち寄り黄葉夕陽

村舎に逗留して、茶山の最期の病床に侍した。五月十六日、杏坪・梅颯・達藏・立齋・節庵ら広島に帰る途中、神辺に立ち寄り、十八日まで逗留する。五月廿二日、茶山病臥する。七月四日、養子朴齋を離縁し、菅三を後継者にする。朴齋は法成寺村の伯兄、門田儀右衛門が家に連れて帰る。八月廿五日、朴齋は頼山陽を頼ってその門に入る。八月十一日、茶山重体の知らせが山陽の元に届く。翌十二日、山陽は京都を発つたが、臨終には間に合わなかった。八月十三日、茶山歿す。病名は膈噎（胃癌か食道癌）。

八月廿日、網付谷の墓地に葬る。諡は「寛裕院廣誉文恭居士」

* 『黄葉夕陽村舎詩』全作品合計二四一三首。

四十有余年の高校教師生活を終えるに当たって、今度は自分が学ぶ身になってみようと考え、安田女子大学大学院の科目等履修生に籍を置いて二年間は聴講をした。しかし講義を聴くだけでは物足りないものを感じ、博士前期課程に進むことにした。指導教授の森野繁夫先生から「何を研究テーマにするか」と尋ねられたとき、研究テーマがあつて博士前期課程に進んだ訳ではなかったので戸惑つたが、咄嗟に頭に浮かんだのは漢詩だった。當時自作の漢詩が五百首くらいあり、ぼつぼつ漢詩集を自費出版しようかと考えたりもしていた。また偶々その頃、詩吟で菅茶山の「冬夜読書」や「宿生田」を稽古していて、「宿生田」の結句「月暗楠公墓畔村」がしんみりと感情移入のし易い詩だと気に入っていた。茶山が現在の広島県福山市神辺の出身であると聞いて、同郷であるという親しみを感じたことや、「冬夜読書」「宿生田」以外に茶山はどんな詩を作っているのだろうかと些かの興味も抱いていた。それで「菅茶山にします」と答えたところ、先生は「同じゼミの進藤さんが頼山陽を研究している。茶山は山陽の先生だからちょうどいいでしょう」と言われた。進藤さんとは科目等履修生のときから共に学んでいた間柄なので、心強いものを感じ即座に「菅茶山研究」に決定した。菅茶山との出会いはこんな単純な動機からであつた。研究テーマは「菅茶山研究―その人と文学―」とした。以来、今日まで十年になんなんとする歳月、明けても暮れても茶山、茶山の日々を過ごすこととなつた。

江戸時代後期の日本の漢詩界を代表する漢詩人として、その名は広く知れ渡つていたと言われる茶山であるが、その研究書に出会うことは困難をきわめた。底本とした茶山の詩集『黄葉夕陽村舎詩』（板本）に納められている

詩数は二四一三首であるが、訳注をつけられた詩数の方が少ない。長詩に至っては尚更である。途中何度も挫折しかかった。僅かな端緒を手繰って資料に辿り着いたときの喜びは一入であった。しかし、手にした資料は殆どが漢文である。それを読むことから始めなければならない。二四一三首の漢詩を訳さなければならないが、巻一の初めから文字面のみを順次訳してゆくだけでは意義がないと考え、「参考資料」に掲げた書籍により茶山の生涯を大雑把に把握した。その結果、次の二つのことを基本に置くことを考えた。

第一は、十九歳で初めて京都に遊学した茶山は、往ったり帰ったりを六度繰り返し、十数年間を費やして三十三歳で郷土に落ち着き、三十四歳で私塾を営む。四十九歳のときそれを藩の郷塾として移管するが、八十歳で生涯を閉じるまで、その教育・経営一切は茶山の一手に委ねられた。こういった生涯を通して茶山の人生は、大きく「遊学」の時期と「郷土」に落ち着いてからの二つの時期に分けられる。このそれぞれの時期に詠まれた詩を通して、茶山の文学（漢詩）を研究することであった。第二は、茶山の交友範囲は非常に広い。中でも茶山の生涯に大きな影響を与えたと考えられる四人の人物（頼春水・西山拙齋・頼山陽・門田朴齋）を取り上げ、その交わりを通して詠まれた詩や書簡などから、茶山の人と為りを考察することであった。

二年間で修士の学位を修得したとき、ご指導をいただいていた森野先生から「後期課程はどうするか」と声をかけられた。「出来ませうかね？」と言うと先生は一言「出来るかじゃなくて、やるんですよ」と仰った。もともと言葉数の少ない先生で、短い一言にいつも千金の重みを感じているが、このときも「そうだ、出来るか出来ないかと考えていたのでは何事も出来はしない。やらなければ物事は成就しないのだ」と妙に納得して一念発起、更に茶山と関わることとなった。それからは少しの伝手でも逃さず、資料を集めることに奔走する日々が続いた。幸いであったのは、高校教師時代の教え子、森紀子さんが福山で幅広い活躍をしていて、広島県立歴史博物館や福山城博物館・菅茶山顕彰会の方々を紹介してくれたことである。県立歴史博物館々長の皿田雄三氏（現在は退

職)、学芸員の西村直城氏には、『黄葉夕陽村舎詩』の草稿本の閲覧で大変お世話になった。当時、福山城博物館学芸員であった園尾裕氏(現福山市教育委員会・福山市輛の浦歴史民俗資料館学芸員)は主として門田朴齋に関する貴重な資料や、その他種々の資料を提供して下さった。菅茶山顕彰会の高橋孝一会長は茶山の随筆集『筆のすさび』を提供して下さい、写真を主とした冊子『菅茶山の面影を訪ねて』『菅茶山顕彰の歩み』など、菅茶山の周年行事ごとに出版される多くの資料をご送付いただいた。又、茶山記念行事の一環である講演会に、講師として二度のお招きをいただいたことは大変よい勉強になったと感謝している。神辺在住で古文書の研究に携わっておられる林多恵子氏には、古文書の読解をしていただいたり、資料をいただいたりして大いに助けられた。又、発行の度に送らせていただいた論文を逐一丁寧に読んで、ご多忙にもかかわらず適切なコメントを送って下さり勉強になった。広島大学の佐藤利行先生、富永一登先生はじめ中国文化学の先生方、言語表象文化学の妹尾好信先生、久保田啓一先生からも多くの貴重なご指導をいただいた。同志の進藤多万さん・先坊幸子さんの折に触れてのアドバイスは有り難かった。この書を完成することができたのは、こういった方々や陰から応援して下さいた多くの人たちの力添えのお陰であると感謝に堪えない。

七十歳も半ばになると判断力も思考力も衰え、増すのは物忘ればかり。十年に余る長い年月、森野繁夫先生にはご自分の体調もあまり芳しくはない中、少しも変わることもなく辛抱強く懇切丁寧なご指導をいただいた。どんなにか忍耐を必要されたことであろうと深甚なる感謝を捧げるものである。先生は誰よりも早く出勤され、誰よりも遅くまで学校に残り、いつも机に向かってご自分の論文を書いたり、学生の論文などの添削をしておられた。先生の姿勢からは「学問に携わる者や教師はこうあるべきだ」という「真の学者、手本とすべき教師のあるべき姿」をも学んだ思いがする。先生との出会いがなかったら今日の喜びはなかったと改めて身の幸せを感じている。

森野先生から「これで終わりではなく、まだ誰も手がけていない『黄葉夕陽村舎詩』草稿本の訳注に取りかか

ろう」と勧められ、引き続きご指導をいただいで既にそのことに取りかかっている。『草稿本』には『板本』に取り上げられた詩数と同じくらしいの詩がまだ残されているので、今の所どこまでできるか見当はつかないが、今後

は力の続く限りこの作業を続けるつもりである。終わりになったが、出版に際しては白帝社の小原恵子さんに大変なお世話をおかけした。心よりお礼を申し上げる。

途上

菅茶山

笨車嘔軋繞林行 草徑沙堤十里程

半澗風漪人馬影 一村烟竹鳥鳥聲

秋來栗社毯初結 水後撞田殼未成

聽取童謡愛眞率 愧吾詩語事經營

笨車嘔軋 林を繞りて行き 草徑 沙堤 十里の程

半澗風漪 人馬の影 一村 烟竹 鳥鳥の聲

秋來栗社毯 初めて結び 水後撞田殼 未だ成さず

童の謡を聽き取りて 眞率なるを愛し 吾が詩語の 經營を事とするを愧づ

〔黄葉夕陽村舎詩〕前編卷三

庚寅上巳 西原千代

西原千代 (にしはら ちよ)

- 1933年8月 現在の東広島市に生まれる
1954年3月 広島女子短期大学国文科卒業
1954年4月 広島女子商業高等学校国語科教諭 1996年3月退職
1997年4月 広島県瀬戸内高等学校国語科非常勤講師 1999年3月退職
2000年4月 安田女子大学大学院文学研究科博士前期課程入学
2002年3月 修了
2002年4月 安田女子大学大学院文学研究科博士後期課程入学
2008年3月 単位修得退学
2008年4月から2009年3月まで 広島大学大学院文学研究科研究生
2009年3月 広島大学 博士(文学)

菅茶山 (かん ちゃざん)

2010年7月20日 初版印刷
2010年7月30日 初版発行

著者 西原千代
発行者 佐藤康夫
発行所 (株)白帝社
〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
電話 03-3986-3271
FAX 03-3986-3272 (営業部)
03-3986-8892 (編集部)
<http://www.hakuteisha.co.jp/>

組版/柳葉コーポレーション 印刷/大藤社 製本/カナメブックス
